大正十一年六月五日印刷
大正十一年六月十二日發行

日本陽明學上卷
定價四圓二十錢

不許複製

編纂者　井上哲次郎
編纂者　蟹江義丸
東京市京橋區桶町十五番地
發行者　株式會社大鐙閣
代表者　面家莊佶
東京市京橋區木挽町一丁目十四番地
印刷者　工藤正雄
東京市京橋區木挽町一丁目十四番地
印刷所　中條印刷所

東京市京橋區桶町十五番地
大阪市南區三休橋
發行所　株式會社大鐙閣
振替口座　東京三三六一八番
大阪二七一五五番

代を見しりたりとて、よきになる也。終には欲心利害習性となりて、貴賤ともに高知行を取を美目とし、上座へあがるを第一として、本の義不義をしらざれば、親子兄弟の中も欲に逢ては目の見へぬ風俗となりて、凶亂いたるものなり。此きざしを見て賢者はひきこもりて奉公せず、艱苦をしのぐといへども父母妻子凶亂をばまぬかるゝ也。彼委女はじめはうへたれども、終には賢夫の禮を得てやしなはる。不貞の女の富貴につきたるは、容色さかんなる間こそ愛せらるれ、本より不仁の夫なれば、おとろへて老後には、あさましきありさまになるものあり。道なき時は賢夫貞女ともに一旦は困窮するものなり。こゝの賢夫は道統の賢人にはあらず。禮義を守るの賢夫なり。心法を受用する者には、世間の禍福窮通はなき者也。通達して幸福を得る時は人をよくし、窮塞して禍難にあふ時は其身をよくす。小人の犯ししのぎて患難來るは、君子の德をみがく也。たとへば良醫には毒藥なし、用ひやうによりて病を治するがごとし。

日本陽明學（上卷）終

小人なれば其寵にかなはずと也。何の勞功もなくよき事はなきものなれ共時めくと也。薈兮蔚兮。南山朝隮。婉兮孌兮。委女斯飢。薈蔚は草木の盛に多きをいふ也。朝隮は雲氣ののぼるなり。南山は君朝にたとふ。小人時を得て雲氣ののぼるがごとく、草木のさかんなるが如しと也。婉孌はわかくかたちよきなり。少し人にこえたる女は、時を得て寵愛せらるゝに。此婉孌のかたちよき女うへたり。何として左樣なるぞと思へば、貞正の心ありてみだりに人にしたがわず。賢夫の禮にあらざればおもむかず。時に賢夫なく禮なし。故に困窮せり。是を以てたとへとす。小人は富貴をきわめ、賢者は貧賤困窮に居てうへに及ぶとなり。たとひ十分賢ならでも、道なき代には少もよき者はおちぶるゝものなり。無欲をたて義を行ひて祿位などを辭すれば、其分に成て主人にも傍輩にも奇特ともおもはれず、又むさぼり取付てかゝはり居れば、いつともなく其欲心不義の者よく備り、彼清人のすゑは勢を失て却て不清人の下に付、いふがひなき躰になるもの也。初めは無欲にして義理を行ふを奇特と思ひし者も、其なりくだりたる末の躰を見ては、今の時代義理清白はあしく、無用の禮儀忠節だてをしておちぶれたりと思へば、それにこりて禮儀によらず、子孫たるものも賢人君子は世にまれなれば、親の時にあはざる道だてをいひて我等かくなりたり、親の時は下に居たる者上にをれり、世間にしたがひたまはゞ人の下にはたたざるものを、いふがひなきありさまかなと思ひうらむるなり。彼欲ふかく辭すべき職祿をも辭退せずして過したる者を初めはきたなしと思ひし者も、自然によく備りて、其躰よきを見てはかしこき者なり、今の時

しるが故に、少し民の勞に報むと思ふもの也。國郡の主は士の文武をすゝめ、人の善惡を知、民の艱苦をわすれずして、人民の君師たり。何ぞ下の情を知をいやしとせん。みづから飲食をたしむを心とするを飲食の人といひて、是をいやしむこと古今の通義也。夫諸侯大夫士の會合は遊ぶに弓馬を以し、和するに禮樂を以す。詩を作り歌をよみ、造化の功用を吟詠して道德仁義を思ふもの也。然るに其人々の言語の飲食衣服家屋器物米穀金銀の事にのみ及びぬるは、其心の道にあらずして欲にある事をいやしとするなり。

一心友問。候人の詩は賢者の時を失たるものか。　云。しかり。其詩云。彼候人兮。何ニ戈與ヲ祋。彼其之子。三百赤芾。候人は賓客をおくりむかふるの官といへり。君に先達て隣國の君の客たるをおくり迎る者なれば。卿大夫の事なり。戈祋はみな武器なり。これをもたするは今の鎗長刀もたせたるがごとし。赤芾は大夫以上の命服といへり。三百とは人多くつれたる也。維鵜在レ梁。不レ濡ニ其翼一。彼其之子不レ稱ニ其服一。鵜は鳥の名也。羽もぬらさず何の苦勞もなくして梁の魚をとりて食する也。是を以てたとへとす。前章にいふ人德もなく功もなくて富貴なるがごとし。其服に不レ叶とは、大夫の服はきたれども大夫の器量はなきとなり。卿大夫の職は其君を道德にみちびき、士を文武にならはし、民を敎へ安ずるものなり。其德功一もなく、よき衣服着て人多くつれたるばかりなるは、鵜の梁の魚をぬすみ食がごとしと也。維鵜在レ梁。不レ濡ニ其咮一。彼其之子。不レ遂ニ其媾一。咮はくちはし也。媾は寵なり。出頭し諸役にたづさはり時めくもの也。前章の意なり。昔

は穀の皮をとらざる惣名といへり。もみの事也。食とする時當座にすりうすにて皮をとる也。常にはもみにておさめ置也。米の虫になりてすたる費なし。其上當座にすりて皮を取たるは風味各別にして、人の元氣を養ふもの也。稼は禾の秀で實のりて田野にあるをいふ也。さきへうへて後に熟するを重といひ。後にうへてまづ熟するを穋といふ。禾麻菽麥とは、あさまめむぎ、此冬より來年春夏をへて五穀のいでくるまでのたくはへ備れりと也。又禾をいふものは、禾は五穀の惣名なり。五穀みなたくはへありとなり。嗟㆓我農夫㆒とは、我等農人といへるがごとし。一家のみならず隣家みなをしなへての意也。既同とは田野のたなつものみなとり入て、一所にあつめたる也。上入は公へ奉るべき貢物を君の藏に入なり。執㆓宮功㆒とは農事終て初めて公儀の役をつとむる也。いにしへは民の力を用ると一年に三日也。それだに農事に指合てはつかはず。農事終ても民の遊ぶいとまはなし。やねをふきかへ、むねをつゝみなをし、垣をゆひなどすれば、晝は山に行てかやをかり、夜はなわをなひむしろを織こもをあみ、又は晝は薪をとり木をきり、春の耕作前に春夏秋冬までの用意をする也。播㆓百穀㆒は、春はいろ／＼の物をまきうゆるを云也。膳中の一飯も一粒／＼民の辛苦より出たり。いにしへの人は食するごとに其功を思へり。天下は相助相報ゆる道理なり。故に善をなさゞる者は天地の賊なり。況や驕て民をくるしめ。人の害になるものをや。士の文を學び禮儀を愼み弓馬に遊び武勇をたしなむは、民の耕作の業に同じ。士は天下を警固して民を安からしめ、君上の干城となり、武威を以て世のしづかならんことを欲す。是道德を

し。動レ股とは初ておどりても、を以て鳴なり。斯螽は兩の股を以て相切てなく也。○振羽とはよく飛てつばさを以て鳴なり。松蟲なども羽をふるひて鳴也。蟋蟀はきり〳〵すとよめり。今俗にきり〳〵すと云虫にはあらず。斯螽莎雞蟋蟀は、一物時に隨て變化して名異也といへり。斯螽は五月の中よりなき。莎雞は六月の中より鳴、七月は此むし野にあり、八月は屋ののき下に來り、九月は戶のうちかべなどにあり、十月はゆかの下に入なり。暑氣の時は野にあり。寒氣には人に近付もの也。歌にも「きり〳〵す、なくや霜夜」とよめり。此きり〳〵すを今俗にいとゞと云也。穹窒は家の中のすきま〳〵風の入べき所をふさぐなり。鼠をふすぶるは、屋の中に穴し害をなさゞるやうにふすべ出すと見えたり。向は北に出たるまどなり。夏はあけて風を通し、冬は是をふさぐ也。○墐レ戶は竹のあみ戶などにて、夏は風を通し冬はぬりて風をふさぐなるべし。家の老父よめ子に告て云。天さむくして事もまたやみぬ。屋の冬用意も成ぬ。年も程なくあらたまらんとす。此室にいりて寒をふせぎ春を待べしと也。是老者の愛也。此詩冬をふせぐを主とす。然るに五月斯螽の鳴を聞て一陰下に生ずべききざしを知、いまだ暑の初めにおいて嚴寒の事を思ふ。治世に亂を忘れず、天應をむなしくせざるの義也。○九月築ニ塲圃一。十月納ニ禾稼一。黍稷重穋。禾麻菽麥。嗟我農夫。我稼既同。上入執ニ宮功一。晝爾于茅。宵爾索レ綯。亟其乘レ屋。其始播ニ百穀一。塲はには也。圃はその也。春夏より七八月まで物生ずるの時は土をおこしかへして菜物をうへ、九十月菜終りいねかり入る時はつきかためてこなし塲とする也。十月納ニ禾稼一は田より塲におさめ入なり。禾

くまはるもの也。猴は一歳豕、豜は三年豕也。其小を私にし大をおほやけにたてまつる。と〲くしかるにあらず。かりの初めしりそめたる時の事也。いにしへは農兵なり。其上かりの得物を君所にあつむる事なし。かりは近き所其くみ〴〵にあつめ、數ばかりを書付て君の御目にかけ、其組にての得物のよきを俗に初尾といへるごとく君にたてまつる也。多くは皆命じて民間の用となさしめ給ふなり。君の民を見給ふ事子のごとし。故に私欲を忘れて何事にもまづ君を思ふ也。四月は暑さへいまだいたらざれ共、秀葽を見て陰氣の初めてきざす所を知。五月なく蜩を聞て一陰下に生ずる事を感ず。是より八月の四陰をへて十月の純陰に至り、大寒至れり。君子は善惡共にきざしの時に知て、其備をまうくる也。此章冬の末民のいとまにかりして武事をならはし、裘を作りて寒をふせぐ事、詩の主意也。然るに四月の秀葽五月の鳴蜩をいひて辭を起し給ふ。其意其躰ゆたかなる事、聖人にあらずして誰か如レ此ならん。道德の事なくして道德の盛善言外に明なり。天道の造化人倫の正道文武の美。と〲く備れり。五月斯螽動レ股。六月莎雞振レ羽。七月在レ野。八月在レ宇。九月在レ戶。十月蟋蟀入二我床下一。穹窒熏レ鼠。塞レ向墐レ戶。嗟我婦子。曰爲レ改レ歲。入二此室一處。斯螽莎雞。みなむしの名也。斯螽はいなごとよめり。されど今俗にいへるいなごにはあらず。蟲は詩歌ともに秋の物とすれ共、斯螽は五月鳴、莎雞は六月になく。莎雞ははたをりとよめり。斯螽は五月一陰生ずるに感じてなき、莎雞は六月二陰生ずるに感じてなく。皆陰類なれば陰に感じて鳴。故に夏よりなくといへども、蟲は秋の物とす。其上秋は盛になく蟲多

違、くるしめば時におくるゝもの也。四月秀葽。五月鳴蜩。八月其穫。十月隕蘀。一之日于貉。取㆓彼狐狸㆒。爲㆓公子裘㆒。二之日其同。載續㆓武功㆒。言私㆓其豵㆒。獻㆓豣于㆒公。秀は花さかずして實のるをいふ。葽は草の名なり。今の遠志也といへり。四月純陽の月にて陽氣上に極る故に、微陰已に胎を下に受、葽草是に感じてはやく秀づ。蜩は蟬也。五月は一陰下に生ず。故にせみ陰氣に感じて先鳴なり。秀葽は物成の初め也。鳴蟬は秋の漸なり。穫はわさいねをかる也。隕蘀は草木の葉の落る也。十月は諸木の葉おつる故に、風をも木枯といへり。貉はまみともむじなともいへり。狐狸はきつねたぬきなり。裘は皮衣なり。公子の裘といふものは、皆公子のためにするにあらず。初てとる者をまづ公子の裘に作る也。國君の子弟山野をめぐり民のために勞すれば、民其功德を感じてかくのごとし。二之日同とは、十二月は國中とく〳〵くおこりて山澤を取廻し、大にかりする也。十一月は面々に少づゝ小がりし、十二月國君みづから國中の兵をひきゐて大にかりし給ふ。必しも獸を多くとらんとに非ず。軍法をならはさんとなり。故に續㆓武功㆒といへり。武事をならはす也。先人の武威を以て國天下を平治し、夷狄をしたがへし、其武功に繼て習す也。十一月は農事終といへども民なを冬の用意などすれば、はやく仕廻たる者は私に小牧にかりするなり。十二月は民事こと〳〵く仕舞て民力用べし。故に大にかりして戰陣の法をならはす也。敎へざる民を以て戰かはしむるは、人をすつる道理也といへり。よく軍法にならへば、疵をかうぶる事死する事各別すくなし。萬事なれたる人のする事は、人すくなにても功あり。人多なればよ

七月流火を見て來月はあしをかるべき事を思ふ也。蠶月はこがひの時分をいふ也。條桑はこがひの盛なる時は葉ばかりつみてはたらざる故に、枝ながら折來りてはましむ。斧斨はそのまさかりの類なり。伐二遠揚一は桑に大木あり。婦女の手にかなはず木ずへの葉をつむ事はならざる故に、遠き上の枝をば切おとして葉を取なり。倚は葉ばかりつみて枝をたすくる也。女桑はわかき小木の桑なれば、引たはめ葉ばかりとる也。きりては桑もいたむ故也。去秋流火を見あしをかりしが、はや春ふかく夏もきてこがひの最中となりたり。こがひの事やう／＼終りぬれば、七月來て鳴鵙あり。麻をかりむしひたして緒となしぬ、もずは其時節に鳴鳥なれば、且おどろかされ且感ずる也。八月は其麻をうみ、くろくし黄にし、中にてよきをば朱にそめて、明かにあざやかなれば公子の禮服にたてまつるなり。赤きは婦人の服に近けれども、禮服となりては花やかなるも却て正し。今日本にても衣冠束帶になりては、下がさねに紅を着し、太刀のつかさや赤地の錦にてつゝみて花やかなれども、少も見にくからず。かへりて文明に見ゆ。禮儀の尊き所也。夫天地の物を生ずる、冬用るものは春夏出來、夏用べき物は秋出來て、來夏の用となる。こがひのわざは來冬の用なれば、春夏に出生す。麻は夏の服なれば、七八月の陰氣になれり。此故にこがひの時は陽に來るうくひすに感じ、麻の時は陰になく鵙に感ず。故に君子は天に則とりて、何事も時に先達て助なさしむ。暑氣に當りて俄にかたびらの用意し。さむきにのぞみて小袖のしたくをすれば、せはしくて事たらず。萬事手をくれになりて世中ゆるやかならず。政道ゆたかなれば万事時に先

かにして、倉庚のうぐひす鳴を聞て、去年七月の流火九月の授衣きのふけふのやうなりしが、はや春になりて日のどかにうぐひすもなくと心に感ずるなり。懿筐は内ふかくうつくしきかご也。花かたみなどのごとし。微行は細き道也。柔桑はわかき桑のやわらかき也。桑とりに行道は、常に人の往來する道にあらざればほそ道をつたひてゆき、やはらかなる桑を求て、蠶の初て出てちいさきにはましむる也。遲々は日のうらゝかに長き也。日のゆく事はいつもかはらねども、春はながきゆへにおそきやうなり。蘩はしろよもぎ也。かひこ初て生れていまだおひとゝのほらざれば桑を食する事なりがたきゆへに、白蒿をはましむといへり。祁々は徐也とあれば、ゆるやかなる心也。春の日ながくしてゆるやかなれば、天人一躰の心にて女の心もいそがはしからず。こがひの女事にのみ心を入るなり。女心傷悲。春は女悲秋は男悲といへり。天地の物化に感ずる也。公子は國君の子弟也。同歸とは、春は婚姻の時なれば、公子國中に來てかねて緣邊を約せし女をむかふる也。親迎の禮也。女は父母に遠ざからむ事を思ひてなげくなり。是いにしへ公子貴家の質素にして驕奢なき風俗を見べし。國中の女の賢なるを求て妻とし、みづから稼穡蠶桑の事をつとめしかば、家事富有にて民にむさぼらず。此故に爭亂の憂なし。七月流火。八月萑葦。蠶月條レ桑。取二彼斧斨一以伐二遠揚一。倚彼女桑。七月鳴鵙。八月載績。載玄載黃。我朱孔陽。爲二公子裳一。萑葦はあしなり。八月に成てかるべし。こがひの時分このあしを以て作たる笠を用ゆ。こがひは來春三月よりの事なれ共、あしは今年八月になるものなれば、來歲のためにかりてたくはへ置也。

をかへすは、足をあげすきを土中にふみ入、土をはね發すなり。易に上入下動とあり。耜は農具の初也。今日本にては牛にからすきをかけて耕す所もあり。馬にまくはといふものをかけてすく所あり。すきにて人のかへす所もあり。いにしへは上田は毎年作り、中田は一年やすめて作り、下田は二年やすめて三年め〳〵にめぐりて作しなり。此故にこやしといふものさのみ用ひずといへり。今は中田下田ともに毎年間なく作る故にこやし多くいれば、一年中こやしを取にいそがはしき所もあり。又むかしなれば田畑にはせざる地をも、今は田とすれば人力にてははかゆかざる所あり。次第に世間せはしくいそがはしければ人ばかりにてはならざる所もあり。此故に牛馬の力をかるなり。今も上田の地こゝろよくこやしもいらぬ所にては、牛馬なく人力ばかりにて耕すも有。同二我婦子一饁二彼南畝一とは。若き者達者成ものは皆田に行て勞するゆへに、家の老父よめ子をひきゐて食物を作り田にをくる也。田畯田長といひて農事をつかさどる官なり。今の郡代郡奉行のごとし。時に先達てよく農事をつとむる事を悦也。今の郡代郡奉行代官の民間をありくは、民の煩ひに成事多し。庄屋肝煎近村の者まで出ておくりむかへし、宿所へ見廻宿をくりとて人足多つかわれ、さま〳〵農事のさまたげに成事多し。この故に功者なる地頭は民間へ奉公人の往來せぬ樣にするなり。いにしへの田長は民間へ入事しげきを民よろこべり。農をさまたげる事少しもなく、助くる事のみ多かりしゆへなり。七月流火。九月授レ衣。春日載陽。有二鳴倉庚一。女執二懿筐一。遵二彼微行一。爰求二柔桑一。春日遲々。采レ蘩祁々。女心傷悲。殆及レ公同歸。春の日初てあたゝ

君は民の父母也。親の子における何をか先とする。養をかへり見るを第一とせずや。養道備りて後教べし。故に仁君は稼穡の艱難をしれり。周公旦の詩云。七月流火。九月授レ衣。一之日觱發。二之日栗烈。無レ衣無レ褐。何以卒レ歳。三之日于耜。四之日擧レ趾。同二我婦子一。饁二彼南畝一。田畯至喜。七月は夏の代の七月也。斗柄申に建の月なれば。今の七月也。流火は星也。大火心星也。此星六月の昏に地の正南にみゆ。七月の昏に至て下りて西に流る。故に流火といへり。堯の時は此星仲夏五月の昏に南に中せり。周公旦の時までは一千二百四十年餘なれば、歳差といふものにて十六七度退く。故に此大火星六月の昏に中して、七月の昏には地の未の位に有也。七月はいまだ殘暑甚しといへ共、大火星の西に行を見て八月を越て九月霜降べし。此故にいまだ暑氣の中に冬の用意有也。何事も時に先達てなさゝれば行當りてせはしく、人痛み煩ひて功なりがたきもの也。九月の初て寒く衣を用べき事を、七月流火を見て心に感ずる事妙なり。故に人に衣をあたへ寒をふせがしむる事あまねし。一之日は今の十一月也。斗柄子に建。一陽の月なれば一之日といへり。此故に周の代となりて此月を以て正月とし用ひたり。觱發は風の寒きなり。二之日は今の十二月也。斗柄丑に建す。二陽の月なり。栗烈は氣寒き也。風吹て寒きはいまだ至極にあらず。風なくても寒きは寒きの至なり。衣はきぬの衣服なり。褐は毛をり也。衣服の用意なくては此寒氣をしのぎて年を越がたしと也。三之日は今の正月也。斗柄寅に建の月也。于耜とは農具を取出し其用を利する也。四之日は今の二月也。斗柄卯に建の月なり。擧レ趾は田をかへす也。すきにて土

冬は下直にうり、春高直に買求め、萬事前後して借銀ますく〳〵かさなり、田畠屋敷富人にとられて、民間にいへる絶人となり、其跡の田地は村中のわりといふものになり、家の百軒も有しむらに、二十三十殘るやうなれば、田畠あらす事御法度とあれども、作るべき力なし。うへ付まき付たるばかりなれば、毛見してもむかしの免の半分もなし。如此なりぬれば、多くのすくひ米を出し取立むとしても、砂にて淵を埋むといへる事わざのごとし。昔に歸りがたきものなり。

一。毎年毛見を入あらだてゝつよく取人の領内を見れば、百姓屋敷の本屋の跡は石ばかりにて、かたはらに乞食の小屋のごとくにして居者をとへば、其屋敷主にて高作の百姓也、何として其田畠を作り年貢米を仕立るぞと思はるゝあり。左樣になりては昔二石ありし田に、今は一石も有かなきかなり。しかも米あしきもの也。貪欲の地頭といへ共、多く取べき樣なし。かやうのたぐひ一々いひ盡しがたし。如此なりて國郡を不失はなし。近年思ひの外なる凶事出來て身をうしなひたる人に、民の困窮せざるはなし。民は是國の本也といへり。天命のかゝる所也。　問。如此民間の事をの給ふは野卑也と人申侍らん。　云。國の本は民也。民の本は食也。民食の事くはしくしらでは、國郡を治る事あたはず。予かれを治るものにあらずといへども、治國は事の大なるものにして、窮理の學これをしらざるとあたはず。予がごとき者だに、窮理によりては少し知事あり。況や大君諸侯は其任にして天の責あり。しり給はでは天に應じ給ふべからず。故に云。人君は億兆によつて尊し。是を撫是を治るの道至誠を盡すべし。人の至誠を盡す所子に過たるはなし。人

よろべきものなし。家屋をこぼち田畠を賣て、村の躰昔のかげもなくかじけてとるべきやうなければ、無ニ是非一免をさぐる也。

一。水を入れば田となり、水をおとせば畠となり、麥を田に作て百姓の食とする所有。かやうの所は四分六分ほどの高免を出しても、とかく取つゞくものなり。然れども麥のあしき年とて田免のゆるしなければ、借物出來ぬ。さあらでも用たらざるに借物の利を出しぬれば、毎年借物かさみて出す樣なければ、田地をしちに入て他領へとられ、四十反持たる者わづか二三反になり、村の家居民の衣食乞食のごとくに成ぬ。其間に先代官死しなどして前代の非をいひ外聞あしく成ぬれば、餓におどろきて免をさぐれども、田畠うりて後なれば一寸二寸さげても、昔の二三分のさがりにもあらず。作取にさせても本の樣にはならざるなり。奉行代官心ありて其始に少づゝの用捨すれば、如レ此亡所にもならず、免もさがらざるものなり。

一。水田濕地にて麥まかれず、山林のたよりなく、田より外にはよすがなき所あり。さやうの村は今とても十にして二三を年貢に出し、七八を得ざれば民立がたし。此差別をしらで、なべて四分六分と心得て毛見すれば、やがて亡所となるもの也。田地に米の有無をもはからず、しきりに催促して取たつれば、春はなくて叶はざる牛馬をも先賣て出し、やがて作の助と成べき子をも年切とて奉公に出し、おさなき男子女子は永代人にわたへなどすれば、夫婦共になげきかなしみて、まめしげもなく心氣かじけて力つかれ、耕作に精も出されねば、田畠いよ〳〵出來あしく。牛馬を

自満し、身にくもりなきまゝにおそるゝ所なく、上への奉公ぶりに免を高くあげ、米をつよくとれり、口事ざたなども依怙なくすみやかに決断すれば、世間にほまれありて立身する事有。右の私欲不直の者よりも大欲なる所あり。終には村里あれ民困窮して亂逆の本となれば、是を下といふなり、いにしへの上とせし仁愛清直の代官は、今是を下とす。其身清く直なれども仁愛あり、民のなつくを以て、下にゆるす所多かるべき事を疑ふ也。今の世の勢にては、仁心ありといへ共、人にかはりて民にゆるすことはなりがたし。民も國用のせまる所を知ば、世なみには出す也。仁愛清直の奉行には民和する故に、無用の費なきを以て、所もあれず民も甚困窮せず、其跡を見たる時は用捨多きに似たり、不仁清直の者は一旦多く取といへ共、所あれ民かじけて數年の後は免も大にさがるもの也。此善悪のしるしまでもまたず、清直にしてつよく取を以てよき代官と思ふ也。清直不仁の仕置によりて村里の亡處となる條目をいふべし。

一。剛直の代官四分六分を目當とす。百姓迷惑して高免なりといへば、歩がりして六分を年貢四分を百姓とす。然れ共しいさしをれなどいふ物をこめての事なれば、此四分六分さへ全からず。藏納は米の吟味つよければ、百姓の四分をも打こみて、やう／＼六分の米をおさむる故に、百姓の得米はなし。年貢米のくづ米をあつめて食とすといへども、農具諸色の代には何をうりてとゝのふべきや。一向無理也。

一。山林ある村里は、山林を目當にして田になき高免を置あり。此故に山林日々にあれて、後々はた

もあしくなりて民迷惑す。とかくすれば麥のまきどき卅日もをくれて、來夏の取實すくなし、此損又三四五分にも當るべし。萬事手をくれとなれば、十二月卅日迄もいそがはしく安き心なし。妻子の女事も成がたく、こゝかしこにて困窮す。其上にたらざれば、かりて利を出しぬ、其外如レ此の費あげてかぞへがたし。地頭も損し百姓はつかれて、あしき事のあつまりは毛見なり。百姓に此道理をいひきかせてまかすれば、公儀毛見に出合ては大に損ある事を得心して、奉行代官の目よりは免つよく取付く、毛見のいらぬ様にするもの也。今の世の勢には、是にまされる仕様はなきなり。無事の時は定免よし。定免なれば大かたの不足は堪忍して出すもの也。毛見をうくれば免のさがりはしれてあれ共、右にいふごとく其さがりよりは一倍も損有によりてなり。故に豐凶によらず。年々の見とりといふ事大にあしき事也。此道理を不レ知してする者あり。又しれ共私欲のために代官手代など是を好もあり。代官は仁愛有て清直なるを上とす。私欲にして不直なるを中とす。不仁にして清直なるを下とす。　問。私欲不直は下にあらずや。　云。聞たる所は不仁にても、清直なるはまされり。然れども今君のため國のため民のためには、私欲不直の者にをとれり。私欲の代官には民まひなひて免をさぐれば、とかくつゞきて居なり。私欲よりまひなひをうけて免をゆるすは不直なれ共、民大に困窮せず凶事おこらずして、ゆがみなりにも無事なるは、亂世にまされり。是君のため國の爲ならずや。彼不仁にして清直の代官をば世間これを上とす。しかるに下といふものは、己がまいなひをとらざるを以て清とし直として、世間になき様に

れども毛見の仕様あり。四五萬石若は七八萬石にても、郡奉行心得よく功者なれば、一人して毛見する様あり。民の中にて心得よき者をえらび、一萬石ばかりの毛見をつかさどらしめ、當村の庄屋肝煎に近里の者をかね、二三人つゝ指加へ下毛見させ帳を作りて、郡奉行こゝかしこ順見のついでに其下毛見の帳と我見分とくらぶれば、功者は只一目にしるべし。日數もかゝらず、かり納も時を過さず、麥のまき時もおくれず。上下共によき也。　問。ことわざに相圖兵法自身の取合といふやうに、百姓に毛見させては私曲あらんか。　云。此毛見は何の手間もいらざれば、心見に此毛見の內帳をかくし、世間なみの毛見を入て見給へ。百姓毛見に五物成あらば、世間なみの公儀毛見には四六七分ならでは有べからず。二四分ほどは地頭の損あり。民の痛みは其上に四五分にも過べきなり。彼此一物成の費は有べし。其故は世間の毛見を見に、國大名の下なれば五六万石の郡へは二三百石取の士十人も毛見に出るなり。供の者七八人ならしにして七八十人也。馬をかけて百人には當るべし。百の人數一郡へ入こみて廿日も卅日もかゝるべし。此荷物宿おくりに百姓をつかひ、藁鞋薪米つき水くみ朝夕に人たゞ勞するのみならず、農のつとめもせず、用なき者も立さはぎ、免のわびと訴訟に日をくらし夜をあかせば、此入用又費なり。隨分直に清くするとも免の外に毛見の出し米五六分は有べし。其上によからずして庄屋肝煎私欲あれば、無用の費一物成は有べし。扨かなたこなたする間に風吹雨ふりては、いねのかり時過ぬれば民の心に四にうくべしと思へるも、三七八分にもうけがたくなる事有。米すくなく成のみにあらず。わら

といへども、食あしき故に腹中損して死するは皆餓死なり。是皆仁政の法みだれてかく成來る事久し。在々舍なきの費をおさめば、凶年の餓をばすくふにたりぬべし。　問。唯仁政を行ひ給はゞ、此舍を先じ給ふべきか。　云。是より急なる事あり。舍を命ずるにいとまなし。國天下の多き、大君諸侯といへども俄にはなしがたき勢也。其上山林あれて、今の民用だにつくのひがたし。此上に天下在々の舍を作らば、材木薪ともに盡て民いよ／＼困窮し、士大夫も難義に及ぶべし。先仁政を急にせば、數十年の後仁君つぎおこり給ひて、自然に出來ぬべし。夫農は民の力をうばふべからず。勞する事は彼が秋の收めに利ある事に勞し、使事は彼がゆく／＼休息すべき事に使時は、民勞すといへ共恨みず。是を佚道を以て民を使と云也。其本は仁君良相の心に民を子とするの愛を立て、用を節し民に取事すくなきにあり。如ㇾ此なれば民の心君上に歸服し、天道順にして天下長久なり。是を財散ずる時は民あつまると云也。　問。貢法の十一、豐年凶歲其わかつといかむと。　云。たとへば一反の田にいね百束あれば十束を貢とす。いにしへは五家として共に田がへし共にうへ共にかりて、秋の取實いね五千束あれば五百束を貢とし四千五百束を五家の有とす。是を五人組ともいへり。軍法の五々も是より出たる也。いにしへは農兵にて軍役民間より出たり。今も九州には農兵の遺風殘れる所ありといへり。此故にむかしは毛見といふ事なし。毛見の費又舍なきの費にひとし。　問。今の勢にては毛見といふ事なくても叶まじきか。十一にてこそなくとも束をかぞへて分つ法も行はるべきか。　云。今は毛見なくて不ㇾ叶勢もあり。然

舍をあたへ給ふ。たゞ舍を與ふるに心ありて、貢よりかろきに心はなし。此舍には深き意あり。空地なき所にて田地にこなし屋を作る事は、民迷惑に思ひて作らざるもの也。しかれ共こなし屋といふものなくては、いねをかり入べき所なし。今は民間に此舍を持たる者は、百人の中にも有かなきかなり。此故に田に直にいねをほし屋の前につみなどすれば、雨にぬれては米あしくなるのみに非ず。わらもくさりて性あしくなり、すたる費多く、民の憂すくなからず。長雨に日をかぞへ、はれを待うちに、思ひの外にぬらせばもみ、叉めぐみはえ出て用にたゝず。わらの民の用を達する事あげてかぞへがたし。俵繩こもむしろ草履藁鞋馬のくつ牛馬のはみ薪の不自由なる所にては、朝夕の薪木とす。かやの遠き所にては、屋のふき草とす、城下に持出て賣て用をもかなへり。米といひ、わらといひ、此舍なき故のついえ、天下を合てはおびたゞしき事也。しかれ共民は地なく、舍作るべき竹木なく、力なければ是非なし。民の力には成がたき事を知給へば、上より給はる也。是は田畠にさし次て重き事也。天下の本なれば公家武家の文庫武庫米藏よりも先にすべき事也。生れながら榮耀にて民の艱苦をしらざる人は心もつかず。今は山野といへども地せばく成て舍をとるべき所なし。宗領を立るの法なきゆへに、子弟に田地をわけ〳〵して、後々作り取にしても家內の衣食にたらざる躰也。山野に行て薪を取賣てうへを助むとすれ共、山林次第にあれて勞するのみ。牛馬の食にかわらざるものを食して其一日をおくるばかりなれば、地有とても舍作るべき樣なし。此故に凶年には餓死多し。餓死と云事を奉行代官をはゞかるとて病死

る事あたはずば、かへりていたはり思ふべし。恨は有べからず。是は心のすさみにまかせてわくる事ありしとみへたり。然るをそむきいからずして一人を恨み思ふは、貞女の心なるべし。墓門は程子の說まさりたり。其詩云。墓門有レ棘。斧以斯レ之。夫也不レ良。國人知レ之。知而不レ止。誰昔然矣。墓門は墓道なり。いばら生じて人をふせぐ事門のごとし。夫墓前は以來田畠と成べからず。鄕里と成べからず。城地と成まじき無用の地をえらびて安ずるもの也。良木なき凶僻の地には荊棘生じやすし。人心道なく教なき時は邪惡生ずる事、道路はらはずして荊棘生ずるがごとし。是を以てたとへとす。いばらあらばをのを以てひらきさくべし。人不善あらば賢師良友を得て道義をたすくべし。今此夫よからず。衆みなしりてそしれども改めず。是れ幼少より賢師をたのまず良友をえらばずして、其惡をなす事をとがむるなり。墓門有レ梅有レ鴞萃止。夫也不レ良。歌以訊レ之。訊而不レ顧。顚倒思レ予。鴞はふくろう也。惡聲の鳥なり。梅は靈木なれども、墓門凶僻の地に植れば惡鳥のやどりとなれり。人の性は善にして生付よしといへ共、不善人と居ときは惡に習て凶人となる者也。詩作て諷諫し深くこれをせむれども、我言をかへり見ず。必ず禍災來りて後思ひ當るべし。悔といふとも甲斐有べからずとなり。

一。心友問。井田は九一といへども、公田より二十畝をとれば貢の十一よりもかろし。此輕重ある事はいかゞ。　云。上古のゆたかなりし代、すこしの輕重に心は有べからず。山野は地廣くして舍を取事安し。舍は今のこなしやといふもの也。國中は田地の外空地まれ也。故に公田の中より

の説かはれり。いづれか是ならん。　云。程子の説まさりたり。其詩云。丘中有ㇾ麻。彼留二子嗟一。彼留二子嗟一。　將其來施々。丘中有ㇾ麥。彼留二子國一。彼留二子國一。將其來食。丘中有ㇾ李。彼留二之子一。彼留二之子一。貽二我佩玖一。丘中は麻麥を植て人を養ふべき所也。王宮國都には賢者あつまりて人民ゆたかなるべき政教あらむにたとふ。子嗟子國は其時朝にあるの小人なり。朝に小人を愛しとゞめて、君子は野にかくれたり。故に人民君子の朝に來らん事を願ふなり。來食とは家食せずして朝祿をうけん事を思ふなり。之子は子嗟子國同事の小人ばかり時めくとなり。李はたゞに人の口に甘きのみにて、終に人を養ふべきものにあらず。麥ありて食し、麻ありて衣にし、其間の菓子には李あるもよし。朝に君子賢者有て政教行はれ、其下に使には小人もくるしからじ。小人ばかりより合ては、一旦李の口に甘き樣にても、衣食なくて人生とぐべからざるがごとし。廣き丘中に麻麥を去て李ばかりを植たるがごとし。民を養ふべからず。玖は眞の玉にあらず。佩は外のかざりなり。我に貽は人に及ぼす也。人民に及ぼす所實なく理に叶はざれば、終に平治なるまじきとなり。晨風は集註まさりたり。賢者の事としては見がたし。其詩云。鴥彼晨風。鬱彼北林。未ㇾ見二君子一。憂心欽々。如何如何。忘ㇾ我實多。鴥は疾飛也。晨風はたか也。鬱はしげりさかんなる林の躰也。此疾飛たかだにもしげれる北林に歸て安ずる所とす。夫は妻をすみかといひて、公用外事をつとめては歸安する所とするもの也。然夫外に久して我を問事なし。この故に憂る心切にしてわするゝ時なし。我はかく思ふに夫は何として忘れたるぞと恨みたる詩也。公用に勞して歸

にたとへたり。小人は國家を亡すものなれば其不祥狐鳥に過たり。又君子をあだとす。よき人はむつかしければ去事を悦ぶもの也。故に何となくとをよせていとまをこひ、馬車にてゆる〳〵と行なり。鳥は食をむさぼりて害をなす鳥也。春は靈鳥の巣をこぼち、其子をとり、夏はなはしろをやぶり、秋は木の實をそこなひ、すべてあしき事のみするものなり。これ小人の愚痴にして欲ふかく、利をむさぼりて類を損し物を害し、上をへつらひ下をくるしむるに似たり。狐は邪知ありてわざはひをなすものなり。小人の中にても才ありて事をとり、上の氣に入べき事をいひ、主人のこゝろをたぶらかし、人をまどはし、亡國の本をなすは狐に似たり。少才ありて事を取者と見ゆるは皆狐のごとし。故に赤しとて狐にあらずといふ事なしといへり。赤とは少し知も有樣なるはといふ意也。愚痴不肖と見ゆるは皆鳥の食をむさぼるがごとくなれば、黑しとして鳥にあらずと云事なしといへり。如ㇾ此にして亡びざるはなし。君子の目には亡國ちかく見ゆれども、小人の心には何とも思はずおごり居なり。事急にはあらねども、みづからなせる禍なればのがるべからず。亡國にきはまりたれば、君子機を見て去なり。又君子の危を見て命を授といふは、外より來る禍なり。人の難に逢たるを見ては必ず救ふの義あり。其時は命をおしまざる也。孟子齊の宣王を見て共にするとあらん人とは思はれざれども、其比天下の諸侯齊の强をにくみ會してうたむとせしかば、宣王難義に思はれたり。孟子を客として馳走あり。行かゝりたる事なれば、其難を聞ては歸られざる事なる故に、思はず久しく居給ひし類ひなり。

問。丘中有ㇾ麻の時、程朱

集義和書卷第十六

義論之九

一○心友問○北風の詩は危亂のきざしを見て去の意と見え侍り○然れば君子危を見ては命を授るの義に異なり○此間に處すべきといかゞ○ 答○北風の詩云○北風其涼○雨雪其雱○惠而好レ我○携レ手同行○其虛其邪○既亟只且○北風はさむき風なり○涼は寒氣なり○夫春は東風氷をとき物を生ず○夏は南風物を養ひ、秋は西風物をなす○冬は北風物を殺す○北風の物を害するを以て虐政にたとへたり○北風さむき時はやがて雪さかんにふりなん事をしり、國政あしき時はやがて凶亂おこりて亡びんことをしる○親しき者志同じき者めぐみありて我をわすれずば、手をとりあひて他國へ行かんとなり○ゆるくゆるやかに思ふべからず○既に亂逆の事出來ては見すてゝゆかれざる義もあるべしとなり○北風其喈○雨雪其霏○惠而好レ我○携レ手同歸○其虛其邪○既亟只且○喈は殺風の聲疾なり○涼よりもはげしく、霏は雱よりもつよし○初めは寒氣のさむきばかりなりしが、早寒風のするどなる聲あり○雨雪分散して密ならんとす○亡國のきざしいよ／＼急なるにたとふ○仕官をやめて故鄕に歸らんとなり○ゆる／＼思ひて難にあひなば、士君子の義其難に死すべし○無事なる時に祿を辭し役儀をかへして歸るべしとなり○莫レ赤匪レ狐○莫レ黑匪レ烏○惠而好レ我○携レ手同レ車○其虛其邪○既亟只且○狐は惡獸なり○烏は惡鳥也○共に不祥の物なり○是を以て小人の多き

り。

一。有朋自遠方來。不亦樂乎。すでに三陽生ずる時は天地交泰す。天下の春也。自己の生意達せり。遠方の人來る時は近き者知べし。見龍在田。天下文明也。君子のたのしむ所なり。しかれ共是とせられずしていきどをらず。時と共に進退す。自己の悦を得ればなり。如此は君子ならざらんや。君子なりといへり。

一。鳶飛戾天は上其道を得也。鳶の天にいたるは少しも力を不用、氣にのりて翅をのぶるのみ。逍遙として自然に乗じ、手の舞足のふむことを不知の意也。君子の時に逢て道を行ことかくの如し。天運に乗じて少しも心なし、其道を天下に達するのみ也。故に君子は私の福なし。人民安く國富有なるを以て福とする也。魚躍于淵は下其宜を得也。魚淵水に逍遙自躍してしかるゆへをしらざるが如く、有道の代の民は其樂をたのしび其利を利とし、日々に善にうつりて其化するゆへをしらず。君子は上にたのしび小人は下にたのしむ。或は知あるひは不知といへども、道躰をはなれず。鳶の飛魚の躍がごとし。

集義和書卷第十五終

様の事に器用にて願ふとの事也。いかゞよろしかるべきや。　云。左様の者はわかき人の相手と成てはあしき事多し。大躰の出入ばかりにて、近付ことは無用なるべきか。淫聲といひてもろこしの様に上手ならざれば、日本ほどの害はなし。みづからなしても一旦の事にて、後はあくものなり。まして人のいふを聞ば、こうた三線といへ共一時の興にて、跡にのこるそこなひはさのみなし。よき事をきく様にはなけれども、其害淺し。彼者に歌學文學せさせて子弟に近付給はゞ、文學のゑぼうし歌道の衣服きて同學同輩の如くなるべし。あしくせば師ともなるべし。本より世間をわたる乞食心やむべからず。いやしき習ひさるべからず。此あしき事子弟にうつりしまんと、水中に木を淺したるが如くならん。小うた三線の害には百倍すべし。右様のものには其身の所作のみさせて、士君子の事を敎ざるもの也。いやしき者はよき事をうらやみ、よき人にまじはりて風俗をみだることを好むもの也。

一。學而時習レ之。不二亦說一乎。學は　孝弟忠信の道也。君につかへては學ぶ所の忠を習ひ、親につかへては學ぶ所の孝を習ひ、兄長には弟順を習ひ、夫婦は別ありて和する事を習ひ、朋友には眞實を習ひ、臣には仁を習ひ、子には慈を習ひ弟には愛を習ふ。人五倫をはなれて時なし。故に時としてならはずといふ事なし。五典十義みな心をみがくの受用也。自得すれば逍遙たり。理義の心をよろこばしむると美味の口をよろこばしむるがごとし。故に亦よろこばざらんやとのたまへり。悅は自己の生意なり。十一月一陽來復すれば寒氣いよ／＼甚し。唯梅のみ雪中に春意を得た

左様の堅固ならぬ心根あれば、其事なくても人たしかに思はざる也。人にうたがはれざる律儀の心を立定むべし。此所なきは人にあらず。

一。朋友問。我等召仕者惡事をなすこと數度也。常々つよく法度を立て油斷なく申付侍り。しかるにかやうなるは不足所侍るならん。云。貴方法度きびしく下知つよきによりて此惡事あり。しかるにたらざると思ひてます〳〵念を入給はゞ、惡事いよ〳〵かさなるべし。後には妻子までも困窮して家亡ぶべし。貴方の法度下知は常に過たり。この故によき者は居がたし。世間の人情を見聞侍るに、人つかひよき主人の所へはよき者あつまり、きびしき主人の所へはあしき者あつまれり。其故はよき者をば人々かゝへたく思へば、よき家をえらびて居なり。横道者あしきくせある者よき人にきらはれ、無是非きびしき家へ奉公する也。きびしきにはり合よく忍て惡事をなし、主人のきびしきを何とも思はざる横道者あつまると聞え侍り。この故に惡事出來る也。又きびしき主人によき者つかはれざるのみならず。中人ありてふと奉公に出てもたしなみうすきもの也。主人よければ何とぞして此家に久敷居べく思へば、たしなみも出來て中人も能者になることあり。とげて居べき家とも思はざれば、主人によく思はるべきとも思はず。友あしければ其方にいざなはれて、中も下にくだるもの也。

一。心友問。野拙が舊友予に問侍り。座の者のむかしよりお出入する者あり。三線尺八などの類を以て子弟の相手となさば害あるべし。歌連歌文學などをしへて子弟の相手となすべきか。彼も左

一。心友問。人德の功いづれの所よりはじまるべきや。　云。精神の收斂するよりはじむべし。精神を收斂する事は言を愼よりはじまれり。是口は好みをなし兵をおこすといへり。誠に吉凶のかゝる所也。惡口妄言世俗の卑辭は少し心ある人はいはず。言の發し易き事は吾人の通病也。或は道學善事を悅ぶによりて、愼むべきことを忘れて多言なる者あり。或は人をほむるによりて、そねむ者そしる者是を聞て害になる事あり。或は心やすき朋友一類などおもひて人の密事をもらすとあり。聞人君子ならば悅ぶべからず。いはざるを以てへだてと思ふべかがらず。いはずして不叶義もなきに人の密事をいはゞ、父子の親と云とも父君子ならば其子を悅ぶべからず。況や其外をや。或は人祕すといへ共善事なればくるしからずと思ひていふとあり。善事はたれも人にしられたきものなれども、祕するは故あるべしと知ていふべからず。すべて言はいひて人の益とならず已いふべき義なくば默するにしかず。行のあしきは悔改めて後は善也。言の失は物に及て害あれば悔といへ共かへらず。故に君子は是をはじめに愼むなり。

一。舊友問。士之義何をか先立べきや。　云。律儀を立べし。一言の約誓紙誓言なく共、人の見ざる所にをいて人のいひしにたがふべからず。少し問學ある者俗かたに道理を付て不信なるとあり。たとへば人の秘する書物をかる時に先の人うつすべからず見とのみゆるすといへるは。其人を信じての事也。しかるにかりたる人是善事なればかくしうつしてくるしからずと思ひてうつしとむるは、かくして惡をなしたるやうにはなけれ共、心に律儀の立ざる事は惡をなしたる人に同じ。

なく助なく、人心はなれて大功不ㇾ成。　是帝堯のはじめより終おらじと知給ひし所也。世人は餘の才知のすぐれたるを見てすゝめ、堯は其心のみづからみてるを以て功あるまじき事をしろしめしたり。

一。舊友の幼少の子の土あそびするを見て、あしき事するとていましめけるに、告て云。これあしき事に非ず。彼が今のしわざなり。其うへ土なぶりは脾胃をも養ふべし。いまより第一に戒むべき事あれども、かへりてつけますと見えたり。舊友いかにと問。　云。奴僕をうてたゝけなどいふたはぶれあり。おさなき子の手なればいたみもせず腹も立ず。奴僕もたはぶれていたきぞかなしきぞなどいへば、子いよ〳〵勝にのりぬ。これ人のいたみをいたむの本心をそこなへり。此心習性と成て。成人の後氣隨になり、妻子をいかりのゝしり、下人をうちはしちかしなどする悪行の根と成、朋友には相勝相爭の慢心となりぬ。世上の人をみるに、慢心勝心のつよき者は、朋友の交に和すくなし。ことわざにも顔にて人をきるといへるがごとし。左樣の人家内の者にはかへりてやはらかなるあり。我にしたがふ者なる故也。又朋友にはよけれ共家人にあしき者あり。是は氣隨よりおこれり。内外共にあしくば、氣遣のみにてやすからねば、一方にはゆるかせなりと見えたり。甚しき者は内外共に和なきもあり。是は一向怒氣のために胸中ふすぼりて苦樂のさかひもしらぬ成べし。これ皆幼少の時より父母奴僕の敎へならはせる所に出たり。終には父母にも不孝になり、家人のあだとなる事を不ㇾ知。

也。

一。朋友問。貴老先年池堤をなして當然の飢饉をすくひ、後の日損をとゞめ水損をふせぎ、民今に至て其功を稱すといへり。何として鍛練し給ひしや。　云。予左様のヿ見たる功もなく習たる事もなし。若かねて功者ならば、自分の才覺を發して人の才知をふさぐべければ、功をなすヿあるべからず。不レ知故によくなす者になさしめたり。予は人々のなすヿをゆるしたるのみ。後には人にとひたづね見習をしへられて少し功もありし也。世に事を取行人のあやまちを見に、多くは問たづねざるよりおこれり。京の事は京そだちの者にたづね、山の事は山賤にたづね、川の流洪水の勢は河邊者にたづねて談合し堤をつき水よけをすれば、後悔すくなし。事の大小たとへがたきヿなれども、堯の時にあたりて天下洪水の難あり。是を治め平ぐべき人なし。朝廷の諸臣より下民人に至るまで、みな鯀をさして其人とす。帝堯ひとり其才はあれども其功をとげざらん事を知給へり。しかれ共その時は舜はまだしられ給はず。禹は若年なり。天下鯀の右に出べき人なし。其器量は此難を任ずべき人也。貴賤共にすゝむるによりて、不レ得レ已して命じ給へり。はじめの程は才知すぐれたれば其功なきに非ず。終に成就せざる事は、己を立て人にくだらざる故也。夫治亂となく大任に當る者は、其心至公にして己をすてゝ人にしたがひ、天下の才知を用ひ衆のはかりごとを盡さゞれば、其功をなすことあたはず。鯀はみづからの才知に自滿し、はじめ功ありしにほこり、いよ〳〵己知ありとしてみづから任ずる事ます〳〵强なり。この故に善を告るもの

に事也といへは少しついえあり。一を主とするは天理に事なるの心なり。故に不善の中に有といへども、目みるべく耳きくべし。心はうつらずとがめざる也。とがむといふも不善の人に近き所あればなり。

一。心友問。目を閉て靜坐するは何の益ぞ。　云。精神の勞せる時其つかれをやしなはんとならば可也。動をいとひ靜を好み思慮をやめむとせば不可なり。動靜は時也。なすべき事は皆人事也。いとふべからず。思は心の官也、正しからんことを欲するのみ。風神はその氣色顏目に發す。耳のきく所目のみる所かぎりあり。是精神はかぎりあり。故に動すぐれば勞す。勞すれば息す。呼吸の數のごとし。動靜は晝夜の道なり。死生は古今の理也。たゞ心は遠近なくきはまりなく內外なし。精神はかぎりあれば、養ふ時は內に守てついえず。養の本は欲をすくなくする也。

一。心友問。士は何を以てか天職とせん。　云。人を愛する也。民は五穀を作りて人を養ふ。婦女はきぬをおりて人に着せしむ。士はするとなし。人を愛せずば濟ふところなし。　問。何をか人を愛するの事業とせん。　云。問學して心を正し身を修め、上は賢君のおこり給ふを待、下は凡夫のまどひをさとし、武事をよくして凶賊をふせぎ天下を警固す。是れを文武二道の士といふ。人を愛するの事也。君子時を得れば、小人皆やしなはれて、其の樂をたのしび其の利を利とす。小人時を得れば君子ををかししのぎはづかしめくるしめんとす。君子自反敬謹して德益進む。他山の石はあらきが故によく玉をみがくといへり。君子の德を大にするものは小人

に甚しき時は、聖人是を治めしむるとも刑罰をまぬがれじと。己が惡をやむるも又しかり。一念の微にをいて正し去べし。念をかさね言行に發して後は、禁ぜんとすれ共心くるしくなりて去がたし。大臣の惡も驕すこしきなる時に戒めざれば侵し奪ふに至るものなり。あらはれておさゆる時は恨をふくみそむくものなり。妻のほしいまゝなるも嫁の始より用心すべし。既に權をとりて夫をないがしろにし父母に不孝なる時に至りて禁ずれば、やぶれとなれり。子も成人にしたがひて敎有べし。俗にもまぐべき時に曲ざればこはく成て制しがたしといひ、古人もおごれる子の用べからざるがごとしといへり。妻子のみにあらず。士大夫より民に至るまで皆しかり。火の火うちより出て物につきたるはじめ指をしてもけしやすし。大になりて家屋につき大山をやく時は、むかひ近付べからず。國家の凶亂も治世の中にすくはずして亂世に至りては、善者ありといへどもいかんともすることなし。

一。心友問。程子云。人の不善を我かたはらにするを我不レ見、人の善事を我かたはらに云を我聞ものは敬也、心一を主とすれば也と。少し達せざる所あり。　云。これ目の見ざるにはあらず。見れどもとがめず化せざるは見ざる也。凡人は人の不善をみて己がせざる事なればとがめにくめり。しからざればその不善に化するものあり。善事をいふを聞者は是を好する也。耳のきくのみにあらず。　問。一を主とするとは心のうちに專なるにや。內に專ならば不善不レ見不レ聞ことあらんか。　云。心內外なし。一といひ中と云は天理の別名也。精神內に專也とはいふべし。心內

のたくはへなければ、凶年饑饉に逢て人民をすくふべき道なし。これより兵亂おこり天下亂るゝことも有。これ近き憂にあらずや。子を養育するも、其心のおもむき習の美惡をかんがへざれば、國人がらあしくなるもの也。これ大なる憂也。萬事遠き慮りなければ憂あらずといふ事なし。俗に遠慮といふも又通ぜり。たとひ凶亂の事なく共、民の父母として父母たるの道を失ふは、上たる人は德をそこなひ其次は名をおとすべし。

一。心友問。貴老堯舜を以て聖人の盛なるもの也との給ふとは何ぞや。　云。三皇は德神明にして行不測也。後世及がたし。禹湯文武周公孔子皆聖人也といへども、をのづから盛衰あり。堯舜は聖人の盛に當り給へり。故に後世作者ありといへ共虞帝には及べからずといへり。作者とは聖人の事也。程子云、天地盛衰あり。一時の盛衰あり。一人の盛衰あり。一木一草の榮枯陰陽消長の理也。天地聖人をのづから此理にもるゝことあたはず。　問。しからば孔門の諸賢生民ありてより此かた孔子のごとくなるはあらじといへるは何ぞや。　云。是又實語也。萬事名と聞とは實に過る者也。見ては聞たるやうにはなきもの也。唯聖人の德のみ言語文筆の形容に及がたし。故にいにしへの聖人の德を傳たるはおもかげばかり也。孔子をば見て知たるものなれば先聖にまさると思へる理也　列聖心にをいてかはりなし。唯聖にして知べからざるの神德時と共に盛衰あり。

一。程子云。惡は其微なる時に止べし。盛にして後禁ずる時は、勞してしかもやぶれあり、君の惡にに甚しき時は、聖人をしてすくはしむるといへ共、たがひもとる事をまぬかれず、民の惡すで

今和漢共に及べからずとす。異學の徒といへどもそしる事あたはず。然れども堯舜より見給ひては一點の浮雲の太虚を過るがごとし。これを以てかたしとし給はず。心を用ひ給ふ所は人倫日用の中にあり。この故に唐虞揖讓三盃酒、湯武征誅一局碁といへり。堯舜湯武の心をしれり。

一。曾子簀を易るの心、たゞこれ天地生々の理也。死生一貫にして晝夜のごとし。病煩を以てうつされず。唯今死するを以て心をうごかさず。平生かりそめにすぢかひたるものを直にをきなをするがごとし。一貫の唯こゝにあらはれたり。程子云。一人の罪なきを殺し一事の不義を行て天下を得事もせずといふものと心を同じくすと。予がごとき者も道に志あれば。一事の不義をなし一人の罪なきを殺して天下を得ともせざる事はなすべし。簀を易るの心は及ぶべからず。大義を行ふ事は力なり。又名根力量を以て死をよくする者もあり。平かなる心にて簀を易るの正は、日用の養ふ所至れるもの也。

一。學友問。學士當下一念といへり。然れ共孔子は遠き慮なければ必ず近き憂有との給へり。云。當下一念の語は異學に似たり。しかれどもとり用ひやうあるべし。董子云。仁人は其義を正して其利をはからず、其道を明かにして其功をはからずと。先學皆稱美せり。當下一念といふ共可也。又孔子の遠き慮との給へるは、則當下に思ひはかるべきの遠慮也。民の耕作の業も遠き慮也。皆時に先だちてたくはへあり事あり。これにをこたれば父母妻子饑寒に及べり。是近き憂也。士大夫より國君にいたるまで、入ことをはかりて出すことをするも遠慮也。天下の主も三年のたくはへ十年

くは、四ヶ年にてかへんとは益なかるべし。初ていたる一二年は國の民情もくはしく知がたし。教令も熟せず。やう〱仁政もほどこし行はれ、風俗善にうつらんとする比には、任はてゝかはり來る守令前の守令の善政に習て相繼者は有がたかるべし。甚しき者は己を立んがために悉くけづりすて、もしはけづらる共用ひざらんには、其德功むなしくなるべし。大方時の間を渡して過る者中人ならん。中人に恥をあたへずしてかはらしめ、よきをば年をかさねて在國せしめんための法ならば、四ヶ年の大法しかるべきか。

一〇心友問。孔子酒の困をなさずとの給へり。是凡人躰の事也。あまりなるとの樣に聞え侍るはいかゞ。　云。聖人の道は天のごとし。高して且遠し。人常に及ばざらん事を恐る。及ばずとせばおこたるに近し。故に聖人の敎は常に俯してこれに就しめ給ふ。しかりといへ共いやしむ所を以て人に敎るのたぐひにはあらず。平人は酒をむかへて亂に及ばず。よきほどに飲と思へり。この故に常に過ることを不レ知也。聖人はよきほどに飲たまへども、なをも中に過たるかと思ひ給へり。亂と云は酒狂にはあらず。其身の中に過て氣血をみだるをいふなり。心みだれて酒狂にいたる者は亂の後也。聖人此言平人をして俯して就しむるのみにあらず。才氣高く志高遠なる者をも、をさへて等をこえすゝましめざる也。聖人の禮を立給ふと飲食男女にはじまる。心術も是より實にふみ行ふべし。これを以て淺近のとゝ、去て高明の理にしたがふ者は、虛見にはせて實學をなさず。是をこゆると云也。實なき者高明は眞の高明にあらず。終に物をなすべからず。唐虞の事業は古

とす。知神明なれば仁勇其中にあり。學を好といへども、文學のみもてあそび跡になづみ法によれば、かへりて其知をふさぐもの也。人君の天職あり。人を愛するを以て心とす。國主は一國の父母なり。天下の主は天下の父母也。故に樂める君子は民の父母也といへり。父母の心寛厚にして子の成人をたのしめり。怒といへ共愛する也。人の親たるもの子を大切に思ふあまりに、子の心行あしき事あれば腹立の顏色をなす。其實はにくむにあらず。愛の厚也。君子の人民にをける事如ᆞ此し。伯夷叔齊みづからためにする所は淸に專なれ共人にをいては寛也。怨こゝを以て希也。其仁をしるべし。

一。心友問。いにしへ上國ときこえし國も中となり、中といひしは下國となり、國郡山澤あれ侍るとは國主郡主のよからざる故也。しかれば王代の一任四ヶ年の法よき道理あるべきか。云。古の時勢をは不ᆞ知。今の時勢には行ひがたかるべし。昔といへども仁政を行ひ給はんがためならばよかるべし。帝舜の象を有庳に封じたまひ、代官をつかはして其國を治しめ、象は其國の貢物をおさめ、諸侯の富貴をたのしめる計にて、象が不仁の仕置の民にをよばざる樣にし給へり。日本のいにしへも、國々の貢物を給はりて、諸侯にひとしき人都にありしもありとみえたり。扨國政は守介の下知なれば帝舜の遺法に近し。仁政を行はざる時は、秦の制法にて侯をやめ守令を置たる法なればよろしからず。其守令あしきものならば四ヶ年を待べからず。あしからざれ共さして功もなく守令の任なき者ならば、四ヶ年にてかはるべき事尤なり。若其守令仁者にて國政よろし

のはしからず。ゆく〲聞傳て服するものなり。又にくゝそねましく思し者の子孫にて、上よりは恩賞なくて不レ叶筋目あり。忠功あれども其さたなくおちぶれ居を見ては、かくあるまじき事とは思ひながら、凡情の習にて何ともいはざれ共、人々本心あればそこ意には君のたのもしからぬ事を知ものなり。忠義の亡る所也。この故に明君は德を賞するに位を以し、功を賞するに祿を以し、才を賞するに職を以す。晝夜の奉公に小祿あり。當座の奉公には其品の褒美あるべし。

一。心友問。軍法に敵のつかれにのぞみついえにのると云とは君子もなすべきか。　云。國君の死して其子幼少なる、或は敵將の病疾の時、もしは水旱にて不作しなど難儀したる所へ、取かけて利を得るたぐひは、一戰に國を取といふ共君子はせじ。人の憂を以て己が利とするは甚不仁なる事也。君子の敵のついえに乘ずると云は、不備不意ごときの彼が不德を討と有べし。己有德にして彼不德也。己義ありて彼不義也。故に討とあり。人の憂を見て悅は己先不德不義なり。何を以てか討事をせん。賊相討なれば君子の軍にはあらず。

一。心友問。治躰の言あれ共いまだ其躰をしらず。治國平天下の根本なれば其事におづからずといへども其理を知は窮理の學也。治躰は何ぞや。　云。治躰は知也。人君知明にならざれば、たとひ君[illegible]の行ありて萬事正しといへども、たゞ一のしまりなき故に、よきも皆あしくなるものなり。故に人君は學を好て理をきはめ心をみがき、古今の人情時變に達するもの也。神代より人皇に傳て三種の神器を人君の御たからとし給ふ中にも、內侍所本躰なり。中庸にも知仁勇と云て知を先

れば、眞の義理には遠し。故に氣質の美なる人の義理を知たるには及ばざる學者多し。生付義理を知べき人も、學によりて其知ふさがりおもむきあしくなりたるもあり。いにしへの人は文學なけれども貴賤共に義理を知たる人多し。君たる人一人を賞して衆人悅ぶは、義理を以て賞すればなり。又一人を賞して衆人そねむは、義理の賞にあらざれば也。源の義經次信が志に感じて、又たぐひなかりし名馬を合戰の最中に事かくべきをもかへりみず引馬にあたへられしは、義理の賞也。しかる故に人々給はりたる樣に思へり。利心の分別あらば、大將の不慮の死をすべきも馬也。十死に入て一生を得べきも馬なり。二なき名馬を死人にひきてすてんよりは、此大事に臨でみづからはなたず乘給ふか、若たまはらば生て用に立べき者に給ふべき事と云は利也。利を以てあたへば衆の恨あるべし。軍士の心そむかばよき馬に乘給ふとも何のかひかあるべき。故に名將は功有し者の子孫を取立て親の代に忠ありしをわすれず。筋目を尋てほど〳〵にめぐみ養ふ時は、衆みなたのもしき主君と思ひて、己が身のみならず、子孫のためにも忠をはげますもの也。されば賞を得ざる者も得たるがごとく思へり。義理を行て私なければなり。孔子の春秋一經の奧旨、一の義理を立給ふなり。義を不レ知は夷狄禽獸也。大學の理も上仁を好むときは下義を好といへり。しかるに上仁を好て下義におこらざる者あるは、其仁眞ならずして義なければなり。仁義は本一德也。故に君子の仁は必義あり。問。今時筋目ある者を取立善人をあげても衆そねむ事あるは何ぞや。云。利心のみにして辨へなき者は、一旦さある事有。少し義理をもわきまへ心あるも

信も可也。己を盡して後あきたらずしてうらむる者あらば彼が非也。とがむべからず。人皆悪名をにくみて令名を好めり。小善をつみてつもらざれば令名あらはれず。小人は人目に立べき大善ならばせんと思ひて、小善をば目にもかけず。君子は日々になすべき小善を一もすてず。大善も應ずればこれを行ふ。求てなすにあらず。夫大善はまれにして小善は日々に多し。大善は名に近く小善は德に近し。大善は人あらそひてなさんとす。名を好むが故也。名によつてなす時は大も小となる。君子は小善を積て德をなすもの也。眞の大善は德より大なるはなし。德は善の淵源也。德ある時は無心にして善かぎりなし。貴老小親類のおほきによりて懇情の善を行ひ德をつみ給はんは幸にあらずや。求めずして令名きこゆべし。善をするの媒と思ひ給はゞいとふ心生ずべからず。かへりて其つとめ心の樂となるべし。其上人の悦心をあつめば和氣家にみつべし。日々に無聲の樂をきくならん。人心服從する時は號令行はれ禮儀立ものなり。和して且禮あらば子孫必多福を受べし。易云。積善之家必有二餘慶一。

一。心友問。いかなるをか士といふべき。　云。義理を知なり。五典十義其中にあり。　問。いかなるをか君といふべき。　云。義理を立る也。君の義理に專なるは臣の忠を進むる道也。人をすゝむべきためにするにあらず。みづから義理を尊ぶなり。臣下は其義に感じて心服す。服すれば忠あり。　問。道を尊ぶは義理を知にあらずや。しかるに今の問學をする人義理を不レ知は何ぞや。　云。たゞに經傳の上に義理を論辨し、或は身に行ふと思へる人も、眞を欣で法に落なとす

道は天下の道にして君子の私すべき理にあらず。然れども其大本の未發に存して聲もなく臭もなし。聖人といへ共あらはすとあたはず。是を無といはんとすれば神明不測也。これを有といはんとすれば形色聲臭なし。無欲なるが故へによるところなし。好惡なきが故に過不及なし。しばらく名をかりて中といへり。昔も今も末世も終にあらはれざる物也。故に造化の根たり。寂空虛無もこれが名とすれは病あり。たゞ隱といひて無にながれず有をのこさず、かくるゝと云につきて其神を知。聖人の言妙なり。

一。舊友問。予が母方に微少の親類多く侍り。うと〱しければ恨み、ねんごろにするとは餘多の者なれば成がたく侍り。予が宗領によめをむかへば親類すくなき者をえらぶべしと思ひ侍り。云。是心を立るの過也。むづかしきと思ひいとふ心を以てむかふる故に苦勞なり。むかし大舜の君雞鳴ておきてつとめて善をなし給ひしは何事ぞや。人倫の交に道ある也。貴老微少の親類おほきは善をする事の多きなり。悅ぶべく共うれふべからず。若貴老微少にて親類富貴ならば、貴老のをとづれをいとはん事、貴老の微少のゆかりをいとへるごとくなるべし。さからば遠慮してひかへむより外の事あらじ。何を以てか善をなし給ふこと廣からん。幸に親類微少にて貴老のをとづれを悅ぶなれば貴老是をしたしみて善をする事を樂み給へ。貴老富有の人にあらずといへ共又貧賤ならず。志次第にてゆかりの人々の貴老の志を悅ぶ程の事はなるべき事也。衣服米麥菓子肴等もしは金銀も、少しづゝおりにふれ有にまかせてかはる〲あたへ、物なき時は見廻使言傳の音

べき勢ひあり。天下のひろきといへ共、つくるに至りては俄にすべき樣なし。故に山林ふかき時にをいてうるしをとり木地をぬり飲食の器を始め給へり。　問。世人貴賤となく我一代をはかるのみ。子の代をおもふ事だにふかゝらず。他人の代萬歲の後を憂給ふ事何ぞ如ㇾ此いたれりや。云。父母の子を愛するは愛の至り也。しかれ共子不孝なれば其愛心うすくなる事あり。聖人の民を見給ふと凶人惡人といへ共にくみ給はず。刑罰に落入時は政敎のいたらざる事をなげきて、其罪人をいかり給はず。惡をにくむべきは當然の理なり。一人を捨て萬人を助くべきが爲也。天下のひろきも一家のごとく、萬古の遠きも一日のごとし。仁愛の誠やむ時なし。是則天地生々の心なり。

一。心友問。費の字を解してたからとせざる也との給ふは何ぞや。　云。上古には貝を以てたからとす。費の字弗貝の二字を合す。如心を恕とするの類也。財散ずる時は民あつまるといへり。散ずるはたからとせざるの義也。用の廣といへると意相近し。財の字も貝にしたがふ。いにしへ貝をたからとせし故也。いにしへのたからの貝はいづれの貝といふ事をしらず。後世金銀錢を以てこれにかへたり。堯の時天下洪水にて五穀不足ゆへに、錢を作て交易の助けとなし給へり。廣く天下に用るのみ。いまだ君の藏にたからとし納たるとなし。賢君のたくはへは民のためのたくはへ也。故に王城にあつめずして、在々所々に五穀をつみ置て水旱饑饉の備とし給ふ。民みな己が用と思ひて君の物とせず。君の私のたくはへなければなり。これたからとせずして用の廣きなり。

ば財用も乏しくなり、少し心には思ひ出ても實の義理をばするとあたはず。親類知音の筋目ある人家類などにも見おとされ、たのもしからぬ者といはるゝ實の惡名をばかへりみず。終には家の亡びたゆべき利を失ふ事をばしらず。畢竟くらき故也。心身家國天下共に幸福に、仁義にしくはなし。とりわき人に君たる人義理忠實なければ、衆の心そむき離れ、利を好むの小人のみ近付て、國家のほろぶる事日をかぞへて待べし。

一、朋友問。佛者は生死といふ。儒者は死生といへり。意ありや。生死は言順にて死生は逆なるがごとし。云。別に心はなかるべし。しかれ共死生と云て言順也。語默は晝夜のごとく死生は古今のごとしといへり。語は晝うごくの理也。默するは夜息するの理也。祖の死は父の古也。父の生は今也。子の死は子の古也。子の生は今也。天地の造化はおりばたのたてのごとし。人の死生はよこぬきのごとし。死生常の理にして二あらず。故に古今といふのみ。

一。人己を不レ知は大憂也。己を不レ知して人をしらんとし外事を知とをつとむるは惑也。己を知て後天下の事疑ひなきは樂なり。

一。心友問。漆器は美なる物なり。舜何ぞ如レ此の美器を始給ふや。云。是凡人の知ところに非ず。數千歲の後をはかり給へば也。上古飲食の器物は多くはやき物なり。朝夕用る物なればくだけやすく損し易し。人も次第に多くなりて、天下に是を用る事かぎりなし。帝舜の時より五百歲千歲の間には、目に見えぬ事なれ共、數千歲へて後は山林あれて、人民の難儀天下の凶亂の根となる

死をかろんじ物に勝ことはまことに君子の勇に似たり。しかれども心地光明ならず。若勇者道に志ありて蓋藏なくかたらしめば、必ず恐るゝ所あらん。心にまどひある者は恐なき事あたはず。君子は惑なし。知仁勇は心の一德也。故に君子は恐るゝところなきなり。小人の勇は氣に得たる故に氣にいさむ。されば死すまじき所にても死し、又死すべき義に死せざることもあり。君子は義にいさめば死すべき義を見ては、此躰をすつることとやぶれたるわらぐつのごとし。

一。心友問。世間に義理順義といへるは皆利也。さし當る公界の音信往來振舞等をいへり是をなさでは忽世間の名利をうしなひて身に害あり。之をつとむるを以て義理をかゝずと思へるはあやまれり。是をなさで不レ叶公役のごときか。　云。しかり。順儀とはいふ共義理とはいひがたし。義理といふは、時を失て微賤に居者にても筋目のあるをばすてず、親類の末々なればいやしといへ共見はなたず、知音の由緒までもわすれず、家頼の功ありし者の子孫を取立など、たのもしきところあるを義理といふなり。是等はさしあたる世間の利にはならず。當分身には損ありて益はなき事なれば、今の義理順儀の人大方此實をば捨てかへり見ず。却て外聞あしきなど思へり。善人の名となり利となる所は異なり。心の仁義に本づきて不レ忍の本心よりなせる義理なれば、人にたのもしと思はれ仁者のほまれあるはくちせぬ名なり。眼前の利にはあらざれど、天道の冥加に叶ひ末のさかへ久しきは義を和するの利也。不善人の名利は、小人と共に時めきて飲食衣服器物家屋等の上にをいていやしき名を悦び、時にあはせて利ありと思へり。欲心と驕奢にひまなけれ

しれりといへり。

一。心友問。艮ニ其背一とは如何。　云。せなかは不ㇾ動無欲の所也。人の身中目の見耳の聞口の味鼻の臭腹の飲食手の取足の行、みな欲あり動あり。たゞ背のみ欲なく動なし。故に一身の本たり。一身は背の不動につきて用をなす者なり。これ我身によりてたとへをとれり。心無欲にして身の主たるべし。欲あるときは主たることあたはず。況家國天下をや。欲は好み悪むなり。好では得むことを欲し、悪むでは去らんことを欲す。其好悪にもとる時は心うごきさはぐ。或はいかり或は恐れて心くらくなれり。心は靈明を以て身の主たり。靈明の眞を失ふ時は主の用なし。これを放心といふなり。

一。學友問。雷は天のいかりといふ説あり。　云。よろこびとはいふべし。雷雨のうごくみちみてり。草木生意をまし、人氣すゞしく心地よろこばし。先王以て樂を作り給へり。風雷共に造化の常はよろこばし。常にこゆるはいかりともいふべし。周公の徳をあらはさんがために大風おこり、北野の天神の忠臣の怨を感じて甚雷ありしたぐひなり。

一。人先實あり。これをかざるに文を以てして禮あり。實すくなくして文過るは奢也。實ありて文の不ㇾ足を儉と云。古の人は實あまり有て文みたず。故に禮の本とす。今の儉を用る者は禮を廢して儉と思へるは誤りなり。

一。心友問。和漢大勇の者あり。勇にをいては君子の勇にひとしからんか。　云。氣質に得たる大勇も、

問。しからば後世といふとも賢人の詩は優なるべきか。　云。賢者といへども、後世の詩はたゞ其言葉の正しきのみにて、優柔の風はすくなし。賢者は心の正しきのみ。其風は其代の神氣の化する所あればなり。上代の人は玉冠を着せり。後世は賢者といへども常に着するとあたはず。是神氣のうつりかはれるが故也。日本上代の人道德の學はしらざれども、今のしりたらん人の及ばざる所あり。世中ゆるやかにして氣神あつき故也。今の道學ある人、道理をしることは古人よりもくはしといへども、世中のせはしきに習て神氣うすし。故に風は古人に及がたき所あり。其跡の見るべきものは詩歌也。中古の歌人學ひろく名を得しも、上古のしらずよみたる大方の人の歌にも風躰は及ばざるがごとし。上代の歌は優柔也。中古以來の歌も上手といへども迫切にして優柔ならず。これ自然に人心の感ずる所なり。人心は政敎風化のしからしむるなり。世中に習たる人の心氣歌の本なれは、をのづから吉にあらはるゝものなり。たまさかに優柔に似たるもあれども、それをよしとして作たるものなれば、自然の風に非ず。いにしへは日本の國遠してひろく、近來近してせばきがごとし。政道ゆたかなる時にひろくて、にしき時はせばき也。しかるにせばきを以て一面によく治りたると思ふはあやまり也。いにしへは人心上に服せしかば、人質といふ事もなく、凶事なければ早使早馬といふこともなく、禮式定りてしげき往來もなし。この故に諸國のをとづれも遠く、人の步行もいそがずゆるやかなりしかば、日本ひろく東西遠かりしなり。其代の風歌にあらはれてしらるゝなり。もろこしにては國郡村里の婦女の小歌をとりて其政其俗を

もなし。自反愼獨常に存養せざればうしなひ易し。君子の及べからざるはそれたゞ人の見ざる所かといへり。

一。心友問。　程子註に。朝聞レ道夕死可矣とは死得レ是なりといへるは何ぞや。　云。是字意をふくめり。君子天年の數を盡して無事に終もあり。義に當りて戰死するもあり。生も一事なり死も一事なり君子は事として正を出ず。正に心ありて死に心なし。是死得レ是也。

學友問。孔子曰。生をしらずば死をしらじと。生をしらば死をのづからしるべきか。　云。生を知るは人の人たる所を知なり。人の本を知ば則天を知也。天を知ときは人鬼幽明死生眼前に明白也。人と生れても人たる所を不レ知故に人鬼幽明二にす。故に目のみる所のみ知て見ざる所を疑ふゆへにさとりの學あり。聖學には一事の疑ひはあれ共、一生の疑ひなし。佛氏は天下國家の用なし。故に一事の疑ひを不レ知。幽明輪廻のまよひあり。これ終身のうたがひなり。富貴貧賤は天命の常造化の自然なり。此不同なければ人事を行ひて造化を助くるとあたはず。故に富貴にして驕且吝なり。貧賤にして憂かつ安ぜざる時は天地鬼神の妖恠とする者也。共に終をたもつ事あたはず。故に富貴の道は禮をこのみ人を愛す。貧賤の道は外をねがはずしてよくつとむるにあり。これを天地人の三才とす。

一。心友云。もろこし上代の詩よりも後世の上手の詩面白し。この故に人のもてあそぶも皆後世の詩人の詩のみなり。　云。尤も詩は名を得たる詩人上手也。然れども上古の詩の樣に優柔ならず。

べからず。是自然の天命なればなり。大を以て小につかふるは天をたのしむ者也と。大はまことに小をしたがへ易し。しかれども恭敬してつかふる者は義理あるを以てなり。心につかふべき義理をしれば、其義理をたのしびて外の勢を忘るゝ也。將軍家の禁中につかへ給ふがごとし。將軍家は天下を我ものとして、大といふにも及ばず。しかれ共天照太神の皇統にて三種の神器おはしまし、天威のをされざる所あり。故に代々の將軍家をろそかにし奉り給ふ事あたはず。足利家の盛世の時は、本より將軍家にまかせられたる公家なれば、ないがしろにしたりとて眉目にもならざるに、天を樂の道理をしらで、勢にまかせ日々に公家の威をけづりたる天罰にや、足利家の威もほどなくおとろへて、四五代は公方といふ名計にて、公家の如くなりて亡びたり。武家の强大を以て公家の微弱なるを尊敬し給ひてこそ、後世のほまれ共成べき事なれ。强大の人微弱の人ををしつけて眉目とおもへるは、くらき事なり。其非禮を武家の例とする人あるはあやまり也。

一。學友問。先學云。人心は人欲也と。先生の解は異なり。　云。古語を解こと人々の見立あり。古人の主意に叶と不ㇾ叶とありといへ共、叶たるを以て必賢なりとせず。不ㇾ叶を以て不賢とせず。予思ふに、人心は人欲に非ず。大舜の給はく、人心惟危と。すでに人欲なれば、危といふまでもなく惡也。人心は形氣の心なり。此形あれば此心あり。聖凡共に同じ。飲食衣服男女等の心これなり。既に形氣あれば欲有。欲あれば則あり。則は禮儀也。人心欲ありといへども、禮儀の天則にしたがふ時は道也。則にしたがはざる時は人欲となりて惡なり。天則は微妙にして聲もなく臭

れば大に益あり、すこしき變ずればすこしき益ありといへり。婦女の知識なき赤子の物いはざるだに、誠あれば其欲に應ず。あたらざれ共遠からず。況男子の知識才能あり。民人のよくものいふは、慈仁の誠あらば保こと易かるべし。

時にしたがへて變易して道に從ふは君子の中庸也。時に隨て變易して利に隨ふは小人の中庸也。其知の明は一也。只主とする所異なり。

一。心友問。孟子言を知といへり。道學にをいて重きことは何ぞや。　云。予は予が言を知のみ。心定る時は其言重して舒かなり。不﹅定時は其言輕して疾。問。事の急なる時はいかゞ。　云。心定る時は急なりといへども變ぜず。只其言すみやかなり。重舒變じて分明なる者也。無事の時に疾は心いそがはしきゆへなり。急なる時すみやかならざるも心とゞこほれば也。

一。心友問。聖人の言をおそるゝの意いかゞ。　云。聖人は萬歲の師也。其言は我に敎る也。我かならずこれを受用せんとす。故に畏る。天より命じて師とす。今日の君命のごとし。舜曰。四海困窮。天祿永終と。聖人の言たがはず。甚恐るべきなり。　問。大人をおそるゝと。大人は在位の人か。在位の人不德にて我道あらば、何をか恐れんや。　云。天命じて貴人とし上に立しむ。故に畏る。畢竟天命を恐るゝなり。　問。天何ぞ不德の人を命じて有道の人の上に立しむるや。　云。勢の自然也。自然の勢は天命也。故に君子は自然にしたがひ、小人は力を以て自然にもとり災をまねく者也。故に云。小を以て大につかふるは天を恐るゝもの也そ。小はまことに大に敵す

力に非ず。鬼神は人の作用はならず。人も鬼神の妙用をはなすことあたはず。幽明人鬼の異なる也。聖人は人にして神の妙用あり。鬼神にもまされる所なり。しかれ共聖人は人道をつとめて神妙に心なし。これ聖にしてみづから知べからざるの神也。又聖人の上に神人の位なきにしもあらず。伏犧神農黃帝堯舜これなり。禹王文王周公孔子神にあらずといふべからず。

一。學者ありて云。孟子以後の諸君子皆言の失ありといへり。師とはしがたからんか。　答て云。皆師とすべし。其志の賢なる所は後世の學者の及べき所に非ず。言の失をあげて先人の非をいふ事は易し。其德を取て身に行ふ事はかたし。予が言のごとき今の人の惑に當り、今日の受用に益あり共、時去て後人の議論に及ばゞ大半非ならむ。たゞ實儀あれば人の眞心を感發す。善心與起する時は聖賢を師とすべし。其中間の奏者也。世に博學篤行の師多しといへ共、人の眞心を開とあたはず。師弟共に先學の非をあげ、當世の學者を相そしれり。先人の德を好し今の人の善をあぐる事あたはず。其議論可也といへ共、かへりて人の善をそこなふ者也。

一。賢不肖生付といふべからず。治亂命といふべからず。君相志を立て賢を求め、職々其任にあたるかあたらざるか、つとむるかつとめざるかを明に知ときは、國をのづから治るべし。天下小人を以てみづから安ぜざるは人心の靈なり。君相志をはげまして君子の心術躬行をなす時は、士民これにしたがふ。心はいまだ化せずといへ共、其用は君子の事なり。この故に人材を成ことはかたし、變化するとは易しといへり。いまだ王者の德に及ばざれ共、志立時は變ずべし。大に變ず

軍陣に太刀を帶そゆるもの也。これ禮儀備り人道うるはしくして易簡なり。善なるにあらずや。いつのほどにかゑぼうし下地のまゝにかみをきりわげ、ひたゝれはかまを畧して上下とす。一旦は易簡に似たれ共、略儀にて禮儀なければ、小袖上下數を盡していろ〳〵あり。其ついえかぎりなし。ちいさがたなを脇指とし太刀を刀として二腰さしたるはかい〳〵しき樣なれども、國容軍容まじはりて治道長久ならず。戰陣威かろし。しかのみならず大わきざし中脇指小脇指刀のさしがへに至まで、其ついえかぎりなし。これ略によりて奢にながれ、人の禮儀亡びて物多く事しげきにあらずや。事しげき時は人の精力及がたし。正直律儀なる人といへ共僞なき事あたはず。この故に聖人は易簡の善に配して人道の禮儀を制し、畧を戒て多事をふせぎ、僞の生ずる源をふさぎて誠をたつるものなり。

一。心友問。聖而不レ可レ知。之謂レ神。先學皆いへり。聖人の上に別に神人あるに非ずと。いかゞ。云。聖人には神明の德あり。此德ある事聖人みづから不二知給一也。空中よりなき物を生ずるは鬼神の造化なり。天地ひらけていまだなき物をはじむるは聖人の神德也。八卦を畫して六十四卦とし、天地人三極の道をあらはし、萬事萬物の理を盡し、醫藥灸針の事を作し、律呂管絃を興しなど、皆神明の德なくてはならざる事也。律呂たしかにのこりてだに、ふりの絕たる樂は再興することなりがたし。舜はじめて五絃の琴を作て南風をうたひ給へり。琴の曲たえて後其器ありといへ共、賢君良相もこれをおこす事あたはず。跡ありてだになりがたし。況や跡なき事を初て作するは人

一。心友問。より親に與し主君にそむきて出るは何の義ぞ。　云。非禮の禮非義の義大人はせざるの類也。今の俗此非義の義を義とす。あやまりてもせめて義と思ひてなさば可也。たゞ其中間の名利の情にまとはれてせんかたなき故也。盜賊は本より不義の者なれば、義理を思ふ者にあらざれども、其中間の難を去とあたはず。これ其情にまとはるればなり。　問。より親義を行て去は與すべきか。　云。より親義を行はゞ自己一人義を行て去べし。何ぞ人をひきゐて其家を危くし其國をみださんや。故に君子はより親とする人をはじめよりえらぶ事也。

一。心友問。程子云。誠あらず、財をおしむ者は、善をすると不レ能と。財はおしまざれども誠なき者あらんや。　云。名を好で財をほどこす者は、おしまざれ共誠なき也。　問。不仁なる者しはき者も堂寺の佛事には金銀をおしまざるは何ぞや。　云。しはきも不仁も心くらき故也。後生の僞妄を信ずるも心のくらき也。くらき故にくらき所へ用ると知べし。

一。心友問。易簡と略儀と相近がごとし。　云。大に異なり。聖人の敎は易簡の善あれども略儀を示さず。人に略儀を敎る時は禮儀亡ぶ。禮儀亡る時は驕奢生ず。驕奢なる時は物文花にして事しげし。事しげき時は僞生ず。物文花なる時は略儀いよ〳〵行はる。夫烏帽子直垂ちいさ刀は無位無官の士の禮服也。此禮服文色定れば數を用る事なし。たゞ一くだりありて禮儀達しぬ。下着ひとつふたつは時の寒暑にかなふのみ。數を用ひ美を譏すべき様なし。ちいさ刀たゞ一腰なれば、大中小の脇指刀のさしかへ用べき所なし。平生はちいさかたなひとつにて、内外ともに事たれり。

とゞむべき事やすき勢也。しかれ共とゞむることあたはず。本よりの惡名の上に又惡聲をかさぬ。人力こゝに及ばざるは何ぞや。　云。鬼神は福善禍淫なり。いにしへの聖主賢君は、天工にかはりて史官を立給へり。是造化を助くるの道也。人道に史官を立ざる時は、天命の史官ありて善惡を記せり。　問。天命の史官其心に知ところありや。　云。其心には知ことなし。たゞ天然と其才其時の善惡をしり、或は時を過て生るれども、前代の事に達せるものあり。皆天道鬼神の福善禍淫也。天下の主といへども鬼神に勝ことあたはず。故に人力を以てふせぐべからず。みづから惡をなす者は、其心くらき故に此理をしらず。若此理をしらばつとめて善をせんのみ。善をするとの惡名を亡すの道なることを不ㇾ知はまどへるなり。

一。心友問。自逝は有べき事か。　云。自逝する者は生死に心あり。或は名を好めるが故也。近しては晝夜、遠しては生死なり。夜に入ていぬる者、何の心あり何の名ありて自逝すべきや。死生は天地の常理也。道理にしたがひて始終する者は無心也。むかし程伊川病で死なんとす。郭忠孝と云ふ者往て見に、伊川目をとぢて默然たり。忠孝云。夫子平生の學ぶ所此時に用べし。伊川云。道ニ着用ㇾ便不是と。忠孝いまだ寢門を出ざるに伊川卒す。　問。遺言といふ事は有べきか。　云。死去人のいひ置べきことは、生殘る人々の心にあり。時所にしたがひ子孫の位に應じ義に害なき事は、勢にまかすべきのみ。死者何をかいはん。但し遠方へゆく人の留守居の及まじき事をいひをくごとき事あるまじきにもあらず。子弟に敎る言は平日の言なり。遺言に非ず。

日本陽明學

ひて、理にしたがふをつとめと思へり。道をしらざるが故なり。君子より見れば、欲にしたがふは皆苦なり。しかるをたのしみと思ふはまどへるなり。雅樂の神氣を養てあかぬ所あるをしらずして、淫聲の神氣を害するものを好がごとし。

一。心友問。惟聖人然後踐レ形とは、人道を盡し得也といへるはいかゞ。　云。人は五行の秀氣、神明の舍、天地の德也といへり。これによくかなふを人道を盡し得といふべし。聖人あらはれて人の天地の德たることを知れり。是形を踐也。

一。心友問。孟子云。民爲レ貴。社稷次レ之。君爲レ輕。此言甚抑揚あるに似たり。一國の爲に一人の君を置て治しむる道理をしらで、君一人をたのしましめて一國の人民をくるしむる事の天道にそむける義を明さんが爲なるべし。　云。しかり。又先天の理也。天地ひらけて人あり。人の多きを民といふ。山川國土の神民の爲に財物を生ず。是神といへ共民に次の理也。民は其本を報じてこれを祭れり。人民の多き、これを治るものなければ亂る。故に君を立つ。是又國君といへ共民に次もの也。孟子先天の理によりていへり。後天よりいふ時は、君は上に位して威重あり。民は君にしたがふ者也。君民の爲に社稷をたてゝこれを祭れり。是後天用をなすの時也。

一。心友問。いにしへ聖主賢君史官を置て、主君の言行を初めとして天下の善惡を記さしむ。おもねりてほむると不レ能。いかりてそしると不レ能。のこさずかさねず。たゞありのまゝなり。後世惡逆の主無道の君の時に威權つよく、其惡を後世に傳へんことを恐れて、これを記す事をふせげり。

の中間清濁の異あるがごとし。天は無心無欲也。故に理氣はなるゝ事なくして四時あやまたず。人は有心有欲なるが故に、心法なきものはあやまちあり。聖人以下の人過なきことあたはず。よくあらたむるを善とす。心法は天命の德にしたがふ受用なり。人心天理にしたがふを道と云。則一陰一陽を道といふと一致也。人幼より善なる者あり、幼より惡なる者あるは、氣稟の自然なり。幼より惡なりといへ共、仁義禮智の性なきとあたはず。故に恥る所有、はゞかるところあり。この故に成長して人となれり。たえてなき者は一日も生べからず。水にごるといへども、ひきゝにつきてくゞるは水の性善也。にごるは水の本性にあらずといへども、水にあらずといふべからず。人の性は善也といへども、惡も又性にあらずといひがたし。赤子の時はまだ善惡の名なし。後來にごる事の多少萬品なり。終ににごらざるものは聖人也。少くにごりてはやくすめるは賢人也。多くにごれども力を用る事勇にして敏なるは、數年ならずしてすみ、ゆるきはをそくすめり。人生れて靜なる以上は說べからず。わづかに性をとけば性にあらずといへり。

一。心友問。樂める君子は民の父母也。たのしまざれば君子とするにたらずといへり。君子のたのしむところは何事ぞや。　云。程子云。樂は理にしたがふを樂とすと。此意味學びざれば不レ知。たとへば音樂を學ぶがごとし。淫聲はしらざれども聞ておもしろし。正樂はしらざる人聞ておもしろからず。學び得て後面白き所あり。學びて理を照す事明かなれば、自然に理にしたがふ事をたのしむものなり。音律耳に入れば自然に雅樂を好むがごとし。凡人は欲にしたがふを樂とおも

一躰異名也。誠は則善也。善は則誠也。今の人心の好み向ふところ利と欲とにあり。必しも利欲を主とせんと思はざれども、自然に利におもむき欲に住す。工夫力を費さずしてよくする者は、向所實なればなり。誠は天を以て根たり。固有の德也といへ共、志の向ところ實にこゝにあらざれば、思ふ時は存し忘るゝ時は亡するがごとし。工夫を用ひ力を付るといへども、存養しがたし。若心實に德を好み邪をふせがば、誠自然に立て善行はるべし。是を忠信を主とすといふ。忠信外より求め來て主とするにあらず。本よりの主也。今は人欲主となるが故に、忠信は心を起して存す。客來のごとし。故に程子云。不ㇾ之ㇾ東不ㇾ之ㇾ西是中也と。東西にゆかざるを中といふにあらず。東にゆくを必とせず、西にゆくを必とせず、義とともにしたがふときは中也。

一。學友問。一陰一陽謂二之道一。繼ㇾ之者善也。成ㇾ之者性也。云。太極時に動て陽生し、時に靜にして陰生ず。動靜は時也。陰陽たがひに其根をなす。太極の時にたがはず。太極もと無極也。故に是を道といふ。一陰一陽生じてやまざるを繼といふ。やまざる時は四時行はれ日月明かなり。善これより大なるはなし。造化の流行を見れば善なり。山下の出泉其始にごれるものなし。いまだ清濁をいふべからず。中間にごりをなすものあれば本源の水色を失ふ。こゝにをいて清濁の名出來ぬ。源出にたがはず、繼つげるものを清といはんがごとし。造物者人を成て人の性あり。萬物を成て万物の性あり。人は天地の心なるゆへに、一陰一陽の理全して明德備れり。其性にしたがつて動ときは、仁義禮智の性ありて善也。性の德を失ふ時は、不仁不智不禮不義にして惡也。水

れて、生死の憂を見てさめたる者まれなり。異學は惑に居て惑を解むとす。夢中に夢を見るがごとし。聖人の道は日月の明なるがごとし。まがふべき事なく、さとるべき事なし。故に孔子云。予欲レ無レ言。天何言哉。四時行焉。百物生焉。顏子默識して辯論なく、愚なるがごとくなるもの是なり。

一。理をいへば氣をのこし、氣をいへば理をのこす。理氣ははなれざれども言にのこす所あり。たゞ道といふ時はのこすことなし。理氣一躰の名也。其大に付ては空虛といひ、その小に付ては隱微といひ、其妙用に付ては鬼神といふ。天地位し日月明かに、四時行はれ万物生ず。みな道よりなれり。其眞は寂然不レ動無レ聲無レ臭也。これを未發の中といふ。天下の大本たり。道は自然にして窮なしといへ共、陰陽の度日月の寒暑晝夜の變常あるは、無極にして太極の理也。中庸の名ありて心法の受用すべき所なり。しばらく形ある物に付て見べし。不レ發不レ動者は物の根と成躰となれり。木の根土の中にかくれて花實靑紅の變をなす。其根土中より出る時は其化やむ。人の背不動にして四肢作用の躰たり。万事皆しかり。道は寂然として不レ動。隱微にして不レ發。この故に天下の根本也。物に躰してのこすべからず。道の不レ動は形の不レ動のごとくならず。至神至動也といへ共、無欲にしてあらはれざるをいふなり。

一。心法は心の向ところを愼むべし。向所實なる者は自然にいたる者なり。孟子性善をいへり。善は內より出るもの也。故に邪をふせぐ時は誠をのづから存す。善といひ誠といふ、皆性の德なり。

虚なし。其言の出る事を難ずる所也。好人は言すくなし。其行ふとのかたきをしればなり。故にいへり。朧々たるは其仁也と。厚をいふなり。剛毅木訥の仁に近きも、質朴遲鈍にして物に屈せず終にやまずして發する所あれば也。

一。君子之道は費隱。費はたからとせざる也。たからとせざるはおさめかくさゝる意なり。君子の道はあまねく敢てかくす事なし。しかれ共言語にのべがたき所あるは隱也。君子かくさざれどもかくれて發せず。只入德の人默して知べし。

一。鳶飛魚躍。鳶魚は無知也。故に天機にうごく。人は知ある故に、私心天機をふさぐ。程子云。必有〻事勿〻正の意也と。必有〻事とは、人は人の性命あり。性命にしたがふは必有〻事也。勿〻正とは私心あるべからざる也。人性知あり。故に深く天機に通ず。活潑々地なり。

一。心友問。佛氏は死を說て生を不〻說。孔子は生を言て死を不〻言。儒佛のたがふ所こゝにあるべきか。　云。死生一貫也。孔子何ぞ生を言て死をのこし給はんや。人の死を問は本をすてゝ末による惑あるによりて、其本に達する時は末をのづから知べき理を敎給ふ也。聖人の心に生死なき事、常人の心に晝夜なきがごとし。晝夜死生一貫にして二あらずといへ共、常人は晝夜を知て生死をしらず。これ晝夜も亦不〻知也。しかれ共疑ひなき者は、古今不〻惑の常によるのみ。堯舜の民は生死も亦かくのごとし。佛氏は生死の理にまよひて生死を恐るゝが故に、生死を說ことやまず。聖學には生死の惑なければをそれなし。故に死生を不〻說。和漢ともに三千年來、生死に恐動せら

のごときはにくからず。上より盗をなさしむるがごとし。政なく教なければ、いたづらにくらす者おほし。この故に貢かろく地ひろしといへ共、末々の子弟は盗をするにいたる者なり。知行を取人の子弟だに强盗を好む者あり。况や民をや。此俗長ずる時は亂世の端をひらくもの也。

一。學友問。間思雜慮はらへども生じて制しがたし。　云。間雜の二字を妄とす。思慮は終べからず。たゞ邪なからんのみ。程子云。人は活物也。動作あるべし。思慮有べし。邪を閉ぐ時は誠をのづから存す。則忠信を主とすといへり。誠は無欲なり。思ともなく爲ともなし。寂然不動にして感じて天下の故に通ず。今の人は一己の人欲身の主たり。故に思と天理ならず。動と義理ならず。思爲共に皆妄也。妄の主をかへずして其末をふさぐとも制し得べからず。間雜をはらふの念又心上の累をますべきなり。しかじ有念無念ともに忘れて誠を思はんには。

一。心友問。居レ易俟レ命の義いかゞ。　云。富貴貧賤安靜患難死生壽夭みな命也。俟は客をあへしらふがごとし。心惑なく願なく安易の地に居て天命の客をあへしらふ意也。死生も則客也。故に朝に道を聞て夕に死すとも可なるものなり。正叔云。吾日履二安地一。何勞何苦。他人日踐二危地一。此乃勞苦。凡人は苦を以てたのしびとす。これを惑といふ。日々にさがしき所を行て幸を求む。命のいたる事を不レ知。柔弱の者はさし當りて憂哀し、勇强の者はせまりては是非なしとして亡ぶ。ともに心のくらき事は一なり。

仁者其言也訒。言て不レ行は虚也。君子の恥る所なり。仁は實理也。故に仁者は言行相かへりみて

レ知者は、國郡の主として天下をすくはんとを願ひ、士庶人として國にをよぼさん事を欲す。却て倫をみだり仁の累をなす者あり。これ不知なり。

一。心友問。古人云。忿慾忍與レ不レ忍。便見ニ有レ徳無レ徳と。これ小徳の者の事なるか。　云。有徳は見所大なる故に、世事かろくして心にかゝらず。故にいかりなし。心に眞樂あり。故に世間の願ひなし。凡人は心せばくしていかりあり。道徳の樂を不レ知して、欲ある者を以て見る時は、忿慾の堪忍しがたきをよくしのびすぐすと見べし。

一。吾人徳をなさん事を思はゞ、日々に善をせむのみ。一善益ときは一悪損ず。日々に善をなさば、日々に悪退くべし。これ陽長ずる時は陰消するの理なり。久してをこたらずば善人とならざらんや。名は實の聲也。又善人の名あるべし。實あり名ある、これを徳といはざらんや。人利に入者ハ義をなみす。義を尊ぶ者は利をいやしむ。天理人欲ならびたゝざるが故なり。

一。いにしへ王者の天下をたもち給へる時は、王城といへども池堀なく要害せず。是民を保じて王たり。徳治の遺風を見べし。武家の代となりては、力を以て天下をとれり。故に力を以て有てり。城池をかたくして一家を守るの爲なり。民を外にして不レ保。是故に力衰る時は亡べり。

一。朋友問。關東には年貢十一よりもかろき所あり。然れども民盗をする者多きは何ぞや。　云。是も徒善は政をするに不レ足といふものなり。日本もむかしは農兵なりし故に、皆十一の貢をとれり。十一よりかろきは其後開きましたるものなるべし。飢寒に及で盗をするは凡人の常なり。民

僞をわすれ、徳にならひて善を常とす。これ鬼神と其吉凶を合するなり。古今邪僞凶亂のおこる事、皆不ㇾ愼よりなれり。故に敬は百邪に勝ともいへり。況や有德の君子上に在して無心の恭敬行はるゝ時は、人心の萬惡消し山川の衆邪滅す。知謀勇力ある者は、其才を禮樂弓馬書數に用て、天下益文明に武威彌盛なり。故に云。古之强有ㇾ力者。將ニ以行ㇾ禮。今之强有ㇾ力者。將ニ以爲ㇾ亂。

一。心友問。よく近くたとへをとると云ことはいかゞ。　云。これ事にあらず心にあり。人耳目口鼻四肢を取てたとへとせば甚近しとせん。其己に有するがためなり。それ仁者は天地を一身とし、天地の間の萬物を四肢百躰とす。今の人の一身を見がごとし。外より取來てたとへとするにあらず。この故に萬物を取てたとへとすれども、世人の一身の中にたとへをとるよりも親切にして、人の心に通ず。夫人己が四肢百躰を見て、爪皮にいたるまで愛せずといふことなし。疾痛快樂その心に切なり。たゞ手足しびれなへたる人のみ、うちつみても其心をわづらはさず。手足我にありて疾痛あづかりしらざれば、是を不仁の病といふ。人の物我のまよひありて他人の困苦に其心をうごかさゞるたとへとす。聖人は至神也。故に天地を父母とし人民を兄弟とす。不仁の人は父母兄弟の困苦だに己が四肢のごとくならず。この故に恩を不ㇾ知者あり。　問。今の時天下困苦の人多し。これを以て一々其心を累さば、快樂のいとまなからむか。　云。義は仁の時なり。天下の主は天下の困苦を以て其心をいたましむ。故に困苦なきの仁政あり。國主郡主皆しかり。士庶人は其一家の困苦にあづかるべし。是其分によりて仁のほどこし異なるは義也。仁を好で義を不

集義和書卷第十五

義論之八

一。心友問。篤恭而天下平。修レ己以敬。以安二百姓一といへり。恭敬のみにして天下國家を平治するの功をなすべきことは迂遠ならずや。云これたゞ誠のみ也。誠なる人は其容躰自然にうや〳〵し。上たる人誠の德篤して下にのぞみ給ふ時は、天下の人天性の誠を皷舞せられて、不レ知不レ識禮儀あつき風俗となつて、愼みうや〳〵し。刑法をたてゝおそれしむる者は、まぬかれんとして恥る心なし。心ありて戒愼する者は忘るゝ時多し。道德によらずしてつとむる者に終なし。才知を用て合する者は、一旦利ありといへ共、人民もまた知謀を起して僞生ず。君子は明知にして無爲を以て無事也。　問。大人は天地と其德を合せ、日月と其明を合せ、鬼神と其吉凶を合すといへり。これ恭敬の德にかなふべきか。　云。上下恭敬に一なる時は、氣和せずといふことなし。天地をのづから位し、萬物をのづから育す。人民春風和氣の中に遊で、其利を利とし其樂をたのしめり。天尊地卑して、乾坤定四時行はれ萬物生ず。無爲にして成。これ篤恭にして天下平なるの至極也。天地と其德を合する也。日月の道は貞明也。至誠なるものは常久にして不レ息。これ貞也。誠なる時は必明也。則日月と其明を合するなり。鬼神は福善禍淫に誠也。故に不レ怒して威あり。君子善を好に誠ありて、惡をにくむに實也。其信人民の心に感通す。故に天下惡をする事を恐れて、然

をかうぶり伐べくして伐のみ。時の勝負を必とせず。後の利をはからず、害をさけず。故に悪人亡て後は、紂が子は商の孫子なれば、立て退き給ふのみ。天下これを主君とせば、ともに仕給ふべし。天下武王を主君とするは、天の命ずるところ也。又辭せず。

集義和書卷第十四終

知を重ずるとは何ぞや。　云。人君の國を治め四海をたもち給ふ事、知を以て主本とす。知明かなればとりしめありて事可にあたる。故に太平の時は無事にして治り、事ある時は士民皆主君の下知を信ず。生付仁愛勇强にして一旦人にほめらるゝ人有といへ共、知明かならざれば命令可に不ㇾ當。故に法令數多に成て事しげし。人あまねくしたがひがたし。しゐて立むとすれば人をそこない亂をなす。立るとあたはざれば法令出てもなきがごとし。人皆上の下知を不ㇾ信時ありて、國やぶれ天下亂るゝもの也。夫神の代人代の其むかしは、治躰に通じ給ひし故に、鏡璽劒を以て知仁勇の象とし、知を主とし給ひし也。知の實は人を知これ也。人を知事は帝堯をもつて師とすべし。

一。心友問。紂王が亡しことは自の大惡虐を以て也。商の天下をたもてること六百年なれば、天下皆代々の臣也。宗族外戚かぎりなし。紂亡びて惡人だになくば、四方皆商の子孫を君とすべき人情あり。何ぞ同輩の周を君とせん。しかるに武王紂を亡し給ひて、其子を立置大國を與へ給ふとは、凡知の及べき所にあらず。天命を知給へば也。敵の子をたづね求て殺すは、子孫のため害を除くはかりごとなれ共、是によりて却て天命をそむく理をしらず。敵の子を立をくは心もとなき樣なれど、是によりて天命にかなへば却て長久也。誠に天命の歸するところは、人力の及ぶべきにあらず。武王は聖知にてよく命を知給ふ故なるか。　云。尤この理武王の心に明白也といへども、是を事とし給ふにはあらず。如ㇾ此の天命をわきまへて道を行ふは吾人の心術也。武王は天命

一。心友問。書簡中主ニ忠信一は本躰工夫也、誠意は工夫本躰也と候は、陽明子の學術異學の病あるに似たり。如何。　云。予も此語意不ニ中和一とおもへり。然れども義にをひて害なきが故に改めず。忠信は人の人たる根本の德也。誠は天の道也。則本躰也。誠を思ふは人の道なり。則工夫也。主ニ忠信一は誠を思ふの義なり。誠意の誠は意を誠にするなれば工夫也。然れども意終に誠に歸するときは誠は本躰也。故に工夫本躰といふなり。

一。心友問。怒思レ難と。利害をはかるに似たり。いかむ。　云。怒の火氣の中には、言を過し行をあやまり、後悔の難あるものなり。甚しきはあだを得に及べり。君子は懷レ刑　小人は懷レ惠の類なり。惠をおもふは利害の心也。刑をおもふは君子孝子の愼み也。怒て難を思ふは、深淵に臨ては落入むことを愼の道理也。小人は甚難を恐れさくるといへども、愚にして火氣におかされ、其難を前に辨へず。君子は義に當ては難をさけずといへ共、自まねく禍をばつゝしみさくるなり。火氣うすき故に心明にして後の難を前に知也。故にいかれ共難あらず。樂て不レ淫哀て不レ傷に同じ。

一。心友問。舜の怨慕は註に非ニ怨ニ父母一といへり。孝子のうらみありと聞ときはいかむ。　云。則孝子の怨なり。常人の父母をうらむる心にてはなしといへども、父母を怨にあらずとはいひがたし。二三歳の幼子の母にうたれて、なきながら父母をしたひて跡につき行こゝろ也。

一。心友問。神代の三種の神器は、知仁勇の德の象とうけ給はりぬ。内侍所を第一とし給ふが如し。

來ることあれば、不屆なりし者にても、重寶なる者なり、目をかけ給ふべしと返答ありし也。あしきとは身におぼへあることなれば、感淚をながし悦びに思ひ、それよりは古主の言葉の相違なき樣にとたしなみ、みなよき奉公人に成ぬれば、其言もむなしからずと人のかたり侍りし。人皆父母妻子あり。一家を助立るのみならず。不善人を善人とし給へり。それ人の善惡を記すは、其役人にあらざれば無用の事也。されど如ㇾ此の善人ばかりは、その姓名を聞て記しをきたき事也。九州の郡主にて十萬石ばかりの人とおぼへ侍り。まことに有がたき好人也。罪の輕重を論じて、理屈を以ていはゞ誰かものいふ人あらん。善惡賞罰の理にしたがはんよりは、如ㇾ斯の大德こそあらまほしく侍れ。天地の間に生れ出て、數十年のつとめ、おなじ一家を養育すべき者をかよひて、世のすたり者となすとは、不便の事ならずや。なを孟子につまびらかなり。士に本よりの高下なし。上下は一旦の命也。唐日本ともに同じ。

一。舊友問。平の清盛常盤が色に迷ひて敵の子を助けをき、子孫の憂となれり。其外如ㇾ此のためし多し。よくたづね求て殺すべき事なるか。　云。凡人より見時はしかり。天命を知人よりみればしからず。色にまよはずして人の根をたつべきよりは、色にまよひてなりとも助たるはまされり。義朝の子を不ㇾ殘殺したりとも、清盛が惡虐平家の奢にては、外より敵おこりてほろぼさるべし。平氏天命にそむきてみづから敵を生ずるなれば、誰といふとはあるまじ。迷ひてなりとも助置て人の後をたゝざる故に、平家のほろぶるにも子孫こゝかしこに落とまりて今にたへざる也。

一。同志の人々の書を讀こと、心を用て書を讀か、書を以て心を讀か。多くは書を本として心を末とし、書の文義を解せんとなて心をわするゝならん。陽明子是を食にたとふ。食は此身を養ふもの也。食しおわりては消化すべし。若食積て消せざれば病をなす。後世博文多識胸中に滯る者は食傷の病なりといへり。故によく書を見者はかたはしより解せんとせず。文義にくるしまず。只書によつて自己の心を說得て、悅ぶところを樂む也。知得れば本知べきことをなし。さとり得れば本さとるべきことをなし。知覺は知覺なき所に至らんが爲也。しかれ共不レ知ときは論埋す。問。先言往行を識して德をたくわふるといへるはいかむ。云。本立ときは知識たすけと成べし。末によるときは知識累をなす也。此身を養を以て主意とする時は飮食みな助けとなり、味を好むにながるゝ時は病を生ずるがごとし。

一。舊友問。今の世にかまひといひて、一代奉公をおさへて先々をふせぎて困窮せしむることは、或は死罪流罪の罪につぐ者なれば、尤とわりとは思ひ侍れども、君子を諸侯にしては如何はからひ給ふべきや。云。此習久しして深ければ論じがたし。しかれ共君子までもなく。ちかき世に或國主の仁厚寬裕なるありしが、他家ならば切腹もさすべき罪あるものにても、我彼者になりかわりて見ば必ずいひわけあるべし。されど主君子に對していひわけは成がたきもの也。又死をおしむにも似たれば、默して切腹すると見へたりとて、ゆるして扶持をばなし給へり。又不屆成事にて立退たる者をも、先々をばふせぎ給はず。他家に扶持せらるゝ時、其主人より子細なき者かと尋

也。忿懥憂患好惡恐懼の情日々に滋長するは、放舍亡失のしるし也。　問。四端も亦情ならずや。本心の無思無爲寂然不動の常躰にあらず。自然の感はさもあるべし。しげきを以てよしとするは何ぞや。　云。天理人欲並不ㇾ立。心天理を主とする時は人欲亡失す。是を操存と云。心人欲を主とする時は天理亡失す。是を放舍と云。天理存する時は日夜天理の感應のみ。故に萬物一躰の理感じて惻隱の情發す。義の理感じては羞惡の情發す禮知も又しかり。是皆眞實無妄の天理也。これを天理流行と云。則無思無爲寂然不動の常躰也。思無邪を無思と云。私己の動なきは無爲と云。天理の寂然不動は有事無事を以て二にせず。陽明子云。鐘未ㇾ扣時。原是驚ㇾ天動ㇾ地。既扣時也。是寂ㇾ天寞ㇾ地。　問。天理を主とし人欲を主とす。心の外に天理人欲と云ものあるがごとし。いかん。　云。此心の外に天理なし。人欲も亦外ならず。たとへば目のごとし。喜悅する時の眼色と忿怒する時の眼色と、眼色各別也といへども、同じ目なるがごとし。たゞ心はおもむきを以て天理人欲をわかつのみ也。心裏に向ひ性命の本源を不ㇾ失ときは天理を主とすと云、心表に向ひ末にしたがふ時は人欲を主とすと云なり。　問。心内外なし。何ぞ裏に向ふといふや。　云。本より心に内外なし。内外に出入するをいふにあらず。たゞ心はおもむきを云なり。　問。七情は聖人といへどもなきとあたはじ。放舍のしるしとは心得がたし。　云。たゞ聖人のみならず天地といへども七情あり。凡夫といへども又四端あり。凡人の四端に百姓日々に用て不ㇾ知と云もの也。聖人の七情には、形色は天性なり、ひとり聖人にして後よく形を踐べしと云ものなり。

とれり。しかるに歌によむ時心あるといふはよく、心なしといふはあしきはいかゞ。　云。歌に心あるといふはなさけ有といふたぐひにて、仁愛有物に心得て、平人ならざるをいふ成べし。心なきといふは何をもしらぬ賤男賤女に同じき者にて、なさけ人といふ義成べし。聖人に無情といへるも情なきにはあらず。天地の四時の色のごとく理に和して氣のうごきなきをいふなり。無心と云も至公にして私心なきの義なり。

一。或問。本躰は空々寂々たり。感あるべからず。わづかに感ずるは是氣也。惻隱の心も赤子の井に入など見て發す。物の感ずることあれば應ずる也。感應は陰陽なり。理といふべからず。仁義禮知ともに氣の靈覺也。本然は陰陽感應をはなれたるものにはあらずや。　云。本躰の理は應ぜざれども時ありて感ず。太虚無一物の時何者か來て感應すべきや。本理の無レ聲無レ臭は寂感也。ひとり感せずば天地も何によりてかひらくべきや。感の聞べく云べきは氣也。本躰の感は見べからず聞べからず。その跡によつていふのみ。わづかに感應をいへば本躰にあらず。天下の故に通ずる所に付て其本を知のみ。故に感と云。氣にわたりたる所を以ていへるはあやまり也。又本躰に感なきと見も本躰を不レ知也。至神は神ならず。

一。心友問。操ときは存すといへり。とるといふ時は一物有がごとし。いかゞ。　云。古人の云。欲すべき物は是形色の上にあり。留藏すべき物は氣象の上にあり。欲すべからず留藏すべからざる所において操といひ存すといふ。惻隱羞惡辭讓是非の四端の發見し著るゝ事多きは操存のしるし

窮の迹をしらず。戒愼恐懼して獨を愼むも則念也。君子は無欲を以て靜とし、好惡なきをもつて無念とす。

一。心友問。古人のかきをきたる書を見れば、博文にして約禮を說。人情時變に達して甚睿明也。其世に有て直談せし人のいへるは、書にて見たる樣にはなくて、あやしきがごとくなる人なり。厚勤篤實の君子にあらずと也。疑ひなきとあたはず。　云。尤さあるべし。天の物を主ずる二ながら全きとなし。厚勤篤實にして人の見て尊信美稱する人には睿明の才すくなし。睿明廣才の者には厚勤篤實の質有がたし。人見てあやしといへる所、則睿明の天質につきたる疵也。小兵美男の人に大勇あるがごとし。大勇のきこえありて其人を見ればあやしきがごとし。我心をもつてむかへて人をみるが故なり。神靈ある名珠に疵あるがごとし。石にはなべて此疵あれども疵とせず。三なるが故に瑕とす。睿明の人其疵をおほはず。君子の風をつくらざるところ、則君子なる事をしらず。平生しられずとも、歲寒して松の紅葉にをくるゝことあるべし。この故に人をみると古よりかたし。たゞ聖人にして篤實睿明備るべし。それだに十一人の列聖同坐し給はゞ、其氣象同じかるべからず。況や大賢以下の人は、恭敬篤實にしてうちみるより君子とおもはるゝ氣象の人には、天下百千歲の習惑をひきかへすほどの睿明廣才はなきもの也。それほどのすぐれたる英才は必ず恭敬篤實の所レ不レ足也。然れども心の無欲淸淨なる事はかはりなし。

一。學友問。天は其理萬事に應じて無心也。聖人は其心萬事に順にして無情也。無心無情はよきに

し。盗をしたる夢もなし。是何の工夫何の學に得たるや。此一事には欲惑の病なければ也。故に一分心を盡せば一分の明悟安樂あり。明悟安樂ともに性の妙用也。性を盡に從て生ず。明悟安樂を求めんがために學ぶ者は私欲なり。私欲を以て道を得べきことかたし。心はこれ活潑々地生々不息の理也。是故に心の官は思といへり。私欲の累除て天理流行する時は、思慮皆其官を得。これを一致百慮ともいふ。清水濁水同く一河の流なるがごとし。思慮はたとへば水のごとし。間雜は濁のごとし。濁をいとひて水をふさがむとする共、源ある泉なればとゞむべからず。間雜を忌て思慮をやめんと欲すとも、心の活潑流行なれば絕べからず。源泉ながれて不ㇾ息ときは、まじはりたる濁は一旦の事にて根なきものなれば、終に本源の水計に成て清也。學者も又期する所なくして實をつとめてやまざる時は、間雜の妄は一旦の迷なれば、次第にのぞき去て心の本然を得べし。天理人欲並不ㇾ立といへり。吾子私欲を心源として、其心源より出るものを去むとするは惑也。天理を心源とせば制せずとも間雜除べし。陽明子云。養生は清ㇾ心寡ㇾ欲を要とす。養生の二字自私自利。此病根東に滅して西に生ぜん。清心寡欲終に得べからず。又云。寧靜を求むと欲して念生ずることなからむと欲す。これ自私自利する意必の病也。是以て念いよ／＼生じていよ／＼寧靜ならずと。今吾子念をはらひ去て無念なる所を本躰と思へるは不可也。これ却て私念死躰也。維天之命於穆不ㇾ已といへり。天機活潑しばらくもやむべからず。故に人念なき時なし。たゞ正しからんことを欲するのみ。思無邪の三字心法を盡せり。言近して旨遠し。故に學者ゆるがせにして無

者有。其心を察して助け侍り。今は世間無事なる故に、理屈事にして人を愛せず、罪過をもとめ出し理屈を以て穿鑿せば、直なる人は多くは侍らじ。世間さはがしく國家あやうき時は、用にも立べき者をば、何事をも見ゆるし、言葉をやはらげて頼むものなりといへり。俄にひきかへてはみぐるしかるべき事をおもへば、かねて有事無事一ならんことをねがひ侍り。

一。心友問。間思雑慮の妄念はらへ共跡より生じて克去と成がたし。いかなる工夫にてか此心魔を降伏すべきや。 云。吾子何の爲に此妄念をいとへるや。 云。悟道を得て惑なく心樂を得て苦なからんことを欲す。 云。何ぞや吾子が悟道と云は闇夜の明たるが如く悪夢のさめたるが如くならんと思へるか。 云。しかり。 云。何ぞや吾子が願へる心樂といふは。世間諸の苦痛去て心常に快樂ならんと思へるか。 云。しかり。 云。それ諸の惑諸の苦は皆私欲より生ず。吾子凡根の私欲を秘藏して、私欲より出るものを去とも、終身功なけん。佛者の今生やすからざるが爲に後生を願がごとし。其心則地獄なることを知ざる也。貪欲を本として願へばにや、後生を願者は欲ふかく悪行なる者也といへり。世間利とする者は終に道學をきかざるの人也。吾子苦惑をさとれることは平人に異なるが如くなれども、凡心の私欲利害を帶たることは同じ。夫欲と惑とは一病兩痛にして、間思雑慮の源也。此源を不絶して此間雑を克治せむとす。凡心を以て俄に聖人の無思無爲寂然不動感じて通ずるの位を望めり。是義を以て襲てとると云もの也。身を終るまで得べからず。吾子恒の産なけれ共恒の心あり。盗をせざるの事にをいて精義入神。故に盗をすべき間思慮な

し。晝夜の道とひとしき理はさとれり。しかれ共其心死にあたりては日暮てねると同じくおもふことかたし。爰にいたりて毫髮もいさぎよからざる所あるは、全躰にをひていまだ融釋せざる所ある故也。さればいまだ至樂に至ることあたはず。世間死をよくする者多しといへども、或は名により、或は學見により、心を起して强て安ずるなり。晝夜の道に通じて知者すくなし。

一。心友問。世の學者の云。人死して精神なし、父母先祖を祭といへ共其祭を受べき者なし、たゞ孝子の心の死に事ること生に事る如くするのみ也と。誠に我人共に死しては何かあるべき。　云。如ㇾ此見て悟道せばまことに易き事也。たゞ人心のみを見て此見あり。人心は形氣の心也。此形なければ此心なし。吾人の本心は理也。理は無ㇾ始無ㇾ終。生々して不ㇾ息、則性則心也。君子は此理明らかにして存す。死生を以て二にせず。人心も天理を以て動ときは、形色共に天性にして形をふむ者也。亡びざる者は常に存し、亡るものは今よりなし。生死を以て有無をいふ者は道を不ㇾ知なり。

一。舊友問。貴老いにしへ仕官の時、罪人あれども吟味もし給はず、殺すべき者をもたすけ給へり。和に過たると申者あり。　云。野拙はむかし風にて當世の風にはあひ侍らず。むかしの武士は人を大切におもひて理屈をやはらげ侍れば、罪科に行ふべき者をも又よき所あるものなれば、おしみてかくし置、我と悔さとりて改めんことを欲せし也。世上の理屈をもつては殺すべき者なれども、其身に成て見ればことはりもありながら、命をおしむ樣なるゆへに、默してことはりをもいはざる

發の中にあらず。古人靜を主とするの功夫は、平生義にうつり理にしたがつて私なきを無欲とす。無欲なれば心自然に靜にして、未發の中存す。此未發の中は、動靜を以て損益なし。靜を好むは動をいとふ心あり。理にしたがふこと專ならず。物にさへらるゝは眞の靜にあらず。程子定レ性を云。定は心の本躰也。動靜は遇ところの時也。王子云。精神道德言動大方收歛を主とす。發散は是不レ得レ已也。天地萬物みな然り。此說主靜の功に益あり。人常に不レ得レ已して應ずるときは、あやまちすくなし。心無欲にして行無事也。

一。心友問。俗樂眞樂の分いかむ。云。憂苦を去て悅樂を求るは俗樂也。天地の理陽のみにして陰なきことあたはず。人生の境苦樂たがひにいたれり。苦をいとへども去とあたはず。樂を求れども得ことあたはず。たま〳〵樂を得ても樂中に苦を生ず。況や患難の來ること冬の寒氣のいたるがことくにしてふせぐべからず。故に俗樂は佛家にいへる水の泡のごとく電の影のごとく幻のごとくにして、其有無を定がたし。眞樂は悅樂憂患を以て二にせず。憂べくして憂といへども、憂心中人欲のまじはりなければ其樂を改めず。悅ぶべくして悅ぶといへども、其喜心中人欲のまじはりなければ、樂て淫せず。怒るべくしていかるといへ共、火氣の動なければ心躰廓然太公にして本躰の正を不レ失。たとへば外人の相爭相鬪者を見がごとし。其非道なるは我心にも怒る。いかるといへども我にあづからざれば心不レ動がごとし。病苦といへ共病の爲に心躰をくるしめず。常に快活の本然を不レ失。此心の不レ動ところ則樂也。ひとり死生の理にをひて聖學の徒大躰まどひな

とするは、三王の時に因て治を致が如なると不能。　云。無爲にも又眞あり跡あり。時に因て治を致して近者いとはざるは則無爲なり。假に太古淳朴の跡をかへし行はむと欲すとも得べからず。勢ある人しゐてなさば大に害あるべし。天下の大亂は虛文勝て實行衰るによるといへども、事をもつて儉約朴素にかへさんとするは、たゞ其まゝの虛文不實にして、すてをくにはおとつて、私いよ〳〵すすむべし。事の多少博約にかゝはらず、唯心の誠を立て天下誠を尊ぶは、太古無爲淳朴の眞ならむ。風俗は漸をもつて復して害あるべからす。

一。心友問。下學上達は下人事を學て上天理に達すといへり。いかむ。　云。しかり。陽明子云。敎へて學べく功夫を用べき者は皆下學也。上達は下學の裏にありと。耳目の聰明、說解の精微、心思の功夫は人事也。此人事の中より、耳目言說心思の人力に及べからずして自然に得者あり。これ則上達の天理なり。下學のつとめの誠あるによつて至べき所なり。

一。心友問。知行合一といへども、知て不行者多し。知ことは易く行ことは難し。されば知行合一とはいひがたからんか。　云。王子云。知は行の始なり行は知の成也と。此說易簡にして得たり。知といへども行はざるは、始あらずといふとなしよく終あることとすくなしといへるものなり。知こと實ならざるが故に成ことなき也。

一。心友問。周子靜を主とすといへり。心を存すればをのづから靜かなり。自然に未發の中立がごとし。いかむ。　云。靜によりて靜を求るは氣の靜也。今の人氣を定得て存心とおもへるは。未

一。心友問。陽明子云。唐虞以上の治は後世復すべからず。三代以下の治は後世法とるべからず。惟三代の治可レ行。しかれどゝ世の三代をいふ者、其本を明にせずして其末を事とす。又復すべからずと。三代の法今の時に叶侍るや。　云。萬世師とすべく他方法るべきは堯舜の治也。禮はまだ備らずといへども、渾然として存せり。篤恭にして天下平なり。易簡の善至德に配し中和を致して、天地位し万物育するの至也。子思云。仲尼堯舜を祖述し文武を憲章す。孟子云。堯舜を師としてあやまてる者はあらじと。唐虞三代共に其本を明かにする時は一也。其末を事とする時はみな復すべからず。三代以下は道行れざればいふにたらず。世の三代をいふもの多くは周の博文の末を事とせり。夏商をまじへ時に應ずるをとれる者すくなし。孔子云。夏の時を行へ般の輅にのり周の冕を服せよ。樂は則韶舞をせよ。これ孔子の堯舜三代の法の其時に行ふべきものを取給ふ意なり。聖人の法は春夏秋冬の時によりて衣服飲食動作の異なるごとし。久ければ弊あり。故に時に因て損益すべし。又曰。麻冕は禮也。今純は儉せり。吾は衆に從と。緇布冠は三十升の布を用ること禮の法也といへども、今の人の手になりがたし。故に世人これを省約す。孔子もしたがひ給ふ也。三代の禮といへども、今の世の人情時勢氣力に叶がたきものは用べからず。萬々歳といへ共、日本の他方といふとも、祖述して師とすべきは唐虞の治也。孔子云。無爲にして治るものは其舜か。黄帝堯舜衣裳を垂て天下治。　問。陽明子云。行ふに太古の俗をもつてせんと欲するは老佛の學術也と。まことに反レ朴還レ淳ことは、萬事を放下せずは叶べからず。專無爲を事

くといへるものは、しばらくたとへをとれるなり。故に云。心の虚靈知覺は一のみと。性命の正に本づきて天理の上より知覺する時は、これを道心と云。形氣の末によりて知覺する時は、これを人心と云。尤人心を人欲と見も、所によりての文勢也。堯舜傳受の人心道心は、天理人欲をさしての給ふにあらず。人欲なれば危といふまでもなく惡也。危といへるものは今あしきにはあらざれども、あしくなるべき勢をいふなり。人心は此形の有間形につきて知覺運動するものをさして云なり。寒暑をしり飲食男女を知所也。これを人欲と見は異學に似たり。人欲にはあらず。義理の上より知覺して、寒をふせぐべき理に叶てふせぎ、暑をさくべき理に隨てすゞしくし、飲食すべき理ある物を飲食し、男女も禮ありて相親む。是みな道也。何ぞ人心を人欲とせん。寒暑其分にこえて温涼を求め、飲食己に得ざる物を飲食し、男女禮をまたず理に不レ叶して相交は、人欲の私なり。此形ある間は形に付たる生欲あり。此生欲の好む所は實にして虚ならず。求めに應ずる物も又形色あり。物あれば則あり。故に此生欲の節に中るべき精靈の照しは、微妙にして聲色なし。精一の工夫おろそかなれば存しがたし。精といふは心を神明にして、相火たかぶらず、氣にごらず、清淨の眞樂存す。故に形氣の欲にながれず。一は一團の天理のみにして形をふむもの也。二心なく二道なし。陽明子當世の學者の心理を二にして外に向去の病を格すに急なれば、朱子の苦心を察し意をむかへて解にいとまなく、時の弊によりていへる成べし。又程子の人心を人欲といへるは生欲の心なるべし。かろく見て可也。

ず。河海をおさめてもらさず。廣厚の德ありといへども、平地何の見べきことかあらん。世中少し學知有者大に衆に異なるが如くなるは、庭前築山のごとし。そのすこしきなることをしるべし。

一。心友云。人死して其神天に歸すといへり。何の精神か一物と成て天に歸すべき。魂氣游散し魄躰蟬脫のごとし。空々寂々たり。たゞ此空のみ本來の常躰ならずや。　云。しかり。世人形躰の上より見を立るが故に、生死を以て二にす。この故に天に歸するの說あり。吾本不來天と吾と一也。何の歸するといふことかあらむ。吾心の靈明、則天地の萬物を造化する主宰也。則鬼神の吉凶災祥をなす精靈也。天地鬼神の精靈主宰なくば、吾心の靈明もなからん。吾心の靈明なくば、天地鬼神の靈所もなからん。今死躰の人は精靈游散す。死躰の者の天地萬物、いづれの所にかあるや。故に君子大をかたれば天下よく載ことなく、小をかたれば天下よく破ことなし。

一。心友問。朱子道心常に一身の主と成て人心每に命をきくといへるを、陽明子二心也といへり。程子の人心は人欲也道心は天理也といへるを引て云。天理人欲並立ず。何ぞ天理主と成て人欲の命をきくといふことかあらむと。程子朱子王子いづれも賢者なり。他の文義にをひてはみる所かはり有共、人心道心天理人欲の所に如レ此のたがひは、あるまじき事ならずや。　云。尤心は一也。人心正を得ものは則道心なり。二あるにあらず。惣じて語を解こと、古人の意をむかへて見ずして、言語文章のみをもつてする時は、古人の苦心かくれて見へざる故に、非をあぐること有。今愚朱子の意をむかへて見に、人心道心二ありとするにはあらず。道心一身の主と成て人心命をき

しかれば樂ひろく成て始て公家の公家たる位もしり侍ぬべし。しからざる人はたゞいらざる物にがらそなへ物とならでは思はず。其上何程すゝめなさしむる共ひろくは成侍らじ。至理の寓する物にておはき聲なれば、俗と近きもの也。つくしごとさみせん能拍子などのおもしろきを捨て、おもひつかれぬ樂を好む人は、百千人に一二人也。異なる志ある人ならでは好まず。

一。心友問。いかなるをか是中和とせん。　云。いひがたし。過不及を知ところ今日の中和也。亦和を致して天地位し萬物育すといふものは、德の至り也。

一。心友問。天地萬物の始、十二萬歳の數、何をもつてかこれをしるや。　云。一晝夜則十二萬歳に配す。陽明子云。夜氣淸明の時、視ことなく、聞ことなく、思ふことなく、作ことなく、淡然平懷なるは、則是伏犧氏の世界なり。平旦の時神淸く氣朗にして雍々穆々たり。則是堯舜の世界也。日中以前禮儀交會氣象秩然たるは、則是三代の世界也。日中以後神氣漸く昏て往來雜擾するは、則是春秋戰國の世界。漸々昏夜にして萬物寢息し景象寂寥たるは、則是人消し物盡る世界。學者良知を得て氣のために亂されずば、常に犧皇已上の人とならんと。晝夜の道に通じて死生をしり、死生に通じて天地の有無を知べし。有形のもの何ぞ常なるべき、我無に歸する所、則天地の終也。

一。心友問。聖賢君子は大に人に異なり。しかるを其世に人知ざることあるは何ぞや。　云。君子は富士山のごとくならんとおもへるか。富士高しといへども平地にしかず。萬山を戴て重しとせ

ずとも孝子貞女忠臣義士等の故事をもつて操とし能として民俗の男女に見せしめば、其本心の發見をもよほし善心をひらきみちびくべきか。　云。道なくしてこれをなさば必奢べし。奢て財を費さば、其ながれ皆民間の困窮なるべし。此能あやつりのために妻子離散し田宅を失ふ者多からむ。心肝をいたましめてこれをきくとをいとふべし。何の風化の益かあらむ。其上始は故事をとるとも、十年の前後には事かはり風俗をうしなふやうなることに成行べし。よからんと思ふ事も、本たゝずしては皆害になるものなり。一向に善事もなさでうちをきたるにはおとる事也。あやつりなどの座の者は、凡俗の中にてもすぐれて習ひあしゝ。かやうの者の心氣風俗もかはりゆき侍らん時ならでは、故事の善も定り侍らじ。　問。禮樂をしたふ者あれども。ふせぎてなさしめざる人有。其言に云。絃などは世に人のしらざるを以て其家の規模とす。俗にひろく成ては詮なき事也と。まことに公家などは世俗のしらざる風流あるをもつて、人のおもひなしもことに侍り。糸竹の樂世にひろまり侍らば、公家の御爲にはあしくや侍らん。　云。樂の世にひろくなることは、公家の御爲にはなを以てよき事に侍らん。樂をしらざる人の耳には、樂も能拍子もつくし琴も同じことにおもへり。其中能はやしつくしごとなどはおもしろし。樂は何のおもしろげもなし。少し學びてこそことなるものゝねも聞へ侍れ。たとへ世俗達者に琵琶琴をしらべ侍れども、爪音のけだかき所公家には及び侍らじ。物かきたるも手はわろけれど公家の手蹟はいやしからず。能筆にても平人の手蹟はけだかき所なし。世々天のゆるせる位ありて、居は氣をうつすの道理也。

り見るべからず。いはんや國郡をや。富これより大なるはなし。

一。心友問。貴老老佛は虛無をきはめ得ずとのたまへり。彼虛無を其道としてくはし。聖學は虛無を學とせず。何を以てしかの給ふや。　云。我心則大虛也。我心則聲臭形色なし。萬物無より生ず。聖學は無心にして虛無存せり。虛無の至なり。老佛は虛無に心あり。故に眞の虛無にあらず。心を用て虛無を云。故に其學くはし。しかれ共爲にする所あり。陽明子云。聖人といへ共仙家の虛上に一毫の實を加ふることあたはず。しかれども仙家の虛は養生の上より來れり、佛家の無上に一毫の有を加ふることあたはず、しかれども佛家の無は生死の苦海を出離するの上より來れりと。告子が不動心も又似たり。心を不ㇾ動上より功夫を用る也。心の本躰は原不動なり。なす所義にかなはざる事あれば動もの也。

一。心友問。移ㇾ風易ㇾ俗。無ㇾ善ㇾ於ㇾ樂。今の樂を以て民俗風化に益あらんことを心得がたし。　云。先民俗風化の本たる道學興起し上に賢君立給はゞ、今のあやつりなどいふものも孝子忠臣貞女等の故事をのべて、農工商家業の暇に及て、勞役を休せしめがてらこれをみることを得せしめば、風化にをいて益あるべし。他の眞心を感激する事すくなからじ。糸竹の雅樂のごときは、道學に志す者か、又は上﨟に生付たる人ならではおもむきがたし。道の行はるゝ事數年せば、いやしき心著の習など去て漸くおもむくべし。道德を本として禮樂行はれば、すたれたる音律歌舞の曲も漸を以て興るべし。　問。有德の君出世し給ひ道學の興起するまでの事はかたかるべし。しから

空なり。故によく好惡をしる。口に味なきは空也。故によく五味をわかつ。これみな心の空竅を目耳鼻口にひらくものなり。心は生々の理を以て神とす。日として生せずと云となし。是を性といふ。性は心の本然也。

一。學友問。老子慈謙儉を三寶とす。其意いかむ。 云。慈は仁の實也。人を愛すれば人も亦己を愛す。人の悅ぶ心をあつめて親を敬ひ子を愛す。和氣身にみちて命ながし。善をよみして惡をにくまず。至公無我にしてひろく躰ゆるやかなり。天地萬物皆己が有なり。太虛を心とすればなり。人の貧賤も己が貧賤のごとし。故に義に當て財をおしまず。人の富貴も己が富貴のごとし。故に富貴の人の德ありて士を敎へ民を安ずるは、己が子のよく家を保て己が子を養ふがごとし。不德にして士を不レ敎民を不レ安は、己が子の不明なるがごとし。耳に聞目に見るべし。口にそしるべからず。敎べくして敎ふことあたはざるは命也。謙は虛明の德なり。心一物なき故に、天下の谷を來して爭ことなし。明らかなるが故に、天下の人みな己にまされる所あるを見る故に、ゆづらずといふことなし。天下の知をあつめて用をなす。人のために苦をになはず。常にゆたか也。天下の谷となりて人に上たらんことを欲せず。しかれども謙は尊くして光り、卑くして踰べからず。人にくだる者をば人常に愛敬す。吉祥家門にあつまる。儉は無欲の道なり。足ことをしる者は富り。不レ貪をたからとするの義也。事をもとめず物を備へず、所レ有に隨て心たりぬ。物すくなく事しげからずして靜なり。まことに慈仁にして求なくば、これに興ふるに天下を以てすともかへ

のあらんや。

一。心友問。易經にをゐて、程子は理を主として傳をし、朱子は卜筮を主として本義をせり。陽明子云。卜筮は是理也、理も又是卜筮也。卜筮は疑を決し吾心を神明にすることを求るなりと。まことに發明なりといへども、いまだ心よく落着せず。　云。易に無卜の卜無筮の筮あり。卜筮を用るは末也。禮樂に玉帛鐘鼓の有がごとし。故に卜筮を主としていへば卜筮にあらずといふとなし。理を主としていへば天下の理易にもれたるとなし。初九潛龍勿ㇾ用。君子潛龍の時に當てはよく其才知をかくして、ひとり其身をよくし德を養ふべし。如ㇾ此するときは吉なり。これに反する時は凶なり。これ卜筮を不ㇾ用して占明かなり。他皆これにならふべし。無筮の筮にあらずや。理を以て占ひ考るにたがふ事なきとは筮を用るに及ばず。たゞ事のうたがはしき時の變に至ては、常理のいまだあらはれざる事あり。こゝにをひて卜筮を用て天に問なり。これ又理也。神明は不測なれども、神明理にたがふことなし。故に理の必然なる事には卜筮を不ㇾ用。

一。心友問。陽明子云。目に躰なし、萬物の色をもつて躰とす、耳に躰なし、萬物の聲を以て躰とす、鼻に躰なし、萬物の臭をもつて躰とす、口に躰なし、萬物の味を以て躰とす、心に躰なし、天地萬物感應の是非をもつて躰とすとはいかん。　云。しかり。此理明白也。唯心は空を躰とす。故に天地萬物にをひて感應せずといふとなし。たゞ心のみならず目耳鼻口も同じ。目に色なきは空なり。故によく五色を明らかにす。耳に聲なきは空なり。故によく五音をきく。鼻に臭なきは

ければをのづから質素なり。心有ての儉約はいかゞしき所あり。無欲仁厚より無心にして儉なるは、殊勝に清白なる者なり。四方の物を帝土へあつめざれば、天下ゆたかにして帝土長久なるものなり。これを財散ずる時は民あつまるといふなり。克讓とは。帝堯の御心虛明にして一物なければ、百官の諫言天下の善言をうけいれ給ひて、其中庸の至理に叶ひ、時變に達し人情に近きものをえらび用ひ給へり。天下の人帝堯の聖知を忘れて善言を奉れり。故に四海の人情殘さず知給ひて、其命令よく可にあたれり。みづから聖知をもつて先達たまはず、天下の人の天質の美を盡さしめらるゝは謙讓の至也。己を於て人にしたがはんと思ふ心はなけれども、心虛にして一是を有せず、明にして人を知、人の才知の得たる所をのこさず、天下の事を天下の人になさしめ給へり。帝堯の天下の人の才知に主師たる所は人不レ知也。終に天下をも子に傳へずして賢にゆづり給ふは、遜讓の大なるもの也。帝堯一人の奇特にあらず。理の當然なり。しかれ共此理の當然を行ふと、至德にあらざれば行ひがたし。光二被四表一とは、天の覆ところ、地の載ところ、日月の照す所、霜露の墜る所、舟車の至るところ、人力の通ずる所、凡血氣あるものは尊親せずといふことなし。聲名中國に洋溢して施て蠻貊に及び、數千歲の末の世に至り、日本の遠方の者までも心にしたふとあり。格二于上下一は、天地の化育を助て陰陽の氣至和至順なる故に、風雨民の願にしたがひ、時に雨ふり時に風ふき、枝をならさず壤をながさず鳥獸魚虫草木までも其澤をかうぶりて其生をとぐるをいふ。帝堯六尺の身方寸の神舍如レ斯の廣大に至れり。神明不測の妙天下古今これにしくも

集義和書卷第十四

義論之七

一。心友問。古人あまた聖人の德を形容す。其中一人の聖人をゑがき出して親切なるはいづれぞや。云。書經に帝堯の德を記して云。欽明文思安々。允恭克讓。光二被四表一。格二于上下一と。如レ此親切にして著明なるはあらじ。欽は本體固有の敬なり。無心自然にして存せり。維天之命於穆不レ已といふものなり。深遠にしてやまざるものは常に虛靈不昧也。故に欽明といふ。文思はあやあるおもひなり。心の官の思のみにて、間思雜慮不常往來の妄なし。おもふべき道理ある事にのみ覺照して不時の思索なき故に、思ふといへども自然なり。故に文思といふ。安々は應レ事接レ物起居動靜從容として天則にあたる。自然に出て無事也。篤恭にして天下平か也。易簡にして天地の理得たる者なり。允は信也。恭儉にしておごりたかぶる事なきは天地人三極の至德也。天は高遠なれども、其氣くだりて萬物を造化す。日月は高明なれ共、下土を照して清濁をえらばず。大山高峻なれども、山澤氣を通じ潤澤下にくだる。聖人富貴にして諸民を子とす。帝堯の恩澤天下にあまねくして恨み憤る者まれなる故に、諫鼓をかけて民庶のいきどほりを直に聞しめされしは、下す近きの至なり。俗にげすちかきといひて人のほむるも恭の一端なり。又恭には恭儉とて自然に儉の道理あり。道德仁義に富有にして天理の眞樂ゆたかなれば、世間の願は少もなし。事物求めな

とし給ひては、いかほど多くありてもあまねくをよばざるものなり。しかのみならずあたへて却て害になるとあり。たゞ其利を利とする樣に政をし給ふばかりなり。なほもるゝところあれば、彼善人仁者是をすくへり。私にほどこすはよく當るものなり。外より見て我にもたまふべき事とおもふ者なし。故に善人を富しめ給ふは、もるゝところなく仁政をあまねく及ぼさんがためなり。

集義和書卷第十三終

一。心友問。里仁爲レ美とは、孟子の仁は人の安宅也といへる意にて、人の身を安ずる所は古郷なり、心の安樂にして常なるは仁也との給へる義也といへる人あり。集註の解は外ざまの事也。此說おもしろく侍り。　云。しばらく學者の内に力を付る爲にはよし。本解は集註の旨なるべし。此語は爲にする事ありての玉へるか。本よりの古郷ならば風俗あしとても立さりがたき義もあるべし。人の國には仁里有とても行てすむとならざる勢もあり。一篇には定めがたし。好で不仁の風俗の地に居者のために知仁ともに失へる道理を敎給へるか。此章にて仁を本心の事とせずとも事闕とあらじ。所によりて解べし。　問。不仁者の約に居がたく樂にも久からざる事は何ぞや。　云。不仁者は物を二にす。一己の私を持して世を渡るものなり。順を好み逆をにくみ、富貴をねがひ貧賤をいとふ。故にせは〳〵しきはいとひにくむ所なれば、其地に安ずる事あたはず。或はあふれ或はやぶるゝものなり。富貴を得ては大に悦び、己一人の榮耀とす。終には病苦をまねき、或は家を亡すものなり。ともにひさしきとあたはざる所なり。周に大なるたま物ありて善人是とめりといへり。武王天下を有給ひて、商の代につみたくはへたる財用を天下にほどこし散じ給ふ時、四民のたよりなき者にあたへて、餘あるをば善人をえらみ與へて富しめ給へり。善人は人欲の私なき者なれば、天下の財用は天下の通用なる道理にまかせて、富有に成てもみづからたからとしたのしまず、人にほどこすをもつて樂びとす。君子は民の父母といへるも、父母たるものたからあれば子に分ちあたふるをもつて樂びとするがごとし。上より國天下に財をわかちあたへむ

人に異なるとなし。是を學びて思はざる時は罔しと云べし。叉晝夜功夫受用して心思をくるしめ道を行はんとする者あれども、學せばくして已が異見にまかするゆへに、己をあやまり人をあやまるものあり。これを思て學びざる時は殆といふなるべし。問。博學とはいかほどの書を見るとに侍るや。　云。古の博きといふは易詩書禮樂弓馬書數のみ。今の萬卷の書はあるべき樣なし。數多の書にわたりても見せばき者あり。博學ならずしてひろき者あり。今吾人の己が爲に學ぶべきものは四書を本とすべし。其餘の經傳は年と氣力とにまかすべし。其家に生れたる者の其家職をつとむる事は常の業なり。

一。心友問。貴老の書を見て、口にはあざけりそしりながら、心にはひそかに取得て、みづからのまどひをもわきまへ、我心より出たるやうに人にも敎る者侍り。書をあらはし侍るにも、貴老の書の筆法發明多し。しらざる者はいづれをさきともわきまへ侍らじ。貴老秘して出し給はず。とり用る者の書は出侍れば、かへりて末や本に成侍らむ。　云。いにしへより實德ある人にはにせが多し。予不德にて言語のみなる故に、人の取とやすき也。夫有德には親炙する人其化をかうぶれり。文明の時は有德の人なけれども、言説を以て世の惑をひらく者あり。予が言をしられて世に益あらんも、人の言と成て助あらんも同じ事也。予が言はなを人の言のごとく、人の言はなを予が言のごとし。共に天の靈明より生ず。たとへ取用る人あしき者ありとも。聞人はまどひを辨ふべし。其言によりて吉利支丹ごときの左道にまどはざる風俗とならば幸甚なり。

自然にしてしかり。よく親切にたとへをとるも物と二あらず。遠は物にとり近は身にとるなり。仁の體をいふときは、太虛天地中國夷狄のこす物なし。子貢は其用につきていへり。故にの給へり。これ聖人天下を有の能事也。是によりて仁を求むべからず。形あるものは必ずかくる所あり。不㆓相通㆒の勢なり。鳶飛魚躍。形より見れば各別なり。その飛躍する所以のものは一なり。

一。心友問。死生の道はまとはずながら、生を好み死をにくむの心はきゞくつきがたきと見えて、年より白毛生じ身體かはりゆくを見ては感慨の心おこりぬ。いかなる受用にてかゝる凡情は變じ侍るべきや。　云。これ學者不學者共に人情の通情也。くらくまどひて多きか、明にさとりてすくなきかのたがひのみ也。ともに仁ならざる事は一なり。孔子川のほとりにまし〳〵て、ゆくものはかくのごときか晝夜をとゞめずとの給へり。是道體也。川流の見やすきを以て道躰の無㆑聲無㆑臭を敎給へり。吾人白髮生じはだへなみよりかわりゆくものは、彼ゆくものと共にゆく川流の道理也。仁を知ものは何をか好み何をかにくまむ。

一。心友問。子曰。溫㆑故而知㆑新。可㆓以爲㆒㆑師矣。とは、前に學びたることを復してます〳〵鍛錬し、いまだしらざることを日々にたづね知といふ事か。　云。溫㆑故は古の道を學ぶ也。知㆑新は今に行ふべき至善を知也。いにしへの道の眞を得てその跡によらず、今の時所位に叶て知やすく行ひやすき樣に敎治るを君師といふ也。今の學者博く古の書を見といへども、心に工夫受用をせざれば身に行ふ所をしらず。書に向て講談する時は學者のごとし。書をはなれて日用常行に交る時は平

欲すれ共やむることあたはず。竭レ才とは手のとり足のゆくがごとし。天質の心知を用る也。顏子志學より善信美大に至れり。其才をつくしてつとめて及ところ也。如レ有レ所レ立卓爾。雖レ欲レ從レ之末レ由也已。これより後大にして化せむとす。功夫つとめの及べきにあらず。聖學峻絶の地位、言語の不レ及ところ也。此時顏子天年終むとするの前なるべし。天顏子に年をかさましかば、化して聖人となるべきと期すべからず。

一。心友問。知者は動き仁者は靜か也と。動靜は不二相似一といへども、共に有德の人なるか。云。是二人にあらず。一氣の屈伸天の陰陽なるがごとし。一動一靜互に其根をなせり。よく動く者はよくしづかなり。知者は周流してよにとゞこほらず。物にまどはず。故にたのしむ。流水を見て歎息す。左右其源に逢ふ。知の象あればなり。仁者は萬物をもつて一體とす。死生禍福ともに吾有也。故に生々して不レ亡ものは命ながし。無欲にして靜か也。山の象あり。德性の動て樂を知といひ、靜かにして壽きを仁といふ。

一。心友問。仁は全德の名なり。しかるに博施濟レ衆をもつて仁よりも大也との給ふは何ぞや。云。これ仁の用をいへり。仁は天地萬物を以て一體とすといへども、用にをひては天地の大なるも人なをうらむる所あり。堯舜もやめることはり也。仁者の己立むと欲する所、則人を立る所なり。己達せむと欲する所、則人を達するのこと也。思ひはかりてしかするにあらず。仁者は一己の私なくして天理流行す。故に人我のへだてなし。物を利するの德ありて己を利するの欲なし。この故に

入こと易し。夫樂に五聲十二律有。或は歌舞し或は糸竹をしらべ、人の性情を養て邪穢を蕩滌し、和順にして道德を得ものなり。故に風を移し俗を易ること樂よりよきはなし。道學の樂に成就するとばかりは、問學し正樂を習て後初て知べし。文學して道理を知といへども、樂を不ㇾ知者は其風情に通せず。樂を學ても文學せざれば其道理に通ぜず。文學樂道かね用ひても、心術をしらざれば是を心に得て樂むとあたはず。この故に樂に成者すくなし。

一。心友問。仰ㇾ之彌高。鑽ㇾ之彌堅。瞻ㇾ之在ㇾ前。忽焉在ㇾ後。此章道の得がたき事をいへるか。顏子だに得がたき道ならば、後學の者いかで及侍るべきや。　云。しかるにはあらず。大山を高しといへども、かぎりあればのぼり盡すべし。天を大なりといひ日月を遠しといへども、象形ある物は數學をもつてはかりしるべし。たゞ道の高遠はきはまりなし。故に其高に付て仰ㇾ之彌高していたりがたし。目力見解の及ぶところにあらず。鑽ㇾ之彌堅とは力を以て入べからず。才覺をもつて得べからず。瞻ㇾ之在ㇾ前忽焉在ㇾ後とは、文章言語を以てかたどるべからず。知識の及ぶべきにあらず。たゞ實義を明かにして後、不ㇾ仰して高遠に及び、德行ありて後無窮の門に入べし。無知の知を得て後無方の神に至べし。　問。博文約禮はいかん。　云。我を博の文は、致知格物を以て萬物一體の身を修め、古今人情時變に達して、用る時は行ひ舍る時は隱るゝ也。我を約するの禮は、人欲きよくつきて天理流行する也。欲ㇾ罷不ㇾ能ものは、見る所明らかなる故也。今の人志の立がたきとを憂る者は、いまだ見所明らかならざれば也。明らかなる時はこゝろみにやめんと

事に用れば節制度數の文あり。家國天下に及ぼすときは吉凶軍賓嘉の品有。吉は祭禮也。凶は喪禮也。軍は軍法也。賓は主客往來交會の禮儀也。嘉は婚姻の禮及び冠禮をいふ也。人恭儉なき者は心を喪ひ身を失ふ。家國天下に至るまで恭儉謙遜の敎なき時は、驕奢日々に長じて爭逆の事發す。終に國亡び天下亂る。故に身より家國天下に至るまで、禮なければ不レ立。故に禮を知ものは、敬もつて心を存し、儉もつて身を修め、遜順以て家をとゝのへ、謙明以て國を治め、篤恭にして天下平かなるに至れり。禮に立の義明かなり。　問。今管絃の樂といふものを見侍るに、樂によりて正心修身齊家治國平天下の事成就せんとも思はれ侍らず。古の樂に成し者はいかむ。　云。孔子曰。視二其所一レ以、觀二其所一レ由、察二其所一レ安と。こゝに人ありて、其平生のなす所は何事ぞとみるに、文學弓馬等を學びて文武のつとめにおこたらず、其する所はよけれ共、其心のよる所德業を立むがためか、名利を求むが爲かと見に、是をなし得て利祿を求むべきとも名を得べきとも思はず、文を學ては道理をわきまへ、弓馬を習ては其業をよくせんが爲なれば、よるところの心もよき也。しかれども其人の閒暇無事の時、從容遊樂の地にをゐて心を用るをみるは、其安ずるところ也。爲ところ依ところまでよき人はあれども、安ずる所にをいて正しき人まれなり。其故は爲ところ依ところまでは心をしてつとむれば也。大勇力の人ありて志篤實也といへども、樂を不レ知時は、安ずる所にをひて心を用ゐるとあたはず。或は怠惰或は嚴厲なるもの也。是正しき事にあそぶ道をしらざれば也。正樂をもてあそびて後、心の安ずる所遊びたのしむ事正しく、德に

なり。志ある者は多くは行不足にして知明かなる所有。外よりみる時は知くらくても行正しき人まされり。たとへば草木のごとし。今日養を得て明日長ずる物ある、其本をはからずして末を同じくせば、一尺の養を得て長ずるは二尺の木の長ぜざるには、俄にはこえがたかるべし。

一。心友問下志二於道一、據二於德一、依二於仁一、遊二於藝一章上。　云。他岐の惑なく人道の正きを得むと欲するは道に志すなり。德によるは有德の人により近付也。仁に依は自己天眞の正きに本づき養て得ところあり大體にしたがふもの也。藝に遊は禮樂弓馬書數等の人倫日用の事にをひて正しき所にあそぶ也。六藝は至理の寓する所なり。故に專におさむる時は末の理に流て本心の德を失ふものなり。遊ぶ心を知てなす時は、其術を盡してきはむるといへども、道德の助けと成て末藝にながれず。遊ぶ心を不レ知して上手となるものは、道德の大なるをもつて藝術のすこしきなるをなすもの也。是その厚ふするところを薄ふすることわり也。其薄ふする所を厚すれば藝術身の害に成もの多し。

一。心友問。詩に興といへども後學の者興とあたはず。古のおこりし者はいかむ。　云。古の文を學びしは詩を始とす。詩は志をいへるものなり。善惡邪正共にみな人情の實事也。故にこれを學ぶ者は實學也。人倫日用の實事にをひて善心を感發し善行を興起し惡をこらし邪をふせぐ事をしれり。これ詩によりて志のおこるにあらずや。　問。禮にたつものはいかん。　云。禮は恭儉謙遜を本とす。虛中に天下の益を來す。不レ爭不レ奢身にほどこせば肌膚の會筋骸の束をかたくす。

といへり。こゝに人三人有。其一人は我也。よきを一人としあしきを一人とす。善人を見ては是を好しこれに與し是を習べし。不善人を見て或は形是をさけ或は心これをさくべし。我身にも如ゝ此の不善ありやとかへり見るべし。是よき受用なれ共、かくのごとくのみ見時は、よき事はよけれども師外にあり。心の外に向ふをまぬがれず。もし師を内に求めば、善を見て好する心は、則我身に善を行ふの師也。不善を見て悪む心は、則我身の不善を改る師也。心は無聲無臭なれば、感應の跡依て知べし。明師ありといへども一念の微は知がたし。たゞ我にありて善悪を知の靈明を奉持するときは、師我に有て幽明のへだてなし。

一。心友問。人みな志ありといへども、志す所たしかならず。　云。志といふは道に志す也。初學の人道に志ざしていまだ道をしらずといへども、心思のむかふ所正也。故に邪僞の惑すくなし。

問。志なけれども正き人あり、志有といへども正しからざる人あるは何ぞや。　云。氣質よき人は道を學びざれども正しきものなり。氣質あしきものは道に志すといへども假に善人と成ともあたはず。しかれども昨日の我にはまさるべし。一たび道に志すものは、いまだ道を見るとたしかならざれども、志善にむかへば大なる不仁不義をばなさず。邪僞の左道などにはまどふべからず。氣質によりて正しき人は、行跡よしといへども、道をしらざる故、心に守なく明なる所なければ、其身は好人の樣に見ゆれども、事の邪正を知ずして不義をもなすとあり。又左道などにまよふ者あり。天の物を生ずる此德あれば此病あり。知不足なるものは行正し。行不足なるものは知明か

は其職をよくし、商は有無を通じて其利をするのみ。天下國郡の財用は自然の勢ありて商はからず。何ぞ國天下の政令を議することをせん。天下道なき時は、國君世主の驕奢なる事有道の時に十百倍すといへども、富貴の權は下にうつるもの也。故に商人國天下の財用の本末を心に取得て、國天下の利をあみし、山澤の淺深河海の運行をたなごゝろの內にす。故に商は日々に天下の事に委しく、士は日々に萬事にうとくなりぬ。たゞ庶人の私議するのみにあらず。財用の權商の手にありて心のまゝに成ものなり。故に商日々に富て士日々に貧し。士の貧乏きはまる時は、民にとること法なし。士民ともに困窮する時は、天下の工商利を失て衣食を得べき便なし。よき者はわづかに富商の數十人のみ也。これを四海困窮すと云。堯曰、四海困窮、天祿永終と。君の祿福もながくたへて天下やぶると也。此時に當て彼財用を心のまゝにしてさかへを極めし富商も、盜賊の奴と成て悲哀すとも益なかるべし。聖人の言たがふことなし。

一。心友問。人みな聖人たるべしといへり。迂闊なる樣にもきこへ、又聖人をことあさき樣に思へる者もある也。　云。其全德をいふ時は、聖人は神明不測の號なれば、平人のしらざる所なり。しかれども人の人たる實躰は聖人と異なることなし。人みな明德あり。大人は赤子の心を不レ失ものなりといへり。學は後來の人欲を去て元本の天理を存することを學ぶもの也。此心天理に專にして人欲の私なき時は、則聖人の心なり。

一。心友問。心の內に向と外に向との模樣はいかゞ。　云。いひがたし。論語に三人行必有二我師一

必ず助て仁政を行はしむべし。武王は紂をとらへて流放し置むとおぼしたるべきを、剛悪勇心ありて自害せり。其後紂王の子を立て大國を與へ、商の祭をつがしめ給ふにて知べし。後世敵の子孫といへばたづね求て殺とは雲泥なり。太甲無道なりしかば伊尹是をとしこめをきたり。伊尹の幸にて太甲先非を悔て伊尹の教にしたがひ給へば、むかへて位をかへしたり。若改めたまはずば伊尹天下を有つべし。しからば簒ひたるの名あらんか。任重きが故に辭せず。　問。しからば天下の民の水火の中にくるしむがごとくなるとは、聖賢皆あはれみ給ふべし。いづれも任ずべきとならずや。　云。天任ぜしむる時は任ず。天任ぜしめざる時に任ずるは私心なり。この故に孔孟は道を任じて天下を任ぜず。孔孟の時諸侯の强大なる者みな思へり。孔孟を助とせば天下を一統せんと。若孔孟の才ある人功名のまじわりありて時の諸侯を助ましかば、天下を一統せしめんとたなごゝろの内なるべし。又まじゆるに仁を好て義を知ざるの異學をもつてせば、みづから天下をとりて人民を安ぜんか。しかれども聖賢は道をまげて天下を安ずることはせず。兵をやめ食をやめて天下の人餓死せしむるとも信のみ存すべきの心なり。

一。心友問。天下有レ道、則庶人不レ議といへるは、法ありて天下國家政道の善悪をいはしめざるか、軍中にをゐて辯者をして敵の美を談ぜしめざれといへると同じ事にて侍るや。　云。其口を箝て私議せしめざるにはあらず。自然の勢をいへる也。天下有レ道ときは天子は天下の富貴を有て人にかさず。國君は一國の富貴を有て人にあづけず。大臣は君を助て私の權勢なし。農は耕し、工

なる者は、平生のなすところ行跡正しといへども、肝要のしまりなき故に、其よき事もおほくはあしくなるものなり。行不足なれども知惠ある者は、平生のなすところ十にして七八まで禮儀にあたらずといへども、肝要のしまりある故に、其よからぬ事も消失て、人情時勢に叶ふものあり。父善人にしてほまれありといへども、知不足なれば人を用ることあたらず、政時所位に不レ叶。子不賢なれども知ありて人の善惡を見しり、政時所位に叶へば、外より見ては父よく子よからざれども、內より見る時は父の代には國家とゝのほらず、子の代にはよく治る者也。父不賢なれども知ありてよく人を用ひ、政時所位に叶ふものあり。子善人なれ共、知なければ終には不明の所より讒言入て、子の代に其功とげず。此二の者は自然の勢也。父にえられし者こそよからぬ者も有べけれ。其外又國に奮功の奉行役人多きを、子の代になりては其賞のさたなくして、何の功德もなき人共方ずみとて位祿共に分に過る者多し。父子相繼の禮にあらず。この故に孟莊子がごとき孝すくなし。

一。心友問。伊尹は聖の任なる人也。孔子は聖の時なる人なりと。しからば孔子も任なるべき時に當ては任じ給ふべし。列聖の中何か任に當れるや。　云。湯武是也。天下の治亂萬人の安否を以て己が任とす。故に德に恥るの惡名をかへりみず。實は天下を欲するにあらず。巢許が淸あれ共、任重きによりて進て辭せず。桀を流放せり。若桀改る志ありて、湯王の敎をうけて道を行はゞ、必ずむかへて天下をかへし授くべし。紂若悔る心ありて武王に降り、先惡を改て善にうつらば、

か末の碁象戯を禁じ侍らん。道學六藝を事とする人は日を愛してたらずとせり。碁象戯をすゝむるともせじ。文藝武藝をも心がけず徒に月日を送る人は、碁象戯の遊びもせざるにはまされり。禁ずるに及ばず。かけ双六などは博奕の下地とも成なむか。博奕は惡事の根ざしなれば、左様のきざしをば戒ても可也。本立ときは末のいたづらごとは禁ぜざれどもをのづからやむものなり。本不レ立して末を禁ずるは禁ぜざるにはをとれりと有。

一。心友問。曾子曰。孟莊子之孝也。其不レ改二父之臣與一二父之政一。是難レ能也と。莊子が父獻子、賢德ありてよく人を用たり。故に其政よし。不レ改ことと尤なり。何ぞこれをかたしとするや。云。父の獻子賢にして子の莊子知あり。故に是をよくせり。古今父にえられる者の子の代にあはざること二あり。一には其者よけれども、子の方ずみの者權をとり、立身せんことを欲して父にえられし者を年々あしざまにいひなせば、よからずおもへり。其上父子好惡別也。故に父の臣を用ひず、父の政を改る者あり。是は子不明にして孝心うすければ也。二には父にえられし者私多く、よからぬ事を年々見置て是を不レ用、又父の政可にあたらざること多ければ改むるものなり。是は子知あり、不孝ともいひがたし。父の本心は善人を用ひ善政を行ふことを欲す。しかるに是に反する者は、人欲これを害すればなり。親の本心にしたがひて惡を改め善にうつり國家の長久をなして、親の先祖に不孝の罪をまぬがれしむるは大孝也。親の好惡は一身の私也。國家は代々の守なり。夫人善にして知不足なる者あり。知有て行不足なる者あり。善人にして知不足

に得たる仁者は好で人を愛し、或は其身温柔寛裕なるばかり也。不ㇾ憂といふには及ぶべからず。不ㇾ憂は知わきまへ勇たはまざるところあれば也。氣質に得たる知者は俗にいへる分別者也。然ども万物一躰の仁なければ物を成の功なし。人間世の名利得失の分別のみかしこくて、幽明死生の理を知ず。この故におそるゝ所も有。不ㇾ惑とはいひがたし。氣質に得たる勇者はなれしりたる所にはおそれざる也。山に行て虎狼をさけざるは獵者の勇也。海に入て蛇龍を恐れざるは海士の勇也。戰陣にをひて弓矢をいとはざるは武士の勇也。大森彦七ほどの武勇者にても、妖物に逢ては氣をとり失ふことあり。其上海に入ては海士に及ばず。山に入ては獵者に不ㇾ及。大勇の名を得たる武士といへども不ㇾ懼とはいひがたし。物によりて恐れ物によりてをそれざるは。知てらさず仁一躰ならずして物と二になる故也。道學に得たる者はさあらず。勇者は仁知をかねておそるゝ所なく、知者は仁勇をかねててらさゝる所なく、仁者は知勇をかねて憂るところなし。故に君子の道三との給へり。一もかきては君子とはいひがたし。　問。我よくするとなしとの給ふ時は、孔子だにいたり給はざるにあらずや。しからば後世の人いかでか及び侍らん。　云。今も人あり。我よくつとむることを同志のつとめざる時は、我よくつとめ得ずといひて人をすゝむ。我よくする事は人皆しれり。その人をすゝむるといふ義はいはずしてさとれり。

一。朋友問。心學には碁象戲の遊びも禁制也と申侍り。まことなるか。　云。心學の事は知ず。惣じて道德仁義に志す者は人欲を禁制する理にて侍れども、全く格し去ことあたはず。何のいとま有て

べき學は人の爲にし。人を利すべきの義を失て己を利す。この故に士君子多くは其德を失て小人となれり。

一。心友問。仁者不ㇾ憂、知者不ㇾ惑、勇者不ㇾ懼とある時は、三人の樣に聞へ侍り。君子の道三とあれば、三ながら有て君子と云義か。仁者知者勇者いづれも君子との義か。　云。君子の不ㇾ憂は仁也。不ㇾ惑は知也。不ㇾ懼は勇也。此三ある時はともにあり。君子の道廣大也といへども、心の德に本づく時は此三にすぎずと云ふ義也。己を成は仁也。物を成は知也。性の德也。外內を合するの道也。故に三本一也。一人の人あり、子よりいへば父也、臣よりいへば君也、婦よりいへば夫と名付るがごとし。仁知勇同じく性の德なれども、君子の天地幽明順逆死生禍福をもつて一にして己にあらずと云ことなければ、憂るところなきにつきては、仁者と名付、君子の陰陽人鬼富貴貧賤夷狄患難入として自得せずと云ことなく、心にとゞこほりなき事流水のごとく、無事を行て明かなる所につきては智者と名付、君子の浩然の氣天地にふさがり、剛强盛大にして万物の上にのびやかに、物欲にたはまされず、威武に屈せられず、惡鬼妖物猛獸もふるゝことあたはざる所につきては勇者と名付たるなり。常人の憂る所を不ㇾ憂によりて君子を知こともあるべし。凡夫のまどふところにまどはざるによりて君子を知こともあるべし。世人のおそるゝ所ををそれざるによりて君子を知こともあるべし。時により三人となして見とも害あらじ。又仁にして知勇をかねず、知にして仁勇をかねず、勇にして仁知をかねざる者あり。是は氣質に得たるものなり。氣質

ばあらたむべし。大道の實義にをひては、先師と予と一毛もたがふ事あたはず。予が後の人も亦同じ。其變に通じて民人うむことなきの知もひとし。言行の跡の不同を見て異同を爭ふは道を知ざるなり。　問。何をか大道の實義といふ。　云。五典十義是なり。一事の不義を行ひ一人の罪かろき者を殺して天下を得事もせざるの實義あり。不義をにくみ惡をはづるの明德を固有すれば也。此明德を養て日々に明かにし人欲の爲より害せられざるを心法といふ。是又心法の實義也。先師と予とたがはざるのみならず。唐日本といへどもたがふことなし。此實義をろそかならば、其云所みな先師の言にたがはずとも、先師の門人にあらじ。予が後の人も予が言を非とし不レ用とも、此實義あらん人は予が同志也。先師本より凡情を愛せず。君子の志を尊べり。未熟の言を用て先師を贔負するものを悅ぶの凡心あるべからず。先師存生の時變せざるものは志ばかりにて、學術は日々月々に進て一所に固滯せざりき。其至善を期するの志を繼で日々に新にするの德業を受たる人あらば、眞の門人成べし。古より民三に生ず。父母生じ君養ひ師敎ゆといへり。恩ひとしき故にともに三年の喪をつとめき。予が先師にをけるも其恩君父に同じ。子よく父の家を起し、臣よく君の德をひろめ、門人よく師の學を新たにせば、ともに恩を報ずる也。

一。心友問。春夏秋冬かはらず。日月星辰同じ。人の形異なることなし。仁義禮知の性備れり。しかるに古昔は道德の人多して今まれなることは何ぞや。　云。孔子曰。古之學者爲レ己。今之學者爲レ人。これ今の世に道德の人まれなる所也。古之士者利レ人。今之士者利レ己。をのれがためにす

也。土根枝葉生意へだてなし。唯中は見べからず。和の跡は春花秋紅の節に當て見べきのみ。

問。中と仁といかん。　云。中をいへば仁其中にあり。仁をいへば中其中に有。古の聖王を民の君師といへり。君たる所より見れば尊し。師たる所より見れば親し。たゞ一人の聖主なるがごとし。　問。仁と愛といかん。　云。仁は生理也。愛は生氣也。仁は性なり。愛は情也。たとへば木の根本より枝葉まで流通する生意は氣也。春花夏綠秋紅の時色のあらはるゝは情也。みな生氣の變化なり。其變化をなすゆえんの理は仁也。唯人は此仁を得て明徳そなはれり。明かにする時は己が有也。万物は明徳なければ己が物とすることあたはず。仁中に造化せらるゝのみ。

一。心友問。先儒いへり。周子無極にして太極といへるは非也。聖人の言に無極の語なし。此無の字老佛より出來と。此説面白侍り。　云。これ文字になづめり。易に太極ありと。是聖語にあらずや。易は變易してきはまりなし。きはまりなきは無極にあらずや。周子初て無極の字をいへるといへども、無極は易の字の意なり。初ていへるにあらず。夫無の字何ぞ老佛より出むや。老佛も本は聖學にとれり。上天の載は無レ聲無レ臭といへり。佛語は本梵字とて日本のいろはの言葉のごとし。みな中國の字書をかりていへり。中國の字異學より出べき樣なし。

一。心友問。先生は先師中江氏の言を用ひずして自の是をたて給へる高慢也と申者あり。　云。予が先師に受てたがはざるものは實義也。學術言行の未熟なると時所位に應ずるとは、日をかさねて熟し時に當て變通すべし。予が後の人も又予が學の未熟を補ひ、予が言行の後の時に不レ叶を

やぶれ天下亂る。驥は其力を稱せずして其德を稱す。力は驥の才也。世に驥の力ある馬ありといへども、驥の德なければ平馬にもをとれり。驥は力あまりありといへども、無爲にして幼童にもあつかはる。故に善馬の名あり。况や人才有て德なきは妖物なり。不才の德に近きがまされるにはしかじ。　問。今家領なく田地なく金銀なき者は、つかへて才知を不ㇾ用は、何をして父母妻子を養育し侍らんや。　云。これ炎暑甚寒にも鹽菜をあきなふ者のごとし。貧がための仕を求て、己が天性によりて一役つとむべきのみ。其職事とゝのはゞ可なり。

一。心友程子敬の心法を問。　答曰。言論の及所にあらず。書により言によりて敬する者は。多くは敬といふもの胸中にふさがりて心の本然を失へり。古人の心と我心と心に相通じて自然に得ことあり。是力を用るの功なり。我敬の心法を得るとも、吾子にかたらば子が心の一物とならむことを恐る。所謂中者。天下大本也。喜怒哀樂。未發之時。此性渾然在ㇾ中。心有㆓散逸㆒。則失㆓其所㆒以爲ㇾ主。これ說得てよし。無物の敬を知べし。　問。事々物々の上に天然の中有といふものは何ぞや。　云。器物其則を得たるも中なり。飮食其味を得たるも中也。中は天下の大本也といへ共、充塞してあらずといふところなし。其躰を中といひ其用を和といふ。人の不動を立といひ動を行ふといふがごとし。同じく一人の人也。百尺の木根本より枝葉に至まで生意一貫也。根の土中にあるを大本とし、枝葉を達道とし、土中にある生意を中とし、枝葉に有の生意を和といふ。されどいまだ盡せりとせず。木の木たるゆへんのものを中とし、時に發するものを和といはゞ可

なるは僞に近し。一の不祥なり。吾子天然の吉を得ながら變じて凶となすべきことをねがへるはまどひなり。學はかくのごときの迷ひを解て自明にせんとす。世人皆夭死をいとひていのちながからんことを思ふ。不才は命ながく才は命みじかし。人みな勞をいとひて安を願へり。才は勞し不才は休す。才知ある者は己が身の凶をまねくのみならず、人の凶事をもあづかれり。深山の木も材あるは斧斤の憂有。不材の木は斧斤の禍なくして其天性を全くす。民にして拙きは其農事をおさめて他の累なし。才ある者は庄屋となり肝煎と成て人の爲につかはる。武士にして拙き者は武道のたしなみをよくして國の干城と成のみ。無事の時は文を學でみづからたのしみ、よき士と成て他の勞なく累なし。才知ある者は役儀を命ぜられて一生いそがはし。武士なれども武業をたしなむべきいとまもなし。いはんや文德をおさめんや。一生無知にして老衰の後悔益なし。　問。知レ此の道學天下にひろまり侍らば人みな不才をたのしまん。しからば天下國家誰か是を治めんや。　云。才知かくれて人民拙き時は惡なし。不レ治に平か也。惡の源は才知より生ず。至治の世何ぞ才知を用むや。　問。堯舜文武の代五人九人の才臣有。孔子も才かたしとの給へり。才を用たるにあらずや。　云。これ天下の才知を亡して惡の源を絕の才臣也。今の才といふものにあらず。今の才は堯舜にありて用る所なし。大才は刀のごとし。よくとぎてつかさやをし晝夜身をはなたずといへども、一生用ひず。威をもつて無事也。小才は刀を朝夕用るがごとし。人をそこなひ身をそこなひて無事なるいとまなし。今の才は小才也。朝夕闘敵て國家無事ならず。終には國

なれども士は欲ありて下々は盜をするとやまざる者あるは何ぞや。　云。徒善は政をするに不レ足といふもの也。惡なれ共君の手に權威ある時は下したがふもの也。善なれ共君に權柄威嚴なき時は下したがはず。後世君たる人其身正しく不欲なれども、威なきは柔善なり。しかのみならず政をするの道をしらず。この故に正しく不欲なるは善なれども、其化士にうつらず。其澤民に及ばず。是氣質の美にして道德より出たるものならざれば也。道德に得たるものは善にして威有。又善をほどこすの道をしれり。故に其德義士太夫にうつり、其德化民庶に及ぶものなり。ゆへに孔子曰。君子の德は風也。小人の德は草也。草に風をくはふれば必ず偃すと。故に君子の治世は殺を不レ用。君威なければ殺すとはいへどもしたがはず、おそれざるもの也。其上君に威なき時は必下に威あり。下として上の威をうばふ者は必不善なり。不善なれ共威ある所にしたがふもの也。

一。朋友問。我甚た不才なり。かくても學問成侍るべきや。學問し侍らば何事ぞの用にも立べきや。學によりて才知の生るる道理あらば學びたきことなり。　云。よく學ぶ者は元來ありつる才知もかくれてなきがごとし。何ぞ學問によりて才知を生ぜんや。學は己が明德を明かにせんと也。才知ありて德をそこなふ者は多し。德の助けとなる者は稀也。學は天眞のたのしみを求むとす。才知は己が心をわづらはしめ、己が身をくるしましむ。學は齊レ家治レ國平二天下一の道也。才知は家とゝのほらず、國おさまらず、天下平かならず。故に古人云。つたなきは吉也、たくみなるは凶なり、拙は德なり、巧なるは賊也、と。不才にして拙なきは德に近し。自然の幸也。才知有て巧

は民饑、上下かはる〴〵苦で位づめに亂世と成ものあるは何ぞや。　云。此そのより來る所餘多ありといへども、其大本三有。一には大都小都共に河海の通路よき地に都するときは、驕奢日々に長じてふせぎがたし。商人富て士貧しくなるものなり。二には粟を以て諸物にかふる事次第にうすくなり、金銀錢を用ること專なる時は、諸色次第に高直に成て、天下の金銀商人の手にわたり、大身小身共に用不足するものなり。三には當然の式なき時は、事しげく物多くなるもの也。士は祿米を金銀錢にかへて諸物をかふ。米粟下直にして諸物高直なる時は用足ず。其上に事しげく物多きにます〳〵貧乏困窮す。士困すれば民にとること倍す。故に豐年には不足し、凶年には飢寒に及べり。士民困窮する時は、工商の者粟にかふべき所を失ふ。たゞ大商のみます〳〵富有になれり。是財用の權庶人の手にあればなり。夫國君世主はかりそめにも富貴を人にかすべからず。富貴を人にかすときは、權を失ひて國亡び、天下亂るる時は商の富は身のあだなり。虎は皮に文ある故に田獵の災をいたし、商は金錢多が故に盜賊の奴となり、或は命を失へり。草木の情なきだに時ありて落葉枯槁す。物の盛衰は物の自然也。況や己が利を專にし衆の苦みをなす者何ぞ久しかるべき。

一。心友問。孔子曰。其身正。不レ令而行。其身不レ正。雖レ令不レ從。又季康子が政を問に對て云。政は正也。子帥に正を以てせば、孰かあへて正しからざらんと。又の給はく。子が不欲ならば是を賞すといふともなすまじと。しかるに後世は上正しけれ共下正しからざるものあり。上不欲

の道明かにしてまどひなく、君臣相和し、父子相親み、夫婦別あり、兄弟序あり、朋友相ゆづりて爭訟なくば、亂を願ふとも得べからず。　問。信は本也。第一にの給はずして第三にの給ふは何ぞや。　云。これ政の次第也。人生れて飲食にあらざれば長ずることあたはず。故に最初にの給へり。兵具にあらざれば、禽獸人に交り、强弱相凌て靜ならず。知を上にし愚を下にするの備なり。故に次にの給ふ。赤子母の胎内を出て一聲なきはじむる所に、則天眞存す。父母の赤子を養育すること、あたはずといへども遠からざるの誠によれり。信ㇾ之は此天性を人欲の爲にそこなはざるのみ。故に終にの給ふ。故に此三の大事をのぞくに至ては、不ㇾ得ㇾ已してやむる時は兵を去べし。信ありて衆和する時は、杖を以ても堅甲利兵に勝べき理有、又不ㇾ得ㇾ已して二の大事を去べき時は、食を絕てうへて死すべし。天下の人一時に死して天地やぶるとも可也。信なく禽獸と成て生べき義なし。故に順にして義に害なき時の政は食を足を先とす。恒の產なくして恒の心あるものはすくなし。是も又誠を立るの備なり。又逆にして義に害ある時は、誠のみ殘り持。人の命あるをのづから此次第なり。食によりて成長し、兵を持して生を全くし、天下を警固す。信の道を立て人の義を行ふ。其老衰に及ては、力つきて兵さり、食咽にくだらずして死す。不ㇾ亡ものは誠のみ有。子貢にあらずば此問をまうくること有べからず。孔子にあらずば此答あらじ。天下の政道治亂得失、たゞ此三の大事の存亡によれり。一もかけては國其國にあらず。天下其天下にあらず。易簡にして明白也。　問。後世豐年ありて食足ときは士困窮し、凶年にして食不ㇾ足とき

威嚴ある時は、大夫士むさぼらざるをたからとす。民は己が力によつて五穀を生す。工商は粟にかへて食す。年貢をとることを甚すくなければ、民遊樂を好て耕作の事にをこたるものなり。甚多ければ飢寒を憂て力たらず。おこたらずうへざる時は、五穀の生ずること限なし。食たり士民ゆたかにして武備なき時は又亂る。故に武藝のすぐれたる上手を招きあつめて、常に弓馬をならはし、士の筋骨をつよくし、間よき馬の生ずる様にし、弓うち矢師矢の根かぢ鎗刀のかぢとぎ屋具足屋鎗屋しろがねやさや師塗師屋鞍鐙轡切付屋はりこやのたぐひ、すべて武具の細工人を多置て、軍用に事かけざる樣にするを、兵を足といふ也。士民共に無病にして、氣血すこやかなる政敎をなすこと第一也。信レ之は天道は誠也。其誠を本心として生れ出たる人なれば、其元本の誠を思ひて失はず、邪なく僞なく厚き風俗をなす敎なり。此信の中に仁義禮智の性理はふくみてあり。人といへば耳目口鼻の備れるがごとし。民といふはすべて位なき者の惣名也。つかへざるの士工商、尤その中にあり。庶人だにあるに、まして庶人を敎へ治る人はいふに及ばず。天下國家の政道のことなれば、禮法の事をの給ふべきことなるに、信とのみの給ひて禮儀法度に及ばざること尤も妙也。德のおとろふるにしたがひて禮法しげきもの也。おさへてもおこり易し。たゞ立がたきものは誠也。誠不レ立きとは、聖人の禮儀法度全く備るとも何の益かあらん。五典十義は誠の條理也。風厚く事すくなき時は五倫よく相親む。如レ此してのちくはふるに禮樂を以てすべし。繪の事は素[illegible]也。天下國家飲食衣服備り足て、武具おほく武藝達者にて、誠

聽言動のかろきことにも須臾もはなるゝ所あるは、顏子分上の非禮也。三月仁にたがはずといへるも。四時みな三月にしてうつれり。故に三月といふは年中の事也。年中たがはざればたがふことなし。然れどもいまだ心ありてつとむる故に三月の字あり。無心にいたらざれば至誠の無息にあらず。顏子は聖人に近し。一時化するときは則聖なり。これ此語を事とする所也。　問。聖人にも戒愼ありや。　云。あり。　問。しからば無心といふべからず。　云。戒愼則自然に出て、時として戒愼せずといふことなし。即無心也。いまだ心あれば、時として須臾の息なきことあたはず。無心に至て初て息なし。自强は克レ己也。不レ息は復レ禮也。用て自强不レ息ときは、天行健に合す。吾心氣造化と一也。故に天下吾仁内にあり。春夏秋冬、日月星辰、寒暑風雷、雨露霜雪、土地山澤河海、こと〴〵く吾身に備はらざるものなし。これ天下仁に歸するなり。

一。心友問。軍陣には必ず備あり。かねて備なき時は、敵に逢てやぶるゝことすみやか也。治國の備は何にて侍るや。　云。治國の備は政也。政をば孔子既にのたまへり。足レ食足レ兵信レ之の三なり。食不レ足ときは、士貪り民は盜す。爭訟やまず。刑罰たへず。上奢下諛て風俗いやし。盜をするも彼が罪にあらず。是を罰するは、たとへば雪中に庭をはらひ粟をまきてあつまる鳥をあみするがごとし。敎へずして殺すだに不仁也。况や民を死地にかりおとし入るをや。上に立者用たらざれば下をむさぼる。下困窮すれば上をうらむ。是逆亂の端なり。戰陣をまたずして國やぶるべし。兵を足にいとまあらず。况や信の道をや。　問。食を足の道いかん。　云。上恭儉にして

を知ざればなり。夫禮は恭儉を尊ぶ。易簡にして時所位に應ずる時は、和ありて行ひ易し。天は易を以て知なり。地は簡を以て能なり。天地上下の位定は禮なり。易簡の善は和なり。易なる時は知やすく、簡なる時はしたがひやすし。知やすき時は親み有。したがひやすき時は功あり。これ日月のかはる〴〵明かに、四時運行してやまず、天道の悠久にして無窮なる所也。禮樂の本なり。人事和に專なれば流やすし。故に禮を以て節すべし。禮節なければ和も又とげがたし。禮節過る時は煩して又亂る。故に禮樂たがひに其根をなす。陰陽動靜の理なり。先王の道天下の事、大小となく是によらずといふことなし。夫禮は上を安じ下を治るの備なり。しかれども古今人情時變の異成事あり。易云。黃帝堯舜垂ニ衣裳一而天下治。通ニ其變一使ニ民不レ倦　衣裳をたれて天下治るは無事の至極なり。其變に通じて人の退屈せず、禮法にくるしまず、いとふことなき樣にし給ふは、よく時と人情とをつまびらかにし給へばなり。則是和を貴しとする義なり。

一。心友問。顏子仁をとへば。孔子非禮視聽言動せざれとの給ふ。少し道德の學に志すものだに好で非禮の物を見聞言行することはし侍らず。顏子の大賢にして此受用を事とするは何ぞや。云。其位々の非禮あり。常人分上學者分上の非禮あり。進で美人大人分上の非禮あり。聖人に至て初て非禮なし。顏子聖人に不レ及こと一等なり。故に聖人に至るべき所をの給へり。禮といふは天理流行してしばらくもやまざるところなり。易云。天行健、君子以自强不レ息といへり。天行健なるは禮の躰なり。君子用てみづからつとめてやまざるは非禮なき也。心上はいふに及ばず。視

集義和書卷第十三

義論之六

一○心友問○仁の理は孔子といへども一言にして説盡し給ふとあたはざるにや○門人の問に答給ふ所皆かはれり○　云○仁は全德の名也○門人の問に答給ふは、其心の位によりて德に入べき端をのたまへり○子曰○如有㆓王者㆒必世而後仁と○是恩澤のあまねく天下に行はるゝを以て仁政とするの義也○吾心太虚天地の間にをゐて不㆑通ところあるは、未仁と云べからず○　問○しからば天地万物の理、事々物々にして是をきはむべきか○　云○さにはあらず○事々物々の理を知といふとも、吾心事々物々の上にをゐて好惡する所ある時は仁にあらず○たゞ天下にをひて好惡するところなく○義と共にしたがつて無心なる時、初て仁なるべし○醫書に手足のしびれなへたるを不仁といふ○よく形容すといへり○氣不㆑通して人のはたらきならざるところあれば也○富貴貧賤死生壽夭夷狄患難、入として自得せずといふことなし○天地の陰陽人生の順逆みな吾に備れり○何の好惡する所あらんや○わづかに好でねがひ惡でさくる心あるは一貫ならず○義と流行せず○これ不仁なり○

一○心友問○禮之用和爲㆑貴と○此用は躰用の用共いひ、用るところの用ともいへり○總じて此章受用に心得がたし○　云○禮の用は禮の行はるゝ所也○禮いたづがはしき時は必ず亂るといへり○和

一、心友問。和書の前言多くけづりすて給へり。五三年過なば又けづり度思ひ給ふ章有べきか。

云。殘る章今も半は心にみたず。しかれども人により迷ひをとくべきとあればけづらず。後世のそしりは眼前に見ゆれども、今の人の迷ひをとくべき事は今日の天職なり。時文明の運に當て人心の闇昧をひらくは、少し天恩に報ずるなり。是を以てよのそしりをかへりみず。

集義和書卷第十二終

て退きかくるゝ時は、小人時を得ていよ〳〵賢知を惡口しうとましめ、媚諂ふ人のみ前後左右にみてり。もしいさめがましき事をいひて心をつくるも上の心に叶べき所をはかりていへり。たゞ口の前の問をわたすばかりにて、終の治平の用には不ㇾ立。上たる人に剛惡なければ、位づめに亡るなり。　問。しからば善を好にも道ありや。　云。あり。孟子曰。古之賢王。好ㇾ善而忘ㇾ勢。古之賢士。何獨不ㇾ然。樂二其道一而忘二人之勢一。故王公不ㇾ致ㇾ敬盡ㇾ禮。則不ㇾ得二亟見一ㇾ之。見且猶不ㇾ得ㇾ亟。而況得而臣ㇾ之乎。古の聖王賢君は賢知の人なるを聞給ひばみづからの位も勢も忘たるがごとくへりくだりて、禮をあつくしまねき給へり。執政大臣たる人も猶しかり。これ善を好むの道なり。みづから德を尊び重ずる故なり。善を好の至極なり。王公位をさしはさみ、大臣權勢にほこりて、賢知にくだらざる時は、善人義士皆野にかくれてしられず。讒諂面諛の人は利を好むばかりなれば、無禮をいとはず。いよ〳〵君臣の惡をますもの也。賢士は道德を樂て人の勢を忘れたる者なれば王公といへども敬をあつくし禮を重くし給はざれば、其知力を盡さしむる事不ㇾ能。賢士不ㇾ悅して知力を盡さゞる時は、ありとてもなきがごとし。後世善を好の君臣ありといへども勢を忘れ賢士を敬するにいたらず。故に善も益なし。

一。學友問。君子の父母を祭禮する心いかむ。　云。君子は幽明人鬼くらからず。故に死生一貫にしてへだてなし。たゞ明々たる心ばかりなり。この故に孝子の心に親を死せりとせず。祭時には何の心もなし。至誠を盡すのみ。

尤大方は此才なくても政におづかれ共、それ故よからず。樂正子は左樣の才ある者にてはなきを と不審に思ひて問なり。孟子の答に、此才なしといへり。公孫丑、しからば政をなさしむるとも よくは成まじきを、何ぞ悅で不ㇾ寐やと、をし返して問へるなり。孟子云。樂正子は善を好者也。公孫丑善を好むばかりにて大に國の治まらむ事はかたかるべしとおもへり。世間のよき事すきと いふものあり。世に善柔の人なり。さ樣の類と思へり。天眞異同のわきまへなく、よき事とだに いへば、このみしたがふ者あり。如ㇾ此の人は政には、却て害になるものなり。事はよくても時所 位に叶はざれば人情にもとりて、よき事と云も出ざるにはをとるものなり。樂正子の善を好むと 云は、左樣の事にはあらず。凡情の我慢なき故に我是を立ず。人の善なるを悅び好してそねまず。德性を尊で問學によるの功にて。眞知明かなれば、正邪をのづからよくわかれり。事の時所位に 叶と不ㇾ叶と、善の天眞に應ずるか跡になづむかの分別は、鏡に美惡をうつすごとくわきまへしる 也。えらぶ事は我心にあれども、仁厚温和にして善を好み、人のいさめを悅ぶ故に、人路次の遠 きをも苦勞とせず、來て善を告しらす。下々の情は上に立人のあまねくしらざることなれば、思 ひよらぬ人情などを知て、政令みな其可にあたる故に、天下の人民政道にうむとなく、善をする にいさむなり。天下の人善をするに進時は、惡はをのづから亡びぬ。天理人欲並立ざる故なり。善を好の德は一國に用てもよし。大に天下に用るときはいよ〱よし。善を不ㇾ好人の氣象は、訑々として聲音顏色たかく、賢人知者をば千重の外にふせぎ、諫を拒む意思あり。善人こばまれ

君子進み小人退かば、國家天下亡びんことを願ふとも得べからず。三皇五帝三王の代の興起し治平せし、其同じき所の大本なり。禮樂法度は時によりてかはりありといへども、君子進み小人の退治根にをいてはかはりなし。これにそむくものは治平なる國天下も、亡びにおもむく事すみやかなり。德を不レ知人は、君王大臣といへども、みづから其知を足りとして善言をこのまず。隨分我才知勇力を以て國天下をよくせんとおもひて、賢知の者を近づけず、實義の士有道の君子を遠ざくる時は、媚へつらふ者すゝみいたりてほめあぐる故に、いよ／＼予知ありと思ふ意思長じぬ。其間に國家天下の根本くづれて、人情そむきぬる事を不レ知。すでに亂逆に及では、おどろくといへどもかへるべからず。孟子曰。魯欲レ使ニ樂正子爲一レ政。吾聞レ之。喜而不レ寐。公孫丑曰。樂正子强乎。曰。否。有ニ知慮一乎。曰。否。多ニ聞識一乎。曰。否。然則。奚爲喜而不レ寐。曰其爲レ人也好レ善。好レ善足乎。曰。好レ善優ニ於天下一。而况魯國乎。夫苟好レ善。則四海之內。皆將下輕ニ千里一而來告レ之以上レ善。夫苟不レ好レ善。則人將曰。訑々予既已知レ之矣。訑々之聲音顏色。距ニ人於千里之外一。士止ニ於千里之外一。則讒諂面諛之人至矣。與ニ讒諂面諛之人一居。國欲レ治。可レ得乎。魯國に孟子の弟子樂正子をあげて政をなさしめんといふをきゝて、孟子大に悅で夜もゐねられぬとなり。かならずよき士數多出來て民安かるべしとおもひ給へばなり。公孫丑これを不審して云。樂正子は强力にしてよく事をつとむるに退屈せざる人か。知慮分別ありて事の裁判をよくすべき人か。古今人情時變の來歷くはしくきゝしる所の多き人か。政をする才は是等の備なくては叶べからず。

古は天爵を得たる人に人爵をもあたへたれば、德は位の本にして二にあらず。老を尊び養ふことも、天爵人爵かねたる賢君ありて後行はるゝことなり。しかれば三達尊も德なければ殘り二もむなし。賢王下にある賢者を見給ひては、位威勢共に忘れて、禮を重くし給ふこと、必然の理なり。君王の御子などの民間におちふれてしられざるを見付奉りたると同じ。天爵のある人賤しき中に居給ふをおどろき給へばなり。賢德ある士の民間に於て人の勢を忘るゝことは、天を樂び命を知ゆへなり。畎畝の中に居て堯舜の道を樂び、其位に素して行ひ、その外を不レ願なり。一治一亂は氣化の盛衰あり。人事の得失あり。反覆相尋は理の常なり。富貴貧賤の上は下へうつりかはるは、寒暑の往來するがごとし。賢士これを見て何の心もなし。故に王公も敬をいたし禮を盡さゞれば、切々相見て其言を聞こと不レ能。上より求給ふだにも召こと不レ能。いはんや我より上に求むべけんや。何ぞ國天下の得失を心とせんや。吾人共に少し問學ある者の天下國家を憂るは、惻隱の心をゑぼうしに着て凡情の主たるなり。しかのみならずみづからの性命の分を不レ知。天命の勢を不レ知。わづかに古昔の事を聞ては今を非とし、これを以て變ぜんことを思へり。甚非なり。その愚を不レ知者はあやうし。

一。心友問。天下國家の存亡長短治亂のかゝる所の重きものありや。　云。品々あり。一をあげていひがたし。しかれども天下國家の興起し治平して長久なる大本一あり。此本存するときは吉なり。此本亡する時は凶也。君及び執權の大臣善を好み賢を親む時は、君子位にあり小人野にあり。

いへり。學術かくのごとくならば高慢となるべきか。云。高慢はせばく見所小きが故なり　高慢の者は必ず胸中くらし。道の廣大にして理の無窮なるを知ときは、自らたれりといふことなし。日新日々新也。予むかしより國家天下のふさがり通ぜざるを聞ては、氣の毒にも笑止にもおもひて、道行はれば上安く下ゆたかなるべきものをと願ひしを、近頃其非をさとりしなり。五島對馬の小島に生れそだちて、少し知見ある者は、其島中のよくおさまらむことを願ふべし。其者を京江戸へ出しなば、日本國中の長久を思ひて五島を忘べし。大明の臣とせば、大國の治亂を心にかけて日本を忘るべし。死して陰陽の神となりては、普天率土の造化を助て、東夷南蠻西戎北狄の一方百年の治亂のみを心とせし太虛に歸せば、十二万九千六百歳を一歲として、天地の壽をみむかしとせん。何ぞ日本の小國に生れて、わづかに五十年の命數の間に見所を悅び憂んや。しかれども理に大小なし。一躰の仁感じて惻隱の情發するは不能已、然れどもしゐて思ふは非なり。畢竟吾人の位をこえて政道の事を思ふは、勢を不忘の凡情よりおこれり。孟子云。古之賢王。好善而忘勢。古之賢士。何獨不然。樂其道。而忘人之勢。故王公不致敬盡禮。則不得亟見之。見且猶不得亟。而況得而臣之乎。いにしへの聖王賢君は德を尊び道を樂び給ふ故に、みづからの富貴をば物ともし給はず。君子の富貴はひろく衆をすくひ敎をほどこすに重寶なるばかり也。故に善人を好ししたひ給ふに當ては。位をも忘れて禮を重くし給へり。後世德を尊の道すたれたる時には、奇特なる事の樣にいへども、根本天下達尊三の中にても、德は天爵なり位は人爵なり。

との給へり。我等ごときの淺學不德の者だに、さはあるまじき事なるを、心得がたく侍り。云。よき不審なり。後世の樣に民をしへたげてとりたるにはあらず。其はじめにすくなく出したるよりも民はゆる〳〵として、物成は多とりたるなり。民も悅び地頭も滿足する事なり。　問。しからば孔子何とて甚だしくせめ給ふや。多とりては民の爲によきことあるまじきとおもはれ侍り。云。不審尤なり。凡夫は才知かしこけれ共欲ふかく、實のくらき所あり。其上物の筋目をしらざる故に、財用のわき出る道をしらず。多くは誰ためにもならず。費てすたるものなり。古は農兵なりし故に、つよきといふ分にても十にして二とりたり。民の得分八の中三ほどは、中にてついえてすたるべし。仕置をよくせば其三のすたりなく、一を上へまし二を民にますべし。故に主人滿足し民悅なり。上下の爲によけれども、孔子の責給ふ主意は、季氏道に志あり、仁政を行はむとする者ならば費る物を上下にあたへて仁政の助とすると尤なり。季氏は仁義を不ㇾ知、たゞ利をのみこのめり。しかるにいよ〳〵富しめて、其利心を助け吝を長ずるは僻事なり。其上惡を後にのこす道理あり。冉求裁判の間はよかるべし。奉行かわりなば、上へましたる所は其まゝにて、下のついえ又むかしにかへるべし。しからば民のいたみ初に倍すべし。これ惡をのこすなり。君子は人の惡をのこさゞるものなり。故に孔子深く歎き給也。

一。心友問。孔子東山に登て魯國を小なりとし給ひ、登ニ泰山ニ天下を小きなりとし給ふ。居ところ益高きときは、其下を見こと益小きなり。見ところ既に大なる時は、其小きなるもの觀に不ㇾ足と

給ふも、かゝる事はなきものなり。たとひ今の權威をとり過たる大身なりとも、俄に威をおとし恥辱をあたふるとなく、君たる人みづからの德を明にし行を愼て、大臣の恥恐るゝ樣にし、君の威をうばへるは大なるあやまりなり。臣の道を盡してこそ名をもあぐべきことなれど、仁愛ふかく敎みちびき、是非利害を明かに心得させ、我方より欲を損し德をます樣にし給はゞ、巨室必ずあふぎ同德にて助とならば、眞に沛然としてふせぐ事なるべし。問、君の敎にもしたがはざる心服し向べし。本よりよからぬにだに、士民ともに久しくしたがひ來たる大家なれば、君の德を無道人ならばいかゞ。云。さほどの惡人は國人ともに常にうとみはてしものなれば、これをすてゝも可なり。其上君の道正しく仁至てしたがはざるものならば、士民みなにくむべし。憂るに不足。問。君は祿を與ふるだに士民服しがたし。大家は祿もあたへざるに士民したがふは何ぞや。云。君は遠くして尊し。故に親しからず。何事もかくれて過し易し。大臣は尊けれども下に近し。少の事もしられ易し。故に恐れはゞかるものなり。しかのみならず君臣なり。されば親しき交も有。賞罰ともに大臣の取なしにかゝる所あり。故に諸人信を以て服するものなり。この故に大臣賢なれば國天下の治まる事すみやかなり。古の聖主といへども賢臣を得てあまねく行はるゝ所なり。

一。心友問。冉求季氏が家臣と成て、民よりとる所ます〳〵多しといへり。孔門の高弟なれば、後世のごとく不仁にしてせめとる事はよもあらじと思はれ侍るに、孔子其罪をならしてこれを責よ

る人知なく勇なく、うちまかせてはからはする時は、大臣の心に叶べし。しかれば君は有てなきがごとし。終には國天下を失ふに至べし。君に知勇ありて君の位を持給はゞ、今の大家は皆損するに近し。しからば大家は道ある事をにくむべし。大臣何ぞ悅服すべきや。　ム。德を行はずして力と才覺とを用ひなば、さわるべし。古今不德の君大臣の威勢をふるふをにくみ、力を用て俄に其位をおとさむとす。小知の小臣これをすゝむる者あり。君小臣と心をあはせて變ずる所の政、大臣の無道なるにさのみかはらず。東に滅して西に生ずるのみ。しかのみならず本よりの役人は恨みをいだき、引入新しき役人ときめきなどす。共に凡夫なればかはるとなき中に、人のうらみを取損をますとなり。其上人情は筋目と位の備れるとを尊ぶものなれば、同じ道なきにては世臣大家のなす事をうらみず。無理とおもふ事にも、より子の筋目出入の子孫などは、したがふものなり。さなき人も威勢にをされて口舌なし。今出頭にはむかしよりのよしみもなく備りもなし。却てそねむ人々あれば、よくしても心服せざるものなり。ましてかはらざる事の少よきといふばかりにては、人心もとりそむけり。もし君に大力量達才ありて下知し給はゞ、本より主君なり。大家は傍輩なれば、おなじ事のすこしあしきにては、君にしだがふこともあるべし。されど君一人して主にもなり臣にも成て下知はならざるものなれば、かならずたすけの出來出頭あるものなり。一國此出來出頭をにくむ心より、共に君をもそむくものなり。小臣だにかくのごとし。況や大臣はいきどほりをふくめり。國のあやうき事は、大家の威をとりたるも、主君みづから下知し

を重むじて、公家も古風を不レ失、足利家も彌根がたくなりて、權を失ひ給はむ。しかるを南朝を亡しなば氣遣なる事なく萬歳ならんと思ひ給ひしは、無學不知の故也。南帝も御和睦にて歸洛し給はゞ、なきがごとくおしこめられ給ふべき事は眼前の事なるに、同心まし〳〵しは苦々敷事也。

一。心友問。告子曰。性無レ善無二不善一と。又先儒曰。無レ善無レ惡心之躰と。此二説は其かはりなきがごとし。孟子は性善なりといへり。心の本躰は無レ聲無レ臭といへる時は、性善ともいひがたかるべきか。三説の異なる所性善の無聲無臭に叶處の道理いかむ。　云。告子が性無レ善無二不善一といへる主意は非なり。生これを性といふの心と同じ。氣の靈覺を見て理の靈明を不レ知が故なり。無レ善無レ惡心之躰といへるは、又告子が旨には異なり。心の躰は虛靈不昧なるものなれば、たゞ惡なきのみならず、善といふ物も亦なし。しかれども性は心の本然なり。性の感通する路を見れば、皆善にして惡なし。惡といふものは人欲の私よりおこりて、性の感通にしたがはざるよりなるものなり。性のまゝにして人欲の害するものなければ、其事みな善也。孟子の性善といへる所なり。孟子も性の本躰に善といふものありといへるにはあらず。無レ聲無レ臭の心の本躰の、無レ思無レ爲寂然不動にして、感じて天下の故に通ずる跡を見れば、みな善なり。其跡の皆善にして惡なき道理をみて性善の理を知べし。

一。心友問。孟子曰。爲レ政不レ難。不レ得二罪於巨室一。巨室之所レ慕一國慕レ之といへり。古今國天下共に王代も武家も、君をないがしろにして權威をとり、或は國を奪などする者は大家なり。君た

みついえに乘ー災をなすべきものなり。さ樣の者外にあれば、作法をつゝしみ政をよくする故に、其國長久なり。彼も其善政に感じて歸服するは、まことの心服なり。其政よければ心服して外のまもりとなり、あしければ氣遣にしてつゝしみとなる者は、我とりたてならぬ代々の諸侯なればなり。天下の主のためにはこれほど重寶なる者はなし。凡情は如此のものをなくなさば心安くてよかるべしと思へども、君子の心はしからず。故に先王外に諸侯を立置給へり。秦の始皇諸侯大臣なくば万々歳吾子孫天下の主たるべきとて、天下に諸侯一人もなくせしかども、天下を一統せし年より二世胡亥三年三世子嬰四十六日にして漢の高祖に降りし年まで、わづかに十六年にして秦亡たり。秦の始皇は多の大敵を亡し周の世をとりたるほどの大武勇大力量の人なりしかども、外に氣遣なるものなき樣にせしばかりにてほどなく亡たり。高祖は領知とては一尺の地も持せず。獨夫の窂人なり。しかれども大秦の萬々歳と期したる天下を亡したり。高祖は賢人君子の德もなかりしかども、外に諸侯を多く立置、内に大臣を備へをきて、四百年の天下を子孫に傳たり。出て敵國外患なき者は國恒に亡ひ、憂患ある者は生、安樂なる者は死するの格言、少しもたがはず。大身なるのみならず。小身といへども、此道理にはたがはざるなり。足利家の天下をとりしも、南帝おはしまず間はよく愼みて、家次第に盛大になり、内堅固なりしが、南朝を廢してより、政道におこたり驕奢生じ、一家まで心はなれて、天下の權を失ひたり。もし其時の大樹老臣知あり學あらば、南帝をば馳走して成ともたて置奉りなば、北朝の公家は德を愼み玉ひ、將軍家は政道

いのれども、ふらざること多し。まことに餘義なき事也。古は旱に雨をいのり長雨に晴をいのる事は、大君國主郡主の任とし給ふ所なり。しかる故に其ふるべき道を盡していのる事を命じ玉へり。さればむなしく民の財をついやさずして、いのれば必ずふるとあり。問。今時の民のわけもなき雨ごひにも時としてふるとあるは何ぞや。云。其しわざは雨ふるべき道理なけれども、其憂情眞實なり。又不レ知して雨ふるべき所にをいてする者あればなり。是等の神理いかで今の僧尼の知所ならんや。其うへ多くは渡世のための凡僧なれば、濟度利生の慈悲心もあるべき樣なし。故に貴人に近付といへども、民のついえいやましに成て、下をくるしむる其一となれり。まことに論ずるにたらず。

一。朋友問。もろこし日本共に、天下を奪ふ者は諸侯大名なり。あらそふ者は高家の一門なり。君を殺しないがしろにする者は大臣也。たとひ暴君ありとも、亂世にはまさるべし。其君なくなりて後はよかるべし。諸侯に大身なく、又はありとも取立の人ばかりにし、一門に高家ををかず、大臣に位祿なき樣にせば久しかるべきか。　云。孟子の曰。入則無二法家拂士一。出則無二敵國外患一者。國恒亡。然後知下生二於憂患一而死中於安樂上。法家は位祿重く作法正しく、繼躰の君道に志す時は師となり、無道なる時は諫をきかざれども其法を變ぜざるの大臣なり。代々の守になり、國と共に存亡する也。位祿かろくして叶べからず。拂士は君正しければ助て善をなさしめ、君正しからざればいさめたゞすの賢士なり。敵國外患は必しも戰國の時にあらず。我をこたりあらば其よわ

問。富貴に素しては富貴を行ひ、貧賤に素しては貧賤を行ふ。是大力量の人はよく處すべきが、大賢以上の人ならでは叶がたかるべきか。云。これ才のよくする所にあらず。德を知人はみなよく處すべし。それ有德の君子は富貴も淫するとあたはず。貧賤も移すとあたはず。威武も屈するとあたはず。かくのごとくにして後、其位に素して行ひ、其外をねがはざるべし。德を知人これを行べし。才覺ありといふとも及所にあらず。

一。或學者問て云。今の佛者は貴人の師なり。しかも出家は下をへて民の困苦をしれり。何ぞ貴人に說く佛の濟度利生の道に叶ざるや。歲の十一月に徒杠成。周の十一月今の九月なり。徒杠はかちよりゆく者のわたるはし也、十二月に輿梁成、十二月は今の十月也。輿梁は車馬を通ずべきはし也。農功すでに畢て民力を用べし。時もまさに寒沍ならむとす。橋梁あるときは民徒涉の憂なし。今民間の道路には、水に橋なく舟なき所多し。遊民みづから舟橋を作て錢を取て人をわたす。貧なる婦女童子はわたるとを得ず。たま〳〵民の自力にて橋をわたすとはいへどもかちの者さへわたるにあやうし。佛法の制にも過たる今の堂塔の十分一を損せば、天下の舟橋時になるべし。佛法は慈悲を本とすといへども、古の賢君の政道の一事にも及ばざるとは何ぞや。又旱に當て雨ごひをするも、民の自力を以て多のついえをなし、其はてはせめとられぬ。如ㇾ此事を貴人に申す僧だになきとは何ぞや。云。雨ごひはふるべき道理ありていのる時はふり、其あてゝする道理なければふらず。民はそのわきまへもなくいのりだにすればふる事と心得て、多の財用を損して

けむとなり。　問。今も役人なければ、何國にても人をえらびたづねとはずといふことなし。　云。同位同類にをいてたづぬる故に有がたし。天地の理物みな盛衰あり。富貴は久しくつたはらず。其時代に位高く祿重き人の子孫は、すでにおとろへむとす。故に好人生れがたし。積善の家はしらず。大かたは靈明の末おとろへて又おこらんとする時は、微賤の中に勇知の人生る。故に古は賢を求ることを野にをいてせり。　問。たとひ其身微賤なりとも、德すでに君子ならば、民の父母たる心あるべし。何ぞ招給はずとも進て道をおこさゞるや。　云。其位其任なければ其心おこらず。大舜はじめ庶人たりし時は、たゞ庶人の業を事とし給ふのみにして、天下の治亂に心なし。國君は一國の民の父母也。天下に及ぶ心なし。大君は天下の民の父母なり。其大臣は大君の心を以てこゝろとして天下の民を惠べき道を盡すのみ。夫大舜の知は貴賤廣狹をえらばず。居としてあたらずといふことなく、ゆくとして行はずといふことなし。大賢以下の人には知に大小あり。才知ひろくして天下の任にあたるべき人を一國に用ては、却てつかへとゞこほりて功ならざる者あり。又天下に用てはかなへあしをれども、小國に用ては可なる人あり。人を知て有才を用ることは、君子治國平天下の先務なり。後世は才の用べき所をつまびらかにせず。人のほむる者なれば役儀を命ずるあり。士の頭と登し上に置ては、ゆたかにして君子の風ある人も、役人とする時は其事調らず。其上生付たる氣質の德までむなしくなれり。故にあたらざる事に使時は、あたらよき人をそこなふもの也。生付きず多き人といへども、一器量ある者は、其得たる事に使時はよし。

いふ者にはあらず。これは又一等の人也。其位にもあらぬ大言して人をあざむくがわしき事はいふに及はず。欲悪ありながら蓋藏してよき者ぶりし驕吝なる者は、いかで堯舜の道に入べきや。これ又いふに不ㇾ足。

一。學友問。何をか治國平天下の要とせん。　云。國天下の爲に人を得を要とす。孟子すでにこれをいへり。人に分つに財を以するを惠と云。世人これを仁なりとし德也とす。受る者大に悦べり。人に敎るに善を以てするを忠と云。世人これをそねみそしり。敎らるゝ者は悦びず。甚しきはいかれり。人に金銀財用をあたふるは小惠なり。しかれども其人悦び世のほまれ大也。人に善道を敎るは忠なれば、惠よりも大なり。しかれども敎訓せらるゝ者たからの十が一も悦びず。又世俗のそしりを得事あり。いかにしてか國天下の爲に人を得むや。人みな國の治り天下の平かなるとを欲せずといふとなしといへども、其治平の根を絶とをしらず。其本をきはめたづぬるに不仁なり。民を見ると己が赤子を保ずるがごとくなるの慈心なき故なり。人々我子水火のなかにくるしまば、是をすくはざる間は、いねても席を安むぜじ。食するとも味を甘んぜじ。多くの子ども己一人の力にして水火の難をすくふとあたはざる時は、これを助くる術を得たる人ありといはゞ、年來のあだかたきなりとも、必ず往て手をつかねひざをかゞめても我子のすくひを求めん。況や賢者はあだにあらず。みづからこれをにくみていみへだてたるのみ。堯は舜を得ざるを以て己が憂とし、舜は禹と皐陶とを得ざるを以て己が憂とし玉へり。一人の君子を求るは万民の苦をすく

心にもあらぬ大言を爲て人を欺者は、與に堯舜の道に入べからずと書せる道理至極せり。しかるに貴老これを以て道に入べからざる所とし給ふは何ぞや。　云。孟子の宣王に善を爲にたれりといへるは、牛を見て羊を不ㇾ見小を以て大にかふるの仁心を以てなり。崇にをいて初て宣王にまみえ退て去べき志ありたるは、貨を好み色を好むなどいへる耻の心うすき人なるが故也。懺悔をよしとするは戎狄の風なり。戎人は仁義を不ㇾ知、たゞ輪廻のみを恐れて執着なからむことを欲す。故に善惡を懺悔して後寂滅をねがはむとするものなり。戎狄の學にしては可なり。仁義の學にをいては不可也。仁義の性明なる者は耻の心あつし。耻の心ふかき者は、心に悔悟て非を改め善にうつるもの也。欲惡の凡心をにくみて、いはんと欲すれどもいはれず、かくすにはあらず。耻の心あればなり。懺悔せざれども改めうつるを以てよしとす。懺悔する者はいさぎよきに似たれ共、其當意ばかりにて終に惡を改めず。善にうつらざるものなり。ことわざに鈍刀骨をきらずといへるがごとし。佛者の懺悔して惡を改ため道に入者は、輪廻といふ見解ある故也。小人の刑罰を恐れて惡をなさゞるがごとし。幼少の子も、物耻して人前へ出かねものいひかね赤面がちなる子は、成人にしたがひて才德長ず。かならず一器量あり、人おめせずよくものいひ人前へ出ることやすき子は、人見て利發なるとほむれども、成人にしたがひて才知なし。大かた平人なるものなり。これ耻の心の厚きと薄きとなり。おさなき時物はぢせざる子は、成人の後宣王のごとくなるものなり。庶人にしては可也。士君子となるべからず。宣王は天質朴實にして直を以て告てかくすことなきと

一。心友問。大舜は善與ㇾ人同、舍ㇾ己從ㇾ人といへり。大舜は神聖なり。人は平人多し。賢なり共舜の德には十が一にも及べからず。善も又舜の善は大にして人の善は小なるべし。大德小德にくだり、大善をすてゝ小善をとるものは何ぞや。云。大舜の心は空々如たり。天の蒼々昭々たるがごとし。鏡の虛明にして一物なきがよく萬象をうつすがごとし。心中惡なきのみならず。善も又なし。小善もなく大善もなし。人に一善あれば一枝の花の鏡にうつりたるがごとし。其美を好せずといふ事なし。本鏡中に花なき故に、よく花をうつす。舜の心に善を有し給はざる故に、よく人の善を受いれ給ふ。天下の善を許容して、其時所位にあたれるを取て、みづからも用ひ、國家にも行ひ給へり。他より是を見れば、舜の大德にして常人の小善をも好し取用給ふは、無我にして己をすてゝ人にしたがふものゝごとし。自己に行ふべき大善あるをすてゝ人の小善にしたがひ、善をすこしきにするにはあらず。舜の御心にもと一善の有せるなければ也。もし取べき所なくて善の行ふべき時あれば、胸中より發出する也。其人にありては小善にして益すくなきも、舜の取用給へば大に成て國家天下に益あり。たとへばこゝにみがゝざる玉を持たるがごとし。不ㇾ知者は石とのみ思へり。玉人これを取てみがく時は、玉となりて寶となるがごとし。大善は天下の人の知を用るより大なるはなし。

一。心友問。孟子に齊宣王の善を爲にたれりといへるものは、楊氏の說を朱子も取用られたるごとく、天質朴實にして好ㇾ勇好ㇾ貨好ㇾ色好ニ世俗之樂一といへるごとき、直を以て告てかくさゝる也。

汝の身にありといへり。心をみがゝむが爲に師をとる事は、己が位によつてみづからえらぶべき所なり。先覺は醫師のごとし。己の病を治するに便ある人を求るのみ。いまだ時と淸和とを思ふに暇あらず。

一。心友問。子路は曾子もをそれし人也。又万歲の師なりといへり。しかるに衞の難に死す。死せるは可なり。事へたるは不可なり。孔門の賢者には不足なるがごとし。　云。子路の過ある時にこれを告しらする人あれば、中心より實によろこべり。自己の非を知てこれを改むることをたのしめり。これ万歲の師たる所なり。人情の大にかたき所なり。予を始て仁義の學に志あり。一人の不辜を殺して天下を得ともせじとおもへるとは實なり。義に當ては一命をもかろんぜむと思へども、自己の過を聞ことを願ふこと病で藥を求るがごとくなるの心なし。過を告しらする人あれば、過分なりと口にはいへども、中心より發る悅にあらず。故に人も告ることをたのしまず。多は知ざるのみ。天下の通病なり。甚しき者は過を云を聞ては、いかりあだとし、或はかざれり。德を好こと色を好がごとくならざるの證據也。子路は賢を賢として色にかへたる人なり。後世道學に名を得たる人多しといへ共、子路の過を聞て喜べる心には及がたかるべし。衞につかへたるごときの過はかろき事なり。つかへざるほどの事は予がごとき者もつとめ行べし。其難を見てのがるゝ心なく、大なる武勇のほまれありて後死を安ぜし事は、又かたし。後世の勇者といへ共、義をかねざる者は及べからず。子路の行ひし事はみなかたき事なり。過といへるは少しき事也。

集義和書卷第十二

義論之五

一。心友問。孟子は大賢なり。德いまだ聖人に及ばざる所ありといへども、學は已に至處にいたりぬ。故に道德仁義をいへるとは萬歳の師たり。聖人またおこり給ふ共かへざる所なり。しかるに貴老孟子の言にしたがひ給はざる所あるがごとし。伯夷は隘なり。柳下惠は不恭なり。隘と不恭とには君子は不ㇾ由といへり。貴老はやゝもすれば伯夷を師とし柳下惠を學び給へり。孔子の聖の時なるをば師とし鑑とし給はざるは何ぞや。　云。孟子は天下萬歳の師也。故に中道をかゝげ出して人に的をしめし給へり。清といひ和と云、其人にありては可なり。師としよる時はついえあり。故に君子は不ㇾ由といへり。予も中道の的を願はざるにはあらず。是は終に歸着すべき所の地なり。しかれども予いまだ凡情をだにもまぬがれずして學のみ至極を云は、我心にをいて不ㇾ忍。予又後世の師たるべき者にあらず。一日も凡情をまぬがれて君子の心を得事は、終身の悦なり。君子の心地に進まんには、予が實にうらやみしたふ人を師とし友とせんにはしかじ。予か實にうらやみしたひて其心を心とせまほしきは伯夷なり。故に常に心の師とす。人は人と交るべし。木石禽獸とをるべからず。故にひろく衆と遊で包荒なるべきは、柳下惠を學ぶにしくはなし。孟子は後世の爲に中行不易の則をいへり。予は自己の德をなさんが爲に益を取のみ。古人も方は

きに、まづ他の害あるべきか。

集義和書卷第十一終

に一度の月日は、親の死に逢たる事をおもひ出して、終身の喪の心なれば、むかしはなくとも、義を以て起してくるしからじとて、はじめたる事なるべし。今時終をしらぬ忌日をも祭る道理なき事也。　問。貴老出家にとき米つかはし給ふ事は何ぞや。　云。坊主は在家を頼て居る者なり。家々よりやしなはずしては何とすべきや。

一。心友問。今の武士のよきと申は、弓馬兵法をたしなみ、晝夜これにかゝり居れり。武藝も世の中の用に立事はなし。事ある時の心がけといふばかり也。兵器は凶器なり。しかれば武士も遊民ならずや。　云。日本は小國にて金銀多し。異國より望むといへども、武國故にとり得ず。武士の武藝をたしなむは國の警固なれば、遊民とはいひがたし。武士ながら武道武藝のたしなみなきは遊民なるべし。　問。吉利支丹あらためも、異國の敵をふせぎ給ふ事と承れり。弓刀もいらず、人心をなびけてとるべき謀と申侍れば、むづかしからんか。云。しかり。北狄は外邪なれば治し易し。吉利支丹は内病なれば治しがたし。此内病の生する根本は、人心のまよひと庶人の困窮によれり。迷ひとけ困窮やまば根を絶べし。佛法の後生のすゝめにたよりて、それよりまさる法を作てみちびくなれば、畢竟佛敎は吉利支丹の先達なり。中夏は制禁なけれ共すゝむる事あたはず。聖賢の國にてまよひうすければなり。　問。しからば日本にも儒道ひろくならば吉利支丹ほろびんか。　云。尤その理にて侍れ共、いまの儒道には儒宗なし。各異見を立流を立て、いひかちの様也。いづれの儒學も此國の水土にあひがたく、その時にかなひがたし。吉利支丹の亡びざるさ

たるにや。云。佛法にも本はなき事なりといへり。むかしは出家の作法よかりしゆへに、坊主になるものすくなくて、年に一度の精進にて僧のとき米たれり。後世は佛渡世に成て、法すたれ戒やぶれ難行なき故に、坊主澤山になりて時米たらず。親の事なれば毎月おもひ出してよかるべしなどいひて、かくなりたるといへり。其死せる時の月日こそ終身の喪有べけれ。その時にてもなきに、毎月精進すべき理なし。故に君子は不ㇾ用。しかれ共祭をせざる人は俗にしたがつて可なり。問。一年に一度はおろそかなりといへる者有。いかん。云。忌日は終身の喪とて、親死したる其時月の日は終にあへるがごとくおもふなり。四時の祭は吉禮なり。孝子の心に親を死せりとせず。いける時もてなすがごとし。しかれども神として祭れば潔齋して我身をも神明にする道理也。神はしば〳〵すればけがるゝ事あれば、むかしは潔齋して祭る事は、春秋と忌日と三度なり。後世四時に成て五度となれり。そのほか五節句朔望の拜は、備て不ㇾ祭とて潔齋はせず。たゞ生る時親の所へ禮に行におなじ。あるひは君のたま物、あるひは遠來の珍物、あるひは初物等をそなへ、他行のいとまごひ、歸りて又告るごとき事は、子の心入次第にて數なかるべし。年に一度の忌日の外は皆吉禮也。是神道の義なり。毎月忌日なれば時ならず。吉凶相まじはりて神道をけがすに近し。禮にあらず。故に君子は不ㇾ用。生るにはつかふるに禮をもつてし、死せるにもつかふるに禮を以てする義なり。上古は年に一度の忌日の祭もなかりしと見えたり。三年の喪の中ばかり凶禮にて、喪を除てはすべて吉禮の神道なれば、忌日の祭はなき道理也。後世孝子の厚情より、一年

る者おほし。淨土宗日蓮宗も後は一向の易簡に習てひろくなりぬ。近年文明にしたがつて地獄極樂等の說を信ずる事うすし。これより後はいよ〳〵さあるべし。禪宗はむつかしき事なく易簡にをしへて、しかも悟りとて、さのみ後生の地獄にかゝはらず。これ文明の時にあへり。今の禪は愚夫愚婦のよらんことを欲して妙を云。これ利心なり。祖師の傳來にそむけり。この事なくば、いよ〳〵盛になりて、他宗はみなをされつべし。問。貴老の學はゝかりなくして人の志に應じ給はゝ、今は天下にひろまり侍らむに、なげかしきことなり。云。しからず。すみやかに成るのは堅固ならず。俄にひろまるものは長久ならず。民九十月に麥をまきて、わづかに生ずれば、はなはだ寒にをさへられ、雪霜にうづまれ、これによりて根をふかくすれば、麥田に長じ、卯月の日に實をむすびて、豐熟するもの也。予が學もをさへあるは麥の寒氣雪霜なれば、後世おこることあらんか。たゞその德なきことを恥る也。達磨の佛心宗世にひろまる事をにくみて毒害せられしも、其身死して道は後世ひとり盛なり。異學といへども其德あれば也。

一。心友問。儒道おこらば佛法はほろび侍らむか。　云。道を興す人は君子ならん。君子は力をもつて物の興廢をなすべからず。我道おこらば、佛法もむかしにかへりてよくなり、坊主すくなくなるべし。なげかしき事は、佛者無道にして盛なれば、天道乘隆の理にて、亂世に逢て大半亡ぶべきか。すくなく成て又久しかるべし。亂世の亡びはいたましき事おほかるべし。しかれども法は今よりはよかるべし。問。儒法には年に一度忌日の精進あり。毎月精進といふ事は佛法より出

てやまず。禪さとれりといへども、死を畏るゝより悟を求む。聖學の徒死生を晝夜とす。常なれば畏るべきところなし。故に死をいはず。　問。形跡いかゞ見べきや。　云。心迹は形と影とのごとし。わかつべからず。佛氏剃髮人倫を棄るは、輪廻を恐るればなり。天道輪廻なし。しかるを輪廻といへるはまどへり。むかし鬼物を見たるといふ者有。これ眼病也。そのゝち見たる者なけれども、傳へて恐るゝは眼病を傳ふる也。白石夜衣を見てばけものとし、氣たえたる者あれば、此傳なり。其惑に狐狸の乘ずるもあり。むかし釋迦輪廻を見たるは心眼病也。後世の佛者此心病を待て輪廻ありとおもへり。又白石夜衣の狐狸ありて、其信をます事有故に出家してまぬかれんことを願へり。眞實道心の出家もし輪廻なき理をしらば、一日も出家に住すべからず。たま〳〵儒學して輪廻にまどはざる坊主ありといへども、あるひは渡世のため・あるひは其家の名聞などにひかれて、學力すくなければ、こゝろならず終もありと見えたり。

一。學者問。心學おこりてより儒學實におもむき、諸儒のおもひ入かはりたり。たゞ儒のみならず。近年禪學のはやり侍ることも、心學に目をさましおしへやうよく成たるゆへなり。さて儒學は日々におとろへ、禪學はいよ〳〵ひろごり侍り。しかれば心學は禪のさきがけとなれり。遠き慮なしとそしり侍る者有。いかん。　云。しかるにあらず。世は次第に文明になれり。唐にても初は佛流わかれてひろまりしかども、他は次第におとろへて、たゞ禪學のみのこれり。日本も後はさ樣になり行なん。それ人は易簡なる事により易し。一向宗ほど易簡なる立法なければ、是に歸す

は凶人也とおもへり。此凶德數年をへて外人もしるべし。一の心病あるゆへに、百善變じて凶德となれり。貴殿の故者は表裡せり。外人はほめざれども家人族人吉人也とおもへり。此人外相はあしけれども一の德ある故に、百惡變じて吉となれり。外より見るは行なり。內より見るは心なり。行よからねども心のよきは、天道鬼神の福する所也。故者は日々に吉におもむき、貴殿は日々に凶に入べし。

一。學友問。儒佛の辨に至て、佛學にくはしからざるゆへ、彼佛をしらずといへり。吾道をあかさんがためなれば、佛をもまなぶべしや。　云。彼と爭はんが爲に學びは非なり。其上儒佛の辨を好むは、道を見ること大ならざる故なり。江漢以濯ㇾ之。秋陽以暴ㇾ之。皜々乎不ㇾ可ㇾ尙。といへり。玉の寶たることをしらば、石をもつて是を亂るべからずともいへり。たとひ佛學することと佛者にまさる共、彼を非とせば彼佛を不ㇾ知といはん。彼佛を知といはゞ、則吾子佛者ならむ。佛者に儒學ひろくしたるものあれども、其道にあらざれば心を用ることくはしからずして、理を見ることあらし。今儒者佛學を盡すことも又同じかるべし。自己だにまどはずば可なり。人に說べからず。我佛學せざれども、形容行跡を見てその心をしれり、しばらく吾子がためにこれをいはん。佛學流おほしといへども、天台と禪とすぐれたり。天台は高妙なり。佛學のくはしきことと禪にまされり。しかれども心に惑あり。禪は學あらけれども、近く心法に付て要を得たり。惑なきがごとくなれども、實はまどへり。　問。まどふ所はいかん。　云。佛氏の學は死を畏るゝによれり。故にこれを云

らければ、人情時變はしらざるもの也。有德の人皆才あるにはあらず。才なけれ共有德は眞知あきらか也。をのれをしり人を知、人の才をもをのれが才のごとし。天にしたがひて無事なり。無欲にしてしづかなり。　問。しからば今の世間知は有道の代には用ゆべからざるか。云。德治の代には子路の勇子貢の辨も用る所なしといへり。況や今の世間知をや。

一。舊友に告て云。貴殿常に巖牆の本に立り。正命にしたがはずして、身を亡さんか。　云。何といふ事ぞや。云。貴殿人に對して無禮也。又怒火の氣あり。これ身を亡ぼすべき巖牆にあらずや。今までは幸にしてまぬがれたり。この後無禮をとがむる人あらば、兵刄に及ぶとあらん。勝ても負ても犬死なり。　云。喧嘩といへどもけなげに人をきりて切腹せんは、犬死にあらじ。　云。貴殿はまだ犬死の理をしらず。怒火のためにおかされ犬のかみあふがごとくなれば、これを犬死といふなり。かみかちたるとても、犬にあらずといひがたし。古人も喧嘩は其中にて道理なる方勝ものおほしといへり。貴殿無禮にして火氣あるは、常に無理をたくはへたり。勝とを必とすべからず。夫武士は君の干城なり。自然の用に備へられたり。その祿を受て私欲の火氣にをかされて死するは不義なり。常に無禮なるは人道にあらず。戰場にて死する者何ぞ火氣あらむ。たゞ死すべき義ある故に死する也。君子の義死は理を盡し禮を盡して義の必然に死する也。

一。舊友に告て云。貴殿外に好人のとなへあり。身の分際よりはへりくだりて禮義うや〳〵し。音信往來等のなすべき事をかゝず、人あひよく侍れば、好人といへるも尤なり。しかるに家人族人

しき歟。　云。形の靜なるをもつて安重をいふは非なり。心は活潑流行の躰なり。水のながれてやまざるがごとし。やまざる處常也。安重その中に有。山はその躰しづかなりといへども、草木を生じてやまず。山澤氣を通じて出泉あり。流行靜中にあり。かるがゆへに安重は動靜によらず。心定りて無欲なる時は自然に安重なり。

一。學友問。學てこゝろざしを立むといかん。　云。志は義理に志すなり。人の不ㇾ知をもつて義をやぶる事なき、これ學のはじめなり。

一。心友問。先日人詩聯句をばすべきやととひ侍れば。可也とのたまへり。昨日は五七字の上に一生の精神をついやす連城の玉を持て雀になげうつがごとしとの給ふは何ぞや。　云。世間善をする事を不ㇾ知者は、碁なりともうつは、惡事を思はんにはまされり。いはんや詩聯句をや。昨日の人は善をなすべき人なり。しかるに一人の聯句者詩作となりて志を失はんとおしからずや。

一。舊友問。世間知うとく事に逢て赤面おほし。何とぞ處する道侍るべきや。　云。周子云。巧なるは凶なり、拙は吉也と。世間知は巧に近し。これ凶なり。吾子これに拙きは吉也。又云。巧なるは賊なり、拙きは俗也と。世間知なきは自然に德に近し。吾子德をすてゝ賊をうらやめるはまどひなり。問。有德の人時に不ㇾ逢して愚を守り、性命を亂世に全くする事は、さもあるべし。いにしへの聖賢人情時變に達し給へるは、拙きとはいひがたからむか。　云。人情時變に達せるは有德の才なり。生れ付才ありて道をしらざれば、名聞利害に入て世間知と成なり。世間知は眞知く

るの言なきは何ぞや。　云。武王德に耻るの心有といへども、湯の鑑遠からざれば、その言なし。文王いまさば紂をうつにいたるべからず。　武王の德の文王に及ばずして紂が惡はなはだしくなりたるは、德に耻る所なり。

一。心友問。むかしより名を得たる博學の儒ありといへども、道を興すにたらず。藤樹先生は博學の聞なけれども、聖學興起の端をひらけるは何ぞや。　云。萬里の海は一夫に飮しむる事あたはず三尺の泉は三軍の渴をやむにたれるといへるもの也。

一。朋友問。人みな外聞を專とす。君子もこの心ありや。　云。有。君子の外聞は義理をかゝざる是なり。小人の外聞は義理をかぐとを耻とせず。たゞ外樣のやうすよきをこのめり。これ童女の外聞也。たとへば貧賤の中に親類あるを外聞あしゝとおもひてかへりみざるは、我身本より富家にていやしからぬとの外聞なるべし。君子より是を見れば仁なく義なし。外聞あしき事なり。富貴の家をば鬼常ににがむといへるも、かやうのたのもし氣なき事にて、人のうらみを得ればなり。先祖の積善の餘慶にて富貴になる事なり。親類はみな先祖の子孫なり。貧賤の者を先すくふべし。取あぐる事ならざる者ならば、常に念頃に音信すべし。貧賤のものは少しの助けにて大に益を得てよろこぶもの也。人感じ鬼神たすく。君子は外聞を思ふ人にあらざれども、外聞是よりよきはなし。

一。學友問。程子云。人安重なる時は學堅固也と。しかれば我等ごとき重からぬ生付にては入德有ま

一。心友問。箕子周に臣たらじとて、又洪範を武王に傳ふる事は何ぞや。　云。洪範は天の禹王にあたへ給へるなり。殷の紂罪窮て獨夫となる。かるがゆへに天又天下をもつて武王にあたふ。洪範は聖主の天下を治むる大法なり。天の天下をあたふる人につたふべし。何ぞ私の遺恨をもつてこれを廢せんや。平氏三種の神器をいだきて海に入しごときの無道をよしといふべきや。天下古今のいたむ所なり。箕子周に臣たらずして朝鮮にいたるとは。周を非とするにあらず。殷の世臣なれば、その身一人の義を立るなり。　問。王訪₂于箕子₁とある時は、武王みづから屈して箕子に就てたづねたまふなり。箕子を召とも、箕子志を屈して至らざらん事をしりたまへばなり。朝鮮に封じて賓とし給ふも、臣たらじのこゝろざしを遂しめたまふなり。是實に忠恕の道なるか。　云。しかり。武王は箕子の志に隨ひて違給はざるも、みづからその道を伸るなり。屈するにあらず。平人よりいはゞ、みづから高ぶるの私心を屈して賢を尊ぶの天理を伸るとやいはん。箕子も獨夫の奴となりて天子に臣たらず。天子を來すも天理を伸るなり。武王も天子と成て獨夫のとらはれ人に禮を厚くし給ふも、みづからの天理を樂しむなり。その實は一なり。

一。心友問。湯桀を放て德に耻るの言あり。臣として君をうつの名は湯の聖德の疵なれば、耻ること有や。　云。しからず。湯の聖德堯舜のごとくならば、桀耻て惡をなすとはなはだしからじ。しからば放にいたるべからず。德堯舜に及ばずして耻るとうすく、惡をなすと甚して天命つき、獨夫となりて天の罰をいたせるは、湯の德に耻る所なり。　問。武王もおなじ事なるに、德に耻

て心を外にする者ある故に、心の學を加へぬれば、道理なきにあらざれども、德のおとろへたるがゆへなり。

一。心友問。獨を愼むとは、獨居の時も人前の如く作法正しくする事にて侍るなり。一たびは張一度は弛すは文武の道と聞侍り。人前と獨居と同じ樣にては、甚だ窮屈にして遂がたかるべし。　云。人前には人前の則あり。獨居には獨居の則あり。何ぞ事を一にせんや。その上獨を愼むは獨知を愼の心なり。古は文法易簡なり。一字を以て二字の心をかねたる例おほし。中と云て庸其中にあり。獨と云て知其中にあり。獨しる所は人前獨居のへだてなし。人前といへども我心の獨おもふ事は、人さらにしる事なし。吾心の獨知る所を愼む時は、外の窮屈なるとなし。思無レ邪、無二自欺一、誠レ意、これみな愼獨の義なり。心上に一念發すれば、善もかならず自知　惡も必自知は知なり。知は心の神明にして本善惡なし。故によく善惡を照す。口に五味なくしてよく五味をわきまへ、目に五色なくしてよく五色をわかち、耳に五聲なくしてよく五音をきくがごとし。このゆへに獨知をもつて主人公としてこれを愼むは、尊二德性一の義なり。それ思は心の官なり。しかれ共天然自然の心より出たる思ならずして人欲の私によつて發する思は邪なり。此兩端を獨知に照して、私欲の思なきを無邪といふ。是また愼獨の意なり。獨知を愼みて不二自欺一時は意誠なり。如レ此なる時は心廣く體胖なり。浩然の氣天地の間にふさがる。万物皆わが身に備れり。天地太虛己れにあらずといふことなし。

ゝる小魚は盆山の水にやしなふべし。鯉魚は出泉の池に放ち、呑舟の大魚は大海の不測にあそぶべし。鯉魚を盆中に入るときは躍りいでゝ生をとげず。呑舟の魚を池に放たば却て螻蟻のために制せられん。故に廣才の人には國家の大難をはらはしめ、天下の大患を解治せしむべし。廣才を小事に用る時は、小人のために妨げられ、小才を大事に用ゆる時は、鼎の足を折のみならず、亂のはしともなるべし。

一。心友問。非禮視聽言動することなかれの義いかゞ。　答へて曰。禮は天理なり。人欲の私きよく盡て天理流行するを、非禮視聽言動せずと云。　問。言と動とは己より發することなればさも侍るべし。視聽は人よりむかふものなり。惡人の朝に不ㇾ立惡人と不ㇾ言のはげしき行なくては、まぬがれがたからむか。　云。鹿を逐者はやまを見ずといへり。鹿に心の專なれば、山をば見ても見ざるがごとし。己が心天理に專なれば、非禮を見聞といへども不ㇾ見不ㇾ聞がごとし。堯舜は天下を有てもあづかりたまはず。況や外より來るものをや。

一。學友問。俗に心學といへば替りたることにて常の學にあらずとおもへり。又心學の心まづ字を新の字とおもへる者もあり。聖人の學は心學なりともいひ日新盛德ともいへば、いづれにても義理はよく通ずるを、あしくいひなし侍り。　云。學ならば學、道ならば道なるべし。儒道といひ心學といひ、上に名をくはふれば病あり。道は天地神明の道なり。大虛天地唐日本共に一貫にして二あらず。學はこれをまなぶのみなり。心を離て學あるべき樣なけれ共、世の學者見所違ひ

は上方の柔なる中より出て、しかも小勢なれども、關東の大勢を挫き、世人みな鬼神の様におもへり。しかれば王代武家終始人のかはりあるにあらず。東西强弱違ふにあらず。そのはじめて質素の風有て人民を愛しつる故に武勇の譽あり。これ仁者はかならず勇あるにあらずや。其終は奢て用たらざれば、人民を愛する事あたはず。後〳〵は習と成て、民をばせめはたり、しへたぐるものとのみ思ひて、一向愛すべきものともしらず。奢りやはらかになり、武勇を失て滅さるゝに至りては手間もいらず。　問。義經正成軍法いづれかまさり侍るや。云。正成も義經にならふといへり。是心を義經に取て時處位に應ぜし人なり。楠の時と今とは世中の時勢大にかはれり。正成の上手をはたらきし跡を似せて、將の器量もなく勝負の利もしらずば、大負をすべし。　問。甲州流越後流信州流などゝ申侍るは如何。　云。三家の中にて將のすぐれたるは景虎なり。功者は信州甲州に有と見えたり。しかれども近代の軍法はせり合の手行なり。小事を知にはよかるべし。義經正成義貞の後は實の合戰はなし。武道の衰ろへたる故なり。　問。何をか今の時處位とせんや。　云。將の器量有て勝負の利をしる人、古今の時變を考へて當るべき處なり。かねていふべからず。

一。朋友問。君子は大受すべくして小受すべからずとは何ぞや。　云。大躰にしたがふものを大人とし、小躰にしたがふを小人とす。君子は大人也。天下國家道有て德を尊ぶときはもちゐらるべし。國家天下道なくて事物の末による時は用らるべからず。才にもまた大小あり。小目の網をく

井の中に遯去あり。これもまた遯尾して災なきものなるべし。晉の淵明は酒に隱れたりといへり。實は酒に溺れず。只一生外見を酒のみの用にたゝずとなりて終れり。遯るゝところなくしてのがるゝものは、おほくは貧賤をかくれ家とす。

一、心友問。古人の語に謀從㆑衆則合㆓天心㆒と云り。世俗の心は流俗の弊後來の習おほし。これに從つては天心に合べしともおぼえず。　云。衆のしたがふ所のものはかならず至當あり。謀といふ時は理もなき流俗の習にしたがふにあらざることあきらかなり。

一。朋友問。仁者は必ず勇あり。勇者は必ずしも仁あらずときく。寔に勇武の譽有て不仁なる者あり。北狄の弓馬を得て死をおそれざるも、人倫にとをき所あり。又仁愛にして勇なき人あり。かならず勇ありときくときは、疑ひなきことあたはず。　云。驕奢なるものは仁心仁聞有て臆病にもなけれ共、終には不仁にながれやすし。且勇をも失ふ者あり。それ日本は仁國也。かるがゆへにいにしへより勇者おほし。日本の弓矢神とあがめ奉る八幡宮は應神天皇なり。この御代には近臣いづれも武勇すぐれたり。しかるにその君臣の子孫たる人々も武おとろへて、事あれば地下に命ぜられしなり。このゆへに平清盛受領の五位より武功をもつて進み、太相國に至り、終に天下の權威を取たり。かくのごとく武偏すぐれたる平氏も、わづかに二十年の間に武勇おとろへて、木曾義仲源義經にたやすく亡ぼされたり。源氏關東より起て京都の平氏を討亡してより後は、北條家に至るまで、關東武者は剛强にして上方武者は柔かなる樣に慢りかろしめたれども、楠正成

に、尊卑違て女を取吉といへるは、男の女に下るは陽の陰に先だつの義なり。親迎の道理なり。君の先だつて賢にくだる時は天下治り、男先だつて夫婦和す。賢人は下に有といへども、臣より先だつて道をもつて上に得らるべき義なし。女は男にしたがふものといへども、男の禮儀をもつて求めざるには、往てしたがふみちなし。咸はいまだ夫婦とならざるの初なり。故に男下女上也。恒はすでに夫婦と成たる故に、男上にして女下也。古は天子といへども賢士を賓とす。賓の初は君先だつて禮をもつてこれをまねく、いまだ臣とせざる也。その才德を見て天位をともにし給ひ、士もまた共に天祿を受る時は、君臣となる也。易の卦爻五を君の位として五の上に九六を置は、賢士を賓とするの象也。蠱の上九曰。不レ事ニ王侯一。高ニ尙其事一。觀の六四云。觀ニ國之光一利レ用レ賓レ于レ王。古は賢德の人あれば人君これを賓とし敬し給ふ故に、士の王朝に仕進するを賓といふといへり。如レ此ならざればともになすことあるにたらず。

一。心友問。遯九五云。嘉遯貞吉也と。九五は君の位なり。遯は君のことにあらず。如何。　云。大舜は天下を有てども與らず。これ遯の至れる也。　問。好遯。君子吉也。小人否。とは何といふことぞや。　云。君子は義を見て遯る。義の遯るべき時は好遯す。伯夷兄弟國を讓て海に遯れ、又君臣の義を行て首陽に飢たる類也。小人は世間むづかしきとて便利によつて遯を好み、あるひは仁愛の仁うすく、人を非に見己に慢じて遯を好むも有。是をもつて小人は否也。　問。道不レ行天下亂世ならば、何國にか遯去るべきや。　云。知をくらまし德をかくし凡人の業をなして、市

は、出て天祿を受べし。故に不二家食一して吉也といへり。吉とは俗の禍福吉凶の吉にはあらず。吉善の義なり。內に積たくはふる所の學術道德をもつて時に施し天下の艱險を救ふは、天下の吉善なり。道躰は其大外なく其小內なし。天地の大なるも道德の中の一物也。かくのごとくなる道理を人の心中にたくはふるは大畜也。聖主賢相の政には、天下みな其利を利とし其樂をたのしめり。故に利と云も利欲の利にあらず。利欲の利は已を利するに心あるが故に吉といふべからず。聖賢の利は物を利するなれば天德なり。聖人の心は四海一家のごとく中國一人のごとし。我身に天下を利するの道德有て時至り進むる人あるは、雨陵のめぐみによりて生ずべきものゝ開發するがごとし。何の心かあらむや。許由子陵は衆人をぬけ出でゆたかに凡心をはなれ清明なる所は、聖人と違ふことなし。許由子陵みづから我をみたる時、朝に立て用らるへき才なき故に、庶人と成て獨り道をたのしまんがために、狂見によりて辭したるものか。たとひ才知器量有とも、狂者は大意を見て高大高明に過たり。堯を以て代官とし、天下を平治せしめ、山水田舍の間にあそぶことと、何の樂みか是にしかんや。人の代官をせじとおもへるか。二子の心此二の內なるべし。　問。䷙天は至大なり。如何してか山中につゝみたくはふるや。　云。道は天よりも大なり。人の身の中におさめかくすは、又山天の象なり。

一。學友問。進て賢をかくさずと聞侍れば、其心に利欲だになくば、禮あらずとも貴人に說べき事なるか。　云。成は男下にして女上なり。男上に女下にしてこそ男女尊卑の禮儀も正しかるべき

ともなく、義と共に從ふは、外の方なる也。

一。心友問。䷪は上六の一陰、位なく權勢なし。九五は剛にして位あり權勢あり。決去にをいて何の危きことかあらむ。しかるに不レ利レ即レ戎、利レ有レ攸レ往と。まことに功利の徒のまはり遠きと云もことはり也。德を知者にあらずば處することあたはじ。　云。しかり。剛にして剛を用ひば、一柔の微なる決去こと易かるべし。しかれども剛にして剛を用るは旣に過たり。寛仁にあらず。故に決去て後治化大ならじ。天地位し萬物育するに至らず。是故に堯舜の神武にして天下の兵を擧て三苗を誅し給ふは、何の危きことかあらん。剛にして剛を用ひば、決去うちほろぼすことやすからむ。しかるに悠々として心服を待給ひ、來服せざるがために軍をかへし、文德を修めて終に來し給へり。兵を以てし力を用ひて服することを欲し給はず。是夬の剛にして柔を決すること健にして悅び決去て和ぐ所也。君子の小人を退去ことかれを斷亡すにあらず。和して導き、敎てその非を改めしむべし。小人の道消する時は、決去ずしてなきがごとし。

一。心友問て云。許由は帝堯の召に從はず。子陵は三公を辭す。古今これを賢なりとす。天下道なき時に隱るゝは常の事なり。帝堯は聖人なり。光武は賢君也。何ぞ召しに應ぜざるや。又世の賢なりとする所は、富貴を辭し山水を樂むの淸心を尊ぶなり。大舜の辭せずして出給ふは何ぞや。聖賢中狂の分とのみ聞て、その理をしらず。　答云。大舜の堯の召に應じて出て天祿を受給ふは、易に所謂大畜不二家食一吉也の義也。道德學術を内に積で、聖王賢君の時にあひ、禮有て召給ふに

一。心友問て云。人いへることあり。大國を治るは小魚を煮るがごとし。いろはざるがよき也。かきまぜとやかくすれば、くだけてあしく、何事もそのまゝにてをけば、無事にてよきを、しゐてよくせんとする故に、かへりて惡事出來る也。「うちまかするに、世こそおさまれ」と云前句に、「よきにのみ、なさんとするや、あしからん」と付たるを、古來名句とする也。おもしろくおもひ侍り。　答云。しかり。小鮮をいろはずして煮るがごとく、政刑のさがしき事なく徳をおさめて、いつともなく人心を正しくし風俗を美しくするは、上知の事也。徳なくてよき事のみ好み行へば、人情にさかり時所位にあはずして、その善事の一倍もあしきことになるもの也。藥を不ㇾ用して日をへぬればをのづからいゆる病に、下手醫者の藥を用ひて大煩となすがごとし。しかれども左樣に一偏にもいはれず。いろはずしてをきて國天下の治まるものならば、それほどやすき事はなし。誰も天下國家をばおさむべし。はやく藥を用ひ灸をすればいゆる病人に、藥をもちゐたるはあしきとてうちすてをき、日をへて病をもれば死するより外のことなし。そのごとく國家天下も亂のきざし惡の源を見てはやく備をもうけ、その源をたちそのきざしを轉ずれば、眞の無事に成て長久なるものなり。夫主將は仁と威とを身におさめて徳とす。故に紀綱ゆるまらず。儉と禮と時を以てうごきて、吝かならず、奢らず。故に人心正しく成て風俗美なり。

一。心友問。敬以直ㇾ内義以方ㇾ外、と見え侍れば、聖人も敬の工夫を用ひ給ひたるか。　云。獨を愼むときは、仰て天に愧ず俯て人に怍ず。これ内の直き也。事物におゐて好むこともなく惡むこ

ずといふ事なし。故に過不及なき也。中也者天下の大本也といへり。中は天地人の根本と云義なり。他にもとむべからず。これにまさりたる中の解はなし。中はうちとよむ。うちは物の主也。禁中をうちと申奉るも此義なり。心をもうちといふ。しかれば中は心の別名也。心といへば空にして手をくだしがたし。心の德をかゝげ出して中と名付給へり。夫中は思ふこともなくすることもなし。寂然不動にして感じて天下の故に通ずるもの也。

一。心友問云。今の世の幼少の子は大方知藝能あるがごとし。むかしはきかざりし秀たる者おほし。しかるに世間の人は次第にをとりゆく事は、こゝろえがたき事にて侍り。答云。しかり。田にうふる稻も、晩稻ほど取實おほし。今時の子供の利根なるは稻の早稻のごとし。おとなに成ほど知惠の取實すくなし。其上平人の利發といふ物は大方鈍なる物也。わらはべの爪くはへして赤面し人前にてものいひかぬるは、知あきらかにして恥の心ある故也。人に存するものは恥心よりよきはなし。恥の心明らかなるものは、學問しては君子の地位にもいたり、たとひ無學にても平生は人がらよく、軍陣にては武勇のはたらき有もの也。むかしのわらはべどもには爪くはへする者おほかりし故に、成人に隨ひて一役の用に立ものありき。今のわらはべは人をめせず、人前にても利發にものいひ立ゐふるまひよし。この故に成人する程用人に選ぶべき人すくなし。人の親たる者德をしらざれば、恥心ある子をばしかりをどして恥心を亡し、恥心なき子をばほめ愛していよく／＼ほこらしむ。賢才は日々におとろへ、驕吝は日々に長ずる所也。かなしむべし。

ぶは名を求むるにはあらざれども、人の名の質ならずや。しかるにかへりてそしらるゝ事は何ぞや。　答云。人のほむるは我を勞する也。そしるは我を安ずる也。我病者にして躰氣乏し。勞せんことかなひがたし。安ずることをあたれり。かるがゆへにそしりは我を助るなり。知てほむると云も愚に德有てしたしまるゝにあらず。氣象のあひかなひたる人ならん。萬人に一人の知人だに我を勞すること甚し。そしる人は我にかはりて我病氣をことはる也。其そしるあまたの人にほめられなば、今までながらへてもあらじ。且德をもそこなはれんか。そしりは愚が過を格し浮氣をしづめ身の養生をなさしむる也。きくことをいとはず。ほむるは愚が過をまし浮氣を生し氣力をへらさしむ。きかんことをねがはず。　問。それはさもあれ。貴老の名をかりて不善をなし、且貴老におほせ申す事おほし。おもひよらざる惡名をとり給ふ事は、道德の疵ともなるべきか。云。尤しらぬ惡をおほせられて名をけがさるゝは、無實の難題也。たとへをとるはをそれあれども、聖人をだに陽虎にまがひたり。大德の人は難も大にして、又はるゝこともすみやかなり。愚がごとき不德の者は、わづかに惡名など樣の難あり。本より凡人の品をまぬかれざる故に、はるゝこともをそし。しかれども我心になきことならば、云と云共預からず。

一。心友問て云。不レ偏不レ倚過不及なきを中といへり。帝堯の執中の心法、かくのごときのみか。答云。不レ偏不レ倚と未發の中をいへり。其未發に當ては、其心至虚にして偏倚する所なし。故に中といふ。無ニ過不及一は已發の中をいへり。此心をもつて万物の變に應ず。往として中にあら

一。或問。たえなんとする家には善人生れ、おとろへんとする國には賢臣出ると申すこと有。いかなるゆへにてはんべるや。　答云。この理あり。天道の仁なり。家のたえなんとするは積惡のゆへなり。末にあたりて善人の生るゝ事は、道德を修めて其積惡を消し、子孫を再興せしめんとの命なり。しかるに善は善なれ共、惡に勝べき道德なければ、つゐにたゆるものなり。又衰へんとする國に賢臣のあげらるゝ事は、運命すでにあやうききざし有。これによつて賢を思ふの心あり。天道其おとろへをひるがへさしめんがために賢才をあたへ給へども、たゞに善をえらび善を令したるばかりにて、天命に應ずべき道德を立ざる故に、終に亡びるに至るもの也。これを大學にも賢を見てもあぐることあたはず、あぐるも用ることあたはずといへり。

一。朋友云。我國に先生の名を聞て道に志し、來りてしたがひ學びむことを願ふ者あり。いかゞ申つかはすべきや。　答云。古歌に「すめばまた、うき世なりけり、よそながら、おもひしまゝの、山里もがな。」その人の心に、そこに行て學問せば、とやあらむかくやあらんとおもしろかるべき事を心にむかへてしたはるゝなるべし。來りて見給はゞ、一としてそのごとくなる事はあらじ。學術もその心に好まるゝ所は、いかやうのすぢなるをもしらず。愚が學たゞ今のごとくならば、人にもしられじ。むかしあやまりて名をえたり。そのひがことを人は好む者有。人道は珍しきことなし。必ず來學をとゞめらるべし。

一。心友問。貴老の御事を知てほむる人はすくなく、不ㇾ知してそしる人はおほし。聖人の道を學

の獨の字の下に知の字を付て見給へ。古は言語易簡なり。獨と云てをのづから獨知の心あり。ひとりとよめば人前の事はいふに及ばざれ共、身のひとりと心得侍れは、愼みの格法に成て、跼屈にして心は主なきがごとし。獨とよみて知のこゝろをふくむべし。

一。朋友問。君と親とはいづれか重き。　答。時中を重しとす。君子は主と親との輕重をいはず。たとへば君にしたがつて軍陣におもむかんに、父母妻子を敵にとらはれたりとて、日比の君臣の義を變じて敵の臣とは成べからず。此時は父母妻子一族よりも君一人を重しといはんか。さにはあらず。たゞ義を重しとする也。父母の本心も又亡るを安じて生るを恥とす。父母の形は亡といへども性命亡びず。又父たる者不慮の難にあひてころされんとせば、たとひ子たる者重位重祿をうけて君につかふるとも、すてゝ父を引つれのがれかくるべし。此時は君よりも親を重しといはんか。さにはあらず。仁を重しとするなり。たゞ君親のみしかるにあらず。五常の性といへども仁を主として義禮智信を賓とする事有。信を主として仁義禮智を賓とすることあり。孝經には孝を主として敎たまへば、仁義も賓となりぬ。論語には仁を主としたまへば、孝弟は賓となりぬ。官祿をすてゝ親をたすくる時にあたつて、親を助くるは君の本心の悅なり。家をかへりみずして君につかふまつるべき時に當て君に事るは、親の本心の悅なり。一方悅て一方うらみばこそ輕重ともいふべけれ。道にしたがふ時は雙方の悅なり。まよひの君とまよひの親は酒氣の常の心を失ふがごとし。論ずるにたらず。

の有也。今の有躰をなしへおこなふがゆへなり。尤自然の妙なきにはあらず。無と中道をうらとせる也。老子は無を本とし有中をうらとせり。釋氏は有とゝき無とゝき中道と説、又中にもあらずと說は、畢竟中を本として無有をうらとせりと。いかゞ。　曰。儒は尤今日形色の上に有といへども、形色の主たる者は無なり。頑無にはあらず。形色なきの道也。其無は神明不測にして、其大外なく其小內なし。東西南北上下中央なし。虛靈不昧なるもの也。是道躰也。故に中といふ。形色の主は無なり。無の德は中なり。物あれば則あり。形色は天性也。惟聖人にして可ㇾ踐ㇾ形。

又問云。或人のいへるには、三千大千世界と云て、此天地の外無量の世界あり。わづかに天地人をもつて道を立て敎をなす。狹きに似たり。　云。これいまだ形色の見を離れず。物の大を以て目をおどろかすもの也。道に大小なし。天地の外天地の內、異なる事なし。且大虛と云は、三千大千世界といふよりも大なり。大虛と云も道躰也。道の外大虛あるにあらず。

一。心友問云。君子と小人とにむかふ時心と行と二つになり、人前獨居又內外有。これを一にせんとすれば心すくみ氣欝するがごとし。又親しき友といへども隔心をなす樣なり。隔心あれば善を告ても聞入侍らず。和して一躰のおもひをなせば、我をもいさめ人もきゝいれ侍り。しかれども我が心におゐて流するがごとく取しめなきがごとし。いかゞ受用ㇾ侍るべきや。

答云。君子と小人と人前と獨居との境界を立て云事も、時により事により人によりて有やうあれ共、受用の端的にはあらず。其四の境界をたてず、たゞ自己一念獨知に向て愼み給ふべし。大學

人の後たる者を恥しめられし事は如何。　曰。これ聖賢のしはざにあらじ。孟子曰。仲尼は甚しき事をし給はざる人なりと。道理は道理にても、大場にて人に恥辱をあたふる様なる不仁なる事は、今日本にだに少し心ある者はせず。況や孔門にゐてをや。家語には後人の附會のこと有。こと〴〵く信ずべからず。當世道だてする學者は、凡情の勝心をもまぬかれず。利欲の根をだにたゝず。不仁をもつて力量にまがひ、古人の跡を見て變通をしらず。得かたには禮法を守り、又得かたには美風をみだる。常人の君子の大義をとらざることをそしり、凡女には貞女の節を守らしめむとす。羊に虎の皮をきするを以て道をおこさんとす。これに遠き時はをそれ、これに近き時はあなどる。大道の罪人なり。たとひ虎の質有とも、羊の皮を着て群をみだるべからず。たとひ光有とも、やはらぎて塵におなじかるべし。これに遠ければ望むこと有。これに近ければ恥ること有。君子の學は忠信を主とす。文は時に中すべし。

一。朋友問て云。江西の學によつて天下皆道の行はると云事をしれり。儒佛共に目を付加へたるは大なる功也。　答て云。尤少しは益もあるべけれ共、害もまたおほし。しかと經傳をも辨へず、道の大意をもしらで、管見を是とし、異見を立て、聖學といひ、愚人をみちびく者出來ぬ。江西以前には此弊なかりし也。天下の人目をさましたりといへども、いまだ德を好むの人を見ず。粗學の自滿のついえは一二にあらず。

一。學者問て云く。或人のいへるには、有無の見の有にはあらず。道躰に有無中道あり。儒は道躰

先君の其國に養ひをきたる者は、一人として退去ことあたはず。用に立つも不レ立もをしなへて治養ふは、國郡の主の任なり。國郡主なければ相亂て生をたもたざるがゆへなり。今家も亦しかり。子孫なくしてたえたるは、誰にても兄弟おほき者のいまだいゑなく其役儀をつとむべき者を擇みて位祿をあたへ、其家内の男女をやしなはしむべし。諸侯と成て其國の位祿をうくれば、其國の老若を養ふがごとし。其者同姓ならば、すぐに祭祀をつぐべし。他姓ならば徃々同姓を求めて我後の役者とせむ。同姓其器なくば我力を以て祭祀をたゝざるはかり事をなすべし。源平藤橘等の姓はひろし。くはしく尋ねば同姓のなき事あらじ。同姓を養子とするは古の法也。周人の百世といへども婚姻不通の法も、同姓の親みをひろめて人の後をたゝじとなり。もし同姓なくば他姓といふとも可なり。人は皆天地の孫なり。同姓にあらざるはなし。しばらく末をわかつものは、人倫を明かにし禮を尊て禽獸をさる事遠からしめんと也。其上大節を守るは君子の義なり。小節を守るは小人の事也。小人は小節を取て禽獸に遠ざかり、君子は大節を守て小人にこと也。政は小人の人情風俗を本とす。俄にして人情を憂しむる時は大道とげず。故に聖人も三年にして成ことあらむ、世にして仁あらむ、とのたまへり。養子入聟等は、今日本の風俗と成て人情の安ずる處なり。君子たる者は人の非をそしらず、天をもつてひとり立べし。天下の風俗と習とは下にある者の任に非ず。たとひ明君上に出給ふ共、俄に法を立給ふべからず。德化のひろまるにしたがつて漸をもつてうつりかはるべし。　問。子路孔子の命によつて射をみる者を退けられし時も、

かち强てやまず。生々の流行に合してをくれざるは敬なり。夫孝天之經也。地之義也。人之行也。經義行は一貫也。其やまざる所の景象を敬と云。即本躰即工夫なり。 問。手を下す所はいかゝ。云。自反愼獨これ敬の手を下す工夫なり。常人は晦によつて敬をしらず。明かなれば自然に敬有。深淵に臨み薄氷を履む時、身の落入道理明らかなる故に必す愼む也。多欲利害の天眞をそこなひ、長生不死の眞身をおとしいるゝこと、深淵薄氷に過たり。視聽言動思ともに天理にしたがふ時は、心廣く躰胖なり。人欲に陷る時は、心いたみ身くるしめり。學而時習レ之。天理人欲の苦樂をよくおぼえ、戒愼恐懼を以て心の生意を發出し、天眞の悅を得を、明らかなるより誠有といふ。有事無事共に存養省察して放心せず。これを敬と云。何ぞ氣象に泥まん。何ぞ陽氣の健なるをたのまん。間思雜慮は意必固我の欲より生じ、頑空は其はじめ物を逐の念より發て、その跡茫然たり。存養省察の功疎かにて、念の起る所を不レ知。既に物を逐放心して後におぼゆ。相火燃て滅がたく空々の本躰に歸りがたし。如レ此ものを敬せずといふ也。敬を立むとおもはゝ、よく惑を辨へてみづから明らかにして、心法精して念慮の微をさとるに有。

一、心友問て云。當世學者の論に、養子といふことはなき義也といへり。しかればとてたちまち家たえ家内の者どもを流浪させんも不便なる事也。これにつきても世中の人學問をきらへるものおほし。聖人の法といへども心におゐてしのびざるがごとし。 答云。大君の國郡を封じ給ふもおなじ理也。一人をもつて國郡を治めしむ。國郡を以て一人にあたへ其身をたのましむるにあらず。

集義和書卷第十一

義論之四

一。心友問て云。敬を立るの受用手に不ㇾ入が故に、やゝもすれば離れやすし。敬存する時は心氣健なるがごとし。しかれ共或時は一物あるが如く、心氣すくみたるがごとし。或は頑空となり或は間思雜慮あり。皆これを放心といふべきか。おぼゆることをそくして歸る事すみやかならず。

答云。敬は天地人三極の要道なり。天の流行してやまず日月のかはる〴〵明らかに寒暑來往して物を生ずる事間斷なき處は敬なり。地の山澤を通じて流水不ㇾ舍風雷雲雨を起して物をなすことをこたらざる物は敬なり。天地は無欲也。かるがゆへに敬やむ時なし。瞬の程なり共敬なくば天地も崩れつべし。是故に敬は本然固有の德なり。外より附たるものにあらず。堯の德を稱美して欽明文思といふ。欽は敬なり。易云。天行健。君子以自强不ㇾ息。敬の受用これより深切なるはなし。敬は心の本躰にあり。性の德なり。故に聖人は無心にして敬存せり。誠より明らかなるの性也。この故に欽明と云。おもひみなあやありて間思雜慮なし。無事の時は空々として幽深玄遠なり。昭々として神明不測也。寐る時は靜專也。よくおこりたる火を灰中に埋むがごとく、冬陽氣を地中に包み蓄るがごとし。常人の寢て尸のごとくなることなし。晦に嚮て入て宴息する也。故に時として敬せずといふ事なし。天地の大德を生と云。人の本然を仁と云。天地に法りてみづ

るに、聰明の質は篤行に不足也、篤實の質は才知に不足也。顔子閔子は二ながらかねたる氣質なり。其上聖學あれば大賢人なり。知もくらく行もよからずして又學を不レ知者を愚不肖と云也。此愚不肖も聖主賢君の德化を蒙れば皆善人と成者也。是を民をばよらしむべししらしむることあたはずといふなり。

集義和書卷第十終

過ろをおさゆるは誠を立る也。自然に應じて作爲なきなり。是法のはじめ也。後世に生れて情うすき者、古の人はおさへてだに三年の喪ありしに、せめてつとめて成とも三年には及ばでかなはざる義也と思ひて、くはだてなしたり。中古のうすきは今のあつきにもまされり。世中事すくなく、欲にして情うすし。孔子の時にも平人に三年の喪をつとむる者はまれなりき。孔門にも七十二賢の下には多は有べからず。三年の喪に朝に祥祭の禮を行て夕に歌うたひし者を子路の笑はれしを、孔子聞召て由が人を責むることやまず、三年の喪は久しとの給へり。世中のならはし人情のくだりたる勢を見給ひて、餘義なき所を知給へばなり。成がたきことをつとめしむるを以て聖作のはじめとせば、是僞を敎る也。何ぞ天に繼て極を立給ひ忠質を本とし禮は後なるかの主意ならんや。今の人情精力にては、日本王代の服期の法可ならんか。それも少し道行はれずしては立がたかるべし。今の俗にまし加へん事は、人々の氣質と學力とにあるべし。たとひ道行はるゝとも、もろこしの法のごとくには成べからず。日本の水土によるの制あるべきか。　問。閔子の三年の喪終ても哀情やまざるを君子なるかなとの給ひしは尤なり。子夏のやう〳〵つとめてたのしめるをも君子なるかなとありしとを子貢のうたがひとはれしに、孔聖いこたへ給ひしは大方通じ侍れ共、上下淺深の位ははるかなるやうにおぼへ侍り。　云。閔子は氣質美にして又學力ふかし。つとめずしてなし給へる也。子夏は天質をよばず、學力ばかりを以てつとめていたれり。しからば閔子の質あらば閔子には及ことあらん。子夏の質にして子夏には及びがたからん。世中の人をみ

體に至れり。綿々とながくつゞけるのみ也。泥塑人とも云べし。槁木死灰と云とも害あらじ。異學の有といふも眞の有にあらず、無と云も眞の無にあらざるものあり。義理のみにして欲なき者は生れぬ先も同じ。欲のみ知て義理をしらざる者は禽獸なり。欲と云は其形の心の生樂なり。欲の義にしたがつてうごくを道と云。琵琶箏を以たとへむ。其形は有なり。其虛中は無なり。糸をかけて用をなすは道なり。天地万物有無不ﾚ離して道存せり。故に有形はみな無に歸す。無中の神を性命と云。性命にしたがふを道と云。有無は自然の形躰也。君子はたゞに無といはず。無形無色無聲無臭とはいふべし。

一。心友問。書簡に先王の制し給ふ喪服の數は過るをおさへて立給ひし法也とある所心得がたく侍り。むかし閔子三年の喪をわりて孔子に見へられしに、夫子琴をさづけ給へば、少しらべて聲をなすとあたはず。涙ををさへて申されけるは、哀情いまだつきざれ共先王の禮あればあへてすごさずといひてしりぞきけり。子夏三年の喪終て孔子に見られしに、夫子琴を授け給へば、しらべて聲を發してたのしめり。哀情はやくつきたれ共先王の禮あればつとめて及たりといひて退けり。かくのごとくなれば孔聖も或はおさへ給ひき。過るをおさへてとばかりは中がたかるべきか。答曰。愚は上古のはじまりをいひし也。それ先王の天に繼て極を立給ふと、誠を本とし給ふべきか。つとめを本とし給ふべきか。自然にしたがひ給ふべきか。制作を先にし給ふべきか。たゞ誠を本とし給ふべし。誠を本として自然に應じ、時にしたがつてつとめをなし、制作おはしますべし。

一。心友問。隨分の悟道修行の僧といへども、佛法をそしれば忿戾の氣あらはれ、かたのごとくの心學者といへども、儒をそしれば不平の色見へ侍り。をかせどもはからざるの心位は高きことにて侍り。　云。何道何學といひて、又其者にかたぎあり。かたぎのあるは大道にあらず。佛學のことはしらず。聖學は人道也。一人の私すべきにあらず。そしる人はみづから己をそしる也。何ぞ道に私して不平の氣あらんや。己が非をそしらば省察すべし。道をそしらば默すべし。默べくして默せざるは其心の正にあらず。君子は己に益なく人に益なき言は發せず。

一。心友問。書をよまざる者も、志あらば善人までには至べしと承はれり。年より侍れば今より文學すべきやうもなし。殘念なる事也。　曰。壯年なる人の善信美大聖神に志ざゝず、これにてたれりとせんは、至誠無息の天眞にあらず。年老たる人の殘多と云も亦あやまり也。人の人たる道を知て神人死生疑ひなきは、大なる悅ならずや。是をあしたに道を聞て夕に死すとも可也といへり。是より後一日も進み給はんは幸なり。貴殿もすでに善人の數也。信美の位に至らずとも、不息の生存せば何の恨むる事かあらん。

一。心友問。異端には空と云無と云。聖學はたゞ實のみか。　答。空則實なり。形色あるものは常なし。常なき物は眞の實にあらず。形色なきものは常なり。常なるものを實といふ。異學はいまだ無をきはめえず。聖學は無を盡したるものなり。上天のことは聲もなく臭もなし。至れり。是故に好人は心靜にして色見へず。福來ても甚よろこびず。禍來ても甚憂ず。呼吸の息いたゞきより

の丶すぐれたるはよし。かわりたるはあし丶。今は人々何にてもかはりたる事のみ好み侍るゆへに、人にも万物にもかはりたるもの多し。かはりたるものは天下國家の害になるばかり也。人心は靈なるもの故に、人心に好むとは今までなき物も生ずるなり。むかしは椿もひとへの紅白二色ならではなかりしに、人の好みもてあつかひてより百花も出來たり。近年又五月つ丶じを好めば、色々の花出來ぬ。人道に德を好みなば、善人賢者餘多出來なん。貴殿のかはりものその給ふは、古のすぐれたる人の事なるべし。

一。朋友問。人のにくむ者は命ながく、人のおしむ者は命みじかきとは何ぞや。　曰。よき人にはあかざる故に、長命なる者あれ共しらず。たま〱短命なる人あればおしく思へり。あしき者にはあく故に、短命なる者あれどもしらず。たま〱長命なればうとみて心にか丶る也。又好人は神氣靈なり。靈なる人は病者にも成やすく、命みじかき理もあり。靈草名木の植がたきがごとし。惡人は神氣不靈なり。不靈なる者は無病にもあり、命ながき理もあり。名もなき雜木雜草はすて丶も生長しやすし。質しぶときが故なり。惡をなせども、いまだ惡人の地位に入はまらずしてなせは、名も立やすく身も亡やすし。惡人の地位に入きつてみづからも恥ざる者は、大方の惡行ありても人しらず。公儀の大法をだにおかさゞれは、亂行のみにても一生をくるもの也。如此者には神罰もおそし。利根なる人には神罰もはやし。內虛なるものはひゞきはやくして鳴とすみやか也。內みてる者はたゝきてもひゞかざるがごとし。吉凶の應も亦かくのごとし。

さば、上達の功もしるしあるべきか。　答云。聖賢の學いとまありて後修ることをきかず。たとひ初めいとまある身にて學たりとも、出で仕て學所を試み行はんとこそおもふべきに、官祿を去退て受用すべきとは何事ぞや。遊民をねがふか。今の學者の風をきけば、會合をしげくして議論を好み、氣方のあひたる人々と打寄て、晝夜となくあそぶを以て學問の事とす。主人なくて如ㇾ此ならば彌安樂ならんとおもへり。此人々ねがひをとげて一二變せば、心身共に異端と成者あらん。或は壯年或は無病の者は、事業なくして居がたし。或は老人或は病者なれば、妻子のあたりならでは居がたし。近比江州に士民有。富有にして田地多し。しかるに氏筋なきことを憂て、名ある地士に名字をもらひ、村中を招きよせ、其由を披露せり。今までは朝夕に鋤鍬を取て田畠に出、やどにては縄俵までも手かけ、色々にいとまなかりしに、士に成てはかゝる賤しきわざをばせざるなりと思ひ、座にあがり半日ばかり默然としており、大あくびして云けるは、扨て成まじきものを士に成たり。朦々たん〳〵として士はあしきもの也といへり。我は今の學者の便利を好み、志をとげて後此田夫の悔あらんことをなげく也。年わかき人の用もなき奉公せんよりは、退て氣力ある間に、文武の道藝にも達せんなどおもへるは、又さもあるべき事なり。古の八歳より三十歳まで道藝にのみかゝり居たる風にもかよふべきか。佛者といへども學問修行のなすべきわざあれば、一日も身のやすきことはなし。况や人道においてをや。

一○朋友問。むかしはかはりたる人有しときく。今はなきことは何ぞや。　云。人も万物も常なるも

類知音みな離れて、同志とのみ晝夜の會をなせり。わきより見て徒黨と云とも、いひわけしがたからん。其年中の所作を見れば、武士の家に生れながら武藝をもつとめず、弓馬合戰の道の心がけもなし。先以君に不忠なり。一門したしまず。朋友信あらず。父の嫌へる所至極なり。貴殿には道理なく親父には道理ありて勘當ならば、親にも不孝なり。何をもつてか人倫とし、何を以てか聖學とせん。後の異見は棄恩入無爲、眞實報恩者に似たり。名は聖學にして實は異學なり。異學は人倫を離れて別にたてたる法なり。人道をひくしとし聖人を非としたるものなれば、各別のとなり。人道に居て聖學をする者の實を異學に合する事は、似て非なるものなり。聖門の罪人ならずや。一向に五倫を離れ五等を出たる者ならば、貴殿などの行も可ならんか。五倫に居て五典十義を學び、武士にして五等を行はんとならば、すみやかに虛をすてゝ實をとり父命にしたがつて會合議論をやめ、武藝をつとめて家業にうとからぬやうにし給へ。學文の名を去て作法正しくは、親類知音もみな貴殿に化し給はん。親父も初て學術の益を見知給ふべし。宿にて一人書を見給ふばかりは、誰かとがむる人あらん。親類知音の交もみな問學會合の座と成べし。其間暇をもつて文を學び、文をもつて友を會し給はゞ、親父もさまたげ給はじ。學友も多は武士なれば、共に武藝を學び、武藝の間に議論講明し給へ。武士の所作をすて五倫の親を離れて年月を空しくし給はゞ可ならんや。他人は嘲り笑べし。父の淺からぬ慈愛なればこそ勘當し給ふなるべし。

一○心友問て云。いとまなくしては心術の受用すゝみがたし。祿を辭し官を去て靜に成て志をはげま

德明かなる時は百戒千愼用べき所なし。たゞ天然無心の敬のみ存して暫くもはなるべからず。

一。學者問て云。父なる者學術を大に嫌ひ侍り。一人の友の云。父の心にさかふはひがとなり。學問も孝弟を行はむがためなれば、父にそむきて學問すべき樣なし。心に義不義の道理だに明かならば、外學問によるとよらざるとは、時の宜にしたがふべし。學友の會に出るとなかれと。又一人の友のいへるは、父の學術をきらへるは愚痴なり。性命の父母につかふるを大孝ときく。たとひ父命にさかふとも無二是非一となり。道を學て好人と成より大なる孝はあるべからず。たとひ父は勘當するとも、我に非義なきうへはくるしからざることなり。人と生れて此時節をむなしく過さん事はあさましき事なりと。此兩義にまどひ侍り。十か六は後の義を耳よりに思ひ侍れども、何とやらんねざめにはこゝろよからぬ折々も侍り。答曰。我は始の義にしたがひ侍らん。大舜の性命の父母につかへ給ひて父母の心にかなひ給はぬといふとは、父母大惡人にして惡をすればなり。今貴殿の親父には惡人の名なし。其人がら平人なり。貴殿の實を見に、學問のかざりをのぞきて見れば、實の人がら平人なり、その上親父には人情時變の知識あり。貴殿には此知識なし。貴殿は學術を以て親にまされりと思ひ給ふべけれど、學術にをいても害あるとは見れども、益あるとを見ず。尤小人の不作法惡事をなすにくらべては、益ありともいふべきか。君子の學は心と行と二あらず。心正しければ行正し。心和すれば行もやはらげり。貴殿の心術は心と行と二になるがごとし。學友の交には和あれども、世間の交には和なし。右のしたしきもうとくなれり。親

此妄念去とも、跡より來て退治成がたし。　答云。温和慈愛恭敬惺々も亦氣象なり。發して節にあたる時は和といふべし。此八字の名付べき所もなき大本を中と云。おもふともなく爲ともなく、寂然不動にして感じて通ずるものなり。先學の此八字を下すとは、初學の受用すべき樣を不ㇾ知者のためにしばらくいへるなり。其氣象をとめて本心とせば、かげをとめて形とするなり。又伏犧氏より孔孟に至ても、靜坐をいへることをきかず。君子は有事無事共に靜ならざる時なし。心無欲なるが故に常に靜なり。靜坐すべきの心なくして時ありて坐することあり。心ありて靜坐するは自然の無爲にあらず。先學の浮氣躁念の者の爲にしばらく靜坐をいへることもありしなり。主意をしらでなべて用るならば、病なき者に藥をあたへて病を發するがごとき事あらん。間思雜慮を去とは主意にありて工夫にあらず。今の學者の主をたてゝ去むとするは、其主と思ふも眞の主にあらず。氣によつて作せるなり。闇夜に狐狸をかり退けんとて松明をとぼすごとし。狐狸はくらきを味方とすれば追跡より來れり。間思雜慮もまたかくのごとし。たゞ眞の主意不ㇾ立心裏に小人の根あるが故に、飯上の蠅をおふに似たり。小人の根は間思雜慮をわかし出すの泉源なり。天理人欲幷不ㇾ立。忠信を主とし天理存するの主意たらば、小人の根去て天根かたかるべし。しからば間思雜慮何ぞ憂にたらんや。假令暫く來るとも、わらはべの時の遊びを夢みるがごとし。心にとまらざるのかげなれば、工夫を用ひずといへどもとげず。退治せんとおもはずとも心源を澄しをるべし。たとへば太陽東に出給へば、狐狸かくれ失て跡なきがごとし。明德は心の太陽なり。明

の勤息をあやまるのみならず。晝は常の飲食あり。夜は不時の飲食あり。人の産をやぶるに至るべし。人の産をやぶる時は、くるしむ者數をしらず。つゐには民の迷惑と成ぬ。下男下女等には臨時の食をもあたへざれば、學者の下人と成ては無學者の者よりも苦べし。佛氏の徒五倫を離れ五等を出て學にのみかゝり居者は、それを常とすれば各別の事也。五倫に居て五等を行ものは各勤あり。晝は動て夜は休むべし。天下の敎なき事久し。晩に驚て道を尋れば、古には准がたし。先學につきて惑をわきまへ心術を求べし。しかるとも朝飯後日中晩炊の後、或は夜ならば春夏、冬は初昏まで秋は四ッ時までもくるしかるまじきか。毎日毎夜と云とはあるべからず。きける所をば是を習ひ是を行べし。我近頃會のしげくして益なき事をおぼゆる故に、文才ある人には書をよましむ。文才なき人には書簡議論の集をあたへ、惑をわきまへ心法に本づくの便とす。其に折々の會は益あるべし。

一。學者の云。先日我友格致の心法をきく、甚親切なりと。是故に來たり。答云。先日愚か心法の受用格致に發したるならん。今日は吾心空々たり。いはむ所を不﹂知。人のたゝくに應じ我心の時により感ずる所異なるとあり。或は至善の語によつて發する時もあり。愼獨の義に發する時もあり。皆自然なり。今作爲していはゞ親切の請あるべからず。記憶の學にあらざれば定ていはん所をおぼへず。

一。學者問て云。靜坐しても事をなしても、間思雜慮多して温和慈愛恭敬惺々の本心存しがたし。

くるしからず。　問。神明の罰利生と中事は、皆成道理おわしますや。　云。たしかなる事にて侍り。然れども正神の罰利生と邪神の罰利生とのかわり有。神明の德は不測なり。故に約束のごとく目に見ゆる事はなし。伊勢太神宮は靈神にておはします故に、人々の心におぼゆる利生おはしますとなれば、かくのごとく諸人參り侍るとなれども、これぞあらたなる事とて、約束のやうに目に見ゆる事はなし。又なきにもあらざれども、正神の奇特には跡なし。天道の感應も又かくのごとし。孔子匡と云所にて人たがへにて殺されんとし給ひし時、大風起て取まはしたるものどもを吹たをしたりしかば、驚きてよく見ければ、心かくる者にてはなし。其時匡の者ども辭して退來り。是天道の助なり。又陳蔡兩國の間に圍れ給ひて七日食をたち給ひぬ。此時は米もふらず。凡人の神の神たる理をしらざる者は、此時にも米やふらんとおもふべし。ふらざる所がまとの天道神明の理なり。異端の神通力はかやうの時にも米をふらするごときおほし。多は方便說なり。もしありても邪神の幻術なり。正神の常にはあらず。

一。學者有、問て云。我國の同志夜な〳〵會をなして靜坐し論議す。益を得ると不可過之。　答曰。君子は無欲を以て靜とす。行住坐臥共に靜坐なり。何ぞ別に靜と云ものをなさんや。心思義理を專にする時はいふ事皆議論なり。何ぞ別に議論と云ものを作らんや。其上夜な〳〵の會合には、其亭主の家内の者共の勞するのみならず、客の家内の者も亦主人の歸を待て不寢。夏は蚊虫にくらはれ、冬は寒氣にいたむ。十人よれは十家の者を苦勞せしむ。凡男女百人の難儀也。陰陽晝夜

は感應篇なり。愛を以てしばらく用られたり。紙捻して一日の過をむすび、善をなしたることもありき。皆細工初にて、事はよからざりしかども、志はよかりしかば、悔べからす。されど人倫におゐて如レ此の事あるべからず。志は殊勝なれども異端の流にまがふ故に、我は不レ用なり。故に三經の初に威儀有しをも、これをけづりたり。聖賢の神を祭祀すること、義あり禮有。

一。心友問。敬二鬼神一而遠レ之とは何と云ことぞ。　答曰。鬼神の德を知ときは敬禮の心厚し。身の潔齋心の純一よくとゝのほらざればつかふまつることかなはず。其上神は非禮をうけず。義禮を待て祭祀すべし。又正直の心眞實の情有て後禱るべし。故に心ありて遠ざくるにはあらず。鬼神の鬼神たる所をしる者は、誠敬の至てをのづから遠ざかるなり。遠ざかると云て一向につかへざるにはあらず。凡人は鬼神の名をのみ知て德を不レ知。是故に身の盛服心の潔齋をもとゝのへずして、みだりになれ近付ものなり。　問。其鬼にあらずして祭るは諂ふなりとは何といふことぞ。　云。義もなくてみだりに勸請の宮社多は、皆其鬼にあらざるなり。眞實正直の心より神明の德を尊びしたひ奉るにてはなく、欲心僞巧の者ども神明の奇怪をいひてみだりに取たてたる所へまいりて福を祈るは、皆諂るなり。　問。庶人は其親ならでは祭らずと承るに、伊勢參宮し其外至尊の神々へ參侍ることはいかゝ。　云。天をば天子ならでは祭給はず。然れどももろこしにても平人の天にいのりて其感ありしことあり。祭ことは其人ならでは成がたきことなり。或は德をしたひて參り、或は親の爲君のためなどにて誠のこゝろより禱ると云ことは、祭とはちがひたることなれば、誰にても

はいかゝ。　答云。天をもうらみず人をもとがめざるものは、富貴貧賤悦樂憂患、すべて人生の順逆みな命有。己にあらずといふことなし。是故に其位に素して行ふ。其外を願はず。みづからかへりみ獨を愼むのみなり。詩はうらみつべしとは、和光同塵の心を以て奥よりはしへ出たるがごとし。人は人と友なふべし。禽獸木石と友たるべからず。うらみずとがめずとて、見所をたて心をはげしくする時は、和を失へり。衆人愛敬の德によつて詩を作り歌をよむ。うらむべきことをうらみ風すべきことを風す。たゞ言葉にていへば、事がましく和をさまたぐることあり。詩歌にのぶれば、いふ者罪なくきく者戒むるにたれるの德あり。高明獨立の地位あれども、くだつて俗に同じくす。清淨明白の心思をやはらげて世と共に進退す。とがむれどもいからず。うらむれ共もとらず。おさなき子を愛しては、わらはべの言をなすがごとし。是を奥よりはしへ出て詩を作り歌をよむと云。凡人のうらみにことなり。無心温和の至は、たゞにうらむるも親みとなるべし。作てなすにあらず。心は神明不測なり。所にしたがつて變化す。自然の妙なり。

一。朋友問て云。江西の學者感應篇をよみ、又誦經の威儀を勤めたることときく。世人是を笑ふ者あり。まとなるか。　答云。まとなり。細工のしならひにはけづりそこないおほく、馬の乘習には度々落るがごとし。聖賢傳受の心法の師なくて、中江氏初てさま〲に心をねりて試られき。心法の受用にたよりあるべきことは、まづ取て受用してたすけとせり。ふたつのこと全くよしとはおもはれざりしかど、志のきどくなる所あるは誦經の威儀なり。凡習の過惡をこまかに記したるもの

も、心の天理は天下一貫なり。己が好む所の義理に人も好み、悪む所の不義は人もにくむが故なり。中心を忠とす。中は天下の大本也。天理自然の眞を中と云。如心を恕とす。天理自然の眞心の如く受用して違はざるを云。故に天理一源の眞を推て人に及す時は、中國本朝といへども違ことなし。後來の習心私心私欲を以て交ときは、兄弟といへども墻に鬩ぐの憂あり。此ゆへに能近く譬を取て忠恕の道を受用する時は、仁の方是より切なるはなし。

一。心友問。攻ニ乎異端一。斯害也已。孔聖の時はまだ佛家の學者なし。何をか異端との給へるや。

答云。六藝も亦異端なり。藝にあそぶ時はよし。一藝に專よる時は害有。一藝といへども道のおもかげなきことはあらず。道德をおさめて藝に遊ぶ者は君子なり。大道をしらで藝によつて道を見者は、是を至極とおもへり。聖賢傳受の心法を聞ても、我道の外にあらずとおもふなり。追レ術者以ニ小道一自溺といへり。外にむかひ空をわしりて心裡に入ことなし。いづれの藝も上手に至ては道の一端に合同せずと云ことなければなり。小人の藝者にしては可なり。士君子の事にしては大に害あり。文學に達して經傳の上にをゐて道を見者も亦同じ。夫大道は五典十義を明かにし、心を正し身を修め、五等の人倫の外に出ざるものなり。佛者は五倫を離れ、道者は五等を出たり。いづれも道のおもかげをばいへり。是故に是を異端といふ。孔孟以後の儒者と云ものも又異端多し。五等の外に出たるがごとし。

一。心友問。君子は天をもうらみず人をもとがめずといへり。然るに又詩はうらみつべしといへる

からず。只主意のむかふ所異なるを以て君子といひ小人といふ。外に向て人の見聞する所のみを愼み內心に恥ざるを離ると云。則凡夫なり。君子は主意とする所內に有。天地神明を師友として、人の見聞及ばさる地一念獨知の所におひて戒懼す。是を愼獨と云。己が心に恥てひとりしる所を愼みなば、いづれの時にか不善をなし不義をなさんや。義と共に隨て好惡の欲なき時は天理常に存す。敬是より大なるはなし。只敬は一のみ。外にむかひ內にむかふの別有。君子小人の別るゝ所なり。

一。心友問。夫仁者、己欲㆑立而立㆑人己欲㆑達而達㆑人とは何といふとぞや。　云。仁者は己あるとなし。凡夫の立身と云は己一人の爲にして人の害あるとを察せず。己か欲心を達するのみなり。己ある事を知て人あるとをしらず。この故に幸を得ても民望を失へり。君子は万物一躰道器一貫の身を立道を達す。故に時に逢て志を得時は兼て天下をよくす。時に不㆑逢して志を得ざる時は獨其身をよくす。然れども人を立人を達するの道德は渾然として備れり。それ國天下の困窮するとは君子先困窮して達せざればなり。　問。能近取㆑譬とは如何。　曰。中庸曰。子曰。道不㆑遠㆑人。人之爲㆑道而遠㆑人。不㆑可㆓以爲㆒㆑道。詩曰。伐㆑柯伐㆑柯。其則不㆑遠。執㆑柯以伐㆑柯。睨而視㆑之。猶爲㆑遠。故君子。以㆑人治㆑人。改而止。忠恕違㆑道不㆑遠。施㆓諸己㆒而不㆑願。亦勿㆑施㆓於人㆒。これ能近く譬をとるなり。斧の柄をきるに則手に持たる柄を手本とするとなれば甚近し。然れ共人作にて二物なれば猶遠し。忠恕の道は是よりも近きとあり。人を以て人を治る二人のやうなれど

治れり。これ禮樂の質なり。爰に初て學校の政孝弟忠信の敎をなすべし。儉約の義至れり盡せり。

一。朋友曰。吾しれる人文學を好めり。常の武士のやうに剛毅にもなく、文書のみを事とし靜なる躰なり。學者のしるしと奇特におもひ侍り。　答云。剛毅ならず靜かなるは尤よき事なり。しかれども文書のみ事とすと聞所はいかゞあらむ。公家か史儒か出家などにしてはよかるべし。武士たるうへはをのづから其つとめあり。孔子も書をのみ事とはし給はざりき。士大夫なりし故に文武共にかねて、射御の道をも得給へり。文道をばすきて武藝は不得手なるがきらひならば、其不得手もきらひも天性の生付なれば不レ苦なり。公家には筋なくてはかなふまじければ、文學者か古筆か、又は武家にても武藝のいらざる奉公もあれば、其中を撰ぶか、扨は農工商になりともくだるべきことなり。文武をかねずして不レ叶。平さぶらひの位に居ながら一向つとめざるは、其良知にもこゝろよからざることなり。しかれば其業にゐて其つとめなき者をよしとはいひがたし。たゞ天性は我分ほどの所に身ををくべきことなり。我友によき人がらなる人あり。いつも此人をあげて士の手本とす。勇力ありて武藝に達し、武士の中にもまれなる士なり。又納言大臣としてもそなはれる所有。心いさぎよく風けだかく、諸士の上にをかでかなはざる人なり。道を好み德をしたひてをこたることなし。無事にしてしづかなる人なり。

一。心友問。敬を不レ失とすれ共、何の心もなく居こと多し。　云。何心もなきは人心の常なり。敬といひ戒愼恐懼といふは主意なり。常に心にこれを持するにあらず。敬は心の德なり。須臾も離べ

からざるなり。知者はまどはず。勇者はをそれず。仁者はうれへず。知は明の至なり。勇は義の徳なり。仁は生の精なり。此故に仁者はいのちながし。

一。心友問。むかし漢に黄老の道を好て清靜の化行はれたりと。しからば異端も亦用るに益あるか。答云。陰陽を和調することは實に儉節にあり。孔子曰以レ約失レ之者すくなしと。愚もまた黄老の學者なり。清靜にして欲すくなからんことをねがふ。本より榮利をしたはず。皆聖人の一端なり。老子云。學道日損すと。道は天理なり。學は習て明にするの義なり。天理にしたがひて習て人倫を明かにする時は、人欲日々に損亡す。よく道を學ぶ者は、大事化して小事となり、小事は無事となる。多は日々に約に歸し、奢は日々に儉に歸す。これみな日損するの義也。損し盡すの至は、我心大虛と成て一物なし。是故に思ふ事もなく、することもなし。思ふこととみな文理なるを思ふこととなしといふ。なす事みな禮儀なるをすることとなしといふ。たゞ人欲いまだつきざるが故に、おもひは文理を失て妄念となり、わざは禮儀にたがひて驕吝となる。問。儉約の一事いかにしてか陰陽を調和するに至べきや。陰陽調和せば風雨も民の願にしたがはんか。云。儉約の本は無欲なり。上無欲なれば事すべなし。無事をたのしむ者は財をたつとびす。財をたつとびざればあつむることとなし。財をのづから天下に散じて民もたからとせず。たからとせざれば相争ことなし。井をほりて水のみ田を耕して食す。五穀のみ年々多く生じて水火のごとし。人に不仁の者あるとなし。戸ざゝざれども盜なし。それ如レ此なる時は刑政用る所なし。衣裳をたれて天下

集義和書卷第十

義論之三

一。心友歎て云。後世道は行はれざらむか。　答云。此遠方の小國に生れながら、聖神の道德を學びて異端におちず、死生一貫貧富一致の理をきはめ、天地萬物うたがひなき事は、人生の幸何事か是にしかん。理に大小なし。家も又一大虛なり。我にをいて天地位し萬物育せり。心善のみにして悪なくば、今の世に生れても堯舜の民也。万物一躰の情は人のうゑをなげかでもかなはず。しかれどもしるてなげくは非也。命を不レ知也。

一。舊友問。日本は武國なり。しかるに仁國と云は何ぞや。　云。仁國なるが故に武なり。仁者は必ず勇なるの理明かならずや。北狄は勇國也。然れ共不仁にして禽獸に近し。勇者は必しも仁あらずの至言まことならずや。夫仁は人也。心の德なり。慈愛惻隱は人の情なり。無欲無爲は人の本也。天は其心万物にあまねきが故に無心なり。仁は万物をもつて一躰とする故に無欲なり。動に公をもつてす。故に無爲なり。仁者の樂は山也とは、仁者の心をかたどるに山のごとし。無欲なるが故に靜也。知者の樂は水なりとは、知者の心をかたどるに水のごとし。源ふかきものは流遠し。ふかきとは神化のあつきを云。知者は無事なる所を行ふ。流水の物たる、內明かにして外順なり。大知は愚なるがごとし。泥土のためにしばし濁るも、行ては終にすめり。誠のおほふべ

にむかふべきや。　云。これいひがたし。吾子の心初より内にむかへり。他の學者の心を見て分明なるべし。内に向たる人に學時は學者の心自然に内にむかふ。外に向たる人に學時は學者の心自然に外にむかひ去。親切の心術ともに外にむかふ事を不レ知。是意を以て意を傳ふ。言語の及ぶ所にあらず。

集義和書卷第九終

むの心をおすといへる所をあしく見て、伯夷を清に過たる人の様に思へり。孟子は其心根の清を察しきはめていへるなり。常の行跡にあるにあらず。

一。心友問。天下國家事なきことあたはず。上に居て無爲にして治こと有がたかるべし。人世みな爲事あり。いかなるをか無爲といふべき。　答云。世人馬の人次第なるを無爲なる馬也といへり。此言暗に理にあたれり。それ馬を使ものは人なり。人をつかふものは天なり。人の理にしたがつて動き私意をまじへざるは是無爲なり。事の多少動靜にかゝはらず出て勞すべき時に勞せずして閑居するは無爲にあらず。隱居してひとり其身をよくすべき時に當て出て世間を渡るも無爲にあらず。皆名利を主として私意におこるものなり。馬の馬屋を出す時は轡すまひをして不レ出、又馬屋へ引こむ時はをどりはねて不レ入がごとし。是をくせ馬といふ。無爲にあらず。人も天理の自然にしたがつて或は勞し或は休す。其間に私心を入ざるは無爲なり。君たる人の時所位にしたがつて無事を行ひたまひ天下國家淨清なるを無爲にして治といふ。

一。心友問。議論講明甚親切に道理くはしけれども其心術躬行に名利の交りあるは何ぞや。　答云。心法は問學のあらきくはしきにはよらず。たゞ心のむかふところ異なり。心內にむかふ時は一言にしても精微を盡すべし。心外に向ものは千言万語の親切なる講習をなすともたゞ說話のみにして精微に入ことあたはず。心は本の凡心なり。何ぞ名利をまぬがれんや。　問。心いかゞして內

り。聖經にあらざれば賢傳といへども及がたし。況や假名書は奥義を述べからず。文をふみとよむもふくむの義也。中のくを畧してふみと云。みむは五音通ず。和の言葉には此例多し。和字の書には道理を述べし道理をふくみがたし。故に三十一字の詠歌につらねて心をふくめり。これ吾國の風の妙なり。たとひやまとことばの假名書も、此心を得たらんにはなどかふくむ道理なかるべき。初より漢書をば深く取て見和書をばあさくおもひて見故に、漢文にかはらぬ和書あるも、其心むなしくうづもれぬ。漢土の人といへ共、經傳の文理をもてあそびて道をしらざる者多し。書中のふくむところ心法に益なし。又眞を悦て修身の學をすると思へるも、法に落て心法を不レ知人多し。如レ此たぐひの人のかきたる書は、漢文の書も見にたらず。たとひ和字のかな書にして含む神妙なしと云とも、德を知て文にはせず道を見て法に落ず、いふ所實學ならば、信じてみる人みな實におもむくべし。天下古今の文學する人あげてかぞへがたしといへ共。實をふみ行ふ人まれなり。心は實なるも心法を不レ知故に、道學の日用に便なき事久し。和書たりといふとも人生日用の受用に益あり齊家治國の情に便あらば、あなどるべからず。此心を得て後經傳を見ば、書みな我心の註解となりて先後する所を知べし。

一。心友問。柳下惠の和にも清ありや。　答云。清あり。たゞ天質のつとめずしてなす所和にあり。無作法不行儀の中に居て、汝は汝をせよ我は我をせん、汝安ぞよく我をけがさむや。是涅にすれ共緇まざるの聖なり。清これよりよきはなし。　問。しからば伯夷叔齊にも又和ありや。　云。

しとなり。殘る所の兵も相つゞきたる達者多し。二將共に數千の敵にかけあひ、中をわりかけやぶり必死に入て一生を全くせり。源平の戰に平家方より悪七兵衛景清越中の次郎兵衛などいふ一人當千の大勇力の兵二十一騎まで木戸を開て出しかども、熊谷父子がよき馬にのりて達者のきこえありければかけ合することわたはずして皆あてたをされん事を恐れしなり。日本の武道にも盛衰あり。今はいにしへに及がたし。

一。心友問。至理を書といへども、かな書なれば世人かろく思ひ侍り。文字ある人は猶以見にたらずとす。其かな書を漢字の文になをせば唐の書にことなることなし。しかれ共道德をしれる人のかきたる假名書を道德を知ざる人なをし侍れば、かな書よりはこゝろをとれり。をとりてもまさるかな書よりは人の思ひ入よく侍るべきか。答云。それ道は聲もなく、臭もなくして存せり。思に及がたし。思は言にのべがたし。言は書に盡しがたし。漢字の文章にふくめる深理は和字の假名書にうつしがたし。しかりといへども學者聖經賢傳の吾心の註釋なる道理を失ひ心を外にして經傳を見時は、經傳本となり吾心末と成ぬ。故に經傳の文の高く深きをもてあそび其理を口にのぶるばかりにて心を失へり。文の奧義も口耳の學となりて齊家治國の用をなさゞる事久し。是正心修身の實學にあらざればなり。假名書の直に理を發明して人心のまどひを解、人情時變に通じて心思を内に向はしめ齊家治國の用にたよりあらんは、時にとりて益すくなからず。此心を得て後聖經を見時は、聖經の文理皆内に向て心法始て得べし。眞に聖人にまみゆるごとくの餘情あ

一。心友問。貴老六藝を解して御は馬術なりとかき給へるをそしる者あり。御は車御する術なり。日本の乘馬の術にあらずといへり。　云。初學の人とても御の車法たる事を不レ知者なし。日本にて六藝を云時は御は乘馬に當れり。其上易經にも服レ牛乘レ馬とあり。馬術の始は乘馬なり。車は後世文備りたる時の制なり。もろこしといへども五湖亂レ華以來、惟知三鞍馬爲二便利一、雖二萬乘之尊一、猶執レ鞭上レ馬といへる時は、今は乘馬なり。物必盛衰あり。車御は盛なる時の法なり。古人乘レ車、車中不二内顧一、不二親指一、不二遠視一、行則鳴二環佩一、在レ車則聞二和鸞一、式則視二馬尾一、自然有二箇君子大人氣象一といへり。禮の盛なる時に生れたる君子のことなり。もし如レ此にて必ず大人とすといはゞ、舜の野人たる時は聖人とすべからざるか。伊尹有辛の野に耕し傅說傭夫のわざをせし時、何ぞ此躰あらん。それ物の始は質素なり。盛なる時は文備れり。衰に及で事畧す。始と衰と其事業各別なれ共、物盛なればかならずをとろふ。をとろへては始に近し。いにしへの車戰の法後世復しがたし。上古の服牛乘馬といへる所に歸たるものなり。故に今の六藝をいふ時は御は乘馬なり。日本にて義經義貞正成までの馬戰はもろこし上代の車戰のごとし。車戰は上手なれば大に利あり。中野などにて俄かなる時には城郭ともなり陣屋共成なり。下手なれば騎馬にをとれり。日本の馬戰も上手なれば勝利あり。下手にてはなりがたし。この故に近代はおり立たる鎗軍になりて、馬軍はまれなり。義經は打物の達者つよ馬の手きゝを十二人すぐりて、前後左右に立て數万の敵をかけなびけかたきをくだく事をなせり。義貞正成これを學て、義貞八十六人正成は二十一人あり

ほまれ用るにたらず。古今風俗のうつりかはれる也。今借銀ある者には損多し。予が友に有餘はなけれども借銀はなし。此者すこしたくはへたらば富有にも成べき者なれども、人の難義をすくひ下々をめぐみ、總じてほどこすことを好み侍れば、有餘あるべき樣なし。しかれども借銀なきが故に世俗よりをしてしはきと名付、たくはへもあるやうに申侍り。此者おごらず不作法ならず、ついえなき所よりしはきといへるか。又しれる者に借銀ある者あり。此者無欲よりすりきりたるにもあらず。人をすくひて不ㇾ足にもあらず。借銀なきむかしより人の患難をもめぐまず、下々の困窮をもかへりみず、百姓の飢寒をもすくはず、親類知音のをちめをも見過し、無理なることにも下人に物をわきまへさせ、樣々きたなく不仁なるしわざのみ有て、禮義のつとめはし侍らね共、借銀あるばかりにてをして器用人の數に入、外人のそしりうらみを得ざるがごとし。如ㇾ此なれば右の借銀なくよくほどこしめぐみ禮儀のつとめいたし侍りし者も、退屈して年來のつゝしみもゆるくなり、人なみに借銀出來侍り。借銀すればそしり恨み共にまぬがれて心やすし。たゞ此かたに益多しと人毎に思ひ侍れば、かく世中にすりきりおほく成行侍るなるべし。對て云。この故にかの勇を尊ぶなり。大勇力の人ならでは、世俗非道のそしりにひかれずして獨立しがたく、仁善をとぐる事成がたきものなり。吾子柿山伏の狂言を見ずや。鳴べき理なけれども人なかんといへばなき、飛べき樣なけれども人とばんといへばとぶ。只人のほめそしりにのみ心ありて定見なき者如ㇾ此し。

へわけて通りたるといへる事、これひとつにて他の信ずるにたらざる事を知べし。幻術を以て水なき所に水の出たる様に人の目にみする事はあり。まことの水にはあらず。まことの深き水を舟なく車にてわたすといふ道理はなき事なり。されば空海も正法に奇特なしといへり。正法とは道理なり。道理にもれたる事はみな邪法なり。少出たる水のにごりてふかくみえたるか。しゐてわたるべきほどの事ゆへわたりたるなるべし。天のいかりにて雷の甚しきを、菅公のたゝりとて、ゑい山の僧を召ていのらせられたる事はあるべし。　問。天神の御手跡とて佛經世におほし。佛學博くし給へば、又聖廟とは申がたからんか。云。其時はいまだ聖佛のわかちもなき世にて侍り。いづれとなく只博く物をしるを以て學問とせり。たゞ其人の德業をみて、聖者とし佛者としるばかり也。菅公は五倫の道正しく、其取行ひ給ひし事は皆天下太平の政道なり。されは聖廟といはんに疑ひあるべからず。よみがたき書の點までも菅公付給へり。聰明の人にておはしましき。天神の御手跡と云にはにせおほく侍り。空海の經と申にさへ誰ともしれぬ筆多し。むかし一犬虚を吠れば今は万犬聲を吠。聲を吠るものは理をしらねば實なりとおもへり。

一。學友問。子路はやぶれたる衣服を着し、美服を着したる者と立ならびても不レ恥を以て名を得たり。しかるに五六十年以前までも、內所貧乏なる者もおもてむきをはつとめ、借錢有てもなき躰をし、めいらぬ顏をするを以て男氣とし武士とし侍りき。今は勝手よろしき者も不自由成躰をし借錢なき者もありといふ。內所にては美服を着すれ共公界へはふるき物を着する樣なり。子路の

とて大風吹し類なり。　問。叡山にいたりて文學の師なりし人をたのみ給へるに承引なかりしかば、怒て柘榴を口に含み吐かけ給ひしかば、燃あがりて妻戸燒たり。其妻戸後まで有たると申侍れば、公のの給ふごとくにてはあるまじきと覺え侍り。　云。これ空海と守敏との古事の類なり。空海と守敏と威勢を爭ひて、守敏天下の龍神を捕てわづかなる水瓶の內にをしこめ置て大旱させしに、空海北天竺無熱地の龍神獨守敏にしたがはざりしを請じて雨ふらせしといへるたぐひなり。夫春雨五月雨は氣化を以てふる雨なり。六七月は氣化の雨まれなり。夕立を以て田畠草木を養ふものなり。夕立といふは山澤氣を通じて雲雨をおこす故に、郡をさかひ村をよぎて山神の氣のいたる所かぎりあり。龍雨は雨の變にてたまさかなる事なり。是をかぎりありて遠くゆかす龍雨の變をしらで、雨はみな龍のわざと思へるは、理をしらされはなり。是を以て兩僧の術いつはりなる事を知るべし。自然に旱し又雨ふりたるを兩僧の行力ゆへといひてつけましたる說也。民間のをどりにさへ日でりに雨ふることあれば、空海いのりてふりたる事も有べし。又守敏と空海とたがひに調伏していのりけるに、雙方の佛神のいる矢空中になりやまずといへり。空海の書をける書をみれば、佛學のみならず儒學もあり。さほどの我慢邪心は有べからず。其上佛神といふもの邪知我慢の者にくみし、たてわかれて合戰する事有べきや。空海を餘りほむるとて大惡人とすることをしらず。菅公を譽るとてあたら忠臣に疵を付る事を不レ知。其時坊主の夢にみたる事共いへり。やけ妻戸を證據とせば、何故やけたるやらむ知べからず。みさかりに出て深き川水を左右

大澤心は剛なりしかども、なさけなかりしかば、心得たりとて、よのつねの人質のごとくに脇指を拔、秀吉公の心もとにをしあて、其夜退たり。是より後敵味方のあつかひにも秀吉といへば誰も信じてゆるしたりときく。己が人を味方になびけつる信をたがへじとて、俄かなる時に一命をかろんじ、みづから人質と成とは、成がたき行なり。かく仁義共にありし人なる故に、天下すみやかに手に入たり。後に不行儀無道に成給ひしとは、凡心にて道を知給はざる故に、天下太平に成て愼みの心もおこたり、且凡情のたのしみ思ふまゝに得たれば、亂たるなるべし。玄宗も初は堯舜の治をもかへさんと思ひ給ひて、孝經の序までも書給ひしほどの事なれども、後は情欲に亂れ給へり。是故に聖人も人心惟危との給ひしなり。

一。學者問。北野を聖廟と申侍れ共、聖賢に怨怒の心はあるまじき事なるに、怨靈となり祟をなし火氣甚しく執着ふかき人を、いかでか神としあがめ申事にて侍るや。曰。これ世の傳あやまり也。菅公の怨靈となり祟をなし給ひたるにはあらず。配所の詩に云。去年今夜侍二清涼一。秋思詩篇獨斷レ腸。恩賜御衣今在レ此。捧持毎日拜二餘香一。此詩を吟じ給へ。誠に忠心ふかく感慨多きこと其人を見奉るがごとし。怨怒の心は少もなし。然れども孝子の怨忠臣の怨と云ふことあり。平人の不レ知所也。小辨の詩は孝子の怨なり。孝子の心ならではしられぬ義ありと古人もいへり。菅公の怨も忠臣の怨あるべし。忠臣ならではしられぬ心あり。雷となり祟をなし給ひたると云ふことは菅公の靈にあらず。天道其忠臣の誠を感じ給ひてとがめ給ひしものなり。周公の忠をあらはさん

しありし故にや、楠正成も射手を褒美して弓をすゝめられしと見えたり。今も志あらん士は名將を愛しむべからず。

一。心友問。先度弓を小者に持せたる者を戒給ひしこと道理至極ながら、今時は武士の他行に手づから持がたし。一僕の小身者は弓立もこと〴〵し。しかれば弓の稽古もやむに近し。如何し侍らんや。　曰。先度は武士の弓矢を尊ぶの大義と心がけの道を申侍り。まことに今の門をならべいらかたちつゞきたる隣ありきには、手づから持侍るとも何のやくもなく、かへりて人の目に立ことあらん。小者一人に弓立も過侍らん。か樣の事にも時處位あり。弓矢を尊ぶ心の誠だにあらば、はきかへのざうり木履もたせず、みづからはきたるばかりにて、出さまに手をあらはしむるか、弓矢を紙にまきてもたしむるか、いかやうにもなるべきことなり。弓矢は八幡太神宮ののりうつりおはします神器ともいへり。武神の舍なり。尊信の誠明かならば、今の時所なりとも、みづから持ても目にたゝぬとあるべし。世界は我心の誠よりなりて、我世界となるものなり。

一。心友問て云。秀吉公無道にして天下すみやかに手に入たる事はいかゞ。　答て云。秀吉公もはじめのほどはあしからざりしなり。濃州宇留馬の城主大澤次郎左衞門尉を信長公の味方となして同道ありしに、信長公大澤が剛なるに恐れて、又心を變じなばむつかしからん此度ころすべしとの給へり。秀吉しゐてなだめ給へども許容なし。其時秀吉宿所に歸給ひて大澤をよびよせ、貴殿の身の上に心もとなきことあり、我を人質に取て急ぎ退れよとて、大澤に身をまかせられたり。

武具には弓矢より尊きはなし。弓立にたてゝはもたしむるとも、直には持すべからず。古は大將軍だに弓を人にはもたせ給はず。公家の大將中少將も武官なれば弓矢は身をはなち給はず。其上さゝし矢的前等の間相しれこぶしの定たるには射手なる人も山野にして行あひに射る時はことの外なかちがひあり。弓矢取の恥辱にあらずや。不心懸のいたす所なり。古の人は隣ありきにも弓矢を手に持、木の葉にても見かけて間を積り矢をはなち、其はづれあたりを見て間をふみ、度かさなれば間をもつもりそこなはず、矢のちらざる事も的前にひとし。武士と生れて弓馬をならはざるは武士にあらず。ならふといへども用をなさゞるは本意にあらず。云。弓を射ず馬によくのらざれども皆武士は立侍り。左樣にむづかしき事ならば誰か嗜侍らん。昔も辨慶などは打物取て武勇の譽れをあらはし侍りき。　曰。辨慶弓をしらぬにはあらず。たゞ打物に得たる故なり。武士たる者は武藝には一遍わたり侍れ共得たる事を先とす。今は鎗をにぎり武邊だにすればよしと思へ共、それは理運の事なり。そればかりにては武士の野人といふものなり。知行を給はりて優々としてある事なれば、多藝をも心がけてこそせめて御恩をも報ずべけれ。しからば慰みの樣にせずとも用をなすべきことゝなり。武官に居て其所作におこたるは、貴殿の良知には心よきか、こゝろよからざるか。内に向て心に尋給へ。一心だによくばと人ごとにいふとなれども、死すべき所にては女も身をなげ、長袖も身を果し侍り。射手一人にては所により敵百人はふせぐべし。天下の武士たゞ一心よ鎗よとばかりいはゞ、日本の弓矢よはくなるべし。太平記の時分にも此きざ

奉行代官國郡の主の任なりき。今は百姓共の心ばかりなれば、雨を祈ることとのみ知て晴を祈る義をばしらず。長雨にて田畠の作物くさりぬれども、いたづらに日をおくるなり。　問。明者ありて雨ごひせば如何あらむ。　云。雨ごひして雨降べき道理あるものは音樂にしくはなし。天正の比大に日でりす。諸寺諸社のいのりを盡しても雨ふらず。其時勅定に樂は五行の精神をうつして五音をそなへ、年の十二月に配して十二律を有せり。四時土用の調あり。天地神明に感ずること、正しくすみやかなり。盤涉調は冬のしらべにて水の調子なり。此調子を吹たてば天地の水氣をもよほすべし。しかれどもかくてりつゞきたる時水の聲をなすとも、火氣の大なるにをされて水氣生ずる事得がたし。盤涉調の青海波を双調にうつして奏せよ。双調は春のしらべなり。木氣の音也。木は火の母なり。水の子なり。火水は尅すれ共、木のためには子なり母なり。木に水をふくまば、火氣をのづからやはらぎて雨降べし。大原野の神前にて樂を奏せよとおほせあり。はたして大に雨ふれり。　問。しからば神前にあらずとも、いゑ〳〵にてもおなじことならんか。　云。しからず。これを天にすゝむる神なくてはふらず。又双調の青海波は以前にうつしたるともいへり。それはいづれにてもあれ。雨ごひに用ひ給ふ道理におゐてはおなじ事なり。中夏にても雨ごひには樂を用たり。

一。心友弓を一僕に持せて野を行けるに逢ぬ。告て云。夫武士の別名をば弓取といへり。しかるに何ぞみづから持給はざるや。一僕は草履をも持なるに、弓とひとつにもたする事は敬なきなり。

改め給ふべからず。人情に應じ時處に隨て改め給ふべし。初て大道をおこさんと思ふ者は法を先にすべからず。伏犧氏はかうぶりなく衣裳なし。宮殿なく禮度品節なし。其神聖たるに疵あらず。

一。心友問て云。聖賢も又靜坐ありや。答て云。靜坐あり。孔子閑居し給ふ時は、申々如たり天々如たり。心主なき時は必ず散ず。故に忠信を主とす。これを意を誠にすとも云。人欲の妄は間思雜慮と成ぬ。僞なり。其意を誠にする時は、忠信主と成て天理流行す。空々如たり。故に呼吸の息はいたゞきよりくびすに至り、躰ゆるやかに色温なり。是靜坐の至り也。心に妄ある時は息喉よりかへる。心誠なる時は臍の本より出。養生の術も亦こゝにあり。是故に養生家には呼吸の息をかぞふるとあり。内に主を立れは心ちらず。精神内に守て氣血順流するの初學とす。

一。朋友問て云。雨ごひとてわけもなきをどりなどしても自然に雨降ことは降合せたる物か。答云。しかり。世間の雨こひの神の納受し給ふべき事にてはなけれ共、其しわざの善惡にはよらでたゞ民の心根に感じて雨降を給ふ事あるなり。たがへすよりかりおさめ米とするまでの民の辛苦萬事の費あげてかぞへがたし。しかのみならず日でりといへば雨ごひをもよほせり。三輪の大明神へ日でりに雨ごひのをどりをかけ奉るに三十餘郷の入用は金二千兩にも及たると云物語をきゝぬ。何國にも年々の苦勞をかへりみざるのみならず、日でりの雨ごひにだに給入より少のたすけありたるとをきかず。扨かりおさむればしへたげしぼりとれり。勢大にちがひてものいはねはこそあれ。何ほどかうらめしくなさけなきことならん。むかしは晴を祈り雨を所ることはその所の

似たれども、意を以てむかへて己が受用のいたるに對應してみればさもなし。予天下の事物の理を窮めんとも心かけず、修身のあまりのいとまを以て文を學び、心の通ぜざる所まどひある事をわきまへぬる間に、道の大意心にうかびぬ。それより後天下の理におゐて疑ひなし。儒佛によらず。天下の學者來てもいかゞとおもふ心もなし。聖學にをいてはあさきとなれども、大意をみれば貫通ともいふべきか。　問。しからば貴老は程朱にもをとり給ふまじきか。　云。しからず。程朱剛强仁厚明敏の質にして、此大意をしり給へば則賢人なり。愚が質柔弱輕薄魯鈍なり。たま〳〵大意を知といへども、氣質の害をなすことすくなからず。入德の功を勉て日久しからざれば、凡を離るゝことかたし。人は一度によくすれば己は百度にするのかはりなり。剛强明敏の人といふとも大意をしるの後こゝにとゞまるべからず。　問。曾點の大意をみると貴老の大意を得と同じきや。　曰。又高下淺深あり。見は大かた相似ても、質を以て大にちがひあるとなり。たゞ德に入の後氣質の煩なし。

一。心友問。今の時にして先王の道を用ひば、忠質文のうちいづれを用ひ給ふべきや。　云。愚がしらざる所なり。賢君をこり給はゞ忠を用ひ給ふべきか。　問。今は文過ぬれば質により度思ひ侍り。　云。今は奢りといふものにて文にもあらず。質も亦文の下地なり。たゞ忠は誠のみなり。誠立は僞去べし。奢と飾とは多は僞なり。此ならひ除て後質にゆくべし。世をへて文あらはれんか。　問。賢君をこり給はゞ、善惡邪正のあらはなるは改め給ふべきか。　云。理屈によつては

天下國家も物也。五倫も物なり。天下の事物にをいて我心のまどふ所あるは知の不明なり。尤知レ善知レ悪の眞知あれども、善を知ながらせず悪を知ながら不レ去は眞知にあらず。又其知眞知にあらずともいひがたし。いまだ窮理の功いたらずして精義入神の實地なければなり。士たる者の盗をなさゞる事は、窮理のいたりて精義神に入たればなり。如レ此のたぐひ又人々の上にあるべし。知明かなれば聞思雜慮もなし。此一ばかりは聖人の毋レ意に同じ。　問。如レ此なれば朱子の説に近し。陽明物を以て五事とするの說易簡ならずや。　曰。五事も又物なり。天下の事物を離れて五事なし。五事を離れて天下なし。五事の非禮といふも我知のくらき所よりおこれり。我心神明なる時何ぞ五事の非禮あらんや。五事の非禮を當下にたゞしおさむるを自反愼獨と云。五事の非禮を終におさむるを窮理と云。其實は一なり。　問。致知は愼獨の工夫にあらずや。　曰。愼獨の工夫は誠意なり。自欺ことなきものは獨を愼にあらずや。致知はたゞ聖人に至るの的なり。工夫は全く格物にあり。格物は下學なり。致知は上達なり。道の大意を知時は、天下いまだ窮めざるの理いまだしらざるの事に逢ても心のまどふとなし。鏡のいまだうつさざるかげうつしたるかげのへだてなきがごとし。大なるやうなれども、聖學におゐてはさのみかたき事にあらず。精義不レ入レ神用をなすとなし。大意を見も、學知の精義入レ神たるなり。入德の功あつからでは聖學の至善にあらず。

一。心友問。一旦豁然貫通の語は異學悟道の習ひあるに似たり。　云。大かたに見れば悟道の見に

との時分は、佛學のさかんなる事日中のごとし。

一。心友問。大學先后の主はいづれの所にて侍るや。　曰。正心也。心を正さんと思へば意を誠にす。誠意の工夫は致知格物也。國天下を平治せんと思へば家を齊。一家齊て天下平也。家をかさねて國とす。國をかさねて天下とす。其齊家の本は身なり。身の主は心なり。一度心正して家齊り國治り天下平かなり。　問。大學工夫の實地はいづれの所ぞ。曰。誠意なり。是以傳の初は誠意を首とす。致知格物は誠意の工夫なり。何ぞ別に格物の傳あらんや。所謂の二字を以て分明なる事なり。

一。心友問。孔子絕〻四毋〻意とあり。しかるに誠意と云は何ぞや。曰。毋〻意と云は聖人のことなり。意は不常往來の念なり。間思雜慮とも云。聖人には初よりなし。學者たゞに意なからんとせば異學の流となるべきか。心は本空なり。しかるに空と觀ずるは圖上に圖を按ずるがごとし。心本意なし。たゞに其本來のごとくならんとせんは非なり。誠にするは意をなくするの工夫なり。誠にする時はをのづから毋〻意に至るなり。意念の不常往來して自欺ものは、心の靈臺くもり有て神明てらさゝる所あればなり。こゝを以て其知の靈照不昧の全躰をいたさむとす。然れ共空々に明かにすべからず。不常往來の念をうちはらひ、生ずる欲をたち去て、善悪ともに心鏡にとゞめず。空の本躰をいたすことは其功すみやかなれ共、瘧の間日のごとく水のごみをゐさせたるがごとし。されば氣質變化の期なし。たゞ天下の事物にをいて吾心の明不明を覺て實々に功を用べし。

及ぶべきか。それ千金の裘は一狐の腋にあらず。大厦の材は一丘の木にあらず。太平の功は一人の略にあらず。古人云。天下をたもつ人の、天下の諸事諸物の我有たる事をばしれども、天下の人の知の我物なる事をしらずして、問ことを好まず人の知を用ひざるは、古今いやしとする所なり。夫耳目口鼻手足の能を見て事をなすものは心なり。天下みな我に異なるものある道理を知てよく賢知をあげ才能を用て治國平天下をなすは明君良相の德なり。万物は生を遂んことをねがふ。あつめて春をなすものは天なり。聖人の聖人たる所の能事は、よくあつめて大成するなり。古今才なきにあらず。あつむる人なければ乏し。あつむるといふは、よく問ことを好て人の知を用るにあり。天下の知を先立るものは天下の知に帥たり。己が知を先立るものは人の下なることを辨ふべし。

一。心友問。文いまだひらけざる故に昔は美質の人々も聖學に入給はさりしと承侍れども、四書五經すでに渡りてたれもよく讀たることとなり。かく明かなる書を置ながら辨へなかりし事なれば、聰明とも申がたくや侍らん。　云。今は既に百千年を經て數人の手にわたり、講明もかさなり、其上に近年は宋朝明朝の書渡りて明なる時節に生れ出て、勞せずして知たることなれば、心やすき樣におもへり。唐にては其國の書なり。其上文字も達者なるだに、孔孟の後千歲不ㇾ傳して、宋朝をまちてわづかに世にしられたり。五穀は種の美なるものなれど、熟せざれば荑稗にもしかざるなれば、聖人の道學も熟せざれば佛學にもしかざりしこと尤なり。聖學の日本にて東しらみは

く默しよく拙くて、阮嗣宗が人の過失をいはざるを師とすべし。其上に心術明かにして、金の錬得てまじはりなく至精の正色なるがごとく、心思の存する所天理に專ならば、人欲の煩なからん。是を聖人といふとも可なり。聖人の聖人たる骨髓こゝにあればなり。天質の分量廣きものには天吏たるの天命あり。邪正をわかち善惡を明かにするには、或は筆紙をかり或は言論にわたるとあり。小人の好で人の過をいひ益なくして是非を論ずるの凡心にはあらず。いはざれば世を救ふとあたはざるがためなり。孟子の時は上に堯の聖主なく下に舜の神德なし。これ又分を知の義なり。

一。舊友問。貴老は天下に名を得給ふ人なり。道學にをいては儒佛みな貴老によりて目をさましたり。しかるに貴老は人に尋問給ふ事のみにして、いまだ人に敎給ふ事をきかず。何ぞ神道者俗儒歌道者筆道者出家までを招きよせ或は彼にも行て師とし學び給ふや。道德の大本におゐて窮めざる所ありとや謗り侍らん。　云。愚が名は虛なり。何ぞ其虛名をいだきて物しりがほに人の師たる任をになひ侍らんや。一文は無文の師といへば、愚が如き者も虛名に居て人の師とならば、なりもこそし侍らめど、師たるには損多し。たゞいつまでも人の弟子にて居こそ益ある事にて侍れ。言は道德にをよべども、師たる時は虛中の本然存しがたし。言は詩歌のあそびにいたれども、弟子たる時は温恭自虛の眞を失はず。愚が學未熟なるが故なり。孺子の歌にもとることあり。況や神儒佛歌筆の人におゐてをや。愚が人にことなる事はなし。たゞ人の人たる大事を知てまどはざるのみ。自滿して人の師たる事を好まず。よく人にくだりて弟子たるに終る所のみ、少し古人に

め給ふ。善惡の道理分明にして直言する人をば諫議大夫とす。進て忠を盡し退て過を補ひ天下政道の損益を知べき人をば納言として君言を出し納しむ。陰陽鬼神の理に通じ人情時變に達せる人をば冢宰として百官を總主らしむ。天下の事は多し、理は窮なし。右は只大事の一二三をあげたり。一人して極めしるべからず。力を合せ謀をあつめて、天下の知を用て天下の事を盡すべし。其不レ知をば不レ知とし知をば知とし、われ事を不レ知ともまとはず、人の知をもうらやまず、吾事に達すれども滿りとせず、功成てほこらず、耳目手足の各其用を盡して一心の妙に歸するがごとし。天は生じ地は育す。日月のかはる〴〵明らかに四時のたがひに行はるゝがごとし。其物をなすに至ては一なり。又天下の事におゐて、心の感ずる所身の交はる所、初學は疑ひある事あれども、正心修身の緒餘土苴なれば、好學の人は勞せずして明辨すべし。天下の理を盡すといへば大なる樣なれども、本末先後をしれば難き事にあらず。

一。學友問　阮嗣宗は口に人の過失を論ぜずといへり。まことに好人なり。大舜はこれより大なる事あり。善を人と共にし人の惡をかくして善をあげ給へば、惡はをのづからきえうせ善は大に成ぬ。人の善をゆるし給へばなり。しかるに孟子はよくものいひて楊墨をふせぐ者は聖人の徒なりといへり。凡人をだに惡をかくして善を揚給ふに、楊墨は少し見所に過不及ありといへ共、凡人をぬけ出たる人なり。何ぞ其善を好して其惡をかくさゞるや。　云。性は聖凡一躰なれども命に分量あり。よく己が分量を知て命にしたがふものは聖人の徒なり。天命に天吏の任なき者は、よ

しかり。其事々物々の道理と云もの、いかゞ心得給ふ。其意をしらず。愚が見侍るは、物は事なり。事は物の用にして、物は事の躰なり。二にあらず。五倫の物あれば五倫の事あり。五倫の物は君臣父子夫婦兄弟朋友なり。五倫の事は五典十義なり。五倫の物に即て五典十義の理をくはしく窮て心に得身に行を格物致知と云。知は理なり。今の理を窮と云は、書の上にて文に即て講明し、或は空談に議論す。これ物に即て理を窮るにあらず。文を以て友を會するといふものにて、友を以て仁を輔るにはいたらず。仁をたすくるといふは、父子の親君臣の義夫婦の別長幼の序朋友の信におゐて、過るを磨し不足を補ひ互に過ちを告て相輔るものなるに、今の學者は過を聞ことをいとひ至情を云者をにくめば、即レ物窮二其理一の實をうしなへり。しからば天下の事々物々の理を窮、博識多聞なりといふとも、何の益かあらん。　問。天下の物莫レ不レ有レ理。唯於レ理有レ未レ窮。故其知有レ不レ盡也。天下の物とあれば必しも五倫に極るべからず。公の説の如くにては文理不分明の如し。　云。天下の理の重きものは齊家治國平天下なり。其中の一事々々は天の與たる才知あり。君も其質の得たる所を察し給ひて其職を命し給ひ、臣もみづからの天をつくすものなり。身を修るにとく人を責るにゆるやかに知さとく行篤き人を選て敎を掌らしめ給ふ。日本のむかし淳和院弉學院の師あるがごとし。山川地理に得たる才あれば。山川池澤をつかさどらしめ給ふ。物の生長の道にさとき人をば農事を掌らしめ給ふ。今の郡代のごとし。よく賞罰をことはるべき人をば士師の職に置給ふ。今の所司代のごとし。律呂の理に明かなる人をば樂を掌らし

りにて侍るべきや。　答云。方はなんだちの身にあるとなれば、あやまりにてはなし。威儀の愼み事のつとめなどは氣力のなす事なれば、老年病衰の人は叶がたし。然れどもつとめは一念獨知の地にあり。寢つ起つをこたりある樣に見へても、病者か老躰にて、氣つかれてはやすみ氣力付てはおきてつとめ、獨知に暫くの間斷なき人あるべし。人めには夙におき夜半に寢て、たとひ及がたき行ありとも、獨知にをこたる人あるべし。それ心を正し身を修るより、家を齊へ國を修るに至るまで、誠を立るより先なるはなし。貴殿氣力強くての勉は過るにあらず。我氣力衰ての勉も亦不ㇾ及にあらず。誠を立て時處位にしたがはゞ、ともに伏犧の民たるべし。

一。心友問て云。禮は大なる所より始るべきに、飲食に始るといへるはいかゞ。　答云。天尊く地卑きは禮の始なり。無言の敎なり。男女これにのつとり、父子君臣これをのりとす。性命の正に本づくものなり。しかれども衆人の氣質の濁りかたよるものは、其神靈のてらしうすくして失ひやすし。飲食男女は人の大欲存すれば、禮なくしては相爭ふに及ぶが故なり。其禮は人々固有の天理に本づきて敎たまふが故に、飲食は義ありてもとめ時ありて食す。且多きを讓り少きをとる。男女は媒の言をまち婚姻の禮を備て後相交はる。且夫婦となりても賓主の如き別道あり。先王まづみづからの德を明かにして先じ給ひ、且禮を以てとゝのへ給へば、人々固有の天眞感激皷舞せられ恥ることありて格るものなり。

一。學者問て云。即ㇾ物窮㆓其理㆒とは、事々物々につきて事々物々の道理を窮め知と云儀か。　云。

のごとし。おもひ出してかしらをかき汗出るは、いまだ其過失の根伏藏して、またも其境あらばなすべきが故なり。其上精神をたもつの道を知らで氣を養こと、至寶を保つがごとくの受用なき故なり。何ぞすこしのほめそしりを以て此靈寶を煩すべきや。義に當ては國天下といへどもやぶれたるわらぐつをすつるがごとし。是故に君子は覺照あつて思索なし。平人の分別思慮といへども、ふと覺照にいたりたる時道理うかぶものなり。たとひ人しらずとも、我心に不善あらば德に恥べし。人先非を知てそしるとも、吾心に淸く改去て今すでになきとならば、何の後悔かあるべき。悔は非を改るの筌蹄なり。改て後心上にとゞむれば、かへりて煩をなすなり。

一。心友問て云。志の主本は何とか立侍るべきや。　答云。仁義身にあり。これを用てつきず、不義をにくみ惡をはづるもの丶心にあるを主本とす。磨とも磷かず、涅にすれども緇まず。心みにうしなはんと思ふとも忘るべからず。たゞ此靈明天を根として朽ず。然れども心法の受用をしらざる人は、我にありながら我物ならず。　問。外により人によるは志の實ならざる故か。己がためにするの工夫はいかゞ受用し侍べきや。　云。天地の間に己一人生てありと思ふべし。天を師とし神明を友として見時、外人によるの心なし。かくの如くなれば內固して奪ふべからず。外和してとがむべからず。

一。心友問て云。今の時にして德を好み道を行ふ者は伏犧の時の如しと承りぬ。されども我等は放逸なる中に習來ぬれば、威儀を愼む所より心を用ずしては心氣も存じがたくおぼえ侍り。あやま

集義和書卷第九

義論之二

一。心友云。我常に夜寢られず。さるによつて心氣つかれ、食の味ひもこゝろよからず。或は風邪にをかされ、種々の病も虛に乘じて入ぬ。心術のつたなき故なるべけれども、其故をしらず。答曰。夜寢られざると疾病のなす所といへども、大方は思慮多くして精神を消よりおこるものなり。天下何をか思ひ何をか慮らん。義に隨ひ理に應ぜんのみ。知者は無事なる所を行といへり。万事私よりなすべからず。天を以てうごくべし。好むともなくにくむともなく、やむことを得ずして應ずるを、天を以てうごくと云。平人は私の願ひあり。時を待ざるのうごきをなさんとす。是故に思慮多し。天下我にあらざるものなし。何をか願ひ何をか求めん。心ほど大事なるものはなし。聖人凡夫同じき所なり。天下をわたへんと云とも、命には換べからず。されば天下よりも重きものは我身なり。いきては義理をうしなひ死しては名を全くするとには、かならず死す。しかれば命よりも義は重し。　問。後悔の心切なる故に精力を勞し、忘るゝ事あたはざるとなり。後悔なくては先非を改むべき樣もなし。いかゞ受用し侍るべきや。　云。悔は凶より吉にをもむくの道なり。しかれどもつよく悔るはかへりて先非の病ぬけざる根なり。公も我もむかしありたる過失の、今は跡かたもなくなりて心氣かはりたるとは、おもひ出ても悔はなし。たゞよそのと

思ふばかりなり。

集義和書卷第八終

禮樂の絶ぬ樣に、御神樂には御神樂の領をつけ、節會御遊等にもそれ〳〵に領をつけ奉り、其事のかならず行はるゝ樣にし、宮殿諸道具等は質素にして禮儀の叶べきばかりならば、禁中の正實立てをごりのをこたりもなく、火災の憂も有まじき也。公家中も衣冠束帶の時は禮儀うや〳〵しく平常は知行の分に應じてをごりなき樣に、公家の立給ふほどの領を付まいらせば、公家の公家たる所亂れずして長久なるべし。大名緣など公家の衰べきはしと成事也。內緣によつて奢り生じ、禮樂をもとめられず、其子は父方の家督は小身なれば母方の人の多き方へよりならび給へり。母方は野人にして慝禮を好み、俗にして婬樂ならではしらざる故に、ほどなく婬樂をこのみ設け出る也。是ぞ公家亡衰の初にて候。風を移し俗をかふるには樂よりよきはなし。公家の風俗やがてうつりかわりていやしく成給はん事目前たるべく候。公家中かくのごとくなれば、帝王へもそのづからおしへ奉るなり。王者のおはしまして國に益有事は、いにしへの禮樂をこたらずして俗とことなる故なれば、其實たへてみる所なく俗とひとしからば、終には神統あやうくおはしまさむか。是ひとへに秀吉の無道の御馳走より初れり。あらためたまはん帝大樹出をわしまさずば、日本の國も又あやうかるべきか。神統絶給はゞ神國ともいひがたし。戰國の後人道いづくにもとめ給はんや。人道に禮樂なくは禽獸に近からむ。しからば合戰やむ時なかるべし。たとひしばらく治世あり共、道なく人心くらくば、終には吉利支丹にとらるべきか。しからば天地すでに破れたる也。天運いまだ午の會の初にあり。天道は至善なり。無好人の三字は有道の人の言にあらず。たのみ

わらかにして上におはしませば、いつまでも日本の主にてをはします道理にて侍り。武家もたとひ天威のゆるし有とも、みづから王と成てはむつかしき事也。臣として攝政などの心にて天下を知給ふは心易き事也。何たる無分別の人有て王とは成給ふべからん。又此方よりかへし奉られても末つゞき申まじきと申事は、後醍醐の帝の時さへ、公家は日本の人情時變うとく成給ひて、かへりたる天下を失ひ給へり。今はなを〳〵うとくなり給へば、たとひかへし奉り給ふとも、やがて亂逆出來て本までもあやうかるべく候。武家の人の帝位に上り給はんと、王の天下をとり給はんとは、共に無分別たるべき也。然れとも一ッの道あり。將軍家に賢君出をはしまして三十年も用意あり、家を作るごとく地形よりくみ立、末代までの法をまうけて奉り給はゞ、人じちも何もいらで、又五百年も風波なく世中ゆたかなるべし。後世にはかくのごときの人出給ふべきもはかりがたく候。　問。永祿天正の比禁中公家にが〳〵敷衰微し給へる處に、秀吉の御馳走にて結構に被レ爲レ成たるは、きどくの御事なり。　云。戰國にて誰心をつけ奉る人もなかりし間、朝夕の御つゞきもなりがたき樣子と承れば、誰にても御馳走不レ仕して不レ叶事也。秀吉の御馳走はきどくながらも道を知給はざるゆへ、禁中の御爲日本のための御馳走ならざれば、一旦くつろぎ給ふばかりにて、却ては公家のをとろふべきはしをはじめ給ひ候。今天下の御政道あづかり給はず。宮殿の結構はいらざるものなり。實なくして事物過る時は、火災度々至ものなり。然ば、終には禁中の靈物も亡びぬべし。道ある人の御馳走ならば、禁中の御位を尊くあふぎ奉り、いにしへの

日の養生なければ永久なりがたし。敵去て後の養生は文武の道也。病後の人參のごとし。病邪といへ共人參を主として攻撃藥をも用ゆるごとく、戰國といへども大將は仁義の德なくて不レ叶事也。太田道灌は其初あら武者にて、馬をはせ劒をこゝろむる外無ニ他事一。有時鷹狩に出て鳥によらん爲に民の家に立寄てみのをかり給ふに、夫は野に出て妻のみあり。山吹の枝をひとつ折來て御前にさし置て、とかくの言葉もなくて入ぬ。道灌他の家に至りてみのをかり給ひき。歸りて其夜人々と物語し給ふ時、今日のかりばにての事を語給ふ。其中に京の客歌道にたづさわる人のこたへしは、其女はゆへある者の落ぶれたるならむか。夫のみのをきて出て内になかりしを、賤の女として大守に言葉をかわし奉らむ事恐れありと思ひて、山吹の枝をもつて御いらへ申たるなるべし。古歌に「七重八重、花はさけども、山吹の、みのひとつだに、なきぞあやしき」。其時道灌廿ばかりにてをはしき。手をうちおどろき、扨〳〵恥しき事也、國郡の上に居ながら賤女にもをとれり。むかしより士は文武二道とこそ云なれ。我等しゝおふ狩人によききぬきせて上に置たるがごとしとて、それより學問をつとめ給ひて、其比の武將にはまれなる文筆の達者にて、詩歌は云に及ばず經傳をも學び給ひき。其學問の事は世にしる人多し。問。かならず王者に天下のかへるまじきとは、如何なる道理侍るにや。もと日本の主なれば、本にかへりぬべきことにて候。云。代をかさねて天下をたもつは天の廢する所なりといへり。然れども王者は天神の御子孫にして地生にあらず。ことに日本にをゐて廣大の功德をはしますゆへ、天下の權勢をばさり給ひてもや

治りぬれば次第に上らふになり、おごり生じやわらかになりて、心ばかりはたけゝれども、武勇の達者はおとれり。大方は心もつれ申事にて候。其おとろへさまには野人出て天下を取れり。この故に國主といへ共、田夫をさる事いくばくもなく候。公家なくて幾度もかわりなば、二三百年の内には天竺南蠻にかわらぬあらゑびすと成侍べし。禁中をはしますゆへに、天下治て後にはかならず將軍家參內をとげられ、諸大名皆あつまり給ひ、束帶衣冠の禮儀を見て初て人の則ある事を知、御遊の躰管絃のゆたか成を聞て初て太平のおもひをなせり。彼といひ是といひ、己が身をかへりみるにまことのえびすなり。此無道にしては國天下のしりがたき事をしれり。野人よりおこり給へども、天下を知ほどの人なるゆへ、必古禮をあふぎ古樂をしたひ禁中をあがめて、君臣の義を天下に敎給ひ候。天下の人是を見て、威も力もなき人を日本の主筋とし、かくのごとくあがめ奉り、主君となしてかしこまり給へるは、まことに道ある君なり、我等いかで國郡を給はりながら忠を存ぜざらむやと、むかし賊心ありし者も、たちまちひるがへして普代の思ひをなせり。爰をもつて世の太平すみやかなり。禁中をはしまさではいかで此德あらんや。こゝをもつて日本國のためとは申なり。今川貞俊云。文道をしらでは武道終になるべからずと。此貞俊は武家の世となりて此かたの文武二道の人也。世の兵亂は人の病氣のごとし。邪氣甚しき時は、其邪をせむるの藥なくて不叶。邪氣さりて其跡虛したる時は、人參白朮等の靈藥なくてはひだちがたし。戰國には武勇のはかりごとにて國を取といへども、すでに敵なくなり國虛して戰國のつぐのひ、今

り長しぬれば、將軍の士はむかしの公家のごとく、國々の士は地下よりもくだれり。大名も我家來程の人にをされ、家中の諸士は頭のあがるべき樣なし。是いきどをりの本也。將軍家の諸士は御威光なりと不禮をつくすを以て眉目と思へり。勢にをさるゝほどこそあれ。天道はみてるをかくなれば、少ほころびたちぬれば、諸士のいきどをり時を得て、臣たらんとおもふものすくなし。前車のくつがへるいわれを知者まれなり。　問。今時公家は小身にて官位高く、人に無禮をなし給へり。むかしの名殘あらため給わず、其非をさとらざるにてをわしますや。　云。しからず。むかしは奢りによつて權威を失ひ給つれども、それは其時の事なり。今に位ばかりにて持たる公家にておわしませば、わざともいたかなるがよく候。今にして人にくだり給はゞ、公家は絕侍べし。むかし權威ありし時ならば謙り給ふがよし。今は少しもくだらぬがよく候。武家よりも隨分敬たまふが禮儀にて候。　問。時有て公家の天下にかへる事も可ㇾ有か。云。中〳〵かへるまじく候。此方よりあたへ給ふ共末つゞき申まじく候。昔は武家より御氣遣も有べき事なるが、今は何の用心もなき御事也。是をもつていよ〳〵位を位に立て尊敬し給ふが日本の爲にて、又將軍家御冥加のため也。　問。日本の國の爲とは如何なる道理候や。御冥加の儀は尤に候。　云。もろこしよりも日本をば君子國とほめたり。其故はもろこしの外には日本ほど禮樂の道正しく風流なる國は東西南北になき事也。それは禁中をはしますゆゑにて候。清盛賴朝よりこのかたは、武人大君と成て武勇のつよき人天下をとれり。武は野人に近き程達者に成申候。武家といへども久しく

て人道明かなり。天照皇は地生におわしまさず。神武帝其御子孫にして天統をつぎ給へり。氏系圖を云事も、王孫のたゞ人と成て國士の姓に異なるが故なり。然れども一度たゞ人となりぬれば天統をつがず。地生にひとしきゆへに、天下をとりても帝王の號を得事不叶。三種の神器を身にそへ奉りて天津ひつぎをふまん事は、天照皇の恐多く、且天威のゆるさぬ所あり。日本のあらんかぎりはかくのごとくなるべし。他の國にはなき例なれ共、日本にては必然の理也。　問。かくのごとくゆへある帝王の天下、何として武家にはわたり侍りきや。　云。謙德を失ひ給ひし故に天下の權威を失ひ給へるなり。むかしは日本國中一國のごとく、今の樣なる國郡の大名なかりしなり。都より代官として受領をつかはし給ふ。國々は農兵也。其後王德をとろへ、國々に我まゝなる者出來て王命を用ひざれば、征伐につかはされし人則其國を治め、子孫はをのづから國王のごとくなれり。國々にては歷々大名なる者を、官位なければ凡人と稱し、官位卑ければ地下といひて、輕しめあなどらるれば、その心に王城をものうき事に思ひうとめり。故に王臣たらんことを願はず。其折節武臣の大家棟梁を取ぬる人あれば、則したがひて主君とし、士の禮儀有事をよろこびぬ。是王者の武臣に威をうばはれ給ひし根本なり。もと武家公家とわかるゝはひがごと也。むかしはなき事也。是も奢りゆへ出來たる也。　問。武家の天下と成てよりこのかた五百餘年の間に天道命を改め給ふ事六七度なり。代のみじかゝりしことは何ぞや。　云。それも謙德を失ひ給ひし故也。かはりたる代の初には傍輩たる事近し。よつて士の禮儀正し。富貴年々にまさり奢

氣よるべき所なければ、こと〴〵く亡て殘なし。天災地妖生ずべき所なし。人爲の禍亂何によつておこらんや。外に邪氣のおかすなく、内に七情の相勝なし。疾病いづくよりならんや。大舜の孝以て天下を知給ふ。至德の化如ㇾ此し。中國の民の其風を望むはいふにをよばず。東夷西戎南蠻北狄の耳にもきかず。通路なき國々までも、此時に至て無事をたのしまずといふことなし。堯舜は人倫の至りといふ是なり。如ㇾ此の至治は孝を以てせずして何をもつてせん。堯舜の道の豊に高きこと明辨せずして明か也。彼異端の諸家は大鵬の側の蟬と鷦鷯のごとし。日を同して語るべからず。孝經に四段の敎あり。天に四時のあるがごとし。第一段は條理也。第二段は極功也。春夏の道に配す。第三段は反覆して心法を發明し給ふ。第四段は變を說給ふ。秋冬の義に配す。

一。或問。他の國にては誰にても天下を取ては王となるものなるに、日本にてはかく天子の御筋一統にして天下を取人も臣と稱し、將軍にして天下を知給ふは、いかなるいはれにてをわしますや。云。中夏は天地の中國にして四海の中にあり。南に六の國あり。西に七の國あり。北に八の國有。東に九の國あり。是を四海といふ。南を蠻と云。虫にかたどれり。西を戎と云。いぬにかたどれり。北を狄と云。けものにかたどれり。東を夷と云。人にかたどれり。四海の内にてすぐれたり。九夷の内にて朝鮮琉球日本すぐれたりとす。三國の内にては又日本をすぐれたりとす。然は中夏の四海の内には日本に及べき國なし。是天照皇神武帝の御德によれり。大荒の時日本の地生の人は禽獸に近し。しかるに天照皇の神聖の德を以て、此國の人の靈質によりて、敎をなし給ひてより初

人の初は農なり。農の秀たる者に。たれとりたつるとなくすべて物の談合をし指圖をうくれば事調りぬる故に、其人の農事をば寄合てつとめ、物の裁判のために撰びのけたるが、士の初なり。在々所々ありて後又秀たるものに物の士が談合しひきまはされて諸侯出來ぬ。又諸侯の内にて大に秀たる有。其德四方へきこへ、その〳〵不ㇾ及所は此人より道理出る故に、寄合てつかねとし天子とあふぎたるものなり。扨士の中より公卿大夫と云ものを立、農のうちより工商を出して、天下の万事備り、天地の五行に配して、五倫五等出來たるなり。

一。學友問。孝を以て天下を治といへり。しからば孟宗の至孝なるも、天子とせば堯舜の御代たるべきか。曰。孟宗ごときの數子はたゞ天質の美なり。いまだ性命の學に委しからず。愛を以て其親に事る所も又情欲の父母也。雪中に笋を求るは性命の父母につかふるの心にあらず。舜はもとめ給はじ。たゞ性命の父母に事て後孝をもつて天下を治べし。みづから心を盡し性命明かなる時、初て父母の性命に事ることを得べし。愛敬盡ㇾ於ㇾ事ㇾ親、而德敎加ㇾ於二百姓一、刑二於四海一といふもの也。如ㇾ此なれば天下皆正人となる。天下正人となる時は、天下の人の悅心を得て其父母につかへ給ふなり。先祖天地大虛共に其悅心をうけ給ふ。此時に至て天地の氣和て至極の和あり。鳳凰麒麟も此大和の氣中に生じ、神龍靈龜も海中に生ず。風雨民の願ひに應じ、五穀大にみのり、草木生長して留滯なし。鳥獸魚蟲みな其生を遂、山鬼の魑魅魍魎皆吉神に化し、蛇蝎みな龍に隨ひ、虎狼深山に遁れかくる。出ればかならず弓矢にあたる。天下の沉魂滯魄一時に消て跡なし。悪鬼邪

は、それ者といふもの其家と云ものはなき理なり。其ゆへは五等の人倫のあまねく學て、人々の業にをゐて受用することなり。人幼年には學び壯年には行ひ老て敎るは古今の常なり。誰道者とあることはなく、親は子の師たるがごとし。其同じき人の內を以て上より大學小學のつかさを命し給ふことゝなれば、初より人にをしへむとて學問する人もなく、人に敎る家とてもなき道理なり。士といふものは小身にて德行のひろきものなれば、上下通用の位にて、上は天子諸侯卿大夫の師と成、下は農工商を敎へて治るものにて、秀れば諸侯公卿ともなり、くだれは庶人ともなり、才德ありながら隱居して庶人と同じく居を處士といへり。大道を任じて志大なるものは士なり。公卿諸侯の本地なる故に、賢なれば公卿諸侯もくだつて士を敬し給ぬ。德と年と位との三を天下の達尊といふ。朝庭にして上下の禮のある所にては位を尊び、常の交には年を尊び、世をたすけ人に長たるの道にをゐては德を尊ぶ。公侯は士の賢をうやまひ給ひ、士は公侯の位をうやまひ、たがひに相敬するの義なり。志同じく心を友とする時は、双方の尊卑相忘る義もあり。道をしらざる人は、我本地を忘て一旦のうかべる富貴に奢て士を慢れり。然れば才德あるものは隱れて不レ出、中人以下の者はいやめになり心から下輩に成て、天下によき士出來ざるものなり。扨庶人一等と云は、農が本にて工商は農をたすくるものなり。工とは工匠ばかりにあらず。鍛冶白かねや塗師屋小細工師すべて何にても職をする者を云。商はあき人にて、居ながらあきなひするも、國々あるきて有所の物をなき所へ通ずるも、手に所作なくて金銀をもつて世を渡る分は、おしなべて商なり。まづ

かはりなきゆへなり。一國にても諸侯は其國に君として役儀なければ、人君の行あり。臣なれども天子も客の禮をもつて待給へり。今日本にても諸大名の參府の送迎には、老中を御使としておもくもてなさるゝと同前なり。日本王代のむかし、上代と中世と時勢のかわりしを考へられず、此禮を行れざりし故に、天下を失ひ給ひしなり。聖人の掟に少しもたがふことあれば、長久ならざるものなり、士一等とは其內ことにしな〴〵おほしといへども、德行のおなじき故なり。番頭幷一人立の歷々を上士と云べし。物頭與頭組付にても千石以上の人は中士の品なるべし。千石以下の平士は下士なるべし。所司代は武官なり。中夏の士師なり。代官は農に兵ありしむかしは上士の役儀なるべし。日本の今は兵が農をはなれし故に下士の役となり、或は庶人の官にあるものゝ役とも成ぬ。江戶大坂の町奉行は中士の位にて威勢は今の上士よりもおもきものなり。國々の町奉行は大かた下士より出ぬ。中士にして兼るものあり。少づゝの物奉行はおほくは下士より出るあり。それよりもひきゝは庶人の官にあるのたぐひもあり。中小姓と云には大身の子も小身の子もあれば下士の內なり。步士は庶人の官にあるたぐひなり。物よみ醫者などは、町よりおこりたるは庶人の官にあるたぐひとも云べし。また醫者は庶人の內工商のたぐひたるべし。禰宜などは、庶人の官にあるたぐひなり。又神職に高官もあり天文道樂道醫業などは、代々其家ありてなすもよし。心を用ひてくはしきが故なり。しかればとて家と成て人のするをふせぐはひがことなり。尤たゞ人にても其道に得たる人出來れば、其家へ致ることあり。たゞ道學のことばかり史官物よみの外に

とする者出來る勢也。孔子は方々にて小官をも辭せずして役儀をつとめ給ひき。孟子に至てははや師とあがめられて方々の馳走あり。官祿なく産業なし。德のおとろへたる也。然ども孟子は大賢にて、孔子に繼立て天運の變を行ひし人なれば、其身にをひてはいふべきやうなし。後世に至て孟子の德なき人孟子の風にならふ時は、まさしく道學を説て産業とするになれり。たとひ其人私欲のけがれなく道を行とても、五等の人倫を離れて道者と云者出來る時は、はや五等の人は道を離る處あり。終には道學へそなへ物と成て、天下國家の用をなさず。其後道者佛者とて、人倫の外に道を説て渡世とする者、多く爭ひをこりたるは尤也。孔子此萠を見給ひし故に、五等の孝を發明し給ふ也。萬歳道學の鑑也。此鑑に違ふ人は堯舜の徒に非ざる事明らけし。問。五等は數すくなき事にて侍れば古とても五等ばかりにては用達すまじきと思はれ侍り。曰。大綱は五等なれ共、其一等一等に類ひ多し。天子ばかり只一人にておはします。日本の今にては又大樹一人也。諸侯一等といへ共、公侯伯子男の五品あり。外に又附庸の國あり。日本にても名こそ違ひたれ、此品有り。四五十萬石の以上は公侯のごとく、三十萬石の少し上下は伯のごとく、十五萬石の上下は子男のごとく、十万以下は附庸のごとし。是諸侯一等の内の品あり。卿大夫一等とは、其德行役儀の道理同じき故に、大小高下をしなべて一等といへり。其内の品をいへば、天子の公卿大夫は、公卿は公侯になぞらへ、大夫は伯になぞらへ、元士は子男になぞらふ。諸侯の卿大夫は小身なれども、人の臣として君の命をつたへ國政にあづかる故に、天子の老諸侯の老共に大臣とも老臣共いふは、行事の

に柔なるも剛く、此身ながら神化變通して大賢の位に至り給へば、天下の事におひて何事も聖人にたがふ事なし。

一。心友問二孝經之大綱一。答曰。孝經の心法は、正レ心修レ身天命の分を安して、人々處所の位に隨て道を行なり。天の人を生ずると物あれば則あり。天子の富貴にはをのづから天子の則あり。公侯伯子男をの／＼則あり。卿大夫士其道あり。農工商其務あり。其行ふ所の大小は各別なれども、孝の心法はかはりなし。大河の水のながれて所に隨て象をなすがごとし。方々にて田地の爲に井手をつくれば、其井手ほどに流るゝがごとし。ひきゝに就て晝夜をとゞめず。外か温にして内明かなるの性はかはるなし。君子の象なり。小人の心法は外を照して内昬し。人の非をかぞへて己が不善を改めず。燈臺のもとくらきがごとし。天下の人みな内明かにして己が不足をしり、外温にして人の非をとがめず。天下の人みな我にまさる所あるとを知は、孝の象のごとく相たすけて天下平なるべし。孔子の時すでに異端のおこるべき萠有。孔門の學者は皆人々の本産あり。多くは日本の地士と云かとくにて、古風の田地の家督あり。學は正心修身の志にてまなぶものなり。出てつかふる人も國用のつとめあり。役儀なく本産なくして道を說て人にやしなはるゝものはなかりしかども、堯舜三王の盛なりし時とはかはりて、何となく五等の人倫ばかりの樣にはなき勢あり。孔子の時を得給はずして天下を周流し給ふも、古になき風なり。聖人にして時の變を行ひ給へども、後世の人これを似せて一二變する時は、五等の人倫の外に道學をもつて家を建て産業

はもれたる人侍るはいかゞ。曰。それは氣質の美にて侍り。いまだ大道を見ずして入德の學はしらざれども、氣質に木氣の精を多くうけて生れぬれば、木氣の神は仁なるが故に、慈孝懇切にして俗小心ともいふものにて、孝行なるものなり。其方の氣質にあつき程又他の靈明うすければ、孝行なるほどにとて學用ひては、國家の政道などには不才なるが多く侍り。此人賢聖の師に逢て心法を受用せらるれば、それは又常の人にちがひ、各別入德の功はやく、他の不足なる所もますとやすく侍り。曾子のごとき是なり。むかし曾子父のために瓜をくさぎれり。あやまりて瓜の根をたつ。曾哲怒て大杖をあげて曾子をうつ。曾子たへて地に伏たり。狂者なればすてゝ家に入ぬ。しばらく有て曾子よみがへれり。父の心もとなく思ひ給はむことをはかりて、曾哲の前に跪き、さきに不敬の罪あり、大人力を用ひて敎給ふと云て我方に歸り、琴を彈じ詩を詠じて、父に痛みなきことをしらしめたり。聞人涙を流し感じあへり。門人悅で夫子に告たり。孔子聞召て吾道の學者にあらず門に至ることなかれと。侍者驚て其故を問。孔子曰。我人に孝を敎るに、大舜を師とせずと云ことなし。舜は父の小杖を持てうつ時は、うたれて退き給ふ。大杖を持て追時は、其あたりに近付給はず。父をして人を殺すの罪にいたらしめじとなり。今曾子幸によみがへりたればこそあれ。若其まゝに死たらば、曾哲は孝子を殺すの罪をまぬかれじ。何ぞ大杖をみて早退かざるや。心を用ざるの甚しきなりと。門人曾子に告たり。曾子趨りて其罪を謝す。曾子は生得孝行なり。しかれども氣質魯鈍木訥なる所ありき。聖師につかへて大學の心法を受用し給へば、愚なるも明か

にをひては符節を合せたるがごとし。又朱王までも各別にあらず。朱子は時の弊をたむべきがために、理を窮め惑を辨るの上に重し。自反愼獨の功なきにあらず。王子も時の弊によつて自反愼獨の功に重し。窮理の學なきにあらず。愚自反愼獨の功の內に向て受用と成事は陽明の良知の發起に取、惑を辨るの事は朱子窮理の學により侍り。朱王の世學者のまどひ異なり。地を易ば同じかるべし。窮理とて事々物々の理と空にいひては人のうたがひあり。たゞ學者の心のまどひある所の事物によりて其理を窮るなり。されば是は初學の時の事なり。大意心に知得すれば、いまだ不辨不知の事、千万の事物前に來るといへども、まどふべきことなし。異學の一代心を盡す悟りといふものは、聖學にをひては力をもいれず心をも勞せずして遊びながら得ることなり。

一。學友問云。同じく聖賢にて侍れば、何れも孝行ならざることはあるまじきに、大舜文王曾子閔子の數人ばかり孝子の數に入侍ることはいかゞ。答云。歲寒して松柏の凋におくるゝことをしり侍りぬ。平生無事の時には、聖賢の善行とにめづらしくいふべき樣なし。聖賢の道を行ひ給ふは、人の無病の時と同じ理にて常なり。其時は凡夫もうち見たる所はわかちがたし。明者の目には黑白のごとくわかるべき事なれども、大不孝か大惡人にてだにあらねば、夏山の綠は夏木冬木のわかちしらぬ目には、たゞ青山とばかり見るなり。大難にあひ大變に逢ては、凡人と君子とのわかち大にちがひあり。孝子の數にいへる聖賢は、いづれもあふ所の境界常ならぬ所ありし故にて侍り。

問。人の行は孝より大なるはなしといへり。しかるに孝行は聖賢にもおとらずして、聖賢の品に

言動の四のもの、思を主とせずと云ことなし。其上顏子には思の格は不ㇾ用ことあり。中人以下の學は、善を思ひ善を行て惡を思ひ惡をなすにかふるなり。心思躬行ともに善のみにして惡なきを善人と云。凡俗を出るの初なり。是より信美大聖神にすゝむべし。顏子は既に大人なり。惡念の靈臺に往來せざるのみならず。善念も亦往來せず。何の思の格あらんや。しかれども三月仁に違はざるの語あり。春夏秋冬みな三月にして相易ふるものなれば、三月といへば一年中の事なり。年月日時をへて終に仁にたがふとなし。然れ共三月違はずといふものは、たまさかに暫の間善念のきざしあることあり。おもふこともなくするともなく、寂然不動にして、感じて通ずる聖人の心地には、すこしおよばざるとあり。しかれどもたゞ一片の浮雲の大虛を過るがごとし。それだに平人にありては擧ぐべきほどの善なれども、顏子においては自然の躰にあらざる故に、其善念を須臾もとゞめず、遠からずして復するなり。　問。心上だに如ㇾ此ならば、視聽言動の末の事を告給ふとはいかゞ。　答。顏子高明廣遠の事にをひては聖人に同じ。今さら告給ふべきにあらず。平人より聖人に至るものは、本を務るに急なり。末の事には心もつかず。殘りあるとあり。仁は天地万物をもつて一躰とす。殘すべきものなし。これによつて末の事を告給へり。顏子治國の論にをひて輕晃を以てこたへ給ふ所にて知べし。問。先生の論は陽明子の傳に似たり。朱子王子格致にをひては黑白のたがひあるとはいかゞ。答。愚は朱子にもとらず陽明にもとらず。たゞ古の聖人に取て用ひ侍るなり。道統の傳のより來ること朱王共に同じ。其言は時によつて發する成べし。其眞

他人の上には如ﾚ此く明かなれども、身の交接する所にをいての私欲まじはる故に、其怒る所は道理にても、相火たかぶり内心ふすぼりくらく成故に、氣いれてしじまり、言語つゐでをあやまり、平復の時後悔おほし。是を怒にうつるといへり。文王一たびいかり給ひて天下の民安し。聖人はいかり給ふとなし。もしいかり給へば、天理存し人欲亡び、善人あらはれ惡人退き。雷雨の動がごとし。惡人をそれて其逆心の肝を消なり。怒のみにもあらず。悲哀といへども吾人にありて聖人に近きことあり。五百歲千歲昔の事漢大倭となく、物の哀なる事をきゝ、又は道理の至極を聞ては、涙しきりにして止むべからず。一體の心眞實惻怛の情にをこるといへども、本心の靈臺において少も損益なし。平人の心はかへりて常よりも惡念妄思至らずして善に近きとあり。私欲の交りなき故也。

一。學友問。格物致知の心法は、古昔の經にもなく、孔聖の語にも見へ侍らず。子思初て發明し給たるか。　答曰。易の六十四卦、其位に應じて格致の心法あらずと云ことなし。易簡明白にいづれへも通へる樣に、初てかゝげ出し給ひしとは、堯の舜に傳給ふ執ﾚ中の心法也。孔子の顏子に傳給ふ非禮視聽言動することなかれと、是みな格物致知の義なり。曾子の一貫を忠恕とやわらげ給ふごとく、子思又孔曾の傳の心を述て經一章とし給ふ時、格物致知といへり。　問。視聽言動を云て、肝要の思を殘し給ふことはいかゝ。　答。四時と云て土用をいはず。元亨利貞と云て誠をいはず。仁義禮智と云て信をいはず。四に應してはなれざるものは、いはずして其內に有。視聽

も二十も亡失す。色々の妄はみな昧き所にあつまるとなり。大陽東に出給へば、夜中に出ありきつる狐狸蚊虫のたくひまで、皆何方へ行やらむなきがごとし。爰に歩士あらんに、歩行の者にて其風の卑俗なるを悟り神妙にせんと思はゞ、苦勞にしてやゝもせば舊習出ぬべし。馬に乘ほどの身上に成ては、本の歩行の者の風俗はをもはずしらずなくならむ。我身の人がらいかむと省て、よくみづからの凡位をしり、時々にまどひをわきまへ、心法の受用間斷なければ、段々に其位をぬけて、終に德に入君子の地位におよぶものなり。是を氣質變化ともいへり。問云。怒を遷さずとは、こゝの者にいかれども其氣かしこのものにくわへず、平人は一人にいかりては終日其氣とけず、顏子のいかりは其不義其惡逆にありて人にあらざるゆへに、其怒の氣うつさず、鏡の美を照し惡を照すごとく去て跡なきにて侍るや。答。尤其とをりにては侍れども、其分にては今日の受用と成がたくして、たゞ聖賢の噂ばかりなり。今日吾人にありても、聖人の怒に同じきことあり。むかし物語をきゝても、長田か義朝をたばかり鎌田を殺したる所にては、誰もにくき心生じいかり發して、其時に居ましかば一刀切たくおもふなり。又今の時にても、他に不義無道なるものあれば、いかりにくむ心生じぬ。しかれども此怒は、性命の正に本づきて私欲のましわりなき故に、たゞ氣の廣大剛强になりたるばかりにて、相火のたかぶりなく、內心常よりも清明なり。是一は各我等ごときといへども、聖人の心地に近く侍るなり。是を怒にうつらずと云。聖人は今日の交接といへども私欲まじはりなく、萬事みな性命の上より發する故に、如此し。吾人は

一。學士ありて問て云。顏子のごとくあやまちをふたゝびせざる事は、大賢の心地ならではなるまじきとなり。何とぞ受用の道も侍るべきや。　答曰。まことに甲にあやまつ事を乙にまたせざる事は、後世の學者の及がたき所なり。亞聖の地位にては事々さ樣にもあるべき事なり。吾人といへども外ざまに心得ちがひたる過は、大に悔さとりて其非を知たる以後は、二度せざる事あり。自己今日の受用において過を二度せざるの工夫は、ひそかに人に聞侍り。心なくして道にはなるるを過といひ、心ありて過を遂を惡といふ。思はずしらず心上に一念道をはなれぬるを過とす。既にこれをしれば少も心思にとゞめをかず速にかちさると、たとへば大なる爐火の中へ一點の雪をちらすが如し。火の上までおとしつけず。火氣を以て消しさるなり。少しにても道をはなるゝの念慮をしりて不ㇾ去は、過をふたゝびするなり。二度すれば惡に近し。吾人いまだ氣質を變化せず、其平人の位をぬけざる間は、其心地の位ほとなる間思雜慮は、晝夜に幾度もきざす事なり。たとひ百度萠すとも、よく一念獨知の上におぼへさとりて、速かにかちさり知て後暫くも滯留なきを受用とす。これを遠からずして復すともいふべし。

問。聖學の心法此外はあるべからず。如ㇾ此間斷なく受用せば、終に君子の地位にも企及なんか。

答云。これは尊德性の工夫也。こゝにばかりとゞまり居て惑をわきまふる學問なくしては、今日の常人の位をぬけがたし。しかるゆへに右の工夫もすゝまずして後々には退屈せり。惑を辨へて眞智照ぬれば、今日の凡位をぬけぬる故に、只今晝夜におとづるゝ間思雜慮の妄は、一度に十

る一心の上に盡して、天地同根万物一體の性命明かなり。よく一日も私欲亡て天理存する時は、其大をたづぬるに外なく、其小を見るに內なし。纔に初て仁をいふべし。義は孝の勇なり。禮は孝の品節なり。智は孝の神明也。信は孝の實也。赤子孩提の時、孝の理初て親を愛するに發出す。花の纔にほころびむとするごとし。其長ずるに及て、子の心に親を尊ぶの敬生ず。花の淸香のごとし。此愛敬の德親に初めてあらはるゝ故に、本分の名をあらためず。親につかふる道を孝と云。母につかへては愛あらはれ敬存す。子にをひては愛事を用て敬內に伏す。是を父の慈と云。父の慈と子の孝とを合て父子有ㇾ親といふ。此孝德君につかへては敬外にして愛內なり。臣にをひては愛敬ならび伏して威嚴備り仁政行はる。君の仁と臣の忠とを合て君臣有ㇾ義といふ。妻におひては愛みちびき敬存す。夫にをひては敬とを用ひて愛存す。夫の和義と妻の貞順を合て夫婦有ㇾ別といふ。心ありて如ㇾ此するにあらず。心の妙にて自然とかく變化するなり。其中をのづから本末淺深の天則あり。兄につかふると父につかふるがごとし。弟をめぐむことと子を愛するがごとし。兄の惠と弟の悌とを合て長幼有ㇾ序といふ。朋友は眞實無妄の天道を父母としたる兄弟なれば、實なきものは朋友にあらず。是をもつて朋友有ㇾ信といふなり。一人の人あり。子に逢ては父とよばれ、父におひては子といひ、君の前には臣と名付、家臣は又君と稱するがごとし。畢竟一人の人なれども、逢にしたがつて名かわれり。本心の一德なれども、位によりて神通變化して其義極りなし。

く見、孝經をは高く見を習とす。いかんとなれば、易は天道なり、近く人道に合すべし。孝經は人道なり、遠く天道に合すべし。程子云。易因ニ爻象ニ論ニ變化ー。因ニ變化ー論レ神。因レ神論レ人。因レ人論ニ德行ー。大體通ニ論易道ー。而終レ於ニ默而成レ之不レ言而信存ニ乎ニ德行ー。この故に易は畢竟人の德行を成に歸するなり。人の德行は孝より大なるはなし。

一。心友問ニ孝之心法ー。答曰。孝は天地未畫の前になり、大虛の神道なり。天地人万物みな孝より生ぜり。春夏秋冬風雷雨露、孝にあらざるはなし。仁義禮智は孝の條理なり。五典十義は孝の時なり。神理の含蓄のところを孝とす。言語を以て名付いふべからず。しゐて象を取て孝といふ。孝の字老子の二を合て作れり。文字の傍偏となす時には、書をはぶきしなり。天地いまだひらけざる大虛の時には、理を老とし氣を子とす。天地すでに開けては、天を老とし地を子とす。乾坤を老とし六子を子とす。日を老とし月を子とす。易の字日月を合て作れり。日月老子其義一なり。易と孝經とへだてなき道理なり。山を老とし川を子とす。中國を老とし東夷南蠻西戎北狄を子とす。君を老とし臣を子とす。夫を老とし婦を子とす。德性の感通にをいても、仁は老なり愛は子なり。此理を以て万事万物におしてみれば、孝の理なくして生ずるものなし。此神理の我が心に有するものを取て受用とすれば愛敬なり。上より見くだせば老夫の幼子を携たる體にして愛の象也。下より見あぐれば子の老を戴きたる體にして敬の象なり。其親を愛するの心は天下にをゐてにくむべきものなし。其親を敬するの心は、天下におひて慢りかろしむべきものなし。愛敬親につかふ

集義和書卷第八

義論之一

一。心友問。論語の教は仁を主とし大學の教は知を主とするとは何ぞや。　答曰。論語は聖人いまして直におしへ給ふ故に、仁を主とし給ふ。仁は德の本なればなり。大學は聖人すでに去給ひ、後聖世に出給ふことありがたかるべき前知あるによりて、知を主とし給へり。智は德の神明にして、性の先見するものなり。天下の惑をわきまへて人倫を明かにする書なれば、知を主宰として自反愼獨の實體とす。聖人いまさゞる時問學する人は、大學を入德の門とし論語を入德の室とす。

一。心友問。貴老易と孝經とをならべ給へり。易は玄妙深遠廣大高明なる書なり。孝經は童子の始てならひまなぶ書の樣にいへり。さればうたがひなきことあたはず。

答て云。言近くして旨遠きものは善言なりとは、孝經のたぐひなり。易は天地によつて道德を發明し給ふ故に、其語勢幽遠なり。孝經は人倫にをゐて道德を敎給ふ故に、其語勢親切なり。爰をもつてよく易をみる者は、近く身に取て親切に受用し、幽遠の事となさず。よく孝經を學ふものは、詞の近きによつて幽深玄遠の旨をうしなはず。中和をいたして天地位し萬物育するの極功、神聖の能事こゝにある事をしれり。孝經は句ごとに心をとゞむべからず。尤とゞむべき所もあれども、先は大抵に見樣あり。易は勿論大意あれども、句ごとに窮りなき道理あり。畢竟易をば近

仁者を富しめて國郡の上に置にあり。澤の天にのぼるは、民の父母たるべき仁者の君位にあがり恩澤の下にくだる象也。水は下るものなれば、天にのぼる時は必ず下にくだる義なり。此時必ず小人のさまたげあり。故に明央の義ありて明かに邪曲をたゞし決去なり。

集義和書卷第七終

作法は、皆鬼神に事る次第なり。親の精神躰をはなれて氣色みえず音聲きこへざる故に別をかなしめども、實は死生不二也。故に生時は人に事る禮をなし、死時は鬼に事る禮をなすなり。時處位の至善を不レ知して有無の分に過て葬をなすを以て厚に過ると心得たるは愚なり。愚者は何ぞ大事に當るに足べきや。夫禮は繼べきことをし傳べきことをなすと、孔子ものたまへり。今の學者の厚きに過ると云ものは、後世に傳べからず子孫繼べからず。變に通ぜざれば民人禮法に退屈す。少きの哀情の誠までも事の調かたきに失してうすくなるなり。孔子喪はをさめんよりは戚とのたまひし聖言には大にたがへり。其本を不レ知して末にかゝはるが故なり。終には西戎の佛法をひき入て中國の道をとろへたるも、此なづみによつて也。

上古結レ繩而治。後世聖人。易レ之以ニ書契一。百官以治。萬民以察。蓋取ニ諸夬一。

上世は人淳に事簡なりしかば、國家天下の政事にをいて、大なる事には大繩を結てをきてとし、小きなる事には小繩を結て定をなしたり。是にて事たりぬ。後世は風俗次第に薄く事繁くなりて、欺き詐ること與りたる故に、繩の政事にては事とゝのいがたし。䷪の封を見たまへば、君子の道長じ小人の道亡びなんとす。又明夬の意あり。是にをいて文字を作て善惡邪正を明にし、符節を作て眞僞をたゞしたまひしかば、小人の邪曲かくるゝ處なくして決去。書は文字を云。契はをしてなどの類なり。是文明の始なり。君子澤の天にのぼる象を見たまひて、祿をほどこし下に及さんとす。上に恩澤ある時は、必ず下みな是にうるをふものなり。恩澤の下にくだることとは、

ども其行にをいては情欲の父母に事に近し。貧ならば貧ほどに葬をなさばこそ、親の心もこゝろよかるべけれ。身をうりて葬るは分の義に過たり。葬に身をうりたるにて、先祖よりの田地家財等をこと〳〵く平生親の養の爲にうりつくしたる處みえたり。是又親の性命明ならば大にいたましき事也。たゞ今日情欲の父母を樂ましめるのみなり。これ厚に過と云の主意と時とをわきまへざればなり。古者始て棺を作たる時は、山林多かりしかば、目前の木を伐てうちわり箱にさし、死者を入たるばかりなり。何の造作もなき事なりき。それをだに厚きに過ると云しは、其時までは質直にして道理のまゝなりしかば、死者は土に歸することはりにて、其まゝ地に葬しに、箱に入は厚に過るとの義なり。親の親たるは鬼神なり。空しきからは今まで住たる古屋なれば、うちすてゝも可なり。親の住たる跡とて其上にかくの如くす。是を以て其時には厚きに過たると云り。後世は其本の心と時とを考へず次第に念を入すぎ、かざりを加へて分限に過て、なりがたき事をつくすを以て、厚に過ると心得たり。大なるあやまりなり。又生を養は大事に當るに不レ足死を送て大事に當るに足と云も、葬の厚を云にはあらず。凡夫の心は眼前ばかりにて、無レ聲無レ臭の理を不レ知。ゆへに何も無ところに怠惰する者なり。生る親を目の前にて疎にする者はまれなり。大方はよく養ふものなれば、其生付よくて少しき人に過たるとても大事には當がたし。其至誠の德はいまだ見えざるなり。親死して其鬼神に事ること誠あり敬あり幽明一貫なる人ならば、君子と云ものの也。しからば國家天下の大事を賴みあづけても、たしかならんとなり。三日三月期三年などの

じと云り。其上言には聖賢といへども不ㇾ同ものあり。なづむときは相離し相爭に至るべし。同きものは仁義なり。夫葬祭は家の有無にかなふと云り。生る時も飲食衣服宮室器物みな有無にしたがふ者なり。何ぞ死のみ有無にかなはしめざるべきや。小過大過は卦のかさなりを見て象をとれり。小大の文字にかゝるにあらず。故に孔子も禮の法にかゝはりて誠のうすくならん事をかなしみたまひ禮はをごりて備へんよりは儉にして敬のあるをよしとす、喪は事物ををさめとゝのへんよりは哀戚の情あるをよしとすとのたまへり。君子の天下を以て其親に儉せざることは、大舜の父もし無道をなしたる時、これを助んが爲ならば天下を捨たまふ事やぶれたるわらぐつをすつるが如くかろくしたまひて、負てのがれたまはんとの主意なり。天下をだに親の爲にはすつること易し。況や其外の物をや。然れども親の養の爲葬の爲とて家の有無をはからず產業をやぶり家人をくるしめ祭祀を絕をもかへりみずと云には非ず。古人性命の父母に事たる者あり。情欲の父母に事る者あり。夫董永が至孝はまことに凡情の及がたき處なり。凡夫は幼少なる時ばかり父母をしたふ。成人にしたがいて妻子を愛し財寶を求め、君に事て位祿を願ひ、朋友に外聞を思より、種々の名利胸中によこだはりて、父母を思ふ心日々にうすし。生を養も死を送も、愛敬と外聞と共に相交れり。然るに董永は親の養をゆたかにせんが爲に、妻を迎へず一家の產を盡して生る間の養とし、死せる時は我身をうりて葬をなせり。全躰の精神親に奉じて私の願なし。人のなりがたき孝なり。故に至誠神を感ぜしめて、天道神女をあたへ身をうけしむ。これ其志を好したまへばなり。然れ

には鬼神と云。君子の心は人鬼幽明一貫にしてへだてなし。是故に死に事ること生に事るか如くするなり。我身の死たるからは谷淵に投すてんとも可なり。莊子我死なは野にすてゝ天地を以て棺槨とせんと云しも此心なり。然れども上古には生る時も屋なかりしかは、死しても棺なし。後世は生る時屋あり。しかるゆへに死して則土に入ること常の理とは云ながら、孝子の心にをいて不レ忍ところあり。空きからといへども、今まで父母としつかへたる人の形なれは、をろそかにはもてなしがたし。生て屋室あれは、死しても棺あるべき義なり。是又生に事るが如の心也。むなしきからまでをも衣服せしめ棺槨を作て厚くするは、孝子心の厚きに過る大過の義なり。又䷛の象を見たまへば、澤を上にし木を下にす。☴は木なり、又入なり。澤は土也。木を土にいるゝの義なり。是によりて棺槨の制はじまりぬ。又☱は悦也。親のからまでを木にいれて土にきす。孝子の心安堵するは悦の義なり。

或問。南軒張氏曰。君子不下以二天下一儉中其親上。於レ此而過无レ害也。丹陽都氏曰。臼杵 棺槨。所三以使二民養レ生送一レ死無レ憾。所三以依二於人一者。過レ厚也。然養レ生。不レ足三以當二大事一。故取二小過之義一而已。送レ死足三以當二大事一。故取二大過之義一焉。かくの如くなれば、不レ及ところをもとゝのへて葬をあつくすべき義なり。董永が身をうりて一生人のやつことなりて親を厚く葬たるは、まことに天下を以て其親に儉せざるなり。大事に當るに足べきか。云。書には主意あり時あり爲にすることとあり。言のみを信ずる者はついえありて益すくなし。ことごくに書を信ぜは書なきにはしか

らず。野處巢居しても風雨にもいたまざれども、次第に世の中自由になり、氣血よはく病氣生じて、穴居しては濕氣をいたみ、野處しては風雨にをかさる。故に其時の聖人民居をなさんと思ひ給ひ、䷡卦の象を見たまへば、雷雨うごいてみちみつれども、乾は下に安む、上の二陰雙べわかれてくだる時は、下の一陽これをたもつ。是にをいて一陽を棟にかたどりてさしあげ、上の二陰をやねにかたどりて双べふきくだし、乾三陽の下にすくやかに立たるを柱にかたどり、始て宮室の制を作りたまふ。是にをいて人居大に壯にして、禽獸と異ること遠し。亦大壯の義なり。

右之葬者厚衣レ之以レ薪。葬ニ之中野一。不レ封不レ樹。喪期無レ數。後世聖人。易レ之以ニ棺椁一。蓋取ニ諸大過一。

上世は棺椁もなく、つかをつき木をうえ石を立ることもなく、亦喪に居こともなし。人死すれは廣野の人なき處におくり。其上に薪を積みて覆たるばかりなり。ほどなく朽失て跡なし。精氣物となり遊魂變をなすことはりにて、人死すれは魂氣はもとより天にゆき、魄躰は土に歸する常の理にしたかへるのみ。別をなげく事も、哀情のかぎりほどなけくのみなり。生死は陰陽晝夜の道にして、天理の自然なればにくむべからす。たゞ別をかなしめるのみ。其哀情は人によりて厚薄多少あり。上世の人はかざる心なき故に、我心の誠ほどにつくせり。故に喪期數なかりしなり。夫死に事ること生に事るが如くする本意は、むなしきからを云に非す。吾も精神こそ吾なれ。親も精神こそ親なれ。精神去ときは形は住あらしたる古屋の如し。この精神を明には人といゝ、幽

禽獸人家にまじはり害することあり。禽獸をとをざけ惡をおどすには、弓矢の德にしくものはなし。作り初には弓も木に作り、矢も木をけづりて作れるは、弓矢にたよりよき木ありたるなるべし。万事物の始は質素なる物なり。夫そむいて用をなすとは、弓矢のみにあらず。睽は乖異の義なり。天地睽而其事同也、男女睽而其志通也と云り。亦上レ火下レ澤睽、君子以同而異と云り。君子の俗に交ること、形同く心異なり。是睽の卦の火澤、體を合せて性同じからざるが如し。

上古穴居而野處。後世聖人易レ之以ニ宮室一。上レ棟下レ宇。以待ニ風雨一。蓋取ニ諸大壯一。

上世は人の家屋なし。冬は穴にすめり。今山の南日向よき所に石をたゝみあげ、外に土をおき、つかのやうにして中虛なるものあり。是日本上古の穴居なるべし。上世は人の氣血健にして力つよかりしと見へたり。俗には昔し氷の雨ふりたる時此つか穴に入たるなどいへども、其始たしかならず。只穴居とみえたり。夏は野處すと云り。しば土の上にかやなどをしきて居たるなるべし。柴木の長きを四方よりひきよせて、上をゆい中を虛にし、中の柴をかりぬき、上にはかやなどをかけ、今のいなぐろ雉子どやなどの様にして居たるときこへたり。上古の柴のいほり是なり。古歌に「ひきよせて、むすべは柴の、いほりにて、とくれば本の、野原なりけり」とよみしも、むかしを聞傳ていへるか。亦山中に住居する者は、冬は岩のほらなど岸かけにかたよりて、今の岩屋などの様にして住、夏は木の枝のよき處に、又木竹をならべ、ゆかのごとくして、上ををゝい、鳥の巣のやうにして、木の上に住たり。上古の人は無病なりし故に、穴居しても濕氣あた

君子は在位有德かねて云なり。

弦レ木爲レ弧。剡レ木爲レ矢。弧矢之利。以威二天下一。蓋取二諸睽一。

睽はそむくなり。乖く者をば威を以て服すべし。弓は武器の始なり。☲☱卦の象、上は離火下は澤水なり。火は動てのぼり、水は動て下る。是そむいて和せざるの象なり。然れども睽て用をなすの道理あり。こゝにをいて弓矢を作たまふ。木をたはめ弦をかけて弓とし、木をけづりて其さきをとくしはづをつけて矢とす。曲れるを躰とし、直きを用とす。躰用相乖くの理なり。又先へやらんとて吾前へひく。是又そむきて用をなすなり。木はまがりて弦はすぐなり。弓は立矢は横なりまがりたる方へ不レ張して、そりたるかたより引かへして張。みなそむいて用をなすの義なり。重門擊柝は小盜暴人などの防なり。大賊或は東夷南蠻西戎北狄などの中國をみだらん爲に來り、又は諸侯の叛逆などには、弓矢の備なくては防きがたし。弓矢の武具ありても、威なき時は恐るゝことなし。武具を備へ武事をならはし、武備嚴重にして威ある時は、四方是をのぞんで恐れ、をかすべきの心をこらず。文事あるものは必す武備あり。文事は仁政を行て士民をなで安ずるの事なり。禮樂制度其中にあり。武備は文事の美をとげん爲に國天下の警固なり。今神事の大祭には辻がためのあるが如し。聖人は德仁愛にして神武の威あり。其上に文武の業車の兩輪の如く備りてをこたりなし。故に天下の人恐て愛す。夷蠻戎狄も仁政をしたひ、威武を恐て來服す。是を四海一家の如く中國一人の如しと云。又禽獸には人よりもたけく力つよき物多し。兵器なき時は、

君子治世の時にをいて、武備をひそかにまふけたまふも此義なり。
斷ㇾ木爲ㇾ杵。堀ㇾ地爲ㇾ臼。臼杵之利。萬民以濟。蓋取ニ諸小過一。
上世は人稀にして五穀を作り出すこと無し。多は木の實魚などを食とせしかども、次第に人多くなり、五穀を作ることも多かりし故に、それ〲の器なくては、民用多く費て養生の道全からず。五穀の皮粃をとるにやすかるべき器を作んと思ひ給ひ、䷽卦の象を見たまへば、上うごき下とゞまる。上動くの震は木なり。下止るの艮は土なり。震木上にうごき艮土下にとゞまるは、杵臼米を治るの象なり。是によつて地をほりかたくして五穀を入、木をけづり土に入ところをふとくしてうすつかしむれは、皮ぬけ正味あらはれて万民養生の利を得たり。耒耜は耕稼の始なり。臼杵は脱粟の始なり。後世に至て木をえりくぼめて臼とし、又土をねりなどして作れり。又米はもみを脱するすり臼を作たり。次第に五穀多なり人多なるか故に、人用の速かなるやうをもとめたる也。今もやき米むし米などは粟をとるもぬかを取も異ることなし。臼にてつきはやく食となす。是上古臼杵の模樣なるべし。軍中にてかり田とて、田よりいねをかり來て其まゝ食とするも、同むしろをきせ水をかけ、其上に土をかけ火をたきて、むして食とす。是上古鍋釜なき時の模樣なるべし。又小過はすこしきなるものすぐるなり。小は陰にとる。中に二陽ばかり有て、上下みな陰なり。陰の多を以て小きなるもの過ると云。陰は小人にとる。陽は君子にとる。食道は小人多からではなりがたし。小人内外にみちて食を作て君子を養ふの理なり。此小人は庶人をさす。

☳は剛也、☱は柔なり。剛來りて柔にくだる時は䷐となる。牛馬は力つよし。然れども人にしたがひつかはるゝは、是剛の柔にくだるの義なり。後世の聖人隨卦の象と義とを見て天下を利したまふ。それ人は萬物の靈にして知ある故に、人よりも剛なるものみなしたがふなり。舟楫を作に植物の材に隨て河海通ず。服ㇾ牛乘ㇾ馬は動物の性に隨て道路通ず。牛の性は順なり。故に是をつかふ。馬の性は健なり。故に是にのる。牛にものり馬をもつかふことありといへども、第一の處によつて云り。ともに遠をいたして天下を利するなり。

重門擊ㇾ柝。以待ニ暴客一。蓋取ニ諸豫一。

豫はあらかじめ備るの義なり。舟車馬牛の利出來て、天下みちひらけ通ず。故に人民みな其處を得其宜きを得て悅ぶ。豫は喜悅豫樂の時なり。人悅豫する時は怠惰のついゑあり。怠惰して備なき時は必す難生す。其上四方道路ひらけては、邊境の禮儀を不ㇾ知者或は暴人なども至ることもあらんか。故にかねて門をかさね柝をうつて備をなす時は憂なし。門は外の暴客をふせぎ、柝は內の怠惰を戒む。上世は門戶は風雨をふせぐばかりにて戶ざす事はなかりしなり。此時に至て始て屋の戶を閉、外に門をまふけたり。䷁の卦中のとをりあきたるは大路の如し。䷏の卦の內卦の外三陽ふさがりたるは、門をまふけて內安く靜なるの象なり。又外卦の二陰を重門の象にとり下の一陽を擊柝にとりたりとも云り。外卦は震なり。震は動なり。一陽內外の間にをいて動くは柝を擊て戒むるの義なり。雷出ㇾ地ふるふは、天の春夏悅豫の時にをいて戒むるの理なり。

恭儉にして驕奢なし。五倫和睦するのみ。これ黄帝堯舜の衣裳をたれて天下治まるなり。禮も亦後世のごとく煩しき事にはあらず。説命にも禮煩則亂といへり。禮は恭儉にして事すくなく和あるを以て吉とす。無道の世には禮なき故に、貴賤ともに苦勞する事を不レ知。また學者は跡のみ見て眞の禮を知ざるゆへに、格法をとめて禮なりといへり。故に世俗より儒道の禮はなりがたき事也と思へり。今の世にも時處位に叶たる眞の禮行はれば、上下貴賤ともに安堵して、心ひろく體ゆるやかなる樣に思べし。儉約の戒なくしても厚き風俗となり長久なるべし。

刳レ木爲レ舟。剡レ木爲レ楫。舟楫之利。以濟ニ不通一。致レ遠以利ニ天下一。蓋取ニ諸渙一。

䷺の卦、巽の木坎水の上にあり。又巽は風なり。木水上にうかんで風ふく時は行べし。車馬の不レ及處に至る。聖人是によつて木の中をえり虛にして舟となし、楫を作て舟をゆかしむ。帆と檣と其中にあり。日中に市をなして交易すといへども、歩行なりがたく車馬の及がたき不通の所には、舟を作て川澤湖水海岸を渡し、物をのせて有無を通せしむ。第一は如レ此の不通の地にも教化の及で道を知しむべきためなり。

服レ牛乘レ馬。引レ重致レ遠。以利ニ天下一。蓋取ニ諸隨一。

上古には牛いまだ鼻をとをさず、馬いまだ羈靮轡をつけざる故に、用をなさず。是に至て始て牛をつかひて重をひかせ、馬にのりて遠きに行。みな其天然によつて其性を遂しむるなり。䷐卦の象、上よろこび下うごく。人牛馬にのる時は、物勞して人安ず。是下動て上悅ぶなり。又

無事にして人民生樂をなすべきの時に至ては。天地の律呂をうつして雅樂を作り、正き處にをいて樂みたまへば、下みなこれに化して雅樂を好めり。或は糸竹の調をもてあそび、或はうたいまいなどすれども、雅樂の風は淡にして甚面白きこともなく、又あく事もなし。是に深き者は道德を助け、淺き者も不知不識眞樂に遊て風俗美なり。惣じて君子ならでは眞の樂みはしらざるものなり。樂まずしては國天下をゆたかに治ることはならざるなり。故に樂める君子は民の父母なりといへり。亦古人云。有レ德則樂、樂則能久。詩云、樂只君子、邦家之基なりと云り。天下の人上の樂を以て人々の樂としてよろこべり。後世は上たる人の樂はみな下々の困窮となれり。道德より出ると人欲より出るとのたがいなり。天下の人心正樂なき時は必ず淫樂おこるものなり。天子諸侯公卿大夫婬樂を好む時は、人欲日々に盛になりて奢生じ、士貧く民困窮す。天下みな婬樂を好で、人心邪になり風俗みだる。終に亂世となる。生付正き君は是を忌て婬樂をせず。しらざれは正樂をもせず。行義高く和なく、万事法度强く、俗語の石にて手をつめたる樣なれば、諸人氣をつめて或は病者煩人多し。士民ともにうとみて、其代のかはりには必ず氣をのべんことをまち、世繼の君も先代のかたきにこり、諸人もうとみていさむる事なれば、上下ともに鬱氣をはらして大にゆるむことあり。其正きと云もかたきばかりにて和なきは禮樂かねざる故なり。正樂は清風和氣あり。上たる人是を好ときは心ゆたかにして、下たる者是をなす時は欲すくなし。君臣父子夫婦兄弟朋友和樂す。或は時の興に乘じて糸竹を奏し、或は一人しらべて靜に樂むものなれば、

のいとまありてか琴瑟を調んや。其後水みな海に切をとし、人民居を安じ五穀みのりし時は、天下みな樂を得たり。此時又いまだ心もとなきとて、國をめぐり、代官を下し、諸役人を召よせ、朝夕念を入すぐるときは、人民其事につかはれて耕作のいとまなく、事忙しくして、父母妻子ゆる〳〵と養ふ事もならざる樣になるべし。然る時は色々の惡事も出來、僞も生じ、風俗あしくなりて、洪水の難には越ぬべし。洪水は人身の憂なり。風俗のよからざるは心の憂なり。人民の難のぞいてゆたかなる時は、肝要の事ばかりをよくして、それ〳〵の役々によき人をそなへ、よき敎をなして後、上たる人は無爲にして琴瑟を樂みたまひ、小事は無事になり大事は小事となるやうに、下知法度ゆる〳〵として位したまへば、天下太平にして貴賤上下共にゆたかなるものなり。天を見れば日月星辰の四象ばかりにて、晝夜四時行はれ万物生ず。地をみれば水火土石の四靈ばかりにて、雨露霜雪風雷時にいたりて万物育す。上に日月星辰かゝり、下に水火土石つらなる。衣裳をたれたる象なり。黃帝堯舜衣裳をたれて、無爲にして天下治まりしは、天地と德を合せたまふ故なり。夫生とし生るものには必ず生樂あり。正きことに樂まざれば邪なる樂み出來ものなり。無道の時凡夫の樂とすることは、或は心を亂り、或は身命を縮め、病を生じ、或は氣隨になり、或は家財を失ひ、或は奢、或は吝り、或は家を亡し、或は人を損し、下を虐するに及ぶの樂み多し。これを俗樂と云なり。欲のこのむことなる故に、樂の樣なれども流れ蕩けて心くらくなり、或はさかだちもとりなどして却て大なる苦となれり。聖人は此人情を知たまふにより、國天下治り

帝徳の恩は何かあるやといへる、信の仁政なり。無道の代にはたがへせども食を得ず。婦は織どても衣を得ず。却てたがへさずをらず民をめぐまざる者衣食に飽滿せり。天下みな耕して食し織て着工商はかへて食すいとまなければどもせは〳〵しき事なく、貧なれども衣食乏しからざるは、政道大なる徳なり。上一人よく民を子の如くするの仁心厚く無欲にして恭儉ならではならざることなり。帝堯四海の主にして、茅茨きらず桷柱丹ぬらず、黒木作りかやぶきなるは、よき教なり。日本にてもいにしへはかくの如くなりと見えて、天照皇の御宮殿はかやぶきなり。しかるに後世もろこし秦の始皇が惡政なりし咸陽宮の一殿を移て大内裏を作られたるは、大なるあやまりなり。王威のをそろえたる事尤なり。問。天下の廣を子とし惠みたまはゞ、琴瑟をもてあそびたまふのいとまはあるまじきかと云時なり。禹の水を治たまひし時は婦をめとり給ひて僅に四日なりしに、帝のみことのりをうけて出たまひ、天下をめぐりて外に八年居たまへり。八年の間に二三度まで我門を通りても門內へ入たまはず。御子生れてなきたまふを聞たまひても、門に入て見たまはず、子ともしたまはざるが如し。八年は程久しきこと也。たとひ一二年程かゝる事なりとも、我家を過るときは內に入て五三日の休息はあるべきことなり。それまでこそあらずとも、入て妻子家內の安否を見たまふほどの事はあるべき事なれども、天下に水あふれて人の居所不ㇾ定ことを憂たまふ事、我子どもの多く流涙する如く思ひ給ひて、しばらくも御心にいとまなかりし故なり。八年の間冬となく夏となく水をわたりたまひし故に、御手足には胼あかゝりありと云り。其時何

敎あり。世の中きはまる時は多事多物にして煩しくなるものなり。此を變通し宜くするは易簡の善也。易簡なる時は長久なり。易簡は即天地の德也。民の父母たるの道なり。故に天の福ありて吉なり。民みな其利を利とす。黄帝堯舜三聖は、頭に冠を着し身に十二章衣裳を服し、日々南面の位にまし〳〵て琴瑟を調樂みたまふばかり也。しかれども君子は其心をつくして下をめぐみ、小人は其力を盡て上にしたがひ、君は首の如く臣は手足の如し。諸侯は弟の如民は子の如し。無事を行ひ無爲にして成。これ德治の至なり。天不ㇾ言、而四時行、百物生。天氣くだり地氣のぼりて和するのみ。天氣くだらず地氣のぼらざる時は四時不ㇾ行万物不ㇾ生。上の心下にくだり人情時變をくはしく知て惠みのあまねきは天氣のくだるに取。乾の道なり。下の心上に歸服してたがはざれば天下の事ならずと云ことなきは地氣ののぼるに取。坤の道也。臨ㇾ下以ㇾ簡、御ㇾ衆以ㇾ寛。これ乾坤易簡の德にとる也。日本にても王代の昔は易簡なり。仲哀天皇應神天皇みづから大將となりて九州までくだりたまひ、甲冑を枕として山野を家としたまひたるにて、易簡なる事知れたり。遠國の山賤までも天子を大切に思奉りて、何にてもよき物あれば王にさゝげんとて都へ上れり。日南北向の暄を王にささげんと思ひし昔物語をおろかなる事に云て笑へども、王化の至り感ずるに堪たり。天氣くだりくだる事名もなき一草一木も造化のめぐみにもるゝ事なきが如く、奥山の賤男賤女までも王德の仁政にあづからずと云事なし。上の下を見たまふ事子の如くなる故に、下の上を見奉る事父母の如し。仁政とて人ごとに物をたまはるには非ず。井をほりて水のみ田をたがへして食す。

うばかり也。日月の天にかゝりて、天下の人其處を得て用をなすが如し。下動は人々其所作をつとめて動なり。いそがはしき動にはあらず。人は動物といへるも此心なり。上明なれば天下の人皆眞實にしてかざりなくへつらいなし。名利なく便利なし。故に夙にをき夜はにいねて善をなして不已。無用の世事なき故に靜にして樂めり。善を爲と云は人々なすべき事をなして名利のまじはりなきを云。如此なれば天下は治めざれども平かなり。皥皥の道至れり。

神農氏沒。黃帝堯舜氏作。通其變。使民不倦。神而化之。使民宜之。易窮則變。々則通。々則久。是以。自天祐之。吉無不利。黃帝堯舜。垂衣裳。而天下治。蓋取諸乾坤。

神農より黃帝までの間五百餘歲。又黃帝より堯舜まで三百餘歲なり。天下古今の躰を見れば、大方五百年には大變し五十年には小變す。其變に通じて時によろしからざれば、人民退屈しをこたるものなり。それより色々の悪事も生じ、風俗の亂となるものなり。黃帝堯舜の時は伏犧神農の時と天下の人情時變大にかはれり。故に其變に通じて時位の宜きをなさしめたまへば、人民善を爲すに進で退屈せざりしなり。天地人を一貫にして万古一日なるものは誠のみ。古今かはりなきものは五典十義なり。禮式法度は時處位によつて變通して定まらず。神而化之とは、聖人は過化存神の妙あり神明の德ある故に、をどさゞれども天下をそれ、賞せざれども人民すゝむ。日月の照臨し流行するが如く、恐て愛し日日善に化して不知。易の理を以て見れば、万事きはまりて行ひがたく爲がたくなる時は必ず變ず。明王賢君は其時運と共に變通して可行可爲易知易從政

れば、有欲にしてしまりたるにはかへりておとれり。都せばく通路自由ならずは、たとひ欲ありて財用をあつむるとも、剛悪だになくば吝て無欲なるよりは久しかるべし。

日中爲レ市。致二天下之民一。聚二天下之貨一。交易而退。各得二其所一。蓋取二諸噬嗑一。

聖人天下の民を見たまうに、有餘あり不足あり。生を養の道全からず䷔の象を見玉ふに、口中に物あり。くいあはするときは味ありて生の養となる。又卦の德を見たまへば上明に下動く。是によりて日中に市をなし、天下國々所々にをいて人をあつめ、有ところの物を以て無ところの物にかへて、各其生を養ことを得せしめ給ふ。五穀ある者は魚なし。魚ある者は五穀なし。交易する時はたがひに用を達す。農業を事とする者は鍬かまを造るにいとまなし。鍬鎌を造る者は耕作をかぬる事あたはず。故に農人は易るに五穀を以てし、鍛冶は農具を造りて、たがひに交易して各其所を得たり。萬物皆如レ此。又農人職人自來て易るにいとまなし。商人これを買取て相通ず。䷔は上を離にし下を震にす。離は明なり、日中にとる。震は動なり、市にとれり。上明に下動くは噬嗑の義なり。又上明に下動は有道の世の象なり。上道ありて明かなれば進めざれども天下善をなし、戒めざれども悪をなさず。上の好たまふは仁義禮智信の德也。悪みたまふは不仁不義不禮不智不信の凶德なりと、人皆心に通じ知故なり。其上闇き處ならでは悪をなさず。盗賊も夜を好み、不義をなす人も夜を悅び、狐狸蚊鼠の類まで夜を得て出るが如し。天下道くらければ、種々の小人悪人出るものなり。聖主賢君の政は何の勞する事もなし。たゞ道明にして上に位したま

においても民不レ饑。夷狄の難ありとても軍用乏きことなし。天下の爲のたくはへなれば、多といへども一人の富といはず。君子は心を洗ひ小人は其樂みを樂て外の願ひなし。益の道至れり。問。むかし天下の奉行職諸侯より金銀多とりたる時代は天下もゆたかに、不レ取時代はかへりて天下困窮せし事あり。しかれば上無欲にして財散じ有欲にて財あつまるともいひがたきか。云。道なき代の風俗は、奉行職の欲と無欲と取と不レ取とは、欲ありて取たるかたはまされり。いかむとなれば其人にさゝぐるは莫大なる事にあらず。奉行の取ざるは事の外むつかしき事也。何をか馳走にとて振舞音信、奉行の用にもたゝざる事に金銀をつかひて、とりたるより〻十倍百倍の費出來る者なり。又其奉行へ出入の者にこと〳〵くまいなひすれば、一人取たる十億百倍ついゆるとはり也。是によりて奢日々に長ずれば、諸國の士民の膏澤一所につきて、天下困窮する者なり。吾京にて大原八瀨の薪を賣にてこれをさとれり。八瀨大原の山内の恰好には民家すくなし。この故にうる所も今出川のあたり西は室町邊までの間をうる也。それも此薪ばかりをたのむにあらず。伏見よりたかせにて上る木をも買をきてたく上なれば、多事にあらず。この處にむかしより今に至て八瀨大原の柴薪つゞく事なり。もし八瀨大原の在所を多くして京へうる所ひろくば、山つき木賣なくならむ事數十年の内なるべし。上無欲なれども天下のはやく衰微し亡る事に、天下の主の都ひろくして奢長じ諸國の潤澤をはやくかわかす故なり。是益にはあらで䷨也。天下の潤澤をも剝盡しみづからの潤澤をもはぎ盡しぬるは四海困窮なり。無欲にてよき樣なれどゝ道を知ざ

なることあり。後世は文明の運にて文章あらはる。文章はかざりに近し。器物に至るまで多なりぬ。かざり過る時は欲生じ奢長ず。こゝにをいて禮儀の則あつて不レ過不レ奢欲をふさぐものなり。是を名づけて式と云。此式や時處位あり。其人にあらざれば語がたし。後世は禮儀の則時處位に不レ叶。奢欲の源をふさがず。當然の式なくして奢をおさへ儉をなさしめんとす。大海を手にてふせぐたとへの如し。問。其禮儀の則る當然なる式はいかゞ。云。予其位にあらず。亦時にあらず。知と云とも云べからず。問。今質朴無欲の風俗とならば農人はよかるべし。然ども數十年の奢とかざりによりて職を立たる工商は幾万人と云數を不レ知。男女妻子共にうゑに及べし。たとひ古者の美風なりとも、數多の者困窮に及びなば仁政とは云がたかるべきか。云。是以時處位の至善あり。一人も困窮に及者はなきやうあり。問。左樣の事には上のたくはへ多からではなりがたかるべきか。云。仁者は上を損し下に益す。故に不レ富と云は身の爲の財用なきを云。益の時は天下に財用みち〳〵て多ゝのなり。財用と云は金銀錢等の事にはあらず。金銀多ときは却て天下困窮するものなり。眞の財用と云は、五穀の多と薪材木麻綿等民生日用の物を云なり。益の道十年に及で行はるゝ時は五穀あまりあり。是にをいて四時の理に配して大身小身共に我一年の財用を四にし、三分を以て其年の用を達し、一分をたくはへとす。是天の春生じ夏長じ秋みのり冬一時の造化はかくしおさめ來歲の陽生をたくはゆるに合す。如レ此する時は九年にして三年の用あまり。三十年にして十年のたくはへあり。是を以不時の用にそなふるなり。たとひいかなる大旱大風洪水火災の變

水の性よはくなりたる故に、柄ばかり木にて作り金鐵をきたひて作かへたり。國天下の平治して長久の政をなす道理も此䷩の卦にて明に見たり。☰の三陽を一陽損して☴の卦となり。☷の三陰を一陽益て☳の卦となる。此風雷の二卦をかさねて天下國家を利益する仁政の象を見たり。いかんとなれば上を損して下を益がゆへなり。或問。上を損して下を益を益とするは何ぞや。云。上をごり下くるしむ時は亂れ亡ぶ。損これより大なるはなし。上質素に下豊かなる時は國治天下平なり。益これより大なるはなし。問。上は一人にして下は衆多なり。上の財用普くほどこしすくふに不足、又儉約のをきては、何の世にも下したがはずと見たり。聖代にはいかんして能ほどこし、いかんして儉約の法立玉へるや。云。仁者は不富とて、聖賢の君はなを以て財用豊ならず。ほどこしすくふことあたはず。只ほどこさずして上を損し下を益の政あり。上無欲にして物を蓄へあつめたまはざれば、財用をのづから下に散じて下の心上にあつまり服するものなり。人心の歸服するは益是より大なるはなし。是ほどこさずして上を損し下を益にあらずや。無欲にしてかざりなきを質素と云。上古の風俗なり。如此なれば治ざるに平かなり。此時には天氣順にして、五穀の多こと水火のごとし。故に民不仁なる者なく、うゑに及ぶ者なし。人々無欲にして足ことを知れり。亂いづくよりして起り、盜賊いづれの所にか出んや。心法治道ともに無欲より先なるはなし。無欲なるときは心靜にして靈明生ず。仁義禮知信の性自然に照すものなり。此心法を知て用る人はすくなし。民の如きはあまねく敎て知しむること不能。たゞ政を以不知不識無欲に

なる。こゝにをいて天地萬物の理こと〴〵く備れり。古者は此六十四卦を見て心をみがき路を脩め家をとゝのへ國を治め天下を平にす。治亂共に通ぜずと云ことなし。

作二結繩一。而爲二網罟一。以佃以漁。蓋取二諸離一。

葛かつらのやうなる物をとつて糸とし、繩としむすびて網をなし、山野にしては鳥獸をとり、河海にしては魚をとることを敎玉へり。是䷝卦の象を以作り玉ひぬ。離は麗なり。離を目とし、其徳を麗とす。これあみの兩目相つゞゐて物の此につくの義なり。

包犧氏沒神農氏作。斲レ木爲レ耜。揉レ木爲レ耒。耒耨之利以敎二天下一。蓋取二諸益一。

伏義と神農との間一万七千七百八十七年也。その間女媧氏より無懷氏まで十五代は知て其外はしられず。有徳の君のみいゝ傳へたるか。神農氏木をけづり其さきをとくして耜となし。木をたはめて耒とし、柄をなし是を以てくさぎりて土をおこし、たねまきうふる事を敎たまへり。是䷩卦の象を見て作たまひぬ。震巽の二躰みな木なり。益の象にとる。風雷は相助けてはげますものなり。耒耜の二木相助て土を起す是なり。耜は上より入て下土をうごかしをこす。風はいり雷はうごく。上入下動くは益の徳にとれり。故に雷風をとりて雲ゆき雨ほどこす處を見たまひて、農具を作て耕作を敎たまふに、耒耜を始とす。天下の益は耕作の事より大なるはなし。耒耜を本とす。益の義なり。故に天施し地生ず。與レ時偕行といへり。天地人ならび益あるものは耕作の業なり。故に民は國の本なりと云。古者は木をけづりて耜鍬に作りしかども、後世は人の力もをとり

集義和書卷第七

始物解

易云。古者包犧氏之王二天下一也。仰則觀二象於天一。俯則觀二法於地一。觀二鳥獸之文與一レ地之宜一。近取二諸身一。遠取二諸物一。於レ是。始作二八卦一。以通二神明之德一。以類二萬物之情一。

伏犧は天地を父母とし天地の造化を助て天について天下に王たりし神聖なり。天地ひらけて聖人と云名の傳はりしは伏犧を始とす。伏犧以前にも聖德の人は多かるべけれども、人に敎んと思ふ心はをこらざるなり。いかんとなれば人にまどひなければ明知もあらはれず、不孝子なければ孝子の名なく、不忠臣なければ忠臣の名もなかりし也。是故に伏犧よりさきの聖人は渾然としてしられざることはりなり。伏犧の時は天地開闢よりほど久しく人も次第に多なり物欲も少づゝきざして人心にまどひ出來しかば、伏犧これをかなしみたまひて敎んと思給ふ心あり。よつてみづから天地を師とし天の日月星辰の象地の風雷水火の時によろしき處を見たまひ、春夏秋冬の時にたがはず山澤氣を通ずる神をしり、變を察し天理自然の文章鳥獸の羽毛のあやにもあらはれて至誠無息の感ずる處を知玉ふ。近くは我身にもとり遠くは萬物にもとつて、始て八卦を作たまふ。此八卦の象をみる人、ふかくみれば天地神明の德に通じ、精く察すれば万物のことはり皆此中にあり。此時までは文字も書物もなかりし也。此八卦文字經書の始なり。かさぬるに八を以して六十四卦と

禽獸魚蟲草木は氣にごりて質偏なる故に靈覺にぶし。故に末になりて氣質の靈覺のみなり。本理の照はをよばず。人の靈覺全し。故に生を知り死を知る。死生二あらず。獸は生を不レ知、死を不レ知。死と共に亡ぶ。獸は氣質の知覺あつき故に、死をかなしむ事を知のみ。鳥は獸よりも知覺うすし。いたみて哀鳴すれども、死を恐るゝ心はなし。大鳥は獸に近きものあり。魚は感のみありて知覺なし。其中大魚は鳥獸の知覺の如くなるもあるべし。こゝの感は氣の感なり。理の感に異なり。草木は感もなし。質の生のみなり。次第に知覺のうすきを以て不二の二を見るべし。

集義和書卷第六　終

禽獸

主欲

或問。鴈の長幼の序ありて行をみだらざるは、□照しあるに似たり。曰。陽鳥にて火氣を多く受て生れたるものなり。火氣の神は禮なり。故に自然にしかり。禮を知てなすに非ず。故に其他の事は皆鳥なり。人は禮を知ながら無禮なるは禽獸にもをとれり。されば詩人も人として禮なくば何ぞはやく死ざるといへり。人たる者は無欲の性を固有して無欲の理を知ながら、欲のみを心とするは禽獸に異ならず。禽獸は禽獸と生たるものなれば罪なし。人は人の性ありて禽獸に近きは大なる耻なり。

或問。心は靈覺の名なり。人物ともに靈覺あり。心の虛靈知覺は一なり。理氣の知覺二あるが如くきこゆるは如何。

曰。靈覺の本は理也。理の靈覺は至て明に至てすみやかなり。故に感とのみいひて知覺とは云がたし。至て神靈なるが故なり。聖人は人の神明なり。平人は聖人のいまだひらけざるなり。

□の○をはなれて高きを悟道とするものは見所のみにして用をなさゞることを示す。□○は理氣也。理氣はあるときは共にあり、はなるべからず。はなるゝ時は□も實理ならず、○も眞氣ならず。□中に見性を書するものは、異端といへども寂然不動無欲無爲の性を見たる事は一也。□は無の至極なり、聖學には其無をよく窮たる故に惑なし、異學には無をいへども無を窮めつくさゞる故に、さとりたる所に則惑あり。造化の神理を見そこなひて、天地をも輪廻と見たり。故に曰、儒學には天道と云て大なる事にすれども、天地の道ともに惑なり。故に佛氏は大虛を出陰陽をはなるゝと云り。大虛外なし、こゝ出べき所なし。亦輪廻なし、はなるべきものなし。たゞ□の寂然不動無欲無爲にしてあらはれずあとなきの眞を見て佛性とし、こゝに至て不生不滅なるを成佛とし、陰陽生々の氣をはなれて二度生れず子孫なきを以て出離生死とするなるべし。造化は無盡藏にして無中より生ず。生ずる者は消ず、行ものはかへらず。輪廻と云事なし。無始無終とは云べし。不生不滅とは云べからず。□の前後あらはれず。形象聲臭だになければ、亦滅すると云事もなきを不生不滅といへるなるべし。

○のみにして□なきを禽獸とするものは、禽獸は形氣の欲のみを以て心とす。故に○中に主欲の二字を書す。理の知覺なければ虛生浪死とて、生るもわきまへなく死するも腐らせするばかりなり。禽獸とても□○をはなるゝ事はならざれども、にごりてくらき故に理の靈覺は見へず。故になきが如し。

視善聽善言善行善を書するものは、人は動物なり行を以て性とするの義なり。善をなさゝれは德を積ことゝなし善と云て事を作爲するにはあらず。六藝にあそぶも善をするなり。今日まさになすべき事をするはみな善なり。

凡心の圖も□○をなして神明を書する事君子の圖に同きものは、人と生れたる者は聖人凡夫共に天性にをいてかはりなし、善を知惡を知るの神明あらずと云ことなし。人々不義をにくみ惡をはづるの眞知是也。たゞ愼獨と自欺のたがひより千里のあやまりと成て君子小人の名あり。然ども一念自反して惑を辨へ獨を愼み過を改めて善にうつる時は、凡夫も君子となるべし。故に神明のみ同く書するもの也。小人は自欺て氣に隨ふ。故に心の躰空なる時も眞空ならず。故に□中に頑空を書す。念慮動く時は妄也。故に意必固我間思雜慮を○中に書す。左右の十二字は凡心の常を書す。重きものをおぐるのみ。驕ものは吝なる者をそしり、吝かなる者は驕る者をそしるといへども、共に凡心の惑なる事を不レ知。甚しき者は欲惡の二に落入故に、下に

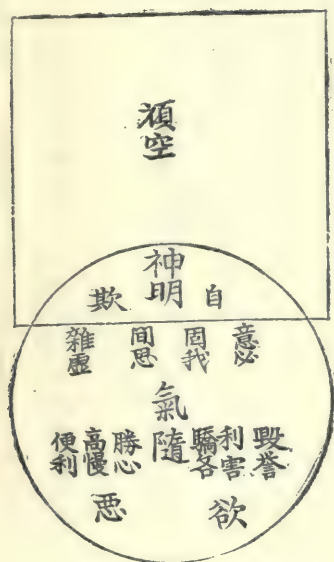
悟道

見性

なりといへども、五德の中に先感ずるものなり、天下の万事をつかさどりて照さずと云事なし、動てあらはれず有無の間なるが故なり。無聲無臭の本然にをいては手を下すべき樣なし。聖人の敎をまうけたまひ學者の問學を好て理を窮め德に入の門なり。故に心の神明を□○の間に書し、愼獨を以て心法の要とす。○の內に和字及び動直無爲遂通二天下之故一を害するものは、發して節にあたるの義なり。寂然不動感ずるの本立て遂通二天下之故一也。靜虛なるが故に動直なり。無欲なるが故に無爲なり。無爲と云て何事をもなさゞるにはあらず。人欲の私なく天理にしたがつて不レ得レ已して應する時は、終日爲とありても無爲なり。同じ文字にても利貞ノ利と利欲の利と黑白のかはりあるかごとし。天德にありては物を利する故に道なり。凡人は己を利する故に欲なり。夏の禹の洪水の時にあたつて外に八年三度其門をすぎて入たまはざるも無爲の至なり。○の下に

凡心

須空

神明
自欺
意必
固我
間思
雜慮
氣
隨
毀譽
利害
驕吝
勝心
高慢
便利
欲
惡

に書す。君臣は極を立るの大義なり。君臣相かなつて國治り天下平なり。天地の化育をたすけて物をなせり。秋實のるがごとし。故に右に書す。夫婦は人倫のはじめなり。天地ひらけて後男女あり。男女ありて後夫婦あり。夫婦ありて後父子あり。兄弟あり朋友あり君臣あり。故に五倫皆夫婦の内にこもれり。天の冬を以てかくすがごとし。故に背に書す。朋友は五行に配しては土なり。土は定位なし。故に外に書するのみ。

心法

無形無色無聲無臭
中
靜虛
無欲
寂然不動
感而遂通天下之故
慎獨
神明
動直
無為
和
視善
聽善
言善
行善

心法の圖に□の内に中字を書するものは、中は天下の大本なればなり。上に無形無色無聲無臭を書するものは、未發の本然を云なり。靜虛無欲は中の德なり。寂然不ㇾ動して感ずるものは中の神理也。故に皆□の內に書す。神明□○の間に書するものは、知は心の神明なり、もと寂然不ㇾ動の理

怒は惡をかね、樂は欲をかぬ。心正き時は七情節にあたる。故に聖人の喜怒哀樂は四時に配す。文王一度怒り玉ひて天下の民安きものは、冬の寒氣つよくして來歳豐年なるが如し。亦天人合一の圖に五倫の五典十義を書するものは、天に五行ありて人に五倫あり。五行の神は元亨利貞誠也。五倫の眞は仁義禮智信也。故に父子の親は仁也。君臣の義は則ち義也。夫婦の別は知なり。長幼の序は禮也。朋友の信は則信也。父母の子を愛し養育しひとゝなすを慈と云。子の父母を愛敬し安ずるを孝と云。君の臣をあはれみ各其利を利とし其樂を樂み其生をとぐる樣に政敎をなし玉ふを仁と云。臣下の身命を君に奉り二心なく眞實を盡すを忠と云。夫の婦をあはれみ夫の家に心を止て安座する樣にし能敎へみちびくを義と云。婦のよく夫にしたがひ、地に二の天なき如く我夫の外に天下に夫なき貞の道を守り、かりそめにもうしろぐらき事なきを聽と云。兄弟は天倫の親にて同氣同親なれば、連れる枝の如し。大父母の次弟を以て年長ぜるだに、位ひとしき時は長幼の序あり。況や小父母の兄弟は骨肉の恩あれば、兄は父にかはりて弟妹を敎へみちびき愛養するを亙と云。弟は兄を父の如く思て能從ひ仕るを悌と云。朋友は眞實無妄の天道を父母として異〻親同〻氣の兄弟なれば、眞實の心を以て相交を信の道と云也。天の元亨利貞と人の仁義禮知とは、同〻躰異〻名也。天の五行と人の五倫とは、同〻氣異〻形也。天地は元亨利貞の理に隨ひて四時行はるゝ時は、天地位し万物育す。人は仁義禮智の性にしたがつて五倫明かなる時は、家齊國治天下平也。父母子をうめるは春生ずるが如し。故に左に書す。兄弟長幼相つらなるは夏長ずるが如し。故に前

後世にあぐる者あるは、此羞惡の心ある故也。故に義の端と云。智は天理の貞德にして心の神明也。空々として条理を妙にす。天下のことに感じては是非善惡の鑑となる。天の冬を以てかくし、天氣淸明にして來歳春夏秋の根となるに合す。智の本躰に是非善惡と云ものありてわかつに非ず。一物なくして虛明神靈なる故に、万事万物の形あらはれ情わかるゝ也。鏡の虛明にして一物なき故に物の形をうつすが如し。鏡は虛明なるのみにて神靈なき故に、物をうつすばかり也。智は神明なる故に能天下の事をつかさどり物を成也。然ども鏡より外には智の象になすべき物なき故に古今たとへとする也。惣じてたとへと云ものは一端の形容也。全躰不測の神靈はたとふべき樣なし。鏡に扇なりとも一物うつし置て是をのけざる時は、他の物うつらず。智も空々として一物なき時は能万事に應ず。知識のたくわへあるときは眞知自然の照に非ず。知者は無事なる處を行とて、知者の國天下の政をなし事をとるは、易簡にて何のむつかしき事もなく、水の流るゝが如く也。知に是非はなけれども、物の是非身の善惡をわかつものは知なる故に、是非の心を知の端と云なり。信は至誠無息の天理にして、仁義禮智みな信あり。故に四端みな眞實無妄なり。天道に元亨利貞を云て誠を不ㇾ言が如し。四時皆土用あるが如し。誠は天の道なり、誠を思ふは人の道なり。故に信を中に書す。仁義禮知も無方の神理なれども、をなじく水火木金土の神なる故に、天地の方位に配して書す。四端も又四時に配して書す。喜怒哀樂を四隅に書するものは、天の時にかたどる。喜は春の色也。哀は秋の聲也。樂は夏の象也。怒は冬の氣也。喜は愛をかね、哀は懼をかね、

らはる。故に○に書す。仁は天の元德にして生理也。其本體は無聲無臭なりといへども、感じて天下のことに通ずるときは慈愛惻隱の心となる。天下國家慈愛なくては一日も立がたし。是天の元德春を以て万物を生ずるに合す。いかなる愚夫愚婦も、赤子の井に入んとするを見ては、甚いたみかなしめる心生じ、はしりよりていだきすくふもの也。此時にあたりては其赤子の父にうれしく思はれんとの心もなく、すくはずは不仁なる者と人にあしくいはれんと思ふ心もなく、其父母を知不ㇾ知の撰へもなし。此心を人に習知たるにもあらず。天機にうごいて不ㇾ能ㇾ已、みづからも不ㇾ知處なり。故に是を仁の端と云也。禮は天理の亨德にして盛大流行の至神なりといへども、天下のことに感ずる時は恭敬辭讓の心となる。上下貴賤の分定り、位品ありて相爭はず相しのがずして天下太平也。天下太平なる時は物そなはる。天の夏を以て万物盛長するに合す。神明の宮社に近付ときは自然に恭敬の心をこり、主君の位をすぐる時は君ゐまさずといへども敬心生ず。一文不通の賤男賤女も客あれは馳走したき心あり。飲食菓子に至るまで、多きをあたへ少きをとりよきをゆづりあしきを食するの事あらずと云ことなし。故に是を禮の端と云。義は天理の利德にして神武の勇あり。天下のことに感じては善惡邪正を斷制す。天の秋を以て實のる物は成實し、葉おつるものは黃ばみをち、虛實わかるゝに合す。羞惡の心は我に惡あれば耻かしく思ひ、人に不義あるときはにくむ心を生ず。此耻の心深き者は、よく過を改め善にうつり、賢人君子の地位にも至り易し。無學の野人といへども死べき所にては死し、主君の難に當ては命をかろんじ、名を

利理感じ金氣流行して万物收まるを秋とす。貞理感じ水氣流行して万物藏るゝを冬とす。土は中央に位す。土氣の神を誠とす。しかれども土用は四季に應ずるが故に四隅に書す。相生ずるの序は木火土金水也。火は土の母なれば、土は未申を盛位とす。是天地鬼神の造化をなして無盡藏なる道理なり。

人道

禮
義　信　仁
智

辭讓　長幼有序
羞惡　君臣有義
是非　夫婦有別
惻隱　父子有親
喜　怒　哀　樂

父慈　子孝
君仁　臣忠
夫義　婦聽
兄良　弟悌
朋友　交信

惟此無極の理二五の精妙合して人となり、明德そなはる。是を性と云。性中をのづから仁義禮智信の條理あり。天の元の人にあるを仁と云、天の亨の人にあるを禮と云、天の利の人にあるを義と云、天の貞の人にあるを智と云、天の至誠無息の眞の人にあるを信と云。たとへば同じ水の流なれども所によりて川の名のかはるが如し。仁義禮智信は天理未發の中也。故に□に書す。喜怒哀樂は氣の靈覺なり。故に○に書す。惻隱羞惡辭讓是非は仁義禮智の端なりといへども、氣に感じて聲色にあ

集義和書卷第六

心法圖解

天道

□は寂然不動の象也。○は流行活動の象也。□は理を圖し○は氣を圖す。太虚は理氣のみ。天道は至誠無息也。故に誠字を中に書す。誠は天之道なれば也。其中をのづから元亨利貞の條理あり。是を天の四德と云。四德もと一理にして無方の神なれども、天地開け形象あらはれて後木は東方に位す。木氣の神を元とす。故に左に書す。火は南方に位す。火氣の神を亨とす。故に前に書す。金は西方に位す。金氣の神を利とす。故に右に書す。水は北方に位す。水氣の神を貞とす。故に背に書す。元理感じ木氣流行して萬物生ずるを春とす。亨理感じ火氣流行して万物長ずるを夏とす。

し。立がたきものは誠なり。至りがたきものは無欲なり。たとひ周法大かた行はるゝといふとも、驕客相交て欲あり多事博文にして誠なくば、周公孔子何ぞこれに與し給はんや。

集義和書卷第五終

千歳なり。義において害あらず。上古の神聖だにも、時ありて忌たまはず。法に泥みて時をしらず大道をしらざる者は、太古の兄弟伯父姪夫婦たりしを甚非なりとおもひて、其の時の聖神をば信ぜざらむか。百世といへ共同姓娶ざるの周人を是として、其時の聖賢をのみ信ぜんか。先聖の後聖に劣れるにあらず。太古の民の末世の民より愚なるにあらず、後聖の先聖に優れるにあらず。末世の民の太古の民より知有にあらず。それ法は時をもつて義ありておこれり。法をかれて後に背くは不義なり。日本神代王代武家の代つゐに同姓を忌の法なし。法なければいとこをめとりて不義といふべき樣なし。後世法をかれば再從昆弟を娶るも不義ならむ。法なけれ共いとこよりちかきは天理人情ともに忌出來るは無法の法也。文明の時の人心に通じてしからしむる也。上代は德厚して文いまだ開けず。末代は德おとろへて文明なり。此病あれば此德ある也。上古の人は僞りなく利害なし。君子たる人は至誠純厚なり。小人たる者は質直朴素也。後世の人のうたがふ所の法いまだなかりしばかり也。其代の非にあらず。其民の罪にあらず。今の學者利害深く僞りをだにもまぬかれず。古の常人にもをよぶべからず。末代の君子たる人は驕奢利欲なり。小人たる者は姦しくして相凌ぎ相諛て相僞れり。いまだ法を立るにいとまあらず。况んや法は道より出るといへども道にあらざるをや。今の時に當て大道をおこさんものは、學校の政を先にして、人々固有の道德をしらしめ道理をわきまへしむべし。法は望む人有とも抑へていまだ出すべからず。誠に專にして無欲に至らしむべし。禮文法度はおこりやすきものなり。抑るとも後世必ず備るべ

に禮普して後伯父姪叔母甥も快からざる萌あり。その次の聖人この靈明を本として、伯父姪叔母甥夫婦となるべからざるの禮法を立給へり。兄弟伯父甥は天倫の親ちかく長幼の禮深くしてかくのごとし。從昆弟は他人の始の如し。長幼の禮も朋友齒し相讓るがごとし。故に上古には忌なし。後世の聖人五服を叙て君子小人の澤五世にして盡る所を見給へば、父方は再從昆弟までに服有。いよ〳〵一本の親を厚し男女有別の禮を明らかにせんがために、服のあるまでは婚姻不通の禮を立給へり。母方はいとこの近きといへども、服なければ本のごとく婚姻をなせり。姉妹の子は同姓ならずといへ共、親ちかければ服有。かるがゆへに忌あり。再從昆弟の外は同姓たりといへども、服なければ婚姻の忌なし。是禮や上古よりはこまやかにして義備れり。末世よりは易簡にして禮缺ず。日本におゐて後世聖主賢君機おこり給はゞ、此禮を以て至極とし給ふべきか。今の世においては、聖賢の君起り給ふ共いまだ此禮をもたて給はじ。同姓をゆるさば親きに及ばんかとの遠慮はげにさも有べき樣に聞ゆれども、往古よりの次第を見ればしからず。日本神代のむかしは、兄弟も夫婦となり給ひき。後世文明なるに隨て、誰法を立るともなく鳥獸に遠ざかり道理をしりて、兄弟を忌み伯父姪伯母甥をいみ來れり。今利心ふかき者、家財を他人にゆづらんことをおしみて弟を聟とする者あるをば、人道にあらず禽獸なりといみにくめり。法なく敎なけれ共、人心の靈にて文明の時至れば、漸々久しうしてかくのごとし。先にもいふごとく、いとこは他人の交のごとし。法いまだをかれざれば、父方母方おなじくあひいまず。世の中の風俗たること數

いむ事をすれども、周以前の五服の忌にも及ばず。今の勢にては立がたし。立ざるをもつて百が一二を用ひて同姓めとらずと過言す。實は如何ともする事なくして時所にしたがふ也。迚も全く用られずして時所にしたがはむとならば、何ぞ時所位の中を擇ばざるや。何ぞ全からざるの法をもつて衆に悖り、大同の道の行はれむとするめぐみを妨ぐるや。それ禮法は漸をもつておこるもの也。其間しゆるものあれば、かならず大道を害す。伏犧神農黃帝の大聖忌給はざりしことを忌みてなさしめず、三皇の神聖いまだ行ひ給はざりし事を行ひ、これより後は此法に背くをもつて不義無禮とすといへば、先聖を非とするがごとし。謹まざるべけんや。しかれ共人情時變によつて時のしからしむるなれば、古に違ふにあらず。今の時人情進まず時變未いたらず。何をもつてか伏犧黃帝堯舜禹を非として周を是とせんや。先にいふごとく周法を行はむと欲すとも、迚も行れざる處あり。是より後賢君相繼て出世し給はゞ、姓を賜り族を別ち給ふべし。數代をへて時至らば、五服の忌を定め服のかゝる分は娶ざる樣になるべし。これ則周以前の列聖の古法なり。それだに漸をもつてしかり。初よりしかるにあらず。天地ひらけ氣化によりて生れし人は、天地を父母として兄弟なり。男女有て後父子あり兄弟有。此時の人兄弟夫婦となるがごとし。しかるに萬物は明德なく、人は明德有。父子親あり、君臣あり、夫婦別あり。故に父子麋を共にせず、相交はらず。鳥獸と異なるの條理を本として、野處穴居の內男女別あるべき道理をしれり。上古の聖人明覺の知に本づきて兄弟夫婦となるべからざるの禮法出來ぬ。天下兄弟相耻るの知明らか

共にあそぶ。魯人獵較すれば孔子も亦獵較す。衆とゝもに行をもつて大道とす。善なるべき時は衆とともに善なり。時至らざる時は衆とゝもに愚なり。故に學者俗を離れず。道衆を離れず。德至り化及び行はるべき時は、天下とともに行はる。衆勸て悖るものなし。昔堯舜の民はいまだ三百の禮儀を見ず三千の威儀を行はずといへ共、渾然として禮儀の本全し。比屋可レ封の善人なり。純厚朴素眞實無妄の風俗なり。周の禮儀備りし時の士民よく及ぶことあたはず。周何ぞ上古の至治をねがはざらむや。時文明に德衰へたれば、やむことを得ざるの義なり。堯舜周公共に大聖人なり。みな時也。しかれ共今の人堯舜を學て不レ及とも、誠に近き風俗ならん。周を學びて不レ及ば、輕薄無實の人となるべし。孟子曰、堯舜を師としてあやまてる者はあらじ。そのうへ今の學者周の同姓を忌の法を行といへども、周の法にもかなはず。如何となれば尊氏の世の末より織田家豐臣家に及て百餘歲このかた、天下の武士の姓氏紛れてしられず。たま〳〵系圖をなすといへども、證據なく傳なくして文字に依て彼は此ならんといへるばかり也。戰國久しかりしより今に至て數代の間に大形系圖を失へり。又姓氏なき者は心〳〵の氏を名のり、姓氏ある者も我好ましき氏にかへぬれば、同氏とても同姓にあらず。天下氏系傳て慥なるは、千人の内纔に十人なるべし。それだに中間娘の孫を養子とし妹の子を跡に立れば、いつのほどにか他姓となりぬ。十人の中にも七八人は慥ならず。公家は昔より動き給はで慥なる樣なれ共、これも藤氏の家に源氏を養子にし給ふごとくなれば、また慥ならず。目のあたりしられたる同氏の中を以て同姓と名付て

人とならむ。衆童は學に倦み道を厭て、學校の政のやみなむことをねがふべし。其君師さり其時過なば、あとかたなくならむか。今我同志の人々と他家の格法者とは、天下の秀才なり。此輩の聖人の法を行はむことを望むことは、九牛が一毛なり。天下の世俗貴賤にいまだ聖學の道理をだにも不ㇾ聞。況や法を行はむことはおもひもよらず。縱ひ其中すこし法に心ある者有とも、彼百人の童蒙の中の一二人にもしかじ。たとひ世俗より學者にしゆるとも、學者知あらば許容すべからず。況や世俗の中より願ふ者なきをや。しかのみならず世俗の人いまだ學を不ㇾ聞、いまだ法を不ㇾ行といへども、學者の道を任ずるとおもふものよりも人がらよき者あり。天性のすぐれたるあり。今の學者は物知たるばかりにて、彼好人にはをよぶべからず。學者世俗のいまだしらざる道學を學び、いまだ行はざる禮を行ことありといへども、數代の習の汚れをも不ㇾ洗、利害をだにも免かれざる有。意氣甚高くして世俗を見下すといへども、實は平人にも劣れる事あり。毀譽利害根深ければ、格すべきことあれ共至情を告がたし。世俗みな眞知眞能あれば、學者の非を見ることこまやかなり。心に竊に慢り輕しめらる。しかのみならず時處位にあはざる法を持來て行はむとす。天下千百年のならはしにあらず。神道王法の敎にあらず。只唐風の學者の一流として、彼一派の者のごとくするのみなり。槇雄の僧は戒を持、禪宗は座禪するがごとし。世俗と二になりて孤獨の道となりぬ。異端と相爭はんのみ也。何の時にか道を行はむや。それ慈父は幼童と共に戯れ、不ㇾ知不ㇾ識善を導き知覺のひらくるに隨ひてともにおとなしく成がごとし。聖人は俗と

に至るを待て小學に入れ給ふ。しゆることなくて其固有と時とにしたがふなり。五六百歳このかたの世俗は五六歳の童の時のごとし。先學校の政をもつて是非善惡を辨る知をひらきて恥をしるの義を勸むべし。數十年數百歳を歷て後の君子を俟て禮儀をおこさしむべきなり。伏義神農の德の周公孔子に劣れるにあらず。周公孔子の知の伏犧神農に優れるにあらず。時とともに行なり。只時に中せざるををとれりとし、時に中するをまされりとすべし。三皇五帝三王周公孔子、共に時を知て時に中するの知は同じかるべし。德は三皇五帝をすぐれたりといふべし。天地ひらけ人道あらはれて、則時に行べき禮ならば、何ぞ三皇五帝同姓をめとらざるの法を立ずして周を待べきやとの學者、時にあらざるの禮をしゐつとめて人情時勢に戾り、たま／＼道のおこるべききめぐみあるに、實をつとめずして末をとり、つゐに本末共にうしなひなば、後世かならず時をしらざるの笑はれあらんか。よく幼童を養育するものは、我童蒙に求むるにあらず。童蒙我に求む。今十五以下の童子百餘人を聚め敎る者あらむ。其中の秀才一二人知覺はやくひらけたるありて、成人の法を立むことを望むとも、師たる者知あらば、一二人のために大勢のあたはざる事をなすべからず。知覺はやき者には、いよ／＼内に省み實をつとむることを示すべし。衆童の才長じ知ひらけてもとめ催す志をむかへて、大人の道を習はすべし。しからば秀才の者も、才にひかれず識に滯らずして實の德をなすべし。衆童はなほ以て明らかなるより誠あるべし。若秀才を好して衆童のあたはざる事をしゐば、秀才は己が人に優れるにほこり、才にはせ知識にひかれて、つゐに不祥

なり。九年にして癈せらる。天下帝摯の弟放勳を尊て帝とす。此帝堯なり。帝堯陶唐氏在位一百歳なり。帝舜有虞氏在位四十八年なり。是までを五帝と號す。合せて三百八十九年なり。禹湯武を三王と號す。禹より湯に至るまで四百三十九年なり。湯より武王に至るまで六百四十三年なり。伏羲氏起り給ひしよりはじめて學ありといへどもいまだ禮儀法度なし。神農氏繼おこり給へども耕作醫術の民を養ふべき事をさきとす。黄帝の時禮樂の器あらはれ文章略見えたりといへどもいまだ期數の定なし。五帝の時禮儀法度大概ありといへども易簡にして行易し。人民の情にさかはず。德化により善に勸て人の欲するに隨て制法出來ぬ。夏商を歷て周に及び、文明の運極り器物飮食大になり無事至りてなすべき事なし。こゝにおゐて人情を溢れしめざらむがために禮儀の防おほく出來、數期こまやかにかたし。皆時所位にしたがひて行ふものなり。今の時器物多く人奢れる事は、周の盛世のゆたかなるにもこえつべし。しかれども人民の心の禮儀に習はざることは伏義の時のごとし。伏義の民は禮儀を不習といへども、質朴純厚にして情欲うすく利害なし。今の人情欲厚く利害深き事、其習十百年にあらず。根固く染深し。俄に世俗の人情を押へ急に利害を妨げば、道行はるべからず。今の世の民を敎ることは、幼少のものを導くがごとし。童蒙は養て神知の開くるを待べし。世俗は學を先にして禮儀を欲するを待べし。三四五歳の童は義の端すこしあらはれてものはぢする所あり。知の端すこしひらきて美惡をわかつ心あり。しかれどもいまだ義不義を辨へず。善惡是非をしるには及はず。六七八歳にをよびて辭讓の心生ず。故に聖人八歳

集義和書卷第五

書簡之五

一。來書略。同姓を不ㇾ娶の法、いまだ日本におゐて掟なきことなれば、いとこよりは俗に隨て不ㇾ苦とゆるし給候へども、近年同姓をいむの義を聞傳へて其禮を守る者少々出來候。これほどまでの禮儀をしることとも又大義也。すこしひらけたる知覺をむなしくして不ㇾ苦とゆるし給はむことはほいなきこと也。且いとこをゆるさば叔母姪にもをよびなん。それより後は禽獸に近くなるべし。只此勢にしたがひ儒法としてかたく同姓を忌禮儀の則を廣く仕度儀に候。

返書略。まことにねがふ處なり。しかれども此禮を云者は貴殿などしたしみ給ふ人十人か二十人か、扨は格法の學者二三十人の外には過べからず。わづかに相交る人をもつて天下の數かぎりなき世俗の人情をしらず時勢をかんがへずして時至り勢よしとおもへるは不知なり。今天下の人皆聖人と同姓同德なれ共、いまだ聖人の學を不ㇾ聞。貴賤共に衰世の俗に習ふこと百千歲なり。何ぞ禮儀を習ふにいとまあらんや。古の聖人伏義氏よりこのかた相續でおこり給ふ。其間近きあり遠きあり。伏義より神農に至るまで一萬七千七百八十七年。神農より黃帝まで五百十九年。黃帝有熊氏在位百年なり。是までを三皇と號す。少昊金天氏在位八十四年、黃帝の子なり。顓項高陽氏在位七十八年、黃帝の孫也。帝嚳高辛氏少昊の孫なり。在位七十年にして崩ず。子摯位をつぎて不德

實無妄の天道を父母としたる兄弟なれば、其誠を思ひて相交るを信と申候。內外一なるや　ならざるやと省るにて候。傳たる道理を受用せざるは學者の病にて候。師友に問學たる所を日用にこゝろむるや受用せざるやと省たまひ候。

一。勿ㇾ正はしるしをいそがざるなり。勿ㇾ忘はをこたらざる也。勿㆓助長㆒は才覺を用べからざるなり。百姓の農業をつとむるごとく職人の職をつとむるごとく、いそがずをこたらず才覺を用ひず。常になすべき事をして自得を待にて候。入德は善を行て積て德となる事に候。經傳を見、弓馬禮樂を學び自己の非をよくしり、過を聞ことを悅び、五倫道ある等の事、みな善を行にて候。不義をにくみ惡を耻るものゝ吾にあるを天眞と申候。これを主人公としてなす事は皆善にて候。これをかならず事とするとありと申候。

一。克己復禮は天理人欲ならび不ㇾ立候。禮は理なり己は私也。私に克たる所則天理なり。則天下我心內にあり。尤平人の己、學者の己、賢人の己、高下淺深各別たるべく候。大方御書付のごとくにて候。三月不ㇾ違ㇾ仁の語は、克己の後たるべし。四時三月にてうつりぬれば年中の事なり。年中たがふことなしといへども、不ㇾ違と候へばいまだ力いり候。化して聖と成時は不ㇾ違の力もいらず。無心にして天理流行いたし候。

集義和書卷第四　終

熊澤蕃山　集義和書卷第四

悪なきこと其中にあり。六十にして耳したがふは、大にして化するなり。聖人に至りたるにて候。是よりは少の淺深熟未熟は候へども、生知の聖にかはりはなく候。孔子の志は吾人にあらば大方三十にして立の心地たるべく候。石針の南北をさすごとく、義理より外に他念なきにて候。立は天地人とならび立にて候。不惑は學士の天地萬物にまどはざるごとき事にてはなく候。賢人の心を不動をも越て死生順逆一致に候へば、富貴貧賤夷狄患難入として自得せずといふ事なきにて候。知天命は知行するの知の意にて、天命を吾ものとするなり。陰陽五行も我なすなり。運氣もわれより進退すべき所御座候。他の死生有命富貴在天等の命を知にてはなく候。耳したがふは精微を盡す所たるべく候。五十知天命までは廣大に至る處にて候へば、言語を以て解せられ候。六十耳順よりは言語文書の及ところに非ず候。從容として道にあたる。形色は天性也。形をふむの位たるべく候。耳を以て口鼻眼四躰をかね給ひ候。一身の中にて神明に通ずるものは先耳なり。五聲十二律の精微を盡すも耳にて候。七十にして心の欲するにしたがつてのりをこえざるは、道器一貫義欲一致天道無心の動に同じきにてあるべく候。口をひらけば則となり足をあぐれは法となること其中に御座候。

一。曾子三省、初學の時の事たるべく候。如此人倫日用にをいて篤實に受用ありし故、やがて大賢に至り給へるとしらせたるものにてあるべく候。忠は己を盡すなり。我事には誰も心を盡し候。人のためには十分不盡候。人我へだてあるは仁ならず候故に、仁に至るの受用にて候。朋友は眞

はなく候。意欲の妄は皆凡心に付たるまどひにて候。凡心は意念私欲の泉源にて候。其本をたゝずして末ばかりおさめては、終に功なきと申事にて候。我を他人にして我人がらの位いかむと見候へば、心上の受用は大方よきも、全躰の人がら小人なる者多く候。此凡位をまぬかれて人がら君子の心地に近く候へば、凡根より出る意妄はわすれたるがごとく、ひとりなく成ものにて候。それより前は身のあつ火をはらふと申ことわざのごとく、心上にうかみ候。意妄は先しりぞくるにて候。惑とけ心の位のぼり凡情をはなれ君子の地位に至り候を入徳と申候。

一。初學より徳の力は及がたからんとの事、尤に存候。眞實よりおこりてなすことは、初學より徳の力にて候。眞實は明かなる所より生じ候。町人は武士よりは臆病なる者と申候へども、利を見ると明かに好む心眞實に候へは、風波をしのぎ遠路をへて危き難をかへりみず候事は武士よりもまさり候。君子道を見ると明かに徳を好むこと眞實に候へば、如レ此に候。それより前はさし當りてはしゐてつとむる事もなくて不レ叶候。

孔子十有五より七十までの次第の事、他の聖學をする人の受用にとりて申候はゞ、志レ學は道を學び徳に入むと志し心内に向て獨を愼むにて候。三十にして立は、心志堅固に成て文武の才徳成就したるにてあるべく候。四十にしてまどはざるは、守りつとむるの力いらずして心を動かさゞるの位たるべく候。五十にして天命を知は、天道に順從し運命に出入して造化を助くる大賢の心地たるべく候。天をもうらみず人をもとがめず四時に應じて小袖かたびらを用るごとく、順逆に好

てよし。人をとがめそしるべからず。善の行ふべきとあらば己一人なすべし。人にせむべからず。三軍の將の士卒と共にかけひきして獨夫の勇を用ひざるがごとし。衆のしたがふべき氣を見てはさきだちてすゝむるとあり。己氣力ありとも人のしたがひがたき事はなさず。世の道學の小道なるといはずして知りぬべし。

來書畧す。

返書略す。

器に水を十分入て持するたとへの事、人心の危を知りていかりにうつらず欲に落いらず本心の靈明を不ㇾ失事、右のごとくに候はゞ、よき受用たるべく候。しかれども大事と思ふ念を常に存するにてはなく候。常に心とすれば善ながら本心の靈明をふさぎ候。主意眞實に立候へば、常は無心にて事あればかならず用られ候。天下生を好まぬ者はなく候。身を大事に存候主意まことに候。故に其念慮はとゞめず候へどもあやうき所にのぞみてはかならず愼み候。

事物にうたがひある時心を盡し工夫被ㇾ成候へば、自得の悅御座候由、人の生付種々候へば、さ樣にて心の煩にもならず氣のとゞこほりもなく益を御覺え候はゞ、不ㇾ苦候。拙者若き時田舍に獨學いたし、聖言を空に覺え、山野歩行の時も心に思ひ口に吟じ候へば、意味の通じがたきもふと道理うかみよろこばしく候き。左樣の事にて候や。たゞに事物の不審に心をつくさるゝ事は如何と存候。心上意欲の妄をはらひ候事、當然の工夫にては候へども、そればかりにて凡根の亡び候事

の中肝要の所を見得て可なるべく候。

返書略。始より終まで句々皆解せんとするは、書を解するにて候へば、心を勞して受用の本意にあらず候。又要を得たりと思ひて他を疎かにするも弊あり。情性を吟詠し道德を涵養するとは詩のみにあらず候。道理本行は我心なり。經傳は我心の道理を解したるもの也。經傳をよみ得て悅ぶものは、我心の道理を見得たればなり。我心の道理は無窮なり。書中の一章を肝要として止るべからず。又甚解すべからず。甚解する時は書を本行として我心を失ふの弊あり。吾心の位と學術のすゝむとにしたがひて、受用の要と思ふ所は時によりかはりあるものに候。故に時に我心に受用の要を得ばよきなり。廣くわたりて道德を涵養し日新の功を積て氣質を變化し給ふべし。

一。再書略。廣くわたり候とはいか程の書を讀てよく候や。

返書略。予が廣くと申候は、無極の理に體して心をこれのみとゝめざるを申候。古へ書のすくなかりし時に却て聖賢多し。經傳は貴殿の心次第に孝經大學中庸にてもたりぬべし。論語孟子にても足ぬべし。五經にてもたりぬべし。其中十が七八までも解し殘すとも妨なく候。要は書中にあらず。我心にあり。大意を得時は天下に疑ひなし。何ぞ書の文義を事とし候はんや。

一。來書畧。道本大なり。何ぞ大道と稱し候や。

返書畧。世の道をいふ者すこしきなり。故に大道の名あり。大道とは大同なり。俗と共に進むべし。獨拔ずべからず。衆と共に行ふべし。獨異なるべからず。他人惡事をなさば己のみせざるに

中なり。人言を信とす。人の言はかならず實あるべきものなり。僞るものは私欲これを害すればなり。忠は德の本也。信は業の始なり。人身の主なり。故に忠信を主とすといへり。心友を友といひ、面友を朋と云。人を擇び捨るにあらず。己にしかざる者をも面友として禮を以て交をなすべし。小人をしたしみ心友として德をそこなふべからざるのみ。君子の過は日月の食のごとしといへり。速かに改るを尊とす。善これより大なるはなし。平人より君子に至るの道路なり。たとひ氣質靜重なり共、內に德業の本たる誠なく、外過を改るに憚からば、一旦威重なるがごとくなりとも、終には恐るべきことなきの實を人皆知べし。たとひ氣質輕々しくして浮氣に近くとも、忠信を主とし過を改め善にうつらば、浮氣の煩ひ除て天然の淸く明かなる本に歸るべし。人みなこれをよみして其誠あるに耻おそるべし。威これより重きはなし。學これより堅はなし。君子の重きを以て學をかたくし、威を以て外邪をふせぐ事は、文武の道なり。恭敬にして禮儀正しきは重にあらずや。死生貧富の間其心を動さず其志を奪ふべからざるは威にあらずや。氣質の輕重によるべからず。己にしかざる者を友とし親み今の凡位を安ずるは平人の常なり。賢を師とし善を友として過を改め義に移るは、日新成德の業なり。只學者の憂は不レ重にあり。不レ重者は內に主なきがゆへなり。生付の靜なると動とにはよるべからず。心に主あるを重しとす。主ある時はをのづから威あり。家に主人あると主なき家とを見て分明なり。

一。來書略。經書を見候に、始中終悉く解せんと仕候へば、心氣勞して却て塞る樣に覺え候。一經

は形より下なるの器なり。父は慈に子は孝にして父子親あるは、形より上なるの道なり。故に五倫の交りにをいて、道を行ひ德をなすは下學上達なり。理を窮め性を盡し命に至ること其中にあり。五倫を本とせずして空に理を窮め性を見るは、異學の悟りといふものなり。高しといへども、虛見なるが故に德に入業を立ることあたはず。其悟と云ものも眞ならず。人道を明かにせざるがゆへに造化を不レ知。造化の神理を辨へざるがゆへに跡のみ見てまどへり。下學せずして上達をもとめ上達も亦得ざるものなり。

來書略。此頃末書にて君子不レ重不レ威の章の說を得候。君子は學者の稱なり。學問は學で君子となるの道なれは。學者を指て君子といへり。在位の君子と云も同理なるべし。古は人の上たる人はみな道德あり。故に在位の人を君子といへり。重と不レ重とは氣質にあり。生付靜にして輕々しからぬ人は、をのづから人のなれあなどらざる所あれば、威あるがごとし。學ぶ所の道も、能受用して堅固なり。氣質輕く浮氣なる者は、あなどりやすくして威あらず。學ぶ所の道も得心たしかならず。故に學者の人品靜重にして威嚴なるは、たとへば田畠の地福よきがごとし。しかれどもよき種をうへざれば、地福の厚きも詮なし。主二忠信一は美種をうふるなり。己にしかざる者を友とせず、過ては速かに改て憚からず吝かならざるは、耕作の道をよく勤るがごとし。

返書略。此章の文義說得がたし。此發明聞えやすきのみ。予が見候は、誠の心にあるを忠といひ、事に行ふを信と云。中心を忠とす。天理自然の誠心にありて、空々如たるものなり。所謂未發の

同事の樣に心得たるは昧き事なり。貴人も亦あやまり給へり。有德は禮を以て來し、小藝は祿を以て招き給ふべくは、をのづからあらそふ事あるべからず。

來書畧。世間にすへ物きりたる者の子孫は絶ると申候。罪ありてきらるゝ者なれば、我きらでも人これをきり候。昔物語に竹の雪をふるはしめて其下知したる者にはかゝらておとしたる者にかゝりたるとなど申候へども、理窟にて候へば心得がたく候。

返書畧。世中にしわざこそ多かるべきに、人をきるを事と仕候は不仁なる心にて候。其不仁の心に天罰當るにて候。我等もすへ物きりたる者の子孫絶たるを二人まで見及び候。常の武士にて候へば、きらざるとても誰しゆる人もなく候。好て上手をするゆへにこそ、主人も命ぜられ朋友も頼み申事に候。しかのみならずよくきる者あれば、罪の輕き者もきらるゝ樣なるあやまりある體に候。其上すへ物によりて、あらみの打やう昔にかはり、當分きるゝ樣にばかり仕候故、後世まで用に立候はすくなかるべく候。古は今のやうに樣物(タメシモノ)は不レ仕候へども、人々かねよき刀をさし、今に傳て古身は重寶と成候。

一。來書略。下學上達の義、下人事を學て上天理に達すと承りて、理通ずるがごとくに候へども、受用となり難く候。

返書畧。易に形より上なる者を道といひ、形より下なる者を器といへり。此語にて上下のこゝろ分明に候。總して形色ある者は皆器也。故に五倫も器なり。父子、君臣、夫婦、兄弟、朋友の交

き時分は、名聞まじりに三年の喪は勤べきと存候き。いかにも貴殿の氣ざしにては成可申候。古の心喪と申は、身に服を着せざるばかりにて、作法はみな喪の掟と見え申候。今時心喪をなすと申され候は、尤志は殊勝にも候へ共、しかと仕たる事にてはなく候。大道を心とする者は、たとひ其身は喪をつとむべき道を得たりとも、時の人のなるまじきことなれば、光をやはらけ塵に同しくして、万歳を見こと一日のごとく、誠を立無事を行ひ業を創め統をたれ、衆と共に進むべし。己ひとり名譽をなすべからず。衆のなすまじきことを行ふ者は、天下の師たるべからず。法に落て一流となり俗とはなれては、いづれの時か道をおこすべきや。後世人の氣體つよく情厚くなりたる時は、予が言を薄しとしそしる者あるべし。誠に願ふ所也。たゞ一念獨知の所にをいて天を師とし神を友とせば、法のごとく勤を以てすぐれたりとせず。やわらぐるを以て惰れりとせず。名をさけ氣勢をしづめて誠を思ひ給はゞ、幸甚たるべし。

一。來書略。今の世多藝小術の者も、師となれば郡國の君と同座し、無禮至極なる者多く候。師となるうへは如此あるべき道理にて候や。

返書畧。天下に達尊三あり。德と年と位となり。朝廷にをいて衣冠正しく貴賤の次第を分つべき所にては位ある人を尊び、郷里の常の交にて孝弟を專らとすべき所にては年を尊び、世を助け民に長たるの德を慕ひ迷ひ辨へ心法を明かにする所にては德を尊ふ也。故に古は王公といへども民間の賢者に降りたまへり。しかるに彼一藝の師たる者自己の分を辨へず、小藝をしらで道德仁義も

生を養ふ時は喜怒の情發し易く、生樂の念動き易し。常の食を食し常の衣を着し常の居を安して不ㇾ怒不ㇾ笑不ㇾ樂事に、聖人、大賢さては天質の美にあらずしてはいかで成べきや。このゆへに古の人喪にはかならず法あり。法なくては勤ることあたはず。今の人其法は身の位に不ㇾ叶。又法を不ㇾ立しては行るべからず。しかれば俗にしたがひ給はんより外は有まじく候。世俗定法の五旬の忌の間も、元氣をそこなはざるためならば、藥を服用するごとく思ひ、折々干魚などを用らるべし。貴殿年より給ふとても、いまだ五十にて候へば、七十の人のごとくにも成まじく、又壯年無病の人の樣にも成まじく候。其間御料簡あるべく候

一。來書略。三年の喪は今の人の情には不ㇾ叶と承候へ共、律僧行人などを見候へば、又成まじき事とも不ㇾ被ㇾ存候。淨土宗り蓮宗などの中に居ては立られまじく候へ共、律とて別に立候へば、同じ凡僧ながら戒をも持候間、喪も居處衣服飲食に至まで別に出て仕候はゞ、とかく三年はつとめ過し可ㇾ申候。又心喪とて、外むきはかはらずして心に喪を勤ると申候へども、是は一向に急度立るよりも成がたかるべきと存候。

返書畧。律僧行人などは喪の勤ほどなることもある躰に候。然れどもそれは後世の極樂へ生れんといふ迷ひに牽れ、又は渡世のためなどにみな據所ありてなす事に候。今の百姓に律僧の一食と申物をあたへ候はゞ、よき振舞と可ㇾ存候。坊主には大方貧しき者なり候へば、しゐて苦勞とは存まじく候。又不婬戒などは、律僧ならでもかせ奉公人などは大方無ㇾ是非ㇾつとめ候。拙者も氣根よ

又行ふことと日本の水土に叶はず。人情にあたらず。儒法をおこすといへども、終に又儒法を破る事をしらず。貴殿三年の喪の法はあたはず共、心情の誠は盡し給ふべし。追〻遠の祭も又なるべきほどの事を行て自己の誠を盡し給ふべし。

一。來書略。喪の中魚鳥を食せざること、生類を忌の義ならは、佛家の流に似たり。祭禮に肉を用る時は、又生類を忌にてもなく候。拙者若く無病なりし時は、年中蔬食水飲しても何とも不〻存候き。近年は年寄病者に成候故か、五日生魚を食せざれば氣力乏しく、十日食せざれは腹中あしく成候。か樣にては三年の喪はいふに及ばす、三月も成申まじく候。何とも辨へがたく候。

返書畧。喪に一の主意あり。憂の中なればすべて靜かにして事にあづからず。肉食の味を求るも、樂びの類なれば食せず。蔬食して命を養ふのみなり。只酒肉を忌のみならず。五辛其外何にても相火を助け精をますべき物を食せず。腎水堅く閉て人道の感をいださじと也。蔬食味なければ腹にみたず。力なければ杖つきて起居す。喜怒ともに發することを不〻得。これ皆壯年の者生樂をふせがんがためなり。故に老て小兒のごとくなる者は肉を食し酒を飲。たゞ喪服の身にあるのみなり。病人も又しかり。これを食して樂とせず。只生を養ふばかりなり。氣血盛にして精神つよき者は、厚味を忌のみならず。蔬食といへども腹にみたしめず、夏涼しくせず、冬暖にせず、着て安からず、寢て安からず。これは古の人の氣血健に筋骨つよく無病にして精神盛なりしかば、聖人其人の位に依て制し給へる法なり。今の世の人此法のごとくつとめば、生を滅さむこと眼前也。

とめてなすべきや。たとひ少しは哀情ありても、氣躰弱く病時は、養生よりをのづから薄くなりゆくものなり。又人の氣質品々あり。生付の得たる方には、つとめも人に異なり。禮儀の法は得たれども、利心深き者あり。仁愛ありて人を惠み財をおしまぬ者も、禮法には疎かなるものあり。勇武あれども不仁なる者あり。才覺にして眞實薄者あり。如レ此の人々己が生付の得たる所に自滿して、たらざる所をわきまへず。互に相助る事あたはざるのみならず。却て相爭ひ相敵とす。貴殿は勇なれども、仁を好て人を愛し給ひ、利心すくなし。仁と無欲と勇とは、道德にをいて長ぜるところなり。禮の格法にたへざることは、流俗の習にして、天下みなしかり。貴殿一人の罪にあらず。一の不足を以て三の德を廢すべきことは、上世といふともあるべからず。況や末代にをいてをや。貴殿の德を以て上代に生れ給はゞ、必ず禮にも厚かるべし。それ太古には禮の格法なし。只誠に專也。伏義神農の代には、三年の喪なく哀情數なし。心地光明にして飾なかりき。仁勇無欲は伏義氏の時に生れて必ず貴びらるべし。禮の格法一事を以て儒者の道を盡せりとおもひ凡情の名利伏藏するものは、堯の代にいれらるべからず。貴殿此格法者のそしりに逢て天性の德を廢せんと思ふは、大に不可なり。それ喪は終を愼むなり。祭は遠を追なり。民の德厚きに歸す。尤人道の重ずる所なり。然れ共喪祭ともに時處位をはかるべし。只心の誠を盡すのみ。格法に拘て不レ叶をしゐ不レ能をかざらば、必ず其本をそこなふべし。格法の儒者の世に功ある事すくなからず、予がごときものも恩德にかゝれり。しかれども心法にうときがゆへに自己の凡情を不レ知。

存せり。是主忠信なり。又先儒の說に、眞心に發するこれを忠といひ、實理を盡すこれを信といふといへり。此解おもしろく覺え候。

一。來書略。親の喪をつとむるは學者の大義と承候へども、行こと成がたく候。少し道を悅び候甲斐もなく耻しく存候間、一向に學をやめ申べきと存候へども、これも又御恩をむなしくするにて候へば、何とも辨へがたく候。

返書略。古人は欲薄く情厚く、世事すくなく、氣力つよく無病なりし故に、三年の喪をつとめられ候。いまだ三年を不足と思ひし人あり。又少しはつとめて及たる人もあり。後世の人は世間多事にして、欲の爲に心を奪れ、情薄く氣力弱し。このゆへに勤てなりがたく、企ても及がたし。大國だにもしかり。况や日本は小國にて、人の魂魄の精うすく、堪忍の力弱し。聖人おこり給ふとも、日本の今の人には、しゐて三年の喪をなさしめ給はじ。世のならはしのくだれること千載に及ぬれば、今の世に生れては道を悅び法を行はんと思ふ志ありとも、氣力叶がたかるべし。賢君繼起り給ひ、世事次第にすくなく、人の利欲年々薄く、禮儀あつき風俗と成て豐かならば、風雨時をたがへず、寒暑節を不レ失して、物の生長かたく成なば、人の形躰も健になりて、人情厚くなるべし。然らば喪のつとめのみならず。萬事の行業厚くなりて、其世の一年は今の百日よりも勤めやすかるべし。今の世愛子に別れて、五年七年歎き暮し、病氣になる者も、平生の事は喪の躰ならず。これ哀情餘ありといへども、氣根弱く堪忍の精なきゆへなり。况や哀情の薄き者、つ

く候や。

返書略。古來日本に用ひらるゝ禮樂、官位、衣服の制に至るまで、そのかみ遣唐使もろこしより習ひ來りし聖代の遺法なれば、これすなはち儒法なり。喪祭の事は古は神道の法ありき。中頃佛法に移りて神道絶たり。社家に少し殘れる事ありといへども、平人はとり用ひがたき様にいひならはして、世人よるべき所をしらず。予は年來神道により行ふべき喪祭の法だにあらば用たく候へども、成がたきよしに候へば、無㆓是非㆒候。扨は儒法と佛法と、古より人々の心のより次第に用ひ來り候。佛法は釋迦より初て火葬にしたる事なれば、こと〳〵く火葬なるべく候へども、貴人と社家とは大ナ土葬にして髮をも不㆑剃者あり。是又儒法なり。上代にも神儒佛まじへ用られ候故に、東照神君も神儒佛三ながら用ゆとの給ひ候。然れば上代、武家共に用ひ來れり。何ぞ作と可㆑申や。中絶して見なれざるゆへに、夏虫氷を疑にて候。古は日本にも盛なりし學校の敎へ、釋奠の祭なども、中興せば珍しかるべく候。

一。來書畧。主㆓忠信㆒の語諸儒の説を聞候といへども、文義に依て理を云所はきこえたる様に候へども、今日の受用に取てはしかと得心仕がたく候。

返書略。大學の傳に誠意といへるは、則主㆓忠信㆒の工夫なり。主忠信は本躰工夫なり。誠意は工夫本躰なり。主忠信は未發の時に誠を養ふなり。誠意は已發の時に誠を存するなり。誠は天の道也。誠を思ふは人の道なり。誠を思ふ心眞實なれば、誠すなはち主となりて、思念をからずして

し僞をなさむ事は、予が心にをいてしのびず。予いまだ凡情をまぬかれずといへども、狂見ありて大意を見故に、世のそしりにひかれずして獨立り。他の學者は狂見なければ、そしりをもやぶり得ず。氣躰よはく情叶はざれば、法をも行こと不ㇾ能。名聞ふかき者は身を亡し、あさき者は學共に廢せり。まことに惜むべし。故に世に器量あり實義ある人は、多くは聖人の道を尊ぶといへども、大難あるによりさけてよらず。其人々の言信ずるにはあらざれども、表むき佛法によりて宗旨をたて、常の武士なれば難なし。學者と成時は、其法を行はざれば其流にそしられ、本なき惡名をかうぶれり。行ふ時は、身くづをれ武士のつとめもならざる樣なれば、實は不忠にも落入なり。道は五倫の道也。就ㇾ中忠孝を學ぶといへども、忠孝の實はなきに似たり。道に志なきにはあらずといへり。是非なき事に候。今の時大に志ある人は、たとひ其身根氣つよく愛情ふかくして三年の喪をつとむべき者なりとも、人の師父兄となりて子弟をみちびくべきならば、己ひとり高く行去て人のつゞきがたき事はすべからず。くゝりつきて衆と共に行ふべし。武將の道も同じ。一人ぬけがけして高名するは獨夫の勇なり。人に將たる者は總軍勢のかけひきすべき程をかんがへて進退す。己が馬のはやきがためにひとりゆかず。俗に異なる者は一流となりて俗をなさず。天地の化育を助くべからず。終に小道となれり。異端と是非を相爭へり。道の行はれざる事常にこゝにあり。俗にぬきんずべきは民の父母たるの德のみ。

一。來書畧。天子にあらざれは禮樂を不ㇾ作と候へば、儒法の喪祭をおこすも禮を作の類にてあるべ

年聖人の法を少々國に行はれし人御座候へば、國人かなしびて、孔子といひし人はいかなる悪人にてかゝる迷惑なる事を作り置て人をくるしめられ候と申たる由に候。今も儒道の法を立てしゐてつとめさせ候はゞ、是にかはり申間敷候。まことに僞の初め亂の端共可ㇾ成候。

返書略。聖人の言は何れの時處位にもよく應し候へども、採用ひやうあしきによりて害になる事に候。喪の事は死を以て生をほろぼさずとある一言にて、行ひやすき道理明白に候。病者か、無ニ氣力ㇾか、惰うすく習ひたるか、如ㇾ此たぐひの人に法のことくつとめさせ候はゞ、たちまち親の死を以て子の生を亡し可ㇾ申候。近世は人の生付氣根よはく躰やはらかに成來り候ゝたゞ人のみならず、竹木金石も又おなじ。無心の物だに運氣につれてはかくのごとし。況や人にをいてをや。今の人の氣躰よはく惰うすくなりたるには、世間の定法の五十日の忌精進にて相應に候。もし氣根つよく志、學力共にありて其上に心喪を加へむと思ふ人あらば、又五十日も祝言等の席へ出ざるほどの事にて可なり。神前の服は日本の古法のごとくたるべし。これより上のつとめをしゐ候はゞ、學者といふともたへざる者多かるべし。其人の罪にあらず。人情時變を不ㇾ知してしゐる者の過なり。物極れは必ず變ずる道理なれば、百年の後は人の氣根もまし、形躰つよくなり、世中質素の風にかへりて情も少しあつて、道德の學も興起し、至治の澤をかうむる時いたりなば、予がいひ置し事をすくなしといひらすしとしてそしる者あらむ。今だに誠を大事と思はざる學者は法によりて非とする者あり。しかりといへども道のおこらむとするめぐみの時に當りて、誠を亡

現正法行人哉。

二祖如レ此に候へば、末流の坊主とは大に異なり。法然坊は學力戒行共にまさりたる躰に候。日蓮不レ帶ニ妻子一と書候所は尤奇特に候。持ほどならば妻子とて可レ持候。かくれたる事は有間敷候。しかれども出家となり候うへは、戒なくては出家にあらず候との事に候。世間の坊主の説法は、己か破戒無慙のいひわけと見え申候。渡世の事に候へば、とかくの批判に不レ可レ及候。

一。來書畧。思に思索、覺照のたがひあるよし承候。くはしくうけたまはりたく候。

返書畧。古人心をくるしめ力をきはむるは鑿にいたり易しといへり。是思索の事にて候。心の本然ふさがりて至理てらさず候。藝は其術の功を積で後に成、世俗の分別は理窟より出たる分別と見え候。寛裕温厚にしてひたし養ふときは、心本然を得て明睿の照す所あり。これを覺照と申候。分別は自然に出て自得し、藝は從容として其品たかしともいへり。詩歌に至までたくみなるは本意にあらすと承候。又世事は其事になれ藝は其術を知らざれば、鏡前に白布をはりたるがごとしといへり。不レ知をは不レ知とし知をは知とす。眞知其中にあり。知者はまどはざるのみ。

一く來書略。聖人の言は何れの國何れの人にもよく相叶候と承候。しかれども喪祭の禮儀などは今の時處位に行ひがたき事多く候。三年の喪はとりわき成申間敷候。學者の我と思ひ立てつとめ候だに名實かはり申候。とぐる事は十に一二と見え候。それだに其人の得たる事か、境界のしからしむる樣なる事ばかりに候。上より法に定められ候はゞ僞の端となり、罪人多く出來可レ申候。往

返書畧。よき學者に成給候事は無用の事に候。本より武士にて候へば、よき士になり給ひ候樣に晝夜心がけられ尤に候。たゞ名字なしによき人と申がまことの人にて候。まことの人は公家なればよき公家と見え、武家なればよき武士と見え、町人なればよき町人、百姓なればよき百姓と見え申候。よき學者と申候には風ありくせあり。其類にをいてはほめ候ても、其法なく其習なき所へ出候へば、却て人の目にたて耳をおどろかし候。其ゆへはよき學者と申には、外のかざりおほく候。其かざりをのけて見候へば、實はかはる事なく候。たゞ實義ある人のみ、松栢のしほめるにをくるゝたのもしき所御座候。とりわき武士たる人の肝要にて候。

一。來書略。淨土宗、日蓮宗申候は、大乘の學者は戒をたもつに及ばず、たとひ惡をなしても彌陀を賴み妙法をとなふれは成佛うたがひなしといひ、善行をするをは雜行の人なり地獄に落べしと說候。西本願寺宗同前に候。法然坊日蓮法師など斯樣のすぢなき事をいひて一宗をひろめ候を、よくひろめさせ給ひたる事に候。今は數百歲のならはし共可レ申候。初めに斯樣の事にておこりたるは不審に存候。

返書略。法然坊制禁敎示の書を見侍れば云。可ニ停止一於ニ念佛門一號レ無ニ戒行一專勸ニ婬酒食肉一適守ニ律儀一者。名ニ雜行人一。憑ニ彌陀本願一者。說レ勿レ恐レ造レ惡。事戒是佛法大地也。衆行雖レ區同專レ之。是以。善導和尚。擧レ目不見ニ女人一。此行狀之趣。過ニ本律制一。淨業之類。不レ順レ之者。惣失ニ如來之遺敎一。別背ニ祖師之舊跡一。旁無レ據者歟。日蓮坊云。十七出家後不レ帶ニ妻子一。不レ食レ肉。權宗人尙可レ然。

一。小人は己あることを知て人あることを不レ知。をのれに利あれば人をそこなふ事をもかへりみず。近きは身を亡し遠きは家を亡す。自滿して才覺なりと思へる所のものこれなり。慾これより甚しきはなし。

一。來書略。志は退くとも不レ覺候。隨分つとめはげまし候へども、氣質柔弱なる故に進みがたく候。志の親切ならざる故とも被レ存候。

返書略。つとめられ候處は、氣の力のみをはげますにて候。たとひ强力ありて一旦つとめすくやかに進み候共、德の力ならざれば根に入て入德の益にはならず候。氣力は時ありておとろへ候。又根に不明なる所あればくじき易候。德の力は明かなる所より出候へば、氣質の强柔によらず候。知仁勇ある時は共にあり。德性を尊て問學によるは、これを明かにする受用にて候。明かになりぬれば、やめんとすれども不レ已の勇力自然に生じ候。私欲の煩もくらき所にある事に候。明かなる時は天理流行して一躰の仁あらはれ候。明かに知候へば則親切の志立候。これを明なるより誠あると申候。誠より明かなるは聖人にて候。これを明かにする功を受用せずして、たゞに志の親切ならん事を願はれ候は、舟なくて海をわたらんとするがごとくにて候。故に大學の道は明德を明かにすることを先じ候。親民至善はみな明德の工夫受用にて候。

一。來書略。よき學者に成申度と心懸候へ共、志のうすき故にや、をこたりがちにてむなしく光陰を送り候事、無念に存候。

一。愛しては生なんことを欲し、惡むでは死せんことを欲す。すべて命を不レ知。

一。名聞深ければ誠すくなし。利欲厚ければ義を不レ知。

一。己より富貴なるをうらやみ、或はそねみ、己より貧賤なるをあなどり、或はしのぎ、才知藝能の己にまされる者ありても益をとる事なく、己にしたがふ者を親む。人に問ことを耻て一生無知なり。

一。物ごとに實義とは叶はざれども、當世の人のほむる事なればこれをなし、實義に叶ぬる事も、人そしればこれをやむ。眼前の名を求る者は利也。名利の人これを小人といふ。形の欲にしたがひて道をしらざればなり。

一。人の己をほむるを聞ては、實に過たる事にても悦びほこり、己をそしるを聞ては、有ことなればおどろき、なきことなればいかる。あやまちをかざり非をとげて改むることを不レ知。人みな其人がらを知其心根の邪を知てとなふれども、己ひとりよくかくしてしられずと思へり。欲する所を必として諫をふせぎていれず。

一。人の非をみるを以ておのれが知ありとおもへり。人々自滿せざる者なし。

一。道にたがひてほまれを求め、義にそむきて利を求め、士は媚と手だてを以て祿をえんことを思ひ、庶人は人の目をくらまして利を得也。これを不義にして富かつ貴きは浮べる雲のごとしといへり。終に子孫を亡すにいたれども不レ察。

はる。其人がら光風霽月のごとし。

一。心地虚中なれば、有することなし。故に問ことを好めり。まされるを愛し、おとれるをめぐむ。富貴をうらやまず、貧賤をあなどらず。富貴は人の役なり、上に居のみ。貧賤は易簡なり、下に居のみ。富貴にして役せざれば亂れ、貧賤にして易簡ならざればやぶる。貴富なるときは貴富を行ひ、貧賤なる時は貧賤を行ひ、すべて天命をたのしみて吾おづからず。

一。志を持する所は伯夷を師とすべし。衣を千仭の岡にふるひ足を萬里の流にあらふがごとくなるへし。衆をいだくことは柳下惠を學ぶへし。天空して鳥の飛にまかせ海ひろくして魚のをどるにしたがふがごとくなるべし。

一。人見てよしとすれども、神のみることよからざる事をばせず。人見てあしゝとすれども、天のみることよき事をば、これをなすべし。一僕の罪かろきを殺して郡國を得ることもせず。何ぞ不義に與し亂にしたがはんや。

小人。

一。心利害に落入て暗昧なり。世事に出入して何となくいそがはし。

一。心思外に向て人前を愼のみ。或は頑空、或は妄慮。

一。順を好み逆をいとひ、生を愛し死をにくみて、願いみ多し。

順は富貴悅樂の類なり。逆は貧賤患難の類なり。

來可ㇾ申候。

一。來書略。士は賢をこひねかふと承候間、いにしへの賢人の行跡を似せ候へども及がたく候。たま〳〵少し學び得たる樣にても、心根は凡夫にて候。外君子にして内小人とや可ㇾ申候。いかゞ受用可ㇾ仕候や。

返書略。予近頃いにしへの賢人君子の心を察し、自己に備れるところを見て、學舍のかべに書付をき、小人をはなれて君子となるべき一助にいたし候を、則うつし致二進覽一候。

君　子。

一。仁者の心動なきこと大山のごとし。無欲なるがゆへによく靜なり。

一。仁者は太虛を心とす。天地、萬物、山川、河海みな吾有也。春夏、秋冬、幽明、晝夜、風雷、雨露、霜雪みなわか行なり。順逆は人生の陰陽なり。死生は晝夜の道なり。何をか好み何をかにくまん。義とともにしたがひて安し。

一。知者の心、留滯なきこと流水のごとし。穴にみちひききにつきて、終に四海に達す。意をおこし才覺をこのまず。万事不ㇾ得ㇾ已して應ず。無事を行て無爲なり。

一。知者は物を以て物をみる。已にひとしからん事を欲せず。故に周して比せず。小人は我を以て物をみる。己にひとしからんことを欲す。故に比して周せず。

一。君子の意思は内に向ふ。己ひとり知ところを愼で、人にしられんことをもとめず。天地神明とまじ

たがひ媚る者の告しらする小知の理屈などにて、事はよきに似たれども人情時勢にあはざる事ともなれば、用て却てあしき事となり候。賢知の者は己にしたがはずこびず、まされる名のある故に爭の心ありてふせげり。小人の言を取て賢知の言をふせがば、何を以てかよかるべき。燕王が堯舜の子にゆづらずして賢にゆづり給ひし善名をうらやみて、子之に國をゆづりて亂れたるがごとし。子之は小人なれば、うけまじき人情時勢をしらでうけたり。故に亂に及べり。小人の言はいかで人情時變に叶候はんや。

一。來書略。貴老は道學を以て天下に名を得給ふ人なり。しかるに一向初學の者の樣に、博學の者に逢ては字をたづね故事を問給ふとて、人不審申候。

返書略。予本より文學なく候。然れども字は字書にたづね故事は史書などにたづね候はゞ事すみ可﹅申候へども、さ樣に勞して物知だてする事は何の益なき事に候。幸に博識の人候はゞたづぬべき道理に候。世人予を以てをして道學の先覺とせられ候。予に先覺と成べき德なく候。たゞよく人にくだりて不﹅知事をたづぬる事のみ、少し人の先覺たるに足ぬべく候。

一。來書略。先日たま〳〵參會仕候へども、何のたづね問可﹅申たくはへもなく別れ申たる事、殘念に存候。

返書略。疑ひなき故にて候。實に受用する者は行はれざる事あり。これをたづねて行はるべき道を知を問學と申候。人倫日用の上にをいてよく心を用ひ手をくだし給はゞ、かならずうたがひ出

集義和書卷第四

書簡之四

一。來書略。いにしへは人に取て善をなし、人の知をあつめ用るを以て大知とす。今は人の善をとる者をば人のまねをするとてそしり、人の知を用れはをろかなりとあなどり申候。又たま〱貴人の人の言を取用ひ給ふもありといへども、善なるさたもなく、却てあしき事ども候。いにしへの道は今用ひがたきと見え申候。但何とぞ受用のいたし様もあるよ候や。うけたまはり度候。

返書略。むかし今川の書をだに、病に利ある良藥として諸國にも取用たり。人々我といふものある故に、善なれども人のいひたる事は用ひざるの爭ひあり。聖人には常の師なしとて、善を師とし給へり。いにしへは人の善をえらんでこれを取用るを知とし、己を立て人の善をとらざるを愚と申候。善を積で德となり善人の名をなす時は、人にとりたる事を言者なし。爭をつみて不善の名をなす時は、己か損なり。人にとらざる事をほむる者なし。大舜は問ことを好で、人の知を用ひ人の善をあげ給へり。天下古今の師とする所にして大聖人なり。桀紂は人の知を嫉て用ひず、人の善をふせぎていれず、己一人才知ありと思へり。しかれども天下古今のそしる所にして大惡人なり。かくのごとく善惡の道理分明なれども、凡情の習にて桀紂が行にならふ者は多く、大舜の德を學ぶ者はすくなし。思はざるの甚しきなり。又人の言を用てもよからずと申候に、己にし

は有とし知者は無とす。言論の及ぶところにあらず。よく知者は默識心通すべく候。

集義和書卷第三終

一○人に對して滿心ある事は、一躰流行の仁にあらず候。我を以て人を見候へば、不二相叶一事のみにて、いよ〳〵へだたり候。人を以て人を見候へば、此人は元來如レ此と思ひてとがめもなく候ゆ一躰の本然同じき親みをさへ不レ失候へば、五倫ともにむつまじく候。天下我に同じき人のみならば、一家も立がたかるべく候。同じからぬ人寄合て萬事調候。不二相叶一はみな我にまさる處なり。却て好すべく候。

一○存養省察は同じ工夫にて候。存養は靜中の省察、省察は動中の存養に候。ともに愼獨の受用なり。天理の眞樂其中に御座候。

一○我死躰も親の遺躰なれは、遺言してをろかにせざる道理との事、尤類をおし義のくはしきに至り候へば、さ樣にも被レ申候へども、少穿鑿に落入てくはし過候。太虛、天地、先祖、父母、己子孫、生脉絡一貫にて候へば、子孫とても先祖の遺躰なれば、己か私の子にあらず候。生脉つきて死躰となりたる時は、土に合するを本理といたし候。上古の人は本理にまかせ候。後生の人は情によりて死躰をおさめ候。父子、夫婦等の死躰をおさむるは、己か情をつくすにて候。己が身にをいては、跡にのこる者の情と時處の勢にまかせ置候へば、遺言に不レ及事に候。又遺言せずして不レ叶事も有べく候。

一○來書略。古今鬼神有無の說きはまりがたく候。

返書略。聖人神明不測との給ひ候。明白なる道理にて候へども、不測の理に達せざればにや、愚者

惡人を罰せざれば、鬼これを罰する者ありと、古人も被ㇾ申候。

一〇來書略す。

返書略す。

一〇內に向と外に向との義理、言語を以て申わけがたく候。たゞ心術のをもむきにて候。內に向ひたる師友と學問仕候へば、吾しらず心術內に向ひ候。外に向ひたる學者を師友といたし候へば、志は實にても心術は外に向ひ候。是を以心傳心とも可ㇾ申候。書にむかひ義論講明の時はかはりなき樣に候へども、國家の事五倫の交り世俗にましはりては、學び候處用に立がたく候。跡になづみて用ひ候へばそこなひ出來候。是みな外に向ひたる故にて候。

一〇さし當りなすべき事は義理にて候へば、善をするの一にて候。書を見るをのみ學問としてつとめをかくは、本心を失ひたるにて候。

一〇板垣信形事、信形にしては奇特に候。是を道とは被ㇾ申間敷候。なみの武士にて一役つとめ候者は、其役だに仕候へば　君の善惡にはかまひ不ㇾ申候。筋目ある臣は或は諫め、或は其身を正しく行ひ知をくらまして時を待かの二たるべく候。

一〇位牌も本は神主を似せて仕たる者に候。いける親の髮をそり法躰と成たる同事に候。法躰とて親を拜せざる事なく候。心の誠をだに存し候はゞ、神主も同事たるべく候。時の勢ひ次第に可ㇾ被ㇾ成候。

返書略。致なく禮式なき故に、さ樣の人何方にもおほく候。介者は拜せずとて、軍中にて甲冑しては拜せざるを禮と仕候。古者、國容不㆑入㆑軍、軍容不㆑入㆑國、軍容入㆑國、則民德廢、と御座候。さ樣の無禮人を拜せず言葉ばかりをかけて過るがくせになりて、常の人にもたがひに其通に成候。しかれば國の禮儀みだれ候て人の德すたれ候。治國に禮儀みだれ候へば、軍令は尙以行はれず候。亡國の基にて候。是故に治國は致て禮儀あることを尊び候なり。

一。來書略　鬼門金神へ屋を出しやうつりする事を忌候事は、道理有まじき事の樣に覺え候。世間にやぶる人も有㆑之候へども、主人妻子などにたゝりたるも多く候。あしき方ならば家內不㆑殘たゝるべきに、家主妻子をとがめ候は、鬼も心ある樣に御座候。此理分明ならず候。

返書略。日本は福地なる故に、田畠多く人多し。山澤これに應しがたく候。人々欲するまゝに屋作し木をきらば、山林ほどなくあれて人民立がたく候はんか。此故にいにしへ神道の法として、三年ふさがり金神鬼門を忌事出來候。此分の堪忍にても、日本國の山林を養育し家財をやぶらざる事大なり。むかしは人のいまざりし事も、法度出來て後はこれを忌なり。法をおかすは不義なればこれを罰する物なり。いはんや日本の水土によりて立られたる神道の本は義理なれば、義理有てはくるしからじ。たゞに欲するにまかせてやぶるべからず。此國に生れながら此國の神道をおし、或は年來惡心惡行など有し者神罰いたるべき時節に、金神鬼門の方をおかして災害に逢も有べく候。年來不屆の者なれば、小過によりて罪に行はるゝ事、人道にも有がごとし。人の罪すべき

なり。

一。來書略。孝子は日を愛するの道理承度候。

返書略。孝子は父母の命を愛せずといふ事なく候。父母己をたのしましむる時はたのしみ、つとめしむる時はつとむ。今日の日は天命なり。天地は大父母なり。君子は父母天地へだてなく候。天道既に今日の日を命じて、或は勤勞せしめ或は遊樂せしむ。故に日として愛せずといふ事なし。凡人は貧賤なる時は憂苦し、富貴なる時は逸樂す。ともに日を空して愛することを不ㇾ知。目前の利を心として千載の功をわする。君子は貧賤なる時は勤學し、富貴なる時は人を愛す。月日上に遊て形躰下に衰ふ。忽然として万物と遷化す。尺璧を輕くして寸陰を重ずる者は、すでに時に及ばざらむことを恐れてなり。

一。來書略。天下をとるといへるは俗語にて候や。聞にくく候。有といへばおだやかに候は如何。

返書略。德を以て天下を知を有といひ、力を以て天下に主たるを取と申候。王代は有ち武家は取にて有べく候。しかれども兵書に云、無ㇾ取ㇾ於ㇾ民者取ㇾ民者也、無ㇾ取ㇾ於ㇾ國者取ㇾ國者也、無ㇾ取ㇾ於㆓天下㆒者、取㆓天下㆒者也、無ㇾ取ㇾ民者、民利ㇾ之、無ㇾ取ㇾ國者、國利ㇾ之、無ㇾ取ㇾ天下㆒者、天下利ㇾ之、といへり。この意にて候へば、取の字もくるしからざるか。

一。來書略。爰元に此方より禮すれども禮せざる者有ㇾ之候。今は心得て誰も禮不ㇾ仕候。言葉ばかりをかくるか彼がごとく笑て過候。かやうの者には如何可ㇾ仕候や。

子の命なれば愚痴なる事をいはせらるべきにもあらねども、愚なるをしりながら通ぜさることをいひきかせて同心なき時をしてやぶるも舜のために心よからざれば、一向初めより不㆑告して娶れと詔ありたるなるべし。大舜は如㆑此の叡慮ありと竊に告給ふこともあるべし。

一。來書略。大王は仁なり。しかるに貨を好み色を好といへるは如何。

返書略。是も孟子の語勢なり。國に三年の蓄なければ國其國にあらずとて、後世の人の己がために貨をたくはふるとはちがひて、國人のために積置るゝ事にて候。一國の一年の藏入を四に分て、三を以て万事を達し、一を殘して兵事水旱の用に備へ候。天道の四時も冬一時を不㆑用して貯となるがごとし。三年積て一年の餘あり。九年積て三年の餘あり。糈にてをき干飯にしておき、あまり久しきは段々に入かへなど仕候。如㆑此なれば異國の兵亂ありても、內堅固にして危きとなし。水旱の運に逢ても、人をそこなはず。盜賊おこらず。國人のために貨を好て、みづからのために好にあらず。後世には貯れどもみづからのためのたくはへなれば、多くても飢饉の用には不㆑立。大明の韃靼にとられしも、國に三年の蓄なかりし故、飢饉に逢て盜賊おこり、それよりやがて兵亂に成て、つゐにとられたり。國に三年の蓄なきは國其國にあらさるの至言明かなり。又大王の色を好み給ふにはあらず。もし好み給ふにしても、大王の時のごとく婚姻の禮を明かにし、事物を輕くして男女時を不㆑失、三十の男はかならず婦をむかへ、二十の女はかならず嫁する樣ならば、王道にをいて尤重き事なり。今齊王色を好まるゝとも大王のごとくならば、王道にさまたげなしと

寢候。何の心もなく候。生死は終身の晝夜にして、晝夜は今日の生死にて候。生死の理も晝夜を思ふごとく常に明かに候へば、臨終とても無二別儀一候。薪つきて火滅するがごとく、寢所に入て心よく寢候が如く、何の思念もなく只明白なる心ばかりに候。

一。再書略。晝夜の道に通じて知と候へば、生涯の心がけもまた鬼神の境界と可レ成候や。

返書略。生て五倫の道ある者は死て五行に配す。本死を以ていふべからず。明には五倫あり。幽には五行あり。明も造物者と友たり。幽も造物者と友たり。生には人心あり。死には人心なし。人の字に心をつけ候へば明白なる事に候。

一。來書略。大舜の故事をのべ給ふこと孟子の書に異なるは、いかゞしたる事にて候や。

返書略。孟子の語勢を知給はざる故にて候。孟子の語勢は本の虚實をとはず。それにしても此道理と滯なく道德を發明し給ひたるものなり。いかに質素の時なればとて、天子の二女をつかはし婿にし給ひし人に藏をぬらし井をほらしむる事やあるべき。我とひとしく賤しき者を殺してだに助てをくといふ事はなき理なり。たゞ類をおして義の精きに至り、若如レ此ありても如レ此と至極いひつめたる論なり。不レ告して娶るの論は、若後世不心得なる親ありて告て同心すまじき者あらば子孫相續は孝の第一なれば、不レ告して娶りてもくるしからじ、告の禮を不レ用ことは小節なり子孫をつぎ人の大倫を立るは大義なればなり。舜の本より情欲の父母につかへ給はずして性命の父母につかへ給ひしこと、孟子に至りて明かなり。瞽瞍の本心は告てかならず娶るの本心なり。〔六

なり。下々の盗をしてはあらはれん事を恐れてせざるばかりにて恥の心うすき者は、時ならず欲する念慮も有べし。しからば夢にも盗をしておはれなどし又とらへられたるなどゝある夢も見るべし。常に思はぬ事をも夢には見るなれども、大かた其類に觸たる事を見るなり。車に乘て鼠穴を通たると云夢は見たる者なしとなり。

一。來書略。人の身の心中にあるは、魚の水中にあるがごとし。此心より此身生れ、又身の主と成と承候。たとへば車をつくる者の車を作てのるがごとし。然るに人の天地の中にあるは、人の腹中に心のあるがごとしと仰られ候。心は内外なし。腹中に有と一偏に云べからざるか。

返書畧。天地人を作りて、又人を以て主とす。其天の作る所の理、すなはち人の性命なり。人性もと無極也。天地を入て大なりとせず。故に人は天地の德、神明の舍ともいへり。心の臓の虚中をのづから一太極あり。又腹中にありと云も害あらず。心に内外なき事は本よりの義なり。

一。來書略。臨終の一念とて、命終る時は心持を大事とする事は、さも有るべき事にて候や。

返書略。細工は流々とやらん申候間、其理こそ候はめ。それも造化を輪廻と見て、生れかはるの見より生したるとなるべく候。緩々と死なばこそ其一念も可レ存候へ。思ひかけぬ事にてふと死候はゞ何としてさ樣の事成候はんや。其上晝の心がけは夜の夢と成候。晝一日惡事を思ひ惡事をなして寢さまに善事を思ひ候とも、其心にもなき作善念は、夜の夢とは成まじく候。只終日の實事のかげならでは見申まじく候。誰も晝夜の理に或ひうたがふ者はなく候。目さめてをき、ねぶたくて

る奉行の下には罪人おほくて、人多く死するものに候。又君子なれば、いか程柔和にても子も臣もをそるゝ物に候。神武の德おはします故也。水も大淵の靑みかへりて底しれざるにはをそれてほとりに立がたく、やはらかなれども大に威ある事に候。貴殿今より火の仁は成まじく候間、水の仁にしてよく〳〵德を積給ふべく候。

一。來書畧。雷は何方へおち候はんも難計候へば、誰もおそるゝは尤と存候。いかゞ。

返書略。雷聲をおそるゝ者は惡氣と惡人となり。貴殿惡人ならずして惡人の徒と成給ふ事は、まどひある故に候。雷聲は物の留滯を通ずる物なる故に、雷を聞ては氣血流行し、相當の灸をし藥を服用したるよりも心地よきものに候。いまだなることのつよからざるをおしみ候なり。たとへば盜賊いましめのために夜廻りを出し辻番をおかれ候事は、常人のためには悅にて候。しかるに盜賊は其いましめを聞ては肝をけし候。たゞ平生心に惡ある故に雷聲を聞ておそるゝにて候。

一。來書畧。聖人に夢なしと申候へども、孔聖周公を夢みるの語あり。兩楹の間に祭らるゝの夢あり。

返書畧。たゞ世俗につきて夢といへり。是夢にあらず。聖人の心には正思あり前知あり。周公を夢見給ふは夜の正思なり。兩楹の間に祭らるゝは夜の前知なり。今日吾人といへども、聖人に同じく夢なき事あり。士たるものは、常の產なけれども常の心あり。盜をせざるの心は死に至るまで變ぜず。學問せざれども幼少より其義を精く習來たる故なり。しかるゆへに盜をしたるといふ夢は終に見ず。この一は聖人と同じ。間思もなく夢もなし。致知のしるし也。昔より物を格すの功

中用ありて來るが物語などして時分までゐかゝれば、平生の麁飯を振舞催して、寄合時もなら茶粥雜水の外は不ㇾ仕候。奇特なる親類知音のまじはりなりとて、心ある者は感じ申とかたり候き。

一。來書略。拙者せがれ御存知のごとく、うつけにてはなく候へ共、世間の習に入て氣隨我まゝにして道德を好まず諸藝も根に不ㇾ入、かへりて父の非をかぞへ、諸同志の非をいひ、利口にして其身の行跡あしく、まことの奢れる子の不ㇾ可ㇾ用にて候。いかゞ仕てよく候はんや。

返書略。一朝一夕の故にあらず候。貴殿の年來の養ゆへにて候へば、御子息の罪にあらず候。惣じて父と君とは、心根に仁ありて常は嚴なるがよく候。人生は水火の二にあらざれば一日もたちがたく候。水火の仁ほど大なる事はなく候へ共、火は嚴なるものなれば人をそれて用心仕候故に、心と火に近付て死する者はなく候。水は柔なる物故に、人々心やすく思ひ、近付て溺死する者おほく候。貴殿の病は柔和過たるにて候。柔和過たるは人のほむるものにてよき樣に候へども、其門に不孝子いで其國に不忠臣いで候。嚴なる主親は、無理をいひても子も臣も怨みざる物にて候。さま〳〵少しのなさけありても、天より降たる樣によろこび候。柔和なる主親は、道理ありても、子も臣もうらみ申候。いか程なさけ恩賞ありても、其當座ばかりにて過分なりとも思はざる物にて候。親の柔和なるは其子のならひあしく、主君の柔和なるは家中の風俗あしきものに候。水の仁は母のごとく、火の仁は父のごとし。貴殿は母の仁にして御子息あしく成給ひ候。今に至てはげしくせられ候はゞ、いよ〳〵戻てよきことは有まじく候。國家の政道を取ても、貴殿のごとくな

はんや。それは名根より生じて、欲心のいひわけにこしらへたるものなり。欲心ある故に、人の吝嗇といふべきかとて、清白だてをするにて候。眞實無欲の人には、清白もなき物にて候。眞實に無欲なれば、人が吝嗇なりといふべきかとの氣遣もなく候故に、心もつかず。家屋の美を好まざれば、をのづから儉約なり。衣服諸道具飲食の好なければ、自然と輕し。無欲無心の儉約なれば、我も勞せず人もとがめず。淡淸の好人といふべきなり。貴殿は無欲ならば身代もつゞきがたく世間の務もいかゞ有べきと思はれ候へ共、無欲なれば身代もつゞき世間の務もよく成事に候。奢は陽の欲、しはきは陰の欲なり。無欲をつくるは名根の欲也。三ともに大欲心にて候。君子の無欲といふは禮儀にしたがひて私なき事也。如レ此の正人あらば、今の世とてもあしくは申間敷候。たとひ無心得なる者ありてあしく申ともあづからざる事に候。天道を我心の證據人とせらるべく候。此以前遠國の人語られ候。在所に奇特なる者あり。知行五百石の身上に候。親類知音に申樣、我等は下手にて候やらん、公役軍役をつとめ、人馬をもち奉公を仕候へば、やう／＼事たり候。相番中おもてむきの交りはかゝれず候。其上に親類知音中折節の振舞をもしてあそび候へば、其分不足に候。さ候へは町人の物をかりてやらざる樣に成候。しかれば親類知音中寄合て町人の物を取て飮食するにて候。親類知音の心安き中は、か樣の事をも打とけいひて遠慮有まじき事に候。各は上手にて有餘あらば振舞給べし。何方へも參べく候。此方にても來かゝりの常住か催して寄合候はゞ、なら茶など可レ仕候。各も有餘なくば無用に候。我等の流にせらるべく候とて、親類知音

ざればあしく申との事は、數奇者には茶の湯をして見せ、謡すきにはうたひの會をし、馬すきには馬あつかひをして、傍輩の人々と一へんわたり給ふべく候や。左様に仕候人は有まじく候。若き内に藝を稽古するには、其師の所へ行此方へ招きなどして、一藝づゝきわむるにて候。今は左様にする人々もまれに候。たゞ我心に叶ひたる人々と五人七人うちより〳〵往來してかたられ候。其五七人の内弓にすきて弓をもてあそばるゝもあり。鎗太刀鐵砲馬思ひ〳〵に候。扨は謡か、茶の湯か、酒か、連歌か、文學か、人ことか、それよりくだれば様々のいやしきとも、又は奢もありと見え候。大身は大勢も寄合、小身は座敷もなくつかふ人もなければ、五人七人に過べからず。其中間の人吝嗇とか清白なるとか名をつけ候へば、かけもかまはぬ世間の人も聞傳て中にて候。たがひに一かまへ〳〵に候へば、一へんにわたるといふとはなく候。こゝに三綱五常の道を修て其身の作法正しく、家内の男女をよくおさめ、人馬軍役に應じてたしなみ、知行の百姓をもつよからずゆるからず末長く立べき様にし、ひろきとすぐれたる事はなくとも、文武の藝にもくらからず、世間の奢にひかれず、親類知音相番のかた〳〵と交りをかゝず、屋作をかろくし衣服をつくろはず、諸道具をはぶき、飲食をうすくし、費をやめて、有餘を存し、親類知音のおちめをすくひ、家人百姓をあはれみ、晝夜文武の務に暇なく、世上の品々のあそびは不レ知がごとく忘れたるがごとくなる人あれば、世中には正人あり類を以て來り友なふべし。用をも飾せず、不時の備をもせず、わざとたくはへぬ様にし、仁にも義にもあらずしてゆへなくつかひ施すを、無欲と申候

桀紂は中國の主なれば、四海の尊位なり。其富天地の間にならびなし。顏子は無位無官にして、衣やぶれ食たえ〳〵なり。しかも三十餘にして天年かぎりあり。人生の福是よりうすきはなし。しかれどもこゝに人ありて桀紂に似たりといへば腹立せり。尊きと天子たり。富四海の內をたもてり。かゝる至極の人に似たるとて腹立せるものは、人々悪を耻善を好むの良心あればなり。又顏子に似たりといへば中心悅ぶといへども、はぢをそれて謙退す。天子諸侯の富貴といへども其言葉にあたりがたし。人爵は其世ばかりにして、槿の露のごとし。天爵のとこしなへに尊きにはならぶべからず。人爵には命分あり、願ふべからず。天爵には分數なし、心の位なればふせぐものなし、心のたのしびは奪ものなければ人鬼共に安し。吾人たゞ顏子の徒とならんことをねがふべし。桀紂が徒たらんことをねがふべからず。

一。來書略。無欲のよき事は誰も存候へ共、出家道心者などは無欲もたてられ候べし。世間に交居候ては左様には成がたき事にて候。又奢はあしきと存ながら、人のする事をせざれば、吝嗇といひてそしり申候。人なみに仕ては欲有てとりたくはへもつかまつらではかなはず候。いかゞ仕べきことにて候や。

返書畧。貴殿無欲を何と心得られ候や。天理をとめて人欲とし人欲をとめて天理とするのあやまり有べきと存候。物を蓄てつかはざるを欲とし、蓄へずして有次第につかひ、なくなれば何事をもせずして居を、無欲と思ひ給候や。其ふたつはしはきと正躰なしとにて候。又人のする事をせ

に人心の靈にて候。

一。再書略。しからば堯舜の民も貧乏をまぬかれず候や。

返書舜。まづしくはあれども乏しき事はなく候。人々分を安じて願なければ、身は勞じて心は樂めり。堯舜の民は康寧の福あるとは、此理にて候。むかし田夫あり。每日北に向て禮拜し、淸福を給ふといへり。其妻笑て曰、軒には草しげり、床には稿の席をしき、身にはあらきぬのこを着て、雜穀を食とす、夫は田畠に勞し、婦は食事にいとまなし、餘力あれば紡績織紝す、春より冬に至り、日より夜におよぶ、是を淸福といはゞ誰か福なからむ。夫が曰、是皆賤男賤女の事なり、我身上らふのおちぶれにもあらず、本より賤の子にして、賤の家に居、賤の衣を着し、賤の食を食し、賤の業をいとなむは、天理の常也。好事もなきにはしかず、思ひかけぬ幸は其願にあらず。身に病なく家に災なし、達者にして暇なきは淸福にあらずやと人いへる事あり。流水は常に生てたまり、水は程なく死ぬ。柱には虫入、鋤の柄には虫いらず。俗樂の遊は憂又したがふ。水くさり柱むしばむのくるしみほどなければ、美味あれども彼田夫の麁飯にもをとり、輕く暖なる衣あれども、寒をいたむことと賤のぬのこにをとれり。おほくは病苦にたえず、或は夭死す。よく思はゞ願ふべからず。人は動物なり。上天子より下士民に至まで、無逸をつとめとするは人の道なり。むかし許由は賢人なり。其身は農夫にして彼に全し。堯の天下を辭して耳を洗ひしは、其心のたのしび四海の富貴にこえたり。德なきの富貴は浮べる雲のごとし。天爵は萬歲尊し。又人いへる事あり。

いとはず。極月の雪霜を踏て鹽薪野菜などをうり候事、富候はゞ仕べく候や。農工商も貧よりおこりて、世の中たち申候。たゞ農工商のみしかるにあらず、士といへども貧を常として學問諸藝を勵み才徳達し候也。生れながら榮耀なる者は、おほくは不才不徳にして、國家の用にたちがたく候。唯士農工商のみならず、國天下の大臣國郡の主といへども、吉凶軍賓嘉の禮用をそなへ、國土水旱の蓄をなし、君につかふまつるの役義なれば、富足ことあるべからず。上は天下の主といへども、來を薄して往を厚し天下の人民の生を養ひ死に喪して恨みなからしめ、且異國の不意に備へ、天運の凶年飢饉をあらかじめ待給へば、天下の財物のおほきも、天下の人のために御覽ずれば、あきたる事なし。其上に天下の主の第一に乏しく思しめさるゝは、賢才の人のすくなき也。堯舜もこれを憂とし給へり。是以仝じく聖人なれども、孔子は人の師なれば知を明かにして先達し給ひ、堯舜は人の君なれば知をくらまして天下の賢才をまねき給へり。賓は貧に生じ知は謙に明かなる理をしらで、我知に自慢したれりと思へば、天下の才知みなうづもるゝ事なり。空々として謙退なればこそ、善政もおこり、美風も後世に殘る事なるに、下聞を耻とし天下の知を不ㇾ用時は、物の本躰は虛靈なるの道理にあらず。其耻にあらざるをはぢて耻心亡び、不善の名を得るものなり。それ天地の大なる、万物を造化し出す所は太虛無一物の理なり。目は五色をはなれて五色を辨へ、口は五味なくしてよく五味をあぢはひ、耳は五聲なくして五音をしり、心鏡空々として万事に應ず。萬の物はみな無より生し候へば、貧は世界の福神といふ俗語は、まこと

のごとし。周公、孔子は夏のごとし。其摸樣はかはりあれども、同じく天理の神化なるがごとし。易は無極の理なれば、孔子のみにかぎらず、伏義といへ共是のみと思ひ給ふ事はなき道理にて候。

一。再書略。釋迦はえびすの聖人か。是も時によりて感ずる法なるか。

返書畧。神聖中行の道理にはあらず。中國に來て孔子に學びば、よく聖人となるべき分量あり。仁心廣く厚き所あり。知勇も氣質に備はりて見えたり。其生國はすぐれて愚痴に、大に欲ふかく、至て不仁なり。極熱の國なる故に、死せる肉を置がたし。いけながら持ありき、切てうる事なり。仁心深き者是を制する方をしらでは、殺生戒をなしたるもとはりなり。日本は仁國なり。此國に生れたらば、佛法をおこすべきの感慨もあるまじく候。若又釋迦、達磨を只今出して、今の佛者などを見せば、何者とも心得がたかるべく候。佛祖の流と申候はゞ、大に歎きかなしびて、其破却かぎりあるまじく候。我等は佛者ならざる故に、遠慮おほくおもふ樣にも申さず候。我子を教戒する者は至情をのべ、人の子を教戒する者は風諫するがごとくにて候。釋迦、達磨に我等の佛を難ずる語を聞せ候はゞ、いまだ世情をはなれず道に專ならざる故に遠慮おほきとて、心にあひ申まじく候。

一。來書畧。俗に貧は世界の福の神と申候は、いかなる道理にて候や。

返書畧。世の中の人殘らず富候はゞ、天地も其まゝつき候なん。貧賤なればこそ、五穀諸菜を作り、衣服を織出し、材木薪をきり、鹽をやき魚をとり、諸物をあきなひ仕候へば、六月の炎暑を

び給ひながら、韋の三度きるゝまで朝夕手をたゝずして、いまだ易を得たりと思ひ給はず。神農は草根をなめて初て醫藥をつくり給ふ。然るに孔子は末代醫術あまねき時に生れ給へども、藥に達せざるの語あり。かくのごとく大にちがひたる位を同じとは、いかなる事侯や。

返書略。時にて侯。孔子を伏羲、神農の時にをき侯へば、易を作り醫をはじめ給ひ侯。伏羲、神農を孔子の時に置侯へば、又孔子のごとくにて侯。

一。再書略。しからば佛說に似たる所侯。わざとまうけて神通、方便をなすがごとくに侯。空々として跡なき事をだに作りはじむる人の、又跡にしたがひて愚人とひとしく侯や。

返書略。少しも心はなく侯。三皇の時にをいては、空々として跡なき事もおこり侯。心の感ある道理侯。孔子の時には、迹あることをもたづね學ぶ心の理御座侯。上世は大虛を祖とし天地を父母とすること近し。聖人生れて其名殘らずまどひなければ明者かくれ、不孝子なければ孝子をおどろかず、不臣なければ忠臣しれず、政刑なくして大道行はれ、敎學なくして人みな善なり。後世にいたりて性情わかれ物欲生じぬ。人初てまどひあり。此時に當て伏羲氏出給へり。惻然として感慨あり。敎なきことあたはず。時に天道龍馬を命じて、文を以て其志を助け給へり。書書敎學のはじめなり。伏羲氏以前は物欲きざゝず情性に合する故に、人に病疾なし。後世有欲多事のきざし出來てこのかた病人あり。醫藥の術、耕作農政なきことあたはず。天道靈草、美種を降して神農氏の業を助け給へり。是皆神聖廣大の知の緖餘なり。時によりて發するのみ。伏羲、神農は春

して不ㇾ叶事に候はゞ、老學といひいとまなく候へば、成がたき事に候。

返書略。聖賢を直に師としては、書をよまでも道を知德に入こと成申候。今の時聖賢の師なく候へば、中人より以下の人は、書をまなび候はでは道を知こと成かたく候。しかれどもよく心傳を得たる人に聞候はゞ、善人とは成申べく候。扨はよき士と申ほどの人がらにはおよぶ事にて候。聖人の言語にはふくむ所多く候。無極の躰なり。其含む所は言外に候へば、我と經書を見て聖人の心をくみ申候。則聖人に對し奉るがごとくなる事候。其心には深きあり淺きあり、其品いひつくしがたく候へども、いかさまに書を見る人は後までも學におこたりなく候。たゞに物語にて心術のみ聞候人は、一旦はすゝみ候へども、言外の理を不ㇾ知候へば、心ならず年を經てたゆむものにて候。中人以上の人は、少し心傳を聞ては、やがて天地を師とし。造化にをいて學ぶ所あるは、書にも及ばず、道を行ひ德に入候なり。中人以上にても、書をよみたるばかりにて心傳を不ㇾ聞人は聖學に入がたく候。上知は心傳を不ㇾ聞して書を見ても、すぐに德を知候なり。故に攸好德の幸福ある人は、次第を歷て德を知も御座候。尤此人は書によりて聖人に對面仕候。書をよみ給はでも、人の主人としては仁君といはれ、人の臣としては忠臣とよばれいづれによき士となりて、善人の品に入候ほどの事はなり申べく候。必す名を後世にあぐべく候。

一。來書略。三皇、五帝、三王、周公、孔子は同じく聖人と承候。伏羲は文字も教學もなき時に出給ひて、初て書をなし、天下後世道學の淵源をひらき給へり。然るに孔子は末代に跡あることを學

也。なをも愚民疑ひあらば、御くじをとりて神慮を御うかゞひ有べく候。訴訟は此方に道理あれば幾度も申ものにて候間、もし一二度にて御同心なく候はゞ、神の御同心被レ成まで幾度も御くじをとりてうかがはるべく候。かならず御同心有べく候。其外かくのごときたぐひの神慮に叶はざる事を、神慮として人の尊きを以て禽獸にかふる樣なる事多く候。

一。來書略。無學行レ政、如三無レ燈夜行一といへり。しかるに貴老學者の政は心得がたしとの給ひ、又其筋目ある人か其備りある人よしと承り候は、心得がたく候。

返書略。政の才ある人を本才と申候。其人に學あれば國天下平治仕候。本才ありても學なければやみの夜にともし火なくして行がごとくにて候。然れどもありきつけたる道なる故ありき候。されど前後左右を見ひらきて自由のはたらきはならず候。又才知なくして學ある人の政をするは、盲者の晝ありくがごとくにて候。聞たるまゝにありき候へども、不二分明一候。時所位の至善をはかるべき樣なく候。不自由にしても、みづから見てありくと見ずしてありくとは、見てありくはまさり可レ申候。軍法をしらでも、勇知ある大將は、をのづから勝負の利に通じ候故に、敵に逢て勝ことをいたし候。軍法しりても、勝負の利くらき大將は、敵に逢て爭方なく候。勝負の利よき人軍法を知候はゞ。名將たるべく候。軍法しらでは名將とは成がたく候。才と學との道理同事に候。古今のためし明白なる事に候。

一。來書略。經書をよみ候はでも學問なり候と承候。左樣に候はゞつとめて見申度候。書をよまず

人みな悪人不正なりとも、吾聖學にをいてうたがひなかるべし。たゞ己が定見いかむとみるべきなり。人によりて信をまし信をおとし給はむは、道をみるの人にあらず。

一。來書略。世に判官贔負と申候は、いかなる事にて候や。

返書略。君子に三のにくみあり。其功にほこり賞をうくるとおほき者をにくみ、富貴にして驕る者をにくみ、上に居て下をめぐまざる者をにくむ。判官義經は其人がら道をしらず、勇氣によりて失ありといへども、大功ありて賞をうけず、人情のあはれむ所なり。賴朝卿福分ありて天下をとるといへども、不仁にして寛宥の心なし。人情のにくむ所なり。賴朝、判官にかぎるべからず。驕は天道の虧所、地道の亡す所、人道のにくむ所なり。謙は天道のます所、地道のめぐむ所、人道の好む所也。

一。來書略。我等の在所に、蛇を神の使者なりと云て、手ざすこともせず候。さま〲氣のどくなる事共に候。其上害も出來候。され共其通にしたがひ候はんか。やぶり候はんか。分別定がたく候。

返書略。神慮にしたがひて非法を改めらるべく候。神は形なき故に、時にあたりて何になりとものりうつり給ひ候。蛇を使者と定べきにあらず。且蛇は藪にすむものなれば、人居にまじはるは非道にて候。神明は非道を戒給ふべく候。蛇のすむ深草に用心もなく行て害にあふは、人の非なり。人のすむべきあたりに蛇のをるは、蛇の非にて候へば、藪にかりやり行ざるをば打ころして可

一。再書略。愚兄事被ニ仰下一候通尤に存候。去ながら愚兄に姑息の愛なりとも御座候。作法あしく不仁無道にて下をなやまし民をくるしめ候人に、子孫もさかへ仕合よきあり。又きはめてよき人も仕合惡く候事はいかゞ。

返書略。人の氣質に、天地神明の福善禍淫をうくる事。おそきありはやきあり。しかのみならず先祖の造化の功を助たるあり、さまたげたるあり。運氣の勢ひ餘寒殘暑あるがごとし。先は聰明の人には、善に福はやく惡に禍すみやかなり。愚不肖には善惡に禍福をそし。平生物の合點の遲速にてもしられ候なり。先祖の造化の神工を助たる勢ひいまだやまざるには、子孫あしけれども仕合よし。先祖の造化を妨たるは、子孫よけれども其逆命の勢ひいまださけがたし、打身頭痛の病ある人は、土用、八專、雨氣を感ずるがごとし。これより下つかたさま〴〵のことはり候。をしてしらるべく候。

一。舊友にあたへし書に曰、故者には其故たることを不レ失といへり。久しく音問を絶たるは無情に似たり。傳聞貴老道德の勤にすさみ給ふと。道をいとひて愚をうとみ給ふか。愚を見おとして道をおこたり給ふか。道學を益なしとて道德を好む者までをしりぞけ給はゞ、是非に及ばず。もし愚を不肖なりとして道學に遠ざかり給はゞ、あやまちなり。故者の至情を思ひ給はゞ、何ぞ愚が過をさとし給はざるや。さとしてしたがふまじくば、愚をすてゝ道德を尊信し給ふべき事は、本のごとくたるべし。何人によりて道の信不信あらん。聖人の門にあそぶ人ならば、天下の聖學をする

以て二にせず。又死後をまたず。

一。來書略。世間に人のほむる人に、さしもなき道を信ずる人はいかゝ。

返書略。それはよきことすきといふものにて候。定見なき故に本の邪正を深く考へず。心術をかり理をかりてさもありぬべくいひなせば、はやよき事として信じ候也。君子もよきことすきにては候へども、性命に本づきて善を好候なり。かり物は是にいたるの非なれば、大に戒られ候。

一。來書略。愚兄御存知のごとく、作法正しく慈悲にも候へども、子孫おとろへ仕合あしく候は、いか成故にてあるべく候や。

返書略。人見てよからざれども、天の見ことよきあり。人見てよけれども、天のみることよからざるあり。貴兄を見申候に、愛情もありと見へ、行儀は隨分正しく候へども、作法の正しきは生付にて學によらず、愛情も婦人の愛にて人民をめぐむに至らず候。すくはずしてもくるしからざる者にはほどこし、下々の難儀をば見給はざるがごとくに候。百姓等をば水籠に入などして、病付たる者どもあり。罪なきのみにあらず貴兄を養ものを却てくるしめられ候。其妻子の歎き、不罪の人のいたみ、天地神明をうごかすべく候。しらずといはば其天職をわすれ天威をつゝしまざるなり。知てせば不仁なり。大小によらず罪は上一人にかゝり候。今の世の習、下々をば難儀させ百姓をばいたむるものと思ひてとがむる人もなく候。たゞ行儀よきと姑息の愛とをみて人はよしと申候へども、天の鑑明らかに候。神明の罰にあたり、仕合あしきとはりにて候。

集義和書卷第三

書簡之三

一。來書略。性心氣いかゞ見侍るべきや。

返書略。太虛は理のみ也。いへばたゞ一氣なり。理は氣の德なり。一氣屈伸して陰陽となり。陰陽八卦となり、八卦六十四となる。それよりをちつかた、一理万殊いひ盡すべからず。天地万物の理つくせり。理を主としていへば、氣は理の形なり。動靜は太極の時中なり。吾人の身にとりていへば、流行するものは氣なり。氣の靈明なる所を心といふ。靈明の中に仁義禮智の德あるを性といふ。靈明と云て氣中別にあるにあらず。たとへば爐中の火のごとし。虛中なる所に至て明かによく照せり。明かによく照す所に條理あり。

一。來書略。身死して後、此心はいかゞなり候や。

返書略。冬に至ては夏の帷子をおもふ心なし。夏に至ては冬の衣服を思ふ心なし。此形あるが故に形の心あり。此身死すればこの形の心なし。

一。來書略。しからば顏子の死後も盜跖が死後も同きか。

返書略。此性此形を生じて、形のために生ぜられず。又形の死するが爲に死せず。惡人の心には今よりして性理をしらず。死後を待べからず。君子の心は今よりして形色に役せられず。死生を

福にして、禍福は人の陰陽なり。屋の南面は夏凉にして冬温かなり。北面は夏熱くして冬寒し。人の南面は我北面となる。屋を並べ生をともにして世にすむものゝ自然の理なり。富貴、福澤、貧賤、憂戚相ともなふ世の中なり。誰をかうらみたれをかとがめむ。

集義和書卷第二終

返書略。これも又時なり。いつもさやうにあるべからず。たま〳〵事なきの折ならん。天子は天下を順にし給ふが親の事なり。諸侯は其國をよく治るが親の事なり。大夫は政事を任じて私なきが親の事なり。士は尊ニ德性一道ニ問學一が親の事なり。農は天時をあやまたず地理を精して五穀生長するが親の事なり。工は職を上手につとめ商はよく財を通するが親の事なり。其事にあたつて其事をつとむるは、皆親につかふまつるの事なり。時としていとまあらば、父母のあたりに侍らでも叶はす。吾身もと親の身なり。吾立レ身行レ道、皆親の立レ身行レ道なり。千里を隔といへども父母にははなれず。

一。來書略。論語の首章。文理あらまし通ずといへども、心にみたざる所あるがごとし。

返書略。說は自家の生意なり。境界の順逆によつて損益なし。樂は物と春を同す。一躰の義なり。不レ慍はたゞに吾德を人の不レ知といふのみにあらず。忠臣を不忠といひなし、直を不直といひ、信を不信といひ、しかのみならず流罪禁獄死刑におよぶの逆も、不レ知の內にあり。泰然として人をも尤めず、天をも怨みず、炎暖に霍亂して死するがごとく、極寒に吹雪にあひたるがごとし。天道の陰陽人道の順逆其義一なり。悅樂は順也。人不レ知は逆なり。人生の境樣々ありといへども、順逆の二にもれず。小人は順にあふては奢り、逆にあふては悲しむ。春秋を常として夏冬なからんことをおもふがごとし。君子は順にあふては物をなし、逆にあふては已をなす。春夏にのびて秋冬にをさまるがごとし。富貴福澤は春夏の道なり。貧賤患難は秋冬の義なり。四時は天の禍

やうにと願ひ候なり。老親笑て云、用にはたゝずして人をつかふのみならず、色〳〵の好みごとをせり。我ほどの貧乏神はなきに、福とは何としていふぞと。子の曰、むかしより今に至るまで、色々の願をたて難行をして神佛に祈るもの多く候へども、福を得たる者一人もなし。親に孝行にて神の福をたまはり君のめぐみを得たる者は、倭漢共に多く候。しかるに目の前にしるしある家内の福神には福を祈らずして、しるしもなく目にも見えぬ所にいのり候。親に孝行をして福を得ずとも害あらじ。神佛に祈りて福を得ざるのみならず其損多く候。今我福神にひがみ給ふ御心ある故幸なきにやと、顔色をやはらげて云ければ、其時老親うちうなづきて得心しぬ。それより後僻もやみ、いかり腹たつ事なし。家内のものもつかへ能成ぬ。

一。來書略。庶人の父母には、男女の侍坐してつかふる者なき故、子たる者夫婦みづから養を取候。たま〳〵一二人男女のめしつかふべきありといへども、農事を務め食事にかゝりなどすれば、近づきつかふべきいとまなし。其上定りたる祿なき故に、用を節し身をつゝしみて父母をやしなふを以て孝とすと御座候。士大夫より以上の人は定りたる祿あれば、養ふことはいふに及ばず。また卑妾あれば、朝夕の給仕の心やすきこと子にかはる故に、つかふるにも及ばず。其身の位々に道を行ぬれば、父母の養ひも備り、父母の心安して氣遣もなし。且祭祀にをこたるとなし。是故に職分を務るを以て孝行とすとうけたまはり候。まことにさやうになくて不レ叶事と存候。しかるに文王みづから父母につかへ給ふがごとくなるはいかゝ。

を入より誠敬自然と立て心新なり。社前に至て拜する所に傳受あり。此心をだに存養いたし候へば家ごとに孝子國皆忠臣と成て天下平なり。所々に勸請なくて不ㇾ叶義と存候はいかゞ。

返書略。たとへば洛陽にては賀茂の御社一所にても、人の敬を立ることはたり候べし。むかしは數々の勸請なかりし證據とも候。其勸請の習おほく候はゞ、さしも天下の奢をきはめし平清盛、藝州の嚴島をばとく都のあたりに勸請しておびたゞしく義を盡さるべく候へども、はる〳〵と西海までまうでられしこと、清盛には奇特なり。いにしへも原廟を作るとて大にいみたる事なり。其後昔たまさかに原廟を作れるも、靈地を見たてゝ移し、卒爾にはせさるだに、非禮おほく候。其後は靈地をも撰ばず、みだりに多ければ、神を汚し威をおとし、敬するとて大なる不敬に至り候故、佛家を以ても御覽候へ。塔は佛舍利のある所を知て禮拜の心を生ずべきがためなりと申候へども、むかし山林にある伽藍にたまさかにあるこそ、さもあるべく候。今は町屋と爭ひ建ならべたる塔なれば、目なれてむかしたま〳〵ありし僧法師の敬禮の心も絕はて候。其上聖人の敎は、其親を祭て敬の本を立候。親の神すなはち神地と一躰にて候。性命より見れば至尊の聖神なり。他に求べきにあらず。むかし老ひがめる親もちたる者あり。ある時子に向いひけるは、手足もたゝずしてかく養はるゝは、この家の貧乏神なり。はやく死度おもへ共、つれなき命なりと。其時子跪き愼ていへるは、家家の福神は父君にておはしまし候。つかふまつること誠うすき故に福いたらず。しかれどもかくおはします故にこそ、とかくして妻子おも養ひ候へ。たゞいつまでもおはします

び邪術もおこらず。天道にも叶ひ、親にも孝あり、君にも忠あり。たゞ時所位の異なるなり。それ天子に直にもの申奉る人は公卿侍臣のともがらなり。それより下は次第のつかさ〴〵ありて、可ㇾ奏ことは其つかさに達するなり。まして士民などは其御門内の白砂をふむことだにせざるに、帝堯は皷をかけおかせ給ひて、農工商によらず直に可ニ申上一子細あらば此皷をうて吾出て聞むと詔あり。下にてことゆかずいきどほりある者は、皆直にまいりて其いきどほりを散ぜしなり。民の心にたゞ父母にものいふごとくおもひたり。日本の太神宮御治世の其むかし神聖の德あつく、よく天下を以て子とし給ひ下民にちかくおはしましたること堯舜のごとくなりし、其遺風なり。後世の手本として茅葺の宮殿の殘り給ふも同じ理にて候。其上神とならせ給ひては、和光同塵の德にて帝位の其時とは違ひ、國の風俗にて誰もまいりよき道理にて候。野拙はたゞ其聖神の德をあふぎ奉るばかりなり。太神宮は御治世のみならず、万歳の後までも生て不息の德明かにおはしまして、日月の照臨し給ふがごとし。參りても又おもひ出しても、聖師にむかひたるがごとく、神化のたすけすくなからず。古の聖王は君師と申て尊きとは君なり、親しきとは師なり。たゞ聖王のみならず靈山川のほとりに行ても、道機に觸るの益すくなからず。これ又山川の神靈の德に化する故なり。其上祈ると祭ると義ことなり。天をば天子ならでは祭給はね共、祈るに至ては士庶人も苦しからず。其ためしもろこしにも多し。

一。來書略。先度勸請の宮社を非禮なりとうけたまはり候へ共、神道の意はしからずと存候。鳥井、

きか、また怒氣のためにをかされてし出す事に候。しかれば人爲の禍にて、命とは申されず候。行かゝりたる人は何心もなく候へども、友の難を見てはすぎられぬ義理にてすけ太刀したるにて候へば、うたれても其人のあやまちにあらず候。これこそ誠の命あることゝ可ㇾ申候。死すべき義理なくて我あやまちにて作出したるは、喧嘩によらず命にてはなく候。義ありて死するはこれ命にて候。是を以て君子は巖墻のもとにたたず候。

一。來書略。祭ることはそれ〲の位にしたがふ事と承候。天地三光天下の名山大川は天子これを祭給ひ、其國の名山大川國に功ありし人をは諸侯これを祭給ひ、聖賢をば其子孫をたてて祭しめ給ふ。大夫士庶人各品あり。しかるに日本にては、上下男女ともに天照皇太神へ參り候。天子の外は國主とても成まじき事にて候に、非禮なるかと存候。しかるに貴老其非禮にしたがひ給ふ事は心得ず候。

返書略。もろこし人の禮あるの外には神を祭らざることとは、利心を以て神を汚すことを禁じ且邪術をしりぞけたり。しかのみならず罪を天に得ては祈るに所なき道理をおかし、情欲の親につかふるまどひを解て、人々の親すなはち至神至尊なり、尊神の子なれば、わがみ則神の舍にして、我精神則天神と同じ、義禮智は天神の德也、したがつて行は常に天につかへ奉るなり、其禮を用てまつれば福あり其道にそむきてまつる時は禍至るの義なり。日本は神國なり。むかし禮儀いまだ備らざれ共、神明の德威嚴厲なり。いますがごとくの敬を存して惡をなさず。神に詣でゝは利欲も亡

ㇾ存候。又志なくて行儀よき人も、隱微の所しろべからず。去ながら父母兄弟妻子を古鄕におきたる人は、一旦他國に遊び候へども、終には古鄕に歸るがごとく、隱微の地とかく惡道にはゆくまじき人ゆゑ、善に實なる所あらば、道に志ありて一旦形氣の欲にひかるゝも、終にはもとに歸るべく候。形氣衰るにしたがひて、道より外にゆく所は有まじく候。志の不實と申にてはなし。實はあれども明のしばし蔽はるゝ所ありてなり。唯今飮食男女の欲もうすく行跡よくても、心志の定所なき人は、父母兄弟妻子のあつまりたる古鄕なくてたゞひとり身のうきたるごとくなり。しからば往々何國にとゞまるべきやらん、はかりがたし。今日のよきは、精力强くして愼みの苦にならざるか、名根の深くてなすわざか、もしは生れ付て形氣の欲うすき者もあれば、其たぐひなるべく候。形氣おとろへ行にしたがひて、本の志たる道德はなし心は昧し、おちきなくして後世などに迷ふもあり。愼みおとろ　て亂るゝもあり。行過て異風になるもあり。一旦のよきはたのみにならず。月夜のしばし曇たると闇夜の晴とのごとし。雲ありともたのむべし。雲なしとも賴むべからず候。

一。來書略。此頃爰元にて友の喧嘩仕出したる所へ行かゝり、見すぐしがたくてすけ太刀いたし候處に、先の者多勢故に兩人ともにうたれ申候。本人は定業とも可ㇾ申候。行かゝりたる者は無二是非一事に候。非業の死たるべく候や。

返書略。定非の事は不ㇾ存候。總して喧嘩はよき武士はせざることに候。大かた禮儀のたしなみな

られ候。武士は相たがひの事にて候へば、おしへて師ともならず恩ともせず、國のため天下のため武士道のためなれば、器用なる人にはいそぎおしへたてられ候。習ふ人〻其恩を感じて忘ざるばかりなり。醫者出家などのごとくに師弟の樣子はなく候。たゞ本よりのましはりにて、志の恩をよろこびおもふのみなり。我等道德の議論をしてあそび候心友も、又かくのごとし。心友なるが故にたがひに貴賤をば忘るゝ事に候。全く師と不ㇾ存、弟子にてもなく候。我等學問仕らざる以前より、常の武士にて奉公いたし居申候故にこそ、右のごとく人々にものがたりも仕候。もし牢人にて學問いたし、學問の名を以て奉公によび出され候はゞ、罷出申まじく候。似合敷武士の役儀を勤る奉公ありて、其上にはくるしからず候。今時歷々の武士の奉公に出らるゝも同前に候。武藝のあるは其身の嗜にて、よのつねの奉公人にて、其上に志の相叶てかたり候人に、おぼへたる事をおしへらるゝは、くるしからざる事なり。はじめより藝能をおもてにしては、歷々の武士は出られず候。一向に物讀と成て出るか、武藝者と成て出る事は、又一道にて候。心法は五等の人倫の內々に用る身のたしなみなり。武藝は武士の役儀の嗜にて、其嗜にする人の內にて勝れたる人の手本となるまでに候。手本とはならでも功者なるものは、器用なる人を取立候事も候。

一。來書畧。道に志ある者の、時として飮食男女の欲にうつるとあるは、志の實ならざる故ならんか。又道に志なくても行儀よき者あり。先生いづれをかとり給はむ。

返書畧。心は無聲無臭のものに候へば、見がたき事に候。志ありといふ人も、隱微の地の實不實不

に諸人ほめ申候。善人は其疵は見候へども、玉のきずにして大躰よく候へば、其よき所ばかりほめて疵をばあげず、こゝを以て世擧りてほむることはり尤に候。しかれども其疵は終に弊あるものなる故、諸人のためにもそしらるゝ事出來るものなり。はじめより其疵なければ、小人のためにはそしらるゝにて候。全く君子なれば、全く小人のためにはあはざる事多し。其誹は君子の美にして疵にあらず。其人にあらざれば此二の道を知るべからず候。

一。來書略。我等の國には江西の遺風をしたふ者餘多候へば、貴老御弟子の内一人申入度存候。

返書畧。拙者には弟子と申者は一人もなく候。師に成べき藝一としてなき故にて候。醫者の醫業をならひて一生の身をたつるか、物よみの博學を學て物よみを産業として一生をおくるか、扨は出家などの其宗門をつぎて寺を持などするは、をのづから師弟の契約なくて不ㇾ叶事に候。拙者は麁學にて、人に文字讀にてもはか〴〵しくをしふべき覺悟なく候へば、何にても人の一生をおくるたよりになるべき事を不ㇾ存候。少し文武の徳に志ありて、聖學の心法を心かけ候へども、自己の入徳の功さへおぼえなければ、まして人の徳をなし道を達して門人あらんとは、おもひもよらぬ事なり。世に愚がおよばざる才力あり氣質の徳ある人々の志の相叶たるは、かたりてあそび申候。其人々愚が少し心がけたる心法をたづねられ候へば、ものがたりいたし候。高をする者の丘陵によるごとく、美質故に少し聞れても愚が多年の功に勝り候へば、かた〴〵以て皆益友に候。武士の歴々弓馬の藝をおしへらるゝも同事に候。先へ學て功者なる人は、あとよりならふ人におしへ

おもひの外常の我意出ざる故、なみ〳〵にても目に立申候。龍といふものは。羽なくて天にのぼるほどの陽氣の至極を得たるものにて候へども、平生は至陰の水中にわだかまり居候。是を以て眞實に武勇の心がけある人は常々の養をよく仕事に候。

一。來書略。儉約はよき事なれば、人々用たく存候へども、なりがたく、奢はあしき事と思ひながらも、やむることあたはずして、日々におごり候事はいかゞ。

返書略。儉約と吝嗇と器用と奢とのわきまへなき故にて候。儉約は我身に無欲にして人にほどこし、吝嗇は我身に欲ふかくして人にほどこさず。器用は物をもとめずたくはへずあれば、人にほどこしなければなき分に候。奢はたくはへをかず器用なるやうに見え候へども、其用所はみな我身の欲のため榮耀のためにて候。奢て用たらざれば尤人にもほどこさず。しかのみならず家人をくるしめ百姓をしぼり取、人の物を借てかへさず、商人の物を取て價をやらず、畢竟穿踰に同じき理をしらで、奢は器用なる樣におもひ、儉約といへば吝嗇と心得候。又吝嗇なる者の儉約の名をかるもあるゆへにて候。

一。來書略。同志の中に、世擧りてほむる人御座候。流俗にあはせて然るにはあらず。しかれども本來は、よき人にはよくいはれあしき人にはあしくいはるゝこそ、眞のよき人にてあるべく候へ。されどすぐれてよきをばなべてよく申ことはりにてもあるべく候や。

返書畧。此人の人がら十が八はよし。二とても惡きにはあらず。たゞ此人の疵なり。其疵ある故

ちんこそ、天性の仁愛なるべけれ。明心の靈をふさぐ事品異なりといへども、其おほふ所は一なり。世俗は物欲のちりを以てふさぎ、學者は見識を以てふさぐもの也。其見至所に近きがごとくなるも、其傳來のよる所天に出ざるは、終に正道をなす事なし。道の行はれざる事かなしむべし。

一。來書略。陽氣に我意なる者は、軍陣にてよからぬと申説候。又利害かしこき者は、武篇鈍きと申候。强弱の見様ある事にて候や。

返書略。加藤左馬助のの給へる由にて承候。諸士の武篇に目利あり。たゞ理直なる者。大かた武篇よきと心得べしと。又越後の景虎のの給ひしは、武篇のはたらきは武士の常なり。百姓の耕作に同じ。武士はたゞ平生の作法よく、義理正しきを以て上とす。武篇のはたらきばかりを以て知行をおほくあたへ、人の頭とすべからずと。名將の下に弱兵なき事なれば、大形士は武篇よき者とをぼしめさるべく候。陽氣に我意なるものとても、臆病なる生付にてはなし。たゞ習にて何心なく、其身にはそれをよしとおぼえての事にて候。理直なる者にうは氣をしかけぬれは、常ならぬ事故堪忍不ㇾ仕候。其時におもひかけぬ事にて行あたり、躰見苦候。又分別だてにて利害おほき者は、常に義理を心かけざる故に、自然の時義理をかき候へば、臆病とも申候。陰極て陽を生じ陽極て陰を生ずるなれば、平生陽氣なる者は陣中にては腹立てなすべき所にもあらず。弓矢鐵砲の音にてうかびたる陽氣は皆けとられ、常々臍の本にたくはへたる勇氣のたしなみもなければ、

思へり。されば高明の人はおほく佛に入仙に入、道家も後は天仙の旨を失て地仙に落たり。是も又心法を絕す。たゞ佛者のみ心法をいへり。これによりて佛法を內といひ儒道を外といへり。

一○來書略○此ほどおもしろきむかし物語を承候○明慧と解脫と同道して路次を過られ侍りしに、かたはらに金銀多くおとし置たり。解脫是を見て、こゝに大蛇ありとてよけて通り、四五町行すぎて又云、先の物に定て他人見つけたらば悅びて取べしと○明慧云、おもきにこゝまで持來給ふやと○解脫の心は、鬼よ蛇よなどいひて、人を害するものありとはいへども、見たる者なし、金銀に命をとらるゝ者は、眼前に數をしらず、誠の大蛇なると云義なり。このたぐひの見解を以て、世俗のまとひを出たるものなり。明慧は金銀も石もかわらも同じく見なして、とかくの見解なし。誠にはるかに高き心地にて候。聖賢の心位と申すともかはりあるまじきと存候。

返書略。兩僧の內にては心位の淺深ありといへども、聖學よりみればいづれも見解にて候。心地自然にして物なしとは申がたかるべし。柳はみどり花は紅と、それ〳〵に物の輕重は輕重にして置て我あづからざるぞよく候。金銀と土石と同じく見るといふも、見解を以て作りたるものなり。無物自然の心にて見侍らば、我こそ金銀はいらずとも、世間の人の寶とし世をわたり人を養ふ物なれば、これをおとしたる者は、主人のものか人の使か其身の一跡か、人によりて身代をやぶり命を亡すにいたるべきは不便なる事なり。大かたの人見付なば、悅び取て我物とすべし。我等の見たるこそ幸なれとて、ひろひて近里のしかるべき者に預置、おとし主にかへすべきはかり事あ

返書略。形色あるものは皆無より生じ候へば、有無もと二にあらず。中と云は天理の別名なり。有無に對する中にあらず。堯舜はじめて易の心法を發明し給ひて中と名付給へり。則天下國家の平治齊とても、中の外無二一心一無二一道一。天理の我にありて未レ發これを中と云、天理の我にありて已發これを和と云。脩身、齊家、治國、平天下は已發の和也、則中なり。物の天理の至精を得て至易至簡なるを中と云、則和也。佛氏といへどももと有無を二にせず。色即是空これなり。聖學といへども有無中を別にせず。形と色とは天性なりと。佛氏といへども、有無の中にはとゞまらず。佛書云、心性不動、假立二中名一、亡泯三千、假立二空稱一、雖レ亡而存、假立二假號一。道者といへども無にかたよらず。後世の奢をとどめ僞をひらきて、太古朴素淳厚の風をかへさんとおもへり。佛仙共に聖學の徒也。語も理もいづくより取來らんや。儒には聖學の傳來明言を失ひて、かへりて仙佛にのこりとゞまること多し。先天の圖を仙家に得たるにて得心あるべく候。本聖人の門より出たることをわきまへず、仙佛のいふ事なれば皆異端の語としていみさけぬ。彼も聖門のよきことならでは取用ひず。三代の禮樂も浮屠にのこれることあり。人道にはかへりて戰國の久しかりし間にとり失ひたると多し。されば聖學の至言はみな異端にあたへて、儒は土苴を取ぬ。すべて道德の高下淺深を論じ、語の似たるをあはせて同異をいはゞ、盡る期あるべからず。内典、外典の名は佛者よりいふといへ共、實は儒者のまねく處なり。秦漢よりこのかた、士君子たる人道統の傳を失ひて、執レ中の心法をしらず。道德はなはだくだれり。故に儒者の道はたゞ如レ斯ものと

て、邪氣其香におそるれば、邪氣をはらはむとなり。ひいら木をくはふる事は、世俗鬼の理をしらでなしたる事か。鰯のごとき理のあるか。いまだしらず候。

一。來書略。今時なま學問する人は、ものをやぶる樣に被ㇾ申候。世中のわけもなき事をやぶるは尤にて候へども、何をもかおも理屈にておし候へば、神道も王道も立ざる樣に成行候。無の見と申あらき異學の風のごとし。いかゞ。

返書略。古今異學の悟道者と申は、上古の愚夫愚婦なり。上古の凡民には狂病なし。其悟道者には此病あり。先地獄極樂とてなき事をつくりたるにまよひ、又さとりとてやう〳〵地獄極樂のなきといふ事をしりたるなり。無懷氏の民には本より此のまよひなし。是を以てさとり得てはじめてむかしのたゞ人になると申事に候。たゞ人なればせめてにて候へども、其上に自滿出來て、人は地獄に迷ふを我は迷はずとおもひぬれば、地獄のなきと云一事を以て、何おもかをもなしとていみはばかる所なく候。儒佛共に世中に此無の見はやりものにて候。

一。來書略。佛敎を內典といひ儒敎を外典と申候事は、心を內といひ形色を外と申侍れば、佛敎は心法なり儒敎は外ざまのことをき法度なりと申儀にてあるべく候。又儒道佛の三敎は有無中也。いづれにも靈妙なきにはあらざれども、つかさどる所、儒は有相の上の道也、道は無相を至極とせり、佛は中道也、有無中かねて機によりて說といへども、畢竟は中道實相に歸着すといへり。いかゞ。

の官位にか加ふべき。我に天下をゆづらむとは人の代官をせよとか、二度此事をきかじとて耳をあらひしものなり。何の苦勞なくたまはるとも、國も天下も所望になく、君子は故なきの利を禍とす。國天下は道を得て持は、大安也大榮也。道なくて持は、大危也大累也。これ有は是なきにはしかず。天災人亂及ては匹夫たらんことを求れどもまぬかれずといへり。この故に先祖より受來りたる國天下をかろくおもひ、我欲のために失ふはひがと也。聖人の大寶を位といひて、富貴なくては萬民をすくひたすくる事なりがたし。受けきたり候天下ならば、仁政を行ひ天下を安靜ならしむるを樂しみとする儀にて候。義もなくてもとむると、我にあるものをかろくしてすつると同じく無道の至に候。夫利欲の人は、天威のをす處にてかなはざればこそ臣となりてかしこまり候へ。勢ひだにあらば大かた主君をも失ひ申べく候。是以漢高祖は我頸をねらひたる者を知ながらたてをかれ候。人情をしりかつ天下の歸する所は人力に及ばざる事を得心ありたる故にて候。

一。來書略。節分の夜、大豆をいり福は內鬼は外へといひ、鰯のかしらをやきて戶口にさしなど仕候事は、ゆへもなき世俗のならはしと存候。然ども俗にしたがひ可レ申候や。

返書略。秋冬は陰氣內に有て事を用ひ陽氣外にある故に、立春の旦より陽氣內に入て事を用ひ陰氣外に出るのかはりめなり。されども餘寒甚しき故に、大豆をいりて陽氣を助け、屋のすみ〳〵までも陰陽のかはりを慥にしたるものたるべく候。鬼は陰なり。今宵より外に出るなり。神は陽なり。神は福をなす。今宵より內に入て萬物を生ずるなり。鰯は衆を養ふ物にて、仁魚なるに依

れども夜のやすみ極りぬれば晝の勞をおもひ、晝の勞極りぬれば夜の休をおもふ。死生勞安に時なり。たゞ造物者のなさむまゝなり。私意を立て好惡すべからず。狂者は凡人の生をむさぼり死をにくむの迷をたむべきがために過言あるものなり。其見所天人陰陽の外に出たり。聖人もとより此心なきにあらず。しかれども中行はくはしきが故に其見をわすれ、狂者はあらき所ありて見をわすれず。大智は愚なるがごとし。物あれは則あり。聖人は道と同躰なり。天地萬物の則なり。何ぞ見解を立て物理をやぶらんや。しかれども狂者の心も又よみすべし。

一。來書畧。拙者在所に人相を見ものあり。何とぞ本ある事にて候や。

返書畧。本ある事にて候。相書云、悪乃禍之兆、善乃福之基、とあり。これ相の極意にて候。

一。來書略。拙者在所に氣逸物なる者あり。知行二百石の身上なりしが、死期にのぞみて其子にいふやう、天下はまはり持なるぞ油斷すなとて相果候。天下の武士たる者此心なきはふがひなき様に申者あり。然ば無學の人は臣にしてもたのみがたく候。勢ひのをよばぬ故にこそしたがひつかゑ候へ。とりはづしてはみな主人をも失ひ可ㇾ申候や。

返書畧。天下の武士の心はしらず候。惣じて天下は父祖より受來りしならば是非に及ばず。好てのぞましきものにあらず。國郡も又同じ。野拙はをそれながら大樹君を代官とし奉り、治世にゆる／＼とすみ侍ると存候へば、かやうのありがたき事なく、萬萬歳といはひ奉り候。貧は士の常なれば、樂しみこれに過べからず。許由か耳を洗し心も、堯帝を代官として山水をたのしむは、何

きところは見えざるあり。是はすぐれたる大きれものにて候。沉勇も又如レ此し。此の品々はさしおきて、武士たる者はなみ武勇あるべきことはりのものにて候。刀はみなきるゝ能あるものなり。柄鞘して金銀糸を以てかざり、はやからずおそからずよきほどにつめてさすものにて候。武は文を以てかざるべき理なれば、勇は仁を以ておさめて、平生は禮儀正しく仁愛ふかきがよく候。刀脇指のはやきは、自然の時の用までもなく、身のあやまち近きにあり。貴方の勇氣に小脇指のはやき様に候。間よきほどにつめて御さし可レ被レ成候。其上勇力にほこるものは損多く候。其善を有すればその善を失ひ其能に矜れは其功を失ふとは、古人の格言なり。勇だてする者をば人がにくみて少々の手柄ありてもほめず、かへりていひけし候。扨何事をぞかまへて越度あらせんとし、又すぐれたる手柄ありても大身になりがたきものに候。されば常に敵多くてやすき心なく候。むかし三十年、甲冑を枕とし山野を家として度々高名あるのみならず、武道の事功者なる者ありき。若きともがら打寄ては、此老人を請じまうけ、武道の物語をきゝ候處、其人のいへるは、吾は人のいふほどの手柄もなし。わかき時より愛敬ありて、人に愛せられたる者也。この故に世に高名あり。武篇の極意は愛敬なりといへり。何事も至極にいたれば道に近く候。

○來書畧。生は天の吾を勞するなり。死は造物者の吾を安ずるなり。狂者の親の喪にあふてうたふ道理なり。みづからの死生をおもふ事尤同じと。しかれば生をにくみて死を好とも可レ申候や。

返書畧。勞安の義二つにあらず。晝夜を以て見給べし。夜はいねて安く、晝はおきて勞す。しか

人たるべく候。頼朝卿の末のおとろへは歌鞠の罪にあらず。其本の不レ立故なり。本たゝざれば武道の心がけに過て亡たる家も、和漢共にあまたあれば、これは武道の罪と可レ申候や。本をすてゝ跡にて論ぜば、はてしあるべからず。鞠は親王門跡などのれき〳〵、武士のやうに鷹がり歩行もなりがたく、輿車の御ありきも度々なりがたければ、門内にばかりおはしまして氣血欝しとゞこほり給ふ欝散に、鞠など御あいてだにあしからずばくるしかるまじきか。それとても學問家業つとめ給ひし上に、御養生のためならばしかるべし。いづれにてもあそびを專として本なきは、あしき事にて候。

一。來書略。勇は沉勇がよきと承候。されど刀もかねよきはうちみるよりきれぬべく存ぜられ候。人の武勇も强弱如レ此と存候。尤沉勇もあるべく候へ共、それは百人に一人にて、大かた見聞の及所たがはざるかと存候。

返書畧。まことに刀のきるゝときれざるとは、かねにて見ゆる事に候。むかしは今の樣にためしものと云事まれなる故に、たゞ自分の目にてかねよき刀を目利して求めさしたると申傳し也。我等もそれに心付て見習候へば、大かたあたり候。かねのきたひよく精神あるがごとくはきとしたるはきれ申候。かねかたくても精神なく石のごとくなるや、鍊たるやうにてもやはらかににぶきはきれず候、此善惡は少し心づきぬれば見申候。又大かたにては見えがたきかねあり。にぶきに似てどみたるやうにてさはなく、空の曇りたるかことく淵のふかきがごとくさへ〳〵ときたひよ

得なり。其わきまへもなく、武道武藝もきらひにて、やはらかにくらす便利のために無事を好めるは、しなこそかはれうは氣に何事ぞとねがふ人に同前たるべく候。よき武士といふは、あくまで勇ありて武道武藝のこゝろがけふかく、何事ありてもつまづく事なき樣にたしなみ、さて主君を大切に思ひ奉り、自分の妻子より初めて天下の老若を不便にをもふ仁愛の心より、世中の無事を好み、其上に不慮の事出來る時は、身を忘れ家をわすれて大なるはたらきをなし、軍功を立る人あらば、一文不通の無學といふとも、文武二道の士なるべし。世間に文藝をしり武藝をしりたる者を文武二道といふは、至極にあらず。これは文武の二藝といふべし。藝ばかりにて知仁勇の德なくば、二道とは申がたく候。

一。來書略。歌鞠は武士のわざにあらず。賴朝卿の次は鞠をもてあそびて亡び給ひ、其次は歌を好みてたえ給へり。惣じて武家の弓馬にをこたりて歌鞠をもてあそぶは不吉なりと申候。さもあることにて候や。

返書略。歌道は我國の風俗なれば、少しなりとも心得たき事にて候。されどもいにしへの歌人は、本ありての枝葉に歌をよみたるよしに候。本と云は學問の道なり。學問の道に文武あり。文武に德と藝との本末あり。文の德は仁なり。武の德は義なり。仁義の本立て後弓馬書數禮樂詩歌のあそびあり。弓馬書數禮樂詩歌は文武の德を助くるものなり。文武の道をよく心得て、武士をみちびき民を撫おさめ、其餘力を以て月花にも野ならず、歌をもてあそばれ候はゞ、花も實もある好

集義和書卷第二

書簡之二

一。來書略。武士たる者は、事あれがし高名して立身せむと思ふを以て常とおぼえ候。又事なきこそよけれ兵亂をねがふは無用の事と申者候へば、武士の心にあらずなどいひてあざけり候。いづれか是にて候べき。

返書略。いづれも非にて候。文盲にして道學のわきまへもなき武士は、せめて武道の心がけを第一として、只今にも事あらばと油斷せず高名せんとおもひ、疊の上にて病死するは無念なる事におもふも可也。しかれども浮氣にてさやうに思ふはひがことなり。我高名せんと思へば、人も又同じ心あり。死生二に一なり。それまでもなく、弓矢鐵砲の憂あれば、死は十にして生は一也。高名立身を望て事あれがしとねがふは、思慮すくなき事に候。十死一生をしらで理運に高名すべき樣に思ひなば、なりがたき勢を見てはをくれを取事もあるべきか。其上天下の人妻子等のなげきくるしみををもへば、たとひかならず命を全して高名をきはむとも、一人の小知行のために万人をくるしめ人のなげきをあつめて名聞利用とせん事、心にこゝろよからむか。仁人は國天下を得とても好ざる事なり。兵書に云、凡兵は過なきの城をせめず、罪なきの人を殺さず、人を殺して其國郡をとり貨財を利するは盜なりといへり。惡人ありて亂もいできよがし、高名せんと思ふは不忠なり。其上富貴、貧賤、盛衰相かはれり。如レ此のわきまへありて、兵亂をいとふはよき心

子なり。餅は陽物なり。故に先人身の陽を調て、天地の氣を助けんとす。陰陽相對する時は、陽を凌げり。君臣とし夫婦としても、君をなみし夫をかろしめ、やゝもすれば、陰の爲に陽を破る事あり。ことに微陽は純陰に敵しがたし。子とする時は、養育して生長せしむ。故に陽を亥の子といへるか。日本は東方なれども小國なり。陽の稱なり。是故に別して陽をいはひそだてんとする心にて有べきかと存候。

一。來書略。具足のあはせめは右を上にいたし候。具足屋に尋候へば、古來仕來り候へども其故を不ㇾ知と申候。

返書略。一たび戎衣して天下大に定ると書經に見え候。甲冑は戎狄の衣服にかたどれり。南西北の人は、衣服左まへにして袖なし。又戎は兵なり。戎衣はつはものゝ服といふ義にて候。はんや兵服の初は、戎服にかたどりて戎衣と名付。是によりて戎字をつはものとよませたるにや。ゑびすの服、つはものゝ服、兩義の中左まへと袖なきとにより候へば、ゑびすの服の義初たるべく候や。中國の人も、甲冑したる躰は戎狄の形に似候。戎衣なるが故に右をうへにするにて可ㇾ有と存候。むかし日本のよろひには、袖といひて別にかたに付候。是は矢をふせがんがためたてに用ひたるものに候。近世は鐵砲わたりて袖のたて益うすく候故に、次第に不ㇾ用候。異國の甲冑には本よりなきものに候也。

集義和書卷第一終

學者の非をいふことは多く、少しにてもよきことを有之分に、いひきかするものなく候。志ある者は默して居候より外の事なく候へば、日々ににくむ心はまさりて、中〳〵志は出來申まじく候。道德の義を得心すまじき人にてはなく候へども、貴殿、我等などよりは知慧おほく候。貴殿、我等も學者の名あらずば、一向の凡夫よりはまさりたる所もあるべく候へば、したしまるゝ事も候はむつれども、學者の名ある故にへだてと成候。同志の友も、世間の人の非をば見がちにて、同志の非は見ゆるし候。他人の非を見るは、何の用にも不立して、却てさはりとなる事なり。同志の非をよく見て、互に相助たき事に候。御同役の人も、貴殿の德次第にて、後には志も出來候べし。不行儀なる人はたのみなく候。此人は作法よく候へば、その身にさしはさむ事もあるまじく候。不行儀なる人は、他人のよきほど我身の惡にさはりぬるゆへ、いよ〳〵いみにくむものにて候。貴殿の御同役は、學者といへども我身の無學ほどもなきと思はれ候間、此方の德をつみ給ひなば、やはらぎ出來候なん。利發にて世情の心得よく候べければ、貴殿だにへだてなく同志と同じくもてなされ候はゞ、同志の人情をしらぬ人よりは、事の相談よろしかるべく候。內々あしく聞てにくむ心ある所へは、いかほどよき道理の書物を御見せ候とも、甲斐あるまじく候なり。

一。來書略。十月の亥の日を亥の子と申て、餅を作りていはひ申候事は、何としたるいはれにて候や。

返書略。和漢の故事候や、未知候。愚見を以て道理を辨へ候へば、十月は純陰の月にて陽なく候。亥の月の亥の日は、いよ〳〵陰の極りなり。陰極りて陽を生ずるものは母なり。生ぜらるゝものは

の事なり。史儒に文を學て、道理を知り道を行ひ德に入べきは、五等の人倫なり。故に今の史儒は、其職ひきゝがごとくなれども、其事は諸藝の中にをいて第一重し。貴殿文學に器用にて、他の事にはより所なし。天の與ふる才なれば、文藝を以て祿を受らるゝこと、何の害かあらむ。もし德を知たる人の文才ある者、貧きがためのつかへを求めば、史儒にかくるゝ事もあるべし。晉の陶淵明は酒にかくれたりといへり。市隱の類みなしかり。其職よりも身をたかぶるものは、心いやしければなり。其職よりも身をへりくだる者は、德たかきが故なり。今人德ありて儒者にかくれば、必ず其言ゆづり其身へりくだりて、道をあらはすべし。故に云、たかぶれは心いやしく、へりくだれは德高しと。ねがはくば德を好て儒者にかくれ給へ。今の人久しきあやまりを不知して、佛家道家などいふごとく、儒者をも一流の道者なりとおもへり。大樹、諸侯、卿、大夫、士庶人の五等の人こそ道者にて候へ。儒者は一人の藝者なり。世人弓馬の藝者を以て武篇者とはせず。武士たる人みな武篇者なるへきがごとし。此あやまり漢の代よりこのかたならん。五等の人倫の外に別に道者あるを以て異端とすれば、儒者佛者共に異端なり。貴殿周官に出たるむかしの儒のごとく、一人の役者となりて異端の徒をまぬかれ給はゞ、幸甚たるべく候。

一。來書畧。拙者同役に利發にて作法もよき者候。道に志なき故、何方やらん談合などあひがたく氣のどくに存候。道理を得心すまじき者にてはなく候間、和解の書にても見せ可申候也。

返書畧。拙者も見及候。利發なる故に、貴殿、我等など同志の非をよくみられ候。又わきよりも

返書略。今時儒者といはるゝ人の中に、貴殿ほど德を尊び道を思ふ人はすくなかるべく候。儒者の名は三皇、五帝、夏、商の代まではなかりしなり。はじめて周官に出たり。鄕里にをいて六藝を敎ふる者を儒と云と候へば、一人の役者なり。今の儒者といふは史の官のごとし。博識を以て業とせり。素王曰。文勝質史なりと。しかれば今の儒者の德なく道を行はざるは、さのみ罪にもあらず。聖人の道は五倫の人道なれば、天子、諸侯、卿、大夫、士庶人の五等の人學び給べき道なり。別に儒者といひて道者あるべき樣なし。學問を敎て產業とすべき人あるべきにあらず。上より人をえらびて士民の師を置給ふは各別の事なり。此外先覺の後覺をさとし、朋友相助相敎るの義あり。人幼にして學び壯にして行ひ、老て敎るの道あり。皆士農工商の業あり。亂世久しく、戰國の士禮樂文學にいとまなく、武事にのみかゝり居て、野人に成たれば、鄕里にして藝文を敎へたる者末々のみはづかに古の事をも知たり。このゆへに聖人の道を說者を儒といひたり。そのかみの文學の稱なりといへり。しかれどもいまだ產業にはおちざりき。聖人の道學を名付て儒者の道といふべき道理はなき事なり。世のいひならはしと成て、さやうにいはざればそれと人の心得ざる故に、我等を初て儒道と申なり。古の人のいへるもかくのごとくなるべし。今の儒學といふは史となるの博學を習ふがごとし。弓を稽古し鐵砲をうち習ひて奉公に出るがごとくなれば、產業とするも罪にはあらず。戰國よりこのかた、學校の政久しくすたれぬれば、此史儒の文藝者に經傳の文義を聞べきより外の事なし。武藝者に弓馬兵法を習ひて、武勇を助け武功を立るは武士

一。來書略。佛をそしるは無用の事なりたゞ己が明德を明かにする事をせよとうけたまはり候は、尤至極に存候。爭なくて居候はゞ、三教一致と申も罪あるまじく候や。

返書略。一致にてもなきものを、一致と虛言可ㇾ申樣もなく候。其上一致は爭の端也。同じ佛道の中にてだに、各の異見を立て相爭ひ候。別は別にしてあらそはざれば、いつまでも難なく候。佛者も天地の子なり。我も天地の子なり。皆兄弟にて候へども。或は見る所の異により、或は世にひかるゝすぎはひによりて、さま〴〵にわかれ申候。儒といひ佛と云見をたつればこそたがひの是非もあれ。何れの見をも忘れて、たゞ兄弟たる親みばかりにて交候へば、あらそふべき事もなく候。こゝに職人の子供兄弟ありて、一人は矢の根かぢとなり、一人は具足屋となりたるがごとし。矢をとゞむべき甲をぬくべきの爭あらば、東西各別の他人なり。本の兄弟の親しみのみ見時は、職は各別にて爭はあるまじく候。これはすぎはひ故とも可ㇾ申候へども、食物にも兄弟各數奇きらひある事なれば、味をあらそひ候とも、各の口のひく所は一致にはなるまじく候。たゞ其まゝにして我は我人は人にてよく候。聖賢の御代ならでは、天下一同に德による事はなく候。しかも猶堯の時に許由あり。光武に嚴子陵あり。孔子に原壤あり。聖人これをしゐ給はず。天空して鳥の飛にまかせ、海廣して魚のをどるにしたがふがごとし。

一。來書略。拙者文學は少し仕候へども、才德なくて儒者といはれ、かつ祿を受候こと、恥かしき事にて候。

一。來書略。よき儒者と佛者とをよせて論ぜさせて聞度心御座候。疑ひのある故か邪心ある故はあるべきと存候。

返書略。法論や儒道佛の論などは、氣力のつよきかたか理のとりまはしこかしこき者勝と見え候。其人の勝負にて道の勝劣にあらず。聖人の道の諸道にこえてゆたかに高きとは、論議をまたずして分明なること也。孝經にふかゝらざる故にうたがひ出來候。天地の間に人のあるは、人の腹中に心のあるがごとし。天地萬物は人を以て主とし候へば、有形のもの人より尊きはなし。其人の道の外に何事のあるべく候や。

一。來書略。七書の中聖賢の論と云は作ごとにて、多くは功利の徒の言にて候はゞ、何れも用ゆへからず候か。

返書略。仁義の心あり仁義の名ありて後用べく候。大軍は正兵を本とし、威を以て敵を制し、小勢は奇兵を用る、はかりとを好て敵をくじき候、しかれ共正も奇を用る所あり。奇も正と成時あり。吾は義にして敵は不義也。吾は善にして敵は不善なり。善人にしたがふ軍士は皆義士なり。不善人にしたがふ士卒は皆賊なり。惡人のために善人をそこなふべからず。謀を好て敵をあざむき、味方をそこなはずして敵を亡す事は、明將の常なり。七書といふも、其明將の行ひし跡をいひたるものなり。又は軍の才氣を生付たる者の、道をばしらざれども大將と成たるか、軍功を立たる者の言もあり。其軍の才は君子に似たる所あれども、其實は天地各別なる事にて候。

となる事に候。心法を受用する人も、人がらの位をぬくるとをしらざれば、一生心術の訓詁にて終るものなり。又學見も大に精く至ぬれば、大方の凡情はぬくるものにて候へ共、それほどに見解の成就する人はまれなる事なり。大方は水のごみをいさせたる様にて、すみたると思ふも眞にあらず候。又一等の人あり。生付欲うすく、心をろかにして小理の悟を信じ、これによりて心をうごかさゞる者あり。聰明の人は、小悟小信を以て小成の功なければ、理學にはさとく候へども、德をつむとはをそき様に見え候。いかさま學に志すほどの人は、昨日の我にはまさりぬべし。しかれども學流によりて、人品にはかへりて益なく、人にたかぶりにくまるゝばかりなるも有レ之躰に候。よく學ぶ者は、人の非をとがむるにいとまあらず。日々に己がをかへりみるとくはしくなり候。

一。來書略。武王、太公、伯夷、叔齊の是非を論ずる者、古今多く候へども、其精義心得がたく候。返書略。古の事は不存候。只今武王、太公、伯夷、叔齊御座候はゞ、拙者は伯夷にしたがつて首陽山に入申べし。論議に不及候。此兩道を明辯せずとも、聰明のさはりにも成まじく候。聖賢にかはりはおはしまさねども、時の變によりて其跡たがひ、其心見がたく候。たゞ人道は堯舜を師とせば、あやまる事あるべからず。變にあひ給ふ聖人にては、文王にしくはなく候。文王と伯夷は、本傍輩なりしかど、出てつかへられ候。文王も客の禮を以て待給ひしと、つたへうけたまはり候。

て申候。皆古の儒道にて御座候や。

返書畧。學問の手筋の儀、いづれをよしともあしゝとも申がたし。總じてすこし學びて道だてする者は、人道の害に成事に候、身の愚なるたけをもしらず、至りもせぬ見を立て、とかくいへば無事の人まで物にくるはせ候。一向に俗儒のへりくだり心得よき者を招きて、經義をきゝ給べし。其身文武二道の士にてなきと申ばかりにて候。夫武士たる人、學問して物の道理を知給ひ、其上に武道のつとめよく候はゞ、今の武士則古の士君子たるべく候、

一。來書略。物よみに經義を聞候とも、心法はいかゞ受用可仕候や

返書略。聖經賢傳道理正しく候へば、誰よみても同じ事に候。たゞに理を論じ跡を行ひたるばかりにては、心のあかのぬけざる事尤に候。心術を受用すると申人も、凡情の伏藏かはりなければ共に功なき事は同じく候。有德の人あれば、其化によりてよき人餘多出來るものにて候。德は人のためにするにあらず。己一人天理を存し人欲を去なり。人欲を去て天理を存するの工夫は、善をするより大なるはなく候。善といふは別に事をつくりてなすにあらず。人倫日用のなすべき事はみな善なり。君子は義理を主とし、小人は名利を主とす。心には義理を主としてよく心法を受用すると思ふ人あれども、其人がらの全躰小人の位に居てみづからしらず。其位をぬけざるもの古今おほし。此所をよく得心し給ひて後、聖賢の書を見給ひ、人にも尋られ候はゞ、皆入德の功と成候べし。心法は大學中庸論語にしくはなく候へども、學者の心のむき樣にて、俗學となり跡

むける諸侯をひきゐて來朝し給へり。紂王は西伯の心をしらざれば、人の思ひつくをあやしみて
にとらへ奉りぬ。其後は來朝する諸侯もまれにして、北狄いよ〳〵さかひををかせり。其時
紂王初て西伯の功を感じ、ゆるして國にかへすのみならず、西國をまかせ狄人をふせがしめたり。
殷の代の末に、文武おとろへ中夏むなしかりしかば、北狄來りをかしゝなり。これによりて周公
を征夷將軍として征伐せしめたるなり。此時太公望をあげ給ひ、狄を征するがために軍法を論し
給ひしともあるべく候。然れども六韜の言語のごとき事はあるべからず。

一。來書略。不幸にして壯年の時文學せず。年已に五十に及候、小家中なれども用人にて候へば、
老學のいとまなく候。朝に道を聞て夕に死するの一語をねがひ申ばかりに候。

返書略。家老たる人の道を好み德を尊び給はんは、忠功の至にて候。たとひ其身にはつとめずと
も、人に道藝をすゝむるは、上に立人の役にて候。心は耳目手足の能なけれども、よく耳目手足を下
知して尊きがごとくに候。心のおとなしき人を家老とするなれば、おとなともいひ、若けれども老
人の公道ある故に、老とも申候。老の字の道理にだにかなひ給はゞ、幸甚たるべく候。

一。來書略。先度被仰下候、家老たる者、其身は無能無藝にても、人に道藝をなさしむるは、み
づから藝能あるに同じとの義、尤至極に存候。誠に人の上に立候者、いか程多能多藝にて學問ひ
ろく候とも、人の賢をそねみ人の能をそだて侍らずは、かへりて凶人たるべく候。弓馬文筆等の
事は心得申候。道學はいづれの流がよく候や。今時朱學格法王學陸學心學などゝて色々にわかれ

やはらかに成て武威よはし。上驕れば民かじけぬ。上下をこたりて武そなはらず。無事の時は民も女の樣にて心やすきは使ひよき樣なれども、戰國にのぞみて士の手足とするものは民也。手足はよはし、身はをごりてやはらかなれば、北狄のあなどりをかすもとはりなり。賢君の代には文武兼備りぬれば、をごらずをこたらず。上﨟もやはらかならず、下らうもかじけず。身無病にして手足つよきが如し。北狄をそれて臣となりぬる事尤なり。日本も神武帝より應神の御代其後までも、王者の武威甚つよくおわしまししかど、次第に文興て武おとろへたり。京家の人とて武家のあなどるは其故也。武家にても少しの間に强弱入かはれるとなり。平淸盛は武功を以てへあがりしかども、一門榮耀にをごりぬれば、わづかに二十餘年のほどに武勇よはく成候。まして唐は三百年五百年治りて、其間に文武の業あやまり候へば、劍をも帶せざる風俗になりしも尤なり。其あやまりを以て、聖代の繪をも劍を帶せずかき候は、あしく候なり。

一。來書略。文王を野心あらんかとうたがひながら、又征伐をゆるされたる事は、心得がたく候。

返書略。日本王代の征夷將軍といはんがごとし。西國の諸侯のつかさにて、與國をひきいて北狄の中國ををかすをはらひ退けしむ。其時はわづかに周一國の諸侯にてをわしましき。文王と申は贈號なり。そのかみは西伯と申たり。西伯の紂王に忠ありしと、たぐひすくなし。天下の諸侯紂王が惡をにくみて、そむける人三分が二なり。其二は皆西伯に志あり。此時西伯軍をおこし給はゞ、紂をほろぼさんとたなごゝろの內なり。しかるに西伯は紂王に無二の忠臣なりしかば、大半のそ

話にあり。其後異端おこりて、世にまどひおほし。故に宋儒の學は理學にあり。まどひとけては心にかへる。故に明朝の論は心法にあり。

一。來書略。太公望を微賤よりあげて三公となし給ひし事、不審多く候。周公、召公のごとき中行の君子とも見えがたく候、軍旅の事に長じたる人ゆへにて候や。

返書略。古人いへることあり。老人なり、かつ微賤に居て下の情をしれり。知識ありて時變に達せり。生れながらの上臈は、下の情をしり給ふ事くはしからず。人のいふにしたがひ道理のまゝに下知し給ひては、下に至て可にあたらざる事あり。是以帝堯は諫鼓謗木を置給へり。又賢才の人も、下に居て上臈の風俗を見ず、かつ政道の務をしらざれば、下にてはかりたる事にはたがふことおほし。太公も君子に交て上臈の事をしり、本よりの大臣も太公によつて下の情に通じ給へば、上下共に人情にたがふことなしとなり。軍旅に達せる事は、はじめはしろしめさざれども、天然と大將軍の器量ある人なる故、用ひ給ひしなり。六韜に記す處の文武太公の論は、皆大なる僞なり、後世事をこのむもの、これを作れり。かつ聖賢をかりて、軍者功利の術をかざりたるものなり。もしかれにいへるごときの心あらは、何を以てか聖人とは申べきや。

一。來書略。中華の國、聖代には武威よく、末代に至てよはくなりしと申事は、いかなる故にて候や。

返書略。北狄の中夏を侵すとをかさゝるにてしられ候。聖賢の代には、文明かに武備り候故に、臣と稱して來朝せり。末代は文過て武をこたれり。文の過るといふは吝なり。士以上はをごれば

ざれば、名根利根の伏藏は本の凡情たるべし。飯上の繩をゝふがごとくなれ共、心上の受用ある によりて、みづからもゆるすにてあるべく候。しかれども、大なる事にあひてはみだれ候はんか。氣質變化の學は明白なる道理ながら、大なる志なければいたりがたく候。生付よき人の、世間の 習によりて、うはべばかりあしく成たるなどは、道を聞候へは、一旦のまどひはすみやかにとけ て、本のよき所あらはれ候。かゝる人を氣質變化と申者あるべく候へども、これも變化にはあら ず候。大かたは先覺後覺共に、本の人がらありと相見へ候。いざなふ人の人がらよければ、其國 所のよき人類にふれてあつまり、いざなふ人の人がら平人なれば、平人あつまり候。王朱の學の 異同にはよらで、先覺の德と不德によれり。悉くしかるにはあらず候へども、これ大略にて候。 むかふ人を以て我身の鑑と致し候へば、みづからの人がらこそ耻かしく候へ。古の人は、門前に 人の往來多きを以てあるじの才ある事をしり、來る人の善不善を見て主の德を知と承候。

一。再書畧。宋朝の理學、明朝の心術と承候へば、程子朱子は道統にあづからざるがごとし。いか が。

返書略。周子の通書などを見侍れば、聖人のはだへあり。明道には顏子の氣象あり。後の賢者の よくをよぶべきにあらず。伊川の器量、朱子の志、みな聖人の一躰あり。凡心なき處は同じ。聖 門傳受の心法にあらずして何ぞや。我はたゞ其學術を論ずるとの多少をいふのみ。惑を解くとのお ほきを理學といひ、心をおさむるとの多きを心術といふ。秦火に經そこねたり。故に漢儒の功は訓

りつとむるといふもおもしろく候。陽明は文武かね備へたる名將なりといへり。されども近年心學を受用するといふ人を見侍るに、さとりの極にて氣質變化の學とも覺えず候

返書略。拙者をも世間には心學者と申と承候。初學の時心得そこなひて、みづからまねきたる事に候へども、心學の名目しかるべからず存候。道ならば道、學ならば學にてこそ有べく候へ。いづれと名を付かたよるはよからず候。漢儒の訓詁ありたればこそ、宋朝に理學もおこり候へ。宋朝の發明によりてこそ、明朝に心法をも說候へ。明朝の論あればこそ、數ならぬ我等ごときも入德の受用を心がけ候へ。論議は次第にくはしくなりても、德は古人に及がたし。後生の者、心は本の凡情ながら、文學の力にてたま〳〵先賢未發の解を得ては、古人の凡情なき有德をそしり申事勿躰なき義なり。一の不義を行ひ一の不辜をころして天下を得事もせざる所は、朱子王子かはりなく候。拙者世俗の習いまだまぬかれずといへども、此一事は天地神明にたいしても古人に耻べからず。其外の事は、我ながら我身の拙さを存候。如レ仰貴殿かたのごとく道を行ふと思召候へ共、心中の微は同前に候。又學志ありてなりがたき事をつとむる所は候へ共、無學の平人にをとりたる事も有レ之候。學は程朱の道にたがひもあるまじく候へども、立處の心志かはりある故と存候。學術の外にむかふによりて、みづから知ることの不レ明故にてもあるべく候。陽明の流の學者とて、心よりくはしくもちゆとは申候へども、其理を窮ことは見解多く自反愼獨の功も眞ならざる處相見え候。尤よきもあるべく候。大かたは其愚を知ことも明かならず。其位をぬけ候事を知

たる所あり。たとへば、庭前の梅の根の土中にかくれたるは太虚のごとく、一本の木は天地のごとく、枝は國々のごとく、葉は萬物のごとく、花實は人のごとし。葉も花實も一本の木より生ずといへ共、葉には全躰の木の用なし。數有て朽ぬるばかりなり。花實はすこしなりといへども、一本の木の全躰を備へしゆへ、地に植ぬれば又大木となりぬ。かくのごとく、萬物も同じく太虚の一氣より生ずといへども、太虚天地の全躰を備る事なし。人は其形すこしきなれ共、太虚の全躰あるゆへに、人の性にのみ明德の尊號あり。故に人は小躰の天にして、天は大躰の人といへり。人の一身を天地に合せて、少しもたがふ事なし。呼吸の息は運行に合す。暦數醫術もこゝに取とあり。天地造化の神理主師を元亨利貞といひ、人に有ては仁義禮智といふ。故に木神は仁なり、金神は義也、火神は禮なり、水神は知なり。天地人を三極といふ。形は異なれども、其神は一貫周流へだてなし。理に大小なきが故に、方寸太虚本より同じ。是大舜の君五尺の身にしてよく其德を明かにし給ひしかば、天地位し万物育するに至れる所なり。万物一躰とはいふべし。一性とは云べからず。万物は人のために生じたるものなり。我心則太虚なり。天地四海も我心中にあり。人鬼幽明うたがひなし。堯舜の道は人倫を明かにするにあり。故に他の道を學びんことをねがはず。佛法の事は我不ㇾ識。

一。來書略。聖人の書を說ことは、朱子にしくはなし。是以朱學は則聖學なりといへり。小學、近思錄等の諸書を學びて、かたのごとくつとめ候へども、心の微は本の凡情に候。又心學とて、内よ

くる所ある故に、たはぶれごとなどいひたるなり。君子を其地に置たらば、かくあるべきと思はれ候なり。吉野河にて、跡にまぢかく大敵を受ながら、竹を切て雪中にさし、竹にむかひてものいひたるふるまひなどは、かりそめなる事のやうなれども、心の知仁勇あらはれ候。東鑑のみたしかなるやうに世以て申候へ共、鎌倉中の事は委しくして、遠國の事はをろそかなり。平家物語義經記も、大かた實事と見えたり。文法にても虚實はみゆるものにて候。正しく記したる書の中に、定てよき生付の人あるべく候。重て暇日に考可レ申候。源の頼光、小松の内府重盛、畠山の重忠、文武を兼て士君子の風ある人なり。かゝる人々に聖學の心法をきかせば、唐までも聞るほどの人に成給べく候。時節あしく出られし事、不幸なる儀なり。宋明の書、周子、程子、朱子、王子なとの註解、發明の日本に渡り、人の見候事は、わづかに五六十年ばかりなり。しかれども、市井の中にとゞまりて、士の學とならず。十年このかた、武士の中にも志のある人はしく〲見え候間、後世には好人餘多出來候べし。

一。來書略。万物一躰といひ、草木國土悉皆成佛と云ときは、同し道理の樣に聞え候。

返書畧。万物一躰とは、天地万物みな太虚の一氣より生じたるものなるゆへに、仁者は一草一木をも其時なく其理なくてはきらず候。況や飛潛動走のものをや。草木にても、つよき日でりなどにしぼむを見ては、我心もしぼるゝがごとし。雨露のめぐみを得て青やかにさかへぬるをみては、我心もよろこばし。是一躰のしるしなり。しかれども、人は天地の德万物の靈といひて、すぐれ

慶大に氣色をつくり、具し奉ることはなるまじきよしをいひて後、又氣色をやはらげ、さはいひつれども、まさしき北の方なり、身もたゞにましまさず、鎌倉殿はたのもしげなし、都に殘し奉るべき義にあらず、ゆかるゝ所まで行て、かなはざる時は、先北方をさし殺し奉り、各自害し給ふべきより外はあらじとて、ちごの形につくりて相具し、北陸道をへて落られしに、關所〳〵にて、義經とは見しりたれども、うちとゞめて軍功にもならじ、實は兄弟にてましませば、恩賞を得ても心よからぬことなり、其上罪なき人の大功ありながら、讒にあひ給へるもいたはしくて、すゝまざる心の氣色を、辨慶やがて見しりければ、關の人々のことはりのたつべき樣いひなして通りしを、平泉寺にては鎌倉殿よりの討手にてもなきに、法師の身なから、邪欲のあまりに、義經をうちとゞめて恩賞にあつからんとて、とりこめたれば、のがれざる所の第一なりき。しかる所に、うつくしき兒を具しける故に、坊主ども目をうつして時刻をふる間に、老僧など出て管絃のもよほしあり。義經は笛の上手なり。供奉の中に笙ひちりきの得たるあり。ちごは箏を彈じ給へは、老若ともに邪心やはらぎ、難をのがれたり。此時北方ましまさずは、あやうかるべし。かくあしかるべきもよほしだに、道にしたがへは吉なり。此一事を以ても、辨慶仁厚の心は見え侍り。平生義理に感じやすく、涙もろなる者とみえたり。たはぶれごとをなどいひたるは、患難に素しては患難を行ふの氣象也。義經一代難儀の堺にしたがひしかば、諸人の氣屈する節なり。辨慶は仁にして勇なる故に、敵にをそれざるのみならず、難に遇てもこゝろ屈せず、人をいさめたす

候。頼朝の子孫九州にもおはしまし候事なれば、主君と成て諸士にのぞむ事は、人情のしたがはぬ所ありたるとみえ候。この故に、正成も北條と君臣の禮はなく候。其上相模入道無道にして亡ぶへき天下あらはれ、又將軍は京より申下してかりなる事なれば、天子より外に主君なく候。主君よりの仰なれば、たのまれ申たるといふことにてはなく候。臣下の權つよくて、一旦君をなやまし奉りし事は、平の清盛も同事なり。後白河院頼朝に天下をあづけ給ひてより、武家の世といへり。しかれども王威過半殘りて、全く武家の天下ともいひがたし。されば後醍醐天皇まではいにしへの王徳をしたふ者もおほかりき。しかる處に、北條の高時奢きはまり、天道にそむき、人民うとみたる時節、天下をとりかへし給ひしかば、公家に歸したり。しかれども、天皇道をしろしめさず。賢良を用ひ給はず。昔と時勢のかはりたる事をしり給はざりし故に、うらみいきどをる者おほく出來て、武家の權をしたはしく思ふおりふし、高氏おこりて天下をとりてより此かた、一向武家の世とはなれり。是より天下の諸大名、大樹を主君とし奉りて、天子にはつかふまつらず。陪臣の國の君を主とするも同理なり。是を以て、今ならばたのまれ申まじきと申事に候。扨士にては辨慶氣質に知仁勇ある人に候。かくれたる處ありて、世人知事まれなり。勇にかさのあることたぐひすくなく、知謀は泉のわき出るがごとし。仁は士にて時にあはざるゆへに、見えがたく候。勇知にならふべき仁愛みえ申候。義經の好色なるをは、度々いさめ候き。しかるに、奥州落の時、北の方をば、辨慶すゝめて供いたし候。人の同心すまじき所をはかりて、先辨

なりがたく世間智ありても、心ねぢけたる人は害おほく候。これはむかしの人のえらびなり。今の政にしたがふといふはしからず。其位に備りたる人か、衆の指ところか、いかさまに人情のゆるす所ある人の中にて、凶德なきをえらぶとみえたり。これなを無學なりとも、我政をせんといふ學者の國政にはまさり候はんか。

一。來書略。昨日下拙不善ありき。とげてかくし可ㇾ申とは存せずながら、中は出ざる内に、先生すでに肺肝を御覽ぜらるゝと覺候き。

返書略。愚拙いかで人の不善をさぐり申べき。何事の候へるやらん不ㇾ存候。貴殿の心に明德あるによりて、肺肝を見らるゝ樣におぼえ給ひ候なり。貴殿と我等とにかぎらず。惣して不善ある人の氣遣、かくのごとくに候。大學の旨も、君子より人の肺肝を見にはあらず。小人みづから肺肝をみらるゝことくくるしきにて候。性善の理明白なる事に候。

一。來書略。楠正成は智仁勇ありし大將といへり。德もなき天子にたのまれ奉りたるは、智とは申がたくや候はん。武家の世と成て此かた、よき人誰か候へるや。

返書略。不ㇾ知して天よりあるを氣質といひ、知て我物とするを德といへり。正成は氣質に智仁勇の備りたる人と聞え候。聖學をきかせ候はゞ、たぐひすくなき文武ある君子たるべく候。今の時ならば、天子にもたのまれ申まじく候。正成の時分は北條の代と後世よりは稱すれども、京都より將軍を申しだし奉り、北條は諸大名と傍輩の禮儀にて交り、たゞ天下の權を握たるばかりに

く、德行にうすき人は文才拙きとあり。智聰明なる生付の者は行かけやすし。行篤實なる者は智にたらざる所あり。君子は其善を取て備らん事を求めず。小人は人のみじかき所をあらはしてその美をおほへり。すべて世に才もなく德もなき人多し。才あらば稱すべし。德あらば好すべし。

一。來書略。今の世に學問する人は、天下國家の政道にあづかり度思ふ者多く候。學者に仕置をさせ候はゞ、國やすく世靜かなるべく候や。

返書略。いづれの學問にても、利欲を本としてつとむる者は、各別の事なり。實に道を求て學ぶ人は、貴殿我等をはじめて、今の世の愚なる人と可レ被二思召一候。此世に生れて、神の智を開くにしたがひて、世間に入人は、利發なる故なり。世間の利害に染りぬれば、道德には遠きものに候。しかる所に、貴殿我等ごとき、此世に生れながら、世間に入べき智識もさとからず。しかも流俗には習ながら、中流にたゞよひ居候處に、い幸に道を聞てよろこび候。其愚なる下地ゆへに難き事をばしらずして、古の法を以て今を治めんと思へるなり。我せんと思ふ學者に仕置をさせ候はゞ、亂に及び候べし。たとひ古の人のとき賢才ありとも、人力を以てなさば不可なり。況や古人にをよばざる事はるかなるをや。堯舜の御代には屋をならべて善人おほかりしだに、政の才ある人は五人ならではなかりしとなり。周の盛なりしにも、九人ありといへり。學問して其まゝ仕置のなるとならば、古の聖代には、五人九人などゝいふ事はあるまじき事也。古の才といひたるは德知と才學とかねたる人の事と聞え候。博學有德にても、人情時變に達する才なき人は、政は

集義和書卷第一

書簡之一

一。來書畧。博學にして人にさへ孝弟忠信の道を敎へられ候人の中に、不孝不忠なるも候は、いか成事にて候や。

返書畧。武士の武藝に達したるは、人に勝ことを知にて候へとも、武功なき者あり。無藝にても武功ある人おほし。兵法者の無手の者にきられたるあり。學問の道も同前に候。夫智仁勇は文武の德なり。禮樂弓馬書數は文武の藝なり。生付仁厚なる人は、文學せざれ共孝行忠節なるものなり。生付勇强なる人は武藝をしらでも勝負の利よきものなり。しかればとて、文武の藝すたるべき道理なければ、古の人は、其身に道を行ふ事全からぬ人にても、文才に器用なる者には學問をさせ、ひろく文道を敎へて、人民のまどひをとき、風俗をうるはしくし、其身に勇氣すくなき人にても、武藝に器用なる者には、弓馬をならはし、あまねく兵法を敎へて、人民の筋骨をすくやかにし、能をとげしむ。國の武威をつよくせんと也。これ主將の人をすてずひろく益を取給ふ道なり。學力なくして孝行忠節なるは、氣質の美なり。道をしらざる勇者をば、血氣の勇ともいへり。人の德を達し才を長ずることとは、文武にしくはなし。今の給へる人は、文の末のみを知て本に達せず。武も又かくのごとし。且天の物を生ずること、二ながら全きとなし。四足のものには羽なく、角あるものには牙なし。形あるものは必ずかくる所あり。大かた文才に器用なる者は德行にうす

の三字、誠意の手段、初學入レ德の門戸なる事を示し玉ふなるべし。或人問ふ、空鐺を煮と煮ざるとの受用を、毋ニ自欺一を以の玉ふ事如何。云く、毋ニ自欺一は、誠意二字の解也。毋ニ自欺一を工夫すれば、本躰の誠立つ。本躰の誠、此を主人公と云。我か心中に具り玉ふ心の神明獨知の實躰也。此の獨知の神明我に具り在しませば、此の獨知を戒愼すべき事なるに、學者分上は常に戒愼の心弛り人欲熾にして、閒居に於ては不善をなして忌憚する所なし。此を自ら欺と云。獨知の神明内よりしろしめすこと嚴然たり。不善は悪しきことゝ知ればこそ、人前にては戒愼して不善をなさず。人前を戒愼して、我に具り在します獨知の神明を戒愼することなき、此を自欺と云。自欺するなきを毋ニ自欺一の工夫とす。此れ初學入レ德の門也。誠意傳の下に、小人閒居の章を付て有を以考へ知るべし。誠意傳の解、小人閒居の解に於て、初學入レ德の手段、千古不傳の妙術を示し玉ふ。此を拜讀し、戒愼怠ず自欺せざるやうに受用するを、空鐺を煮ざる學者と云。聖謨賢範、悉く獨知の戒愼を擴充するの義なれば、初學日新の功當レ在レ于レ玆矣。

り。此れ尋常の人に非ず。好人也。此の好人を、藤樹の先づ主人公へ御目見いたし、本躰を認知て空鐺を煑ざれとある、千古不傳の學術を開發し玉ふ處より窺見れば、空鐺を煑るの學者也。況や其餘をや。如何となれば、本躰を認知し此を明にするの主意立事なく、明德を明にするの上の明の字に議論切磋なき學術也。故に明㆓明德㆒の上の明の字に力を用ひ、議論切磋受用工夫、寢ても寤ても經傳を見にも、兎にも角にも、上の明の字に心思を盡す處の學者は、空鐺を煑ざる君子の徒也。又藤樹先生の徒也。上の明の字に力を用ひざるは、小人の儒にして、彼の空鐺を煑るの學者たること、明けし。生涯經傳を學び、或は議論切磋すと云ども、皆いたづらごとゝなるの學術にして、君子の學術に非る事、必然也。然る故に、先づ主人公へ御目見いたし、本躰を認知て、毋㆓自欺㆒を用ひ、畏㆓天命㆒。尊㆓德性㆒恭敬奉持する處、空鐺を煑ざる學者、此れ大學の宗旨、初學入㆑德の門也。夫れ至善は良知の別名、明德の本躰にして、衆理を備て万事を宰する主人公也。聖人の本躰也。凡夫と云へども、此本躰を具足して加損なし。然れども、學者分上は、氣習意必を以て塡塞して、明德の明を掩ふ。然る故に、八條目に、修身正心誠意致知格物を說き玉ひて、畢竟明德を明にせよとの致也。然るに、曾子後學の經義に通曉し難き事を慮り玉ひて、五傳を說き玉ふ。傳の首章、誠意の二字を釋して、毋㆓自欺㆒の三字を下し玉ふ。此の毋㆓自欺㆒の三字に、後學通曉する事の、又難からん事を藤樹慮り玉ひて、文集云、又恐就㆓意裡面㆒求㆑誠故、以㆑毋㆓自欺㆒解㆓誠意二字之義㆒、厥旨深哉、仁也哉と稱し玉ひぬ。此は是れ、曾子毋㆓自欺㆒の三字を下し玉ふを贊美し玉ひて、後學に毋㆓自欺㆒

附録

初學手段

藤樹先生、學者に學術の手段を示し玉ふ事、遺書に其數多し。吾人其學術の手段に從ひ、學び受用すと云へども、軆認の功親切ならざる事を患ふ。先づ第一に示し玉ふ。學者先づ本軆を認知べしと。又云、此心を工夫の種子主人公と定め候はでは、空鐺を煑あやまりありと。又云、天君へ御目見有べく候、御目見の後、一言一動皆此君の御下知に從ふとあり。又云、心術の取入、兎角本軆を見付候はでは、空鐺を煮るが如くにて、何の工夫もいたづらになるものとあり。熟按ずるに、本軆を認知り主人公へ御目見いたす事は、達觀の人の事にて、初學の及ばざる所なりと思へる或、其弊年久し。然れども初學に示し玉ふ第一に、本軆を認知るべし、本軆を認知らずして學ぶときは、空鐺を煑が如しとの御手段なり。愚竊按ずるに、譬は學に志す者、仕官するが如し。始て仕官すれは、先づ主君へ御目見いたし、其家法に從ひ、實義を盡し、臣々たる處、恒の心也。學者も先づ主人公へ御目見いたし、本軆を認知て、毋二自欺一を用ひ、實義を軆認する處、恒の心也。毋二自欺一を用ひ、恭敬奉持する處をさして、畏二天命一尊二徳性一と云。又信の立とも云ひ、又明二明徳一とも云ふ。然る故に、明徳を明にする受用工夫を專にするを、空鐺を煮ざる學者とす。されば、空鐺を煑學者と空鐺を煑ざる學者との差別、氷炭の分るゝが如なることを默識すべし。譬ば爰に學者ありて、經傳の義理にも能通曉し、或は講明に能し、五事の不正も聞へず、大槩毋二自欺一も用ひ、五倫の交りも能きあ

となら んことを求る志なし。人間の願ひ樂より大なるはなく、其惡む處苦みより甚はなし。故聖人、君子小人の心躰を掲げ出し、其苦樂を指點して、以て人々安宅に居て正路によるべきことを開示し玉ふ也。

右六章、先生論語解の抜書也。先生の學術、論語絕四の意を證として、總て敎を立玉ふ故に、此を受用切磋の本旨とするより他事なし。熟按ずるに、古の賢者、或は道を說くこと遠きに失ひ、或は道を近きに失ふ。故に後世の學者、聖賢を窺觀ること、譬ばかけはしして天に登るが如く、或は深淵に臨むが如くに思ふ弊ある故に、たまたま聖學に志ある者も、經典を窺ふて其理に通し難く、上達の人稀なるか。是は是れ學術の敎の弊なるべし。爰に先生聖學を開發めされたると云は、心の倚る處を格して虛明中正に歸れば、鑑空衡平の大段に復る。此先儒に卓越する所の敎也。此示敎を心裏に透得して、此六章の聖謨の旨を受用切磋せは、聖賢の地位を窺ひ見ること、近く點鐵成金の人とならんか。先生の意思奇哉妙哉。

享保乙巳歳十一月淸書畢る　　岡田子校正

也。

大意。　君子小人の分、專心上に在。心に意必固我なければ、即君子也。意必固我あれば、即小人也。意必固我なきときは、其心衡平の躰明にして、天地と其德を合、廣大にして狹窄ならず。四時と其序を合、寛廣にして急迫ならず。動靜語嘿順境逆境、入として自得せずと云ことなし。所謂坦蕩々の心、即說樂の本躰、是君子の實躰也。纔に意必固我あれば、其心不レ平也。心平かならざるときは、活潑流行の機滯る、活機滯るときは、心氣怫鬱し、好惡是に因つて偏僻す。こゝを以無事なるときは、何となくさはがしくして、安からず。事あるときは、つかへさかだちてをだやかならず。順境に居ては、浮躁にして心溺れ、驕吝並び起る。煩惱うたた重し。逆境に遇ては、昏沈して心屈し、煩熱懊憹甚だ深し。晨より夕べに至り、生より死に至まで、營々逐々として念々つかへふさがり、片時も安堵快樂の思ひなし。所謂長戚々也。長戚々の心、即小人の實躰也。君子小人、かくの如く氷炭の如く相反すれども、本來心躰に二品あるに非ず。君子も小人も、坦蕩々の心本來固有のものなれども、或て此を失ふは小人たり、能保て失はざれば君子たり。故意必固我の惑を辨へ、其根を淨く除くときは、長戚々渙然として氷のとくる如く消て、坦蕩々の本躰呈露す。

主意。　盜賊といへども、君子と譽れば喜び、小人と毀れば怒る。是人根いまだ滅せず。眞知不昧の處也。然ども小人の厭べく君子の求むべき處の損益利害の實地を不レ知。暴棄を安んじて、君子

す。屢空の一句、上文に受て、顏子聖に近き所の心體を揭け、學者の法るべき處を示す。賜不レ受レ命而貨殖焉の一句、子貢を戒て以學者の惑を解く。億則屢中の一句、子貢受病の根を揭て、學者克治の功を施す處を示す。

主意。　大學之道、在レ明ニ明德一。毋レ意毋レ必。毋レ固毋我。無レ適無レ莫は、皆空の義にして、明德の本躰を開示する處也、明德虛明の本躰、明鏡止水の如し。人々此明德を固有すといへども、氣習意必を以て塡塞するに因て、明德虛明の本躰かくること、譬は鏡中に影を止め止水に波を起て、虛明の本躰明かならざるが如し。故に明德を明にするの工程、氣習意必の塡塞を切磋琢磨して、虛明の本躰に歸るより外なし。是を以、大學に意の一字を以病痛を惣括す。然るに世間の學術、此主意頭腦を失ひ、或は跡に襲ひ、或は言に泥み、或は格により、或は見解に住し、意見の塡塞をつとめますのみ也。皆習人の心髓にしみぬるに因て、孔門の學者といへども、此惑ひなきことあたはす。顏子は專一念入微無聲無臭上にをいて、誠意の功を用、嘿修嘿證愚なるが如し。子貢は聰明に向て力を用、才氣發露するに因て、武叔以仲尼よりも賢れりとす。故孔門の學者、顏をこいねがふ者まれにして、子貢をこいねがふ者多し。こゝを以、夫子顏子子貢を並論して、學者の惑を警覺し、以學術の眞を示し玉ふ。

子曰。吾子坦蕩々。小人長戚々。

學は平也。蕩は寛廣也。長は間斷なく窮なきの意。戚は憂也。重言するは。憂の深き處を明す處

可㆒の學術に因て、無ㇾ可無㆓不可㆒の本體を求むるすら、猶或中和の眞を全ふすることあたはさること、諸賢の如し。然るに後世の學者、先賢の跡を見て、己が性の近き處を喜、其跡を可として學び、其他を不可としていとふ。其初心は毫釐の差なれど、卒に千里の謬となれり。聖人其弊をかがみ玉ひて、先賢の尤なる人を歷擧して、其倚處あることを明し、學者の惑をとき、中和の本心を擧て、以學者の標準を示し玉ふ者也。或曰、無ㇾ可無㆓不可㆒の學術に依て、學既に大賢の地位に至るときは可不可の病痛自ら知り明かなるべければ、倚處あるべからざるに似たり。曰、たとへば射を學が如し。其學者羿が位に至ざる內は、彀率をよく心得ぬると云ども、羿が手前とあたりとの精妙なるが如くなることあたはず。然ども彀率を變じ信ぜざるには非す。諸賢の倚處あるも、學力の孔子に及ざる故なり。自是とし意有て倚處あるに非ず。

子曰。回也其庶乎。屢空。賜不ㇾ受ㇾ命而貨殖焉。億則屢中。

回は顏淵也。庶は聖人に近き也。屢は不ㇾ遠復るの意。空は心の本躰也。世味道味の意念淸く、盡虛明なるを云。賜は子貢也。不ㇾ受ㇾ命は、一念入微の處、毫髮にても天命を信じ安せず、知を用命を奪はんとする意あるを云。命は天命也。貨殖は財寶を生長するを云。貨殖に意あるは天命を信し安ぜざる處。一念入微の處にをいて講ず。事跡について講ずることなかれ。億は意度也。屢頻數也。中は理に中るを云。

句解。　回也其庶乎の一句、顏子を擧て以學者を警覺す。乎の一字、疑をまふけて以下の句を起

いつくに往として三ひ黜けられざらん。道を枉て人に事へば、何必父母の邦をさらんと云。其餘の制行、詳に孟子に見たり。少連は周の末の逸民。東夷の人なり。檀弓に、孔子曰、少連よく喪に居れり。三日不レ忘。三月不レ懈。悲哀を盡す三年にして憂ふ。東夷の子、禮に達する人也。不レ降は常に伸て不レ屈こと也。志は心のゆく所を云。不レ辱は汚濁底のことをなさざるを云。身は視聽言動思也。身を云て以行を示す。降はたゞちに志をとげざるを云。辱は汚濁底のことをなすを云。倫は理なり、慮は良知の思慮、人情の正也。而已は其他議すべき處なきを云。放言は常の格に從ざるを云。中レ淸は其行人欲の汚れなきを云。權は時措の宜也。我は孔子の自稱。是とは上文の六賢を指。可は適也、不可は莫也。

大意。　逸民の一段は、此章を記す人の語也。后世學者、夫子異レ於レ是斷案を認て、伯夷柳下惠等の諸賢を以、長沮桀溺などの類に見なさんことを慮て、逸民の二字を以てかぞへ擧て、一章の始となす。子曰以下、夫子議論の辭也。始の三段、類を分て其德行を誦し玉ふは其得力の中に其病痛を含蓄する所也。夷齊の行跡其淸疑べき所なし。故に只其行のみを論じ玉ふ。柳下惠虞仲は、其跡渾淆にして疑しき所あり。故に上に行跡を擧げ下に其心を論ず。終の一段、夫子自受用底の至眞を揭て、諸賢よる所あるの病痛を指點して、后學の惑をとき玉ふ。

主意。　人の性、本來無レ可無ニ不可一。然ども氣習意念の惑に因て、可あり不可あり。故學者の切磋琢磨する處、他に非す。只可不可の意見を去て、無レ可無ニ不可一本體にかへるに在。無レ可無ニ不

也。姓は墨胎氏、夷齊は其諡なり。諡法に心を安じ靜を好を曰ㇾ夷、執ㇾ心克く莊なるを曰ㇾ齊。伯夷名は允字は公信。叔齊名は知字は公達。父叔齊を立んと欲す。父卒するに及で、叔齊伯夷に讓る。伯夷曰。父之命也と云て、遂に去。叔齊亦立ずして逃。國人其中子を立。こゝに於て伯夷叔齊、文王のよく老を養を聞て、皆往て是に歸す。文王沒し玉ひて武王紂を伐に及て、二子馬を叩て諫む。商亡に及て、退て首陽に隱る。周の粟を食することを耻て、薇を取て食す。ある婦人の曰。周の粟を食せずして周の草木を食すと云。終に饑て死す。其餘の制行は、詳に孟子に見へたり。虞仲は仲雍、泰伯の弟也。泰伯と同荊蠻に逃る。其俗に從ひ髮をたち身を文にしてかへらざることを示す。荊蠻の人泰伯を立て君とす。泰伯卒して仲雍立て、子々孫々守ㇾ之。夷逸は商の末の人。夷は氏逸は名也。却姓夷詭諸の裔なり。族人夷仲年は齊の大夫たり。逸はひとり隱居して不ㇾ仕。或人是をすゝむれば、逸曰、吾はたとへば牛なり、寧田野に耕とも、繡を被り廟に入て犧となるべけんやと云て、終に不ㇾ仕。朱張は行迹沒して不ㇾ稱。柳下惠は地の名、惠は諡也。氏は展名は獲字は禽。魯の僖公二十六年、齊魯を侵す。公展喜をして命を展禽に受しむ。其言を以齊の師を論す。齊の師退く。又齊人魯の岑鼎を求む。魯是に贋鼎をあたふ。展禽をして眞鼎なることをいはしめんとす。展禽曰、吾亦吾鼎を愛す。又藏文仲爰居を祀る、展禽是を非る。文仲曰。季子の言法らずんはあるべからず。又夏父弗忌僖公を閔公の上に躋す。展禽曰、必殃あらんと。又士師となる。三ひ黜らる。人の曰、子さるべからざるか。曰、道を直ふして人に事へば、

句解。　適莫は即意必固我也。適莫の二字粗く見るべからず。伯夷柳下惠なをこゝに於て淨く盡ざる所あり。況其餘をや。老佛の支流。自無レ可無ニ不可一と云へども、却て無レ可無ニ不可一處に適莫ありて、天然固有の規矩を失て、狷狂妄行の誤に至る。故に始の二句、病痛を指點するは、膏肓に針を下す所也。下の一句、一貫の天則を掲出して、君子の君子たる所を示すは、病を除て后眞丹を授る所也。

主意。　義之與比は心の本然人々固有する所、所謂隨身の規矩なり。此規矩を能保て失ざるを君子とす。或て此規矩を失者を小人とす。然に世間の學者、先聖先賢のかげに因て力を用、世間の万事万境にをいて、豫め適莫の見を定て、應事接物の準則とし、此適莫なければ持循する所なしとして、本然固有の天則あることを知ず。故に聖人始には其準則とする所眞實の準則に非ず、却て是君子心上になき病痛なりと指點し、次には適莫の見を假ざれども、固有の天則自ら照々として往として通ぜざる所なく、人とし利せざる所なき本躰を掲出して、君子安身立命の實地を示玉ふ。

逸民。伯夷叔齋虞仲夷逸朱張柳下惠少連。子曰不レ降ニ其志一。不レ辱ニ其身一。伯夷叔齊與。謂ニ柳下惠少連一。降レ志辱レ身矣。言中レ倫行中レ慮。其斯而已矣。謂ニ虞仲夷逸一。隱居放言。身中レ清廢中レ權。我則異レ於レ是。無レ可無ニ不可一。

逸は逸物と云意。凡情を超逸して世間の愌憒拘攣にそまざるの謂也。伯夷叔齊は孤竹の君の二子

主意。凡心の惑万不同なりと云へども、其根皆此四のものに在。此病根なき時は、習もけがすことあたはず。名利酒色も溺すことあたはず。萬欲此根より生ず。四の物各累をなすに非ず。畢竟たゞ一病也。意に始て、必に遂、固に留て、我に成。」我又意を生じて、循環きはまりなし。心氣凝滯して意必固我の病となるは、譬は氣塞り血とゞまつて癰疽となるが如し。人の躰本來快活にして痛なきものなれども、癰疽生ずるときは其うづきたへがたし。少にても物これに碍ときは、其痛をます。然ども是に針して膿を出し薬を服貼すれば、氣めぐり血活て、本來の躰に歸てうづきもなく、物の碍り痛こともなく、快活安穩なり。されば意必固我は心の癰疽なれば、長戚々にして、大小となく親疎となく、万事万物碍り痛ざるはなし。學で時に習、聖門の針薬を用て治療するときは、凡心の膿出氣下り、心活潑になりて、絶四の本躰にかへり、長戚々の憂消て、坦蕩々の安樂に歸る。學者凡心のいとうべく本躰の求べき事を知といへども、用功下手の實地を不レ知故に、孔門の賢者夫子の心躰を擧て、凡心の病根を指點して、克己の實地を示す者也。

子曰。君子之於二天下一也。無レ適也。無レ莫也。義之與比。

君子は絶四の君子也。於二天下一は盡く世界の萬境萬事にをいてと云意。無は自然なき也。意有て是を絶には非ず。適は好所を云。故集註に解して專主とす。莫は惡所を云。故集註に解して爲レ不レ肯。義は所謂安而后能慮也。義と云は宜也。三才當然の理を知るを義とす。與比は義の靈覺に從ひ行を云。所謂由二仁義一行。非レ行二仁義一也。

に學問をなして時習ときは、意必固我の惑解て、本來具足の説樂の德呈露す。己に此德に入るときは、從前種々の苦痛、惡夢の覺たるが如し。故に順境に逢てはいよ〳〵樂み、逆境に逢ても其樂を改ず。怫鬱不平の氣露もきざゝす。心廣體胖に、坦蕩々として中行の君子となりぬ。

主意。　人間世の患、苦より大なるはなし。故に苦を去て樂を得んことは、人々第一の願也。然ども苦をぬいて樂を求むる道の、學問に有ことをわきまへず。徒に樂を求めていよ〳〵苦に入て、其狂を病心を喪ふ、凡夫のありさまを孔聖あわれみ玉ひ、説樂の二字を揭出し、其膏肓に針し、其病痛をすくひ玉ふ者也。論語をあむ人、此章を二十篇の首とす。其意又見つべし。

子絕﹂四。毋﹂意。毋﹂必。毋﹂固。毋﹂我。

絕は本來絕無なることを明す。力を用て絕去に非ず。毋は無と通ず。自然になき也。意あつて是を絕には非ず。意は事跡境界につひて好惡の念を發するを云。是軀殼上の知覺にして、本躰の靈覺に非ず。故集註に解して私意とす。必は意を必とげんと期する意。故集註に解して期必とす。固は意必のかたくすくむを云。故集註に解して爲₂執滯₁。我は意必固の惑ふかく、己あることを知て、人あることを不﹂知を云。故集註に解して爲₂私己₁。

句解。　聖人の聖人たる所、他に非ず。四を絕て本躰全く明かなるにあり。故子絕四の一句を擧て、人々固有の聖人の面目を開示す。下の一句四のものを條陳して、學者の病根を指點して、治を施す所を示す。

して、万境万事に於て滯礙なく苦痛なき也。不亦乎の三字、反言の必然の義を明す。下倣ㇾ此。

有ㇾ朋。自二遠方一來。不二亦樂一乎。

朋は同志也。遠者來ときは近者可ㇾ知。信從する者多きを云。樂は說に加ふることと有にあらず。獨其趣を得ときは說と云。共に其懷を暢ぶるときは樂と云。

人不ㇾ知。而不ㇾ慍。不二亦君子一乎。

人は世人也。不ㇾ知は吾に德有ことを不ㇾ知のみに非す、或は吾を犯し、或は横逆を以吾に加るを云。慍は甚き怒に非ず。怫鬱不平の意。君子は成德の名。

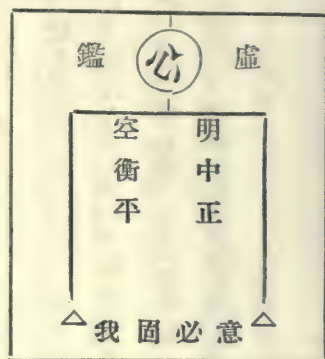
句解。　學而時習ㇾ之一句、工夫の準則を解。不二亦說一乎一句、學問所得のしるしを解。得二天下之英才一敎育するは、君子三樂の一也。故有ㇾ朋自二遠方一來の一句を擧て、一切の順境を包るもの也。人順に逢ては必樂む。故に順境の緣に依て、樂の字を擧て其德をあらはす。人の怫鬱する所、犯し慢らるゝより甚はなし。故に人不ㇾ知の一句を擧て、一切の逆境を包るもの也。人逆に逢ては必怒る。故逆境の緣に依て慍の字を擧、不の字を加へ其の德を顯す。不ㇾ慍即說也。學問は小人より君子に至る道なるに依て、君子を擧て是を結ふ。樂の外に君子あるに非ず。說樂の德、即君子の所二以君子一也。

大意。　說樂は心の本躰也。此樂人々具足のものなれども、意必固我の惑に因て、氣結れ心塞て、萬の苦痛生じ、天下の万事万境にをひて、碍り惱さる所なく、終に本來具足の樂なきか如し。然

藤樹先生天秤圖

眞知誠

虚　心　鑑

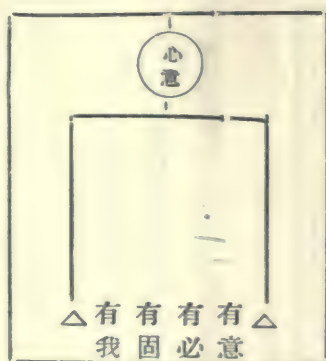
明中正　空衡平

△意必固我△

心の德を虚明中正と云。虚明中正なれば、天秤の針口鑑空衡平となる凡夫は意必固我あるに依て、心の躰倚りて、針口偏曲し意となる故に、意は心の倚る所也と云。此倚る意を誠にして心を正するときは、虚明中正鑑空衡平に復る、然れば不レ動レ欲、不レ滯レ物の本躰自然と呈露して、慈愛恭敬、温々惺々、坦蕩々の氣象あらはれ、心の神明順應す。是れ先生の學術也。

子曰。學而時習レ之。不二亦說一乎。

學は覺也。博學審問愼思明辨格物致知。惑を辨て本心をさとる也。時は常と云意。時の字定て不レ定義ある故に、常といはずして、時の字を以圓神の工程を示す。習は鳥の數飛也。學問の功鳥のすだちに飛び習ふに能似たる故に、假用て切磋琢磨の名とす。說は心安の氣定て、明融快活に

墟墓興哀宗廟欽。斯人千古不磨心との玉へども、常に意必固我有べし。意必固我なければ聖人也。又聖人にも非ず。賢人以下は意必固我を祛き去るを受用と云。受用は格物致知誠意をなして、虚明中正に復る。虚明中正に復れば、鑑空衡平となる。格物致知誠意をなさでは、針口の中正もなく、鑑空衡平の大段もなし。不磨心の受用にて識知學知を去らば、不立文字の禪に近し。

陽明先生大秤圖

王子誠意の沙汰は有れども、論語絶四の沙汰なし。意を心の發に見玉ふ故に、有レ善有レ惡意之動と云。虚明なる心の內より發する意を誠意するときは、生涯善惡の合戰止む事なし。藤樹の所謂草の根を去ずして莖葉を去るか如しと也。意は心の倚る所也と知て、意の倚りを格さざるときは、何れの時か虚明中正鑑空衡平の大段に復るべけんや。

眞知誠

虛明　心　中正

鑑空衡平

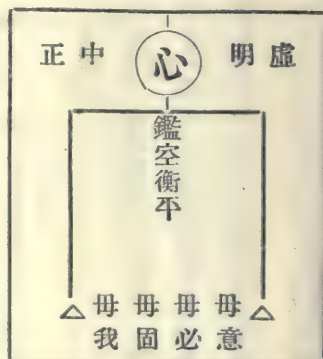
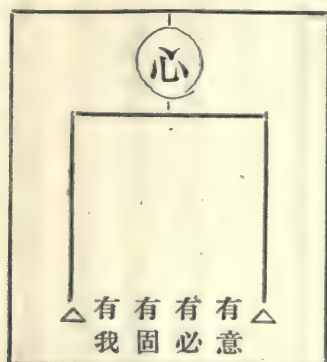
△ 毋意　毋必　毋固　毋我 △

聖人之心は、恒に虛明中正也。虛明中正なる故に、鑑空衡平也。常に不ㇾ動ㇾ欲、不ㇾ滯ㇾ物。故に慈愛恭敬、溫々愷々、坦蕩々の氣象自然と呈露す。毋ㇾ意毋ㇾ必毋ㇾ固毋ㇾ我。故に常に倚る所なし。倚る所なきが故に、喜怒哀樂中ㇾ節也。故に聖人は溥博淵泉而時出ㇾ之。凡夫は反ㇾ之。

象山先生天秤圖

不磨

心

△ 有意　有必　有固　有我 △

きは、良知の取りそこなひなし。心を虚明中正に鑑空衡平にする受用より發する知は、自然の良知也。藤樹も王子の致良知の發明に依て開悟めされて、良知の取りやうは大に異也。是に通じたる同志の云。王子良知を説くに、多くは善惡の機、眞妄の辨を知得するを以て、秉彝の則とす。先生は愛敬を兼言て、以て本然感通の端的を示す。理同して指所や異也。按ずるに、孔門の學、仁を説て物我の私を去り、一躰の至公に復らしむ。愛敬は其實地也と。

爲レ善去レ惡是格物。此の句爲レ善去レ惡を格物と覺えたる計にては、致知の功不ニ徹底一也。木村子の地ならしと云格物も、此の王子の格物の句より出るならんか。藤樹の格物は五事の不正を格して致ニ良知一。致は至也と。良知に至る所、格物の徹底也。

右の辨論愚按を述ぶ。是非得失は明者の格正を奉レ希者也。左に天秤の圖をなして、先生の學術を著す。畢竟論語絶四の意と、大學の意と二義なく、大學にて好惡を説き破り、良知の誠に復れば、絶四の室に入るべしとある意思也。意必固我と云へども、意の一字に歸す。此の學域、沙汰する事はなくして、唯良知而已を沙汰せり。近來の學術、王學を爲して藤樹學と覺たるや、象山學を爲して藤樹學と覺たるや、異學をなして藤樹學と覺へたるや、議論切磋區々也。日用工程する處にあてゝ考る時は、藤樹の聖學を開發めされたる事分明なるべし。日用工程云、鑑空衡平の大段に復れと示し給ふも、是なるべし。

聖人天秤圖

も、朱子も明ニ々德一の上の明の字に意の字預る故に、情を傳註に留め給ひぬ。藤樹の學術より此の四句文を見るときは、心の德は虚明中正なるが故に無ㇾ惡。無ㇾ惡所は自ら善也。故に心の德を虚明中正と云。虚明中正より善なるはなし。然るに心之躰を無ㇾ善無ㇾ惡との給へるは、僻言なるべし。按ずるに、意は心の發する所と云よりして心の躰を見給ふ故に、是非なくして動の字出づ。動の字に依て、有ㇾ善有ㇾ惡の四字出づ。無ㇾ善無ㇾ惡の四字動の字のまくらことばなるべきか。心本來虚明中正なれども、軀殼の爲めに倚る所出來て意となる。倚れば心中正ならず。故に心倚りて有所となる。其倚りたる心より發する好惡、是を俗倘の好惡と云。是れ意の字の根源也。誠意傳の註解に詳也。然れば、無ㇾ善無ㇾ惡心之躰。有ㇾ善有ㇾ惡意之動。此の二句、所謂意は心の發する所と云に王子も從ひ給ひて、意の字の工夫不ㇾ瑩とは此なるべし。

知ㇾ善知ㇾ惡是良知。此の句餘り聞え過ぎたり。朱子の所謂、知者心神明、妙ニ衆理一而宰ニ万事一との給へるの知と同じ。良知の通ずる所、善惡に限らんや。此の句王子の良知にて、我れが主人公となりて、善惡の機を知得するを、秉彝の天則とする受用と見えたり。此に大なる論あり。知ㇾ善知ㇾ惡是良知なれば、意の字の工夫なくとも、良知の照す處にまかせて、應ㇾ事接ㇾ物するときは、何の障る事もなし。此衆理を備へて万事を宰る良知なれば、意の字に預る事少しもなし。意なきを聖と云。聖には誠意の沙汰なし。王子意あり。誠意の義をのがれず。誠意を論じ給へども。意の字の工夫不ㇾ瑩。故に王子の解き給ふ良知には、心得そこなひあるべし。良知を主人公とすると

陽明先生教旨骨髓。

無レ善無レ惡心之躰。　有レ善有レ惡意之動。　知レ善知レ惡是良知。　爲レ善去レ惡是格物。

此四句の文は、王子學術の骨髓也。大學考云、「王子致知の知を良知と解しめされてより、日中の天の如し」と。然れども、意の字の解、朱子に從ひ給て、不レ瑩となり。熟聖門の學術に於て、主意頭腦として學ぶ所は、此意の字を專一に論辨し、受用工夫用力切磋する處、關鍵也。藤樹も王子の良知の發明を稱美めされ、此の良知の發明に依て、誠に日中の天の如くに開悟ありと聞へたり。然れども、王子も意の字に於て不レ瑩と云所に、心眼を付て工夫すべき事也。誠に日中の天の如に、經義學術明かに開け給ば、意の字の不レ瑩と云には及ぶまじき事なるべし。然れども、聖學に於て、意の字の義不二分明一は、聖門の學術明に立ざる所あればこそ、如此にの玉ふ事也。故に意の字の註解、始終丁寧告戒に、發明先儒に卓越して、聖學を開き給ふ。於レ是、無二內外一無二餘蘊一矣。後學の者、意の字の解、朱子に從ひ給ひて、不レ瑩との給ふ所に、心眼を付けて工夫を用ひず、疏畧なるが故に、不レ識不レ知藤樹は王子の良知の發明にて開悟ありとばかり心得て、唯良知の學を專と受用せり。或は又種々の立言をなして、以て學術を示敎す。論語絕四の意と大學の意と、二義なしとの給ふ工夫をなして、學術に入れば、藤樹の意思に叶ひて、又良知の學も明かなるへし。故に意の字を疏畧にし、意の字に取りあへざるは、異學也。直視人心。見性成佛。斯人千古不磨心等の類は、意の字に貪著する事なし。象山朱子の學を支離事業終浮沈と正しめされたれど

易簡工夫終久大。　支離事業竟浮沉。　欲レ知ニ自レ下升レ高處一。　眞僞先須レ辨ニ只今一。

象山先生年譜ニ、淳煕二年。呂伯恭象山季兄復齋。與ニ朱元晦諸公一。會レ于ニ鵝湖寺一。正爲ニ學術異同一。象山和ニ季兄復齋詩韻一其詩也。朱子三年の後和韻あり。竊按ずるに、象山の學術は、識知學知を嫌ひ、唯不磨心の本躰其儘にて、心を存養するの受用と見へたり。朱子の學術を支離事業終浮沉と諷しられたれども、又象山の識知學知を志て、只心の一字に約めて、其徒禪學に走るが如き類には非ず。向來枉費推移の力に依て、終に孔門の道統躰用兼備の學術を得玉ふ。藤樹家の學者、多は不磨心の學術に流れて、孔門の學術に叶はず。先づ王子の良知の文字を用ひ、藤樹の現在當下心不レ動、欲不レ滯レ物、慈愛恭敬、温々惺々、坦蕩々の心氣の象を述給ふを用ひ、是を象山の不磨心の學術に約めて、識知學知を嫌ひ、唯其儘に養ひ立てゝ、藤樹學と覺ゆる有り。勿論識知學知も、用ひやうに依て其弊あるべけれども、不磨心に約めて是を去り嫌ふ事には有るべからず。文集云。知識者。人心感應聞見之影也。用レ之袪ニ大本靈照弊一。求ニ自然一。則無ニ時而非ニ明明德之功一也。如用ニ自知私知一。則爲レ依ニ知識一也。此語を以て考るときは、象山先生も自知私知を用ゆるを嫌ひ給ふならし。一向に識知を嫌ひ去らば、異端なるべし。今藤樹家の同志、間々に識知學知を悪むあり。先生の此語に通ぜは、嫌ひ去る事には非じ。強て去り嫌は、藤樹家の異端なるへし。世人陸王學と併べ云へども、王子は誠意を受用し給ひ、躰用を兼備せり。象山は誠意致知格物もとりあへざる受用と見へたり。

か。先づ仁を立て受用し、反ㇾ身して誠あり、與ニ天地一合ㇾ誠して一般なる、是を爲ニ大樂一、良知良能あれば、昔日の習心は除却すべし。少者不ㇾ能ㇾ奪の學術也。象山の墟墓興哀宗廟欽、斯人千古不磨心の意思も、立ㇾ乎ニ其大者一則其少者不ㇾ能ㇾ奪の受用なれども、此篇の意思とは遙に異ならんか。藤樹先生の學術は、二先生に卓然たり。學者に示教し給ふ。先つ本躰へ御目見いたし、欺と不欺とを以て試み、學者第一に本躰を知ざれば、空鍋を養が如し。本躰を不ㇾ知して學は學ぶ所皆あだこととなりぬ。畢竟學ぶ所は明德を明かにせんが爲也と。大學の意と論語の意と二義なし。誠は良知の本躰也。意必固我を格し去て、良知の誠に歸るを誠意と教へ、工夫の愼密用力下手の實地、至て切近也。万世を示教し給ふ大任、奇哉妙哉。三子の學術を默識心通すべし。

朱文公。

昨夜江邊春水生。　蒙衝巨艦一毛輕。　向來枉費推移力。　此日中流自在行。

此詩、文公晩年の作、學術精詳にして、自然と自得の機言外にあらはる。向來枉費推移の功なくんば、春水の生ずる事もあらじ。此三句め考へあるべき事也。文公壯歳より經典に心志を勞し、漸く晩年に至りて開悟めされたれば、道はたやすく得難きものなるか。然るに吾人致知力行も疎かにして道を自得せんと思ふは、愚なる事なるべし。

象山先生。

墟墓興哀宗廟欽。　斯人千古不磨心。　涓流積至ニ滄溟水一。　拳石崇成ニ泰華岑一。

謂一也、圏也。

此問答、木村子以休子受用の至極也。按ずるに、藤樹の學脉、意者心の所レ倚也とある立言より、學術を立たるとも聞へず。又論語絕四の沙汰もなく、又君子唯致二其良知一而已とある受用とも不レ聞。唯我にあらず我にあらずと受用し、唯戴有而已、元戴て有りと示教あるは、濫觴何れの所より來るや。藤樹の學術には非じ。如レ是の趣も藤樹家の學術と云ずして、木村子以休子の學術なれば、是又一流の受用也。誣て沙汰するは非也。誣て沙汰するは、藤樹學の先覺なれば不レ得レ已の小志也。

識仁篇。

學者須二先識一レ仁。仁者渾然與レ物同體。義禮智信。皆仁也。識二得此理一。以二誠敬一存レ之而已。不レ須二防撿一。不レ須二窮索一。若心懈。則有レ防。心苟不レ懈。何防之有。理有レ未レ得。故須二窮索一。存久自明、安待二窮索一。此道與レ物無レ對。大不レ足二以名一レ之。天地之用。皆我之用。孟子言。万物皆備レ於レ我。須二反レ身而誠一。乃爲二大樂一。若反レ身未レ誠。則猶是二物有レ對。以レ己合レ彼。終未レ有レ之。又安得レ樂。訂二頑意思一。乃備言二此躰一。以二此意一存レ之。更有二何事一。必有レ事焉。而勿レ正レ心。勿レ忘。勿二助長一。未二嘗致二纖毫之力一。此其存レ之道。若存得。便合レ有レ得。蓋良知良能。元不二喪失一。以二昔日習心未一レ除却。須三存二習此心一。久則可レ奪二舊習一。此理至約。惟患レ不レ能レ守。既能躰レ之而樂。亦不レ患レ不レ能レ守也。

此篇は、明道先生の學術也。竊按ずるに、孟子に所謂立レ乎二其大者一。則少者不レ能レ奪之意思なる

し。明道先生時人不レ識予心樂とある句は、自然と物我の私なく、春日温暖なる時節、春風と共に傍レ花隨レ柳活潑周流の樂ある自然を時の人の見は、誠に少年の戯れ遊ぶ如くに思ふにてあるべしと、思ひの邪なき輕き事なるべし。然るを木村子の明道も時の人になさでは傲の病なりとあるは、唯ひたすらにのき去り何事も我にあらざるの見所より、明道の意思を解し給ふなるべし。此の受用重く味あり。藤樹の唯致二其良知一而已とあるは、常の受用にて、初學は餘りをもしろからず力なきが如くにも思はんか。替りたる見所は、人々の取り付き安きものなるべし。唯致二其良知一而已とあるは、譬は常の飯の如にて、淡く味なし。替りたる見所を述ぶるは赤小豆飯蕎麥切等の如く、味あり。淡き味は珍しからず。學術に本づく事、能々沙汰あるべき義、毫厘千厘の誤とは此言なるべし。

木村子云。一日話り候通、天地と肌合たる時は、我身と云事もなく、我心と云事もなく、唯一なり。高天の原と云所有て、神止りましますと云にはあらず。神止りまします、則高天の原にて候。是我不レ知所にて、不神の神不妙の妙也。赤子孩提の體、是也。故に唯戴有而已。以休子云。自己底の戴と云は、此心有て此道を戴と云が如き、未也。木村子云、然り元戴て有二至善一と云も、元止りて有二其本分一肌合のみ也。又云、自己底非を省、其知ぬのを認をきて、其非をなをさんと受用し、其非を知るは、不レ知所よりの知覺と云事を不レ辨。木村子云、然り。仍謂く、止也、慮也、神止りまします自然、言語道斷也。動靜語默皆然り。故に戴く有而已。所

ざる謂也と云云。竊按ずるに、如レ是の受用、今藤樹先生の遺書に見へず。明道詩の三句めを說き給ふと、以休子と問答意思一般也。然れども、岡山子へ藤樹先生より口受ありて、又木村子口受し給ふは知らず。學庸解其外文集等には此の意思なし。少しにても如レ是の口受あらば、遺書になくんはあらじ。夫子の曾子へ一貫の如きもあり。是にて可レ考。會津の同志より老莊の學に觸るや否やと疑問し來るも、又理り也。我身我身にあらず、我心我心にあらず、我性我性にあらずとあるは、身體髮膚性心ともに、父母の遺體なれば我物にあらず、是を不二敢毀傷一と云は、聖教也。我生我生にあらず、我死我死にあらずと云は、死生命分也。我なす所にあらず。此はさもあらん。我眞我眞にあらず。此語說き得ず。按ずるに、信の字の事なるか。良知の事なるか。信の字なれば、信は我がまことを盡し、忠信を主とすとあれば、我にあらずと言ひ難し。良知なれば良知は天より命ぜられて、我心に具り在しませば、我か良知にあらずと言ひ難し。皆我にあらざる其當下、我と云ものなきのみ。是より見れば、寂然不動の體を求め、或は活潑周流の位に至り度と思へるも惑也、況や觸發感發の其心を認得んとする類、皆そでなき僻言也とくどくどしく書つらねしは、皆我にあらざる謂也との給ふ事、畢竟のき去と云もの也。我が物にあらず、我が物にあらずと云て、ひたとのき去るときは、聖教の旨に齟齬すべし。此示教に依て、虛空にひたすらのき去らば、後には不レ知方を戴き信ずるより外はあらじ。此の學術を信ずる輩は、意味と氣象に流れて、識知學知も去り嫌ひ、異端の受用となるより外はな

道先生の詩に預からず。然れども、此の詩に依りて木村子の見所を明辯せざれば、當時彦樹の學術不分明也。故に不レ得レ已して述レ之。正徳元年卯の臘月、以休子試を記し木村子へ送らる。其言云、近來の受用立志に約り、自己其儘の眞、存養の功、其自然に御坐候。此所易簡眞切、誠に纖毫の力を不レ致所に御坐候。此の存養の位、手に入り難き事勿論に御坐候へども、手に不レ入所に、猶存養の功、又自然なるものに覺へ申候。御心に合候哉否哉までを御示し被レ下候やうにと奉レ希候。木村子返翰云、不レ及ながら拙夫存候所に相合、御賴母しく大幸に存候。益々御上達候へと至説に候。吾人我身我身にあらず、我心我心にあらず、我性我性にあらず、我生我生にあらず、我死我死にあらず、我眞我眞にあらずと辨へ申べく候。如何思召候哉。此段筆紙に盡し難く、拜顏の節可レ得ニ賢慮一候。辰の三月、木村子上都。以休子云、我心我として有事、吾人の常なり。然れども、時として我心天と知る一端有り。是れを以て、常に心我がものになりて有る事能く知れ候。木村子云く、さればこそ舊臘同じ事をくど々々しく書記進じ候事也。其義は天地と一に肌合たる自然の位ありつる故、身心性生死眞一つ一つ心に中つて、皆我にあらざる自然を書記したるもの也。其の當下我と云ものなきのみ。彼の高天原に神止りますと神書にいへる所の自然也。此の時は我身と云事もなき事也。是を止の神と云、至善と云。是より見れば、寂然不動の體を求め、或は活潑周流の位に至り度と思へるも惑也。況や觸發感發の其心を認得んとする類、皆そでなき僻言也。是故にくどくどしく書きつらねしは、我にあら

ㇾ躓ㇾ等也。等を躓るは君子の戒給ふ所也。大なる哉先師之議論。君子唯致二其眞知一而已と。唯の字而已の字、心眼を付けて受用すべき事なるべし。

明道先生學説要領。

雲淡風輕近二午天一。傍ㇾ花隨ㇾ柳過二前川一。時人不ㇾ識予心樂。將ㇾ謂ㇾ偸ㇾ閒學二少年一。

此の詩明道先生自得の詠か。和豫圓通の氣象あらはる。昔日以休子會津へ下向あり。東武にて箕作氏に逢ふ。話て云、明道先生絶句の詩、時人不ㇾ識予心樂とある句を、木村子云、明道も共に時の人也。明道も時の人にして見るべし、時の人も明道も銘々予に樂ある事を不ㇾ識と云意也。明道の一人樂有る事を識て、他の人は不ㇾ識とあれば、明道傲の病不ㇾ免也との給とあれば、箕作氏感心不ㇾ斜、誠にさもあらんと驚かれたる躰也と、歸京の節會坐にて話し給ふ。岡田子の云、明道の詩、三句めを、明道も共に時の人にして見ては、詩の一躰不ㇾ通也とあれは、以休子不ㇾ肯の氣象あらはる。予も末坐に在りて、此の言を聞き疑をなせり、誠に木村子は岡山先生の高弟、以休子は木村子の傳を得玉ふ。如ㇾ此の見所は、後學の者如何。心得難き事也と思へり。以休子會津にても、此の詩の演説、又戴き禱るの立言、或は作州の同志某眞知を一路に信じ、譬は晴天も難ㇾ有又雨天も難ㇾ有、此の眞知あればこそ忝しと思へる受用を取り給物語りども有し故にや、歸京の後會津の同志某より老莊の學術に觸れるや否と疑問し來れり。木村子は岡山先生の高弟也。遠近の同志悉く其學術德行を信ず。今木村子の學術を述る事、明

和慈愛恭敬坦蕩々の氣象かくる故に、藤樹の學術は此の止の本體良知に不レ欺やうに工夫を用ゆ。不レ欺やうに工夫を用ゆるは、我が心の倚る所を格して、中正にする也。我心の倚る所を格して中正にするは、格物致知誠意の工夫也。本體の知を以て工夫し、工夫純熟する所、本體自ら明なれば也となり。畢竟意者心之所レ倚也と云立言に不レ通は、藤樹家の學術に非る事、必然たり。能く學術の敎に本づかずして、自知私知を以て學べば、毫厘千厘の誤となる。象山王子の學術は止の本體良知より直に照して正心の工夫なし。正心の工夫あれば直に不レ能レ照也。然れば、心之良知斯之謂レ聖。其聖は良知也。其良知より直に照して事を用ひ物を稱るは、聖と同じ。陸王は聖と云べけんや。聖には非ず。希聖の賢者也　況や陸王より下なる者をや。此等の學術を考へ合せて、藤樹の學術は聖學の蘊奧を開發めされたるを尊信すべし。

文集云。大極動而生レ陽、靜而生レ陰。所謂命也。蓋大極不三是レ陽而好一、不三非レ陰而惡一。然人不レ能レ無二意必之私一而於レ事有二適莫一也。於レ是、聖人揭二出賦命自然之理一而解二其惑一而已。夫生也、達也。富也、貴也、得也。福也、皆陽也。死也。窮也。貧也。賤也。失也。禍也。皆陰也。君子立二大極一而不レ願二乎レ外於二天下一無レ適也。無レ莫也、是以。死生窮達、貧富貴賤。得失禍福、皆爲二寒暑風雨之序一。夫然。故君子唯致二其良知一而已矣。命分豈足二論辯一乎哉。

此の論、天地未書の先より說き下し、今人事を盡す處、學術應用の至極なり。然れども、初學者大學に於て好惡の說話心裏に透徹なくては、大極陰陽消長の理には通じ難かるべし。不レ可

し。先生示教し給ふ處の根元、先づ止の本躰へ御目見えせよ、學者第一に本躰を知らざれば空鍋を煮るが如しとの義也。本躰とは仁の本躰、固有の眞知也。本躰を知て恭敬奉持し、主人公と稱し奉り、畏れをなすの義にして、不レ欺を第一等とす。是れ愼獨の工夫の妙術、格物致知在レ於二言外一矣。此は是大學の宗旨にして、此教へ先儒に卓越し給ひ、聖學を開發めされたるの本旨也。されば學者受用の本領、本躰の知を以て工夫し、工夫純熟する所、本躰自ら明なれば也と。是藤樹の主意頭腦也。學者此を心得そこなひ、初學より明なるの場に居て、我れが主人公となりて受用をなせり。此誤也。藤樹の主意、工夫、本躰と齟齬す。

藤樹先生、聖學を開發めされたるは、是こそ主意頭腦なる所也と、心裏に徹して信仰するは、理り也。多くの學者、先生の主意にも通せず、大槩陸王の主意を取て受用し、藤樹の主意と覺へたる有り。大なる誤也。熟〻按ずるに、藤樹家の同志とて、意者心之所レ倚也とある主意にも不レ通して、他學を受用切磋せば、藤樹の神靈吾が子孫の者とて、如レ是吾か主意にも不レ通して受用切磋するは、何事ぞや。不レ學には不レ如とも苦々しく傷しく思召れん。

文集云。心之眞知、斯之謂レ聖云云。心は理氣を兼て躰に屬す。眞知は天の命ずる性にして、我が心中に具り給ふ心と知と、二つにして一つ、一つにして二つ、心の眞知は主人公也。此主人公は、不レ動レ于レ欲、不レ滯レ于レ物、温和慈愛、恭敬惺々、坦蕩々なる者也。我が心虚明中正なれば、自然と眞知呈露して、温和慈愛恭敬坦蕩々の氣象あらはる。我が心虚明中正ならざれば、温

は違ふ事有りと聞けり。宜哉。

近來集會議論切磋、何となく見所立て、本躰方克己方とて一律なる事なし。今兩方を工夫し見るに五事の不正を正すを專に辨するを、克己方と云へり。又良知の本躰を尊信し、此を養ひたてて行けば、克己も其中に在りと專に云を、本躰方と云へり。此の兩方の受用も依り所なきに非ず。

熟く吾人の受用を考ふるに、先づ聖經を誦む事跡畧にして、學力乏く、工夫も又跡にして、向上になり。下學の勞なき故に上達する人も稀也。先づ賢傳を明にせざれば聖經に通する事成り難きは、必然の理也。其賢傳を誦む中に、其賢者の主意にも不ㇾ通して、はや我が見所立て、其筋を祖き云へり。勿論聖經にも不ㇾ通也。譬に程子の書を讀て、實に程子の主意にも不ㇾ通して、程子を祖き云へり。朱子陸王の事も同じ理也。其祖き云へるうち、又よき筋を聞ても、前の學術主となり、後の聞ける學術客となる。此れ吾人の通病也。凡そ聖學は、宋朝より明朝の賢者に至て大に開けたると。然れば程朱陸王の學域を能く尋ね、學は聖教の旨にも通ずへし。勿論藤樹先生の學術にも通じ安かるべし。故に不ㇾ及ながら藤樹程朱陸王の學域を摘要して左に述ㇾ之、學術の歸趣を論辨す。誠に可ㇾ愼可ㇾ畏の甚也。

藤樹先生學說要領。

万欲紛擾中。　止躰常寂然。　小人揜ㇾ不善。　良知不滅玄。

此詩文集知止歌の起句、先生の學域也。大學小人間居の註解を觀て工夫すれば、此詩意に通ずべ

せん事を希ふ。于レ時河合子の誘掖にて御祠堂を拜し奉り、始て以休子に示教を受く。不ニ敢毀傷一を以て示さる。其後木村子に對面す。翁問答を讀めと示し給ふ。會座へ侍る事年有り。以休子諸同子に示して云、學者唯信の立と不レ立とに在るべし。木村翁の傳來戴き禱るに在る而已と。每度示敎せらる。諸同志の中、戴き禱るの立言にて、藤樹の道に通したる人も有り。又不レ通人も有り。又取ざる人も有り。此の戴き禱るの事、先年會津の同志四五輩洛陽に上り。戴き禱るの切磋も有りと聞けり。是木村子の立言也。其後會津の同志歸鄕餞別の折、節律あひて誠に快き位の有ける時、木村子感通の餘りに一首を詠し給ふ。もろともに、戴くみそら、雲晴て、かげくらからぬ、道なまどひそ、と有りければ、一坐の同志感ありて、通じたる位有りと聞く。木村子は此に地平(ヂナラシ)と云事を付けて示し玉ふと也。地平とは格物の事と聞けり。享保元年の夏木村子終焉し給ぬ。其後は以休子を先覺と稱す。以休子又示して云、受用は唯其儘の存養也と。其儘の存養とは、先生の所謂「現在當下之心、不レ動レ于レ欲、不レ滯レ于レ物、慈愛恭敬、温々愷々、坦蕩々」の心氣の象を、其儘に存養せよと也。又云、每朝平旦誦經天拜の節は、不レ動レ于レ欲、不レ滯レ于レ物の時也。此時天と一般にして、肌の合たる位を得る事ありと云々。其後以休子も終焉にて、先覺と稱する人もなし。故に諸同志各々の見所立て、受用切磋區々也。木村子は岡山先生の口受を得給ひ、以休子は木村子の口受を得給ふ。藤樹先生の音容も日日に遠くなり。近來の學術予生ニ疑惑一。更に先生の學庸解を取て讀レ之久し。按ずるに、近來の學術、先生の宗旨と齟齬せる事を覺ゆ。何れの道と云へども、末に至りて

良知程けつこうなる者はなし、安樂なる者はなしと取て、是を學術とし、此の良知をさへ其儘に存養すれば、君子に成る事必。爲ニ聖人ニと云て、苦惱なる心出れば、其苦惱を防ぎ、欲心出れば、其欲心を防ぎ、或は生死を苦む心出れば、其念を防ぎなどして、常に良知の安樂なる事を求むるを受用とせり。然れども、此の軀殼あるに依て、件の俗倘の好惡出で、思ふやうに安樂の良知にならず。故に或は此の軀殼をいやしめ、或はいやがり、或はのき去、我身非ニ我身ニ我心非ニ我心ニなど有るの手段出づ。此は是學術の敎の蔽也。藤樹の學術は、此躰殼のき去らず、此體殼ありて、良知の實體に成りやうを示敎し玉ふ。其成りやうは如何。曰。意は心の倚る所と知て、作の利害、名根、意必、適莫、好惡の執滯、是非の素定、財色、勝心、毀譽、得喪、將迎等の魔障を格し去れば、心倚らずして自ら虛明中正になる。虛明中正になれば、良知の實體自ら呈露して常に安樂坦蕩之人となる。夫然り、和文の文集卷頭、清水氏谷川氏へ答へ玉ふ書翰に、此の趣き有り。近來の學術も、此の趣きにて受用すと云へども、其文簡にして理深きが故に、意思とくと通ずる人なし。故に藤樹の學術に叶はず。毫厘千里の誤り有り。希くは學庸解を熟讀して、聖謨賢範より學術を立は、藤樹の意思にも叶ひ、又毫厘千里の誤りもなく、又文集卷頭の章にも通じ安かるべし、多くの學者、王子の四句文の良知の受用をなせり。哀乎哉。

昔し岡山先生、洛陽葭屋町一條の邊りに、藤樹先生之祠堂を築き玉へり。享保元年の春、河合子鼓尾町祠堂の演說あり、予年來藤樹先生の學脈有らん事を尋ぬ。是幸ひ冥加なる事に思ひ、御祠堂を

樹の學術は常に利害、名根、意必、適莫、好惡の執滯、是非の素定、財色、勝心、毀譽、得喪、將迎等の病根をたち去て中正に復れば心の神明順應して、當下良知となる。所謂、王子の良知と藤樹の良知と、指す所異也とは、是れ也。

按ずるに、件の利害、名根、意必、適莫、好惡の執滯、是非の素定、財色、勝心、毀譽、得喪、將迎等は、軀殼に屬して心を倚らしむるの魔障也。心は本と中正にして不ㇾ倚ものなれども、凡夫は此の軀殼を養はんが爲に意念を生じ、心倚りて魔障出で有所となる、俗倘の好惡とも云。意は心の倚る所との玉へる、是也。此の倚る所の病根を尋ね知て、利害心出づれば其の根をたち去て、中正に復り、意必、適莫、好惡の執滯、是非の素定、財色、勝心、毀譽、得喪、將迎等の病出づるも、其根を尋てたち去り、中正に復り、其病根を去るは、魔障の倚る所を格すと云者也。倚る所を格せば中正に成るより外はなし。中正になれば虛明也。心虛明になれば自然と良知の實躰、愛敬の心呈露す。愛敬の心より發する好惡を天性の眞情と云。人欲の好惡と混亂すべき事を慮り玉ふと也。人欲の好惡は件の魔障也。倚る故に魔障生ず。不ㇾ倚故に天性の眞情の好惡呈露す。然り近來の學術、意者心の所ㇾ倚也と云立言より學術を立す。此の立言をば其通りにさしをき、彼の良知の實躰に取りつき受用をなせり。文集に云、良知の實躰、此心無欲也、此心淸淨也。此心窒碍なし、此心偏僻なし、此心苦惱なし、此心好惡の執滯なし、是非の素定なし、此心習なし、名を好む事なし、終始なし、生死なし、此心常に安樂なる者と有り。學者是を見て、

も、眞知の本躰其の儘に存養すれば、自ら其の中に在りて君子に至る事と覺へり。此誤也。君子に至るほど、致知格物して意を誠にする工程を用されば、室に入る事難かるべし。先生の詩に云く、畏レ天尊レ性莫レ懷レ居。世事紛々以レ已憂、誠意工夫純不レ已、孔顏至樂自レ玆求と有り。然れば君子に至るの受用は在ニ誠意一矣。

大學考に云く、意者百惡の淵源也と。意の字後來の汚染なる事を愼思明辨して、是を入德の初門と心得たるこそ、遡レ於ニ藤樹先生學術一之淵源也。熟ゝ考るに、先儒の歷々、意の字の解不レ瑩が故に後學の者聖學の筋に不レ叶所ありて、學術の欛柄を知らず。然るに先生意の字の發明先儒に卓越して、聖學の敎全く備れり。然るに今吾黨の學者、藤樹は本朝にて聖學を開發めされたるとは畧辨れども、大學經傳に於て註解先賢に卓然たる事を明辨する人稀也。唯一向に王子之四句文の心を用て、良知より爲レ善去レ惡の格物を行事とす。四句文は王子學術の骨子也。四句文の意にて眞知を尊信し格物をすれは、受用はすめとも王子の學術也。藤樹の學術には非ず。四句文の意を用て藤樹の學の骨髓と覺へたるは是大なる誤也。夫凡夫の凡たる所、意の一字に至極せり。其の意は心の倚りたるを云。心の倚りは何れの所に在や。心の中正ならざる所を倚ると云。此の倚るを指して意と云。意者心之所レ倚也との玉へる立言、是也。又云、意は事跡境、奇哉妙哉。此れ藤樹先生之學術也。先生の所レ謂意必固我、皆意也。論語の意と大學の意と二義なしと也。夫心は本來虛明中正也。然れども、凡夫は常に虛明中正を失ひ、平常軀殼の爲に俗情好惡發して、虛明中正ならず。故に藤

傳へ聞く。藤樹先生は和朝の一君子也と。欲レ遡ニ於藤樹の學術一者は、先づ先生學庸の解を熟讀するを專務とすべし。學庸は經書也。其の經書を註する事は、作者の聖神を會通するに非らずんば、卒に解釋する事成り難かるべし。我が意思を述たる書とは同レ日して不レ可レ語。先生意思を述し玉ふ書に翁問答あり。是は庶民の見て佛者の迷を解き孝悌忠信に本づかしめんが爲に、壯年の時書し玉ふと見へたり。又漢文の文集あり。和文の文集あり。是は同志の疑問に依て多くは述べ玉ふ書翰也。しいて學術印證の書となすべからず。解釋し玉ふ所の學庸は。聖謨賢範也。是を學術印證の大本とし、其の外の書翰等は學術を擴充する爲には取用て可なるべし。近來多くは翁問答又は和文の文集等を取用て學術を立たると見へたり。學庸の解は先生の骨髓を述玉ひ、聖謨賢範なる故に、學庸の解を見得せずして先生の學術を尋る人は、必ず他岐に走るべし。先生三代以來明朝に至るまでの諸儒の說の異同を考へ玉ひ、其の要とする處正心に在り、我が心中正なれば、謙虛にして身脩り、先づ學術の欛柄を得矣、其の工程は意を誠にするに在り、意を誠にすれば心正し、心正しければ勿レ意勿レ必勿レ固勿レ我の室に入るべし、絕四の室に入らんと欲するもの、先生の論語解を熟讀すべし。論語解を熟讀せざれば、聖人の聖たる處、賢人の賢たる處、異學の異學たる處を知らず。解釋し玉ふ處の論語九章、私に案ずるに、好惡適莫を超脱して、受命處の括囊也。然れども、大學の誠意、意の倚る處を說話なくて、論語解を窺ひ見るは、等を躐ゆると云べけんか。致知格物は、凡夫より君子に至るの行事也。心得そこなひたる學者は、正心誠意致知格物は餘りに沙汰せずして

藤樹先生學術定論 一名孤琴論

洛下　後學　石川氏述

學者學術に本づく事、能々沙汰有るべき義也。學術ほど大切なる者はなし。熟々考るに、後世の師とし鏡とする所より見れば、聖門の弟子、其の學術の正しきを受け、其の學ぶ所も工夫切實なる故に、日に新に日日に新にして、或は堂に昇り或は室に入り玉ひぬ。是れ學術の正しきを受けて學ぶが故に、万世の師範となれり。老莊の類は、其の學術の高き事聖學に越へ、其の德も有り、又後世の信ずる事も厚けれども、自然と聖學と稱する人なし。此れ皆學術の正しきに本づかず、學の正しきを受けざる故也。其の外、和漢ともに大儒の名を得、其の學識も高く、其德もありて、或は一時に鳴り、或は後世までも其の流を信ずと云へども、聖學に比すれば過不及ありて師範とは成り難し。畢竟學術の正しきを受けざるが故に、德と云も凶德也。本朝藤樹先生は、三代以來明朝までの諸儒の學域蘊奧を精く考へ玉ひて、新に聖門の學術を興起し玉ふ。其の新に興起し玉ふ學術如何。曰く。意者心之所レ倚也と。此の立言、易簡直截、万世不易之學術也。此の立言を學術の主本として受用切磋するときは、不レ中と云へども不レ遠也。昔日親炙の同志多しと云へども、此の學術を傳へたる人未レ聞レ之。况んや後世に於てをや。君子小人學の分るゝ所、倚ると不レ倚とに在る而已。譬へば藤樹家の學者親切の同志と云ども、意者、心之所レ倚也とある立言を本とせず、外に種々の立言をなして學術を述る者は、藤樹學の異端なるべし。

藤樹先生書簡一卷。或人從二浪華一携來矣。元貞小川子得レ之示レ余。而余見レ之。浪華碩菴老人之所二輯錄一。而篇次不下與二吾黨之所レ傳之書一同上。間亦附二己意一。所レ論許多也。故與二二三之同志一。相共繕寫。而備二校考一云。元文四已未年龝七月望日石河定源書

道の冥罰を被ㇾ蒙母に二度あひ申間敷候。か様になげき申所、御聞届被ㇾ成候て不便に思召候は、能様に御つくろひ被ㇾ成かりことに言上仕るなどゝきこしめしあやまりの無㆓御座㆒候様被㆓仰上㆒御暇被ㇾ下候様に奉ㇾ願外無㆓他事㆒候。

三月五日

右は織部様へ懸㆓御目㆒可ㇾ申間、私御暇の義申上旨趣を具に小左殿への文に仕書付候へとの小左殿御指圖に御坐候故、此書にて小佐殿へ渡申候。定て織部様へ御上げ候はんと存候。此趣御心得被ㇾ成、治左殿と御談合なされ、其上様子能相調申様に随分被ㇾ入㆓御精㆒可ㇾ被ㇾ下候。此度の義に候間偏頼存候。飛脚下し可ㇾ申と小佐殿へ談合申候へば、無用の由に御座候故、無㆓其儀㆒候。作右様より參候飛脚、其元にちと逗留仕筈に御座候由に候。何とぞ御才覺被ㇾ成此飛脚の使に被㆓仰出㆒を承候様に被ㇾ成可ㇾ被ㇾ下候。

三月九日

莫の見をからずして固有の天則照々として往として道をさるところなく入として自得せざる所なきの本躰を掲出して、君子安身立命の實地を示したまふ。

乞二致仕一書

今度私御暇の義言上被二成下一候へと奉レ願候に付て、傳左殿助右殿御同心被レ成、種々御異見の段、忝奉レ存候。此中も如二申上一、一つには何れも如二御存知一二三年以前より病者に被レ成候て、次第に人なみの御奉公相つとめがたき躰、迷惑に奉レ存候。一つには古郷の母十年以來ひとり住を仕罷在候。私の外別に母をはごくみ可レ申子も無二御坐一、又はよすがに賴可レ存ほどの親類も無二御坐一候故、四五年以前より漸々飢寒に及ぶ躰に御坐候間、此地へつれこし可レ申と奉レ存、去々年御理り申上むかひ參候處に、もはやとし罷寄又は病者に御坐候て、里の內をも自由にありき申事不二罷成一躰に御坐候。其上女の義に御坐候へば、古郷をはなれ遠國へ參る事、たとへうへ死仕候共成申間敷旨申候故、不レ及二是非一すて置罷歸候。私義はやしなひ親共に四人迄御坐候へども、二人には幼少にてはなれ申、今母一人殘り申候。母一人子一人の事に御坐候。其上母存生の內も、今八九年の躰　御坐候條、御暇申請古郷へ罷歸、母存命の間は如何樣のわざを成共仕養申し、母相果候は罷歸貴樣を賴存めしかへされ被レ下候ば、御奉公仕度覺悟に御坐候。此外聊存子細も無二御坐一候。私の義に御坐候條、左樣には思召間敷候へ共、若右申上處當坐のかりことにて、眞實は身上をもかせぎ可レ申望にて申上かと御推量被レ成事も御座らんと存、此中も度々申上如く左樣の所存少々にても御座候ば、立所に天

里血留つて癰疽となるがごとし。人の躰本來快活にして病なき者なれども、もし癰發し疽生するときは、其うづきみずからたへがたし。物すこしこれにさはることあれば、其はしること又いかんともすべからず。こゝに於て針灸膏湯その宜に隨て施し、膿汁潰出て瘡口尋て斂ることを得ぬれば、氣また行り血また活て本來の躰に復り、痛あることなくして快活安穩なり。されば心の躰は本をのづから四を絕り。たゞ意必固我一たび吾心の癰疽となりてより長戚々の患出來て、大小となく親疎となく、百物萬事さはりて痛まざるはなし。若よく學て時にこれを習ひ、聖門の針藥を用ひて治療したる時は、凡心の膿出、その瘡痕も留らずして、絕四の本躰遂に復り、神氣ふたゝび活潑流行す。さきの痛む所は今の快き所なり。中ごろの長戚々たるはその初の坦蕩々となりぬ。心を盡さゞるべけんや。學者凡心の厭ふべく本躰を求むべきことを知るといへども、用功下手の實地をしらず。故に孔門の賢者夫子の心躰を擧て凡心の病根を指點し、克己の實地を開示することかくのごとし。

君子之於二天下一章主意。

義之與比は心の本然人々の固有する所、所レ謂隨身の規矩なり。この規矩をよくたもつて失はざるを君子とす。惑ふてこの規矩を失ふ者を小人とす。しかるに學者往々たゞ力を先聖賢の形迹に用ひ、世間の萬事万境に於てあらかじめ適莫の見を定て、これを以て應事接物の準則となし、この適莫をすてゝは持循すべきところなしとおもひて、更に本然固有の天則あることを知らず。故に聖人始にその準則とするところ眞の準則にあらず却てこれ君子心上なき所の病痛なりと指點し、次に適

み。和歌はわきてわがつたなきわざなれど、吟詠の中もしくは提撕の一助ともなるべきかと、良知一貫のおもむきをこしおれにつゞりていさゝか切但の情をあらはすといふ。

先生中川氏に贈る所の歌十八首あり。今とりてこれをあつめ序でゝ一文とすること、左のごとし。

われに昧からぬ心あり。明德といひ、良知ともよべり。これ赤子の誠にて、聖人の本也。たゞ此心に打任せて意なく必なければ。かゝる人は順境も自在逆境も自由にて、その樂み眞に樂し。其飮食は至りて美く、其男女は極めて和げり。天下の利その富に似たるものなく、天下の名その貴きに如くはなし。仙は不老不死といふ。これは吾が不老不死なり。佛は超出三界と說く。これは吾が超出三界也。これは生れたる始なければ、滅ぶべき終もなし。生死は浮雲にて、これは大虛の常也。天地萬物一躰の仁といひたるも、たゞ此心にぞあなる。されば道の要學の則といふも他にはあらず。此心を認得て之れを充養ふにこそあれ。路の外にまた何を求めむ。

子絕レ四章主意。

凡心の惑萬同じからずといへども、其根すべて此四の者にあり。四の者さへなければ、習も汚すことあたはす。名利酒食も溺らすことあたはず。故に百端千條欲生じて止ることなきは、みなこの根よりなりき。然るに四の者をの〳〵その界をなすにあらず。畢竟たゞ一病なり。いはゆる意に始つて必に遂げ固に留りて我になれば、我また意を生じて循環なし、心知凝滯して意必固我となるは、氣運

萬物同く此大本より生じたれば、四海の人は悉皆連枝なり。然れども人の世に處るや、身あれば私なき事あたはずして、物の我と相形るゝを見るより、墻に鬩のまどひ忽に生じ、同胞の兄弟すら賊連して路人にひとしきにも至れば、其他はいふべきにもあらざり。かくまどへるがなかに、中川子の僕を視るや、父を同しうするがごとくにして、いはゆる連枝の本然なるものくらからず。僕つねにその愛敬の心に應ずることのおろそかなるを愧ぬ。その心を秉るや篤實にして、重きを任へる力の強き事は、僕がごときの及ばざる所あれども、文才のおとりて經意を見ることの僕にだにしかざるを以て、われを誤て先學の友とす。是も又道を求る心切なるによりて、たとへば空谷の足音なるべし。文王在さゞる世に興りて、習俗にひかれず、外議をおそれず、其志まことに豪傑なる哉。先覺の敬ひ僕が安んぜざる所なれども、萬一中流の鄰ともなり、且は師友の箴羊ともなるべきかとおもへば、しゐて辭することをもせずして、相長ずるの益を求めてき。其志專らなれば神明の助あるにや。君のめぐみゝ他に異なり。よりて非常の暇を賜りてまたわが陋巷に來り、大學の道を講明すること三たび月を閲て、すでに鄕に歸りなんとす。別に臨みてかさねて工夫の本領をとふ。余がいはく、路難おそれず長途いとはず、遠く來りて僕に同胞の愛あり。これ何の心ぞや。名にあらず利にあらず、また君父の命にもあらず。たゞかの懿德を好める誠やむことなき者のしかるのみ。是即眞知の躰、聖人の本、吾人安心立命の地、これをすてゝ更に工夫の本領なければ、僕がこたふべきにも、これをすてゝまた一言の出す所なし。たゞ吾丈の默識して此實躰に融會せんことをねがふの

夢も覺もたゞ故郷を念じ、勞すれば歸思をまし、難にあへばいよ〳〵歸思をまして、息猶存すれば此心懈ることあたはず。百年の故郷すらなをかくのごとし。况道德は萬劫不壞の家山なるをや。凡夫は名利を以て安身立命の地とすれば、事として名利の謀にあらざるはなし。されば名利の爲に身命を惜まざること塵芥のごとし。たゞ此心を道にうつしぬれば、所謂眞志也。其一たび立ときは、德に入こと難きにあらず。故に志立而學半といへり。

むかし商丘開信ずる所に非るを信じて、水を踏む溺れず、火を踏む焦れず。此事或は怪誕不經とし、或は寓言を以て印證するにたらずと。然れども達觀は事の有無に泥まず。たゞ理の是非を見るのみ。これをしるすもの、よく至信の神妙あることを發明し得たり。彼さへかくのごとし。况聖賢眞實の道を學び吾人具足の性に復るに於て、四極八遠なにの窒碍する所あらんや。故に學者の德に入難きは、たゞ信の篤からざるなり。もし神舍裏面に一毫の攙雜あれば、すでに信にあらず。よく水止れば月現じ、心靜なれば道存ず。間思雜慮石を投げ、邪念妄想堤を崩して、この本心の水を擾亂することなかれ。その工夫は時に自ら定むるのみ。いはゆる存養は靜時の省察、省察は動時の存養、本躰即工夫、工夫即本躰なりき。

外に向て戒め愼める人は、影をおそれて走にこそあれ。されば十目の嚴他にあらずして吾人裏面に照々たり。こゝを見ること分明ならば、聖賢戒愼愼獨の功、なんぞ勉强に入ことを患へんや。

送二中川子一

戸田子道に志あるによりて、一躰の意廣く通ひ、誤りて區々を以て先覺に比べなし、海陸の路難を憚ずしてこの陋巷を來り訪ふ。先學の訪僕が當るべき所にあらざるなれど、此友のあひがたきに其情もまた切なれば、固陋かへりみるに不及、遂に管見の一斑を語りて相長するの益を求めぬ。別に臨んで功夫の本領を和歌に綴り、聊言を贈るの響に倣ふ。歌の道はやつがれがまだ手習はぬことなれば、そのさま觀るべきにはあらねど此の道學べらん上には、となふるにたよりありおぼゆるにやすくて、千が一の助ともなりなんやとて、相爲に謀るなるも、いはゆる愚者の慮にこそ。もし此意をすてたまはで、あるはかの筌のごとく、その蹄にもなりなば、大ひなる幸ならんといふ。

先生戸田子に贈る所の歌六首、幷說あり。其說すでに明備、また簡切なれは、其心を求るもの、此におゐてみづから足り、歌あるをまたず。故に今歌を略し說を存する事、左のごとし。

我に膏粱あり。味かたるべからず。我に文繡あり。美いふべからず。金銀あり、珠玉あり、其貴重世にたぐひなし。人の欲する所盡くありて、これを取るに禁めなく、これを用ひて竭せず、月あり花あり絲竹あり、興はつねに佳興、景はつねに勝景也。吾が樂土は澤野千里にして、水旱のうれへあることなし。何を苦しみてまた外に願はん。これ欲を以て欲根を拔去るの對算、炎炎の病勢を治するがごとし。この見底に徹せざれば、外欲全く放下しがたし。いはゆる鐵を轉して金となすの術也。學者深く思ひて早く辨ふべし。

性に復るは鄕に歸るがごとし。久しく客となりて今歸らんとす。そのいまだ鄕里に至らざるうち、

も、此惑を解んとするにこそ。蓋此志を立て、良知を以て安心立命の地と定むれば、氣に將帥ありておのづからよく節制する故に、昏昧懶惰なく亦躁進妄爲なかるべし。躁進なければ支撐の病生ずべからず。昏惰なければ頑空患を爲べからざる也。然るに此志を立て、良知を以て安心立命の地と定むるは、徒にこれを守着するにはあらず。必これに纔に物を格し知に致るを以て一心の主とすべし。たとへば農夫の稼穡を以て一心の主とするがごとし。所ㇾ謂必有ㇾ事焉ものこれのみ。格致を以て常々の事とすれば、心これによりて存し、性これによりて養はる。存養といへるも此格致にして、外に更に存養の功なし。常々如ㇾ此存養すれば、良知の志漸純一に向ひて、支撐頑空多きは寡きに至り、寡きは無きに至ること、おのづからその中にあり。然ども愈るに難うして發るに易きものは病なり。故にすでに如ㇾ此しても若は靜座もしは應接の境、此二病いできたるにおいては、此時に當つてまたかの省察克治の功を用ゆべし。支撐にいれは提撕警覺してその躁妄を禁め、頑空にいればまた提撕警覺してその昏隋を止るのみ。かの善念能慮のごときは、即良知本色の現るゝ所なれば、その起る起らざるに意をつけずして自然の天機に隨ふべし。よく此義を躰察し氣象を認す工夫受用を忘れずば、また何の二病かあらんや。

右兩條、今同志中對症の方也。豫州歸着の自忠に告て、互にこれを切磋琢磨したまはんこと、一躰の志願ならんか。

送㆓戸田子㆒

て功なきのみ。是故に初學の士先眞知を以て定めて安心立命の地とすべくして、堅固志を立勇猛己に克て、一毫も艱難苦勞の憚有べからず。さて己に克に當つては、身命といへどもまた顧惜する所にあらず。况其他の小利害をや。これ殺ㇾ身成ㇾ仁の義也。力を用ること是の嚴密武毅にして、獨克去がたき人欲あらんや。人欲克易き時は、致知の功始て實落あり。困勉變じて易簡和平となりぬ。豈心を盡さゞらんや。又いはく。初學の時は嚴密武毅の力を用といへども、時として墮落することあるに免れ難し。こゝに於て必其の墮落を咎むべからず。たゞ毎々提撕度々警覺して、成德の日至るを待べし。また一默の正助の念を起すべからず。是即初學の門よろしく躰察明辨受用すべし。

岡村子問ていはく。應接の時は眞知辨へ易く、省察克治の功手を下し難からず。無事靜座の時には眞知の本躰認難き故に、守らんとすれは支撐に入り、支撐を離れんとして守らざればまた頑空に入て、着實下手の圖方なきは如何。

答て曰。これも又初學の通病、まことに切なる問なり。支撐は玄妙高遠を好み、氣象意味を認て守る病也。頑空は本心の徃ていまだ復らず隱れていまだ見れず知覺なく念慮なき時也。これいはゆる正助と忘との二病也。此病たゞ靜座思慮なき時の妨害をなすのみならず、應接の境に祟をなすも又此病魔なり。おほよそ應接有事の時と無事靜座の時と、其工夫二樣なし。いかんとなれば、應接の境にても思慮なき時は存養の功靜座にひとし。無事靜座の時にても思慮あるときは省察克治の功應接の時にことならず。但其分數多少あるのみ。陽明夫子の存養は靜座の省察、省察は動時の存養といへる

を得れば、昏迷忽破れて無レ迹がごとくなりといへども、根本深固の欲實に一朝夕の能淨く盡す所にはあらず。此根いまだ拔ざるに、かの久しく習染する所の者相對するの境に在て外誘したる時は、譬にいへる燼に火の就きやすき也。緣に牽れ興に乘じて心氣守を失へば、故態またあらはれて、終に其熟所に沈溺することむべなりあやしむにたらず。これ杯水車薪の尤けき也。おほよそ言語の癖あるさへ、よく心を用ひざれば其正しき所に歸り難し。況や腹心に凝滯し骨髓に伏藏したる者をや。いはゆる困勉百倍の功、玆を用ふること正に玆に在り。然るを吾人困勉の功を用ひずして徒に時習の悅を希ひ、正助の利心を挾みて進修を難事に憚り、さて得る事なければいへらく、氣質の濁駁なるが爲に文才の長ぜざるか。はた學術の眞に非るかと。妄に疑惑を生じ、その工夫の實嚴密武毅ならざるによることを顧みざれば、咎の己にあるをも辨へざる也。抑初學の困勉を用ひずして頓に聖域に入るの日あることとは、顏子といへども能はざる所也。況其下なる者をや。よろしく反求むへし。大學誠意の傳、瑟僩を以て切磋の眼目とし、中庸に人を百を以て換骨の靈方を示したまふ。これを農業に譬るに、困勉百倍の功は耕耘培灌辛勞の時なり、時習の悅は所收の收實也。この功なくてこの悅を得ることありとおもはゞ、稼穡の艱みなくて秋實を得んとはかる也。惑へるにあらずや。然りといへども、世の勉强するもの古來いくばくにして、その德を知るに至るはおほからざりき。これは又徒に立志克己の意氣格式なる者を爲て、己が良知に本づくることを知ざれば也。克己せざれば欲縱橫す。立志せざれば氣流蕩す。良知に本づかざれば立志克己は妄意強制と成故に、勞し

は面をかくし、夜わりく時は火をともす、火なければ用ありてもありかずともいふ。むかし人は夫餘所へゆき久しく留守する時などは、かほかたちつくることなしとも見へたり。これらの事は皆かの二つなき本性を養ひ、かつは人のうたがひをもまぬかるゝ道也。地は唯天に承ぬるがことくにて、妻の夫に從ひて二つなきは　その性もとかくのごとし。もしかくのごとくならざれば、人にあらずとかや。人にあらずばいかなる者にてかわらん。人のかたちを受ながら、鳥となり獸ともなりなばいかに。いましめよや〳〵。

贈ニ岡村子一

岡村子仕途に奔走して寧處に遑あらずといへども、唯其志の篤きを以て、遠く吾か幽僻の地にきたりて、憤を發し講論する事、日もすでに累れり。その歸らんとするに及び、さきに議する所の梗概を擧げ序でゝ、これに贈ること左のごとし。また居學の一助をねがふといふ。

岡村子問ふて曰く、師に從ひ友に交りて此道を講明するときは、觸發の心親切にして邪妄全く放下するに似たり。他の應接の境に對しては、あるは名を見あるは利を見、我その道に搖きやすく奪れやすくして、また良知に至難きは何ぞや。

答ていはく、これは徒に良知の觸發をたのみて、いまた功を克己に用ひざる也。されは良知はもとより人々の有也。しかるに名利は吾人日常の熟所にして、汚穢根ふかく迷惑節かたし。講議は師友臨時の所遇なれば、鍛鍊磨懇いまだ底に徹せず。故に一場切磋の間、良知發見靈照燦爛すること

雜著

日用工程　貽森村氏

先止と中との二言を筌蹄とし、吾心の本躰を愼思明辨し、常にこれを用ひて主人公とさだめ無事の時はこの天則を以て意念の伏藏を搜尋退治して、鑑空衡平の躰段にかへり、有事の時はこの天則を以て境にひかれて發見する意念を省察克治して坦蕩々の躰段にかへり、無事有事に意念を省察克治して本躰を存養し、常に中和にはなれざるを、格致の要領とす。

女訓

男女の道は天地の道なり。天は地の外を包み、地は天の中にあり。故に男の外を治るは天に法る也。女の內に助くるは地に法る也。天の性は健にして萬物を始め、地の性は順にして天の始むる所に承て萬物を生育す。故に男女の和、男は義を以て妻を帥ひ、女は正しき道を以て夫に事へ、夫萬物を始むれば妻はこれに從ひて子孫を生育すとぞ聞し。一たびその夫に事へてよりは、我が身は夫なり、わか物にはあらず。されば夫の父母は我父母とおなじ。いとおしくおもへばつゝしみもありて、よく舅姑につかふるぞよく其夫につかふるにはあなる。おほよそ柔和なるが婦女の道なり。ましてその舅姑その夫に從順するをや。さらば又二つなしといふことをしるべし。これ肝要なる處也。さはいへど外の事にもあらず。たゞさきにいひたる一みちひとつ心にてかはらざる也。さるからふるき文に、男女の物のとりやるときは下におきてわたし、あるは物にのせてわたすといひ、門を出る時

意必固我を格して良知の誠に復るを誠意と申候。王子の所ゝ謂格物致知即誠意の工夫、その文勢を觀るに格知の外誠意の工夫なく候。此所明辨肝要に候。此書よく御讀候て、其上にて中川子と議論被ゝ遊候はゞよく御合點まいるべく候。

答二中川貞良母一

後生の事一大事におぼしめし候旨、御尤に候。後生一大事なれば、今生はなを〳〵一大事にて御座候。いかんとなれば、今生の心まよひぬれば、後生かならず惡趣に墮する理ある故にて候。佛の後生一大事とおしへたまふも、今生の心をあきらかにさせんためにて御座候。大乘の法門は皆この心得にて御座候。あしたゆうべをはかりがたき浮世にて御座候へば、心の中の如來を拜したまはん事何より以て大切なる事に御座候。御取入の書物の事心得存候。あとより下し可ゝ申候。其内善兵衞殿へも御尋なさるべく候。

心術取入御惑なされ候旨、御尤に候。さりながらなりさうに思召所浮氣との義、御躰認のたがひに候。いかんとなれば、本來固有の心に立復る事にて候へば、たれもなりやすき事は勿論の道にて候。惑を辨ふること底に徹し候はねば本躰呈露せざる故に、かたきやうに御覺候。それは學問の功不ㇾ足故に候。苦のやみ候事、氣隨になされ候かとの義、これも御躰認のあやまりに候。心は今までに變り不ㇾ申候て、世間の利害得失等の道理よく合點參候へば、何となくつかへ苦む事なくなるものに候。此分にても凡心にくらべては、安樂の位に候。

與二熊澤子一

淵子御下候條申入候。今程途中可ㇾ爲二御異見一と奉ㇾ存候。此方何も息災に罷在候。仕途紛擾の中御受用底如何、陰陽超脱の見を徹底し中庸に離れざるやうに可ㇾ被ㇾ成事第一儀にて候。近日の議論淵子可ㇾ有二御演説一候。世事の變遷は管城子勞すべき所にあらず候。頓首。

答二清水十一

御受用底放心すべきと收斂不ㇾ仕候に付止りがたきとの義、御尤に候。面上に申談候通、人外を願ふ意念を全放下して全躰精神内に守り候はでは、工夫取入がたきものに候。朱子の所ㇾ謂不二全放下一終難二湊泊一も此意旨にて候。全く放下するも事跡の上にはしらず、一念入微の所に於て意念を斷除するのみにて候。意念の精義不二透徹一よし。意念は心の倚ところ、天下の事に於て有ㇾ適有ㇾ莫、これを意と名つく。論語所ㇾ謂意必固我皆意にて候。大學の意と論語の意と二義なし。誠は良知の本躰

御受用底不親切旨、御尤に候。吾人種々の習心適莫に拘攣せらるゝ故、本躰を見ること明らかならざるに因て、受用底蹉跼なるものにて候。今程權左在宅に候條、切々御會合なされ、習心意欲の端的をよく御明らめ、自己心上に就て躰察なされ、天性の本躰を御見付被ㇾ成候事、工夫の先務に候。如ㇾ仰健なる人も明日を期せざる世の習、まして拙夫貴甫などの如く病惱身にせまるものは、須臾も獨樂を求る工夫を急ぐべき事に候。御躰認の功力よく聞へ申候。古人の言に、良知は生前隨身の規矩、死後隨身の資糧、といへば、日月逝矣の戒めを以て觀、又生順死安の勸めを以て觀て、片時も早く良知に至りたき事にて候。隨分御精入らるべく候。大學中庸論語の抄など御覽御講論候はゞ、大意御合點參るべく候。如ㇾ仰面上にて遂二心話一申度候。御志だに切に候はゞ、時節も可ㇾ有ㇾ之か。至人は金石のうちさへ往來さはりなしといふ。況や人間をや。

答二山田子一

心術の御取入はか不ㇾ參候由、御尤に存候。兎角本躰を見つけ候はでは、空鐺を烹るごとくにて、何の工夫もいたづら事になるものにて候。喜怒哀樂未發の時。當下具定の良知を觀察して、この心を不ㇾ失樣に御受用なされ、さて應事接物の時この心を失はんとせば、何のすくみ有て如ㇾ此なるぞとよく自反して、情欲の習染か氣質の偏かを尋究て、その曲者をしたがへて退治の工夫を勵候へば、取入日々にはか行ものにて候。貴樣には舊習の魔障深く相見へ候まゝ、此魔をよく降伏可ㇾ被ㇾ成候。

答二淺野子一

答ニ淵宗誠一　或作ニ淵源一

奈良茶の味よく御のみこみ被レ成候旨、左候はゞ心法の理味もよく御のみこみ被レ成候はんと珍重に存候。かく申はたゞ一笑になるべきのみにも有まじく候。何につけても第一等の事をと願ふにて候。

答ニ清水季格一　一作ニ清水子一

舊習に御ひかれがちにて候由、如レ仰道を見ることの親切ならざる故にて候。風俗を氣の毒に思召候由、入ざる御指出事に候。氣の毒に思しめす風俗と一體なるもの御心に伏藏して御坐候につき、左様の外による意あらはれ申候。風俗の汚を御いとひ候はんより、心上の汚を御厭ひ候はゞ、愼獨の力出來可レ申、日新の功可レ有ニ御坐一候。

何某の事御目論候由、御尤に存候。是は銀のたゝりにては有まじく候。銀を求過たるたゝりにて候はんか。

與ニ吉田子一

御志厚罷成候由、感入申候。隨分御勵可レ被レ成候。御氣色も大かたに候はゞ、御憤次第少し御上可レ被レ成候。此生難レ得、此道難レ聞。二難の時節可ニ默止一は沙汰の限に候。御憤だに深候はゞ、御上候御才覺は成可レ申候。

與ニ吉田新一

皆惻隱の心にて候。これを存せん失ふまじと念を起して、此本體を主人公と定めんと工夫なされ候へば、其の一念はや意必の病と可ㇾ成候。此所は至て心得やすき事にて候へども、舊習の葛藤剪はらひ盡ざる所は、百倍の功を勉めざれば取入難ㇾ成御坐候。可ㇾ被ㇾ入二御精一候。

御親父樣に御つかへなされ候刻、つかへさかだち申旨、此妄心は是非の素定好惡の執滯によつて親の非を見つけ候所より發する病痛にて候。此病根をよく見付け、本來是とするところなく好む所なく惡む所なく、眞是眞非眞好眞惡は臨時感應の心に有ることをよく辨へ、此鄕にて彼曲者の根を御切捨可ㇾ有候。孝悌論に、大舜視二瞽瞍一、便是至神至聖至仁至慈的、といへる理味をよく御のみこみ可ㇾ被ㇾ成候。瞽瞍は子を殺さんとする程の人なれば、萬聞へぬ事のみ可ㇾ有候へ共、大舜は之を咎めこれを諫めたまふと露もなく、たゞひたすらに自己心上の至極を明らかにしたまふのみ。これすなはち學術所謂自反愼獨にて御坐候。如ㇾ仰親につかふる時節、自反愼獨の功、手のくだしやすき所にて候。若こゝにて墮落なされ候はゞ、萬境皆墮落のみにて御坐候はん。まづ手の下しやすき所にて御受用御勵可ㇾ被ㇾ成候。

當地にての安樂、其元にて御坐候や。境界の安樂は俗樂にて御坐候。君子安樂の本體は、吾人方寸の内にある常住不變のものにて御坐候。雲行雨施雷電震動の時も、白日青天は少も變る所は無二御坐一候。人々の心裏の白日青天、安樂の本體にて候へば、いづれの境界にて喜怒哀樂する時も、中庸の本體は變りなきものにて候。此所よく御體認候はゞ、幸甚々々。

猶々、色念除き難きとの御事、少年の通病にて御坐候。不邪の色にて精を御もらしなされ候はゞ、自ら除きやすく可レ有二御坐一候。不婬戒のごとく御愼なされ候はゞ、念やみ難く可レ有二御坐一候。たゞ邪味を不レ合邪色に交らざるを飲食男女の戒とす。精微の理よく御體察可レ被レ成候。萬事習染の是非にまよふものにて御坐候。

答二中西常憐一　一作二中西子一

御病氣再發今程透と御快氣の旨、何より以珍重に候。不レ及レ申候へども、寒中の御保養專一に存候。內經所レ謂恬澹虛無、眞氣從レ之、精神內守、病安從來、飲食有レ節、起居有レ常、不二妄作一レ勞。これ保養の本領、即大學の格物致知の工夫にて御坐候。性命合一の處、よく御體認御受用所レ希候。心法の御取入難レ成御坐候旨、舊習の葛藤きびしくはびこりまとはり申故にて御坐候。當夏當地にて切瑳琢磨の功淺く、葛藤を剪はらふ鎌の刄すきと御磨たてなく候まゝ、左樣に御坐候はんと、此比も御噂申出候き。存養の法よく合點だに參候はゞ、本來固有の主人公につかへ申ことに候へば、易簡明白なるものにて御坐候。或は頑空に入、或は格による病のみにて御慕被レ成候旨、存養せんと思召念をおこし、その念上にて支撐なされ候故に、御忘なき內は格により御忘の時は頑空に入やうに御覺候事にて候。識仁篇に、必有レ事焉而正レ心、勿レ忘勿レ助長、未三嘗致二纖毫之力一、此其存レ之之道、若存得便合レ有レ得、の一段、よく御翫味可レ被レ成候。現在當下の心欲に不レ動、物に不レ滯慈愛恭敬、温々惺々、坦蕩々なる心、良知の本體にて候。此本體をその儘存養なされ候へば、滿腔子

くては舟やすかるべけんや。吾丈いかんとかこゝろへたまふ。

答二一尾一

善に難ㇾ遷悪に隨落なされやすき旨、是に意念の自欺故にて候。良知寂然不動の良を御體認なされ存養被ㇾ遊候にはゞ、其病痛自ら除可ㇾ申候。いかんとなれば良知即善にて、良知に至れば善常に心の主たり、意念は時々往來の客慮なる故にて候。事の上にて善悪を御定被ㇾ成、その適莫のすゝみより御體察なされ候故、善には難ㇾ遷悪には牽れやすきと思召かと令ㇾ察候。良知を善の本體として、良知そむくを悪の本色とする精義を、よく御辨可ㇾ被ㇾ成候。且又外に願ふ利害毀譽の惑を明に御辨被ㇾ成候工夫專一に御坐候。此惑を不ㇾ辨うちは、意念の自欺禁止なりがたきものに御坐候。

一。靜坐の中の意念と被ㇾ仰候は、定て間思雜慮の事にて御坐候はん。靜座中念慮なきやうにと工夫なされ候はゞ、大なる御心得そこなひにて御坐候。心の官は思ふ。思ふは聖功の本にて御坐候へば、おもひをたつことはならざるものにて御坐候。たゞ思慮に凝滞するを意念とし、外の願を得んと思案する念慮をきらひ申候。靜坐の中に間思雜慮おこり、とく對算見解して體認の思案に御かへ可ㇾ被ㇾ成候。

一。外物に奪はれやすきは、物に接はらざる前既に心上に於て外物に適莫するの意必伏藏して御坐候故、物來るとそのまゝ彼すくみ發見して物を逐申候。物に接りて後奪れなさるゝと御覺候は、疎略なる御心得にて御坐候。兎角辨惑のあさき故にて御坐候。

と名づく。此中呈露の時、萬物一躰にして物我隔なし。これを止の本躰とす。無事の時は中庸の工程により、有事の時は大學の工程により、工夫間斷なければ、必止を知ものなり、既に止を知る時は、一念獨知を愼み、かりそめにも此止を離れざるやうに力を勵ますを、愼獨誠意の工夫とす。一念獨知の內、止の神常に照々たり。大抵工程如ㇾ此。しかれども、俄に合點まいりがたき物に候。其上は面談ならでは詳に心を盡しがたく候。さりながら、此小簡をよく熟讀被ㇾ成候て、疑敷所は可ㇾ預ニ再問一候。

答ニ一尾一　一作ニ一尾子ニ下同

未ㇾ能ニ尊顏一候所、貴簡辱拜見、別て不ㇾ淺奉ㇾ存候。御志の程承屆驚入奉ㇾ存候。尋常の御工夫切實に御座候段、寔拙者など恥入奉ㇾ存候。愈滲漏間斷無ニ御座一候樣に御勵。御尤に奉ㇾ存候。道の本躰は大虛に充塞いたし候へども、執ところの把柄は方寸隱微の上に御座候故に、こゝに於て物を格し知に至り候を道を行ふと申候。かりそめにも格法典要に心を御着被ㇾ成間敷候。たがひに同躰の道に志御坐候上は、大古以來の舊相識にて御坐候へば、毛頭無ニ御隔心一御疑ども可ㇾ被ニ仰聞一候。あはれ以ニ書面一遂ニ心話一得ニ交修之益一申度奉ㇾ存候。猶追々以ニ愚札一可ㇾ得ニ尊意一候。

猶以、初學の習にて、堯舜の御代を願ふものにて御坐候。達者より見れば、堯舜の御代には學術なくても有べし、末代昏く迷へる世に、學術なくてはかなはざる御事に候。如何となれば、堯舜の御代はおし日和のごとし。楫なくても有べし。末代は風波あらきはしり日和の如し、楫な

なり。有事の時も無事の時も、寂然不動の本躰少も變る所なきこと、譬ば鏡の照す時と不レ照時と靈明の本位變りなきが如し。然るを無事の時寂然不動なりといへば、枯木死灰のごとくおもひなし、事有て感通するには、氣機の發動を認て明德の本躰にも動く時ありと思へる或ひ、學者の通病なり。明德喜事に感通するときは、陽氣動て昇るによつて其色うるはしく、其聲おたやかに、其威儀のどやかなり。明德哀事に感通する時は、陰氣動て降るに因て、その色いたみ、其の聲なやみ、其威儀せまれり。其餘の七情も亦皆如レ此。形氣の發動は明德の感通に本づくといへども、明德の本躰は少も動く所なく變る所なく、寂然不動にして神明照々たり。これを止の本躰とす。無事の時には認誤り有やすきに因て、大學に親民の心に就て至善を指點す。傳文に如レ保ニ赤子ニの一節、專此意を發明す。赤子を保時の心をよく躰認して、氣機の發動を認ず、本躰の感通する所を見れば、純一無雜也。心純一無雜なるときは、本躰呈露してよく愛す。純一無雜即ち寂然不動なり。毫髮も雜る所あれば即動なり。寂然不動にあらず。此純一無雜の心をよく見覺るを知止とす。孟子入レ井赤子を見て怵惕側隱す。側隱は仁之端なりと示したまひたるも此意なり。怵惕側隱は無機の發動なり。仁の本躰にあらず。故に端とす。怵惕側隱の發動は純一無雜の心に本づく。純一無雜の心仁の本躰なり。有事の時念慮擾亂して工夫なりがたければ、無事の時躰驗したるがよろしく候。中庸に喜怒哀樂未レ發謂ニ之中ニ一句、無事の時に知止の工程を指點す。無事にして喜怒哀樂未レ發時、種々の習心、種々の嗜好、種々の見解等を放下して、心源を澄し觀察する時、純一無雜神明照々として毫髮も倚所なきを中

克治嚴密武毅ならず、靜坐の時不快昏懶なるは、皆放心のたゝりにて候。初學の時此理を明かに辨ざれば、存心の功を嚴密に用る事なくして、效を求る意深し。故に守る時は支撐に入り、支撐を除んとすれば頑空に入るものにて候。只ひたすらに志をはげみ篤信して、自欺の意念を禁止して、其獨を愼み毛頭効を求べからず。功積時到れば安而能慮坦蕩々にして、支撐頑空の病おのづからなきものにて候。吾人の効を求むるは、利心の面をかへたる病痛にて候。時習の悅び本躰の樂あるよを聞ては、唯安樂の名に泥み、困勉の功をいとひ、悠々と日を送候事、今程同志中の無病に候。初學の時困勉の功なくしては、堂に升り室に入日有べからず。陽明の聖人にも困勉ありといへるは、此弊をすくわんとにこそ。右の趣能々御躰認被ㇾ成、重て可ㇾ蒙二疑問一候。

答二中村兵一

知止の功無二圖方一思召候旨、御尤に候。此事簡易明白に候へ共、習の弊にて明らめがたきにて候。又右方へ御下し候法語の類にては、中々取入有ㇾ之ことにては無二御座一候。用力下手の實地あらまし書付遣候。よく御合點御躰認候はゞ、可ㇾ為二幸甚一候。知止の功、或は無事の時、或は應事接物の時、無二油斷一躰認觀察親切に候へば、惑の淺深に因て遲速ありといへ共、工夫よく積りぬれば、必開悟の時節有ㇾ之ものにて候。先志をかたく立定め効を急がざるを、工夫の第一義とす。さて意必固我の惑をよく辨へその根を斬除ざれば、躰認の功力弱きものにて候。夫明德の德たる、寂然不動にして能天下の故に通ず。無事の時は神明の德具て寂然不動なり。有事の時も神明の德通じて寂然不動

しといへども、惑を辨ふること淺ければ、凡夫におそれる方その數をしらず。これにて文字なき故との惑ひよく御辨可レ有レ之候。

一。產業惡敷故と、これも躰認のあやまりにて候。產業は境界なり。一切の境はたとへば燧なり。我心石のごとくかたくすくみて角ある故に、火出むねをこがし候。我心綿のごとくやわらかに水のごとくすくみなく候へば、天下一の燧にあたりても火いで不レ申候。境堺に順逆ありといへども碍なき事、これにて御躰認被レ成、境界を咎めずたゞ心をとがめ、自反の眞水にて邪火を御消可レ被レ成候。

一。氣質故と、これ尤誤にて候。氣質の偏は中に不レ合ところありといへども、眞樂の障にはならざるものにて候。只習のたゝりにて、まどひも辨がたく境にも移さるゝにて候。習魔を降伏する工夫は、面上に〱。

與二中村子一　一作二岩田入一

中西氏への疑問承屆候。氣象に念を差候へば支撐に入本躰をはなるゝといへる工程難二心得一との義、存養の功手に不レ入時はこの疑難レ免ものに候。存養の二字は、孟子存心養性の言を用ひ、心性の二字を畧したるものに候。心を存するとは、萬欲に克去放心を收めて、全躰の精神仁義性命の上に在をいへり。大學に所レ謂知レ止止レ於二至善一の工夫これなり。心存するときは仁自到るものなれば、存心は即性を養ふの工夫なり。存心の外別に養性の工夫あるにあらず。志篤からず、應接の時省察

まづ世間の相を看破して、一向に心上の工夫に眼を御着可レ被レ成候。さて境に對し事に遇て此心の亂ざる樣に可レ被レ成候。亂れざるは定るにて候。さて其定たる心にて義理を思慮可レ被レ成候。是が格物致知の要旨にて、知定靜安慮得の微意精義にて候。よく識得可レ被レ成候。たゞし事の上にて工夫不レ被レ成候て、一命發動する處にて躰察可レ被レ成候。

明德をくらくするは五病。

習心。　好惡の執滯。　是非の素定。　名利の欲。　形氣の便。

此等くはしく察していたく治すべし。然らざれば明德を明にせんと欲するとも能はじ。吾人は本樂しき者なり。其苦は皆此病のなすところのみ。故に凝氷焦火の苦患に免れ、心廣躰胖の安樂を受るは、其實まさしく察して治す[illegible]、學者よく〳〵躰察すべし。

答二早藤子一

心法の杷柄手に入がたき由、病根の御吟味、何も御心得そこなひにて候。左樣に御心得の惑ひ御坐候故、病の根切がなりがたきとかと可レ被二思召一候。良知くらみやすきは、凡心の惑を辨ふること底に徹せざる故に候。まどひを辨ふること底に徹するは、師に從ひ友に交り講論して切磋琢磨するより外はなく候。

一。文字なき故との御疑、御尤に御座候。師友に相隨ひ惑だに辨へ候得ば、文字なくても不レ苦候。孔門以前の學者、皆文字すくなくて堂にのぼり室に入方其數をしらず、秦漢以後の學者、文字ひろ

淆駁渾雜して御坐候。たとへば丁銀の内に銅鉛の渾雜してその色をあらはさざるが如し。境に對せざる時は、その渾雜する物伏藏して見へざるのみ、無レ之にはあらず。されば此伏藏渾雜するもの十分に淨く盡ざるうちは、本心の正眞とも難レ申候。然れども、此心を以て工夫の種と致し候はでは、空鐺を烹るの誤なる故に、まづ此心を認て主とし、さて鍛錬の火候を能心得、視聽言動、行住坐臥、茶裏飯裏、應事接物の時に習ひ、氣習情欲の銅鉛を吹ぬきたるが能候。この工夫すなはち自反愼獨にて候。

答二森村子一

工夫間斷多く御取入成兼申旨、間斷は初學の習にて候へば不レ苦候。唯實體の見付なきが學問の病にて御坐候。先書にも申通に候如く、現在の心欲に不レ動、物に不レ滯時、愛敬底なる心を主人公と御定め、常に不レ失樣に可レ被レ成候。此工夫のまはしだによく御心得候はゞ、自ら日新の功可レ有二御坐一候。兎角面上に可二申承一候。

答二森村小一

心術病痛の御書付得二其意一申候。意念の凝滯御坐候故、令レ發る時は意必事を用ひて支撑に入候て、不レ發時に意必用る所なければ、又頑空に入、皆初學の通病に候。見解對算を以て心地を鄭清し適莫意必の根を截斷仕候へば、本體呈露格致の功手を下しやすく御坐候。

答二森村長一

間敷候間、自反愼獨を御勵み候て、七情の滯を消化被レ成候事、第一の療治にて御坐候。心術の取入は、難きやうにてやすきものにて御坐候。譬は耕作のごとし。種をまき候では、修理も糞もみなあだごとに成申候。心術の取入も、まづ種を求て蒔候はでは、何の工夫も皆あだ事と罷成候て、終に德に入事不レ能ものにて候。其種のまきやうは、現在の心欲に不レ動、物に不レ滯時に温和慈愛底恭敬惺々底なる所、工夫の種にて候。此種をいつも不レ失樣に工夫可レ被レ成候。是心術の蒔やうにて候。如レ此種をよく蒔候へば、書を讀同志の講論は不レ及レ申、世俗にまじはるにも皆修理となり糞となり、日々に新になるものにて候。よく御躰認候はゞ幸甚々々。

與二横山子一

其許令二炎焼一候に付、源太殿家も類火に焼申旨、驚入申候。誠に笑止千萬無二申計一候。乍レ去これに因て本心を御取失ひ不レ被レ成樣に御用心尤に候。若心動候て明德の障になり申候はゞ、盗人に[illegible]いとやらんにて候。

答二森村子一

心法の取入雖レ成條由、定て外心に性を求むるまよひにて候はんと存候。吾人現在の心欲に不レ動、物に不レ滯時に温和慈愛底恭敬惺々底なる心、即ち本心の實躰に候。此の性を見付て愼守り、視聽言動・行住坐臥、應事接物、一切の境に對して取失はず、主人公とあがめしたがふを、忠信を主とすると申候。吾人現在如レ此の心、本心の實躰にて候得ども、初學の時は此心の内に習と邪欲と、氣の

の合點底に不ㇾ徹たゝりに候。大學中庸の抄當年中に仕立可ㇾ申と存候。出來次第下し可ㇾ申候。これにてまた愼思明辨可ㇾ被ㇾ成候。餘戶田子御語被ㇾ成候はんと、不備頓首。

答二田邊子一

心法の取入難ㇾ成、善惡の合戰のみにて御慕候由、善惡の實躰を御辨なく、事上に跡をとめて善惡を御定候あやまりにて可ㇾ有ㇾ之候。善惡の實躰は心の上に有ㇾ之、事跡にあらず。一念良知に至るを善とし、一念道にはなるゝを惡とす。しかるときは、善惡の合戰可ㇾ有理なし。如何となれは、一念良知にいたるときは、滿腔子皆善なれば、敵對すべき惡なし。一念道をはなるゝ時は、腔子裏皆鬼窟となつて、退治の主人權を失つて、征伐のいきほひなし。これにて善惡の合戰の覺あやまりなるとを御辨可ㇾ有候。學術をしらず主人公の守なき方寸を辻堂にたとへ申候。辻堂は主人なき故に、あるときは貴人高位も腰を掛たまひ、或時は乞食非人もねおきの宿とし、又或時は狐狸蛇蝎の栖ともなる。その如く、主人なき方寸には、往來寓居の者は、貴賤所を爭ふを善惡の合戰と御覺候かと推量申候。この寓居の者は、貴賤ともに羇旅のあだものにて候間、盡く御追出し候て、辻堂にたとへたる方寸の內に光明赫奕たる本尊ましまし候間、それを御さがし候て、此堂の主と御定候はゞ、何れのものも近付申間敷候。此本尊無上の威力まします故にて候。

答二田邊一

御持病また指發申由、如ㇾ仰氣のなやみよりおこりたる御煩にて候。湯藥はかりにて驗氣御坐有

はたのしみ悪念は苦しむと御躰認候はゞ、邪念おのづからおさへよく御座候はん。

一。色念邪なるは、後日の禍害をよく分別して考見れば、その禍害を恐るゝ心忍字の刄となりて、切すてやすく候。よく其御心得可ㇾ被ㇾ成候。楊貴妃なりとも、うしろに拔刀を構たらんには、色欲の火消、身はひへきり可ㇾ申候。能々御躰認可ㇾ被ㇾ成候。惣て心の病は自己を欺くに起り、自欺は獨を不ㇾ愼故也。自反にて浮躁の心氣をしづめ、愛敬中和の獨をよく見付て、愼のはなれざるやうに工夫仕候へば、何の病もおのづからなをるものにて候。能々御躰認被ㇾ成候て、御不審ども候はゞ、春永に可ㇾ被二仰越一候。隨分こまかに書付可ㇾ遣候。

答二佃叔一

委曲なる貴札、圭復不ㇾ斜候。戸田子御尋にて申承候。御志厚相見候。其上御逗留中觸發も多く相見へ、大幸不ㇾ過ㇾ之候。公用難ㇾ去とて、存候より少早く御歸御殘多存事に候。

一。御受用底はかゞ不ㇾ參との御とがめ、初學の通病と申ながら、沙汰の限に候。如何となればそのとがめは速なるを求る意念、孟子のいましめらるゝ正の病にて御座候。立志の發明を能く御躰認、戸田子と講論被ㇾ遊、此まどひ御解可ㇾ被ㇾ成候。母上への事主角いまだ御座候旨、これ又惑の解ざるたゝりにて御座候。孝を忘て孝至ると申心を、よく躰察可ㇾ被ㇾ遊候。俗に交りて物我のたゝり御座候は。一躰の仁をしかと御見付なき故に候。いづれも御受用底の病痛、今度戸田子被ㇾ遣候送行の歌、又太夏右殿被ㇾ遣候掛物の意味を、よくかみ覺へ、講論被ㇾ遊其上にて可ㇾ被二仰越一候兎角學術

答佃叔

忍の字御受用なりがたく人のおかすをこらへ難く御座候由、それは忍の字の用ひ樣あしき故にて候。人のおかすには孟子の自反を用ひたるがよく候。人のおかすとき、我かれを愛敬する事に臨にかなひたるや否、さなくばかれおかすまじきと自反して、我に悪侮の非あらば、彼が犯すは尤と得心仕候へば、おのづからさかだつ氣無㆓御座㆒候。若又我に悪侮の非なけれども、かれ猶犯すときは我愛敬の忠信になき故と自反すれば、さかだち不㆑申候。若又忠信に愛敬するにかれ猶々おかすときは、かれ氣違か醉狂人の妄なるなり。氣違醉狂人には凡人さへ構はぬものにて候へば、志ある人は勿論の事にて候。如㆑此得心仕候へば、忍がたき事はなく、胸中常に凉しき物に御座候。孟子のこの發明、孟子離婁下篇に御座候。よく御讀候て覺右と御相談御躰認可㆑被㆑成候。孟子の自反は一貼の清凉散なりと、先儒發明にて御座候。この意は胸の焦熱する病をなをす藥方を清凉散と申候。人怒火にて胸中焦熱するをなをすには、右の自反が清凉散なりとなり。能々御躰認可㆑被㆑成候。

一。善悪二念の事、愛敬中和の本心を善とす。愛敬中和を離背を悪とす。こゝろ愛敬中和に背く時は、一旦こゝろ樂き樣に覺れども、其心逆境或紛亂鬧熱の境にあへは、苦痛はなはだしきものなれば、これを樂苦と名づけて樂にて苦なり。愛敬中和に心を止めてはなれざれば、順境に無事はもとより樂み、逆境鬧熱にも又樂むものにて候故に、君子は坦蕩々と孔子も發明し玉ふ。人間に樂をこのまぬものは無㆓御座㆒候へ共、眞樂の端的を不㆑知故に求むること能はず。この心をよく辨へ善心

意念の雜除き候故に、心氣惺々蕩々に御座候。此時この惺々蕩々の根源をよく御躰察被レ成、本躰純一にして更に意思の雜なき故に如レ此なるを御辨へ候て、惺々蕩々の氣象を御認なく、其根源たる純一無雜の眞知の誠を御認候はゝ、存養力可レ有二御坐一候。根源を御認なくして徒に觸發の氣象のみを御認候故に、工夫要なく影をつかむごとくに御覺候事に候。能御躰認被レ成候はゝ、幸甚々々。

答二佃叔一　一作二佃子一

御受用不二親切一の旨、兎角種々適莫の攙雜不レ除故に候。葛藤の不レ除は、本躰を知る事明ならず、對算見解等の心得底に不レ徹故に候。學庸論語の抄熟讀なされ御講論候はゝ、進修の益可レ有二御坐一候。外物にひかれ候も、咎は我心にありて、外物に咎は無二御坐一候。世俗にうつされ候も、世俗に咎はなくて、咎は我心に御坐候。よく自反なされ、心上の意魔を御除候はゝ、天下にたゝりをなすもの御坐有間敷候。

答二佃叔一　一作二佃子一

御志の立やうあらまし御合點參候由、先一段の御事に候。有事無事心二一やうに御覺へ候、見解對算等底に不レ徹、外にねがふ意念淨く盡ざる故にて御座候。俗に交りて不レ快、奉公に退屈被レ成候は、本躰の仁くらき故にて候。本躰のくらきは外願の意念淨く盡ざる故にて候。兎角見解對算等の工夫底に徹し申樣に御勵可レ被レ成候。

同志議論の砌はこゝろよく、獨座の時力なく邪念差出をこたりがちに御覺候旨、兎角本躰を認知る工夫なく、徒に議論發明の格言を認て心を御すゝめ候故にて候。學問の工夫本躰を認知を第一儀とす。しかる故に、大學に知止を掲て工夫第一儀に示したまひき。本來我人の本心安樂にして力つよく。獨座接人の隔なく、いつも明快通達にして懈怠なきものにて候。心くるしく力なきは、後來の習心習氣のたゝりにて御座候。よくまよひをわきまへ、習心習氣のけがれをあらひきよめ候へば、生付たる本心あらはれ、大安樂實躰に立ち歸り、動靜語默いつも力あるものにて候。邪念雜念は習心習氣の妄動にて候へば、天君泰然たれば、いつとなくなくなる物にて候。心の力なくおこたりがちに御入候は、彼の本躰の安樂明快なる實理を御辨へなく、この明徳を明にせんと欲するの志實にたゝざる故に候。食の飢をやしなひ湯の渴をやむる事は、よく辨へざるものなし。故に飢渴の人唯飲食にのみ志して他なく、飲食を得ざればその念やむ事なし。吾人の惑ひは飢渴のごとし。明徳の迷惑の苦しみを止るは、飲食の飢渴の苦みを救ふがごとし。如レ此よく御辨へ、明徳を求得て昏迷の苦を免ぬかれんと御志候はゞ、明徳を得ざるうちは志の怠たる事少も有レ間敷候。知止の工夫書中に難ニ中盡一候。治左權左などゝ萬端講習候て、よく御躰認被レ成候はゞ可レ爲ニ幸甚一候。猶御疑候はゞ可レ被ニ仰下一候。

答ニ佃叔一　一作ニ知叔一

講論の砌心相惺々邁々に御覺へ候へ共、程なく御取失候旨、體察の淺き故にて候。講論の提撕にて

は心のすくみをとろかしすて、いかにもひろ〳〵として天地萬物をいれてつかへさる本體を不ㇾ失様に仕候が專一にて候。大學に心廣體胖と御坐候にてよく御合點可ㇾ被ㇾ成候。吾人の心本來廣大にして碍る所なきものにて候を、いつの程よりか習の染り、是非の素定好惡の執滯名利の欲形氣の便などにてねぢかためおしすくめ候故、親の我を愛するとさへ多分氣に障りさかたち候へは、自餘の事は不ㇾ及ㇾ申候。此すくみを解心得なく候へば、學問にて却てすくみをかさむものにて候。能々御體認候てすくみを御解候はゞ、何事もつかへ申間敷候。萬事のつかへ候は他人の非は無ㇾ之候。皆我心にすくみたる非ある故にて候。されば狐も狸も又は天狗も、身にばかすべき縁なき人をばなぶるとあたはずして、心になぶるべき縁ある人をばかす物にて候にて候。世間の人は吾心のたて様に因て魔ともなり、または父兄師友ともなるものにて候。世人の魔障をなす魔縁なきやうに御心持肝要に候。其魔縁は右申心のすくみにて候。委曲懸ニ御目ㇾ申度候。合點參兼候はゞ重而可ニ申承ㇾ候。

答ニ佃叔ㇾ　一作ニ畑叔ㇾ

小川子への義心得申候。兎角其身學術の心得おろそかなる故に、人を取立申事おろかなるものにて候。兎角一念獨知の處あきらかにあらはるゝものにて候。大學の中に誠有て外にあらはるゝとは、此事にて候。

筒佃叔　一作ニ畑叔ㇾ

公の下知に從ひぬるを、愼獨の工夫となづく。かく受用候へば、いつも取とめたる工夫にて候。此主人公だに明に候へば、いづれの逆境に對してもおびへさはぐ事毛頭無之候。

一。御母儀樣へ御つかへの時和厚の心なく、却て窒碍ある旨、是は心すくみたる故にて候。心は本來活潑流行、典要なく格式なく、和豫圓通なるものにて候を、知識ひらけ情欲おこりそめてより以來、色々の習に染り格式典要其外世間の萬事萬物に付て、好惡の執滯是非の方寸に凝聚つて、圓通和豫活周流の心氣すくみて、圭角胸に塞りぬるを、凡心と名づく。如此すくみたる凡心にて御袋樣へ御つかへ被成候故、胸中の圭角聲に發し色にあらはれ候故に、慈母なりといへども圭角のさはる所必其かへしあるべし。これによつていよいよ和厚なく、窒碍ある樣に御覺へ候。種々のすくみを放下して孩提の心を方寸に明にして御つかへ候へば、和豫圓通の本然をのづから色に生じまた聲に發すべく候。本より慈母なれば、其孩提の和豫にこたへて、溫和の氣いやましに可有御坐候へば、貴殿和厚の氣もまたたたく胸にみち可申候。然らば其和と和との相感通するも、水の濕へるにつくが如くにて御坐候へば、露も窒碍の御覺有まじく候。此體認急々如律令。

答佃叔 一作畑叔

色々の妨御坐候て御退屈被成候旨、自反愼獨の工夫手に入らざる故にて候。御心にすくみ御坐候に付て、外物さはり氣の毒に思召故、いつとなく志を御奪れ候。心にすくみなく候へば、世間の萬事ひとつも碍不申候。事に交る所の善惡是非は、少もかまひに成不申[illegible]

彼の人の物語の分にては病痛除不レ申由、藥方に替は無ニ御坐一候へ共、病者の信と不信にて其驗各別なるものにて御坐候。藥方を御とがめなく、自己の信たらざることを御とがめ候はゞ、次第に病痛除可レ申候。得心の功を御勵候て、其上驗なく候はゝ、可レ預ニ疑問一候。

答ニ佃叔一

色念おこりがちにて御心なやみ候由、少年の通病にて候、色を見ずして此魔障碍をなす時は、色念不レ發時の心おひ坦蕩々にして、命門の火くだり腎水かたく閉て、形躰康健なる事を考へ、色念發る時は、淫欲の熱氣心肺を薰る故に、心氣浮躁、胸中懊憹、少腹脹急、小便淋瀝、百病是より起り、心うかれいな物にて候。この二の苦樂損益對算の符を用ひ候へば、魔障次第に退散する物にて候。扨又色を見て不禮不義の色念發る時は、婬亂眼前の害將來のむくひ、欲を遂て後常に悔しかるべき苦と、欲を遂る樂暫時の事にして何の益もなき事とを對算して、色魔をはらひ候へば、退散なりやすきものにて候。元來色念は、欲火炎上して氣見だれ心かれたる魍魎なれば、本心の大陽一照し照したまはゞ、其羞悪彼のけがれを破り、其是非かのまどひを破り、淫魔たちまち消散すべくして、此念の放下容易なるべく候。

一。愛敬中和の獨御見付被レ成がたく候旨、御躰認のあやまりにて候。欲に不レ動物に不レ滯時の心をよく可レ有ニ觀察一候。此時心氣の景象、温和慈愛恭敬惺々なるものにて候。此心すなはち愛敬中和の獨にて候。此獨をよく御見付候て、常に愼み守り、視聽言動、行住座臥、茶裏飯裏、みな此主人

一。工夫手に入がたき旨被二仰下一候。御尤奉レ存候。人間世萬事のつもり天道の本然など能辨へ中事のなき内は眞志立がたく候。眞志立不レ申内は、工夫手に入がたきものに候。四書を御讀なき故にても無二御坐一候。只人間世のつもり合點不レ參、眞志不レ立故にて候。四書を讀五經を究むるも。皆人間萬事のつもり天道の本然性の端的などをよく辨へて、眞志を立明德を明にせんためにて候。しかる故に、書物無二御坐一候上には、書をよまずに明德を磨たる人、書物出來たる已後よりも澤山に御坐候。假名書に可レ仕と申は、此合點よく參候樣に、不文字なる同志のため、又は私躰認の助に存立候。

一。何と工夫被レ成二御覽一候ても不レ成は天命かの義、大なる心得そこないにて候。それは盜をし謀判をして頭を切るゝ時天命不レ及二是非一などいふと同事に候。工夫してならぬ天命は無二御坐一候。只工夫のしやうあしきと可二思召一候。蟲同前のあやかしは、誠の人ならねば道の受用成申間敷候。其外の人にはならぬもの無二御坐一候。明にせんと、思ふ氣なきものと、明にする道節しらぬ人と、此兩人は不レ成ひとにて候、よく同志中と議論躰認可レ被レ成候。

一。今までは九右仕立もどし可レ申とて、隙無二御坐一上、夏へかゝり、切々持病發中に付、かな書に取かゝり不レ申候。來月末より取かゝり、冬春にあみ立申度候。難レ成は天道の御存可レ被レ成候。我は不レ存候。一笑。猶々無二油斷一御躰認、實志を御立可レ被レ成候。

答二垂井子一　一作二佃子一

取入など有まじく候。如ㇾ仰掛二御目一御物語申度候。

與二岡村子一

御在江戸、御苦勞御太義ともに存候。乍ㇾ去大禹治水の艱難には不ㇾ似事に候まゝ、便利をうかがふ意念を放下して、良知に至る力を御勵可ㇾ被ㇾ成候。如ㇾ命紛擾の內、把柄手をはなれやすきものにて候。別て存養の工夫、御勵可ㇾ被ㇾ成候。

與二岡村子一　與疑當ㇾ作ㇾ答。

外のねがひをまつたく放下して、方寸の不ㇾ亂やうに御受用專一に候。其邊名譽驕狐多く有ㇾ之由、御ばかされなきやうに御用心御尤に候。帝舜四言の心法、彼狐にばかされざる無上護身法にて候。無二懈怠一心上に御唱あるべく候。

答二岡村子一

卯月兩通の貴札相屆、拜見申候。其後は緩々と仕たる便無二御坐一候故、御報延引背二本意一候。其許愈可ㇾ爲二御無異一奉ㇾ存候。此方不二相替一有ㇾ之候。同志日夜學問、御勵にて候。おもはざる事御坐候て、內々御望の御いとま成不ㇾ申候て、無二御尋一不ㇾ懸二御目一、御殘多さ筆に難二申盡一候。貴樣御殘多思召段、令二推察一候。如ㇾ命人間萬事皆天命に御坐候。乍ㇾ去我なすわざにてまねきたるは、天命と申ながら正命にては無ㇾ之候。道を受用しての上は、吉凶禍福千緒萬端、皆正命にて御坐候。此躰認に面白き御辨へ御坐候。同志中と議論可ㇾ被ㇾ成候。

る時に、如ㇾ在之誠敬孝心を御盡し可ㇾ被ㇾ成候。祭の前日より能覆齋は可ㇾ被ㇾ成候。祭禮の格法などは、貴面ならでは委難二申盡一候。先第一儀の誠敬を御盡し可ㇾ被ㇾ成候。

答二岡村子一

御志うはの空にて、自反愼獨の受用御手に入れざる故、何れの時主翁に御對面有べしとも覺さず、退屈に思ひ候由、本心をあまりに向上神奇玄妙に心得過て、現在の心の外に御求ある誤にて候。現在の心の裏面に、常住不易の天君泰然とゝて御坐候事を信じ、不神の神不妙の妙眞實の神妙なる事を識得し、學術題目の中いづれにても其心にかなひ候を門戸として、本心の堂に升り、天君に御目見可ㇾ有候。御目見の後、一言一動皆此君の御下知に隨ひ、工夫御勵候はゞ、いつとなく浮風も定り、躁念も靜に成、萬事の顚倒日々に能辨へ、五官其職を盡して、君安穩に可ㇾ有二御坐一候。克御躰認可ㇾ被ㇾ成候はゞ。幸甚々々。

答二岡村子一

志だに御勵候はゞ、終に御取入可ㇾ有との御つもり、御尤に候。むかし枯木を三年拜し候へば、花咲たると申傳候。是は枯木の靈にては無二御坐一候。信心の靈妙にて、花咲申にて候。左候はば、此道の志だに眞實に厚候はゞ、取入疑ひ有まじく候。乍ㇾ去唯うわの空に志を御賴候分にては、花の咲べき枯木有まじく候。常々申遣候ごとく、先現在の欲心に不ㇾ動物に不ㇾ滯時に、温和慈愛底恭敬惺惺底なる處を御見定候て、此心を信仰して、常々不ㇾ失樣に可ㇾ被ㇾ成候。此工夫間斷なく候はゞ、御

するど申候。

答二岡村子一

心喪の義御尤に奉レ存候。今の風俗の中にて御執行ひ可レ被レ成候。あらまし書付遣し候。養子に參候者は、本姓の父母にはむかわりの（「はむかはりの」藤樹全書には「に向たる」に作る）喪にて御坐候。心喪も其間と可レ被レ思候。喪の中は色欲ふつと絶申候。食物は肉食其外何にても厚味の物を忌申法にて御坐候へ共、今の俗にて左樣には成不レ申候。常に何となく人の目にたち不レ申樣に、厚味の物を不レ參樣に御愼み、隔心の所の振舞亦は不レ遁座鋪にては何にても可レ參候。何にてもうたひ舞ひ悅ひ噪ぐ所を御よけ、本より謠など御諷候事御忌可レ被レ成、歌ひ舞ふ座鋪にても不レ遁樣子候はゞ、其儘御坐候ても心の喪戚（「喪戚」藤樹全書には「哀戚」に作る）を御失ひなき樣に可レ被レ成候。歌ひ舞ふ所を御よけ候共何となく角のなきやうに御もてなし御尤候。右は外樣の愼にて御坐候。心喪の本意は、心の悲しみを不レ忘を第一と仕候。隙の御坐候時には、いつによらず閑なる所に靜坐被レ成、母の胎中にやどり候より二つ三つまで母の苦勞恩愛の情の切なりし事などつく〴〵と思ひ出、幼少よりこの方習たる心どもを御除き去て、赤子孩提の時の心此中に有と思ひ、赤子孩提の愛敬の心を御見付候て、哀戚の誠有が、心喪の時學問の急務にて候。此處を能御懈怠なき樣に可レ被レ成候。先祖父母の鬼神の祭樣は、色々むつかしき御事ども御坐候。殊に今の俗の中にては、御執行被レ成がたき事も御坐候。是外樣の格法の事にて御坐候。祭の本意は孝德の誠敬を第一と仕候間、そなへ物などは先俗にしたがひ、其宗門の作法に被レ成、膳をすゆる時拜す

八幡濱にて御迷惑の由、さしてもなきすくみにて御坐候。たゞ自己心上の邪を克去て、他人の無禮不義をは御かまひ有間鋪候。爾は爾をせよ、我は我をせんの心持、肝要候。座敷なりに御もてなしのよし、大方はよく御坐候。其上に自己心上の獨を御愼み可ㇾ有候。昔程明道伊川兄弟ともに酒宴の坐に御坐候時。酒の挨拶に遊女出て歌ひ舞候へば、伊川は座を御立破り候。（「御立破り候」藤樹全書には「立御歸り」に作る）明道は其儘に御座候て、酒宴事終て座中の人と一度に御歸候ひし。其翌日明道伊川御對面の折節伊川は昨日の遊女を御きらひ候間、心とけず顏色おだやかならず候へば、明道のいわく、昨日座中に遊女あれども、我心に遊女なかりき、今日座中に遊女なけれども、そなたの心に遊女有なりと。いましめ給ひければ、伊川も不ㇾ及と嘆じ給ひしとぞ。是にて能御躰認被ㇾ成、惣じて彼人に限らず、誰にてもむかふの人に目を付たるは悪鋪候。唯自反愼獨の心にて我がむかひをあしらふべき程を克考てあしらひ、向の我を悦ぶと悦ばざるとは不ㇾ構がよく御坐候。

答二谷川寅一

工夫間斷のみに御坐候て、同志會合の時節は心も健かに淸く候へ共、俗に交るか獨坐の時は、心弱くしてむざ〳〵とけがらはしく御入候由、兎角本躰の見付なく、忠信を主とする取入なき故にて候。同志會合の時健に淸きやうなるは、陽氣の發散にて、本躰の剛健潔靜にては無二御坐一候故、俗に交るか獨坐の時、陰氣事を用ひて柔弱昏暗に候。一陰一陽の中剛健潔靜の本躰御坐候。夫を能御見付候て、一心の主宰と可ㇾ被ㇾ成候。如ㇾ被二仰越一なる病は、おのづからなきものにて候。是を忠信を主と

今程御懈怠の樣に、太郎右殿より申來候。或は進み或は退き受用定りなき事、初學者の通病にて御座候。外誘の魔障おもきによつて提撕力なく、心ならず墮落するをあやまちと名づく。過は顏子すらまぬがれ給はずとかや承候へば、初學は申に及ざる事にて候。只幾度も改めて過をかさねざるやうに功を用ひ候へば、次第に過すくなく成行、提撕に力出來、いつとなく日新の益有レ之ものに候。墮落によつて志を捨て自棄におちいるを過を重ると申候。此道有る事を心得てふつとすたり候事は、勿論なき事候。苦樂損益を能御對算、天下第一等人間第一義の意味を御かみ出し候て、志を御勵可レ被レ成候。道を求るを、洛陽へ登るにたとへ申候。洛陽へ登る志を堅く立候へば、其道中種々の難にあひ候とてもひたすらに登る道に懈怠なく、ころべは起て行おきて行て退屈なく候へは、終にいたるものに候。其ごとく聖人に至らんとの志をかたく立、墮落しては提撕し、過ては改め、進脩に退屈なく候へは、必聖地に至るとかや。兎角過をとかめずして志をとがめ、幾度も提撕御尤に候。

答二國領子一

御志進申旨、大幸不レ過レ之候。日用の工夫、事によりて困勉不レ被レ成候ては難レ成候旨、御尤候。顏子已下の賢は、酒色財器其外便利等の事に於て、一旦困勉不レ用候はで不二罷成一候。其困勉すなはち安樂の下地に罷成候。御躰認の趣一段よく御坐候。折節持病氣にて罷有、書中不レ任レ心候。來春可二申入一候。

答二谷川寅一（藤樹全書には與二國領大一書に作る）

ものにて候。いかんとなれば、意欲の魔障重き時は、良知の主宰權を失ふ故に、提撕力なくして墮落に及び候。其躰はふつとすたり候樣に見ゆるものに候。然ども氣機の動靜常ならざるゆへに、魔障も時として退散仕ものに候。其時は又良知惺々として、過を悔る心切なるものに候。志だにすたらざれば、此好時節に於て勵み又出來て、進修の益有レ之ものに候。

答二國領子一

御取入少合點參候由、珍重に存候。如レ仰舊習にひかれやすきに、又外誘に奪れて、墮落たやすき物にて候。其墮落の時よく御勵み候はゞ、次第に御取入かたまるべく候。御不審候はゞ、御書中に可レ承候。

答二國領子一

貴樣心術の病痛、御書中の趣得二其意一存候。皆初學の通病にて御座候。兎角辨惑の功淺き故に、種々適莫の意念すゝみ申故、無事の時は頑空に入、有事の時は煩躁やすからざる物に御座候。適莫の意念とけ候へば、世間の拘事をのづから脫却して、無事の時は惺々蕩々、有事の時は順應安堵なるものにて御座候。權左三月末には歸國に候まゝ、大洲にて緩々御講論可レ被レ成候。

一。世間華美故に、過分に御暮し候て、行末如何と思召候旨、此心はやすゝみにて御座候。世間の習やむ事なくて、世上なみに御もてなし候へば、行末も又世間なみと可レ被二思召一候。

與二國領子一

藤樹先生書簡

與二小川仙一　一作二谷川寅一（藤樹全書には「答二谷川宣一書」に作る。）

讀書をば第二になされ、心裏の良知をよく御躰認、御尤に候。書籍は本吾人心性の註解なるよし承候。註解を讀は本經を明らめんためなり。己か良知を見付ずして徒に經書を究るは、たとへば本經の文字讀を不レ知して徒に註解の訓詁を講究するがごとし。かくして本經を會得したる人は、古來未曾有の事に候。本（脫）を認ずして工夫を勵ますを古人空鐺を煮るといましめられ候。よく御躰認被レ成候て、力を本躰の上に御用候はゞ、多幸多幸。

答二國領太一

御志うはの空にて、自反愼獨の御受用成かね申旨、御尤ながら、沙汰の限と奉レ存候。自己の心裏に、常住不息なる良知の主人公御座候。此君に御對面被レ成候工夫御勵候はゞ、いつとなく浮氣除き可レ申候。扨此工夫間斷なく候はゞ、程なく主人公に御對面有べく候。主人公御對面以後は、萬事の顛倒除きやすきものにて候。能々御躰認被レ成候はゞ、幸甚々々。

答二國領太一

彼人今程御懈怠の由、進退起伏定りなき事は、初學の通病にて御座候まゝ、さのみ墮落を御とがめなく、志のすたり不レ申樣に御あしらひ、御尤に存候。志だにすたり不レ申候へば、いつとなく進み申

日用工程
女訓
贈岡村子
送戸田子 附歌說
送中川子 附屬歌爲文
君子之於天下章主意
子絕四章主意
乞致仕書
右通計五十五通

藤樹先生書簡雜著目錄

書簡

與小川仙
與國領子　四道
與岡村子　六道
答佃叔　九道
與橫山子
答森村小
答早藤子
答中村兵
答中西常慶
答清水季格
答吉田新
答淺野子
答清水丁
答國領太　二道
答谷川寅　二道
答垂井子
答田邊子　二道
答森村子　二道
答森村長
與中村子
答一尾　三道
答淵宗誠
答吉田子
答山田子
與熊澤子
答中川貞貝母

雜著

皆吾道の宗子、斯文の大家也、世の朱を爲る者陸を非とし、その王を爲る者は又朱を是ならずとして、をの〳〵これを壓倒せんとするの氣あり。これ三先生の心を知らざる也。當時朱子象山を謂て天下第一の人也と。陸子も亦紫陽を謂て天下第一の人也と。その相交ること兄弟の如し。議論の問合はざること有といへども、こゝと並行はれて相害せざりき。これを君子の心といふ。その學は天下の公也。然れば朱に祖くと王に祖くと、祖く所異なりといへども、その私たることは一也。三先生の道とする所は何ぞ。此私に勝ちて天下を大同するのみ。今先生の書をよむに、固より王子に據りて亦朱子を引けり。其語意氣象、のか適あり莫ありて固我を絕つことを爲ざる者と相天淵す。余もまたこゝを學ばんと欲して、みづから不逮の責を忘るゝのみ。何ぞ必しも朱といひ王といふことを以て爲んや。いはく、吾子が言の如くならば、特に守る所なきを以て是と爲るか。いはく、齊の虞人宮を守るの守るな如くなるべし。兎を求る者の株を失るが如くすべからす。世のいはゆる守るとは、多くは是執滯のみ、回護のみ。死を守りて道を善するは、このいひにはあらず。私意ある故也。人情往々我に在るを是とし人に在るを非とす。明道先生の王介甫に傳語するに相似たりき。茫々宇宙人無數、幾箇男兒眼有レ瞳。朱陸王子の如きは、皆眼有レ瞳人なり。たゞ一方一世の大賢のみにはあらずして、わが先生を尊信するは、此に在り彼に在らず。

を見て躰用一源顯微無間の學にはあらず。楊道夫いはく、泛々於二文字間一、祗覺レ得異、實下レ工、則貫通之理始見。朱子のいはく、然只是就二一處一下二工夫一、則餘者皆兼攝在レ裏。但恐レ不レ下二工夫一耳と。

一。余むかし柳子厚人の失火を賀する書を讀て、人の見ることあたはざる所を見、人の言ふことあたはざる所を言へりとおもひて、喜心を生じき。先生人の火災にあふに與る書を讀むに及びては、慰中戒を忘れず。戯中正を失はず。首尾數句にして、情義兼盡せり。徳あるの言ある者、かくのごときか。柳の如きは、論に銅臭なしといふべきのみ。又一畏友さきに喪を執れり。要古道を失はざるに在り。その大義に關らざる者の如きは、概俗に從ふのみ。人おもはく、此意實に則とるべしと。後に先生岡村氏に答ふる書を覽れば、正にこれと歸を同じふす。藤井伊藤二先生の喪を說るも、大率如レ是也とぞ。又一同志かつてその色欲を制する所を以て談に入る。人おもはく、此事眞に法と爲へしと。後に先生佃氏に答ふる書を覽れば、果してこれと途を一つにせり。因てますます先生の言の信ずべきをおもひ、且は人の時異に地異に質異に習異なりといへども、其良知に在ては未始より明を同しうせずばあらざることも、亦こゝに見ゆ。吾輩何ぞたゞちに遺敎に遵ひてこれを致すの功を用ひざるといふて、自箴しむ。

一。ある人いはく、藤樹先生の學、朱に始りて王に終ふ。今吾子先生の說を尊信すること如レ此なれば、亦王子に從ふ者なるか。余がいはく、これまた朱陸の辨のみ。爲ることなかれ。朱陸王子は、

正せ。然りといへども、王子の書を玩びて精く其文義を解する者は、恐くは又これに因て遂に先生を視て王先生の學術を知らざる者と爲ることあらん。余はおもはく是知る也。先生の先生たる所此に在りと。何ぞや。王子致知誠意の旨、麁く其文義を解するに於ては、吾人或は精く、先生或はいまだ精からざらん。これを日用言行の間に考ふるに及びては、先生は能合ひ吾人は合ふこと能はざれは、孰をか果して知るとし孰れをか果して知らずとせん。己に克つと自矯るとは似て非なる者也。誠僞の別あり。余かつて畏友の王子矯亭説を述るにきく。いはく矯るを以て名として其實は克つことをするは可也。克つを以て言として其行は矯ることを爲るは不可也と。旨き哉。昔謝師直伊川先生にいへらく。さきに伯淳と易をいへば皆いふ、是にあらずと。伊川のいはく、二君易に通ずる者なり。監司易を談して主簿是にあらすといふ。監司怒らず。主簿敢て言ふ、易に通ずる者にあらずは、能如レ是ならんやと。伯淳は明道先生の字、監司は官長、師直時にこれたり。主簿は屬官、明道時にこれたり。伊川陽明の此旨を知らば、先生の先生たる所知りぬべし。後世の學は小を學びて大を遺る、故にその眞見實論、程王の如くなる者を見んと欲するや難し。慨むべしといふ。

一。贈二岡村一文に、格物を以て存養とし、亦以て省察とす。如レ是の類、いまだ王子の學を玩ばざる者は、定て以て糊塗不分底の語と爲ん。これは存養これは省察といふは、姑その名目を明して、學者をして或は自警め或自考へしむるのみ。其實は存中有レ省省中有レ存にあらざれば、支離間斷

先生致知知至及び誠意を言ふ者、恐らくはいまだ精詳ならず。余別に説あり。今その略を叙ん。世の學者皆致知をよみて知をいたすとし、知至をよみて知いたるとす。固より當れり。唯先生は致知知至を以て渾て知に至るとよむは何ぞや。蓋王説に泥んで然る也。王子の致者至也といふは、大概にこれをいふ。字を説くの躰なり。其實は致は至と自分辨あり。もし其丁寧を致さば、字彙に此字を訓して使₂之至₁也といふが如くなるべし。方に明かにしてまぎれず。泥む所ありといへども、然るに其良知を談じ及び他事に就て論する處の如きは、却て皆王子致知知至の旨と自相符合せり。大學にいはゆる意は、論語のいはゆる意と自異同あり。蓋意は意のみ。然るに意必固我の意は絶ちて迹なからしむべし。これを誠にするは病根に培ふなり。身心意知の意は、誠にして終あらしむべし。これを絶つは機を息る也。故に王子必實₂行其温凊奉養之意₁の云を以て誠意を説り。先生清水に答る書を見れば、いはく、大學の意と論語の意と二義なし。誠は良知の本躰意必固我を格して良知の誠に復るを誠意といふと。意必の意を以て誠意を解すれば、病根生機を幷せて俱にこれを失ふことあらんとす。正にいはゆる噎ふに因て食を廢る也。たゞその良知の誠に復るといふを以て説を終る。故に前の過自補はれ、此意再たび活潑することを得て、方に王子大學と其歸を同しうするのみ。故に先生に在ては、此等の看ありといへども、亦可也。學者の如きは、もし致知の致を識得ずは、恐くは用功下手の第一義に失はん。もし誠意の意を看徹せずは、其弊或は異端邪説の歸とならん。余が此言の妄なるか否やは、學者こふ傳習文錄等に就てこれを

一。篇題の姓名、諸本記す所、時に異同あり。今おほむねその多きに從ひ、下に皆一に某に作ると註す。

一。國領太ありて國領子あり。森村子ありて森村小と長とあり。如ㇾ此の類、其文辭を觀るに、必しも上下の等あることを見ざれば、子といふいはざるは、その偶然なるか。蓋一姓の中に、一人必子と稱するありて、其餘は皆假名實名を用ひて分ち記せるならし。

一。人いふ。國領の太は、太郎右衞門を省けるなりと。凡姓氏の下一字を以て名よべる者、皆是に倣ふ。

一。佃叔或は佃叔一に作り、又佃子に作れり。知らずこれ一人なるか、はた是二人三人なるか。

一。答ニ中川氏母ニ書中の辭、その餘本尊魔障長生不死超出三界萬刧不壞護身法等の如きは、皆姑彼語を借て此道理を喩せるのみ。程朱の明鏡止水虚靈不昧躰用一源顯微無間を引るが如し。蓋その語或是淺露にして見易く、或是當世の熟する所なれは、時にこれを取用ることあるならし。王子いはゆる、君子之教不ㇾ必泥ㇾ於ㇾ古、要在ㇾ入ㇾ於ㇾ善の意なり。先生も亦自いへり。達觀は事の有無に泥まず。唯理の是非を見るのみと。故に此等の言句もしこれに因て遂に自己の趣を誤りて、三教老人の如くなる者あらんかならば、固より醉漢なり、もしこれに就て遽てゝ先生の學を議して、仙佛に淫すと爲る者もあらんかならば、亦擔板漢なりといふべし。およそ書を讀み語をきくは、全躰を通じて其主意を認べし。一處に就てその文辭に執せば、いはゆる不ㇾ如ㇾ無ㇾ書のみ。

書藤樹先生書簡雜著端

一。此編諸家の本往々同異あり、得失あり。甚しうして讀べからざるに至る者も、亦これあり。その篇章は皆又いまだ次序を成すに及ばず。吾が同志加藤氏等一善本を得て主とし、さるに五家の藏る所を以て參互考證し、誤る者はこれを除き、正しき者はこれを收めて、篇章の如きも又各その類を以て從へり。その力を用ることと勤めたりといふべし。或人速にこれを梓に壽せんことを欲す。あるひとはその訛謬の猶在るあらんと恐る。余がいはく、然り。大意既に明かならば、餘は必しも問はじ。校讐此に止るも亦可なり。然りといへとも、その行文のいまだ順ならず、措辭のいまだ安からざるに似たる者、千百けだし其一二を見ることとあり。唐人の詩に、復恐忽々說レ不レ盡、行人臨レ發又開レ封といひ、又裘遲偏喜添二詩學一、更把二前題一改二數聯一といふことの一時に出るは、其或は如レ是なるも亦宜ならずや。是に於て愚衷を伸べ駑才を致し、敢てこれが修飾をなす。大抵人情疑ふ者は必毛を吹て疵を求むることを病み、信ずる者は或菽麥を渾呑することを患ふ。是楚は固より失へり。齊も亦未レ得とせざるなり。余竊に先生の旨益以て明白通暢にして、蒙士晩進得て以て二の者の弊に免るゝことあらしめむと欲するのみ。若かの代匠の誚は固より辭せざる所に在りといふ。

一。舊本、雜著或は書簡、小錯はる。今その界限を嚴にす。

一。人一名にして書數篇なる者、諸本多くは數處に散在す。今これを一列となす。

藤樹先生書翰雜著題言

高島之郡無僻。小川之邑無陋。有中江子在也。余嘗登枝嶺臨琶湖。泛湖周望群峯。曰。相得哉山水之觀也。佳矣麗矣。雄矣壯矣。不啻以一江州。而天下大焉。夫地靈人傑。申呂岳降。則其鍾秀豈徒然而已哉。此先生之出于湖右也。非耶是。艮止也。兌說也。君子止以成己禮也。說以成物樂也。禮樂備矣。此謂山澤合德。此謂知易。則先生其人也。而教不出家。化不過鄕。嗟。其時之未遇與。或曰。爲其不得於壽也。識者憾焉。何以知其德之然。曰。殘篇未墜。口碑在人。今所刻書簡雜著。總五十餘篇。乃其一。學者宜佩服焉。又曰。一鄕之善士。友一鄕之善士。一國之善士。友一國之善士。士之善蓋天下而優者。余於先生見之。

正德三年冬十月　　石菴題

跋

召伯之棠。民猶愛レ之。孔子之沓。世共寶レ之。慕二德之馨一也。先生之集雖レ質。然其言無下不レ本二名教一者上。則起レ人之益。何啻棠之與レ沓。余欽二先生之德一久矣。今聞二此集之上刻一。不レ勝二歡喜一。謹跋二數言一

橘　春　暉

無三入而不二自得一焉。

送二熊澤子一序。

不佞雖レ非二溫レ故知レ新者一。二三同志。謬推以爲二句讀之師一。不レ得レ已。而竊依二惟斅學半一。念二終始典一レ于學之法言上。而常恐或有レ誤二後學一。若下蹈二虎尾一涉丙于乙春氷甲。熊澤子亦有二此招一。今將レ趣二豫州一。臨レ別告曰。夫師範之官立三本於二隱微一。而生三道於二講論一。或與二其進一也。不レ與二其退一也。與二其潔一也。不レ保二其往一也。而不レ爲二已甚一。或語レ上。或不レ語レ上。或擧二一隅一。以待二其反一。或憤悱而后啓二發之一。或進レ之。或退レ之。或如二時雨化一レ之。或成レ德。或達レ財。或答レ問焉。敷レ之如二灌漑一。萌芽拱把合抱。各隨二其分一。答レ之如二鐘聲音之大小必隨二其扣一。育レ之如二水潤一レ物。遲速由レ物。而不レ至レ於二浹洽一不レ已。約レ之在下本レ于二無言之宗一。而不レ失レ人。亦不レ失レ言。格レ物致レ知。教學相長。以與致二中和一。天地位焉。萬物育焉上而已矣。原有レ志。未レ能レ得二其萬一一。夙夜念レ茲在レ茲。子亦勉レ旃。欽哉。

潮園先生閲

藤樹先生遺稿卷之二畢

坎水之象也。所レ謂洗レ心者。以二自反之神水一。消二放心焦火一之義乎。是以。善用二自反一。則世間種々苦楚怨尤。熱條消。而胸次清涼。似三蓮華之濯二清漣一焉。既自反矣。而苦痛煩熱謁矣。猶二疾病始愈而氣餒而神不レ爽。故愼レ獨而立二大本一。猶三病愈而後補二養元氣一焉。蓋。獨者。良知之殊稱。千聖之學脉也。獨字之義。有二多端一焉。萬物一原。故謂二之獨一。其(其无間。疑脫二尊字一。)无レ對。故謂二之獨一。大虛寥廓。更無二別物一。而三才一貫。故謂二之獨一。在レ我。則自己一人之所レ知。而人所レ不レ知。故謂二之獨一。貌言視聽思。接物應事。一レ於レ此。而無二別路一。无二別事一。故謂二之獨一。卓然獨立。而无レ所レ倚。故謂二之獨一。由レ己不レ由レ人故謂二之獨一。自然而無レ所二學習一。故謂二之獨一。純粹而无レ所レ雜。故謂二之獨一。眞實而不レ二不レ三。故謂二之獨一。以二萬物一爲二一體一。故謂二之獨一。愛敬不レ間二物我一。而無二二心一。故謂二之獨一。動靜語默。喜怒哀樂。一樣景象。而无二以異一。故謂二之獨一。聖凡一體。生死不息。故謂二之獨一。貧富貴賤禍福利害。毀譽得喪處[illegible]。故謂二之獨一也。愼者。恭敬奉持之意也。愼レ獨者。尊二德性一以爲二身心之主宰一之謂也。蓋。自[illegible]愼レ獨也。相兼用工。皆所三以明二德。而非レ有二兩般之功一。以三自收二放心一。而謂二之自反一。以レ立二[illegible]本一。謂二之愼レ獨。必毋下以二條分一而入中支離上也。是故。自反而克レ己。以二獨字之義一爲二筌蹄一。而可レ求レ仁矣。克レ己則可三以入二德矣。得二此意一。則以二自反愼レ獨爲レ事。而不レ可二須臾忘一也。所レ謂。必有レ事焉。勿レ正レ心。勿レ忘。勿二助長一也。此之謂也。是以。未レ見レ獨。則將三愼以レ見レ獨爲レ事。己見[illegible]獨。則以レ愼レ獨爲レ事。夫然。故貌言視聽思必於レ是。接物應事必於レ是。貧富貴賤必於レ是。禍福利害必於レ是。死生壽夭必於レ是。毀譽得喪必於レ是。造次必於レ是。顚沛必於レ是。故曰。無二往而非一レ學焉。

然不レ動。感而遂通二天下之故一。无下以二聖凡一餘欠上。不下以二窮達一加損上。但爲二氣習情欲一所レ蔽。則不三啻不レ通二天下之故一。於二其親一亦不レ能レ通。然幸其本體之明。有下未二嘗息一者上。可レ知二其止一。而艾三除舊習之葛藤一。消二化情欲之邪火一。以復中本體之明上。此之謂二大孝一焉。此乃天下第一等事。學問第一義也。

贈二中西子一說。

子曰。學而時習レ之。不二亦說一乎。說者。心之本體也。天理流行。和暢明快。之謂レ說。蓋人之患莫レ甚レ於二憂苦一。不レ知三學而以忘二其憂苦一也。故揭二此說字一。以興二起天下萬世進レ學之機一也。而弟子用レ此以冠二二十篇之端一。其意亦可レ知矣。問。雖二初學困勉之資一。亦有二此說一乎否。答。聖賢所二開示一。有二本體一有二工夫一。說者。是本體自然之德。學問之種子。無下以二聖凡一加損上。故雖二困勉之資一不レ無二此說一所レ謂困勉。只言二升レ堂入レ室之難一而已。非下謂二得此說一之難上也。蓋人之千辛萬苦。皆出レ於二凡情一凡情者氣習情欲三者。相釀而成者也。既學。則知二凡情之害一。而欲レ復二本心之說一。是以。初學之士。雖レ未レ有レ所レ得。而凡情之拘攣懊憹。大率蠲二其甚者一。而無二焦火凝氷之變一。略似レ得二說之皮殼一也。而時習。則漸欛柄入レ手。而日日躋二聖地一。而其說與二孔顏樂一儔。由レ是觀レ之。自二初學一以至二成德一皆有二此說一。故只曰。學而時習レ之。而無二初學成德之分辨一。其立言之意。亦可レ觀矣。

贈二國領子一說。

竊按。反二顧レ乎レ外求レ於レ人之心一。先將二全體精神一。照二察自己腔子裡一。而無二毫髮之滲漏一。之謂二自反一。蓋顧レ外求レ人之心。專管二外照一而裏面冥然。乃離火之象也。自反之心。專管二內照一而外面闇然。乃

親之愛ニ其子一。仁也。而俗尙ニ名利一之意。間三雜於ニ其中一。則其仁所レ蔽。而愚也。是以。人有下拒ニ其子之爲レ學者上。而其爲レ子者。誤謂三父拒ニ我學一。而不レ知四所三以勸ニ我學一也。蓋父之拒ニ子之爲レ學者。不レ知ニ位祿功名。本由レ學而得一。卻患下學問有上レ害ニ其子之位祿功名一而已。如識ニ得其實理一。則必不レ可レ不レ患ニ其子之不レ好レ學也。然則。所レ拒ニ其學一。非レ所三以勸ニ其學一乎。爲レ人者。識ニ得其機一。而篤志好レ學。自反愼ニ其獨一。則必觸ニ發父之靈明一。而其愚亦可ニ氷釋融通一矣。森村子之境遇。有下少似レ于レ茲者上。故特擧以爲ニ臨レ別之話一。於レ是。森村子問ニ用レ力之實地一。曰。吾子之不レ從ニ父令一而來。豈無レ父之心乎哉。善知ニ來學之義一。雖レ違ニ父令一。而實爲ニ嚴父配天之大順一也。此知也。不レ學不レ慮。所レ謂良知也。能體ニ察此知一。而默修默證。全無ニ圭角一。此乃入ニ聖脈路一。格致之工程也。於レ是得ニ把柄一。則雖レ違ニ父母之情識一。而順レ乎レ親也。如一念墮落。則雖レ從ニ父母之情識一。而爲ニ悖逆之子一也。吾子請勉レ旃。

爲レ善如ニ耕耘一。雖レ不レ得ニ當下之穀一。必得ニ秋實一。作レ惡如レ飮ニ鴆酒一。雖レ得ニ卽席之燕樂一。必死期來。

贈ニ清水子一說。

鈞是順レ親養レ親。或爲ニ大孝一。或爲ニ小孝一。何哉。人之一身。有ニ大體一有ニ小體一。以ニ大體一順レ親養レ親。爲ニ大孝一。以ニ小體一順レ親養レ親。爲ニ小體一。蓋身體髮膚。此小體也。仁義禮知。此大體也。身體德性。皆受ニ之父母一。而非ニ己所ニ私有一。本皆父母也。故以ニ情愛一謹レ身。則順レ親亦以ニ情愛一。所レ謂順ニ情識之父母一者也。尊ニ德性一修レ身。則順レ親亦以ニ德性一。所レ謂順ニ靈明之父母一者也。是以。孝經以ニ嚴父配天一爲ニ大孝一。中庸以ニ明善誠身一爲ニ順レ親之道一。曰配天。曰明善誠身。只是在レ明ニ明德一而已矣。明德之愛敬。寂

子曰。孩提之童。無レ不レ知レ愛二其親一也。及二其長一也。無レ不レ知レ敬二其兄一也。此以二神發レ知之時一。示二其靈照之眞一。又曰。大人不レ失二赤子之心一。此以二情欲紛擾之時一。示二其本體一也。孝經曰。夫孝。天之經也。地之義也。人之行也。此以二三才一貫一。示二其實體一也。順レ茲安レ身立レ命。則未レ能三身立至二至處一。亦君子之徒也。悖レ茲立レ心。則或入二異端一。或入二禽域一。是故。雖レ有二周公之才之美一。不レ知レ命。無三以爲二君子一也。論語以レ此終レ篇。厥旨至矣盡矣。夫子之愛レ親命也。是故。愛二敬其親一而不レ失二中和之眞一。此之謂レ知レ命。今吾子歸事二父母一。克格レ物致レ知。以允執二厥父配天之中一。而免二三千第一之罪一。况レ愧二今日之講友一惟幸。戒哉懋哉。

贈二赤羽子一說

赤羽子志レ於レ道。遊二原之門一。有レ年レ于レ茲。癸未春。講二明中庸一。未レ半而患二不仁之疾一。以レ愼レ疾求二醫攝州一。於レ是。告二吾所レ聞。蓋百病生レ於レ氣。氣之失二其所一。皆因レ願二其外一。是以。不レ願二其外一。則[illegible]志壹。則氣不レ餒。而足三以配二義與レ道。配二義與レ道。則其爲レ氣也。至大至剛。而塞三乎二天地之間一。夫然故。雖三形氣有二不仁之症一。而方寸之仁。豈不レ存。仁常存。則形氣之不仁。不レ足二以爲レ憂。而疾亦可二以止一矣。熟二察子之病因一。在二由レ人而失レ已。比來所レ講。素二其位一而行。不レ願レ乎二其外一心法。乃對レ症之聖藥也。愚以レ短レ於レ醫。故唯以レ此餞二厥行一而已。夙夜服食。以治二心病一。而立二治療之大本一。惟予所レ望也。因筆レ之以庶二幾厥不忘一。欽哉。

送二森村子歸一レ鄉序。

レ善閉レ邪之意切矣。夫以二已レ之一句一爲レ有二官守一者。不レ得二其職一則去之義上也。其鑿甚矣。所レ謂不レ得二其職一者。其君無道。而不レ能レ用二我職分之當レ爲之謂也。非下其才德不レ足。而不レ能レ守二其職一之謂上也。不レ能レ守二其職一之小人。而豈得下行中不レ得二其職一則去之義上也。不レ曰レ去レ之而曰レ已レ之。則君之所レ已。而臣之非レ所中致二其職於レ君而去上也明矣。此章三節一意。自二遠而經者一。而歸二着近而重者一。猶二詩之章次一。宜二熟玩一。或又取二集註憚レ於二自責一一句上。而遂傅會以爲二此章之主意一。其亦誤矣。憚レ於二自責一一句。貶下議王顧二左右一而言上レ它之過失上也。非レ論二此章之主意一焉。集註圏外趙氏之說。即此章之主意也。者箇最宜二明辨一之也。

送二森村子一序。

森村子遊二原之門一。用二力於心學一。有レ年レ于レ茲焉。今適方二論語終レ篇。從二父之命一歸省。肆述二卷尾一章之意一。以竊比レ於二送レ言之一事一。蓋天命之謂レ性。性之實體。有二玄妙不測之神靈一。而无レ聲无レ臭。有二中和无偏之至德一。而无レ意无レ習。生民之大本。學問之靈樞也。然自レ古知レ言レ性者。多迷二其眞一。不レ知レ言レ性者。日用而不レ知。是以。告荀楊韓。於二情欲已發之後一見レ性。故或以爲レ生。或以爲レ惡。或以爲二善惡混一。或以爲レ有二三品一。其失何啻千里乎。老氏以二出胎時一見レ性。佛氏以二父母未レ生時一見レ性。可レ謂甚近レ理。而未レ能レ見二玄妙不測之神靈一。一貫切近之孝德。還以爲二頑極的一。比二之荀楊一。雖二稍高一。而失二其眞一惟同。聖賢有レ憂レ之。肆易曰。一陰一陽謂二之道一。繼レ之者善也。成レ之者性也。此以二父母未レ生時一。示二其本眞一也。孝經曰。親生二之膝下一。以養二父母一日嚴。此以二出胎時一。示二厥實體一也。孟

尙如レ此。而況佛氏不仁之形乎。邦俗治レ喪。用ニ浮屠道一。嘗葬ニ其子一。不レ用ニ浮屠一。則非レ不レ知ニ流俗之不レ可レ從。佛氏之可ニ擯斥一。只不レ能下擧ニ斯心一加中諸彼上而已。義足レ葬ニ其子一。而功不レ至ニ其身一者。獨何與。私欲害レ之也。浮屠假ニ經典一爲ニ修多羅名一者。巫覡多レ禹。醫多レ盧之類也。己之道狂妄。而不レ足ニ以動一レ人。借レ此自衒。求ニ人之信從一也。以レ此爲レ例。則假ニ沙門之位一。以將レ有レ裨ニ於斯道一乎。未レ聞下古昔之聖賢。假ニ異端之位一以爲中世敎之助上。嗚呼。其亦誤矣。如曰下名義相通者。異ニ其解一而可中假用上。張子曰。乾稱レ父。坤稱レ母。予玆藐焉。乃混然中處。如レ此。則生民皆是天之子也。稱ニ庶人一曰ニ天子一。可乎。不レ思之甚也。其曰レ盡レ反ニ其本一。由ニ其言一推レ之。經典反ニ其本一。則聖人之書名也。非ニ浮屠之所三可ニ假用一。剃髮與ニ法印一反ニ其本一。則佛者之形位也。非三儒者之所三可ニ假用一也明矣。孟子曰。服ニ堯之服一。誦ニ堯之言一。行ニ堯之行一。是堯而已矣。服ニ桀之服一。誦ニ桀之言一。行ニ桀之行一。是桀而已矣。今肖ニ佛者之形一。居ニ佛者之位一。服ニ佛者之服一者。謂ニ之佛者一而已矣。

答ニ小川子一書。

孟子梁惠王下篇。王之臣。有下託ニ其妻子於ニ其友一。而之レ楚遊者上章之疑問。乍讀如レ可レ喜者。而細以ニ本文事理一求レ之。則失レ之遠焉。此章之主意。在レ論下君臣上下。各不レ勤ニ其任一。墮ニ其職一。則憂辱必及中其身上也。而孟子立言之本旨。則欲レ戒下宣王之（一本之不問。有下不レ君而災害將レ至也。蓋人君十一字上）不レ止ニ於仁一。而爲中天下僇上。猶下不レ止ニ於信一。而所レ棄レ於ニ其友一。不レ能レ治レ士。而所レ己レ於ニ其君一也。然暴君暗主。常以ニ亡レ身之虐政一。郤以爲ニ安レ身治レ國之計一。而不レ能レ察。是故。先設ニ易レ曉之二事一。而啓ニ其心一。推レ類而匡ニ救之一。其陳

居。舍二正路一而不レ由。朱子所レ謂能言鸚鵡也。而自稱二眞儒一也。吾邦聖人不レ作。而異端之敎。日新月盛。邪誕妖妄之説競起。塗二生民之耳目一。溺三天下於二汚濁一。是以。知レ德者鮮矣。故推レ之以爲二吾邦之儒宗一。而信二其言一效二其行一者多。彼居レ之不レ疑。施々驕二其門人一。出而仕レ於二江戸一。以三其形類二沙門一也。已已之除夕。賜レ之以二沙門之位一。林氏兄弟者。受レ之以爲二榮幸一也。而慮二世之毀咲一也。作レ之以飾二其非一。而成二其惡一。聽者懵然不レ察。同然從レ之。故擧レ世以爲儒者之道唯如レ彼而已。而不レ知レ有二明德親民之實學一。噫。後之人雖レ欲レ聞二實學一。其孰從而聽レ之。正路之蓁蕪。聖門之蔽塞也。其害有下甚レ於二異端一者上。故予不レ得レ已。而擧二其言一以爲レ辨如レ左。道春之辭曰。吾兄弟祝レ髮者。從二國俗一。與二太伯之斷髮孔子之鄕服一。何以異哉。受二法印之位一者。以經典本聖人之書名也。浮屠假爲二修多羅名一之例。而名義所レ取與レ彼不レ同也。盖圓剃二除顚髮一。而以二餘髮一爲レ髻者。本邦之國俗也。盡剃二除其髮一。而無レ髮者。佛者之頭容也。非二國俗一焉。邦俗恭二沙門一。故衆技之流。有下假二其形一而求中人恭レ己者上。太伯之斷レ髮孔子之鄕服。其國俗而從レ之。豈別有二異端之法一。而從レ之之謂乎哉。夫林氏之剃髮。非二佛者一。則假レ形之徒也。非レ從二國俗一也。不レ言而可レ知矣。而自附レ於二斷髮之權鄕服之義一。自欺而欺レ人。其所三以惑レ世誣レ民。充二塞仁義一。不レ可二勝言一。譬二諸小人一。其猶二穿窬之盜一也與。盖太伯之斷髮。權也。處二父子兄弟之變一。而用レ此得レ中。所三以爲二至德一也。孔子之鄕服。襲二水土一之事。而所二以安レ土敦三乎レ仁也。子曰。麻冕禮也。今也純儉。吾從レ衆。拜レ下禮也。拜二乎上一泰也。雖レ違レ衆吾從レ下。由レ是觀レ之。則君子之於二國俗一也。無レ適也無レ莫也。義之與比。非レ有レ必レ於レ從レ俗。其國俗

作。所以殺其軀也。蓋玄同之待安昌如犬彘。安昌爲怒氣所動。而犯逆理亂常之罪焉。以常情見之。則師不師。安昌之所犯。可謂宜也。然先王之制。民生於三。事之如一。而師居其一。傳曰。君雖不君。臣不可以不臣。父雖不父。子不可以不子。由是推之。則師雖不師。弟子不可以不弟子。苟安昌之罪不容誅矣。是豈違於禽獸遠乎哉。玄同安昌共是人面獸心之俗也。何足論乎哉。或曰。若安昌以理御氣。則必不犯弑逆之罪。然則。玄同得免。而子論所以殺其軀者。何也。（也人之間。一有曰字。）人之有才。不足以爲人害。惟無所本。而徒用其才。殺是。才始足以病己。甚至有取死之道。又不若魯鈍無才之愈也。吾但述其理之當然而已。苟安昌使人心聽道心之命。則玄同得免。然如玄同者。不至於顛覆不已也。假饒得免安昌之弑逆。必取其他之死禍矣。曰。於玄同取死之道。既得聞命。敢問。左門謂玄同稱醇儒也。然子以謂之人面獸心者。何也。曰。其謂鄙夫爲人面獸心者。以爲氣稟所拘。人欲所蔽。而失本心之德。是以。心之靈。其所知者。不過情欲利害之私而已。是則。雖曰有人之形。而實不殊於禽獸也。夫玄同之爲人也。徒事於博物洽聞。以狥外誇。多爲務。而不覈表裏眞妄之實然。是以。識愈多。而心愈窒。故說飾口。既罔大學之明法。效佛剃髮。以侮孝經之聖謨。以陷溺形氣之私。而戕賊性命之正。是則。非人面獸心之俗。而何也。而謂之醇儒者。妄人之私言也。

林氏剃髮受僧位辨。（辛未春作。時年二十四。）

林道春記性穎敏。而博物洽聞也。而說儒者之道。徒飾其口。效佛氏之法。妄剃其髮。曠安宅而弗

藤樹先生遺稿卷之二

近江　岡田維鷹時揚
伊島廷資深卿　校

文類

讀安昌殺玄同論

洛有舊友。已巳之冬。寄書於潮信。書尾筆林左門所作安昌殺玄同論。因讀之。其論安昌之罪。則可也。論玄同。則不可也。其謂玄同稱醇儒也。是則左門之不智之甚者也。蓋格物致知。而誠意正心。以修其身。無有氣質物欲之累。而復得本體之全矣。是以。達則兼善天下。窮則獨善其身。此之謂儒者焉。本朝稱儒者者。徒知讀聖人之書而已矣。可與共學者。未之有也。而觀其躬行之實。所以惑世誣民充塞仁義。有甚於異端者。而玄同其徒之尤者也。如之何而謂醇儒乎哉。吾恐學者之認左門之言。以如玄同者為醇儒。而習不察。故忘其固陋。以作論曰。

玄同見殺者何也。盆成括仕於齊。孟子曰。死矣盆成括。盆成括見殺。門人問曰。夫子何以知其將見殺。曰。其為人也小有才。未聞君子之大道也。則足以殺其軀而已矣。由是觀之。則玄同之為人也。雖讀聖人之書。口甘訓詁之學。而不知德。是以。不能變化其性質。恃才妄

天上無心生ニ春陽一。人間有ㇾ意嘉ニ新正一。人間天上本無ㇾ異。日用亘知惟至誠。

送ニ加世伊右衞門尉歸一ㇾ鄕。

萬苦百殃克ㇾ己鋤。五常十義致ㇾ知全。請君歸去事ニ斯語一。安樂世間莫ㇾ大ㇾ焉。

悼ニ瞽者玉井子早世一。

講論日々相師ㇾ道。不ㇾ滅眼光由ㇾ此明。不幸今亡雖ㇾ可ㇾ戚。孰ニ與浪死與ニ虛生一。

戊子夏正之吉。綴ニ鄙詩一章一以爲ニ試輸之文字一云。

教官讀ㇾ法屬ㇾ法晨。同志彌希勸戒眞。怪且羞沽心不ㇾ古。千山萬木唐虞春。

戊子夏。與ニ諸生一見ㇾ月。偶成。

清風滿坐忘ニ炎蒸一。明月當ㇾ天絕ニ世塵一。同志偶然乘ㇾ與處。不ㇾ知不ㇾ識唐虞民。

滕樹先生遺稿卷之一畢

讃賀ニ文宣王尊像一。

太虛寥廓。夫子至仁。兩儀化毓。六經々綸。普天之下。率土之濱。有ニ血氣一者。莫レ不ニ尊親一。

・舊年之冬。與ニ同志一講ニ明二南一。至ニ臘之下浣一終レ篇。篤是以賦ニ厥體察之一得一。以爲ニ試毫之事一。

穆々文王不レ顯春。梅花鶯語二南民。何爲後學不ニ興起一。杰（杰俗假與レ豪通用。）傑惟人予亦人。

古來難レ聞者道。天下難レ遇者同志。而同志數輩相遇。講ニ心學於ニ江西之僻壤一。誠可レ謂ニ太幸一也。然唯慚レ未レ克レ有ニ道義於レ身而已矣。今乙酉之歲。朔至而春未レ立。恰似ニ吾人有レ志。而極未レ立。肆綴ニ鄙詩一絕一。以勵ニ講習之務一。

習若ニ密雲一名利埃。何時白日青天開。吾人學問似ニ今旦一。朔已雖レ來春未レ回。

丙戌之歲旦。

二三同志。賴ニ天之靈一。幸講ニ習一貫道術一。而未レ能レ得レ仁。唯辯ニ天下第一等事一在レ於レ玆。而僅超ニ脫世情之拘攣一。而竊比レ於ニ說之皮膚一。以庶ニ幾將來之眞樂一而已。惟時丙戌之新正。同志相聚。賀ニ三元一。於レ是賦ニ即景即事一。以爲ニ試翰之事一。

霞簇四山和氣新。梅花柳色僉成レ眞。今朝堂上三行酒。同志嘉（嘉恐賀誤。下二字同。）唯春外春。

丙戌之夏。偶成。

獄外在レ獄納ニ世界一。名利傲意其四壁。哀哉世間多少人。拘ニ攣這裡一長戚々。

丁亥正月之吉。試翰之次偶成。

同聲相應同氣相求之機一焉。人乎天也。故講習討論。心々相融而甚喜。得二輔レ仁之益。莫レ逆之奇趣一。今逮二中庸之講終一レ篇而歸省。因賦二中庸要旨一。以竊比レ於二送レ言之事一。

囦（（增）囦。玉篇云。古文淵字）鑑惟幸。

動而無レ動靜無レ靜。无レ倚圓神未發中。愼レ獨玄機必於レ是。上天之載自融通。

中川子志學翼年。以二父兄之命一。遠來二草廬一。入二心學之門一。其志篤其學强。孜々以終レ日。焚二膏油一以繼レ晷。既四二年於茲矣。壬午之春末。孝經中庸之講終焉。於レ是夏之孟歸三省父母于二豫州一。臨レ別賦二全孝心法一。以望二其聽レ於レ無レ聲視レ於レ無レ形之愛敬一。

躬行惟幸。

孝德以レ中爲二厥體一。無レ偏無レ倚至誠神。一毫意必三千罪。努力戒懼不レ顯レ眞。

横山子志二於學一。有レ年レ于レ玆焉。壬午之夏初。因レ疾浴二攝州之温泉一焉。不佞之環堵僻壞。而往來之便雖レ不レ宜。而以レ有二如レ蘭之素一。故來問二愚夫之安否一。於レ是互盡二氣聲求應之情一。而淹滯三旬。以講二明孝經之心法一。因撮二其要一綴二一絕一。以聊抒二臨レ別切偲之萬乙一。

體察多幸。

愛敬順時百事公。驕爭除後萬殊通。立レ身行レ道配二天敬一。正與二神明一同二此中一。

和二島川子詩一。

靈明一點地雷陽。无レ迎无レ將眞坐忘。此箇玄機君信否。通レ神孝德出二人方一。

七字靈光光ニ日東一。照臨赫々在ニ儒宗一。斯文興起冀ニ神助一。千里飛梅一夜松。

庚辰之雞旦。將レ試レ觚。而心似レ有レ所レ得。因賦ニ野詩一章一。以爲ニ將來躬行之戒一。

致知格物學雖レ新。十有八年意未レ眞。天佑ニ復陽一令レ至レ泰。今朝心地似レ回レ春。

辛巳之歲。夏之仲。參ニ拜　太神宮一。以綴ニ野志一抒ニ卑志一。誠恐誠惶。謹述ニ卑懷一。以準ニ祝詞一。

光華孝德續無レ窮。正與ニ犧皇一業亦同。默禱聖人神道教。照ニ臨六合一太神宮。

仲子曰。負レ重道遠。不レ擇レ地而休。家貧親老。不レ擇レ祿而仕。今谷川氏之境。逢レ於レ斯焉。故離ニ同志之群一。而干ニ貧仕於ニ豫州一。而其心患下無ニ學文之餘力一。而入レ德之難上。是以愚不レ得レ已。賦ニ側躰一絕一。使レ書ニ諸紳一。以餞ニ其行一。

素レ位勿レ患レ離ニ同學一。佗山石可ニ以攻一レ玉。入レ神心脉豈在レ文。莫レ破至誠無息曲。

愚竊有レ志レ于ニ心學一。於ニ江西藤樹下之草廬一。與ニ同志一相切磋琢磨者。有レ年レ於レ此。論講已迨ニ先進首章一。偶逢ニ玄黓敦牂之春一。故聊賦ニ大禮大樂之萬一一。以供ニ試翰之事一。以庶ニ幾吾人明辨之一助一。

徒從レ外勿レ認ニ文章一。梅白桃紅春色常。非レ綠非レ青禮葉盛。不レ濃不レ淡樂花香。

詩云。悠々昊天。曰父母且。由レ是觀レ之。火食而豎立者。四海之內皆兄弟也。而其中或有下以ニ性命一相友愛者上。或有下以ニ面貌一相友愛者上。或有ニ顚連而無レ告者一。今吾於ニ熊澤子一。似下以ニ性命一相友愛者上。是以愚雖レ無ニ不レ孤之德一。往年辛巳之秋。謬與ニ有レ隣之訪一。而推下其所ニ以相識一之由上。有ニ

義畫昭々無極眞。彖爻十翼趣時陳。發明有レ得莫レ言レ贅。野草官梅同是春。

戊寅之雞旦。讀二孝經一偶成。

心地收レ春當レ踐レ形。於レ人細柳眼先青。元爲レ老和氣爲レ子。充二塞兩間一惟孝經。

戊寅之秋。吉田子遠訪二予隨菴一。可レ謂久要不レ忘二平生之言一。而其情深切矣。愚雖レ未二習而說者一。似下得二朋自二遠方一來之樂上。爲講二論語一。及レ終二鄉黨篇一而歸。因臨レ別賦二一絕一。以爲二切々偲々之一事一。

一貫心法勿二他求一。鄉黨全篇聖所レ裁。動靜云爲宜レ止レ善。山梁雌雉亦時哉。

中村子志二於道一。而來求二大學之講於一レ予。既終レ篇而其志彌篤。其愼レ終欲レ如レ始。故臨レ別賦二一絕一。以爲二誘掖之一助一。

八目工夫請勉レ諸。浩然眞氣復二其初一。死生貧富我何與。一片浮雲過二太虛一。

題二竹生島一。

艮上一陽泛レ坎出。卦神本是大明神。浮屠誤做辯財號。天運循環必復レ眞。

森村子志二於道一而好レ學。不レ得レ已而貧仕。東奔西走。猶未レ有レ所レ得。而雖レ無二閒暇一。以二其志篤一。故來訪二草廬一。爲講二原人持敬圖說一。臨レ別賦二拙詩一章一。以爲二成レ美之一事一。

世間富貴片雲輕。天爵常尊知是榮。西走東奔還可レ喜。帝心庸玉二女於一成。

題二菅廟一。

開レ物成レ務。繼レ天立レ極。嘗レ草作レ醫。藝レ穀足レ食。兩事不レ設。兆民豈息。大直（直恐悳訛。悳古德字。）日生。
巍々唯則。

池田氏有レ故。以レ義赴ニ於江戸一。因訪ニ陋巷一。濡滯一二日。講ニ論大學之心法一。而有ニ輔レ仁之益一矣。愚雖レ不レ有下朋自ニ遠方一來之德上。尤足ニ得ニ莫レ逆之樂一也。臨レ別賦ニ一絕一。以相ニ勵切瑳之功一云爾。

滿襟義々究ニ精微一。遠促ニ旅裝一行不レ違。離別河邊相勵道。勿レ忘應接操ニ舟機一。

偶成。

世味本惟淡。甘辛由レ疾成。正心無ニ氣累一。玉食是藜羹。

中川子遠訪ニ陋巷一。而講ニ論大學之心法一。其情深其志篤。臨レ別賦ニ一絕一。以庶ニ幾體認自脩之一助一。

畏レ天尊レ性莫レ懷レ居。世事紛々以レ己憂。誠意工夫純不レ已。孔顏至樂自レ茲求。

五福六極吟。

惠レ迪吉兮從レ逆凶。嚮レ威期レ福極毋レ評。試舟盪レ陸車浮レ海。枉費ニ衆功一虛器成。

論レ學。

事レ親盡レ孝父惟慈。地利天明民秉彜。好惡麟經一王法。行藏犧易六爻時。夏葛冬裘我不レ與。春蘭秋菊聖無レ爲。舜何人也立ニ其志一。誠意正心玄德基。

丁丑雜旦題ニ草稿一。

於洛偶成。

吾孤皷瑟世皆竽。面友盡言可絕絃。今亦有期人不識。烏紗巾上是青天。

乙亥之秋。洛友來請益之次。筆白鹿洞規以示諭。楮國有餘地。故作一絕以書其端。

寄友。

乃獸乃禽從小體。須求明德履其全。請看此理甚分曉。鳶戾天兮魚躍淵。

丙子之歲。雖旦偶逢立春之節。因有感賦小詩。以庶幾工夫之一助。

格致誠脩貴日新。易難先后不彬彬。料知聖學成功地。氣朔今朝共是春。

丙子之春。送信古。

不遠海陸百里之阻。而來訪我草廬。金蘭之交。骨肉之親。謝忱无詞。別後三年。事燈前一夜話。或辨致知之疑。或講克己之功。或論一心之妙。或明萬物之理。而惟日不足。滯留數日。猶造次之頃。臨別不得已。而賦小詩。以言志云。

晦盲否塞聖人謨。聞識窮經皆俗儒。世道重任君勿讓。惟時吾輩中流砥。

會藤田子於洛。而又邂逅初逢島川子。皆心友也。於是弄丸譚易。惟日不足。臨別不得已。而賦一絕以庶幾相責之一助。

心友相逢堪弄丸。波瀾雖起點無瀾。父慈子孝畫前易。須向韋編絕處看。

丙子之冬。十一月念五日。謹贊神農尊像。

藤樹先生遺稿卷之一

岡田維鷹時揚
近江　岡田師聖伯良　校
伊島廷原深鄉

詩類

壬申之冬。寄レ友。

產業隨レ時必勿レ擇。伊耕ニ莘野一呂漁翁。君看不レ有ニ般周遇一。依レ舊釣磯畎畝中。

癸酉之元旦。參神事畢。而獨坐有ニ鄉思一。屈レ指羈旅既十ニ八年于此一矣。偶然憶ニ得皐魚之事一而讀ニ其傳一。至ニ樹欲レ靜而風不レ止。子欲レ養而親不レ待。而三ニ復之一而悔ニ悟昨非一焉。於レ是賦ニ曾（曾恐曹字訛）鄶之一絕一。以聊言レ志、非ニ枉費ニ精神於無用一。所レ謂不レ得ニ其平一則鳴者也。故不レ泥ニ詩法一。而只用ニ二十八字一而已。

羈旅逢レ春遠耐レ哀。緡蠻黃鳥止ニ斯梅一。樹欲レ靜分（分當作兮）風不レ止。來者可レ追歸去來。

甲戌之冬。舟中見レ月有レ感。

念慮一毫差。酬應千里訛。人心宜レ主レ靜。明月不レ沈レ波。

乙亥之春。二月十六日。謹贊ニ文宣王之尊像一。

明同ニ日月一。德合ニ乾坤一。人中太極。宇內至尊。觀感所レ得。作ニ耳聞論一。莫レ道圖書。不レ繪ニ神言一。

送ニ熊澤子一序

文類

藤樹遺稿目錄

詩類

藤樹遺稿

刻二藤樹遺稿一序

書云。言レ之非レ難。行レ之惟難。蓋夫學者。躬不二自行一。而口徒言レ之。誰其難レ之矣。惟口不二輕言一。而躬篤行レ之。則古今乏二其人一矣。藤樹先生。湖西人也。性總好レ學。少而仕レ于二大洲一。偶有レ思レ親。輙解二印綬一。而歸レ鄕焉。自レ是潛二心於二孝經一經一。專脩二愛敬二一道一。至二溫凊定省、甘旨色養一。莫レ不レ盡二其心一矣。於レ是乎。鄕黨感二其行一。四方化二其德一。有二醜行一者。竊變レ操。强盜者。嘗改レ行云。夫巧詐不レ如二拙誠一。詐難二以服一レ人。則若二先生一。誠可下謂中口不二輕言一。而躬篤行レ之。一俗自改。人自化者上也。余友某等。應二人需一。校二其遺稿一。而語レ余曰。此書疑數傳寫。今有下其誤。難二改盡一者上。且恐不レ合二時好一焉。余曰。何傷也。校レ書。如二塵埃風葉一。固難二以盡一矣。然疑以レ疑傳。信以レ信傳。是之謂二實錄一也。且諸君以二當世風一。皆爲二華文浮靡之流一耶。安知下其間無中有二朴實淳厚。左レ文右レ行之君子一。喜爲二帳秘一者上哉。何爲其不レ傳。於レ是乎。遂授二之梓一。因書レ此爲二之序一云。寬政辛亥之孟夏。

近江。西希顏謹撰。

し。されば御門の御位は富貴安佚の至極なれ共、和漢ともに歴代の帝王明德くらければ、酒色財氣の惱なきはなし。簞瓢陋巷、蔬食をくらひ水をのむは、貧賤の至極なれども、其樂比ひなし。又凡夫の上にても、禁中の宮女は、其情欲怫欝の苦みやるかたなし。農人の耕耘は、勤勞の至極なれども、其心さのみ苦みなし。大禹水を治め給ふは、勤勞の至極なれども、其樂快活たり。如レ此よく實理を体察すれば、苦樂の心にあつて外相になきこと、辨へがたきにあらず。

自由ならず。物見ることも明ならず。苦痛こらへがたし。一旦苦痛こらへがたしといへども、塵砂を除去るときは、本躰にかへりて開閉自由にして分明快活なり。其ごとく、心の本躰は元來安樂なれども、惑の塵砂にて種々の苦痛こらへがたし。學問は此惑の塵砂をあらひすてゝ、本躰の安樂にかへる道なる故に、學問をよくつとめ工夫受用すれば、本の心の安樂にかへる。

問云。皆人の心得には、貧賤勤勞を苦とし、富貴安佚を安樂とす。然るに苦樂境界にはなくて、唯心に有とはいかん。

答云。左樣の心得ぞこなひを凡見と云ひて、あさましき惑なり。凡夫は外を願ふまよひふかく、實理を辨へざる意見にて、見かけばかりを以て定むる心得なり。夫明德くらければ、習に染り人欲に滯り、酒色財氣の惑ふかき故に、天下を得れば天下を憂ひ、國を得れば國をうれひ、家あれば家を憂ひ、妻子あれば妻子を憂ひ、牛馬あれば牛馬を憂、金銀財寶あれば金銀財寶憂となり、見こと聞こと、大形苦みとならざるはなし。かくあれば、天子となりても下庶人となりても、外相の見かけにはかはりありといへども、其心の苦は差別なし。されば古歌にも「うきことの、品こそかはれ、世の中に、心やすくて、住人はなし」とよめり。君子は明德あきらかにして、習に染らず、人欲毛頭なし。勿論酒色財氣の惑なき故に、天下を得ても與らず。國を得ても憂とならず。家を得ても煩らはず。妻子あれば妻孥を樂み、牛馬あれば牛馬に滯らず。金銀財寶あれば金銀財寶に溺れず、見こと聞こと皆樂となる故に、上天子となりても、其樂ます所なく、下庶人となりても其樂減する處な

なるべきと、志を勵まし迷ひをわきまへ、自己心裏の明德を明にする益を求むべし。聖經賢傳をきくに、明德を明かにする三益あり。觸發一つなり。栽培二つ也。印證三つ也。此三益は、みな自己の憤りによつて得る所なり。平生躰察の功を用ひずして憤りなくば、二六時中手に卷をすてずとも、其得所の益あるべからず。若此益なくは書をよみてもよまざるにをとれり。

改正翁問答上　丁亥冬

問曰。人間世第一にねがひもとむべきものは、何事ぞや。

答云。心の安樂に極まれり。

問曰。人間世第一にいとひ捨つべきものは、何事ぞや。

答いはく。心の苦痛より外はなし。

問いはく。苦を去て樂を求むる道はいかん。

答云。學問なり。

問云。學問にて苦痛を除き安樂を得る道はいかゝ。

答云。元來吾人の心の本躰は、安樂なるものなり。其證據は、孩提より五六歳までの心を以て見るべし。世俗も幼童の苦惱なきを見ては、佛なりなどいへり。かくのごとく、心の本躰は安樂にして苦痛なきものなり。苦痛は只人々の惑にて、みづから作る病なり。心はたとへば眼のごとし。眼の本躰は、たてわけ自由にして物を見ること分明快活なり。若塵砂など目の内へ入ときは、たてわけ

に成べき名儒の書、七書などの外はよみて益なし。然るにつとめて讀ぬるは、めだるく心つかるゝあだとなり。史書は古今の事變を考へ、福善禍淫の印證とするものなれば、餘力のなぐさみに讀ものなりとしるべし。

問曰。十三經は何々ぞや。

答云。孝經、論語、孟子、周易、尙書、周禮、儀禮、詩經、禮記、左傳、穀梁傳、公羊傳、爾雅、以上十三部を十三經とさだめたり。

問曰。十三經も書數おほくて、文才なきものはみなまでまなぶ事およびがたし。其内一二卷學びて道をしるべき書は、何れぞや。

答云。本來易經一部をおしひろめたる十三經なれば、易經をばよく學びたるがよし。然ども易經は簡奥玄妙にして、尋常の人の取入なりがたければ、孝經大學中庸をよき先覺にしたがひて學びたらば、人の明暗によりて遲速ありといふとも、志專らにしてつとめ油斷なければ、必眞をなすべし。三書を學びて餘力あらば、力と隙にしたがひて語孟を學ぶべし。扨また餘力あらば十三經を皆學ぶべし。十三經をみな學ばねば得道ならぬと思ふも、大なる誤なり。いかむとなれば、十三經そなはらざる時に、成德の人卓散なり。十三經備て后、却て得道の人すくなし。孝經學庸の外はいらぬと思ふもあやまりなり。いかんとなれば、時に趣く敎へ已事を得ざる勢にして、皆聖賢の遊したる書なれば、無用の書にあらず。學ところの書物數の多少に、心をとゞむべからず。たゞ一向に聖人と

器用なるによつて、必聖經賢傳の大意主意をよく聞とりて、其明德を明かにし、君子となれり。かくあれば、一文不通にても、上々の學者なり。いかんとなれば、文藝は道を求る筌なり。魚をうれば筌は無用のものなり。

問曰。大學の道は、上天子より下庶人に至るまでの敎なりと聞。愚癡不肖の賤男賤女は、書をよむ事なるべからず。いかゝ。

答曰。むかし聖人の御代には、わづかの小里にも學校あり。即其里の奉行代官其師匠となりて、耕作のひまに聖經を講明し道を敎るによつて、愚癡不肖の賤男賤女にいたるまで、書物の本義をよく得心するなり。文字訓詁には通ぜざれども、聖經の主意を聞取、學問の實義をがつてんして、心を正しくし身を修る事は、中々末代の俗儒のおよばざる所なり。文字訓詁にはよく通じぬれども、心の會得なく、其心行凡俗にひとしきは、眞實の讀書にあらず。諺にも論語よみの論語よますといへり。たとへ文盲なりとも、聖經賢傳をふかく信仰してよみ覺たる人に講釋させ、其本意をよく得心して、我明德を明かにするは、俗儒の書物をよみぬるより、一きわまさりたる書物よみなり。これをもつて見れば、心學をよくつとむる賤男賤女は、書物をよまずして讀なり。今時はやる俗學は、書物を讀てよまざるにひとし。

問曰。唐土より渡たる書物際限なし。かたはしみなきかでかなはぬ事にや。

答云。それは大なる心得そこなひなり。きかでかなはぬ書物は十三經なり。十三經の取入のはしで

のまとあらば、親は子の學問せざるをなげき、君は臣下の學術なきをきらひ、學問をそしる口なきのみならず、士はいふにをよばず、農人商人に至るまで、學問なくてはかなはぬ事なりと、もてはやすべし。されば、世俗の學問をそしるにあらず。學者のそしるなり。學者の招く所なり。しかるを我も人も、學問するものゝくせにて、世俗の學問をそしるを聞ては、或は腹を立て、或はわらひおとしめて、そのあやまりの己より出る事をわきまへず。是をもつて見れば、學問の實義に志なき學者は、世俗の學問をそしるよりも、一きはまさりたる聖問のつみ人なるべし。

問曰。一文不通にても、仁義の明德明かなる人あるべしとならば、聖人以下の人も、學問なくして明德を明かにするとなり申べきや。

答曰。それもはや、文藝を學問とあやまりたる習心より起る疑なり。后學の先覺にしたがひて、性命の道を學び問ふを、學問の實義とす。文學は只その一品なり。されば文學なき大昔には、もとより讀むべき書物なければ、只聖人の言行を手本とし、學問せしなり。世の末になりて、學問の本義を取失ふべきゝざしあるによつて、聖賢これを憂ひて、其の道をものゝ本にしるして、學問の鏡と定め給ひてより此かた、書物をよむを學問の初門とするなり。人の生付さま〴〵なれば、文藝は極めて器用にして、心法の取入は無下に無器用なる人あり。此類の人多分俗儒となれり。又文藝は無下に無器用にして、心法の取入は極て器用なる人あり。かくのごとくなる人、よき先覺に従ひ、聖經賢傳の講明を聞時は文藝無器用なれば、文學訓詁をおぼゆる事はならざれども、心法のとりいりは

間の萬苦は明德のくらきよりおこり。天下の兵亂も又明德のくらきよりおこれり。これ天下の大不幸にあらずや。聖人是をあはれみたまひ、明德を明かにする敎を立て、人の形あるほどのものには、學問をすゝめたまへり。四書五經にのする所、みな是なり。

問曰。四書五經は世間に流布して、讀もの澤山なれども、此實義明かならずして、世俗の學問をそしるはいかゞ。

答曰。世俗の學問をそしるは、世俗のあやまりにあらず。學問する人のあやまりなり。世間の學問をする人を見るに、學問の實義を知て學問に志す方はまれなり。多分ものよみ奉公の望か、または醫者のかざりか、或はだて道具か、此三つを志として學問するによつて、學問第一義の明德を明かにする事は、始終とりさたなき事なれば、心を正しくし身をおさむる益はなくて、文藝を高滿する病のかさむ計なり。間に志眞實なる方あれども、よき先覺に親炙なきによつて、道のわが心にある事をわきまへず。徒に先王の法賢人君子の迹を認て道とし、世間の好格套を善とさだめ、世間の理窟を認めて道理とし、是をもつて心を正しくし身を修むと伎倆をはけむによつて、本來活潑融通の心却てすくみ、自己心裏に固有したる明德の寛裕温柔くらく、圭角日々にかさみ、次第々々に人と和睦せず、いなものになりぬ。かくあれば、學問の益といふものは、たゞ文藝ばかりなり。世界の人是を見て、物よみ出家醫者などの外は無益のとなりと思る取沙汰、そのいわれなきにあらず。若また、世間の學者、人ことに凡情の習態をあらひすて、學問第一義の明德を明かにして、孝悌忠信

公小人にして戰伐をこのみ、强剛暴逆のいくさをたくましくせんために陣をとはれたり。

問曰。今の世界には、儒書をよみおぼゆる人をば、德なけれども儒者とす。其身もまた儒者の名をうけて辭せず。大なるあやまりにあらずや。

改正翁問答下　丁亥春

答曰。然り、儒者の名は德にあつて藝にあらず。文學は藝なれば、もの覺よく生れつきたる人は、誰もなりがたき事にあらず。たとひ文學に長じたる人にても、仁義の德なきは儒者にあらず。たゞ文學に長じたる凡夫なり。一文不通の人なりとも、仁義の德明かなる人は凡夫にあらず。文學なき儒者なり。此理は本來分明にして、わきまへがたきことならねども、何の時よりかあやまり來りけん。たゞ儒書を讀ばかりを學問と思ひ、文學ある人を儒者ともてなせり。此まよひ世人の心にしみ付たるによつて、學問はものよみ坊主又は出家などのわざにして、士の所爲にあらずなどゝ、とりさたまち〳〵なり。學問の實義世間に明かならざる事、天下の大不幸なるべし。

問曰。學問の本意世に明かならざる事、天下の大不幸なる事、いかゞ。

答曰。學問は明德を明かにするを主意頭腦とす。明德は我人の形の根本なり、主人たり。此ぬしくらければ、主君のうつけて下人のみだりかはしき如く、其人の思ふところおこなふ事、みな天理にそむき、ひとへに名利のよくふかく、親をも親とせず、君をも君とせず、たゞ一向におのれを利し人を損する處に利發才覺を用ひ、相あらそひ相うばひ、甚しき時は主親をも弑す惡逆をなせり。人

り。學問に志しある人は云におよばず、無學の人も此魔障を能のぞき捨べき事、第一の急務なり。名利のけがれなく道に志ありといへども、高滿の凶德をのぞきすつる心得なきによつて、暗處に魔を來し、其身凶惡に落入のみならず、とがなき學問にきずを付る事、淺間敷なげかし。我も人も能いましむべし〳〵。

齊人と魯人と郊に戰ふとき、魯軍の右手の大將は冉求也。管周父御たり。樊遲右たり。すでに戰合て、魯の左手敗軍しぬれども、右手は少もしりぞかず。樊遲の謀を用ひ、冉求自身鑓を入て齊の軍を敗り、甲首八十を得たるゆへに、終に魯國の勝軍になりぬ、其後季康子冉求に問けるは、今度の軍功たぐひなき事なり。軍法を學び得てかくありしや。但し又生れつきたる器用にやと。冉求答へていわく、生れながらにして能するにあらず。孔子に學び得たりといへり。季康子是に依て幣をもつて孔子をむかへ、孔子魯に歸り給ひぬ。

師の曰。冉求若季子が大將となりめされずば、此軍功有べからず。此軍功なくば、孔子の文武兼備り軍法に長じ玉ふ事を、季子うかゞひしる事あたはざるべし。聖人のいます時さへかくのごとくなれば、後世の文武をわけて二つにするあやまりも、さのみとがむまじき事にや。

躰充曰。孔子かくのごとく軍法に長じたまひて、衞の靈公に傳へたまはざるはいかゞ。

師の曰。兵は凶器なりといへども、君子これを用れば、天下の亂を定めて、凶器却たからとなれり。小人是を用ふれば、國をみだり、天下にわざわひして、凶器ます〳〵凶器となれり。然を靈

ず、人をあなどらず、人に取て善をなす德なり。盈は天地鬼神のそこない捨給ふ所にして、人も亦是を惡み、謙は天地鬼神の保祐し給ふ所にして、人も亦是を見ぬる實理を明かして、後學の盈をすて謙を求めんことを示し給ふ聖謨なり。此ゆへに温恭自虚の四字を以て初學心法の第一義とす。此四字の法を用て滿心をのぞき捨ぬれば、其まなぶ所ことごとく心のみがきとなりて、明德日々に明かになるものなり。若此法によらずして滿心をのぞかざれは、その學ぶところ皆滿心のかさみとなりて、明德日々に暗くなりぬ。かくのときの滿心は、天地鬼神の捨玉ふところなる故に、其心だて行儀いなものになり行き、人も亦是を惡む。是を暗處に魔を來すといへり。すでに暗處に魔を來しぬれば、何事も異風をこのみ、人をばいける虫とも思はず。天下に我をこすべき者なしと、人もゆるさぬ高滿を鼻にあて、親おやがたのぐちなるをさげしみ、友達をあなどり、かりそめにも己れを是とし人を非とす。或は世間のまじわりをいとひ、獨り居ることをこのみ、或は甚はだしきときは氣のちがふ方もありと見えたり。かくのときの人、學問せざるかたにもあまた有といへども、とがを歸すべきかたなければ、只何となくそしるばかりなり。若學者にかくのごとき人あれば、學問にとがを歸して、滿心のたゝりなる事をわきまへず。おろかなるかな。なげかはしきかな。されば大禹は聖人なれば毛頭の滿心あるまじけれども、伯益禹を贊けて滿招レ損、謙受レ益といへり。まして聖人より下ざまの人、しばらくも此戒を忘るべけんや。周公の才ありても滿心あらば取るにたらずと、孔子のゝたまふも、高滿の凶德甚だ害あることをいましめ給ふな

徳明らかなるは凡夫にあらず。文學なき儒者なり。此理は分明なれども、いづれの時よりかあやまり來りけん。只儒書をよむばかりを學問とおもひ、文學ある人を儒者ともてなせり。此まよひ世人のこゝろにしみつきたるによつて、學問は物よみ坊主または出家などのわざにして、士のわざにあらずなどゝ、取さたまち〳〵なり。儒服の儒者にあらざるとをあかしたる莊子のとき人なくて、學問の本意世間に明かならざると、天下の大不幸なるべし。

躬充曰。學問の本意世間に明らかならざると、天下の大不幸なるとはいかゞ。

自レ此以下、十三經も書數おほくて文才なきものは云々の一段の終に至て、丁亥の本と小異大同。故に刪レ之。

躬充曰。名に心ありて學問する人の、その益なきはもつともにて候。さのみ名利のけがれもなく道にこゝろざして學問する人の、益なきのみにあらず、かへつてこゝろだて行義いなものになりゆきぬるはいかゞ。

師の曰く。人心のわたくしを種として、知あるもをろかなるも、自滿の心なきはまれなり。この滿心明徳をくらましわざはひをまねくくせものにして、よろづのくるしびも又大かたおこれり。されば易に天道虧レ盈而益レ謙、地道變レ盈而流レ謙、鬼神害レ盈而福レ謙、人道惡レ盈而好レ謙、謙尊而光、卑而不レ可レ踰、君子之終也といへり。盈は高滿甚しく、己れを是として自ら用ひ、萬事分レ過を好み、人をかろしめあなどる心なり。謙は温恭自虚にして、自反し獨を愼み、人をうらみ

改正翁問答下

丙戌冬

魯國の君莊子にかたりて曰く、魯國には儒者おほうして先生の道を學ものすくなし。莊子曰く、魯國には儒者甚すくなし。君あやまりて多しとのたまふ。魯公の曰く、魯國の人過半儒服をきたり。然るを少しといはんや。莊子曰く、儒服は儒者の裝束なり。仁義は儒者の德なり。裝束は誰もきるべければ、儒服を着たる人にても、仁義の心なきは儒者にあらず。只儒服を着たる凡夫なり。仁義は君子ばかりの受用する德なれば、たとひ夷國の裝束をきたる人にても、仁義の心あるは凡夫にはあらず。夷國の裝束きたる儒者なり。しかる故に、伏犧神農は儒服をめさゞれども、儒德あきらかにましませば、天下一の儒者にてまします。魯國の人は儒服をきたるとも、多分儒德あるまじければ、儒者にあらず。もし我ことをうたがひたまはば、儒德なくして儒服を着たるものをば死罪におこのふべしと、禁制を立て試みたまふべし。魯公莊子の言を用ひて、右のごとく法を下してけり。かくして五日過ぬれば、國中に儒服の者みえず。たゞ一人儒服をあらためざるものあり。めして國事を問たまひぬれば、千轉萬變にして究りなかりけり。

師曰。魯國の君は儒服を着たる人をとめて儒者とあやまり、今の世間の人は儒書をよむ人をとめて儒者とおやまれり。そのあやまるところの品はかわりたれども、實躰をしらざるとはおなじまよひなり。文字は藝なれば、物おぼへよく生れつきたる人は、たれも習ひしるべければ、文學ある人にても仁義の德なきは儒者にあらず。只文藝ある凡夫なり。一文不通の人なりとも、仁義の

天性仁孝の身躰髮膚をそこなひやぶらざることをおかしめされたる事、孝經の聖謨のごとし。しかるを、章句の儒者曾子の本意をさとらずして、只血肉の身躰髮膚をそこなひ、人の親となりては慈に止り、人の君となりては仁に止り、人の兄となりては惠に止り、人の弟となりては恭に止り、人の朋友となりては信に止り、富貴に素しては富貴を行ひ、貧賤に素しては貧賤をおこなひ、夷狄に素しては夷狄をおこなひ、患難に素しては患難をおこなひ、境遇に意必の累なきと水のながるゝがごとく心の安く靜なる事は山の定れるがごとく、暴君汚吏も志を奪とあたはず、天災地妖も殺とあたはざるものなり。もしまた聖胎純熟の時至り、脫胎神化して聖神の位に至ときは、天地と其德をあわせ、日月と其明をあはせ、四時と其序をあはせ、鬼神と其吉凶を合す、四表に光被し上下に格る。しかる故に、南面の位にありては帝堯の君たるなり。北面の位にありては帝舜の臣たる也。位を得ずして下にありては玄聖素王の道なり。孔子曰。夫聖人之德。又何以加レ於レ孝乎。

義なり。孝經に身躰髮膚受之父母。不敢毀傷。孝之始也と示したまふ。此毀傷は血肉の身躰髮膚をそこなひやぶることにはあらず。孝德をそこなひやぶることなり。害仁とのたまふ害の字の意なり。血肉の身躰髮膚のことにはあらず。孝德の形躰のことなり。仁者人也とのたまふ人の字の意、形色天性也。惟聖人。然後可以踐形と發明めされたる形色の字の意なり。此聖謨賢範の心は、人間の身躰髮膚は本來天性仁孝の凝聚なることを示たまふものなり。孝經に示したまふ身躰髮膚これなり。しかる故に天性仁孝の道を心にまもり身におこなふときは、たとひ血肉の身躰髮膚をばそこなひやぶるといふとも、不孝にあらず、孝行なり。血肉の身躰髮膚をばそこなひやぶるといへども、天性仁孝の身躰髮膚をそこなひやぶらざる故なり。殺身成仁とのたまふは此意なり。天性仁孝の道を心にまもらず身におこなはずして惡逆無道なるときは、たとひ身を全して毛一すじそこなひやぶらすといふとも、孝行にあらず、不孝なり。血肉の身躰髮膚をばそこなひやぶらずといへども、天性仁孝の身躰髮膚をばそこなひやぶる故なり。曾子曰。戰陣無勇非孝也。此賢範の意は、軍陣戰場にて武勇をはげみさきかげをして軍功をなすときは、疵を被ぶり討死するが孝行なり、若武勇をはげまさず軍功をたてざるときは、縱臆病の惡名をうけずとも、不孝なりといましめめされたり。陳明卿曰。若有曾子之心。即龍比之身首分裂。與啓手啓足一般。不然。則老死牖下。亦與刀鋸僇辱何異。これは論語に、曾子臨終のとき門弟子を呼て啓予手啓予足と云て、詩を引て不敢毀傷の心法を示しめされたることを記せり。曾子の本意は、血肉の身躰髮膚をそこなひやぶらざるところをもて、

明にしては五刑莫大の肉刑を受べき魔心なりとおそれ愼、火急に克去て神明に相通ずる至德の圓樂をもとむる工夫を云なり。一念の惡心にておやの身をそこなひやぶると云子細は、孝經曰。身躰髮膚。受㆓之父母㆒。不㆓敢毀傷㆒。孝之始也。この聖謨の心は、我身にそなはるものは、心も性も身躰も毛髮も、皆親の心性身躰毛髮を受けたるものなれば、身躰髮膚も本我身躰髮膚にあらず。親の身躰髮膚なり。身躰髮膚の主本たる心性も我心性にあらず、父母の心性なり。しかる故に、我身躰髮膚をそこなひやぶるは、即父母の身躰髮膚をそこなひやぶるなり、我德性をそこなひやぶるは、すなはち父母の德性をそこなひやぶるものなり。身躰髮膚は器にしていやしく、德性は道にして貴ものなり。いやしき身躰髮膚をそこなひやぶるも、大惡逆大凶德なり。身躰髮膚の主本たる天の尊爵の德性をそこなひやぶるは、猶以大惡逆大凶德なり。此道理を明にわきまへて心によく守、不㆓敢毀傷㆒は孝德を受用する始なりと敎たまふなり。此聖謨をよく躰察すれば、名利の欲、習心、間思雜慮などの邪念を克すてずして我德性をそこなふときは、即父母の德性をそこなひやぶると分明なり。孝經この節の終に、無㆑念㆓爾祖㆒。聿㆓修厥德㆒といへる詩を引て結たまふも、此意を示し給はんためなり。よく〳〵躰認あるべし。

躰充曰。身躰髮膚をそこなひやぶらざるが孝行にて御座候はゞ、軍陣にてきずを被ぶりうち死するは不孝にて候はんや。

師の曰。それは大なる心得そこなひにて候。不義不道なる事にてそこなひやぶるが不孝なりと云

者也。義者宜レ此者也。信者信レ此者也。強者强レ此者也。樂者自レ順レ此生。刑自レ反レ此作。孟子曰。仁之實。事レ親是也。義之實。從レ兄是也。智之實。知二斯二者一弗レ去是也。禮之實。節二文斯二者一是也。樂之實。樂二此二者一。樂則生矣。生則惡可レ已也。惡可レ已。則不レ知二足之蹈レ之手之舞一レ之。禮記曰。仁人不レ過レ乎レ物。孝子不レ過レ乎レ物。是故。仁人之事レ親也。如レ事レ天。事レ天。如レ事レ親。是故。孝子成レ身。以上の聖謨賢範をよく熟讀して、孝德の親切眞實廣大高明無上無外至尊無對にして、孝の外には德もなく道もなき事を明に辨ふべし。たとひ其おこなふ德よしといふとも、孝德の天眞にそむきぬれば、天威のゆるさゞるところ、君子のたつとばざる所なり。しかる故に、孝經に不レ愛二其親一而愛二他人一者。謂二之悖德一。不レ敬二其親一而敬二他人一者。謂二之悖禮一。と戒たまへり。かくのごとくなる孝德全躰の天眞を明にする工夫を、全孝の心法と云なり。全孝の心法、その廣大高明なると神明に通し六合にわたるといへども、約ところの本實は身をたて道を行にあり。身をたて道をおこなふ本は明德にあり。明德を明にする本は良知を鏡として獨を愼にあり。良知とは赤子孩提の時よりその親を愛敬する最初一念を根本として、善惡の分別是非を眞實に辨しる德性の知を云。この良知は磨而不レ磷涅而不レ緇の靈明なれば、いかなる愚痴不肖の凡夫心にも明にあるものなり。しかる故に、此良知を工夫の鏡とし種として工夫するなり。大學の致知格物の工夫これなり、獨を愼とは、一念のすこしおこる時に良知を鏡としよく省察吟味して、名利の欲、習心、間思雜慮などの邪念おこるときは、我おやの身をそこなひやぶる不孝の罪人となりて、幽にしては六極莫重の鬼責をうけ、

之氣自命也。理氣無終壞。此性命亦無終壞。譬以水投水。于何可竭。以火投火。于何可滅。由其體大造而超小刧故。不以天地之成毀而成毀。獲大身。而忘小形。故不以軀殼之存亡而存亡。謂之盡性至命。謂之體道同天。謂之至德凝道。此中大有眞樂。盎然春融。熙然宇泰。既利且貞。活潑々地。即易之黃中通理。正位居體。美在其中。暢于四肢。發于事業。美之至也。此乃儒敎中。不死之神方。長生之正術。不可與守空寂而坐枯禪。弄精魂而希昇擧者。同日而語也。この賢範をよく躰察玩味して、儒家の聖精至誠無息の位には、仙佛の修行の分にては梯しても及ばぬ所ある事を明にわきまへ、迷をはらしたまふべし。保合大和する心法を他にもとむべからず、すなはち全孝の心法なり。

躰充曰。全孝の心法をばいかやうに受用仕候はんや。

師の曰。孝經曰。夫孝。天之經也。地之義也。民之行也。天地之經。而民是則之。又曰。天地之性。人爲貴。人之行。莫大於孝。孝莫大於嚴父。嚴父莫大於配天。又曰孝悌之至。通於神明。光於四海。無所不通。詩曰。自西自東。自南自北。無思不服。曾子曰。夫孝。置之而塞乎天地。溥之。而横乎四海。施諸後世。而無朝夕。推而放諸東海。而準。推而放諸西海。而準。推而放諸南海。而準。推而放諸北海。而準。詩曰。自西自東。自南自北。無思不服。此之謂也。又曰。衆之本敎曰孝。其行曰養。養可能也。敬爲難。敬可能也。安爲難。安可能也。卒爲難。父母既沒。愼行其身。不遺父母惡名。可謂能終矣。仁者仁此者也。禮者履此

師の曰。さやうの疑も、異端の説を聞あやかりておこることにて候。孝經易經をよく悟ぬれば、生前死後のことは掌を指ごとく分明なれば、とかうの議論に及ばぬことなり。しかれども、今時の人は多分此疑あれば、しばらく仙佛の道によつてそのまよひをとき候べし。仙家の長生不死の術も、佛家の成佛得脱の修行も、皆畢竟は一心の工夫なり。仙家には修心煉性を宗旨とす。佛家には明心見性を宗旨とす。其工夫の十分成就する所の心性を、長生不死と云成佛得脱と云なり。二氏ともに、元氣の靈覺を心性の端的として、元神の妙理をさとり得ず。しかる故に、その見性成道、中行の君子より一位下なり。儒家にも、一心の工夫專とし、元神の神通を性の端的とし、窮レ理盡レ性至ニ於レ命を宗旨とす。工夫十分成就する所の心性を聖神至誠無息といふ。其宗旨の端的も、明覺大悟の心性も、仙佛よりも一位ましたる所あれば、長生不死と指ところの益も、成佛得脱と指ところの益も、一位ましたる益ありと知べし。性理會通曰。易曰。保ニ合大和一。乃利貞。愚謂。大和者。道體也。生物之本。天地之根。一團眞理。實氣充ニ宇宙一。而無レ餘。歷ニ浩刧一。而無レ改。鼓ニ剛柔一。生ニ造化一。主ニ萬象一。攝ニ三才一。冲漠絪縕。融和純粹。若能保ニ此氣一。而不レ失。合ニ此理一。而不レ違。身同ニ大道一。如下點雨之滴レ海渾ニ滄溟一。而共存上。心契ニ天眞一。猶下片雲之沒レ空攪ニ太虛一而同上レ久。利通而無ニ滞礙一。貞固而無ニ變遷一。故。天地終。而壽不レ竟。日月晦。而明不レ虧。故曰。至誠無レ息。無レ息。則久。久則徵。徵則悠遠。善保ニ大和一者。誠道之至妙至妙者也。聞者疑レ之曰。性即理也。命即氣也。人之性。天地之理也。人之命。天地之氣也。誠能以レ性合ニ天地之理一。以レ命會ニ天地之氣一。即天地之理自性也。天地

死したるに似たる故に、寓言の故事をかりて喩たり。心學に志ある人ははぢ戒むべき事なり。

躰充曰。習染心とはいかやうなる心を申候や。

師の曰。習染心とは、生下てよりこのかた見なれ聞なれて、おもはずしらずにいつとなくあやかりそまりたる心なり。たとへば水にて朱をとけば其色赤く、緑青をとけばその色青くなるがごとし。本來水の色は赤も青もなけれ共、朱と緑青とにまじはりあやかりてかくのごとし。そのごとく、本來人心に好惡の事の定はなけれ共、その生そだつ國處の風俗その家の所作にあやかりそまりて、好惡の品定色々にかはりあり。學問藝能にも習心あり。先本心の端的をよく考定、その上にて習心を吟味してかち去べし。朱をとき赤き色に變じたる水もよくすましぬれば。朱は下え沈て水の本色あらはるゝものなり。まして無聲無臭の心の水は、其にごりすましやすかるべきにや。躰驗簡要に候。

躰充曰。間思雜慮とはいかやうなる念慮にて御座候や。

師の曰。さしたる惡念にあらざれ共、思ひて益なくわけもなき事をくり返しくり返し思出て天眞のわずらひとなるを間思と云なり。應事接物の際至善のある所を分別思慮する時に工夫專一ならず、他の念のとりまぜおこりて感通のさはりとなるを雜慮と云なり。此二はかろき病にて却克治しがたきものなり。よく／＼省察あるべし。

躰充問曰。仙術を學ぶ人は長生不死の益あり佛道を修行する人は成佛得脱の益ありと承及候。儒道を學候ても、さやうなる身後の益も御座候や。

をそらん事を求め、心に孝德なく身に孝行をおこなはずして、孝行の譽をもとむるは、たとへば形なきに影をもとむるがごとく、猿猴の水の月をつかむに似たり。其上我身のうちに連城の珠にもまさりて王公の位にもかへさる名譽の眞樂あることをしらず。世間凡夫の理もなき俗談のほまれをもとめねがひて、むねをこがし身をくるしめて、楚女の寵愛をもとめて餓死したるごときのふるまひ、無下に淺まし。名の欲をすつるには、しよせひ意虛夸の念をかちさるべし。かくのごとく吟味軆認して名の欲をすつることは、根本天理の眞樂をもとめ氣隨をわすれ作法を正くせんためなれば、心學に志あるものは名をすつるほど氣隨のおごりなく作法よくなりて、狂風にもいらず、市井の風にもいらず、君子中行の風に入て、君子のほまれもとめずして至ものなり。名利の欲、習染る心、閒思雜慮を一念の微に省察して、獨を愼てのぞきさる事、第一の要法なり。

躰充曰。楚女の寵愛をもとめて餓死したると云ことは、何たることにて侯や。

師の曰。それは寓言の故事也。むかし大唐楚國の主、こしのほそき女を寵愛めされたれば、禁中のこしのふとき宮女楚王のおもひつき給ふまじき事をかなしび、食物をくはずしてやせなば腰のほそくなるべきかと、斷食してかつえ死したりと云ことなり。世間の名をこのみ譽をもとむる人を見るに、その時代の天子諸侯のこのみたまふ事、世俗のほめてもてはやす事なれば、是非眞妄のえらびなく、その時に相應する樣に心をもち色をよくし言を巧にして、義理不義をわきまへず、一向に世人の譽をもとめて、德性の養をたちすて、混沌の死する事をしらざること、恰も楚女の寵愛をもとめて餓

おもひ善をおこなへば、善の名あり。堯舜孔顔など是なり。悪をおもひ悪をおこなへば悪の名あり。桀紂盜跖などこれなり。善をこのみ悪をにくむは人心秉彝の本然なる故に、善名をほめたつとび悪名をにくみきらふは、萬古のつねなり。しかるによつて、生付いさぎよき士は、其名たかくあらはし譽をとらん事をこのめり。其心根善をこのみ悪をにくむ秉彝の本然にちかくて、利欲にけがれてきたなき凡夫にくらぶれば、一位まさりたれ共、其明德明ならず、眞妄本末のわきまへをしらず、風俗のあやまりに習そまりて、或は本をすてゝ末を專とし、或は眞をそむきて妄をとる故に、その心根の始は善をこのみ悪をにくむ秉彝の本性に似たれ共、却本心をくらまし性命をそこなふ人欲のわざらひとなれり。利欲と名の欲とは清濁かはりありといへども、天性をそこなひやぶり不孝莫大の罪におちいる事はかはりなきによつて、名と利の欲を午角にきらひてかちさるものなり。さて名の譽に眞妄本末の差別あることをよくわきまへざれば、名の欲をすてんとおもふ志ありても、工夫はげましがたし。聖賢君子英雄孝子忠臣の名の譽、其外一事の譽にても義理にかなひたるを、天理眞實の名と云なり。異端曲學の名の譽、その外一事の譽にても義理にかなはぬを、汚俗妖妄の名と云て、君子のたつとばざる所なり。妖妄の名をこのむ意はすてやすけれども、眞實の名をこのむ意は本末をよくわきまへざればすてがたくて、人不レ知而不レ慍の位にいたりがたし。聖賢君子英雄孝子忠臣の名譽、その外一事にても義理にかなひたるほまれは、皆末と影となり。その名譽の根本と形とは、その心と行跡となり。聖賢の心を心にまもらず、聖賢の行跡を身におこなはずして、聖賢のほまれ

きものをおしみてあたへざるを欲とす。此欲をすつるとはやすき事にて、世の中の住居のさはりとはならず。學問せぬ人も、生付廉直なるものは、不義のたくはへをばいやしみきらふものなり。まして心學に志ある人をや。利欲に財欲と形氣の欲とのすこしかはりあり。財欲は金銀財寶澤山にほしきとおもひ、分もなき高知行をむさぶると也。此欲はすてやすきものなり。形氣の欲は、酒色にふけりおぼれ、又は形の便利を求すごす事なり。此欲はすてがたきものなり。總して欲をすつる工夫、我心の一念おこる所にて省察してかちさるが簡要なり。此工夫を愼獨と云なり。よく〳〵躰認あるべし。

躰充曰。先生の敎を承屆候へば、利欲をすつることは成易く候はんが、名の欲をすてゝ世間の外聞をなにともおもはず候はゞ、氣隨になりて作法あしく候はんと存候。いかゞ。

師の曰。よきふしんにて候。名の欲は利欲にくらぶれば、一位ましていさぎよし。子細は名をこのむものは財寶をむさぶらず、命をおしまず、きたなき利欲はすこしもなき故に、功名の士をは中の位と定たり。性命の學に志なく、義理を專に守らざる人は、せめて名の欲ありて利欲のなきがよし。眞儒性命の學に志なく義理を守らざる人、外聞を何ともおもはぬときは、必氣隨になりて作法あしく、其心潔人は狂者の風に入、その心きたなきは市井の風に入ぬべし。吟味有べき事なり。しかれども、これは心學に志なき凡夫の上の吟味なり。心學に志ぬる上の吟味はまた各別なり。夫名は實の賓と云て、其心におもひ身におこなふ實あれば、すなはち其名あるものなり。たとへば實は形なり、名は影なり。善を

よひたる凡夫の心得、または異端偏僻の法なり。釋尊この心をさとりめされたらは、王宮を擅特靈山とし、寂光土とし、天子の位を摩尼輪の位とし、袞衣玉殿を麻衣草座とし、禮樂刑政を說法として、衆生を濟度めさるべきに、王宮をいとひ山に入、袞衣玉殿をいとひて麻衣草坐をこのみめされたるは、何たる心ぞや。艮背敵應不㆓相與㆒ときは、王宮帝位何ぞ我をけがさんや。山中の靜坐何ぞ我をまさんや。袞衣玉殿何ぞ我を損せんや。麻衣草坐何ぞ我をいさきよくせんや。王氏詩曰曾是巢由淺。始知堯舜深。蒼生豈有ㇾ物。黃屋如㆓喬林㆒。此詩艮背敵應不㆓相與㆒の意味を能巧にあかしたゝ。舜の禪授湯武の放伐、みな此心なり。おこなふところの事はともあれかくもあれ、その心に欲なく潔靜精微の神理明淨にして其事時中の天理にかなふを、無欲とし無妄とす。たとひをこなふ所義理にあたりても、その心に欲あれば無欲にあらず。まして心に欲あるうへにその事義理にあたらざるは、大欲と云ものなり。されば心に欲なく潔靜精微の神理明淨にしてその事時中の天理にあたりぬれば、帝堯の天下を舜にゆづりたまふも、帝舜の天下をうけたまふも、また湯王の桀を放たまふも、武王の紂を伐て天下を救たまふも、皆無欲の德行なり。もしまた堯舜湯武に欲心有つてかくおこなひたまはゞ、皆貪欲の妄行なり。天下の授受取予は至極廣大なる事なり。其外萬事みなかくのごとし。一錢を人にあたへ一錢を人にうくるも、此心もちはおなじ事なり。儒者の心法は、艮背敵應不㆓相與㆒の聖心を鏡とする故に、天子より下庶人に至まで、分々相應の本分のすぎはひをいとなみ、財寶をたくはふるを、欲とはいはず。一錢にても義理にそむきてとりたくはへ、またあたふべ

事皆かくのごとし。よく〳〵躰認あるべし。

躰充曰。眞實の儒道を行には名利の欲をすつるが第一の工夫なりと被仰る。尤欲心はきたなきものなれば、すてたき事にて候へども、欲をすてゝは世の中のすまひ成申まじきと存候。いかゞ。

師の曰。それは佛氏偏僻の敎に、釋尊の天子の位をすて龐居士か家財をすてしごときを無欲なりと云を聞ならひて、あやまる疑なり。儒道には、そのやうにすじもなくて位をすて財寶をすつるをば、氣ちがひの欲なきにたとへて、大にきらへり。位にあるを欲とし、位をすつるを無欲とし、財寶をたくはふるを欲とし、財寶をすつるを無欲なりとおもふは、いまだ明德くらくして位をこのみ財寶を貪心根のこりて、外物に凝滯して便利煉擇の私ある故なり。聖人の心は艮背敵應にして意必固我の私なきによつて、富貴貧賤死生禍福、その外天下の萬事大小高下淸濁美惡におゐて、毛頭好惡煉擇の情なく、只滿腔滿目一貫皇極の神理ばかりなり。しかる故に、位にのぼるをも財寶をたくはふるをも、欲ともせず、また無欲ともせず。位をすて財寶をすつるをも、無欲ともせず、また欲ともせず。只天道の神理にそむくを、欲とし妄とす。天道の神理にかなふを。無欲とし無妄とす。神理にかなひぬれば、天子の位にのぼるも、財寶をたくはふるも、位をすつるも、財寶をすつるも、皆無欲なり無妄なり。神理にそむきぬれば、天子の位をすつるも、財寶をすつるも、位にのぼるも、財寶を蓄ふるも、皆欲なり妄なり。欲と無欲と妄と無妄とは、おこなふ事の品にはあらず。只その心根にあるものなれば、如何樣なる事は無欲なり如何樣なる事は欲なりと、事にて指さだむるは、ま

泰伯其可レ謂ニ至德一也已矣と嘆美したまふ。かみをたち身を文にしたまふをほめたまふにあらず。その孝德十分に明にして、そのおこなひたまふ事の道理中庸にかなひたるところをほめたまふなり。此意をしらざるにや。泰伯の孝德もなく中庸にかなふべき義理もなくて、かみをそりて我剃髮は泰伯の斷髮とをなじとなりなどいへる人あり。これは舟に刻て劍をもとむるの愚痴にあらずば、烏を鷺と云まどはす佞人なるべし。心に仁義の守なく、また何のもとむるすじもなくて、かみをそり身を文にして走まはらば、氣ちがひと云ものなり。心に利欲ふかく知行をむさぶらんため、座敷かみになをらんために、かみをそりて中庸の神理にそむくものをば、欲ふかき小人とやいはん。まいす坊主とやいひなまし。そのかみをそりたるところばかりにて吟味しては、是非の眞實しれぬものなり。そのかみをそるところの心根は遁世のためか何のためぞと考みて評判あるべし。只そのうはつらの事ばかりにて吟味評判するは、まよへる凡夫の取さたなり。これのみにあらず。何事の評判にても其心根にて吟味せざれば、是非のあやまりあるものなり。これに付て分明にわきまへやすきたとへあり。むかし大唐に盗跖と云ぬすびと有。同類數千人を引率し、みづから將軍と號し、あまたの里をやぶり强盗し人を殺事そのかずをしらず。その武勇のてがら比類なけれども、名大將とはいはずして大盗と云て、いやしみにくみたり。我朝のくまさかも、盗跖ほどこそなけれ、隨分剛强達者なるものなれ共、武篇者とはいわずしてぬす人と云おとしめり。そのけなげのふるまひは名大將武篇者のふるまひにもおとるまじけれ共、その心根ぬすみを本とする故に、その心をもて盗賊と云なり。萬

なひがたき事になきものなり。素二夷狄一。行ヨ乎二夷狄一。素二患難一。行ヨ乎二患難一。君子無ヨ入而不二自得一焉。

とのたまふは此意なり。

體充曰。さやうに眞實の儒道をおこなふ工夫には、いかやうに仕たるがよく候や。

師の曰。その工夫には先自滿の浮氣名利の欲心をすて、閒思雜慮の妄をのぞき明德の心源をすまし、全孝の心法を受用するを、根本第一とす。さて世間にましはる禮義作法は、其國其處の風俗を本とし、何事も圭角なく目にたゝぬ樣に取なし、いかにも作法うや〳〵しく謙德を守り、かりそめにも人にまさらんとあらそふ魔心なく、孝悌忠信の道を根に入てつとめおこなひ、親には孝行をつくし、君につかへては忠節をはげまし、よりをや位高人年老たる人德たかき人などをよくうやまひ、友たちにたのもしく義理をたて、兄弟の間には友恭をおこなひ、妻子には義慈をほどこすべし。かくのごとくにおこなふを儒道をおこなふとは云なり。か樣におこなひてさはりある所は、世界のうちにはあるまじく候。よく〳〵體認してつとめおこなはるべき事なり。

體充曰。さやうに候はゞ、今時の物よみ坊主衆のかみをそりて出家のまねをめさるゝも、道理にかなひたるとにて候や。

師の曰。俗儒の作法は無案内なれば、何とも了簡に及がたし。定て日本にての俗儒は、かみをそらではかなはぬ子細ありての事ならんか。眞儒の道にて論すれば、中庸の神理にだにかなひぬれば、かみをそりてもくるしからず。泰伯は孝行のために髪を斷身を文にしたまひたり。しかるを孔子

ゝはおこなはれぬものにて候。儒書にのする所の禮義作法は、大方周の代の制作なり。此禮義作法をすこしもちがへず只今日本にて位なきものが取おこなふ事は成がたし。たとひ位有人の取おこなひ給ふとても、ありのまゝに少もたがはず取おこなひたまふとはならざるなり。大唐にて取おこなふともすこしづゝ損益せずしてはおこなはれぬ道理なり。伏犧より周の代まで代々の聖人制作したまふ禮義作法、その時代にはよく相應して中庸の儒法なれ共、代かはり時うつりては大過不及の弊ありて、損益なくてはかなはぬ事なり。しかる故に、万世通用の定法はすくなし。前かどにも論ずるごとく、禮義作法は時により處により人によりてかはるものなれば、一しなの禮法になづむをば、欣眞落法とて大にきらふ事なり。殷の代には夏の代の禮義作法をあらため損益し、周の代にはまた殷の代の禮義作法をあらため損益したまふにて得心あるべし。初學より權の道を目あてにせざれば、此あやまりうたがひあるものなり。儒書にのする法の禮義作法をすこしもちがへず、殘所なく取おこなふを儒道をおこなふとおもへるは、大なるあやまりなり。たとひ儒書にのする所の禮法をすこしもちがはず皆とりおこなふといふとも、其おこなふ所時と處と位とに相應適當恰好の道理なくば、儒道をおこなふにはあらず。異端なり。そのおこなふ所時に相應適當しても、その心に名利の私あるは、にせものゝ小人と云ものにて、君子の儒にあらず。たとひまたその行ところ儒書にのする所の禮義作法にちがひても、その事中庸の天理にあたりその心私なく、聖賢の心法にかなひぬれば、儒道を行ふ君子なり。かくのごとく禮義作法になづます眞實の儒道をおこなふには、何國にてもおこ

祀一大夫立二三祀一。曰族厲。曰門。曰行。適士立二二祀一曰門。曰行。庶士庶人立二一祀一。或立レ戸。或立レ竈。夫聖王之制二祭祀一也。法施レ於レ民。則祀レ之。以レ死勤レ事。則祀レ之。以レ勞定レ國。則祀レ之。能禦二大菑一則祀レ之。能捍二大患一。則祀レ之。及夫日月星辰。民所二瞻仰一也。山林川谷丘陵。民所三取二財用一也。非二此族一也。不レ在二祀典一。論語曰。祭レ神如二神在一。以上の聖謨をよく考へて、儒教に專神明を信仰する事を得心すべし。これは外神につかふまつる大法なり。先祖の鬼神を祭は此外なり。日本の神道の禮法に、儒道祭祀の禮におひかなひたるとあり。其上三社の神託の意義儒者の神明につかふまつる心もちによくかなひぬれば、本朝は后稷之裔なりといへる說、まとに意義あるとなり。さて神明につかふまつるには、その位々のおきて作法あれば、その國の風俗を本とし、天秩の祭祀の禮に考あはせて、よく齋戒して信仰すべき事、誠に第一なり。しかるに、佛者は神明を信仰するを雜行雜修といとひ、佛は六通神は五通などいへるは、勿體なきとなり。

體充問曰。先生の敎を承屆候へば、儒道は道理の至極したるとばかりなり。まとに我人取をこなはでかなはぬ事にて候へども、日本は風俗あしく候間、おこなひがたく候はんと存候。いかゝ。

師の曰。それは道の道たる本意をわきまへず儒敎の禮法をもて專眞實の道なると得心するあやまりなり。本來儒道は大虛の神道なる故に、世界の内舟車のいたる所、人力の通ずるところ、天の覆ところ、地の載ところ、日月のてらす所、霜露のおつる所、血氣ある者の住むほどの所にて、儒道のおこなはれぬと云とはなし。儒書にのする所の禮義作法は、時により所により人によりて、そのま

共、禮法は本權道の節文なるによつて、時中にかなひて用れは、禮法すなはち權なり。時中にたがひて用ゆれば、權にそむきて非禮の禮となれば、畢竟禮の外に權なし、權の外に禮なし。權と禮と名義はすこし辨あれども、實は一理なり。よく〳〵玩味あるべし。

體充問曰。神信仰をば仕たるがよく候や。

師の曰。神明を信仰するは儒道の本意にて候。しかる故に、祖を天に配し、父を上帝に配し、神明に通ずるを孝行の至極なりと、孝經に說たまへり。周禮曰。大宗伯之職。掌建邦之天神人鬼地祇之禮。以佐王。建保邦國。以吉禮事邦國之鬼神祇。以禋祀祀昊天上帝。以實柴祀日月星辰。以槱燎祀司中司命飌師雨師。以血祭祭社稷五祀五嶽。以貍沈祭山林川澤。以疈辜祭四方百物。又曰。若大師。則師有司。而立軍社。奉主車。若軍將有事。則與祭有司。將事于四望。又曰。凡師甸用牲于社宗。則爲位。類造上帝。封于大神。祭兵于山川。亦如之。祭法曰。燔柴於泰壇。祭天也。瘞埋於泰折。祭地也。用騂犢。埋少牢於泰昭。祭時也。相近於坎壇。祭寒暑也。王宮祭日也。夜明祭月也。幽宗祭星也。雩宗祭水旱也。四坎壇祭四方也。山林川谷丘陵。能出雲爲風雨見怪物。皆曰神。有天下者祭百神。諸侯在其地。則祭之。亡其地。則不祭。王爲群姓立社。曰大社。王自爲立社。曰王社。諸侯爲百姓立社。曰國社。諸侯自爲立社。曰侯社。大夫以下成群立社。曰置社。王爲群姓立七祀。曰司命。曰中霤。曰國門。曰國行。曰泰厲。曰戶。曰竈。王自爲立七祀。諸侯爲國立五祀。曰司命。曰中霤。曰國門。曰國行。曰公厲。諸侯自爲立五

師の曰。漢儒反レ經合レ道爲レ權の說は、此章を見あやまりたるものなり。此章の禮は禮法を指ていへり。禮法は天下萬民日用通行のために平生急務の事ばかりを定たまふものなれば、非常の變事には禮法なし。道は大虛に充滿して身をはなれざるものなれば、もとより平生日用の禮法も道なり。また非常の變に處する義も道なり。權は此道の總名なる故に、禮法も本權なれ共、事の模樣定りて迹あるによつて、權と名けがたき故に、法となづけたり。嫂溺は非常の變にして、これをすくふ禮法なければ、嫂溺、援レ之以レ手者、禮也、といはずして權なりといへり。權は道の總名なれば、權すなはち道、道すなはち權なる故に、道也といはんために權也といへるなり。此章、男女授受、不レ親、禮也、嫂溺、援レ之以レ手者、道也、とあらば、反レ經合レ道の見あやまりあるまじ。權也といへるによつて、權の字になずみてうたがひあるなり。此章の主意、禮と權との辨をあかすにあらず。儒者の道は、法におちずあとになづまず、上天時に律り下水土に襲て至善に止を本とすることを開示するものなり。淳于髡をのれが私心をもて孟子をうかゞひ、孟子は當時の諸侯の無禮をにくみつかへめされざるを見て、禮法になずみたる人なりと思ふによつて、嫂溺の事を寓言して孟子を諷したり。しかる故に、孟子儒者の道は專權をもて主本として物に凝滯せず、迹になづまず、活潑なることをしらしめて、そのまよひをとかんために道とはいはずして權也と論じめされたり。孝經曰。夫孝。天之經也。地之義也。民之行也。天地之經。而民是則レ之。とあれは、經も權もおなじく道の總名なれば、經と權と辨ありと云は不可なり。禮法と權とすこし辨ありといはんは可なり。しかれ

にて見申候へば、先生の教等をこゆる弊あるべしと存候。いかゞ。

師の曰。此格言は、權を工夫のめあてとすることをいましむるにあらず。權の理味を心得ちがへて道のそこなひとなる人をいましめたる主意なり。權の理味を心得そこなひて道のさはりとなる人、二しなあり。一には、狂見に入たる人、權道の法におちず迹になずまざる面影を見付、中庸精微の矩をわきまへず、無欲の心にまかせてあとになずまず法におちざるを至極の道として、神道の權にそむけり。禪を學ぶ人此心地にまよへり。これは權の躰段徹頭徹尾こと〴〵く中庸精微の神理にして。法におちず迹になづまざるは權の景象なることをさとらず、影を認て形とする誤なり。又一には、俗儒の學をひろくして禮法になづまざるを權なりとばかり心得て、時中の適當をわきまへず、欲心に任て禮法をそむき、その心にも不義なりとはわずかにしれども、高滿の傲氣はなはだしき故に、權の名をかりてのがれことばを巧にしてその門人を罔し世を惑し、道のさまたげとなる人あり。此ふたしなの權の贋ものをいましめんために、洪氏の格言を集註に引用ひめされたり。よく〳〵明辨すべし。

躰充曰。淳于髡曰。男女授受。不レ親。禮與。孟子曰。禮也。曰。嫂溺則援レ之以レ手乎。曰。嫂溺不レ援。是豺狼也。男女授受。不レ親。禮也。嫂溺援レ之以レ手者。權也。曰。今天下溺矣。夫子之不レ援。何也。曰。天下溺。援レ之以レ道。嫂溺。援レ之以レ手。子欲三手援二天下一乎。孟子の此章を考見れば、經と權と差別あるべきと存候はいかゞ。

權を目あてとすべし。たとへば鐵砲を打がごとし。いなとみがねらふ所も初心の人のねらふ所もまとにちがひはなけれども、いなとみはうつごとにきりもみにあたり、初心の人はかくをもうちはづすばかりなり。そのあたるとあたらざるとは天地懸隔なれ共、めあてのねらひ所をちがへてはうち習べき理なし。そのごとく、初學の受用と聖人の妙用とは天地懸隔なれ共、權を準的として工夫せざれは明德を明にすべき道なし。

躰充曰。子曰。可ニ與共ニ學。未レ可ニ與適ニ道。可ニ與適ニ道。未レ可ニ與立一、可ニ與立一。未レ可ニ與權一。此聖謨をもて見れば、權は初學の取さたすべきことにあらずと存候はいかゞ。

師の曰。此聖謨は、學者の面々のいたるところの位をよしと畵して上達の志あつからざるをいましめ引たてたまふ主意なり。初學の者權を取さたすべからずとのたまふにはあらず。可ニ與共一の學は、すなはち此權の道をまなぶ學なり。可ニ與適一の道も、すなはち此權の道なり。可ニ與立一の道も、すなはち此權の道なり。權の外に道なし。道の外に權なし。權の外に學なく、學の外に權なし。但その受用に生熟、大小、精粗の差別あるのみ。しかる故に、此聖謨の主意は、工夫成就の次第をあかして、至極無上の神道を指出して、學者の準的を示たまふものなり。孟子道ニ性善一。言必稱ニ堯舜一。公明儀曰。文王我師也。周公豈欺レ我哉。かくのごときの賢範をよく躰驗して明に辨しるべし。若この準的をしらざるときは、心學の徒なりとも、欣眞落法の地に執滞して、非禮の禮多あるべし。

躰充曰。洪氏曰。權者聖人之大用。未レ能レ立而言レ權。猶ニ人未レ能レ立而欲ニ行。鮮レ不レ仆矣。此格言

權といへるは大なる誤なり。程子すでにその誤を正しめされたり。權ははかりのおもりなり。神道を權となづくる名義は、聖人は天と同躰、至誠無息、物に凝滯せず、跡によらず、獨往獨來活潑々地にして、おこなひたまふ所こと〳〵く天地の神理に適當恰好なる景象、秤のおもりの定ところなく往來滯ずして物の輕重をはかりて適當恰好なるに似たる意あるによつて、象をとれり。大賢以下の人は氣質の累ありて明德くらく、權をおこなふとあたはざる故に、聖人天下のために禮法を定たまふ。此禮法もすなはち權の道なれ共、すでに法に定ぬれば迹ありて變通の活潑なきによつて、權といはずして禮法といふなり。此意をしらず、徒に禮法の迹を眞實の道なりと心得て、聖人立法の本意權道の妙をさとらずして、禮法になずみて專にとりおこなひ、時中の神理にそむくをば、非禮の禮となづけて、君子のせざる所なり。此非禮の禮をも眞實の禮なりとまよひたる人、聖賢の行跡禮法にちがひたるを見てうたがひをなし、禮と權は各別なりなどゝ得心するなり。此權の字の精義をしらざれば、心學に志ありて致知力行をはげますと云とも、必欣眞落法の地にまよふべし。大學の能慮は此權を詳に分別する工夫なり。能得は此權を得心受用するものなり。法ありて法におちず。在ゆるところなくして在さる所なく。定ところなくして定らざる處なき權字の理味を、よく〳〵躰認すべし。

躰充曰。さやうに候はゞ、初學の人も權をおこなひ候はんや。

師の曰。權は聖人の妙用にして初學の人受用することあたはずといへども、工夫の準的はかならず

にあらず。廉直無欲に似て眞實の廉直無欲にあらず。心に義理を守らずして利害の分別理根なるによつて、多分武道にぶきものなり。利根なる者は必臆病なるなどゝ世俗のいへるは、此鄕原のにかたなるをみて云ならはしたるものなり。鄕原は名利の欲心を本として利害の分別利根なるによつて、かげひなたの目利上手にて義理をかくとをはぢざる故に、たとひその生付けなげなるも、所によりてかならず二かたなり。君子はもとより利根なれ共、鄕原の利根とは利根の品かはり。鄕原の利根なる名利の欲には鈍にして、義理の是非に利根にて、利害の分別毛頭なきによつて、かげひなたの目的なく、ひたすらに義理を立ゆへに、かりそめにも二かたなることなし。しかれとも、鄕原は世間に多、君子はまれなれば、鄕原の利根ばかりを見なれて。かく云ならはすもまた宜なりとも云べきにや。此鄕原機轉利根にして、迹になずまず物に滯らず、その上面のふり聊中行の君子の光景に似て、道德のそこなひとなる故に、孔子との外にくみたまひて、鄕原は德の賊なりとしりぞけたまふ。今の世に此鄕原のなりぞこなひ澤山なりと見えたり。志あらん士はよくわきまへてしたしみともなふまじきとなり。

躰充問曰。つねの禮法にちがひて道にかなふは、權の道なりと承及候。さやうにておはしまし候や。

師の曰。權は聖人の妙用、神道の總名なり。大にしては堯舜の禪授、湯武の放伐、小にしては周公の吐握、孔子の恂々便々、一言一動の微に至まで皆權の道なり。しかるを、經に反して道にかなふを

り。間に道理にかなひたるもあれど、かたくとりとゝこをりて泥によつて、死法となりて、受用するもの皆其法に繋縛せられて、無下に淺まし。

躰充問曰。佞人とはいかやうなるものを申候や。

師の曰。心ねぢけててくろの上手なる者を佞人と云。才智たくましく、藝能文學人にすぐれ、辯舌達し、邪欲ふかく、義理をまもらず、人をばかすと野狐のごとく、人をそこなふと虎狼のことくなる心根ある者が、佞人の棟梁なり。その虎狼野狐のごとくなる邪心をよくかくして、才智藝能文學辯舌をもて君子のふりにばけなし人をばかすと、狐の皮ぶきはにあらず。しかるによつて、凡夫みなばかされて、君子なりともてはやすものなり。古來此佞人ぎつねにばかされて、天下を亡し國をうしなふ人多し。世間にもてはやす名高き出家諸士其外藝にて身を立るさぶらひ俗儒の中より、此佞人狐おゝくばけ出ると見えたり。天子諸侯の御用心ましますべき事也。

躰充問曰。鄕原とはいか樣なる人を申候や。

師の曰。世俗のめくちかはきといへる人を鄕原と云。此鄕原は機轉利根にして才覺人にすぐれ、何事を裁判してもうとからず、孝悌忠信をつとめ、行廉直無欲をたしなみ、殘所なき樣に見ゆれども、その志唯當世の人のほむる所の名と、其主君に獲られて立身する利とをもとむることを專として、義理をもかへりみず、名利の欲泥にきたなくけがれたる心根なるによつて、孝悌忠信の行廉直無欲のたしなみ輕薄にして根にいらず。ひよりを見ててわるければ、孝悌に似て眞實の孝悌

はりとし、おさなき人を女の形に似せて兒、喝食など云て、和尙上人の妻となせり。まことに淺ましとも中〱言語道斷なり。元來不婬戒の法天理にそむきたる法なるによつて、末流かくのごとく畜生にもおとりたる作法となるなり。文殊の始て此道を開闢めされたるなど佛者の言ならはすことなれとも、文殊はすでに菩薩の果を得たる人なれば、かくあさましき欲心はあるまじきこと分明なり。例の家の造言なるべし。夫婦の別は本來智に屬したるものなり、しかるを禮なりといへるは、儒道無案内なる故か、または飲酒戒のあて所なき故かなるべし。妄語戒を信なりと云ふは可也。しかれども、信は天德の至誠、人間眞實無妄の神理、五常百行の根本にして、自古皆有死、民無信不立、とのたまふほど廣大親切無類なる天性不妄語一色をおしあつるは、九牛の一毛を全牛に當るにことならず。飲酒戒を智なりといへるは心得がたきことなり。さだめて凡夫の酒に酣醉して心くらく威儀亂たるを見て戒たるにて候はんか。それは飲者の誤にして酒のとがにはあらず。たとへば食にむせたる人の食をいむにことならず。不及亂の儒法に從て酒を用なば、賓主の歡を合、肌膚をうるをし氣血を活し、百藥の長とも云べし。その上祭祀必用のものなれば、偏に禁制すべきものにあらず。事の是非をよくわきまへしるを智とす。かやうに偏にひがみたる戒をたもちて、智者と云べけんや。その上智は天德の貞にして人間是非の靈明衆理を妙にして萬物を宰する神理なれば、飲酒戒を智なりと云は、石を玉なりと云にひとし。かくのごとく似て似ぬことをおなじものなりといひて。眞妄をみだるは、愚痴なりといはんや。我慢ふかきとやいはん。惣して佛者の法は大かたは邪僻な

ましで人間をば主親をころせる悪人にても宥て不殺を本とす。これを仁に似たる不仁、善に似たる悪、是に似たる非と云なり。かやうのにせものをもて正眞の神理にくらべられ候はんや。偸盗戒を義なりといへるは可なり。しかれども、義は天德の利にしして、人間果斷の神理天下の故に感通して天下の務をなす本なれば。不盗の粗迹一いろをもて高明廣大の義なりと云は、みかみ山を富士山なりと云にことならず。邪婬戒を禮なりと云は似たり。しかれども、禮は天德の亨にして人間恭敬撙節の神理、天下の故に通して上宗廟朝廷より下民間に至まで、人倫の交冠婚喪祭飲食軍陣萬事の天理儀則を履をこなふ主宰なれば、不邪婬一色を禮なりと云は、一勺の水を大海なりと云がごとし。その上いましむるところの邪婬天理の眞にかなひがたし。子細はその妻一人の外をばおしなへて邪婬とするは、死法と云てかたつまりたることなり。儒道の法には庶人ばかり妻一人の定なり。天子より士までは、その位々分々相應によつて后夫人世婦妻妾の員數自然の天則ありて、妻一人の定にあらず。子細は根本子孫相續の道なれば、婦人に子のなきものある故なり。もとよりその位々の員數の外は邪婬なり。その員數に定たる妻妾にても、交まじき時に交をば邪婬と戒むるなり。時に相應したる義理にしたがふを法の眼とするなり。これを活法と云なり。さてまた出家は不婬と戒たり。これはすじもなき妄法と云ものにて候。飢渇の人に飲食を戒むるにことならず。しかるに、末流の比丘婬欲こらへがたきによつて、男女和合のとなりなればにや、大便道をほり出して、無陰陽の地、不和合の處にて執着の煩惱なしと、例の家のへりことを巧にし、且邪を罔して色欲のか

て道なく、人間のとをらざる所なる故に、これを妄行と云なり。初學の間心の位のちがはざるは、山をのぼるみちのほどおなじければ、その高下のろくなるがごとし。しかれ共あし下の道眞にしてのぼりやすきと、妄にしてのぼりかたきとは、各別なり。よく〳〵躰認あるべし。

躰充曰。五戒と五常と名はちがひたれ共、心はおなじものなりと佛者のいへるは、きこえたる樣に存候。いかゞ。

師の曰。それはしらぬ京物がたりと云ものなり。夫五常は天神地祇の大德人生の天性にて、佛氏の極上と尊ぶ妙覺の佛性よりも一位ましたる無上無外の天德なり。しかるを一事になづみて偏にひがみたる五戒の法とおなじことゝ云は、金と鉛は名はちがひたれどもおなじかねなりと爭ごとくなれば、その分辨は論ずるにはおよばぬ事なれども、心學をよくしらぬ人はまよへるともあるべし。仁者の人を殺ことを嗜ざるを見て、天理眞妄の差別をわきまへず、不殺を仁の全躰なりと心得て、殺生戒を仁なりといふ。是に似たる非と云ものなり。夫仁は天神地祇の人物を發育したまふ神道にして、人間慈愛の神理なり。もとより親ㇾ親仁ㇾ民愛ㇾ物、生理の時にそむきては、一草一木をもきらざるは仁者の常なれども、天道をおそれず惡逆をして生理をそこなふ科人をばころすをもて仁とするなり。殺と不殺との事になずみて仁不仁を論ずるは、愚痴なる凡夫の心得なり。殺べき罪科なくてころすは本より不仁なり。殺べき罪科ありてころさゞれば神道の生理をそこのふによつて、科なき者をころすとひとしき不仁なり。しかるに今佛氏の殺生戒はのみしらみをもころさゞる法なれば、

くめる眞儒は此聖模を憲章して、釋尊の心をば好しりぞけひらきて、靈山の糟粕に醉てたはことつける沙門を敎化して、儒門艮背敵應の學者となすべきと、仁民の一端成べし。

躰充曰。元神元氣通一不二の端的にて候はゞ、狂者もすでに無碍淸淨の位に至たる心なれば、元神の端的をもさとりめさるべき事と存候。いかゞ。

師の曰。聖人は生知安行天と同躰なるゆへに、をのづから元神元氣一貫の妙用活潑々地なり。大賢より下の人は、學問修行をもて悟をひらくものなれば、その見性成道の段々階級のごとく次第あるによつて、中行の悟ところをば狂者はいまださとり得ず。狂者のみさとるところをば狷者はいまだ悟得ざるものなり。たとへば山へのぼるかごとし。ふもとより峯頭まで皆山の一躰なれ共、其巓へのぼり得ざれば、峯頭の草木を明細に見分ことあたはず。そのごとく元神元氣皆おなじく一心なれども、兪山の頂上に止得せざれば、元神の靈覺をさとり得ことあたはず候。

躰充曰。左樣に候はゞ、中行にいたらざるうちは、儒門の學者も佛家の學者もおなじことにて候や。

師の曰。その心の位意馬の奔走は初學の間はおなじけれ共、その修行の道は眞妄各別なり。たとへば、山にのぼるがごとし。儒門の學者の力行する道は、峯までよく通しぬる定たる道をのぼるがごとし。平常不易の道なる故に、是を天眞と云なり。佛家の學者の修行する道は、山八分にきれどありて、峯頭まで通ぜざるすじののぼるべき道なき所を、木かやをわけてのぼるがごとし。險岨にし

ばかりなれば、我慢の邪心凡夫よりもふかくて、高言をたくみにし辯舌をたくましくして、かりそめにも勝ことをこのみ、愚民を誑しすゝむるをもて務とし、おなじながれをくみながら、我慢の偏執を立て互にそしり爭こと、貪夫の畔を爭よりも淺まし。しかる故に、佛者は太虚を超出すれば貴となるびなきによつて、父母兄長をも崇恭する理なしなどゝ云て、其父母を拜せず父兄をうやまはず、黃蘗禪師の母をころせるを眞實の大孝なりとほめ、或は三綱五常の道は今生幻の間のいとなみにして菩提の種とならずなどと誑誘し、或は主親をころしたる極重の悪人にても念佛の功力にては極樂淨土へ往生するなどゝ敎誨せり。其外いろ〳〵さま〴〵にことばを巧にし寓言をつくりて、人心をまとはし禽域へひき入、世敎のさまたげとなる事、擧てかぞへがたし。かくのごとくなるは、よくまなばさるの過末流の比丘の罪なりといへども、根本は釋尊無欲の妄行よりおこりたるものなり。釋尊の心地無碍淸淨の位はよしといへども、其妄行の天眞のさはりとなる法をばしりぞけひらかでかなはぬ事なり。むかし原壤といへる狂者は孔子の舊友なり。後に原壤狂見たくましくてしりぞくべき妄行あり。孔門の諸賢絕交ましますべきことなりと疑ありけれとも、孔子故者毋レ失二其爲一レ故也とのたまひて、終に交を絕たまはず。交を絕たまはざれとも、原壤夷俟ときは爲レ賊とのたまひて、つきたまへる杖にて原壤の脛をたゝきていましめ責たまふ。此聖行の御本意を愼て考見るに、交を絕たまはざるは吾不レ得二中行一而與レ之、必也狂狷乎、とのたまふ意なるべし。脛をたゝきたまふは、妄行のあやまりをさとらしめ中行の位へ誘掖なされんとの不屑の敎誨なるべし。されば洙泗の流を

聖胎をむすばざるによつて、その心無欲無爲淸淨自然なれ共、その應事接物の議論行跡猖狂妄行にして、聖人艮背敵應の天眞にそむきたり。天眞にそむくといへども、無欲無爲淸淨自然の心なるによつて、悪と云べきにもあらず。悪にあらざれども、天理にかなはざれば天眞にもあらず。無欲の妄行と云ものなり。聖人これを狂者と名けたまふ。狂の字に眼をつけて觀察すれば、無欲の妄行の義いはずして分明なり。つらつら躰察するに、佛者は元氣の靈覺をさとりて至極と思、元神の靈覺をさとらず。唯無欲無爲自然を心法として元氣の靈覺に任する故に、其心粗濶にしてその行跡狂妄なり。儒者は理を窮性を盡して命に至を心法とすれば、無欲淸淨無爲自然無碍のとは云におよばず、專元神の靈覺に率ふ故に、其心精妙にしてその行跡中正なり。儒者悟道、則其心愈細、禪家悟道、則其心愈粗、と樂軒の發明されたるも此意なり。元神元氣は不二の二不一の一にして、まとに毫釐のたがひなれども、其議論行跡のあやまりは千里よりもとをし。しかるによつて、其致法勸善懲悪のためなれども、そのすゝむるところの善皇極の至善にあらず。こらしいましむる所の悪と名くる悪のうちに、眞實の悪にあらざるあり。不婬の類これなり。釋尊十九にて天子の位をすて山に入、三十成道の後人間本分の生理をいとなまず。或時は乞食し人倫を外にし人事をいとひすて、種々の權教方便說をときて愚民を誑誘めされたること、皆これ無欲無爲自然淸淨の位を極上と定、元氣の靈覺にまかせたる毫髮の差よりおこりたる無欲妄行の誤なり。その流をくめる末代の比丘、釋尊妙覺の眞性無碍淸淨の位をその心地に悟得とをは務ずして、徒に釋尊無欲妄行のあとをにせたる

り候べし。子曰。差之毫釐。謬以千里。この聖模の意は、心法の立やう毛頭たがひぬれば、その議論行跡のあやまり千里のちがひとなると云義なり。しかる故に、先悟をひらく精粗生熟高下心法の立やうの差別を明に辨ざれば、儒佛眞妄のわかち知がたし。夫人間は迷悟の二にきはまれり。迷ときは凡夫なり。悟ときは聖賢君子佛菩薩なり。その迷と悟は一心にあり。人欲ふかく無明の雲あつて心月のひかりかすかにしてやみの夜のごとくなるを、迷の心と云なり。學問修行の功つもりて人欲きよくつきて無明の雲はれ、心月の靈光あきらかにてらすを、悟の心と云。此悟の心を、佛經に無心、無念、本佛、妙覺、佛化、身佛などゝ名く。また無碍清淨位と云。前かどに論する高明廣大の道躰をさとる狂者の心の位これなり。かくのごとく悟たる心の無欲無爲自然の靈覺を、眞心と定眞性と定靈性と定佛心と定佛性と定。これすなはち釋尊、達磨の心法の端的なり。三大乘の觀念、千七百則の公案、皆これ端的に約れり。此無礙清淨位、無心無念の本佛は不思議の躰にして毫髪の按排をいれざる處なれども、儒敎には此無礙清淨の法の位の上に、不思議神通の力をもて神理靈氣不二の二不一の一を明辨して、一段向上精一の神化あり。此の神化の後を聖人と名く。至妙天眞艮背敵應の位なり。此神化の結胎純熟半なるを亞聖の大賢と名く。中行位なり。中行は無欲無爲自然の眞心無碍清淨の位の上にて、至妙天眞艮背敵應の聖胎をむすぶによつて、その議論行迹聖人にたがはず。これを大一天眞の神道と名く。許由、巢父、曾晳、莊子、釋迦、達磨などは、無欲無爲自然の眞心をあきらかにし、無碍清淨の位に至て、これを至極の中道山頂なりと定、至妙天眞艮背敵應の

曰。異端虛無寂滅之教。其高過於大學。而無實。又曰。至於老佛之徒出。則彌近理。而大亂眞。又曰。程夫子兄弟者出。得有所考。以續夫千載不傳之緒。得有所據。以斥夫二家似是之非。

かくのごとく甚しくしりぞきひらきめされたるは、何たる故にて候や。

師の曰。巢父、許由、曾晳、原壤などは、堯舜、孔子の日のひかりつよきによつて、その狂見の教をひろめて世教のさまたげとならず。其上惟狂克念作聖の人なるによつて、しりぞけたまはざるなり。程子朱子の時には、儒道くらくて佛法盛にひろまり、末流の比丘みだりに意見にまかせくちにまかせて、釋尊の本意にもそむきたる造言をなし、法をたてゝ世をまどはし人を誑しすゝむるによつて、やむことをえずしてかくのごとくしりぞけひらきて、天下後世のまよひを解あきらめされたり。すなはち孔子原壤の脛を叩て爲賊と責たまふ意を祖述して、攘退めされたれば、據ところなきにあらず。佛氏の流をくむもの、許由、曾晳などのごとく。我心にのみ狂見をまもりて世教をさまたげずば、程子朱子もさのみしりぞけひらきめさるまじ。君子は仁孝の心切なる故に、天下を汚濁におぼらし人倫を禽獸の域にひきいれぬるをあはれみなげきて、はなはだしく攘斥めされたり。佛者の勝むことをこのむ邪心にて儒道をそねむがごとくなるにはあらず。

體充曰。釋尊の教の法を立めされたる本意は、勸善懲惡の爲めなり。其上道の大意を悟たる人なれば、其教の法さほどに世をまどはし人を誑し禽域におとしいることは有まじきと存候。いかゞ。

師の曰。不審尤に候。易學をよくきはめざれば、合點成かたき處なれども、その皮膚の大意をかた

は人倫の太祖にてまします。此神理にて觀ば、聖人も賢人も釋迦も達磨も儒者も佛者も我も人も、世界のうちにあるとあらゆるほどの人の形有ものは、皇上帝天神地祇の子孫なり。さてまた儒道はすなはち皇上帝天神地祇の神道なれば、人間の形有て儒道をそしりそむくは、其先祖父母の道をそしりて其命をそむくなり。まへにも論ずるごとく、我人の大始祖の皇上帝大父母の天神地祇の命をおそれうやまひ、其神道を欽崇して受用するを孝行と名づけ、又至德要道と名づけ、また儒道と名く。これを敎を儒敎と云、これを學を儒學と云、これをよく學て心にまもり身におこなふを儒者と云なり。もとより釋尊公道の大意をさとりたる狂者にて、すでにみづから其父淨飯の棺をになひ、梵網經には孝順至道之法と說めされて、孝行にくらき人にあらざれ共、孝德の全躰精微の密には悟入なきによつて、中行の位にのぼりめさるゝことあたはず。もし儒道を聞めされたらば、かならず尊信受用有べきと、孝順至道之法と說その父の棺をになひめされたるにておしはかるべし。しかるにその流をくむ末代の比丘我慢の邪心たくましくて、その親をそしるよりも物躰なき理をわきまへず。くちにまかせて儒道をそしりぬるは、無下にあさましきまよひなるべし。

躰充曰。巢父、許由は狂者なれ共、堯舜これをしりぞけたまはず。曾晳、原壤も狂者なれ共、孔子これをしりぞけたまはず候間、釋尊は狂者にて候はゞ、佛法をもしりぞけひらくべき理なし。しかるに程子曰。老佛皆是正路之蓁蕪。聖門之蔽塞。闢レ之而後可三以入二レ道。又曰。佛氏之言。比二之楊墨一。尤爲レ近レ理。所以其害爲二尤甚一。學者當下如二淫聲美色一遠上レ之。不レ爾則駸々然入二於其中一矣。朱子

我慢の邪心甚しけれ共、道理のさたにて云かつべき覺悟なきによつて、つくりことをして釋迦におふせて儒者の斥るをふせぐものなり。釋尊はすぐれたる狂者なれば、かやうにきたなびれてあらそひそねむ心は中々あるまじきに、淺ましきつくりことをして釋尊をへをい比丘とすること、誠に釋尊の罪人なるべし。さてそのつくりことのすじなき子細は、人間の生出と父母のわざのごとくなれども、父母のわざになるとにあらず。太虛皇上帝の命をうけて、天神地祇の化育したまふところなり。しかるに神理をわきまへずして、釋尊の佛力をもて佛弟子を大唐へ遣し、孔子と化身させめされたるなどといへるは、片腹いたきつくりことなるべし。佛者のうちに佛像をつくる細工の巧くみなる人古來多ければ、釋尊の御作の木像ありなど云は、さもありなんとも云べきか。釋尊の佛力にて生身の人をうみいだせるなどいへるは、水にて物をやくと云にことならず。その上釋尊妙覺の位は大唐の狂者の位にて、孔子よりははるかにをとりたる見性成道なれば、釋迦の弟子の化身とは云がたし。總して佛書は皆寓言にてかきたるものなり。その愚民をたぶらかす寓言の筆法をならゐて、儒道をしりぞけんとおもへる沙門の心根、おろかにいと淺まし。これのみにあらず、我慢の邪心ふかくて種々のつくりごとをなし、或は儒書の文義の皮膚ばかりをまなび、骨髓の理味をば露もさとせずして、妄に儒佛の淺深高下權實內外の差別を立、佛を尊信し儒をそしりいやしむ沙門、古來そのかずをしらず。これ皆他人を貴び愛してその親をいやしみにくむにひとしき凡心のまよひにて、天に唾はくよりもおろかに淺ましきことなり。その子細は、天神地祇は萬物の父母なれば、太虛の皇上帝

かき説にこへましたると云、或は釋尊は大聖孔子は小賢なりと云、或は佛敎は內典聖敎なり儒敎は外典俗事なりと云、或は儒敎は外道なりなど云て、世をまどはし人をたぶらかしぬ。まことにめくら蛇におぢざるまよひふかき心にて、あたまに口のあきたるまゝに、世に人々なげに議論するは、その道の元祖釋迦、達磨の心にもそむきたる理をしらず。いとあさましく我慢邪慢なるたはこと、かたはらいたきと云ながら、あはれになげかしき事なるべし。歷々聰明なる人のかく道をとりまがふことは、敎の法中庸にそむきたるによりて、其立法の心根はよしといへども、末流をくめる學者理味をかみちがへて皆峯へのぼるとて谷へ入ごとくなる故なり。物我をあらそひかたんとおもふ我慢の魔心をはらひすて、儒と云佛と云名をわすれて、本來至誠無息、不貳一貫の心學をつとめて、太虛廖廓の神道をさとりぬれば、何のうたがひもなきものなり。

躰充曰。先生の敎を承候へば、佛は聖人より二位ほどしたなる見性成道なり、しかるに佛者曰。我遣三聖、化彼眞丹、と云經文あり。此文の意は、釋尊の佛力をもて佛弟子三人を大唐へつかはし、老子、孔子、顏子三聖人と化身させて、太唐の衆生を化度したまふと云義なり。此經文にて見れば、孔子、顏子も皆釋尊の御弟子なり。斯樣の因緣をわきまへずして、孔門の儒者みだりに佛法をしりぞくるはさたのかぎりなりと高ぶりて、あざけり候。何とぞか樣なる因緣もあることにて候や。

師の曰。それはかたいぢにひがみたる沙門。佛學ばかりをきはめて、井のうちの蛙大海をしらずといへる諺のごとく、佛道より上なる道なしと自滿十分なるによつて、儒者の佛法を斥るをいかりて

何國もかはらず同一躰なる心をもて評判するなり。惣して聖人も賢人も狂者も狷者も、一心にての見性成道なれば、その心をよく觀察してその位を定なり。莊子と釋迦、達磨とことば作法はちがひたれ共、その心の見性成道はおなじくらゐなるによつて狂者と云佛と云。名はちがひぬれとも、見性成道の心の位はひとつなり。天竺にて佛如來とあがめ尊ぶ人の心の位は、大唐にて狂者となづくる中行より下の人の心の位なり。難波のあしは伊勢のはまをぎといへる諺の意なりと得心すべし。

躰充曰。見性成道の位を觀察すること、中〳〵凡夫のおよびがたき所なり。いか樣なる學問にてわきまへ知べく候や。

師の曰。目にて物を見るに、高ところより下を見おろすことは、見易して分明なり。ひきゝ所より上を見あぐることは、見えかたくして分明ならざるものなり。心にて心を觀察するもかくのごとし。聖賢の心より狂者、狷者、凡夫の心を見たまふは、日月の萬物をてらしたまふごとくなり。狂者、狷者、凡夫の心にて聖賢の心をうかゞひ見るは、谷にとほせるたひまつにて峯を見るにことならず。しかる故に、眞儒の心學の外の學問にては、中〳〵わきまへ知ことなるべからず。唯眞儒の心學をよく切瑳琢磨して大覺明悟の位に至りぬれば、莊子、釋迦、達磨などの心を觀察すること白晝に黑白をわかつごとくなるべし。莊佛の學問をきはめたる分にては、聖賢の心をわきまへしることと富士のふもとよりその巓を仰見るがごとくなり。しかる故に、釋尊の流をくむ人に隨分聰明なる人あまたあれ共、偏に我堂の佛堂とうとしとまよひて、或は佛法に小乘のあさき敎が儒道の極上のふ

のさはりとなるものなれば、まして狂者偏僻の法を迹ばかりを專らと取おこなふによつて、元來釋迦、達磨の心ねは勸善懲惡のためなるべけれども、末流には善をやぶり惡をすゝめ人の心をまよはしめること淫聲美色のごとし。これみな末代その流をくむ比丘のあやまりと云ながら、本來狂者の見所純熟せざるによつて、その敎法粗糲迂濶なる故なり。釋迦も達磨もすぐれたる狂者なれば、聖人にあひめされたらば、かならず中庸精微の密に悟入して中行の位に至めさるべし。たとひ中行にいたりめされずとも、許由、曾晳などのごとくにありて、かく世をまどはす敎の法をば立めさるまじ。聖人出世ましまさぬ戎國に生出てその法のひろまりたること、幸に似たる不幸なり。

躰充曰。大唐と天竺と八十萬里隔たりと承候。そのうへ釋尊の作法と唐土の狂者の作法とはちがひたる所おゝく候へば、おなじく狂者とは申がたく存候。いかが。

師の曰。ことばと作法とにて吟味評判するは、心盲の凡夫のわざにて、いとあさましきまよひなり。國のちがひ作法ことばになずむ心のくらさにては、中〳〵道の得心儒道佛道の差別を辨らるゝ事は成べからず。先あとに泥ずして心をよく觀察する理をあきらめらるべし。國所世界の差別いろ〳〵樣々ありといへ共。本來みな大虛神道のうちに開闢したる國土なれば、神道は十方世界みなひとつなり。しかるによりて、國隔りぬればことば風俗はかはるといへども、その心のくらゐは本來同一躰の神道なるによりて、唐土も天竺も我朝も、またその外あるとあらゆる國土のうち、毛頭ちがふことなし。かくあるゆへに、本心の眼あきらかなる哲人は、所によりて品かはる迹をすてゝ、

の狂見をたゝまじくふるまひ、人におしえ書をあらはして、大唐の狂者の教の始となれり。しかれども、聖人の日の光かくれたまひていまだほどとをからぬ故に、その星の光甚しからず。これにて聖人の日の光なきやみのよには狂者のほしのひかり輝ことを考しるべし。大唐には聖人あまた出たまひて、三才一貫中庸精微の教さかんにおこなはれたるさへ、その日の光かくれたまひたる後は、莊子のごとくなり。まして天竺には、終に聖人一人も出たまはず。開闢より釋尊の時分まで、やみのよの戎國なれば、釋尊狂見の教を衆生信仰すること尤なり。天竺に聖人の至教なきによつて、三才一貫、中庸精微の密に悟入することあたはず。只その廣大高明一偏の悟を大覺明悟なりとおもひ定、天竺戎の風俗によつて教の法を立て、衆生を敎化めされたり。さてまた大唐も戰國の後は、氣運否塞によつて、聖人大賢出たまはず。とこやみのよとまよひたる時節に、天竺の狂者釋迦の法始て大唐へ入てひろまりたり。聖人の日の光午の時と輝時節ならば、中〳〵ひろまるまじ。その證據は許由、曾晳にて考知べし。さてまた日本より大唐へ通路初りたる時分、大唐に佛法ひろまりたる最中なれば、うけきたりて日本にも流布したり。元來釋迦、達磨の法を立めされたる心根は、衆生のまよひてあさましきていをあわれみかなしびて、色々さま〳〵の寓言を立、勸善懲惡のためなれば、一段殊勝なれども、その德狂者なる上に、天竺戎の風俗をもとゝして立たる教の法なるによつて、逸狂偏僻なることばかりなり。その上すゝむるところの善、眞實無妄の至善にあらず。三才一貫、中庸精微の至道にそむきて、人極のさまたげとなること多し。聖人中庸の法さへ。迹になづみぬれば人極

翁問答下卷之末

躰充曰。狂者と中はいかやうなる人にて候や。

師の曰。狂者は道躰の廣大高明なる所をば悟といへども、いまだ精微中庸の密に悟入せざるによつて、見性成道の心術粗糲迂濶にして、脩行異相に逸狂なるものなり。大唐にては許由、巢父、牧皮、曾晳、子桑戸、莊子、天笠にては釋迦、達磨など勝れたる狂者なり。人の生付しなかはるにより て、道學して見性成道する位に上中下の三段あり。中行は聖人の下、亞聖の大賢なり。これは三段のうちにて第一段、上の位也。狂者は中行の下、第二段中の位なり。第三段、下の位は狷者なり。學問しても此三段の位にいたらざるは俗學といふものなり。よく〳〵躰認すべし。

躰充曰。おなじく狂者にても巢父、許由、曾晳などはその敎の法世につたはらざるに、釋迦、達磨の敎はその生國のみならず大唐、日本まで流布仕は、何たる故にて候や。

師の曰。よきふしんにて候。古來此とはりを分明にときあきらめたる人まれなり。たとへば聖人は日のごとし。狂者は星のごとし。ひるは日の光つよきによつて、星ありといへどもその光見えず。夜に入て日光てらしたまはねば、星の光あきらかなり。そのごとく、許由、曾晳などの時代には、堯舜、孔子の日の光午時と輝故に、狂者の敎ありても、白晝の星のごとくなれば、信仰して受用する人なきによつて、狂者も敎をひろめんと思ふ意なくて、敎の法をたてず。しかる故に、末代へ傳ふべき法なし。すでに聖人の日の光かくれたまひ、やみの夜となりたる戰國に、いてられたる莊子は、そ

たしなみぬるは、湯のみをきとやらんおろかなるたしなみなるべし。たとへば、軍陣のたしなみにとて平生はなさず具足冑をきるがごとし。そのうへ武藝をならひ軍法をまなぶは、ぶへんのたすけなれば、常のたしなみ尤なり。いかつにたけくうでだてをたしなみ人をころす事をこのむは、武篇のたすけになるものにあらず。却てぶへんのさまたげとなるべし。その仔細は、いかつにたけく腕だてをたしなむ人は、必人をあなどりかろしめてあらそふ心はなはだしきによつて、必喧嘩の犬死をなし、親にうれひをかけ主君の知行をぬすみて淺まし。たとひ喧嘩のはたらきけなげなりとも、かみあひのつよき犬にことならず。心あらん士ははぢおそるべき事なり。つね〴〵ものやはらかにしていかつにたけくうでだてのたしなみなくても、孝忠の心だに眞實なれば、必ぶへんつよき證據はむかし楊豊といへる人のむすめ楊香、とし十四の時父にしたがひて山田を刈いけるところへ、虎ひとつきたりて楊豊をくひころさんとせしを、楊香にしりかゝり彼虎の頸にいだきつきて父のいのちをたすけたり。この楊香はとし十四になれる女なれば、いかつにたけく腕だてのたしなみなく柔軟なる事勿論なり。しかれども、とらを手うちにしたるは樊噲にもおとらぬ武篇なれば、いかつうでだてのたしなみはせんなくして、孝忠仁義のたしなみ簡要なる事をわきまへ知べし。されば楊香かくのごとくの武勇は、たゞ父をふかく愛する一念の仁よりはたらくところなれば、孝行忠節の心だに眞實なれば、たれ人も必ぶへんつよき理りあきらめやすし。是にて仁義の勇の端的をよく〳〵躰認あるべし。

事なりと高言せしと、かたりつたへしもあれば、まよへる凡夫はさやうの心得も尤なり。しかれども、それは明徳といひ仁義と云名になずみて、實にまよひたるふしんなり。明徳仁義はわれ人の本心の異名也。此本心はいのちの根なれば、いきとしいける人げんに明徳仁義の心なきは一人もなし。親を愛するは仁なり。君に忠節をつくすは義也。此孝忠の心をあきらかにして正しくおこなふを、明徳をあきらかにし仁義をおこなふといふ。　これをまなぶを心學と云也。武篇は孝忠の一色にして、孝忠の心眞實なれば、必ぶへんつよきものなり。此ことわりをわきまへぬれば、武篇のたしなみばかり士道にして、仁義をおこなふは士道にあらずといへるまよひ、あきらめやすし。そのうへ、親にそむき君に謀叛して惡逆をもつぱらとして、士の道もたち國もおさまりぬる事、むかしも今もそのためしなければ、仁義の道をすてゝ士の道もたち世もおさまりたるなどいへるも、片腹いたきことなるべし。さてまた仁義の道にそむきて欲のためにはたらく勇は、むほん人ぬす人にしてぶへんにあらず。しかるを、何の吟味もなくいかつにたけく腕だてをして人をころす事をこのむをぶへんのたしなみと心得ぬるは、あさましくなげかしきことなるべし。

躰充曰。おほせは理り尤にては御座候へども、つね／＼いかつにたけく腕だてのたしなみなく候はゞ、武用ぬるく候はんかと存し候はいかん。

師の曰。あるひは合戰の場あるひはぶへんをはたらくべき時には、たけきふるまひなくてかなはぬ事なれども、平生無事の時は詮なき事也。戰陣のためにとて平生無事の時つね／＼たけきふるまいを

さぞよく義理にかなふを、たゞしき士道なりと得心あるべし。

躰充問曰。士道のぎんみはいかゞ仕りたるがよく候や。

師の曰。むかし齊王の子、墊と云人、孟子にあふていはく、四民のうち農工商買をの〱みなその所作あり。今の士を見るに酒嚢飯袋といへるごとく、輕暖の衣服をきて甘美の酒食にあけるのみにて、さしてつとめはげます所作は見えず。士たるものは何事を所作とするものにて候やととわれたり。孟子の曰、農工商買はちからを勞して人をやしなふを事とし、士より上は心を勞して人をおさむるを事とする故に、明德をあきらかにして仁義をおこなふが士の所作なりとこたへたまひけり。しかる時は、儒道がすなはち士道なれば、眞儒の心學にてぎんみしたるがよろしく候。さなくては、吟味正眞の義理にあたらぬものなり。近代甲斐の信玄は、文學をもめされて、隨分ぎんみつよき大將なりしかども、眞儒の心學なきによつて、軍鑑のぎんみ正眞の義理にあたるはすくなし。よく〱躰認あるべし。

躰充曰。武篇のたしなみばかりを士道なりとこそぞんし候へ。明德をあきらかにして仁義をおこなふを士道なりとおほせられ候へば、世けんに士道を心得たるさぶらいは古來まれなるべし。しかはあれど、むかしも今も士の道も立くにもおさまり候へば、むつかしき心學はさしていらざる事にて御座候らはんか。

師の曰。盜跖といへる盜は、世けんにぬすみにましたるよき事なし、堯舜禹湯の仁義だては、無益の

物躰なきとなるべし。

躰充曰。左候はゞ忠臣二君につかへずといへるごとく、主君一人にならでは奉公せざるが正しき士道にて候や。百里奚は虞の國をさつて秦の穆公につかへられたり。しかるを孟子賢智なりとゆるしめされたれば、主君をかへて奉公するを士道にあらずと被ㇾ仰候は、かたむきなる評判にて候はんか。

師の曰。それはもつてのほかなる心得そこなひにて候。百里奚のごとく心いさぎよく身おさまりて名利の欲心なく、其境遇の勢やむことを得ずして主君をかえて奉公するは、古來たゞしき士道なり。只その心けがれて身おさまらず、立身の欲心をのみ宗として何のすじ道もなく、事勢のやむことを得ざるにもあらで、主君をかぞへて貪りまわるは、士道にあらずとの評判にて候。百里奚はもと虞の國の臣下なり。虞の君不義のおこなひありてたちのかでかなはざる事ある故に、已ことを得ずして虞を去て秦の國へゆかれたり。この時とし既に七十なりぬ。秦の穆公その賢をきゝおよびて、よびいだしめされたるによつて、事へめされたり。主君をかへて奉公するところはわたり奉公に似たれども、その心と作法とは天地懸隔なり。しかるをおなじ口にてとりさたせんは、無下にあさまし。主君をかへたるを必たゞしき士道と定めたるも、また主君をあまたかゆるを正しき士道とさだむるも、皆跡に泥みたる僻事なり。心いさぎよく義理にかなひぬれば、二君につかへざるも、また主君をかえてつかふるも、皆正しき士道なり。そのをこなふ事はともあれかくもあれ、只その心い

人ははぢにくむべき事なれば、てがらとは云がたし。立身の心がけ商人の利心のごとく、貪りきたなく義理をまぼらざる心にては、何の用にもたちがたかるべし。かやうの士を崇敬ありて用にたちたるためし、もろこしにも我朝にても古來なき事なり。しかるに、諸大名衆かの商立身のてだて上手なる人をよき士と心得て、過分の知行にて拘たまふは、さだめて國をおさめ軍を行たすけとせんとの思ひ入にて候はんか。左樣の御こゝろざしにてましませば、諸葛孔明のくさぶきの陋巷へ蜀の先主の自身三たびまで幸なりてよびいだし給ふに似て、その御心根は一段殊勝に候へども、人間のぎんみおろかにして過分の知行をすてたまふのみならず、士道のさまたげとなり、諸士の風これによつて日々にきたなくなりゆくこと、あさましくなげかし。

躰充曰。諸大名衆道なきわたり奉公人を崇敬ましますにより、士の風きたなくなりゆく子細はいかに。

師の曰。心學をよくきわめたる士は、義理をかたくまもりて邪欲なければ、世間の作法にあやかる事なし。心學のみがきなき士は、よこしまなる名利にふけるものなり。今時のさぶらい心學のみがきなきものばかりなれば、商立身の上手なる士の時めくを見きゝてうらやみあやかり、我も〳〵とまねをするにより、次第に風きたなくけがれて、士道のぎんみをば古風にて時にあわずなと云て心がけず、あさましき作法となりゆきぬるは、むさとしたる手くろ士を大名衆の崇敬したまふ故なり。主君の政だによろしければ、その國の諸士人ごとにみな義士勇士となる事、倭漢ともにそのためしおほし。しかるに、久功の諸士を疎略にもてなし、故なき術士をいまめかしく崇敬したまふは、

ばとて、かりにたとへまふくる語なり。謙德はなはだしく至極して、おごりの心毛頭なきところをあきらめんためなり。眞實にいつも一沐にみたび髮をにぎり、御膳をあがりたまふごとに哺をはきたまふにはあらず。大舜、周公その才德は聖人、そのくらゐは天子、冢宰にて、かくのごとくにましませば、末代の天子諸侯まぼりおこなひたまふところ、謙より大きなるはなき事をあきらかに辨まふべし、しかるゆへに、國をおさめ天下を平かにする要領、謙の一字にきはまれり。謙德はたとへば海なり。万民はたとへば水なり、海は卑下なるによつて天下の万水みなあつまり歸するごとく、天子諸侯謙德をまぼりたまひぬれば、國天下の万民みな心を歸してよろこびしたがふものなり、天下の賢智愚不肖こと〱くよろこびしたがふときは、國天下はをのづからおさめざるに平かなり。されば易經に天道虧㆑盈、而益㆑謙、地道變㆑盈、而流㆑謙、鬼神害㆑盈、而福㆑謙、人道惡㆑盈、而好㆑謙、とときたまふ。聖謨よく〱尊信あるべし。

躰充問曰。今時の諸士の主君をあまたとりて知行をとりあぐるを立身といひて、手柄にいたし候はいかに。

師の曰。それは士道のぎんみ無案内なるあやまりなり。才德ありて忠節をつくし、軍功をはげみて位をあがり、知行をとりあぐるが眞實の立身にて、士のてがらなり。才德もなく忠節もなく軍功もなくて、よき最負をかさにきて、術を上手にもてなし、主かずをかぞへて身上をしあぐるをば商立身と云て、あき人の門をかぞへて直をたかくうりつくるにたとへたり。士道をすこしにても心得たる

人にとひたゞね、賤きものゝ云ことをもきゝいれて吟味ましまして、中庸にかなはぬをば隱してもちいたまはず、中庸にかなひぬるをばとりあげてをこなひたまふ。孔子このことを擧てかくのごとくなるによつて大舜を聖神と尊崇したてまつると賛美したまふ。又周公旦は、その御子伯禽魯國の主となりてはじめて國入したまふ時、周公旦戒伯禽曰。我文王之子。武王之弟。成王之叔父。我於天下亦不賤矣。然我一沐三握髮。一飯三吐哺。起以待士。猶恐失天下之賢人。子之魯。愼無以國驕人。この聖戒のこゝろは、我親は文王なり、我兄は武王なり、當今の天子はわが甥なり、我くらゐは攝政冢宰なり、天下に我をこすべきものなく、類すくなき尊位なり、しかれども、一たび髮をあらふうちには、みたびあらいさして髮をにぎりて目見えにきたる諸士をあいしらひ、一たび飯を食するうちには、三度くちにくゝみたる食物をはきいだして諸士をあいしらひぬれども、なを天下の諸さぶらいにをごりたる無禮のあいしらひありて賢人のうらみあらんことをおそれつゝしむばかりなり。なんぢ魯國へゆきて國をはなにあてゝおごり無禮にして人をあなどりかろしむる事なかれ、我ごとく愼むべしとおしへいましめたまふなり。始に文王、武王、成王をあげて位のたつときことをのたまふは、凡夫のをごりて謙德をうしなふは、そのくらゐ貴きゆへなり。しかる故に、くらゐの至極たつとき事をあげてをごるべきところをあらはしたまふ。かほどたぐひなきたつとき位にても、謙德いよ〳〵ふかくおごることすこしもましまさねば、ましてこれより下なる位におるものはいふにおよばずといましめたまふ意ふくめり。さて一沐三握髮。一飯三吐哺。此二句は假說のと

妄費と變じて、同一人欲となれり。よく〳〵躰認あるべき事なり。

躰充問曰。國大名あるひはその家老たる人の第一にあしき疵は、いづれにておはしまし候や。

師の曰。私の一字なり。私なる人はかならず氣隨なり。氣隨なる人は、必人の異見をきゝいれず、世のそしりをかへりみず、偏に我心まかせにして、すぎたる事をばあしきことにてもよしととりなし、夜も日もあけざる樣にこのみふけり、わがすかざる事なればよきことをもそしりをとしめて取あげず、あいくちよきものをば小人侫人をもちかづけしたしみ、功なきに知行を加恩し、罪あるにも刑をほどこさず、あいくちあしければ久功忠節のものをもうとみちかづけず、功ありても賞をあたへず、罪なきに刑をくはふるごときの不義不道の作法しをき、みな私の心根よりはびこりいでたる枝葉なり。かくのごとくあれば、國法軍法みなみだれて、終にその國ほろぶるものなり。かりそめにも氣隨の念おこる時は、我身をうしなひ國をほろぼし家をやぶる魔心なりとおそれつゝしむべし。

躰充問曰。諸侯卿大夫の第一に守りおこなひてよき事はいかゞ。

師の曰。謙の一字なり。我くらゐたかきにおごり自滿する魔心の根をたちすて、義理の本心をあきらかにし、かりそめにも人をあなどりかろしめず、慈悲ふかく万民をあはれみ、諸士に無禮をなさず、家老出頭のいさめをよく聞入、智恵をさきだてず、善をこのむ事は好色をこのむごとく、惡をにくむことは、惡臭をにくむごとくなるを、謙と云なり。大舜は大聖人なれど、かりそめの事をも

義理ありてもあたへず、過分に知行加增あるべき忠功にもすこしの褒美をとらせ、家作諸道具已下分際より見ぐるしく物たらわず、むざとつかひ費さゝるを、世ぞく鄙嗇と云ふ。君子儉約朴素の行跡に似たるによつて、なまがくもんしたる人見まがひてよしとゆるすものなり。しわきもきようなるも、皆明德のくらきところよりおこりたる病にて、天下をうしなひ國をほろぼし家をやぶる根本なり。よくつゝしみて工夫分別あるべし。

躰充曰。しわくもなく棄用にもなき樣には、いかゞ工夫つかまつり候はんや。

師の曰。時と處と位とによくかなひて相應したる義理を中庸となづけたり。此中庸適當のみちを目あて繩規として財寶をもちひぬれば、大過不及のわたくしなきによつて、きようともしわきとも名づけいふべきやうなし。さて工夫の仕樣は、まづ私欲のけがれをすてゝ天道の義理を鑑とし、時と處とくらゐとによくかなひて相應するところを分別して財用の節をかんがへしるなり。さてまた財寶をつかふに公用、私用、妄費の三事あり。公用は天下のため國のためになる道ある軍役、公役の造用なり。私用は飲食、衣服、宮室、妻妾、てまわりにさしつかふ臣僕などのざうようなり。妄費はなにの用にもたゝぬなぐさみ一偏の造用なり。此妄費は凡夫ばかりのわざにて、君子の上にはなきとなり。中庸不倚の心法をまもりてざいほうをもちゆれば、私欲のけがれすこしもなきによつて、清白廉直にして私用も公用と變じ、同一天理となれり。中庸不倚の心法をしらずぼんぷの心まかせに財寶をもちゆれば、或はきようあるひはしわく、私欲のけがれふかきによつて、公用も私用も皆

きとなり。かくいへばとて、奸雄をすつるはひがとなり。つかいやうが大事なりといふとにて候。奸雄はたとへば砒霜巴豆などの毒藥のごとし。毒藥にてせむべき實症の痼疾にもちゆれば、其病をいやすしるしすみやかなり。そのしるしのすみやかなるを見てよき藥味なりと心得て、虛症の病者にあたへぬれば、即時に死するものなり。そのごとく此奸雄も敵をやぶり賊を擒にする才のたくましきを見て、よき臣下なりと心得て、大官大國をあたへ、あるひは國天下をあづけなどする故に、くにをぬすまれ天下をうばはれ給ふ。明醫の砒霜巴豆の能毒をよくしりて卒爾にもちひざるごとく、姦雄をもその才と心とをよく看辨して、金銀たから物そのほかそのものゝすきこのむものをとらせ、情ふかく禮義たゞしくして、奸賊の心をとげざる樣におさむると簡要なり。もし大國をあたへ權柄をあづけぬれば、必わざわひをおこすものなり。天子諸侯よく御用心ましますべきとなり。

躰充問曰。藥用としわきとはいづれかよくおはしまし候や。

師の曰。きようとしわきとは、財寶をもちゆる大過不及のあやまりにて、いづれもわろし。たゞ藥用にもしわくもなく、中庸適當の用にあたるをよしとす。上てんしより下庶人にいたるまで、財用の工夫一大事なり。つかふべき義理なきにもむざとつかひついやし、あたふべき道なきにもみだりにあたへ、すこしの襃美あるべき忠功に過分の知行を加恩し、家作諸道具以下なにゝつきても分過をこのみ、財寶をおしみたくわへざるを、世俗きようといへり。君子淸白廉直の行跡に似たるによつて、凡夫は見まがひてよしとほむるなり。又つかふべき道あるにもおしみてつかはず、あたふべき

躰充問曰。聖人賢人英雄奸雄の差別くはしく承度候。

師の曰。文武合一の明德十分にあきらかにして才德千万人にすぐれ、神明不測の妙用あるを聖人といふ、三皇、五帝、禹、湯、文、武、周公、孔子これなり。聖人に一等おとりたるを賢人と云。伊尹、傅說、太公、召公、顏子、曾子、子思、孟子、孔明、王陽明など是なり。德と餘の才は賢人に一等おとりぬれども、大將の才は賢人と午角なるを英雄といふ。管仲、樂毅、孫子、范蠡、張良など是なり。大將の才ばかり逞しく、よの才はみじかく、明德のくらきを奸雄といふ。項羽、韓信などこれなり。義經、正成などは日本にての英雄なるべし。聖人の才德は天地の神明とおなじき故に、神妙不測廣大周備言語道斷なり。賢人のさいとくも、大かた聖人の躰段そなはりぬれども、神妙不測のくらゐにいたらず。英雄は、大將のさいとくは賢人とおなじとなれども、餘の才と德とは賢人より一位おとりて、英氣のかどあるなり。聖人、賢人、英雄、この三人は、才德の高下大小ありといへども、いづれも君子なれば、治世にも亂世にも天下無双の重寶なる人なり。奸雄は敵を退治する一科の用にたつとは、賢人英雄にもおとらねども、明德くらく邪欲ふかき故、むほん逆心のうただひありて、味方のたのみあやうし。さて國おさまりてしをきなどまかせぬれば、國をみだり亂をおこすものなり。聖人はもろこしにならではうまれたまはず。賢人英雄もまた世にまれなれば、世俗の心くらく奸雄の才にまよひ、心の奸賊を察するとあたはず。英雄なりともてはやし、國をぬすまれ、天下をうばわれたまふ天子諸侯古來おほし。よく〳〵めのさやをはづして御用心あるべ

にかちぬれども、後途のつまりの國をとることとは、運のつよき方へかたつくものなり。むかし大唐に、蜀の國と魏の國とてんかをあらそふ事あり。蜀のくには後漢のすへにて、運命はよはかりしかども、諸葛孔明と云才德かねそなわりたる名大將あり。魏のくには運命はつよけれど、孔明に楯つくほどなる大將なし。しかるによつて度々のかつせんみな蜀の國方勝利を得て、天下に威勢をふるふといへども、元來蜀の運よはき故孔明の天年かずつきて、魏の大將仲達と對陣のうちに、孔明病死めされたり。孔明死後には、仲達にたてつくほどなる大將蜀の國方になく、そのうへ魏のくにの運つよき故、終に蜀をほろぼして魏のてんかとなりたり。又項羽高祖のかつせんのこと、あまねく人の知たる事なり。項羽高祖の運命午角なり。才は高祖おとりたまへども、高祖の大將韓信と云人、項羽と牛角なるゆへ、才も午角なり。力ははじめのあいだ項羽の方つよし。然る故に、はじめは度々のかつせんみな項羽のかちなり。しかれども、項羽は慓悍猾賊にして德なく、高祖は寛仁大度の德ある上に、張良と云ふ才德かねそなはりたる名將あるゆへに、項羽のちから次第におとろへ、終に項羽垓下に敗軍して烏江にて自害し、ついに高祖のてんかとなりたり。かくのごとくのためしをもつて、德才勢力運命の勝負差別をよく〳〵鍛錬工夫あるべし。

躰充曰。才德勢力運命みな午角に候はゞ。勝負いかゞに候はんや。

師の曰。それは相碁の勝負のごとし。かくのごとく成かつせんには、天時地利の勝負あり。嘿識心通すべし。

はだしくてなほりやすき病人に取かゝり、手柄をして藥代過分にとりその名たかきがごとし。太公望、張良、韓信、項羽、諸葛孔明、義經などのごとくがくもんをきはめ軍法の妙理をよく得心して、百戰百勝の功をたつるは、醫學よくきはめ四診の妙術を鍛錬して百病を療治し、起死回生の功をたてたる扁鵲、倉公、東垣、丹溪などごときの名醫のごとし。軍法をまなびても變通の機轉なく武用にぶき大將は、醫書をひろくまなびても變通の醫按にぶく療治はたらかざる醫者のごとし。むかしより今にいたるまで、扁鵲ほど醫學して療治はたらかざるはあるべし。やぶぐすしの療治の扁鵲のごとく起死回生のはたらきあるは一人もあるまじ。太公望の書をまなびて武功にぶきはありなん。軍法まなびざる大將のいくさをして太公望のごとく百戰百勝の功をたつるは、一人もあるべからず。よく〳〵觀察あるべし。

―

躰充曰。運命だにつよく候へば、いづれの敵にもかち申候はんか。

師の曰。合戰の勝負に、德のかち才のかち力のかち運のかちとて、四いろの差別あり。德と云は、文武合一の明德のことなり。才とは、武略かしこく人數を自由自在にとりまはし、敵の情をよくさとり、九天の上にうごき九地の下にかくれて、百戰百勝の功をたつる才能の事なり。ちからと云は、人數の勢力のことなり。運といふは、主將のうまれつきたる運命の事なり。あいてむかひのきりあひは、運のつよき方かつものなり。大軍の合戰は、德は才にかち、才はちからにかち、力は運にかつなり。才德午角なれば、運のつよきかたかつべし。合戰のちからは、才德勢力のつよきが運

とのちからにて楯をも介をもうちぬきて人をころすがごとし。また敵のさせる高名は、碁象棋の勝負にて考へしるべし。下手におひてはかちてざは一だん見事なれども、上手におひては見ぐるしくまくるがごとし。大かた合戰の勝負かくのごとし。大唐の名大將は、かぞふるにいとまなきほど數おほけれども、あまねく人のしりてとりさたするは、太公望、張良、韓信、項羽、諸葛孔明などなり。此五人の衆みなわかき時しあわせあしく、いやしきすぎわひをいとなみ苦勞めさるゝうちに、紙のうへにてがくもんめされたるまゝにて、陣かずの功なかりしかども、時におひてのち陣はじめより勝利を得て、末代に手本とする比類なき名大將なり。もろこしの名大將は皆かくのごとし。日本にても源義經公は、幼少のとき鞍馬にて軍法をまなびたまひたるまゝにて、陣かずの功なけれども、木曾殿または平家の一族と度々のかつせんみな勝利を得、日本にての比類なき名大將なり。かくのごとくなる倭漢のふるきためしをよく／＼かんがへて、誠の道理をあきらむべし。また一つのたとへあり。大將はくすしなり。敵は病なり。士卒は藥味なり。備の法は藥方なり。覘覺用間の武略は四診の醫術なり。奇正のそなへ敵によつて轉化するは、攻補の藥方やまひによつてほどこすがごとし。軍法をすこしもしらざる大將は、醫道をすこしもしらぬものが療治するがごとし。あやうきことなるべし。陣かずの功にて備のたてやうかつせんの手だてをすこし見ならいたる大將は、藥方すこしならひおぼえ病功のいりたるやぶぐすしのごとし。軍法のがくもんなき大將運命のいきおひつよく、よはき敵ばかりにおひて勝利を得國をとり威をふるふは、しあはせよきやぶぐすし見かけはな

師の曰。それもかたむきなる評判にて候。もとより變通の機轉なく、法になづむものは、まなびてもならはぬ人におなじかるべし。學びてさへぶてぎはならば、習はぬ時はなをもつてなるべし。たとへば手習をするがごとし。十人に九人までは、てならひして文のよみかき自由にせざるはなし。あいだに一人無器用にて無達者なるあり。そのごとく軍法をならふに、手すじよく極意をきはめたる師匠によくまなびて、得心熟し手にいるならば、十人に九人は軍のまはし達者なるべし。しかるに其器にあたらぬものは、ならひても益なかるべし。九人をすて一人を證據とする評判者は、すなはちならひても益なき人と一對の人なり。軍法をならはずしても、本心の武德感通して、暗にしあつる人あり。ましてその上にぐんばうをまなび、用武の神妙を得心あらば、鬼にかなさいぼうといへる諺のごとし。もろこしにても日本にても、名將とひゞくほどの人に、軍法まなびざるはなし。陣かずの功者ばかりにては、大軍を自由自在にとりまはし、武畧をめぐらし、大敵强敵にあひて百戰百勝の功をたつる事、中〳〵およばぬことなり。大將のぐんばうをしらざるは、闇の夜に灯なくてふみなれぬ道をゆくがごとし。軍法をしらずしても、仕合よくて敵にかち國をとり威をふるふ人、あいだにあり。これは運命のちからと敵のさせる功名なり。かくのごとくなる人を見て何のぎんみもなく、軍法はしらでもくるしからずなどおもへるは、株をまもるなるべし。運命のちからつよければ、わけもなき暗將にても威勢をふるふは、たとへば矢はかれたる竹にてとぶものにてはなけれども、射手のちからにて三町も四町もとび、玉は鉛にて人をころすものにてはなけれども、火と藥

おしゆるにことならず。君子は人の惡をば成たまはぬによつて、其惡心をいましめ本心をとりたてたくおぼしめして、禮をばまなびたるが軍法はしらずとこたへ給ふなり。夫俎豆の事は禮法なり。禮法の大目五つあり、吉禮、凶禮、軍禮、賓禮、嘉禮、これなり。此うちの軍禮すなはち軍法なり。すでに禮法をまなびたりとのたまふ時は、軍法をよくしろしめすことは、いはずして明白なり。俎豆の事と軍旅の事とを相對してかくのたまふは、仁を本とする軍法をばまなびたれども、殺伐をもつぱらとつとめて本なき軍旅の事は、盜賊のわざなれば、いまだまなびぬとのたふ心なり。聖人は寛裕温柔にして、ことば迫切ならざる故に、凡耳にはきゝわきまへざるものなり。靈公この聖言をきゝしりて、禮をとひ道をまなび、邪心をひるがへし、明德をあきらかにしてのち軍法をとはれ候はゞ、必定千聖心傳の軍法の秘妙をつたへ給ふべけれども、聞しらざるによつてそのあけの日さらせたまふなり。明德十分にあきらかにして、天地とその德をあはせ、日月と其明をあはせ、文武かねそなはりたる人を、聖人と云。孔子はもとより聖人にてましませば、文武かねそなわりたまふ事は、云におよばざることなり。將鑑篇曰。孔子用兵。萬世之師也。又曰。孔子夾谷之師。堂々正々。依然五帝三王之風。かくのごとくの格言をよく玩味して、孔子の神武軍法の秘妙を考へしるべし。

躰充問曰。紙の上にて軍法をならひたる分にては、鞍懸のけいことやらん用にたち申まじく候。たゞさい〳〵軍になれたる功者にましたる事はあるまじきと存候。いかゞ。

や。むほんにんをも武篇者なりとほむる風俗、あさましくなげかし。曾子曰。戰陣無レ勇。非レ孝也。この賢範のこゝろは、恩にむくひ義理をたつるが、孝德の感通なり。君のおんは親のおんにひとしき廣大なる恩德なり。忠臣はかならず孝子の門よりいづるものなれば、孝德あきらかなるものは、必ず戰陣におゐて武篇をはげみ、武功をたつるものなり。もしつね〲孝行忠節のふりありても、戰陣におゐてぶへんのはげみなきは、眞實の孝行にあらずと、いましめはげます義なり。程子武學制に孝經を添いれめされたり。此こゝろは恩をむくひ義理をたつることをしらざるものは、生れつきけなげにても主君の用に立がたし。却て味方のわざわひにもなるものなり。しかるによつて孝經をおしへ、恩にむくい義理をたつる本心をあきらかにさせ、血氣の勇を化して仁義の勇となすべきためなり。よく〲躰認して孝行の端的を得心あるべし。

躰充問曰。衞靈公問二陣於孔子一。孔子對曰。俎豆之事則嘗聞レ之矣。軍旅之事未二之學一也。明日遂行と論語におはしまし候へば、孔子は軍法をばしろしめさずと存候はいかゞ。

師の曰。それは以の外おほきなる心得そこなひなり。何もといひながら、就中軍をおこし武をもちふるには、心根と時が大事にて候。仁義の心を根として順應の時にかなひて用ゆるを仁義の師と云て、正眞の軍法武篇なり。邪心欲心を本として順應の時にそむきてもちふる武篇は、强剛暴逆の師といひて、盜賊おひはぎの類なり。しかるに靈公無道にして戰伐をこのみ、强剛暴逆のいくさをたくまむくせんために、陣をとはれたり。かくのごとくの人に軍法をおしへたまふは、ぬす人に道を

躰充曰。十三經も書かずおほく候て、凡夫の分にて皆までまなび候こと、およびがたくおぼへ候。そのうちにて一二卷まなび候て。大綱の得心なりやすき書はおはしまさず候や。

師の曰。本來易經一部をおしひろめたる十三經なれば、易經をよくまなびたるがよろし。しかれども易經は簡奥玄妙にして、凡夫のとりいりなりがたきによつて、孝經、大學、中庸を、心にて心をよみ、よくまなびぬれば、大綱の得心なりやすし。三書をまなびて餘力あるものは、其力とひまにしたがひて語孟をまなぶべし。さてまた餘力あるものは、十三經をみなまなびたるよし。十三經をみなまなび候はねばならぬとおもへば、退屈して却ておこたるものなり。また三書の外はいらぬものなりとおもへば、せばくかたづまりて、明德活潑々地の妙用、かえつて枯滯のわづらいあるものなり。たゞ三書をまなことさだめ、其餘の書は面々のちから次第になまぶと得心して、いかにも志をかたくたて、心學をわが所作とおもひさだめ、忠信を主とし、行住坐臥の時に習ひ、そのしるしをもとめ、いそがず、心もちをひろくゆるやかにして懈怠なければ、必ずさとりを開くべし。そのおそきとはやきは、生れつきの明暗習の淺深によるべし。

躰充曰。孝經、大學、中庸には、武篇のおしへも御座候や。

師の曰。三經の中に孝行を說忠節を說勇强を說給ふところ、正眞の武篇の敎なり。されば孝行忠節のためにかせぎはたらく勇を、武篇とはなづけたり。孝行忠節にそむきたるはたらきのけなげは、むほん人または盜と云ものなり。此ことはりは知やすきことなれども、わきまへたる人まれなるに

心に書物の本意をがてんして、身のおこなひ心もちの鏡となすことは、中〳〵今時の俗儒のおよばぬところなり。文字を目に見おぼゆることはならざれども、聖人の書のほんいをよく得心してわが心の鏡とするを、心にて心をよむと云て、眞實の讀書なり。心の會得なく只目にて文字を見おぼゆるばかりなるをは、眼にて文字をよむと云て、眞實の讀書にはあらず。我まなこにて書物をよむこととならざれども聖經賢傳をふかく信仰して、よみおぼへたる人に講釋させ、その本意をよく得心して、我心もち身のおこなひのかゝみとするは、俗學の書物をよみぬるより一きはまさりたる書物よみなれば、賤の男しづのめも、書物をよまずしてよむにて候。今時はやる俗學は、書物をよみてよまぬなり。、かやうの極意よく〳〵躰認あるべし。

躰充云。もろこしよりわたりたる書物さいげんなし。かたはし皆よまでかなはぬことにて候や。

師の曰。それはおほきなる心得そこなひなり。よまでかなはぬといふ書物は、十三經のことなり。十三經のとりいりのはしごになるべき名儒の書、あるいは七書などの外の書物は、よみて益なし。然るをつとめよみぬるは、目たるく心つかるゝあだごとなりと思ふべし。史書は古今の事變を考へ、禍善禍淫の印證とするものなれば、餘力のなぐさみによむものなりと知べし。

躰充曰。十三經はなに〳〵にて候や。

師の曰。孝經、論語、孟子、周易、尙書、周禮、儀禮、詩經、禮記、左傳、穀梁傳、公羊傳、爾雅、以上十三部を十三經とさだめたり。

釋を聞申ことはむづかしきに、いらぬ事かとぞんじ候。

師の曰。大むかしの文字なき代には書物なきによつて、只聖人の言行を手本として學問をつとめたり。伏犧易書をつくりたまひ、文字はじまりてよりのちは、書物をよみその本意を講明し、わが心のかゞみとしてがくもんをつとむるなり。次第に書物おほくなりて、孔子の時には六經みなそなはりたり。孔門のおしへ、文と行と忠と信との四なり。文は六經の文なり。行は性にしたがふ道のおこなひなり。忠信は自滿の心根をたちすてゝ誠の道を求め、明德をあきらかにする工夫なり。此四に[illegible]鑑の差別あり。忠信は根本なり。行は幹梢なり。文は忠信と行との鑑なり。六經の文をよみ、その本意を講明してかゞみとさだめ、根本幹梢の工夫をよくつとめて、明德の寶珠をみがくものなり。聖人のまし〳〵て直におしへたまふにさへ、かくのごとし。まして末代聖賢のましまさぬ時に、鑑とさだむる聖經賢傳をすてゝ講せず、くらくまよひたる心まかせにて、學問したるがよきなどいへるは、燈をすてゝ暗室に物をたづぬるごとし。

躰充曰。上天子より下庶人にいたるまで、皆學問なさではかなはぬとうけたまわり候。愚痴不肖の賤の男賤の女の書をよみ申ことのならざるものはいかゞ。

師の曰。むかし聖人の御代には、閭巷とて家二十五間ある小里にも學校ありて、其里の奉行代官すなはち師匠となりて、耕作のひまに書物を講し道をおしゆるによつて、愚痴不肖のしづのお、しづのめにいたるまで、書物のほんいをよく得心するなり。文字をまなこにみしることはならざれども、

邪心が魔境畜生道へおちいる道すじなり、といましめおそるべきことなり。然るをにせのがくもんには、此滿心をかさむたよりはおほく、すつる工夫は心がけざれば、覺えず邪路にいる事、おきらめやすし。

躰充曰。魔境へおち入とは、いかやうなるを申候や。

師の曰。あるひは贋のがくもんにふけり、或は學問せざれども暗處に魔を來しぬれば、自滿の心根かたくなり枝葉しげりて異風になり、人をば生るむしともおもはず、天下にわれをこすべきものなしと、人もゆるさぬ高滿をはなにあて、親おやがたの愚痴なるをさげしみおかしくおもひ、主君をそしり朋友をあざけりて、孝悌忠信の生道をさまたげ、邪魔に相通じ惡魔と作法をあはするを、魔境におちいると云ふなり。うまれつき利根無欲けなげなる人　此やまひおほし。

躰充曰。にせの學問をする人に、せけんのまじはりをむづかしがり、閑居をこのみ、或は心氣やみなどのごとく、引こもりなどするものあるは、何としたることにて候や。

師の曰。それがすなはち魔境におち入たるにて候。高滿の魔心ふかきゆへに、本來非もなきせけんを非にみて、おやのする事も兄弟のする事も、主君のあてがひも朋友のなすわざも、皆わけもなき妄作なりと得心するによつて、右を見るも左を見るも、皆おのれが心にかなはぬ事ばかりなる故に、世けんの交をいとひ、ひとり居ることをこのむと知べし。

躰充問曰。正眞の學問は書物をよまずしてもなるものなりと承候へば、おぼえにくき書物をよみ講

やうに存候はいかゞ。
師の曰。それはにせのがくもんをすきて、心たて行儀むさとなる人あるを見て、さやうのあやまりたるとりさたをなせり。それはたとへば家のやけたるを見て、火はよきものなれども、すこしもちいたるがよし、おほくはいらざるものなりといふがごとし。正眞の學問は、食物をにる火燈のごとくなれば、すこしにては用に立がたし。にせの學問は家をやく火のごとくなれば、少にてもわざはひになるものなり。贋のがくもんをしてあしくなる人を見て、正眞のがくもんをきらふは、家をやく火をみて食物を烹火ともしびをきらふにことならず。此譬にてよく〳〵得心あるべし。
躰充曰。學問の名はひとつにて、さやうにおほちがひの御座候仔細はいかに。
師の曰。正眞のがくもんは、私をすて義理をもつぱらとし、自滿の心なきやうにたしなむを、工夫のまなこととし、親には孝行をつくし、主君に忠節をいたし、兄弟のあいだは悌惠をきはめ、友だちのまじはりはいつわりなくたのもしく、五典を第一のつとめとする故に、おほくしてよくとり入ほど、心だて行儀よくなりゆけり。うはのそらにすこしまなびてとり入なければ、用にたちがたし。にせの學問は、博學のほまれを專とし、まされる人をねたみ、おのれが名をたかくせんとのみ、高滿の心をまなことし、孝行にも忠節にも心がけず、只ひたすらに記誦詞章の藝ばかりをつとむる故に、おほくするほど心だて行儀あしくなれり。聖賢より下の生れつきに高滿の邪心なき人はなし。この自滿の天下の惡逆無道をなし、或はきちがひ或は異相になる人、みな此滿心のなすわざなり。この自滿の

るも、運命の生れつきにして、わがちからのなすところにあらず。仕合あしく貧賤になるも、運命のうまれつきにして、親の咎にもあらず。人のなすわざにもあらず。もとより天道のあやまり給ふところにもあらず。また藝あるも藝なきも、ぬるきみかけなるもいかつなる見かけなるも、武篇するものにてはなく、只心のけなげが武篇するにて候へども、心まよひてくらき故に、藝あるものが武篇をすれば、藝が武篇するとおもひ、藝なき者が武篇をすれば、無藝文盲が武篇するとおもひ、見かけぬるきものが武篇すれば、ぬるきが武篇するとおもひ、見かけいかつなる者が武篇すれば、いかつが武篇するとおもひて、とりさた〳〵なり。株のうさぎをとらざることは、知やすきことはりなれば、誰もしりてまよはず。富貴貧賤勇怯の道理は、わきまへがたきことはりなるによつて、隨分の歷々まよふばかりなり。しかる故に知やすきことを寓言にして、辨へがたきまよひをいましめあきらめたり。大唐の諸士には、無藝文盲なるもの百人に一人もまれなり。しかる故に、大功をたつる大將軍武篇つよきさぶらい、みな藝能あり。日本の諸士には無藝文盲なるものおほし。しかる故に、武篇つよき士おほかたは文學藝能なし。また藝能にて身をたつる人は、武篇のいひたてなきによつて、藝をいひたてとし、物よみ坊主衆は出家ながそでのまねをして、武道はその所作にあらずともてなす風俗なり。かくのごとくなる風俗を見ならふばかりにて、もろこしの事をしらざれば、無藝文盲が武篇すると株をまもるとりさた、むべなりとも云べきにや。

躰充問曰。學問はよきものなり。しかれどもおほくはいらざることゝ云人おほし。是はきこえたる

かにし身をおさむる思案工夫ある人は一文不通にてもがくもんする人なりといふも、學問の本意をあきらかにし、にせのがくもんをしりぞけんための假説なり。もし眞實の格言なりと認て、氣習の汚れある心をもつて、心を明かにし身をおさむる工夫をなして、聖學なりと心得なんは、千万里のあやまりなり。心をたゞしうし身をおさめ、文武兼備のこゝろざしあらん士は、たとひ書物をよまずとも、儒門の先覺にしたがひ、本心の端的を明辨して、氣習のけがれをあらひて、工夫のまなこをひらくべし。

躰充曰。株を守るとのたまふは、なにたることにて候や。

師の云。道理の眞實をしらず、うはつらはなのさきばかりの目論、おろかにあさましきおもひ入を、株をまもると寓言のたとへなり。むかし山かつ山田をうちていたる所へ、峯より兎ひとつはしりくだり、かの山がつのいたるあたりの木のかぶにはなをつきて死したり。彼山がつこれを見ておもふやうは、さても稀代不思議なることかな、此木のかぶは兎とりの逸物なりと心得て、かの兎をとりてかへり。それより隙のおり〳〵には、かの木のかぶのもとにゆきて、木のかぶのとりたる兎をひろはんと、終日まもりたるとなん。此山がつのまよひに似たること世間におほきによつて、寓言して凡夫のまよひをわらひはぢしめたり。就中これに似たる大きなる迷は、仕合よく富貴になりぬれば、我智惠才覺にてかくのごとしとおもひ、又しあはせあしく貧賤になりては、わがわざとはおもはずして、親をかこち人をとがめ天をうらむること、人ごとの迷なり。しあはせよく富貴にな

となく、毛頭おどろきおそるゝ心なく、必ず十分無類のけなげあり、明徳あきらかになけれども、生れつきて勇なるを勇者と云、この勇者ももとより死をおそれず、物におびへおどろかざることは仁者の勇に似たれども、人欲のまよひふかき故に、明德の良知くらければ、不義無道のはたらき畜生にひとしくて、天德の仁をうしなふものなり。うまれつき勇あるものは、正眞の儒學をつとめて、其勇を仁義の勇となし、生れつき勇なきものも、又正眞の儒學をつとめて、本心に具有したる仁義の勇をあきらかにせよと敎たまふ義なり。此等の聖謨をよく〳〵體認して、武篇をたしなまんとおもふ士は、志しあるべき事なり。本來軍法軍禮武篇のたしなみ諸士の作法のおきて、みな儒道の一色にして、聖人のさだめ給ふ天理なれば、さぶらいたるものが儒道をそしり、儒學をするは士のわざならずなどいへるは、まことに無下に無案内なることとなれば、其はぢをしるべし。

躰充曰。心を明かにし身を修むる思案工夫ある人は、一文不通にても學問する人なりと被ㇾ仰候へば、論語よまずの論語よみと申ならはす世話も、道理にかなひたる言葉にて候や。

師の曰。それも心得やう大事なり。論語よまずの論語よみと云は、聖人の事なり。孔子はろんごをよみたまはねども、論語一部始終こと〴〵く孔子の言行なれば、正眞の論語よまずの論語よみは孔子なり。聖人より下ざまのうまれつきには、必ず氣習の偏あるによつて、書をよまずして道德の室にいることはなりがたければ、大賢より下つかたなる人をかく取さたすべき理なけれども、世間に論語よみの論語よまずがたくさんなる故に、それをいましめんための假說なりと心得べし。心を明

のたとへあまりけはしくきこえぬれども、今時分此まよひふかく、大かたのたとへにては、心盲のねぶりさめがたき故に、聲をはげましてよびさますなり。前かども論ずるごとく、いかやうなるものが武篇よき、いかやうなるものが武篇あしきなどいへるは、皆得がたのひがこと、あるひは株をまもる愚痴よりおこるまよひなり。文藝ある人に、義經公辨慶などのごとく武篇よきもあり。又臆病なるもあるべし。文盲なる人に臆病なるもあるべし。またけなげなるもありなん。只勇なるものが武篇よきと知べし。むかし今のためしをよく考へて、學問が武篇のさまたげになるといへるきたなき心根を察すべし。まへかどにも論ずるごとく、正眞のがくもんをよくつとめてさとりぬれば、仁義の勇あきらかになりて、必ぶへんよくなるなり。それも師匠と學問のしやうとによく吟味あるべきことなり。中庸曰。人一能レ之。己百レ之。人十能レ之。己千レ之。果能二此道一矣。雖レ愚必明。雖レ柔必强。この聖謨の意は篤く天地の神道に志し明德をあきらかにする工夫をはげましつとめおこなへば、必さとりをひらき、うまれつき愚痴にして迷ひふかきものも、本心の良知あきらかになれり、生れつきぬるくにかたなる人も、かならず本心仁義の勇あきらかになりて、武篇よきとの義なり。論語曰。仁者必有レ勇。勇者不二必有一レ仁と。この聖謨のこゝろは、仁道をよくまなびて仁者の位にいたりぬれば、人欲きよくつきて天理流行し、なにほどすさまじき妖魔あるひは虎狼などにあひても、常の人の狗猫などに逢たるごとくに、心にをどろきおそるゝ事いさゝかなし。もとより百万人の敵にあひ、劍の中あるひは猛火のうちへとび入とても、平生の心もちにてすこしもちがふこ

君子なりとほめたらんは、必ずえみをふくみてよろこぶべし。然るときはがくもんはせぬがよしといへるは其人の本意にあらず。只がくもんの本然をしらず。書物をよむばかりをがくもんとわきまへたるあやまりなり。さて又學問はさぶらひのしわざにあらずといへるは、一しほ愚なる評判まよひの中のまよひなり。子細は心あきらかに行儀たゞしく文武かねそなはるやうに思按工夫するを、正眞のがくもんとす。かくのごとく心あきらかに行儀たゞしく文武かねそなはる人を、よきさぶらいとゆるす事は、あまねく人のわきまへたることなれば、學問はさぶらいのしわざにしてなさでかなはぬこと、いはずして明白なり。さてまたがくもんする人は、ぬるくて武用の役にたちがたかるべきなどいへるは、がくもんのほんいを辨へざるまよひのみにあらず、文盲なる諸士他人の文藝あるをそねみ、おのれが文盲なる耻をかくさんとの術ざたなるべし。誠に分もなきひがことなり。たとひ正眞のがくもんに志しなく、徒に文藝ばかりをならふと云とも、武篇のさわりになるべき理なし。その仔細は、源義經公辨慶、君臣ともに文藝その時分の諸士にすぐれたまひぬれども、終に一度もおくれをとりたまはず、末代にいたるまで、犬うつ童も武篇のためしには、義經公辨慶と聞つたへていひならはせり。文盲に御自滿のさぶらひ衆、せめて義經公辨慶などの爪のさき程なりとも、眞似をめされ候はゞ、其譽あるべし。たゞもんまう一偏の御自滿にては、よき士とは云がたし。もんまうなるものがかならず武篇よくば、田をうち草をかる田夫野人、薪とる山がつ、路頭にさすらふ乞食など、文盲第一のものどもなり。かやうの者どももみなよき武篇者にてありなんや。かやう

翁問答下卷之本

躰充問曰。世俗のとりさたに、學問は物よみ坊主衆あるひは出家などのわざにして、士のしわざにあらず、がくもんすぎたる人はぬるくて武用の役に立がたしなど云て、士のうちにがくもんする人あれば、却てそしりぬ。かやうのあやまりはいづれのまよひよりをこりたることにておはしまし候や。

師の曰。それは贋のがくもんばかり時めきて風俗あしく、衆生の心汚濁にそまりて、書物をよむばかりをがくもんと思ふよりまよひたる評判なり。それ學問は、心のけがれをきよめ身のおこなひをよくするを本實とす。文字なき大むかしにはもとよりよむべき書物なければ、只聖人の言行を手本としてがくもんせしなり。代のすへになりて學問の本實をとりうしなはんことをうれひて、物の本にしるしてがくもんの鏡とさだめしよりこのかた、物のほんをよむをがくもんの初門とするなり。しかる故に、其心をいさぎよく行跡をたゞしくする思案工夫ある人は、物の本をよまずして一文不通なりとも、學問する人なり。その心をあきらかにし身をおさむる思案工夫なき人は、四書五經をよるひる手をはなさずよむと云とも、學問する人にあらず。かくのごとく眞實の道理をよくわきまへぬれば、さやうのあやまりはかたはらいたきこととなるべし。心きたなくけがれて、身のおこなひよこしまなるをば、凡夫の口にも犬畜生など云ていやしみぬれば、正眞のがくもんに志なき人はまことの人にあらざれば、其はぢを知べし。學問はせぬがよしといへる人にむかひて、わどのは犬畜生のごとき悪人なりとそしらば、必さしちがふべくいかりをなすべし。又心いさぎよく行儀たゞしき

悪におちいりて、至誠無息の神理をうしなひ、万世不朽の悪名をながしぬれば、六極の報應さだかならずや。また顔子は簞瓢陋巷不幸短命なれども、五福の攸好徳をうけ、眞樂の介福めでたく、長在不滅の神理あきらかにして、万世きはまりなく、公爵の追贈四配の祭祀をうけたまひぬれば、五福の嚮命あきらかならずや。運命のいきをひによつて一たん見かけは福善禍淫のつねにたがふやうなれども、畢竟しんじつの端的終には天命本然のつねにたちかへるものなり。是を人衆則勝天、天定亦能勝人といふなり。そのうへ五福のうちの攸好徳だにうけぬればのこりの四つは其うちにそなはれり。明徳すでにあきらかなれば、至誠無息長在不滅なり。これ無上のながいきなり。大富貴を得て小富貴をわすれぬれば、これまた無上の富貴なり。一朝のうれひ心のくるしびとならざれば心上の康寧は事上のかうねいにまさりたり。考終命の事は徳あるうへは云にをよばず。是にて福善の極意を得心すべし。六極のうちにて悪弱の凶徳をうけぬれば、のこり四つはみなそのうちにそなはれり。至誠無息の神理をうしなひぬれば、たとひ幸にしてまぬがれながいきしても凶短折にことならず。欲にいたゞきなく、たゞむさぶりおしむばかりなれば、財寳ありても心は貧者なり。心くらくまよひぬれば、目にふれ耳にきくことみなくるしびとなれば、無病にてもかたちやすからず。欲心のくるしみつねにたらざれば、憂なくても心やすからず。是にて禍淫の極意を得心すべし。五福の第四に攸好徳をとき、六極の終に悪弱をときたまふ。極意よく〳〵體察すべし。

なをあつし。つねの人にあたるあつささむさも、かの病人にあたる暑さ寒さもおなじとなれども、暑寒は氣に屬して虚なり。悪寒發熱のやまひは形につきて實なるゆへに、虚たる暑寒の氣實なる病邪にかたざるがごとし。此たとへにてよく〳〵躰認あるべし。むかしもろこしに、盜跖とてもろこし一番の盜賊あり。あまりにあくぎやく無道がこうじて人の鱠をくひぬれども、無病息災にながいきしてゝとよりぬすみとれば財寶たくさんにて、難なく暮したり。また其ころ孔子の御弟子に顏子と申人あり。三千人の御弟子のうちにて拔群に無類なる大賢人なれども、簞瓢陋巷不幸短命なり。此二つのうたがひにまよひて、古來いろ〳〵の憶說どもおほく候。運命の勢によつて間にかくのごとくの大ちがひあるを見て、萬古不易の天道にうたがひをなし、福善禍淫のさたも信仰しがたしなど云るは、六月の土用にかさねぎする病人をみて夏のあつきといふはいつはりなりといひ、極月の大寒にはだぬぎてもあつがる病人を見て冬のさむきと云はまことならずと云がごとし。いとあさましきまよひなり。この寒暑の道理はあさくて知やすきゆへにまよふものなし。すこしもちがはぬことはりなれども、福善禍淫のことはりはふかくしてしりがたきによつて、まよふなり。知やすきところにてよく〳〵躰認觀念して、ふかき神理をさとるべし。かの病人悪寒發熱の病勢おとろへ本服しぬれば、つねの人のごとくにあつささむさをおぼゆるものなり。そのごとく、運命のいきをひおとろへて其分數きはまりぬれば、かならず悪人は六極のがれがたく、善人は五福をうくるものなり。しかるゆへに、盜跖は無病息災に難なくながいきしてくらしぬるやうなれども、おのれと六極の剛

をいふ。四に曰攸好德。是は明德あきらかにして、天理の眞樂つねに泰然とあるを云。すなはち孔顏のたのしみこれなり。五に曰考終命。これは天道のさだめたまふいのちのかずをみなつくして、生理にしたがひて死するを云。已上この五つを五福と云なり。さて又禍淫のわざはひを六極といひて六つあり。天道この六極をもて惡人をこらしめ給ふ。一に曰凶短折。凶はあくぎやく無道にして犬死するを云。短折は天道のさだめたまふいのちのかずよりまへかどに死するをいふ。二に曰疾。三に曰憂。四に曰貧。五に曰惡。これは自暴とて、うまれつき剛强にして欲ふかく、仁孝の儒道をそしり罔し、或は惡逆をこのみおこなふを云。六に曰弱。これは自棄とて生れつき柔弱にして仁孝の儒道をよしとは思へども、おこなふ事あたはず、或は臆病にて欲ふかく、不義無道のふるまひのみ、畜生にもをとれる有樣なる柔惡の人を云。以上此六つを六極と云なり。この五福六極のさたは書經の洪範にみえたり。天道この五福六極をもて善惡をたゞし給ふ事、春はあたゝかに夏はあつく秋はすゞしく冬はさむきがごとく、むかしも今も末代もいつもかはらぬ妙理なり。しかるに間に善人も五福をうけず、惡人も六極をのがるゝことあるは、天の時は地の利にしかずといひて、虚は實にかたぬものなれば、五福六極の命は氣に屬して虚なり。胎育のはじめにうけたる運命は、形に屬して實なるゆへに、虚なる福極かたずして一旦かくのごとし。たとへば六月の土用はきわめて熱く、かたびらさへ身にかゝらねども、惡寒のやまひある人は、わたいりをかさねきても猶さむし。また極月の大寒には、きる物をかさねきて火にあたりてもあつからぬに、大發熱の病人ははだぬぎても

の、みな天然一定の分數あり。しかるゆへに、人間一生涯のあひだ、あふところの境界、吉凶禍福一飲一食にいたるまで、こと〴〵く命にあらざるはなし。みなこれ天道の流行なりといへども、此命に本末正變あり。正變に虛實の勝負あり。夫にんげんの貧富貴賤壽夭の分數は、みな資生のはじめ胎育十箇月のあひだにさだまるところなり。その胎育のあひだ歲月日時にをの〳〵陰陽五行ありて、生長化收藏王相死囚老の氣絪縕雜揉して造化するによつて、運命ひとしからず。そのうへにまた善惡報應の感化までいりまじるゆへに、運命のよきところばかりそろへて生れつくことは、ならぬいきをひにて候。然るによつて、人間世のありさま、德ありて才なきもあり、才ありてとくなきもあり、才德ありて貧賤なるもあり、富貴にして才德なきもあり、貧賤にしてうれいなきあり、富貴にして憂おほきあり、わかきとき仕合よくてをひておとろふるあり、若き時ひんせんにして老て富貴になるあり、いやしき位にうまれて貴人のくらゐに經あがるあり、貴きくらゐに生れていやしく成さがるあり、貧賤にしていのちながきあり、富貴にしていのちみじかきあり、まことにいろ〳〵さま〴〵のありさま、中〳〵かたりつくしがたし。此運命は、かたちに生れつくによつて實なり。五福六極は、その形躰成長してのちそのこゝろもち身のおこなひの善惡によつて嚮威したまふ命なれば、氣の變化にて虛なり。まづ此虛實の理をよく躰認あるべし。さて福善のさいはひを五福といひて五つあり。天道この五福をもつて善人にあたへたまふ。一曰壽。これはいのちのながきをいふ。二に曰富。是は財寶の澤山なるを云。三に曰康寧。これはうれひもなく疾もなくやすらかなる

の徒なり。愚痴不肖をそのまゝあくにんと云べきことはりなし。才あるも才なきも知あるも知なきも、形氣の邪欲におぼれ本心の眞知をうしなふものを、おしなべて惡人とは云なれば、たとひ才智藝能すぐれたりとも、邪欲ふかくして眞知くらきはあくにんなり。孔子曰。如有周公之才之美。使驕且吝。其餘不足觀也已。此聖謨にてよく躰認すべし。しかれども、せぞくは才智藝能だに達しぬれば、其心の邪正をばわきまへずして君子とゆるし、才智藝能に拙なければ小人とおとしめぬれば、愚不肖を惡人とおもへるあやまりもまたむべなりとも云べきにや。

躰充曰。易學とおほせられ候は、耆本卦など云うらなひの事にて御座候や。

師の曰。それも易學の一品にては候へども、たゞ今われらがいへるはその事にてはなく候。易經の神道をさとり、我身の受用となす事にて候、この易學は、孔子さへ韋編三絶と申つたへ候へば、よく／＼觀察の功をつまざれば、その皮膚の會得もなりがたく候。儒書の事は申におよばす。天地のあひだに、何にても易經の神理にもれたる事なし、又易理よりいでぬ事は一つもなく候。

躰充曰。天道は福善禍淫とて、善をなす人には福をあたへ、あくをなすものには禍をあたへたまふとうけたまはりをよび候に、善人も仕合あしく、あるひはわざはひにあふ事あり。惡人も或は仕合よく、かへつてさいはひをうるものおほく候は、なにたる道理にておはしまし候や。

師の曰。よきうたがひにて候。是も易理をよくしらざれば、わきまへがたき理にて候。天道流行して造化發育したまふ、その賦予の分數を命となづく。天地のあひだにみち／＼て。聲色貌象あるも

それにあやかりて根本の善をうしなひ惡をなすものなり。たとへば、くせなき馬をも下手がのり候へば、いろ〳〵くせのいでくるがごとし。むかし堯舜の御代には、聖人は天子のくらゐにのぼりたまふ。其つぎの大賢人は宰相となり、その次の賢人は諸侯となり、その次の君子は卿太夫士となり、愚痴不肖なるものは農工商の庶人となり、上てんしより下庶人にいたるまで、分々相應のくらゐに居て、それ〳〵の所作をつとめ、孝悌忠信五倫のみちにひたすらにちからをつくし、毛頭邪欲の惡念なく、すこしの不義をもおこなふとなくて、天下に一人もあくにんなし。堯舜の民は比屋可封といへるは此ことなり。根本は愚痴不肖の人も、あくにんにあらざれば、聖賢も愚不肖もみな善人なり。その善人のうちに精粗大小貴賤の差別あり。せいけんは善のうちの精にしてたつとく、愚不肖は善のうちの粗にしていやしきものなり。たとへば金も銀も銅もくろがねも、本來みなかねなれども、其うちに精粗貴賤の差別ありて、金銀はかねのうちの精にしてたつとく、銅鐵は金のうちの粗にしていやしきがごとし。かやうのたとへをよく躰認して、にんげんはみな善ばかりにして惡なき本來の面目をよく觀念すべし。

躰充曰。愚痴不肖もあくにんにあらずとおほせられ候は、信をとりがたくおはしまし候。左候はゞいかやうなるものを惡人とは申候はんや。

師の曰。聖賢のごとくに智恵のあきらかならざるを愚痴とす。せいけんのごとくに才能の達せざるを不肖とす。愚痴不肖といへども眞知眞能あり。その眞知眞能をうしなはざれば、愚痴不肖も善人

かたちの高下をさだめ、さて精粗の人物のおこなふところを天命の本然神理のかゝみにうつして、善惡のさたをきはむるなり。本來あくと云ものはなきものなれども、粗なるかたちの偏よりいできたるものなれば、惡を諸木の寄生にたとへたり。太虚のうちかたちあるほどのものに、精粗のわかちなきものはなし〲日と月と星は天の精なり。辰は天の粗なり。物を生ずる山と田畠は地の精なりはげやまと不毛の野原は地の粗なり。聖賢君子は人の精なり。愚痴不肖は人の粗なり。鸞鳳は鳥の精なり。とびからすは鳥の粗なり。麒麟は獸の精なり。きつねたぬきは獸の粗なり。芝蘭はくさの精なり。名もなき野草は草の粗なり、沈香栴檀は木の精なり。雜木は木の粗なり。惣じててんちばんぶつ、みな精はすくなく粗はおほきことはりにて候。人のかたちにてみるに、眼はかたちの精なれば、たゞふたつあり。毛髮はかたちの粗なれば、そのかずおほし。これにて精粗の多寡をおしあきらめらるべし。さていづれのものも、その物のうちにて精なるものは、その物のかなめとなり主たり。粗はその精にしたがふものなり。しかるによつて、にんげんの精をうけたる聖賢君子は、愚痴不肖の主君として、愚不肖をおさめて敎給ふ。粗をうけたる愚不肖は、聖賢君子の臣下として、聖賢の下知にしたがふ。天命の本然なり。本來君はすくなく、臣下はおほきものなれば、主君となるせいけんはすくなく、臣下となる愚不肖はおほきことはり、わきまへずして分明なり。精をうけたるせいけん君子は、氣きよく質たゞしきゆへに、をのづから根本の善をうしなはず。粗をうけたる愚不肖は、氣にごり質偏なるによつて、國のしをき道あれば根本の善をうしなはず。しをき無道なれば

り。人間にむまれて、盲目にてくらさんこと、最あさましくおしき事なるべし。

躰充問曰。つら〳〵人物のありさまをかんがへ見るに、よきものはすくなく、あしきものはおほし。よきものはそだちがたく、あしきものはそだちやすし。人間には賢人君子まれなり。たま〳〵あれども、或は不幸短命なり。愚痴不肖は世界にみち〳〵て澤山なり。盗賊などをばいづれの代にもさがしもとめてころせどもたらず、鳥には鳳凰はまれにして、鳶鴉は雲霞のごとし。獸には麒麟は世にまれにして、狐狸は其かずをしらず、草木には靈草名木はすくなくして、名もなき雜木野草は山野にみてり。天道は純粹至善なりとうけたまはりをよび候へば、よきものはおほくあしきものはすくなきはずにてこそ候へ。かへつてあしきもの丶たくさんなるは、何たる道理にて御座候や。

師の曰。よきふしんにて候。それは易學をよくきはめざれば、合點ゆきかぬるところにて候へども、大かたをかたり候はん。夫賢人君子鳳凰麒麟などを善とさだめ、愚痴不肖鳶鴉狐狸などを惡とさだめ、善惡の二字にてさたし、それをそのまゝ天道におしあてがふによつて、一しほうたがひまし候。先根本をよく考へ見て、さて枝葉をぎんみしたるがよく候。天道を根本として生れいでたる萬物なれば、天道は人物の大父母にして根本なり。人物はてんだうの子孫にして枝葉なり。根本の天道純粹至善なれば、そのえだ葉の人物もみな善にして惡なしと得心すべし。瓜づるに茄はならぬといへることわざのごとし。しかれども、其善にして惡なき枝葉のうちに、精粗の差別あり。其うちのすぐれたる極上を精と云、そのうちのくずを粗といふ。精粗の二字にて君子小人鳳凰鳶鴉などの

て理にくらきものを心盲となづけたり。盲目は青黃赤白黑の五色禽獸草木のかたちなど耳にはきくといへども、其のさだかなるいろかたちを見わけざれば、うたがひのはるゝ事なし。そのごとくかのまよひたる心盲は、仁義禮智信の五常天道神道運命生死などのことはり、ほゞ耳にはきくといへども、心にてその道理をしりあきらむることならざるゆへに、いづれの神理にもうたがひまよふのみなり。かの盲目稀代の目くすしにあひ、療治して兩眼つねのごとく見ひらきぬれば、今までうたがひありつる色かたち一々に見あきらめて、兎角のうたがひをたつべきところなし。そのごとく、心盲のぼんぶも稀代の明師にあひがくもんの功をつみて本心のまなこひらきぬれば、今までうたがひまよひたる五常天道神道運命生死のことはりこと〴〵く見ひらきて、白晝に黑白をわかつごとくなるを、さとりとなづけたり。悟のことはり言語道斷ぼんぶのおよびがたきところなれば、まづめくらのまなこをひらきたるところにたとへて、よく〳〵躰認すべし。大覺明悟の人は、現世のことは申すにをよばず、生前死後のことはり、天地のほかの道理まで、黑白のいろをわかつごとくあきらかに知たまふゆへに、孝悌忠信の神道をおこなひたまふこと、飢て食し渴してのむごとくにして、人のほむるをよろこばず、そしるをもうれひず、富貴にも淫せず、貧賤にもたのしみ、わざわひをもさけず、福をももとめず、生をもこのまず、死をもにくまず、たゞひたすらに仁義五常三才一貫の神道をおこなひたまふ事、水のひきゝへながれ盤針の南北をさすがごとし。かくさとりたる大人は、天地と其德をあはせ、日月とその明をあはせ、鬼神とその吉凶をあはせて、至誠無息な

師の曰。一躰にして名のかはりたるものにて候。たとへば大きなる鏡をなづくるに、そのあきらかなるところをもつていへば明鏡と云、おほきなるところをもていへば大鏡といふがごとし。德性のあきらかなるところにつゐて明德と號し、德性の外もなくうへもなく廣大無邊なるところにつゐて至德となづくるなり。至德の字に極善大達四字の意をふくめり。

躰充曰。よこめといふものいま時のはやり物にて候。なくてかなはぬものにて御座候や。

師の曰。よくおさまりたる代にはさのみいらざるものなり。風俗あしく人の心みだれたる代にはあるがよく候。その仔細は、よこめあれば人每に法度をおそれいましむる心ありて治道のたすけとなりぬべし。しかれども、よこめのいふことを聞入てむざとせはしくあらば、なきにおとるべし。よこめは下々の心をいましむるそなへなりと得心して、むざとよこめの云事を承引すべからず。惣じて君たる人は、大惡逆のほかはなに事もきかぬふりしらぬふりにて大やうなるを本とす。利根だてにてはいく〳〵しきは、國をうしなふ基と知べし。

躰充問曰。がくもんはさとらんためなり、さとらねばがくもんと云にたらざるよし、うけたまはりをよび候。さとりとはいかやうなる事にて御座候や。

師の曰。さとりのさたは言語道斷のことはりなれば、なか〳〵ことばにのべがたく候。その皮膚のもやうをすこしばかりたとへにてあかすべし。その〴〵われらごときのくらくまよひたる者の心に仁義の神理をしりわきまへざるは、盲目の色かたちを見わけざるがごとし。しかるゆへに、まよひ

自作の孽と云て、われとつくる禍なり。耕作をあしくしてとりみなきがごとし。人事のつとめにおこたりて天道次第よなどいへるは、以外なる僻言なり。これにてあるひは家をおこし國をひらきあるひは家をうしなひ國をほろぼす運命の端的をよく躰認すべし。かやうに論ずれば、しなおほくむづかしきやうに候へども、つゞまるところは、明德をあきらかにする一つにきはまれり。明德だにあきらかに候へば、時處位のふんべつ、人事のつとめ、運命のさだめ、みなかゞみのかげをうつすがごとし。

躰充曰。學問とまつりごとは各別なるものと存候へば、ひとつものにて御座候や。

師の曰。惣じて世けんに、がくもんにはづれたるものは、ひとつもなく候。正眞のがくもんあきらかならざるゆへに、いろ〳〵まよひたるうたがひあることにて候。がくもんは、明德をあきらかにするを、全躰根本とす。明德は天地有形のほかへ通じ、上もなく外もなく、神明不測なるものなれば、天下國家をおさむる政は、明德神通妙用の要領にて候。ゆへに、まつりごとは明德をあきらかにする學問、がくもんは天下國家をおさむる政なり。本來一にして二、二にして一なるものと心得べし。そのうへ、法度の箇條ばかりがまつりごとにてはなく候。天子諸侯の身におこなひたまふ一事、くちにのたまふ一言、みなしをきの根本なれば、まつりごとゝ學問と本來同一理なることをあきらかに得心すべし。

躰充問曰。至德と明德とはひとつにて御座候や。たゞしまたかくべつなるものにて御座候や。

しるが肝要なることをあきらむべし。耕作の時いたり、田に稻をうへ畠に菽をうへて、天時地利みなよくかなひ候ても、他人の田畠にうへつけぬれば、我用にたゝぬうへに、かへつてぬす人のとがめあるべし。これは時もところもよけれども、わがくらゐの分際になきことをするゆへなり。これにてがくもんも政も人位のぶんを知るが大事なることを躰認すべし。耕作時いたり、我田に稻をうへ我畠にまめをうへ、ところも時もくらゐもよくかなひても、かれたる苗をうへ碎けたる種をうへては、はへそだゝぬものなり。これは天時地利人位みなよくかなひても、苗と種に生理なきゆへなり。これにてがくもんも政も、苗と成種となる明德の生理あきらかならざれば、時と所と位とにかなひて、聖人の法をもちひても、益なきことを躰認すべし。時も所も位もよくかなひ、苗も種もよく候ても、糞をしくさをとる修理のしやう惡ければ、秋のとりみなきものなり。これは時所位苗いづれもよくても、人事のつとめたらざるゆへなり。これにて學問も政も人事のつとめをはげますを本とすることをわきまへしるべし。時もところも位もよくかなひ、苗も種もよく人事のつとめをよくはげましても、あるひは大旱にやけ、あるひは長雨にくさり、あるひは大風にそこね、あるひは虫くひて、秋のとりみなきこともあり。これは天災といひて、運命のなすところなり。ときところくらゐのよくかなふやうに分別し、人事のつとめをはげますは、みな人間のちからにてなすわざなるによつて、おしなへて人事と云。人事をよくつとめてわざわひにおふは、運命にして、人力のおよぶきはにあらざれば、天災と云なり。人事をつとめずしてわざわいにあふは、天災にはあらず。

法とて、事をさしてさだめぬものにて候。一偏にさだまりたるをば死法といひて、用にたゝぬものなり。法度にも心迹の差別あり。周禮などに記したる事は、聖人天時地利人情の至善をはかりてさだめ給まふ法度のあとなり。其あとのうちにそなはりたるところの本意を心と云。そのあとによつて立法の本意をよくさとり、當代の法度をさだむるかゞみとし、その事のあとになづまず、聖人の心によくかなふを、至善の活法とす。其こゝろをばわきまへずして、事のあとばかりを手本としてまねをするを、膠柱の死法と云て、おろかにして用にたゝず。それしをき法度は主君の明德をあきらかにして根本をさだめ、周禮などにしるしをきたる聖人の成法をかんがへてその本意をさとり、まつりごとのかゞみとし、時と所と位と三才相應の至善をよく分別して、万古不易の中庸をおこなふを眼とす。義理にて論じては合點ゆきがたければ、目のまへなることにたとへて躰認したるがよく候。しかるゆへに、禮記にしをきの仕様を耕作の事をかりて議論發明あれば、耕作にたとへて見たるがよく候。時とは天の時、春夏秋冬運命の否泰をいふなり。たとへばふゆ田をうち種をふせ、耕作のさほうをよくつとめても、用にたゝぬものなり。これは耕作のしやうあしきによつて用にたゝぬにてはなく候、たゞ時のちがひたるにて、勞して功なく候。これにて學問もまつりごとも運命氣數の時の宜をしるが第一なる事をあきらむべし。耕作の時いたりても、畠に稻をうへ田に豆を藝では、なにほど精にいれ糞をし修理をしても、そだゝぬものにて候。これは時もよく耕作のしやうもよけれども、ところのちがひたるにて用にたゝぬにて候。これにてがくもんもしをきも水土の地利を

ば、法度はなくてもおのづから人のこゝろよくなるものなり。まして法度をよくさだめそむくものをば、刑罰にてこらし、本も末もたゞしくしてよくおこなひぬれば、國とみさかへ長久にあるものなり、本をすてゝ末ばかりにておさむるを、法治といひてよろしからず。法治はかならず箇條あまたありてきびしきものなり。秦の始皇のしをきが法治の至極したるものなり。法治はきびしきほどみだるゝものなり。始皇の代をかゞみとしてみるべし。本來まつりごとは、かずすくなく時相應の至善にかなひおほやうなるを本とす。今時のやうにくらくまよひたる人の心をおさむるを、混水をすますとたとへたり。なにかといろふほど濁がますものなり。いろはずにしづめてをけば、そのごみをのづからしづみてうへよりすむがごとし。德治法治の分別、よく〳〵得心あるべし。德治は先我心を正くして、人の心をたゞしくするものなり。たとへば大工のすみがね、その躰ろくにしてものゝゆがみをなをすがごとし。法治は我心はたゞしからずして、人の心をたゞしくせんとするものなり。たとへば諺にいへるしやくぐし繩規なるべし。君の心あきらかなれば、ぎんみたゞしく法度道あるゆへに、末ながくかはらず。君の心くらければ、萬事ぶぎんみなるによつて、その法度さい〳〵あらためかはるものなり。

躰充曰。しをきのがくもんは、いかやうにしたるがよくおはしまし候や。またさだまりたるよき法度も御座候や。

師の曰。しをきの學問はすなはち儒學なり。眞儒にしたがひてまなびたるがよく候。よき法度は活

をさしつかふはたとへば磁石のはりをすふがごとし。火はかはけるにつき、水はうるおへるにながるゝことわりなれば、磁石のくろがねならではすはざるごとく、しゆくんの心とおなじき人ならではつかいたまはぬものなり。心のくらきしゆくんは、何ほどよきさぶらいをあつめおき・も、それをばもちひず、只君の心にひとしくくらきくせものばかりをさしつかひたまふものなり。しかるゆへによきさぶらいその家中にありても、なきにおなじ。主君の心あきらかなれば、その心によくかなひたるよき士ならではさしつかいたまはぬゆへに、くせものもよくにふけり悪をはぢて、いつとなくよくなるものなれば、あしきくせもの其家中にありても、なきにひとし。臣下のよきもあしきも國のみだるゝもおさまるも、畢竟主君のこゝろひとつにあり。まことにこゝろざしあるべき事にて候。

躰充問曰。法度はかずおほくきびしくしたるがよく御座候や。

師の曰。しをき法度の箇條はところによりときによりてさだむるものなれば、おほきがよきともすくなきがよきともさだむべからず。またきびしくしてよきこともあり、緩してよきこともあれば、きびしきがよしともゆるきがよしともさだむべからず。たゞ時とところとくらゐとに相おうしたる道理にしたがひたるがよく候。しをき法度にも本末あり。君のこゝろあきらかにして道をおこなひ、國中の手本かゞみとさだめたまふが、政の根本なり。法度の箇條はまつりごとの枝葉なり。君のこのむことをばその下〳〵みなまねをするものなれば、君の心あきらかに道をおこなひたまひぬれ

くろをのづからなくなり、眞實の德と才と功にちからをはげまし、正眞のちうせつをつくすものなり。これむかしのおきての眼なり。なにほどよきおきてありても、主君のこゝろくらければ、其おきて用にたゝぬ物にて候へば、君たる人はちおそるべき事なり。

體充問曰。臣下をばいかやうにつかいたるがよく御座候や。

師の曰。主君の臣下をさしつかふ本意は公明博愛の心をもとゝして、かりそめにも人をえらびすてず、賢智愚不肖その分々相應の用捨にわたくしなく、道德才智ある賢人をば高位にあげ、しをき萬事の談合ばしらとし、才德なき愚不肖にも、かならず得たることあるものなり。そのえたる所をよく見しり、ぶん〳〵相應のくらゐにおきてさしつかひぬれば、人間に用にたゝぬものはなきものにて候。つかひやうあしきによつて、よきものも用にたゝぬと心得べし。大工の家をたつる材木のつかひやうにて合點あるべし。また才智拔群の人にも、無得てなることかならずあるものなり。それも見分て、えぬことにはさしつかはぬがよろしく候。氣に入たる出頭人なれば、得たることをえざることのぎんみなく、また人もなげにさしつかひ、あひくちあしければ、その人のえたることにもさしつかはざるは、みなひがことにて候。君のまへちかくさしつかふべきほどのさぶらいをば、いづれをも直にさしつかひてこそ、人がらをも心だてをも見しるべけれ。たゞ人づてにいひつぎてさしつかひたる分にては、よきもあしきもしるべきやうなし。しかるゆへに、出頭のものゝとりなしにのみ聞あやかるばかりなり。かやうのあやまりみな主君の心くらきまよひよりおこれり。主君の臣下

品のくせもの浮山にときめくとみえたり。君たる人の御用心あるべきことにて候。さて諸士をぎんみするかなめ三つあり。德と才能と功となり。三つのうちいづれにても上中下あり。德は文武合一の明德なり。才能はてんか國家の萬事をとりおこなふ文藝武藝の才智藝能なり。功は或は天下國家のしをきの功をつみ、或は奉公奔走の功をなし、或は天下國家の難をはらひ、或は天下國家のためになる事を始てつくり出し、あるひは大敵をほろぼし武功をたつるなど、皆功なり。德と才と功と三つをぎんみの柱とさだめ、上中下のしなによつて、その分際相應の知行をあたへ、官職をさづくるが古來さぶらいのぎんみをする掟にて候。今も才と功とのとりさたは候へども、德のさたはしる人まれなりとみえたり。

幹充曰。いま時の功と才とのぎんみはむかしの掟によくかなひ申候や。

師の曰。功と才との名はむかしとひとつにて候へども、ぎんみのしやうあしきゆへか、人のてくろ上手になりたるゆへか、むかしのおきてにかなふ事はすくなく候。

幹充曰。むかしのおきてはいかゞおはしまし候や。

師の曰。むかしのおきては、才も功も德を根本とし、德は中和をもつて大本とす。才も功も義理にかなはねば、眞實の才功にあらず。さて君たる人の心が、おきての鏡にて候。此鏡くもり候ては、何のぎんみもあやまるばかりなれば、人君のこゝろをあきらかにしておきてのかゞみとさだめ、才と功と德の正眞體上中下のしなさだめ、鏡のかげをてらすごとく毛頭あやまりなければ、諸士のて

ふべからず、魏の武卒は秦の鋭士に勝ことあたはず、秦の鋭士は桓文の節制にあたるべからず、桓文の節制は湯武の仁義に敵すべからずといへるこゝろ、よく玩味あるべし。しかるゆへに、孫子の五事はみちを第一とし、呉子の兵法は和をもつて先とす。道といへるも和といへるも、みな仁義の德のことなり。儒門の心學の外に此德をあきらかにすべき道なければ、心學をつとめその德をあきらかにしてのちに、軍法をまなびたるがよしと云事分明なり。とても軍法を學ばんとならば、天下に敵なき仁者の軍法をまなびたるがよろしかるべきか。

躰充曰。士のぎんみはいかやうにつかまつるものにて御座候や。世間の諸侯の諸士をかゝへたまふをみるに、吟味ある樣には候へども、ぎんみのさほうさだまりたる事ありとはみえ申さず候。我々の見および候は、只よきひいきつてのあるものがよきさぶらいともてなされて、たかちぎやうをとり申候とぞんじ候は如何。

師の曰。それはわるくちと云ものにて、道の議論にてはなく候。君たるほどの人は、よく〱ぎんみしてよき士をかゝへたくはおもひ給ひ候へども、せけんの風俗あしくぎんみのさほうあきらかならざるゆへに、心ならずぶぎんみになりもてゆくとみえたり。根本さぶらいの品上中下の三だんあり。明德十分にあきらかに、名利私欲のわづらひなく、仁義の大勇ありて、文武かねそなはりたるを上とす。十分に明德はあきらかならねども、財寶利欲の迷なく、功名節義を身にかへて守りぬるを中とす。おもてむきばかり義理だてをして、心には財寶利欲立身をのみむさぶりぬるを下とす。此下

の工夫なく、徒に皮膚毛髪ばかりをもつぱらとつとめまなぶゆへなり。軍法をまなばんとおもふ人は、先眞儒の門に入て、文武合一の明德をあきらかにして、根本を立て後に、軍法の本書をまなび眼目手足の工夫をもつはらとすべき事、簡要なり。これはまことに武家第一の急務にて候。

幹充曰。儒門の心學をきはめずしても、軍法に達し軍法をたてゝ、その名たかき大將、倭漢ともに古來おほく御座候へば、心學のみがきなくても、軍法のまなびはなり申べく候。しかるにまづ儒門の心學をきはめてのちに、軍法をまなびたるがよしとおほせられ候は不審にぞんじ候。

師の曰。よきうたがひにて候。大將の才を逞しくうまれつきたる人は、心學のみがきなくても、軍法に達し軍功をば立るといへども、その德なきゆへに、才のたくましきにまよひ、かならず人をころすことをこのみ、不義無道のふるまひあれば、萬民その毒にあたりなげきかなしむによつて、終には天罰をかうぶり、其身をほろび國もかならず絶滅するものなり。その證據は、もろこしにてもわが朝にても、其德なくて才のみ逞しき大將に、其身難なく子孫繁昌したる人まれなり。倭漢の史書にて考へ見るべし。夫軍法のほむいは、國家安穩武運長久にして、萬民をめぐまんためなるに、かへつてばんみんもその毒にあたり、其身のうんもつき、國家も絶滅する基となれば、軍法に達しぐんこうをたつるも、畢竟は無益のいたづら事なり。其上陰謀をのみもつぱらとし。詐力に任して仁義の德なきは、たとひ韓信項羽の才ありといふとも、節制の敵にさへ楯つくことあたはず。まして仁義の師に敵せんこと、立車にむかへる蟷螂にことならず。太白陰經に、齊の伎擊は魏の武卒にあ

ことなり、奇正は手足なり、旌旗金鼓兵具のこしらへもちひやうのさほう日どりなどは、皮膚毛髪なり。しかるにおほかたの人の心得には、皮膚毛髪ばかりを軍法なりとおもへり。しかるゆへに其流おほしといへり。旌旗金鼓兵具のこしらへもちいやうの作法日どりなどは、その家々の制度ありて、其流あまた候。これは皮膚毛髪なれば、いづれをよしともあしゝともさだむべからず。所により時により人によりて考へさだめたるがよく候。むかしよりつたへきたる流をくまずして、その大將の作分にてあたらしくさだめたるもよろし。さして勝負のかまひにならざるゆへに、その流あまたありと知べし、覘覺用間奇正は勝負の眼目手足なれば、只おなじく一術にして、流によつてかはると云ことはなく候。此眼目あきらかに手足達者なれば、百戰百勝の功をたつるゆへに、名大將と云なり。此眼目くらく手足かなはざれば、敗軍のをくれをとるばかりなるゆへに、あしき大將と云なり。しかるに此眼目手足をば露もさとせず、たゞ皮膚毛髪ばかりを軍法なりとこゝろへたらんは、無下にあさまし。夫軍法陣圖は本來易よりおこり、黄帝の代にまつたくそなはり、太公諸葛など代々の諸賢傳受したれり。日本にてかながきになほしたるには、あやまりおほし。たゞ本書をよくまなびたるがよく候。軍法陣圖をありのまゝに心得たるぶんにては、馬のめきゝを段の繪圖にてならひおぼえたるとおなじことなり。愚かにして物のまにあはぬことを、按レ圖索レ驥とたとへたり。むかしもろこしに名大將あり。その子よくちゝの書をよみならひぬれども、臨機應變の覺悟なきによつて、おや死してのち大將と成、大敗軍して天下のわらひぐさとなれり。これすなはち眼目手足

人をなす。さてまたよく心ふかきゆへに、よくのためにおそるゝ心、おくびやうなるものゝ死をおそるゝにことならず。血氣の勇者は、畢竟よくを本とするゆへに、勝いくさには武勇をはげみ、忠節のふり一段見ごとなれども、敗軍の時はその主君をすてゝあさましきふるまいある武編者、古來おほし。かくのごとくなれば、たゞ血氣ばかりの勇にして義理の用にたゝざれば、血氣の勇といふ。血氣のたけきばかりにて、よくのおそれふかければ、三才一貫の大道をおこなふ用にはたゝずして、小躰血氣の役に立ばかりなれば、また小勇ともなづけたり。

躰充曰。大勇小勇にもちひやう御座候や。

師の曰。大勇はもちひてあしきところなく、またもちひてあしき時なし。行住坐臥、五倫のまじはり、大勇なくては道をおこなふことあたはず。軍陣にては、大將にしてもはむしやにしてもよろしく候。小勇の人は、武用ばかりの役にたつまでにて、はむしやにはよく候へども、大將にはよろしからず。むかしより倭漢ともに、小勇の大將勝利をうしなふ事、あげてかぞふべからず。つゝしむべき事なり。

躰充問曰。軍法にはいろ〳〵ならひありて、其流おほしとうけたまはり候。大將たる人のしらでかなはぬ事にて御座候や。

師の曰。軍法は大將のしらでかなはぬ事にて候、大將の軍法をしらざるは、たとへば矢はぎの矢をはくほうをしらざるがごとし。軍法を人のかたちにたとへていへば、仁は心なり、覘覺用間はまな

くろみにてはしれぬものなりといふことなり。見かけのぬるきものに、臆病なるものあるべし。また
けなげなるもあるべし。みかけのたけきに、おくびやうなるもあるべし。又かい〲しきもあるべし。
ただみかけに泥まず、そのこゝろの勇怯を察するが、目明のまなこにて候。
躰充問曰。勇に仁義の勇血氣の勇とて、二つありとうけたまはり候。いかやうなる差別にておはし
まし候や。
師の曰。明德のあきらかなる君子は、義理をまもり道をおこなふほかには、毛頭ねがふことなく、
欲心のまよひ、すこしもなきゆへに、義理をたて道をおこなひ、主親のために命をおしまざるこ
とやぶれたる屣をすつるがごとくなれば、毛頭死をおそれ生をむさぶる心なし。しかるゆへに、天
地のあひだに、何にてもおそるべきものなし。千万人の敵にあひても、虎狼の狐狸にむかへるがご
とく、すこしもおそるゝ心なし。おそるゝことなきが、けなげの至極にて候。明德の仁義あきらかな
れば、この勇仁義のうちにをのづからそなはりてあるものなるによつて、仁義の勇といふなり。かく
のごとく天下に敵なき至大なる勇なれば、また大勇ともなづけたり。まへに論ずる眞實の武が、すな
はち此大勇なり。血氣の勇は道理無理義不義のわきまへなく、只かたむきに猛くして、人にかち物
をおそれざるばかりなれば、虎狼のけなげにひとしく、かへつて人道の碍ともなれり。けなげにし
て死をおそれざることは、仁義の勇に似たれども、道理無理義不義のわきまへなく、たゞ血氣にま
かせてかたむきなれば、虎狼のふるまひいとあさましく、位あるものは亂をおこし、貧ものはぬす

り。ひつじはむしもふみころさゝるやはらかなるけだものなり、虎は人をもけだものをもくいころすたけき獣なり。ひつじにとらの皮をきせてみれば、みかけはたけくすさまじけれども、したぢがひつじなるによつて、見かけにちがひていとあさましきふるまひなりと云こゝろなり。かくのごとくのためしは、眼前にたくさんなれども、目明する人世にまれなりとみえたり。

躰充曰。左候はゞ、武藝文藝はいらぬものにて御座候や。

師の曰。それはあしき心得にて候。本をすてゝすゑばかりをもとめまなぶが、ひがことなりといふことにて候。根本の仁義を立てゝのうへに文藝武藝に長じぬるは、本末かねそなはる多能の君子にて、せぞくのことわざにいへる花も實もある人なり。本たつての上には、文藝武藝ことのほか重寶なり。本末先後のこゝろへ簡要にて候。

躰充曰。ほんまつかねそなはる事ならざるものは、いかゞつかまつり候はんや。

師の曰。末をすてゝ本をまなびたるがよく候。文藝をしらずして文道をよくおこなひ、武藝をしらずして武功をたてたる人、古來おほし。これみな本を第一につとめたるゆへにて候。よく／＼こゝろうべき事なり。

躰充曰。沈勇が世けんにおほしとおほせられ候へば、見かけのぬるきものを武用にかい／＼しかるべきと見たて候はんや。

師の曰。それもはなのさきなる心得にて候。沈勇がせけんにおほしといふは見かけはなのさきのぬ

する造化成就する事なし。陰陽二氣しやべつありといへども、本來同一元氣の流行なるごとく、元來文武同一明德なれば、武ばかりにて文なきは、秋冬の陰のみにして春夏の陽なきがごとし。文ばかりにて武なきは、春夏の陽のみにして秋冬の陰なきがごとし。文は仁道の異名、武は義道の異名なり。仁と義とはおなじく人性の一德なるによつて、文武もおなじく一德にして、各別なるものにあらず。仁義の德をよくさとりて、文武のさたをあきらむべし。仁にそむきたる文は、名は文なれども、實は文にあらず。義にそむきたる武は、名は武なれども、實は武にあらず。文武の正味をよくかみわけざれば、心の闇いとくらく、萬事のさはりおほかるべし。さてまた文武に、德と藝との本末あり。仁は文の德にして、文藝の根本なり。文學禮樂書數は藝にして、眞德の枝葉なり。義は武の德にして、武藝の根本なり。軍法射御兵法などは藝にして、武德の枝葉なり。根本の德を第一につとめまなび、枝葉の藝を第二にならひ、本末かねそなはり文武合一なるを、眞實の文武といひ、眞實の儒者といふなり。文藝ありて文德なきは、文道の用にたゝず。武藝ありて武德なきは、武道の役にたゝず。たとへば根なき草木の實をむすぶことあたはざるがごとし。氣だてやはらかにたちふるまひ花車なるを文といひ、たけくいかつなるを武用にかい〲しかるべきなどいへるは、あさましき鼻のさきなる目論なり。見かけはやはらかにうわだるみしぬかりたるものに、武用かひ〲しき人あり。これを沈勇となづけたり。世間の武功ある人を見るに、大概この沈勇おほし。見かけはおにがみのやうにたけくいかつにして、拔群に臆病なる人あり。これを羊質虎皮とたとへた

翁問答上卷之末

躰充曰。文武は車の兩輪鳥の兩翼のごとしと申ならはし候へば、文と武とは二色にて御座候や、さて又いかやうなるものを、文武とは申候や。

師の曰。文と武にせぞく大きなる心得そこなひ候。せぞくはうたをよみ、詩をつくり、文筆に達し、氣だてものやはらかに花車なるを、文といひ、弓馬兵法軍法をならひしり、氣だてたけくいかつなるを、武と云ならはせり。みな似たる事のにぬことにて候。元來文武は一德にして、各別なるものにてはなく候。天地の造化一氣にして陰陽のしやべつあるごとく、人性の感通一德にして文武の差別あれば、武なき文は眞實の文にあらず、文なき武は眞實の武にあらず、陰は陽の根となり陽は陰のねとなるがごとく、文は武の根となり、武は文の根と成なり。天を經とし地を緯として、天下國家をよくおさめて、五倫のみちをたゞしうするを、文といふ。天命をおそれざるあくぎやく無道のものありて、文道をさまたぐる時は、あるひは刑罸にて懲し、あるひは軍をおこし征伐して、天下一統の治をなすを、武と云。しかる故に、戈を止といふ二字をあはせて、武の字をつくりたり。文道をおこなはんための武道なれは、武道の根は文なり。武德の威をもちいておさむるが文道なれば、文道のねは武なり。そのほか萬事に、文武の二ははなれざるものなり。孝悌忠信の道をたゞしくおこなふは文なり。孝悌忠信のさはりとなるものを退治して、つとめおこなふは武なり。たとへば春夏の陽ばかりにて秋冬の陰なく、秋冬の陰ばかりにて春夏の陽なければ、萬物を生成

これおもひのまゝなる長生にあらずや。ぼんぶはあとになづみてろんずるによつて、まよひたるうたがひばかりなり。こゝろのうへにてろんずれば、なにのふしんもなく候。

躰充問曰。眞儒のすぎはひにはなにたる所作をつかまつるものて御座候や。

師の曰。儒道をおこなふ人は天子諸侯卿太夫士庶人なり。此五等の人のよく至德要道を保合するを、眞儒と云なり。しかるゆへに、天子諸侯卿太夫士庶人のしよさが、すなはち眞儒のすぎわひにて候。五等の所作のほかのすぎはひは、天命本然の生理にあらず。至德要道を保合する眞儒は、五等のうちにて貴賤貧富をえらばず、運命のほどにまかせて、無逸のつとめをはげまし、外のねがひ毛頭なきゆへに、富貴にてもおごらず、貧賤にても諂はず、たゞ天理の眞樂をたのしむほかは他事なく候。

躰充曰。左候はゞ、俗儒のがくもんをゝしへてすぎはひにするはひが事にておはしまし候や。

師の曰。敎をすぎはひとするは、司徒敎官の屬にて、さぶらいのなすわざなれば、僻事にてはなく候へども、其心もち身のおこなひとおしへやうにひがとあるなり。おしへやうだによく候へば、有難眞儒にて候。其心もち身のおこなひ道なきうへに、又敎やうあしきによつて、俗儒の譏あるなれば、産業にするはよく候へども、敎やうにひがことありと知べし。

ゝまるところは、才德功業の人にすぐれ、富貴長生の心のまゝならんことをねがふよりほかはなし。がくもんにて才德功業の人にすぐれ候はんことは、げにもにて御座候。富貴長生をねがひのまゝに得候はんことは、なり申まじきとぞんじ候。孔子はくらゐをえたまはず。顏子は簞瓢巷陋不幸短命なりとうけたまはりおよび候へば、古來聖賢にんげんのねがひをおもひのまゝに得たまはず候こと分明に御座候へば、おほせ候ところ信をとりがたく候。

師の曰。これにも心迹の差別あり。迹ばかりをみてはうたがひも尤にて候。心にて見候へば、ふしんはすこしもなく候。聖賢の心は富貴をねがはず、貧賤をいとはず、生をこのまず、死をにくまず、福をもとめず、禍をさけず、唯身をたて道をおこなひたまふばかりにて、ぼんぶのねがひは毛頭なければ、をのづからねがひのまゝにて、凡夫のねがひをおもひのまゝにもとめ得たるよりは、一くらゐまさりたる心のたのしみ有。そのうへ凡夫のねがふ富貴は、小富貴と云て、ちいさき富貴なり。小富貴のほかに、至富貴とて、廣大無類なる富貴あり。此大富貴は、ぼんぶの目にはみえぬゆへに、もとめねがふことなし。聖賢は、此大富貴をおもひのまゝに得たまふによつて、小富貴をばわすれたまひて、求めねがひたまはねば、疏食飮水簞瓢陋巷の貧賤に居たまひても、無上の眞樂つねに泰然とありて、ぼんぶの小富貴を得たるたのしみとおなじ。口にもかたるべき事にあらず。これ思ひのまゝなる富貴にあらずや。聖人の明德は、至誠無息長在不滅にして、かたち死してもほろびず、天地おはつても壽おはらざるものなれば、彭祖が七百歲喬松が千年も、長生とするにたらず。

〳〵く心のうへの學なれば、心學とも云なり。此心學をよくつとめぬれば、凡人より聖人のくらゐにいたるものにて候。ゆへに、また聖學とも云なり。俗儒は、訓詁ばかりを耳に聞おぼえ、口に云までにて、迹の精義をさへわきまへざれば、まして心をとりて師とすることは、ゆめにも見ざるゆへに、四書五經をよむといへども、訓詁を記誦して口耳のかざりとなすばかりにて、心はもとの木椀に自滿の垢のしみつきたるものなれば、益はなくて却てあしくなり候事尤にて候。聖賢四書五經の心を師として、我心をたゞしうすることをば、いさゝか心がけずして、博學にほこるをのみつとめとし、耳にきゝ口に云ばかりにて、口耳のあひだのがくもんなれば、心學とはいはずして口耳の學とも云なり。此口耳の學にては、なにほど博學多才にても、心だて身もちはせぞくの凡夫にかはる事なければ、また俗學とも云なり。四書五經に心迹訓詁のしやべつあることをよく辨ぬれば、おなじ書物をよみて、正眞贋のかはりある事いはずして分明に候。

躰充曰。正眞のがくもんをつかまつり候へば、いかやうなる益おはしまし候や。くはしくうけたまはりたくぞんじ候。

師の曰。正眞の學問をして成就すれば、心あきらかに身おさまりて、人間のねがふ程の事にかなはぬ事はなく候。これほどに益のある事は、またと世にあるべしともおぼえず。すこしまなび候ても、それほどの益あるものにて候。

躰充曰。おほせ候ところまことしからず存候。にんげんのねがひ品あまたおはしまし候へども、つ

ひ、太和を保合して利貞なれば、時に逢てもちいらるゝときは、四海をたゞし天下をおさめ、伊尹太公の事業をなし、時にあはずして窮する時は、ひとりその身をよくし、性を盡し命にいたりて、孔孟の教化をなす。かくのごとくまなぶを、正眞のがくもんと云なり。

躰充曰。俗儒のよむ書も四書五經、眞儒のよむ書も四書五經にて候はゞ、がくもんにさのみちがひはあるまじきことにて候。よむ書物がおなじものにて候あひだ、俗儒のがくもんにて益なく候はゞ、眞儒のがくもんにてもゑきあるまじくと存候。

師の曰。神理の精微をきわめずしては、心迹の差別しりわけがたく候へば、ふしんも尤にて候。四書五經に、心と、迹と、訓詁と、三つのしやべつあり。聖賢の口にのべたまふ辭と、身におこなひたまふ事との二つを、迹と云。その口にのべ身におこなひたまふところの本意の至善を、心といふなり。心は無方無躰無聲無臭にして、書付る事あたはざるゆへに、只あとばかりをかきつけて、そのあとのうちにふくみそなへて、後世のをしへとなせり。そのあとのうちにそなはりたる心を、四書五經のこゝろといふなり。そのあとをかきのせたる四書五經の文字のことはりを、訓詁と云なり。其訓詁をまなび、其あとをよくわきまへ、その心をよくとりもちひて、わが心の師範となし、意を誠にし心をたゞしくすれば、聖賢の心すなはちわが心となり、我が心すなはちせいけんの心にたがはず。心聖賢の心にたがはざれば、言行すなはち聖賢時中の言行にそむかず。かやうにまなぶを正眞のがくもんと云なり。聖賢四書五經の心をかゞみとして、我心をたゞしくするは、始終こと

おしへまなぶところのみち、天道の神理にかなひぬるを、正眞のをしへとし學もんとし、儒教となづけ儒學といふなり。天道の神理にそむきぬるは、にせのがくもんなり。そのうちにて、よく似たるにせは、俗儒、墨家、楊氏、老氏佛氏などにて候。俗儒は、儒道の書物をよみ、訓詁をおぼえ、記誦詞章をもつぱらとし、耳にきゝ口に說ばかりにて、德をしり道をおこなはざるものなり。墨家は、儒道の至公博愛の仁をまなびそこなひて、本末先後の序をみだるものなり。楊氏は、爲己愼獨の密をまなびそこなひて、一貫の眞をうしなふものなり。老氏佛氏は、無方無躰の神易の皮膚をみて、中和の骨髓をうしなふものなり。このうちにて、日本へ流傳してひろまりたるは、俗儒と佛氏と二いろなり。ふたつのうちにて、世ぞくのもつぱらがくもんといへるは、俗儒の記誦詞章なり。俗儒のがくもんは正眞のがくもんに、ことのほかちかく候へども、志しの立やうと、がくもんの仕樣にて千万里のあやまりとなれり。つゝしみゑらぶべきことにて候。

躰充曰。記誦詞章のがくもんとは、いかやうなる學問にて御座候や。

師の曰。四書五經、そのほか諸子百家の書をのこらずよみおぼえ、文をかき詩をつくり、口耳をかざり、利祿のもとめとのみして、心の驕慢いとふかきを、俗儒の記誦詞章のがくもんといふなり。

躰充曰。正眞のがくもんはいかやうなるがくもんにて御座候や。

師の曰。まづ明德をあきらかにするを、こゝろざしの根本とたてさだめ、四書五經の心を師とし、應事接物の境界を礪石となして、明德の寶珠をみがき、五等の孝行五倫のみちの至善をよくおこな

師の曰。正眞のがくもんは、伏犧のをしへはじめ給ふ儒道なり。むかしはをしへもがくもんも、此しやうじんの外はなかりしに、世のすゑになりて、いつとなく、もろこしにもえびすぐにゝも、學問のにせあまた出來てより贋がちになりて、正眞は衰微するなり。もろこしにも一たびはにせものばかり時めきて、正眞をばとりうしなひたる事あり。正眞をまなびてさへ、まなびそこなひあるものなれば、ましてにせの學問をしては、心だてさほうあしくなりぬる事、尤にて候。

躰充曰。にせのがくもんとやらんは、刀わきざしなどににせあるごとく、正眞の名をかりもようをにせて、人をたぶらかす事にて御座候や。

師の曰。さやうにきたなき心あるにてはなく候、こんぽんはみな正眞を信仰しまなびて、名をかり模様をにせ、利よくをもとむる心は、露もなけれども、生れつきと習ひと志とに、さま〳〵かはりあるによつて、心ならず得かたへかたむきになりて、その心には、わがまなび得たるところを正眞なりと、眞實に思ひぬれども、正眞をまなびえたる人のまなことよりみれば、似てにぬことにて候ゆへに、にせとは申候。正眞をまなびても志しにすこしも、ちがひあれば、おぼえずわきみちへゆきて、にせとなり候へば、にせをまなびて、千万里のちがひとなり候事、おしあきらめらるべし。

躰充曰。にせのがくもんは、なに〳〵にておはしまし候や。

師の曰。先をしへとがくもんのほんいを、よくわきまへて、正眞にせのさたをあきらむべし。そしへもがくもんも、みな天道を根本準的とするゆへに、もろこしにても夷國にても、世界のうちにて

ず。聖人のみち世にあきらかならざるによつて、異敎にならひそまり、さやうにあさましきうたがひあり。儒門に入てまよひを解べきこと、人間第一の急務にて候。

躰充問曰。世間のがくもんする人を見るに、さして學問のしるしといふべき益なし。かへつて形氣あしく異風になる人ありとみえたり。所詮がくもんはせぬがましかとぞんじ候はいかゞ。

師の曰。にんげんの生れつきさま〴〵ありといへども、大體のおふわけは五品につゞまれり。聖人一品、賢人一品、智者一ぴん、愚者一品、不肖者一品、凡て五品なり。この五品のうち、聖人は生知安行とて、がくもんせずして德をしり道をおこなひたまふ人なり。聖人より下は、がくもんせざれば德をしり道をおこなふ事あたはず。人間に生れて德をしり道をおこなはざれば、人面獸心とて、かたちはにんげんなれども、心はけだものとおなじことにて、至誠無息の神理をとりうしなひ、世俗の諺に、人の皮をかぶりたる犬といへるがごとく、いとあさましきことなれば、がくもんは人間第一の急務にして、なさでかなはぬことにて候へども、正眞のがくもんは、よく知てをしゆる人まれなれば、まなぶ人もすくなし。世間にとりはやす學問は、多分にせにて候。にせのがくもんをすれば、なにの益もなく、かへつてかたぎあしく異風になるものなり。がくもんに正眞贋のわかちあることをわきまへざる人は、不審も尤にて候。

躰充曰。がくもんはみなひとつなりとこそ存候へ。しかるに眞と贋と二色ありとおほせられ候は、いかなる差別にて御座候や。

みな孝行のをしへなり。たゞ凡夫のために五典十義をわけてしめしたまふなり。至徳要道三才一貫の心法、よく〳〵受用あるべし。

躰充問曰。今生ばかりの住居にて、五倫のまじはり夢幻のごとくなれば、五典をよくおこなふもゆめのうちのいとなみにて候へば、さして至徳要道と云べきにもあらず。五典のほかに別に向上の道あるべしとぞんじ候はいかゞ。

師の曰。それは狂者の議論をきゝならひておこるうたがひにて候。狂者は道の皮膚をみていまだ骨髓をよくさとらざるゆへに、生死幽明有無の差別をわけてをしへを立たり。その破裂の見を聖人異端と名づけたまひて、是に似たる非と云ものなり。ぼんぶの見所にくらべぬれば、ことの外たかく候へども、聖人のみちよりみれば、あさきことにて候。妄念の起滅をゆめのごとし、まぼろしのごとしなどいはんは、尤にて候。五倫のみちは至誠無息の孝徳なるを、妄念とおなじく夢幻のごとしといはんは、あさましきあやまり、物躰なき事なり。夫孝徳は、中和を躰段とし、愛敬を本實とす。方寸のうちになそはりて、太虚に充塞し、六合を包羅し、上は無始の往古に達し、下は無窮の未來に徹し、生死幽明有無のしやべつなく、上もなく外もなき神道なるゆへに、至徳要道となづけたまふ。しかるゆへに、五倫のみちすなはち向上のみち、向上のみちすなはち五倫のみちとたてさだめ、素其位而行、不願乎其外、下學而上達する一貫の心法不貳の妙理なり。現在當然の五典をほかにして、別に向上の一路をもとむるは、たとへば日月をそむきて灯をもちゆるにことなら

はりあれば、眞實無妄の信のみちをまもりて、骨肉のおもひをなす。これすなはち天命の本然おのづからある道理なれば、五敎の第五に朋友有ㇾ信と說たまへり。

躰充曰。聖人五敎を論じたまふ次第にも意もち御座候や。

師の曰。ふかき意御入候。父子の親は萬化のみなもと、天叙の本なり。君臣の義は立極の大義、明倫の主本なり。夫婦の別は人倫化生のもと、子孫相續のはじめなり。此三つのものは、五倫のうちにての綱要なるゆへに、三綱となづけたり。しかるゆへに、三綱を先はじめに論じたまふ。さて三綱のうちにて、父子のみちは天性にて、君臣の義を包たり。そのうへ五りんのみちみな孝行の條目なれば、孝は人極の第一義なるによつて、一番に父子有ㇾ親とをしへ給ふ。君はおやの恩にひとしきゆへに、おやにつかふる孝をうつして、君につかふまつる忠節となす。其うへ明倫の主本なるによつて、第二ばんに君臣有ㇾ義とをしへ給ふ。夫婦の別もおもしといへども、君父よりはいやしきによつて、第三番に夫婦有ㇾ別とをしへたまふ。兄弟は天倫のしたしび、骨肉同胞の愛おもきゆへに、第四番に長幼有ㇾ序とをしへたまふ。朋友は異親同氣の兄弟なれども、天倫同胞のしたしみよりはかろきによつて、第五番に朋友有ㇾ信とをしへ給ふ。さてまた、父子の親をはじめにおき給ひて、朋友の信を終にをきたまふこゝろは、孝は三極の至要、百行のみなもとにして、五典みな孝行なることをしめさんために、父子の親をはじめにをしへ給て、さて孝德をあきらかにするには、朋友の善をせむるをたすけとする事をしめさんために、朋友の信をおはりにをしへ給ふ。曾子の以ㇾ友輔ㇾ仁といへるも、このこゝろなり。畢竟五敎

ありて、惠悌の道序を本としておこなふことはり、天のさだめ給ふ次第にて、をのづからある道なるゆへに、五教の第四に長幼有序と説給へり。

朋友はたがひに信をもて相まじはる道とす。信はいつはりなく義理にかなふ德なり。友達のまじはりに心友面友の差別、情義の親疎、さま〳〵ありといへども、畢竟はみな信のみちを本とす。たがひのこゝろざしおなじくまじはりしたしむを心友といふ。こゝろざしはちがひぬれども、筋目あるか、或は同郷隣家、あるひは同官同職などにて、さい〳〵相まじわりてしたしきを面友といふ。一目しる人も面友のうちなり。心友面友ともに情義の親疎おなじからず。そのほど〳〵の義理にしたがひて、威義うや〳〵しく、挨拶和厚にして、いつわりなく、もちろん約束などのすこしも違變なきが、信のみちの大がいなり。世俗はわが心に眞實におもひ入たることをば、是非善惡をわかたず信なりと思へり、大きなる心得そこなひなり。たとひ眞實におもひいれざることにても、義理にかなふを信といふ。眞實に思ひいれたる事にても、道にそむきたるをば、人欲のいつわりと云ものなり。世上の人のまじはりを見るに、信のみちにかなひたるはまれなり。信のみちにだにかなひぬれば、たがひにいのちの用にもたつものなり。まして通財の義あれば、財寶の用にたつこと勿論なり。しかるゆへに、ともだちのかたきをもうつ法あり。さて心友のまじはりは、善をせめてたがひに至德の靈寶をみがきあきらむるが簡要なり。朋友たるもの、われも人もみな眞實無妄の天道を大父母としてうまれたるものなれば、かたちをもつてみれば他人なれども、道よりみれば同胞のこと

義のとくをあきらかにして、つみをいざなひ、妻は陰德にしたがひ、內をおさめ、順正の德をあきらかにして、おつとにしたがひ、男女陰陽內外の差別かくのごとくたゞしければ、父子兄弟子孫臣妾みな和睦して和氣合同するゆへに、夫婦のみち別を本とす、此道理天命の本然をのづからあるゆへに、五敎の第三に夫婦有別と說給へり。

弟は悌をもて兄につかふる道とす。悌は敬ひしたがふとくなり。他人のとしおいくらゐたかきにつかふるもおなじことはりなり。他人にても老たるをうやまふは道理の當然なり。ましておやの身をわけて我にさきだちてうまれたる兄をうやまひしたがふべきこともちろんなり。兄は惠をもつておと〳〵をひきゆる道とす。惠は友愛の二義をかねたり。愛はおやの子を愛するごとくにねんごろに親を云。友はともだちのたがひに切磋琢磨するごとく、道ををしへあやまちをいましめ、至德をあきらかにする樣に善をせむるを云。他人のとしわかきくらゐいやしきにまじはるもおなじことはりなり。他人にてもいとけなきに惠をほどこし、賤になさけふかくするは、道理の當然なり。ましてておやの身をわけて分形連氣の人なれば、友愛の惠をほどこすべき事勿論の義なり。この道理あきらかにして、おこなひかたき事ならねども、世上のまよへる人をみれば、多分兄弟のあひだ、他人よりもおろそかなり。わづかのよくのあらそひにてかたきの思ひをむすぶもあり。分形連氣のことはりをしらず、わが身にて我身をそこなふありさま、愚痴の至極あさましき事なるべし。おなじくおやの身を分て生れたるものなれども、先後の序によつて兄はたつとく弟はいやしき次第

下をつかひ、臣下は忠敬のみちをまもりて君につかふまつり、君臣交泰する道理、天命の本然をのづからある義なるゆへに、五教の第二に君臣有レ義ときたまへり。

夫は和義をもて妻をいざなふ道とす。和はしたしみ和合する德なり。義は道理にしたがひて裁判し非道をえらびすつる德なり。大抵夫婦のあひだは、愛欲のわたくしにおぼれ義理のさいばんなきによつて、あるひは親子兄弟骨肉のしたしびをも云へだてられ、うらみをむすび、あるひは家をやぶり國をうしなふもの古來そのかずをしらず。また閨に夫婦のまじはりそむき〱にして、作法みぐるしきもあり。これみな人心のまよひなり。それ妻は先妣の嗣、祭祀のたすけ、子孫相續の寓する所、人倫生々の本始なれば、したしび和合すべき事勿論なり。しかれども、義理のさいばんなければ、愛欲のわたくしにおぼれ、家道みだれ別道のつねをうしなふゆゑに、和と義とのふたつをあはせて夫のつみをいざなふ道とす。妻は順正の二德をもて夫につかふる道とす。順は心だて柔軟にものいひかほぶりたちふるまひまでもやはらかにしたがふ德なり。正は義理さほうをたゞしくまもる德なり。妻は夫を天とたのみ、夫の家をわが家となし、夫婦一躰のことはりなるがゆへにわが本生の父母をば父母とせずしておつとの父母をふぼとする事、聖人のさだめたまふところにして、不易の天則なり。しかるゆへに、先舅姑に孝行なるを、順正の第一とす。さて貞烈の德をまもり、女事をよくつとめ、さほうたゞしく、おつとの下知にしたがひ、家をとゝのへ、子孫をそだて、宗族を和睦し、家人におんをほどこすは、婦德の大がいなり。夫は陽德にしたがひ、外をおさめ、和

おやなければ此身なし。君なければこの身のやしなひなし。みないのちをたもつおんなるゆへに、おやにも君にもいのちをすてゝ奉公する道理なり。大臣の忠節は其事大なるゆへに大忠と云、小臣の忠節はそのことちいさきゆへに小忠といふ。主君のきらふ事にても、君のためくにのため家中のためによき事なれば、しゆくんのかならずおこなひ給ふやうによくいさめをなし、主君のすきこのむ事にても、あしき事なれば、かならずやめたまふやうによくいさめて、しゆくんの心だて身もちみちにかなひ、國とみゆたかにすゑながくさかえ給ふやうにと一心におもひ入、わが身のためをばすこしもかへりみず、龍逢比干のいさめて死せる心をまもり、わが身をすてゝ君のためのみ第一にするを、大忠といふ。是は家老出頭の忠節なり。是非善惡をえらばず、主君の下知にしたがひ、一心に君をうやまひ身をすてゝ、そのくらゐ〳〵の職分を勤仕するを、小忠と云。これは小身なる臣下の忠節なり。軍忠をもつて論ずれば、二心なく身をすてゝ、禮義たゞしくしてなさけふかく、英雄の心をとり、軍兵をなづけ、はかりごとを帷幄のうちにめぐらし、勝ことを千里のほかに決し、百戰百勝の功をたつるを、大忠といふ。是は軍大將の忠節なり。ふたごゝろなく身をすてゝ、さきがけをし鎗をつき首をとるを、小忠と云。これは半武者のちうせつなり。さてまた庶人をば剌草の臣といふ。そのくにゝ居て産業をつとめ生理をとぐるは主君の恩德なるゆへに、ふちをかうぶらざれどもしんかと云なり。その國のしをき法度をよくまもり、そのしよく〳〵をよくつとめて、年貢公役を懈怠せず、一心に國君をおそれうやまひぬるは、庶人の忠節なり。君は仁禮の德にしたがひて臣

は四海を一家、中國を一人とおぼしめすとなり。われと人のへだてをたてゝ、けはしくうとみあなどりぬるは、まよへるぼんぶの心なり。稟賦の厚薄高下によつて君となり臣下とはなれ、ぐわんらい骨肉同胞のことはりあれば、たとひわが扶持せぬものなりとて、にくみあなどるべきことにあらず。ましてわがふちするものをば、いかにも情ふかく禮義たゞしくして、あなどりかろしむべからざる道理あきらかなり。大臣は家のおもせ君の腹心なれば、高位大祿をあたへおほかたのことをばうちまかせてはからはせ、禮義たゞしくうやまひてなさけふかくあるべし。たゞし刑賞威惡の權柄をば、かりそめにもかしあづけぬものなり。大臣より下の諸士は、其くらゐ〳〵、ぶん〳〵相應のほど〳〵をよくふんべつして、眞實になさけふかくあなどりかろしめず、それ〳〵の器量をよく見わけてさしつかい、忠節あるにはその大小輕重にしたがひて、或は褒美をあたへ位をあげ、或は知行を加増して群臣のすゝめとす。士は國の幹きみの爪牙なれば、その心をうしなふべからざる事勿論なり。さて農工商はくにの寳なれば、一しほあわれみはごくみて、其利を利としてその樂をたのしむやうに政をなすは、君の仁禮をおこなふ大がいなり。臣下は忠をもつて君につかふまつる道とす。忠は二心なくひとすぢに君のためのみ思ひ入、それ〳〵の職分をよくつとめて、わが身をすてゝ奉公する德なり。それ〳〵の位によつて、奉公の事には大小の差別あれども、忠の心法はおなじものなり。君のおんはおやの恩にひとしくおもき厚恩なれば、おやにつかふるごとく心をつくしてつかふまつる也。親は此かたちをうみ育たるおんなり。君はこの身をやしなひたまふおんなり。

くわんとうにてそだてぬれば、京にて生れたるものも關東ことばになるごとく、おさなきもの丶こ丶ろだて身もちも、父母めのとなどの心だて身もちを見ならひ、かるによつて、父母めのとの德敎を子孫にをしゆる根本とす。しかるゆへに、乳母の人がらをえらび、父母の身をおさめ心をたゞしくして、全孝のみちをくちにかたり身におこなひて、をしへの根本を培養すべし。八つ九つにもなりぬる時は、むまれつき利根なるものには孝經をよませ、おり〳〵孝經の大意をときゝかせて道をさとるもといとなし、六藝のうち急用なる藝よりそろ〳〵とならはし、才德兼備のをしへを專とすべし。生れつき愚鈍にしてさいとく兼備ののぞみなりがたきには、孝經の義理をいつとなくかたりきかせて、孝經の本心をうしなはずして、好人となるをしへをもつぱらとすべし。盛童の時よりのをしへは、師匠と友とをえらぶをおしへの眼とす。さてすぎはいは、それ〳〵の器用にしたがひ、それ〳〵の運命をかんがへて、本分の生理士農工商のうちを諜りさだむべし。これ子にをしゆるの大方なり。親の慈も子の孝も、天命の本然をのづからあるしたしみなるゆへに、聖人五敎のはじめに父子有ㇾ親と說給へり。君は仁と禮とをもつて臣下をさしつかふ道とす。仁は義理にしたがひて人を愛する德なり。禮はくらゐ〳〵の道理にしたがひて人をうやまひあなどらざる德なり。臣下に貴賤大小のくらゐさま〴〵ありて、さしつかふだうりきはまりなしといへども、畢竟は仁禮の二德よりほかはなし。惟天地萬物父母。惟人萬物之靈。とのたまふ時は、ばんみんはこと〴〵く天地の子なれば、われも人も人間のかたちあるほどのものは、みな兄弟なり。しかるゆへに、聖人

孫の繁昌をもとむるは、あしなくて行ことをねがふにひとし。子孫のうまれつきさま〴〵ありて、一概にをしへの上をろんじがたしといへども、まづ道をゝしへて本心の孝德をあきらかにするををしへの根本とす。才藝人にすぐれしあはせ無類にして、にんげんのほまれありと云ども、こゝろねじけてほんしんの孝德なきものは、てんち鬼神のにくみすてたまふところなれば、一旦えいぐわにほこるといへども、かならず一代二代のうちに子孫絶滅するものなり。たとひぜつめつせざれども、あるにかいなき人がらにて、先祖の生性この人にいたりて相續せざれば子なきにひとし。まよへる人は、眼前一たんの富貴ほまれをのみ無上のものなりと思ひて、はじめなくおはりなき至德の靈寳をばゆめにもしらざるゆへに、たうざのしあはせだによければ、その外はなにもいらぬものなりとおもひ、本末是非を云みだして、無上のたのしみある事をしらず。無下に淺まし。さて子孫にをしゆるには、幼少のときを根本とす。むかしは胎敎とて、胎内にあるあひだにも母德の敎化あり。いま時の人は至理をしらざるゆへに、おさなきうちにはをしへはなきものなりと思へり。敎化の眞實をしらずして、たゞ口にていひをしへぬるばかりをおしへと思ふよりおこりたるまよひなり。根本眞實の敎化は德敎なり。くちにてはをしへずして、我身をたてみちをおこなひて人のをのづから變化するを德敎といふ。たとへば水の物をうるほし火のものをかはかすがごとし。風土の方角水土の風氣によつて、人間のむまれつきすこしづゝかはりありといへども、詞つきにはぐわんらい京田舍の差別なきゆへに、赤子のときより京にてそだてぬれば、關東にて生れたるものも京ことばになり、

たやまひあるときは、良醫の療治をもとめ、看病の勞をつくしぬるは、よくやしなふの大がいなり。もしまた父母不義あらば、何となく父母の感悟ある樣にいさむべし。かんごなきときは、是非利害をあきらかにかたりのべて諫べし。もし父母よろこばずしていかりをなさば、別して色をよろこばしめ、孝をおこし敬を起して、おやのいかりにさかふべからず。かくのごとくいくたびもいさめ、あるひはおやのあいくちの友をたのみていさむべし。おやの道にいり德のあきらかになるやうにするが、孝の第一なるゆへなり。父母の天年かぎりありて、ながきわかれのうれひにあたる時は、かなしびのまことをつくし、禮法をもつて葬をなし、喪にゐて哀戚をつくし、宗廟祠堂をたてゝ鬼神につかへ四時俗節忌日の祭に誠敬をつくして、合莫の孝をおしきはむるを、子の孝と云なり。親の子を慈愛するには、道藝をゝしへて子の才德を成就するを本とす。當座の苦勞をいたはりて子のねがひのまゝに育てぬるを、姑息の愛と云。姑息の愛をば、舐犢の愛とて牛の子をそだつるにたとへたり。姑息の愛は、さしあたりては慈愛に似たれども、その子氣隨になりて、才もなく德もなく、とりけだものにちかくなりぬれば、畢竟は子をにくみてあしき道へひきいるゝにおなじ。そのうへ、わがみはおやにうけたれば、すなはちおやの身なり。おやにうけたるわが身をわけて、子の身となしたるものなれば、子の身もこんぽんはおやの身なり。子をむざとそだてゝあしきみちへひきいるゝは、おやの身を惡道へおとしいるゝにことならざるゆへに、子によくをしへざるは大不孝の第一なり。さて又いゑをおこすも子孫なり、家をやぶるも子孫なり。子孫に道をおしへずして、子

あるによつて不孝なるをば、まよへるぼんぷは實もとおもひゆるすとみえたり。一しはまよひのうちのまよひなり。その子細は禮義たゞしくなさけふかくあらば、一日もしらぬ道行づれなりとも、骨肉のおもひをなし、われまた恩をもつてむくふべし。しかるときは、親の慈悲ふかくあてがひ道あるに孝行なるは、おこなひやすき境界なれば、さして孝行と云べきにもあらず。おやのいつくしみあさく、あてがひ無道なるに孝行なるこそ、まことにありがたき孝子なれ。大舜のおこなひ給ふ孝行にてよく躰認すべし。昊天罔極のおんたかきおやと、毛頭おんなきみちゆきづれの人と同じく思ひなすはあさましきまよひなり。此まよひふかき人はかならず天罰をうくるもの也。おそれつゝしむべきことなり。孝行の條目あまたありといへども、畢竟は二ヶ條につゞまれり。第一には父母の心の安樂なるやうにするなり。第二には、父母の身をよくうやまひやしなふなり。父母の心の安樂なるやうにするには、先わが身をおさめこゝろを正しくして好人となり、それ／＼のすぎわひの所作をよくつとめ財用を節すれば、父母の心に子のわざわひにあひ貧窮におよぶべきおそれなし。さて妻子臣妾をよく敎化して、家内の人みな聲をやはらげ氣を下して父母を愛敬し、かりそめの下知もそむきおこたらず、兄弟一族和睦するやうにすれば、父母の目にふれ耳に入ことみな父母の心にかなひて、おのづから安樂になるものなり。又めん／＼のちからにしたがひて、十分に心力をつくし苦勞をかへりみず、我身と妻子の私用を第二にして、一家のうちにての食物の滋味をそなへ、衣服の輕煖をさゝげ、いかにもよろこぶ色をつくし、父母のうけよろこばるゝやうにとりなし、もしま

富貴を求るたすけとなる人をば、かぎりなくうやまひ追從し、惡言のいかりをうけても堪忍して辱めとせず、父母をはあるなしにあいしらひ、一言の惡口をうけてもはなはだいかりの丶しりてあさまし。あるひは父母にそむきて妻妾を寵愛し、あるひは父母をすて丶わが子をやしなふもあり。もしまた親の慈悲あさく、不義無道のあてがひあれば、うらみをふくみあだかたきの思ひをなせり。富貴をもとむるたよりとなれる人をうやまひ大切に思ふは、我身をかざる恩あるによつてなり。妻妾を寵愛するは、わが身のよくをとげてたのしむゆへなり。子を愛するはわが身をわけたるゆへなり。この身なければ、富貴の外飾をかざるべきしたぢなし。また妻妾をたのしむべきものなし。また子にわけあたふべき身なし。富貴もさいせうも子も、此身ありてのたのしみなり。身をうけたる人は父母なり。父母この身をうみたるゆへに、富貴の外飾をもうけ、さいせうのたのしみをもなし、子をそだて丶老後のたすけ共すれば、富貴をさづくる人のおんも、根本はふぼのおんなり。妻妾のたのしみをなすも、こんぽんは父母の恩なり。子のやしないをうくるも、こんぽんは父母のおんなり。何事もみな父母の恩ならざるはなし。父母の恩は廣大無類にして、おんの大根本なり、しかるゆへに父母を愛敬するを本としおしひろめて、餘の人倫を愛敬し道をおこなふを、孝と云、順德といふ。大こんぽんのおんをわすれて、父母をばあいけいせずして、枝葉のちいさきおんをむくゐんと他人をあいけいするを、不孝といひ悖德と云。悖德の人は、たとひ才能人にすぐれたりとも、眞實の人にあらず。かならず終には神明の罸にあたるものなり。親のいつくしみあさく、不義無道の擬作

ば、限なくよろこびの眉をひらき、もしまた才德も人に劣しあはせもよろしからざれば、おきふしたえずなげきとなせり。ちゝはゝかくのごとくの慈愛、かくのごとくの苦勞をつみて、子の身をやしなひそだてたれば、人の子の一身毛一すぢにいたるまで、父母の千辛萬苦の厚恩ならざるはなし。父母のおんとくはてんよりもたかく、海よりもふかし。あまりに廣大無類の恩なるゆへに、ほんしんくらき凡夫はむくゐんことをわすれ、かへつて恩ありともおんなし共おもはざるとみえたり。人間のかたちあるほどのものは、いかなる愚痴不肖のしづのおしづのめにいたるまでも、一飯のおんをむくゐんと思はざるはあるまじ。恩をむくゐんと思ふは、孝德のほんしんあるゆへに、そのはづれのすこしあらはれたるものなり。本心の孝德ありて、父母のおんをむくゐんとをわすれぬるは、じんよくの雲におほはれ、明德の日のひかりくらく、心の闇にまよふゆへなり。九牛の一毛をいひのぶる父母の厚恩をよく躰認して、一飯のおんにくらべてみれば、じんよくのくもはれ、明德の日のひかりあきらかにして、父母の厚恩をむくひんと思ふ本心の孝念かぎりなく開發すべし。この一念をもて孝行のはじめとなし、孝經の聖謨を鑑として、身をたて道をおこなふの大孝を受用すべし。昊天罔極の厚恩をわすれ、心のやみいとくらきを迷といふ。このまよひふかきは鳥けだものにもおとれり。鳥は反哺の報をおこなひ、羊は跪乳のうやまひをなせり。にんげんの形をうけたるもの、恥おそるべきことなり。心のやみにまよひて孝德のくらきありさまをあらましかたりて、われ人のいましめとすべし。まよへる人のならひにて、富貴を無上のものとおもひ入、第一のねがひとすれば、

化するものなるによつて、わが心の孝德あきらかなれば、神明に通じ四海にあきらかなるゆへに、てんちばんぶつみなわが本心孝德のうちにあるもの也。まよへる人は心は身のうちにばかりあると思へども、根本は心の内に生れ出たる身なり。しかるゆへにさとりたる眼には內外幽明有無の差別なし。五りんのみちをほかとみていとひすて、內外幽明有無の二見をたつるは、さとりに似たるまよひなり。五りんの道をこまかに分て論すれば、五典十義となれり。先子の孝行と云は、人間百孝の源、人倫第一の急務なるゆへに、聖人の五敎に父子有レ親と第一に說給へり。孝德をあきらかにせんと思ふには、まづ父母の恩德を觀念すへし。胎育のはじめより十ヶ月のあひだ、母は懷孕のくるしみをうけ、十病九死の身となり、父は孕子の保全產育のあんおんなるへき事をねがひうれひて、千辛万苦をこゝろにわすれず、臨產の時にいたりては母の身はきりさくほどの惱をうけ、ちゝの心は煩熱のくるしみをいだけり。幸にして母子あんおんなれば、一命再續のよろこびをなし、はゝはぬれたるねしきにふして子をばかはける裀にふさしめ、子よくねぶりぬれば母の身屈伸をなさず、身あかづきけがれてもゆあびかみあらふべき暇もなく、衣裳身のつくろひなどいとゝりみだし、子の安穩を思ふよりほかは他念なし。若すこしにてもやみぬれば、醫をもとめ神にいのり、身をもてかはらんことをおもふ。乳哺三年のあひだ、父母の苦勞そのかずを知らず。入學のとしになりぬれば、師をもとめ、道ををしへ藝をならはせ、才德は人にすぐれんことをねがひ、既に有室のとしにいたりぬれば伉儷をもとめ家業を立て、とみさかへんことを謀ねがひ、その子才德人にまさりしあはせもよく榮ぬれ

も、此ほんいをさとり得たる人まれなり。

躰充問曰。五倫のみちその名をばうけたまはり候へども、くはしきとはりをば不レ存候。全孝の心法日用の急務にて候へば、つまびらかに承はりたく候。

師の曰。倫は次第なり。にんげんの次第差別五つあるゆへに、五倫となつけたり。五りんのみちつねにありて、はじめなくおはりなきものなれば、五典と云。典はつねとよむ字なり。五典を人に敎化するを五敎と云。五典の心のうちにそなはりたるを五常の性と云。親と子と一倫なり。君と臣下と一りんなり。夫と妻と一倫なり。兄と弟と一りんなり。ともだちのまじはり一りん也。これを五倫といふ、人間の次第差別この五つにきはまれり。世間に五倫にもれたるにんげんは一人もなきもの也。親は慈に子はかう〳〵にしてよく相愛敬するを親の道と云。君は仁に臣下は忠節をつくして君臣よく交泰するを義のみちといふ。夫は義につまは順にして夫婦よく和合するを別の道と云。兄は惠におと〳〵は悌にして兄弟よく和睦するを序のみちといふ。友だちのましはりたがひにいつはりなくたのもしくよく相したしむを信のみちと云。此親義別序信の五つを五典といふ。人間はこゝろに仁義禮智信の五常の性そなはりて、一身の主本たり。この五常の性感通して五典のみちとなる。父子の親は仁なり。君臣の義はすなはち義なり。夫婦の別は智也。長幼の序は禮なり。朋友の信はすなはち信なり。五倫は外にあり。ゆへに至理をしらざる人は、五倫の道といへば皆ほかにありてわが心の中になきものなりと思へり。あさましきまよひ也。天地ばんぶつみな神明靈光のうちに造

もてなしよくやしなふは、庶人の孝行なり。

躰充曰。五等の孝のうち只庶人にばかり父母をやしなふと說たまふは、いかなるゆへにておはしまし候や。

師の曰。士よりうへは財ともしからざればやしなふ事は云にをよばず。庶人は財ともしうして十分に心をくるしみちからをつくさゞれば、衣服食物たらざるゆへに、庶人にばかり養をとき給ふ。五等みなそのくらゐのうちにて、第一おもきところをとりて說給ふ。道理はみな相通するなり。よく〱躰認すべし。

躰充曰。五等の孝の說をうけ給り候へば、親を愛敬するばかりが孝行にてはなく、その德をあきらかにしてそれ〱のすぎはひの所作を精に入てつとむるが、かう〱の本意に御座候や。

師の曰。さやうにて候。畢竟は明德をあきらかにするがかう〱のほんいにて候ゆへに、心にむさとしたる一念をおこし、あるひはいかるまじき事にはらをたて、よろこぶまじき事をよろこび、ねがふまじき事をねがひ、悔まじきことをくやみ、をそれまじき事をおそるるも、みな不孝なり。一言のいつはりも不孝なり。まして不義無道を身におこなひ、死すべきところにてしせず、しぬまじき所にていぬ死をなし、とるまじき物をむさぼり、とるべき物をとらずして飢寒におよびなどするは、みなもつてのほか大なる不孝なり。心にかけてつゝしみまもるべきことなり。此道理をしりあきらめて、心にまもり身におこなふを、儒者のがくもんと云也。世間にがくもんする人はたくさんあれと

師の曰。其位の職分に愛敬の孝德をあきらかにするが卿太夫の孝行なり。心をたゞしうし、身をおさめ、假初の行跡も人の手本となり、ことばひとつもあだならぬ様によくつゝしみ、君のためてんかのためくにのためのみ思ひいれ、我わたくしのいとなみ利害のはかりごとをば露ほども心にかけず、おさまりたる時は天下國家あんおんのまつりごとをなし、みだるゝ時は大將となりて、軍兵をさしつかひ、軍法よくこゝろえ謀をめぐらし、百戰百勝の功をたて、よく其のくらゐをたもちてその宗廟をまもりぬるは、卿太夫の孝の大がいなり。

躰充曰。士の孝行はいかゞ。

師の曰。かりそめにも二心なく、わが身をすてゝ君を愛敬する心をうしなはず、それ〳〵の職分をよくまもりつとめて、その長をうやまひ、傍輩にたのもしく、いつはりなく人あひやはらかにねんごろにして、たちふるまひことばつきいやしからず、心だて身もち義理にかなひ、簡要の禮法藝能などうと〳〵しからず、軍陣にのぞむかまたは君長の難にあふ時は、樊噲をもあざむくほどの武勇をいだし武功をたて、その祿位をたもちて祭祀をまもりぬるは、さふらいの孝行の大がいなり。

躰充曰。庶人の孝行はいかゞ。

師の曰。農工商、いづれもその所作をよくつとめおこたらず、財穀をたくわへ、むざとつかひ費さず、身もち心だてよくつゝしみ、公儀をおそれて法度にそむかず、我身妻子のことをば第二とし、父母の衣服食物を第一におもひ入、心力をつくしてをよばぬきはをも調て、父母のうけよろこばるゝ様に

義を一明し給ふも此こゝろなり。

躰充曰。天子の孝行はいかゞ。

師の曰。愛敬の孝經を天下に明にするを天子の孝行とす。先みづから其德を明にして萬化の大本をたてさだめ、賢人を愛敬して宰相となし、善人をあいけいして器量にしたがひそれ〳〵の官職をさづけ、小國の臣下をもあなどりわすれず、禮樂刑政學校のをしへいとたゞしく、天下人ごとにその本心の孝德をおこし、その利を利としそのたのしみをたのしむやうに万民を愛敬すれば、四海みなその德敎に化し德澤にうるほひて、家ごとに孝子、國みな忠臣となり、天下一統におさまり、万國のよろこぶ心を得てその先王につかへ給ふは、天子の孝の大概なり。

躰充曰。諸侯の孝行は如何。

師の曰。愛敬の孝經をその國にあきらかにするが諸侯の孝行なり。先身もち心だてたゞしくしてすこしもおごることなく、そのおこなひ節にあたり、國持の作法をよくまもり、家老大臣をうやまひ、もろ〳〵の臣下を躰にして情ふかく、かりそめにも無禮をなさず、しんかの心だて器量をよく試て出頭諸奉行の職をさづけ、しをきを諄にして百姓をあはれみ、なかんづく鰥寡孤獨のたよりなきものをはごくみ、國中臣民のよろこぶこゝろをえて、國とみさかへながく社稷をたもちてその先君につかへぬるは、諸侯の孝行のたいがいなり。

躰充曰。卿太夫の孝行はいかゞ。

も、眞實の儒者にあらず、まして愚不肖は禽獸にちかき人なるべし。

躰充曰。孝行に五等の差別あるはいかなる故にて御座候や。

師の曰。人間尊卑の位に五だんあり。天子一等、諸侯一等、卿太夫一等、士一等、庶人一等、すべて五等なり、てんしは天下をしろしめす御門の御位なり。諸侯は國をおさむる大名のくらゐなり。卿太夫はてんし諸侯の下知をうけて國天下のまつりごとをする位なり。士は卿太夫につきそひて政の諸役をつとむるさふらひのくらゐなり。物作を農といひ、しよくにんを工と云、あき人を商と云。この農工商の三はおしなべて庶人のくらゐなり。孝德は同一躰なれども、位によつて事に大小高下あるゆへに、そのくらゐ〳〵の分際相應の道理を、後世凡夫のために分辨をときあきらめ給ふ。たとへば孝德は大海のごとし。五等のくらゐは器のごとし。器にて水を汲に、大小方圓のもようはかはれども、水はおなじ水なるがごとし。むかし聖人の御代には、人間のくらゐ五等のほかはなきゆへに五等の孝を發明し給ふ。

躰充曰。孝經發端の章に、餘の人倫をばあげ給はで、中ニ於事一レ君と、忠の一典を說たまふは、いかなるゆへにて御座候や。

師の曰。君父は恩ひとしきものなり。父生レ之君食レ之と云て、皆いのちをたもつ恩なり。親は始なるゆへに孝のこんぽんとす。恩ひとしきゆへに中ニ於事一レ君と第二にとき、孝德萬事ばんぶつに感通する例となして、兄弟夫婦朋友の道をそのうちにふくみかね給ふ、孝經の篇末にひとり事君の一

かくのごとく廣大無邊なる至德なれば、萬事萬物のうちに孝の道理そなはらざるはなし。就中、人は天地の德萬物の靈なるゆへに、人の心と身に孝の實躰みなそなはりたるにより、身をたて道をおこなふをもつて工夫の要領とす。身をはなれて孝なく、孝をはなれて身なきゆへに、身をたてみちをおこなふが孝行の總領なり。おやによくつかふるも、則身をたて道をおこなふ一事なり。身をたつると云は、我身はぐわんらい父母にうけたるものなれば、わが身を父母の身と思ひさだめて、かりそめにも不義無道をおこなはず、ふぼの身を我身とおもひさだめて、いかにも大切に愛敬して、物我のへだてなき大通一貫の身をたつる也。さて元來をよくおしきはめてみれば、わが身は父母にうけ、父母の身は天地にうけ、てんちは太虛にうけたるものなれば、本來わが身は太虛神明の分身變化なるゆへに、太虛神明の本躰をあきらかにしてうしなはさるを身をたつると云なり。太虛神明のほんたいをあきらめたてたる身をもつて、人倫にまじはり、萬事に應するを、道をおこなふといふ。かくのごとく身をたて道をおこなふを孝行の總領とす。親には愛敬の誠をつくし君には忠をつくし、兄には悌をおこなひ、弟には惠をほどこし、朋友には信にとゞまる、妻には義をほどこし、夫には順をまもり、かりそめにもいつわりをいはず、すこしの事も不義を働かず、視聽言動みな道にあたるを孝行の條目とするなり。しかるゆへに、一たび手をあげ一たびあしをはこぶにも、孝行の道理あり。人間千々よろづのまよひ、みな私よりおこれり。わたくしは我身をわが物と思ふよりおこれり。孝はその私をやぶりすつる主人公なるゆへに、孝德の本然をさとり得ざるときは、博學多才なりと

のなり。そのごとく父子君臣の人倫にあひまじはる事は、千々よろづにしなかはれども、愛敬の至徳は通ぜざるところなし。あらまし大概を論ずるに、先五倫をもていへば、親を愛敬するが感通の根本なる故に、本分の名をあらためず孝行と名づく。さてそれより感通の景象によつて、名をたてをしへをしめしたまふなり。二心なく君を愛敬するを忠となづく。禮義たゞしく臣下をあいけいするを仁となづく。よくをしへて子を愛敬するを慈となづく。和順にして兄を愛敬するを悌となづく。善をせめて弟をあいけいするを惠となづく。正しき節をまもりて夫をあいけいするを順となづく。義をまもりて妻をあいけいするを和となづく。僞なく朋友を愛敬するを信となづく、一身をもつていへば、耳目の聰明、四肢の恭重、行住坐臥の法則、皆孝徳愛敬の感通ならざるはなし。かくのごとく親切なる道徳なれば、いかなる愚痴不肖のしづのお、しづのめ、膝下の赤子までも、よくしりよくおこなひ、さてまた至極の全躰は、聖人といへどもつくしがたきものなり。まことに不二の要道無双の重寶なれども、卞和が璧となりて世俗の闇をてらさゞる事、なげかしきとなるべし。

躰充曰。今まではおやをよくやしなふをのみ孝行なりと存候。あまねく世俗さやうに心得たるとみえたり。いま先生のをしへをうけ給り候へば、孝といへるものは外もなく内もなき無上の妙理なるまもりおこなふべき術をくわしく承たく候。

師の曰。元來孝は太虚をもつて全躰として、万劫をへてもおはりなく始なし。孝のなき時なく、孝のなきもののなし。全孝圖には太虚を孝の躰段となして、てんちばんぶつをそのうちの萠芽となせり。

まもりて天の織女をつまとなし、呉二は此寶をまもつて宿惡の天刑をまぬがれたり。古來靈驗かたりつくしがたし。よく〳〵信仰して受用すべきとなり。

躰充曰。さやうのたからは、まとにもとめまほしき事にて御座候へども、あまり廣大なる論なれば、われ〳〵が分にてはをよびがたくおぼえ候。

師の曰。それはあしき心得也。廣大なるゆへに我人のをよぶとにて候。たとへば日月のひかりは廣大なるによつて、目あるほどのものあまねくもちい得がごとし。このたからも廣大なるゆへに、貴賤男女をえらばず、おさなきも老たるも、本心のあるほどの人はあまねくまもりおこなふみちなり。このたからは天にありてはてんの道となり、地にありては地のみちとなり、人にありては人のみちとなるもの也。元來名はなけれども、衆生にをしへしめさんために、むかしは聖人その光景をかたどりて孝となづけ給ふ。それより此かた愚痴不肖の賤男賤女にいたるまで、その名をばしるといへども、その眞實の道理をば老師宿儒知見抜群の人さへさとり得事稀なり。然るゆへに、世俗孝は親につかふる一事となして、淺近の道理なりとおもへり。孔子なげかしくおぼしめして、万世の心盲をひらかんために、孝德神妙不測廣大深遠にしてはじめなくおはりなき神道を孝經に發明したまふ。孝德の感通をてぢかくなづけいへば、愛敬の二字につゞまれり。愛はねんごろにしたしむ意なり。敬は上をうやまひ下をかろしめあなどらざる義なり。孝はたとへば明なる鏡のごとし。むかふものゝ形と色によつて、かゞみのうちの影はしな〳〵かはれども、あきらかにうつす。鏡の躰はおなじも

師の曰。われ人の身のうちに至徳要道といへる天下無双の靈寶あり。このたからを用て、心にまもり身におこなふ要領とする也、此寶は、上天道に通じ下四海にあきらかなるもの也。しかるゆへに、此たからをもちいて五倫にまじはりぬれば、五倫みな和睦してうらみなし。神明につかふまつれば、神明納受したまふ。天下をおさむればてんがたいらかになり、國をおさむれば國おさまり、家を齊れば家とゝのをり、身にをこなへば身おさまり、心にまもれば心あきらかなり。をしひろむれば、天地のほかにわたり、とりおさむれば、我心の密にかくる。まことに神妙至極の靈寶也。しかるゆへに、此寶をよくまもれば、天子はながく四海の富をたもち、諸侯にながく一國の榮花をうけ、卿太夫もその家をおこし、士は名をあらはし位をあがり、庶人は財穀をつみたくはへて、其樂をたのしむもの也。此寶をすてゝは人間の道たゝず。にんげんのみちたゝざるのみならず、天地の道もたゝず。天地のみちたゝざるのみならず、太虚の神化もおこなはれず。太虚三才宇宙鬼神造化生死と〱く此たからにて包括する也。このたからをもとめまなぶを儒者の學問といふ。生れながらにして此たからを保合し給ふを聖人と云。がくもんによつて保合してよくまもりおこなふを賢人といふなり。孔子万世のやみを照さんために、此たからをもとめまなぶ鏡に孝經をつくりたまふといへども、秦の代よりこのかた千八百餘年のあひだ、十分によくまなび得たる人まれなり。今大明の代にいたつて此經をよく尊信表章する人おほし。大舜は此たからを保合したまひて、庶人の中より天子のくらゐにのぼり給ふ。文王はこのたからを保合し給ひて、天帝の左右にまします。董永はこのたからを

ざるほどの下愚なれば、開悟の自得をよびがたく、すでに道にたつべきとしをもむなしくうちすぎぬ。愚者のあやまるならひなれば、性のつたなきとをわすれ、却て師範の其人にあらざるかとうたがひ、明哲の先覺もがなと寤寐にわすれざるおりから、天君とて先覺とおぼしき老翁ありけると友のかたりしまゝ訪たづね几杖をとりてま見へける、我眼力伯樂ならねば、騏駑のわかちはしらざれども、威儀いとけだかく人あい和厚にして謙遜なれば、俗儒の傲氣はなはだしく口氣高るにちがひ、心ならずしたはしくうやまはれて、暇の日はつねに傍に侍りぬ。門下に躰充とて俊秀なる人ありて平日疑問論難やむときなし。かたはらにてこれをきくといへども、我心のをよばぬ際は記憶することあたはず。間に心の粗通するところあれば、しりぞひて倭語にて書つけ遺忘にそなへぬ。斯してとしをつもりぬれば箇條もあまたになり、心にまもり身におこなふべき道もすこし開悟に似たる様にあれば、もしまた我ごときの愚者あらば、万一工夫のたすけにもなるべきかと、あらためうつして、翁問答と題號して巾笥にかくしをきける、とばいやしくとはりきこえがたけれども、君子の刪正をもとむべきほどの事ならねば、只愚者のかきつけたるまゝにして、翁の本意にたがふところなんおほかるべし。若よむ人あらば、辭にて志をそこなはずば、吾人の大幸たるべきか。

翁問答上卷之本

躰充問曰。人間の心だてさまぐありて、をこなふところその品おほし。其うちに是非混亂していづれにしたがふべしともおぼえず。人間一生涯いづれの道をか受用の業と仕るべく候や。

先師嘗曰。問答の中儒佛を論ずる處のごとき、今これを讀に其理精當を得ざる事を覺ふ。
又曰。問答上卷、吾孝經に觸發して筆を下す。故に頗孝字を播弄す。孝理の旨におゐては敢てたがふ事あらずといへども、今これを撰ば又しからじ。
又曰。此書志氣あつて世を憤り弊を憂る的の人讀ば。或は觸發興起あらんか。心術の精微用功下手の實地のごときは、いまだ委く論じ及ばず。夫先師の意かくのごとし。是をもつて問答を出す事其本旨にあらず。故に師卒して後愈これを藏す。然るに今年春又梓家に洩て終に板行す。竊取て讀に乃草稿の本にして舊本の清書にだもあらず。其隱しうつせるをもつてにや、誤字脱簡も亦間多し。故に今やむことを得ずしてこれを考訂し、且前後改正の篇を編入し、幷に其事を敍して、聊以て師の志をあらはし重てこれを梓に刻しむ。讀者これをもつて其學の日々に新なる事を考へ、終に此問答をもつて了手とせずして精微中庸を希ひなば、此書乃入德の階級ともなりぬべし。もしなをざりに讀去て滴血の實なく致知の功をろそかならば、却て先師のおそれし弊に陷んか。吾黨欽哉。

慶安三年庚寅夏六月既望門人識

翁問答自序

志學のとしより心にまもり身におこなふべき道をもとめ得まくおもひ立て、禪門敎門のをしへをとしへてまなぶといへども、其議論詖遁にしてそのみち偏僻なり。その法また人倫日用の受用にたよりあらざるゆへに、儒門に入て四書五經の眞敎をうけ、切磋琢磨をはげますといへども、三隅を反せ

翁問答

序

翁問答は我藤樹先生の撰ぶ處なり。先師嘗て仕を豫州に致して江陽に歸る。豫方の同志先覺に離て刑儀をうしなひ又文學につたなければ、經書の觸發をも得べからずとなげきて、惑を辨へ德に入べき方を假名書にして與へたまへと希ぬ。師是に於て終に此問答上下を著したまふ。時に寛永十八年辛巳の歳。雖ㇾ然師の學愈新なるにしたがつて、此問答愈其心にかなはず。改正の志ありければ、廣く門人にだに授けたまわず、爰に癸未の年梓人の手にもれて既に梓にちりばめしを、幸に早く知て是をやぶりぬ。

或人曰。翁問答其文正明にして其論快活也。吾人の愚なるがごとき、是を讀て益をうると多かるべし。何がゆへにかたく秘してあまねく授けたまわずや。師の曰。吾此問答を書せし時、今に比すれば學いまだ精到ならず。且斯道の行はれざるをうれひ末學の弊を救ふに心あり。故に其議論抑揚甚しく、終に主角の累をまぬかれず、讀人吾本意をさとらずんば、却て或は勝心を助けんか。恐は世に益なふして損あらん。吾これを改正せんと欲す。故に今ひろく傳ゑん事を欲せず。

丙戌の年下卷一二篇を正したまふ。丁亥の年又これを改めんとす。病をもつての故にや、少きにして終に不ㇾ成。同年上卷を改め書せんと欲す。わづかにして又果さず。

時に歳七十有三。日向守乃ち親戚門人を會して儒禮を以て古河の大堤村鮭延寺に葬る。其後池田丹波守政倫、爲に廟宇を設け、神官をして司らしめ、春秋の祭祀今に至りて尙ほ絕えすと云ふ。

蕃山の著書は集義和書十六卷、集義外書十六卷、大學小解一卷、中庸小解一卷、論語小解一卷、孟子小解七卷、孝經小解二卷、易經小解五卷、大學或問二卷、孝經或問八卷、二十四孝評一卷、女子訓五卷、葬祭辨論一卷等あり。就中集義和書及ひ集義外書を其主要なるものとす。今集義和書を本卷に收め、集義外書は將に次卷に收めんとす。

集義和書十六卷は書簡五卷、心法圖解一卷、始物解一卷、議論九卷より成る。其書簡といふものも實際知友門人に與へしものにあらずして問答に託して其思想を敍述せし者に過ぎず。心法圖解は性理を說きしものにして、始物解は易の繫辭傳中の一節を和解せしものなり。而して議論は種々なる題目を提へて其意見を吐露せるものにして最も見るべし。伊東潛龍の餘姚學苑に玉手箱を引きて曰く、

彼(熊澤蕃山)が門人岡島可祐集義和書、同外書、儒生雜記等をあらはし熊澤が意志をしらせ侍る。

是に由りて之を觀れは集義和書、集義外書は蕃山の著書にして岡島氏の編纂に係るを知るべきなり。

迄なりと思惟し、辭表を捧げて退かんことを願ふ。公之を許さず。他日又切に辭せんことを乞ふ。公其志の遂に奪ふべからざることを慮りて之を許し。長子繼明をして其後を嗣がしむ。明曆三年蕃山備前を辭して京都に居り、國典を習ひ雅樂を學ぶ。京都の公卿大夫にして蕃山を慕ひて束修を門に行ふもの少しとせず。讒人あり。諸司代牧野佐渡守親成に告げて曰く、「了介が器量世にならぶ者なし、天下の列侯慕ふこと久し、今浪人として堂上に出入す、天朝の公卿亦之を慕ひて送迎絶ゆることなし、事爰に至らば恐くは事あらん」と。佐渡守之を信じ事漸く蕃山の身に及ばんとす。蕃山乃ち京都を去りて大和國芳野山中に隱る。是れ寛文七年にして彼が四十九歳の時なり。其後山城國鹿背山に居を移し、交を絶ちて益々德を修む。寛文九年播州赤石城に移り、大山寺の側に居る。赤石侯松平日向守守信之を尊信すること殊に篤し。是歳芳烈公新に學校を設け、始て聖師を祀る。蕃山因りて備前に至り、其禮儀法度を定めて又赤石城に歸る。時に年五十一。門人皆呼んで息游先生と稱し、敢て名をいはず。延寶七年日向守信之の封を大和國郡山に徙す。蕃山之に從ひて矢田山に居る。貞享四年秋八月松平日向守復た封を下總國古河に移す。蕃山將軍綱吉の命により、日向守に從ひて古河に往く。日向守蕃山を崇敬すること甚だ篤し。其歳の冬蕃山封事を幕府に上りて海內の政務を改革せんことを請ふ。事機密に涉り、大に將軍の旨に忤ひ、乃ち禁錮せらる。幽囚大約四星霜の久しきに及ふ。然れども面に憂色なし。人の當世の事を問ふものあれば、默然として答へず。乃ち笙を取りて之を吹く。蕃山元祿四年(西曆千六百九十一年)秋八月十七日を以つて病歿す。

十一月再び往きて頻に乞ふ。藤樹是に於て始めて蕃山に逢ひ、其擧動如何を問ふ。蕃山乃ち告ぐるに問學の志ある事、及び父母國にあり弟に託するの事を以てす。藤樹の曰く、「學問の淵源孝より先なるはなし、孝はよく養ふを本とす、己が爲めにあらず、吾子よく養ふことを得ず、今之を弟に託す、子が志たがへり、子よく奉養寄任せば、何くに居りてか學なからん」と。蕃山乃ち家に歸り、父母に告ぐるに左右を去るに忍びざるを以てす。父母其意を察し、汝果して我が爲めに去らずんば、我れ汝の爲に行かんと。遂に家を擧げて江州に移る。翌年七月再び小川村に往き、藤樹に逢ひて仔細を告ぐ。藤樹其志を好みし、以て共に道を言ふべしと爲して、乃ち敎ふる所あり。又九月小川村に往き、翌年四月まで滯留して孝經大學中庸を學び、學益〻進む。此時父一利仕を求めん爲め江戸に赴きたるを以て、蕃山弟妹五人と共に江東に居を卜して母を孝養す。家甚だ貧なり。然れども少しも屈せず。力を眞知の學に用ゐ、倦むことを知らず。

蕃山正保二年を以て再び備前に來り仕ふ。時に二十七歲なり。芳烈公固より蕃山が王佐の才あることを知り、深く之を信任し、采地三千石を賜ふ。是に於て蕃山滿腔の經綸を實際に應用し、仁政を施すに於て力を盡さゞる所なし。先づ公に勸めて諫の箱を置き、臣民をして私に其言はんと欲する所を投ぜしめ、以て時弊を救ふの端緒を開き、佛敎及び耶蘇敎の取締を嚴にし、之に反して大に儒敎を開くことを務め、又水利を善くし、武備を嚴にする等の事、實に海内の耳目を驚かすに至れり。明曆三年蕃山年三十七、公に從ひて狩し馬より落ちて右の手足を傷けしかば、武士の勤め是れ

疑なし。

藤樹先生學術定論一卷は石川某の編述する所にして寫本にて傳はれり。此書表紙には孤琴論と題し、中には藤樹先生學術定論とあり。石川氏は享保年間の人にして深く藤樹の學を尊信せしものなり。蓋し彼自ら示教を以休子に受く、以休子は木村子に學び、木村氏は岡山先生に學ぶ。岡山先生は昔京都葭屋町一條の邊りに藤樹先生の祠堂を築きたりと云ふ。岡山先生は藤樹の學を傳へたる一大儒なりしが如し。今京都に於ける藤樹學派の形勢及び學說の一斑を知るに便なればとて、東京帝國大學附屬圖書館の藏書本によりて之を印行せり。

藤樹門下最も卓絕せるものを熊澤蕃山とす。蕃山姓は熊澤、名は伯繼、字は了介、小字を次郎八といひ、後又助右衞門と稱す。蕃山は其號なり。又息遊軒と號す。本姓は野尻氏なり。加藤左馬助高時の臣野尻藤兵衞一利が子なり。蕃山元和五年(西曆千六百十九年)を以て京都の五條に生まる。外大父熊澤半右衞門守久蕃山を養ひて嗣とするに及びて其姓を冒す。蕃山幼にして岐嶷、深智衆に超ゆ。年僅に十六歲にして備前の芳烈公に仕ふ。芳烈公は新太郎光政の謚なり。芳烈公蚤に其凡ならざるを知り、漸く之を用ゐんとす。然るに蕃山自ら以爲へらく、君に仕へ民を治むるには、先つ學問なかるべからずと。乃ち二十にして仕を致して近江國桐原に適き、武術を練り、又文學を修めんとす。時に中江藤樹盛德備はりて君子の稱あり。四方より來り學ぶもの多し。蕃山竊に之を慕ひ、二十三歲の秋八月小川村に至りて藤樹に見えんことを求む。藤樹謝して許さず。蕃山空しく歸る。冬

藤樹の書類を脱逸せり。いま翁問答、藤樹遺稿、藤樹先生書翰雜著、藤樹先生學術定論の四部を收む。翁問答五卷は藤樹が隣里に住せる天君と稱する逸民を訪ひ、其門人體充が之れと問答せるを傍より聽取して筆記せる者なり。然れども是れ全く其假託する所にして、盡く自家の說を叙述せるものに外ならず。此書は藤樹が未だ王學に轉ぜざる時に成るものにて、主として孝の大道を說き、併せて佛教を排することを切なり。後多少の修正を加へしものと見え、末卷に良知を說破せり。坊間に流布する天保二年刊行本は誤謬多きを以て、今其慶安三年刊行本、及び同四年刊行本によりて翻刻せり。

藤樹遺稿二卷は寛政七年の刊行にして、初めに西希顏の序を載せ、終りに橘春暉の跋を附せり。藤樹の詩文集は別に寫本にて傳はれるものに、藤樹先生家集一卷、藤樹餘稿一卷、藤樹文錄一卷、藤樹別集一卷、江西文集一卷の五種あり。皆大同小異なり。今藤樹遺稿を取れるは別に深意あるにあらず。其刊本にして誤謬少きを以てなり。但し二三の誤字脫字あれば他集によりて校訂せり。又詩題のみを掲げて詩を載せずして、「見二心學文集一」と注せるもの二首あり。是等は藤樹先生全書及び心學文集によりて補足せり。

藤樹先生書翰雜著一卷は、三宅石菴が輯錄せる所にして寫本にて傳はれり。石菴も亦陽明派に屬す。名は正名字は實文、石菴は其號なり。又萬年と號す。京師の人。寛文五年正月十九日に生れ、享保十五年七月十六日に歿す。大坂の懷德書院を創設して祭酒の事を領せり。今此書を以て藤樹全書中の書翰雜著と對照するに頗る異同あり。然れども石菴の校訂編次せる所なれば、比較的に正確なるや

年）八月廿五日病革るに及びて、藤樹几に凭りて端座し、盡く婦女を遠け、門人を召し、謂ひて曰く、「吾去矣、誰能任二斯文一者也」と。言ひ畢りて溘焉として永眠せり。時に年僅に四十一。門人文公の家禮を用ゐ之を小川村の東北、玉林寺に葬る。隣里郷黨皆涕泣して柩を送る。其狀恰も親戚を喪するが如し。後村民其家を修して祠堂となし、德本堂と云ふ。今に至りて祭祀を絶たず。世に所レ謂藤樹書院即ち是なり。

藤樹は朴直誠實にして又溫恭謙退、一擧一動規矩に中らざるなく、人を感化するの力尋常ならず。是を以て村民の之を尊信すること神の如く、世遂に近江聖人と稱するに至る。今其著書を讀みて其人を想見するに、是れ決して虛褒濫賞にあらざるなり。

藤樹門人に乏しからず。然れども多くは大儒となるに至らず。但一個の人傑を出だせり。即ち熊澤蕃山是れなり。

藤樹の著書は翁問答五卷、鑑草六卷、孝經啓蒙一卷、論語郷黨翼傳三卷、大學解一卷、中庸解一卷、春風一卷、藤樹遺稿二卷の八部は既に刋行せらる。其他寫本にて傳はれるもの及び醫書數部あり。又藤樹の著書を編輯せる者に藤樹先生全書及び藤樹全書十卷の二種あり。前者は岡田季誠が初めて編纂せしものにて、最も正確なり。惜いかな未だ上梓せられず。後者は明治二十六年の刋行にして、志村巳之助、齋藤耕三二氏の編纂せしものなり。世の學者にして藤樹の學說を知らんと欲するもの、多くは此書による。然れども此書啻に文字の校正甚だ粗漏なるのみならず、蕃山の書類を混入し、反りて

に歸省すること前後二回。其後回大洲に還るに當りて、母を伴ひ行きて孝養を盡さんと欲す。然れども母老い異郷に赴くことを欲せざるを以て、獨り豫州に還る。癸酉の元旦、偶ゝ皐魚が傳を讀み、「樹欲レ靜而風不レ止、子欲レ養而親不レ待」に至りて母を思ひて止まず。屢ゝ致仕を請ふも許されざるを以て、遂に官を棄てゝ小川村に歸る。是れ實に寛永十一年にして、藤樹が二十七歲の時なり。是れりして藤樹母に事へて孝養を盡くし、又自ら奮勵して益ゝ力を學業に致せり。

始め藤樹大學論語を信奉せしが、後深く孝經を尊信し、毎朝之を拜誦するを例とせり。然るに寛永十七年の冬即ち藤樹三十三歲の時に當りて、「王龍溪語錄」を得て之を讀み、始めて姚江の流派に接するを得たり。後三十七歲の時に至りて始めて「陽明全書」を購求して之を讀むに及びて、深く拘泥の非を悟り。超然として默會する所あり。其池田子に與ふる書はよく此間の消息を洩らせり。

私事深く朱學を信じ、久く工夫を用申し候得共、入德の効無レ覺束レ御座候て、學術に疑出來、憤り啓け難き折節、天道の恵にや、陽明全集と申書渡り、買取熟讀仕候得者、拙子疑の如く發明御座候て、憤り啓け、ちと入德の欛柄手に入申樣に覺え、一生の大幸言語同斷、若し此一助御座なく候得者、此生を空く可レ仕にと難レ有奉レ存候。

是れ實に藤樹の學問に於て急轉直下の處なり。然れども其餘命の甚だ長からざりしは眞に惜むべしとなす。

藤樹生來甚だ多病なりき、特に三十歲以後屢ゝ二豎の侵す所となれり。慶安元年西曆(千六百四十八

日本陽明學　上卷

文學博士　井上哲次郎
文學博士　蟹江義丸　共編

序　説

我邦に於て初めて陽明學を唱道せしものを中江藤樹となす。藤樹姓は中江、名は原、字は惟命、通稱は與右衞門、藤樹は其號なり。又西江、默軒、顧軒と號す。慶長十三年（西曆千六百八年）を以て近江國高島郡小川村に生まる。祖父吉長米子侯に仕ふ。父吉次小川村に農たり。藤樹幼にして穎敏、嶄然頭角を露はす。祖父に從ひて伊豫國大洲にあり。始めて大學を讀み、「自二天子一以至レ於二庶人一、壹是皆以レ修レ身爲レ本」に至り、嘆じて曰く、「幸哉此經之存、聖人豈不レ可二學而至一焉乎」と。因りて淚下り、其衣を沾すに至る。又一日食するとき熟々思へらく、「此是誰所レ賜也、一則父母、二則祖父、三則君、三者之恩、不レ可二以須臾忘一」と。十五歲の時祖父を失ひしが、尙ほ大洲に留まりて學業を勵み、專ら朱子學を奉じ嚴に禮法を以つて自ら持せり。藤樹人と爲り至孝、其大洲にあるや、母を江西

目次終

熊澤蕃山

日本陽明學（上卷）

目次

中江藤樹

日本陽明學

凡例

一。本書は日本陽明學者の著書中其主要なるものを選擇分類し、以て學者の研究に便にせんと欲す因て名けて日本陽明學といふ。

一。主要なる倫理書と雖、多く坊間に流布するものは、或は之を採用せずして、之に代ふるに世間に乏しきものを以てするものあり。例へば大鹽中齋の洗心洞劄記を捨て古本大學刮目を收載するが如き是なり。

一。本書各卷の端首に序説を附して、其卷に採錄せる學者の事蹟著書を略叙し、且つ輯載せる書籍の解題を掲ぐ。

一。本書務めて原本の躰裁を變更せざらんことを期せり。故に誤字脫字衍字の疑問あるもの、及び語格假名遣ひの誤謬あるもの、皆改訂せず。

一。原本に句讀なきものは之を附し、漢文にして還り點なきものは之を施せり。是れ初學に讀み易からしめんが爲めなり。

編者識す

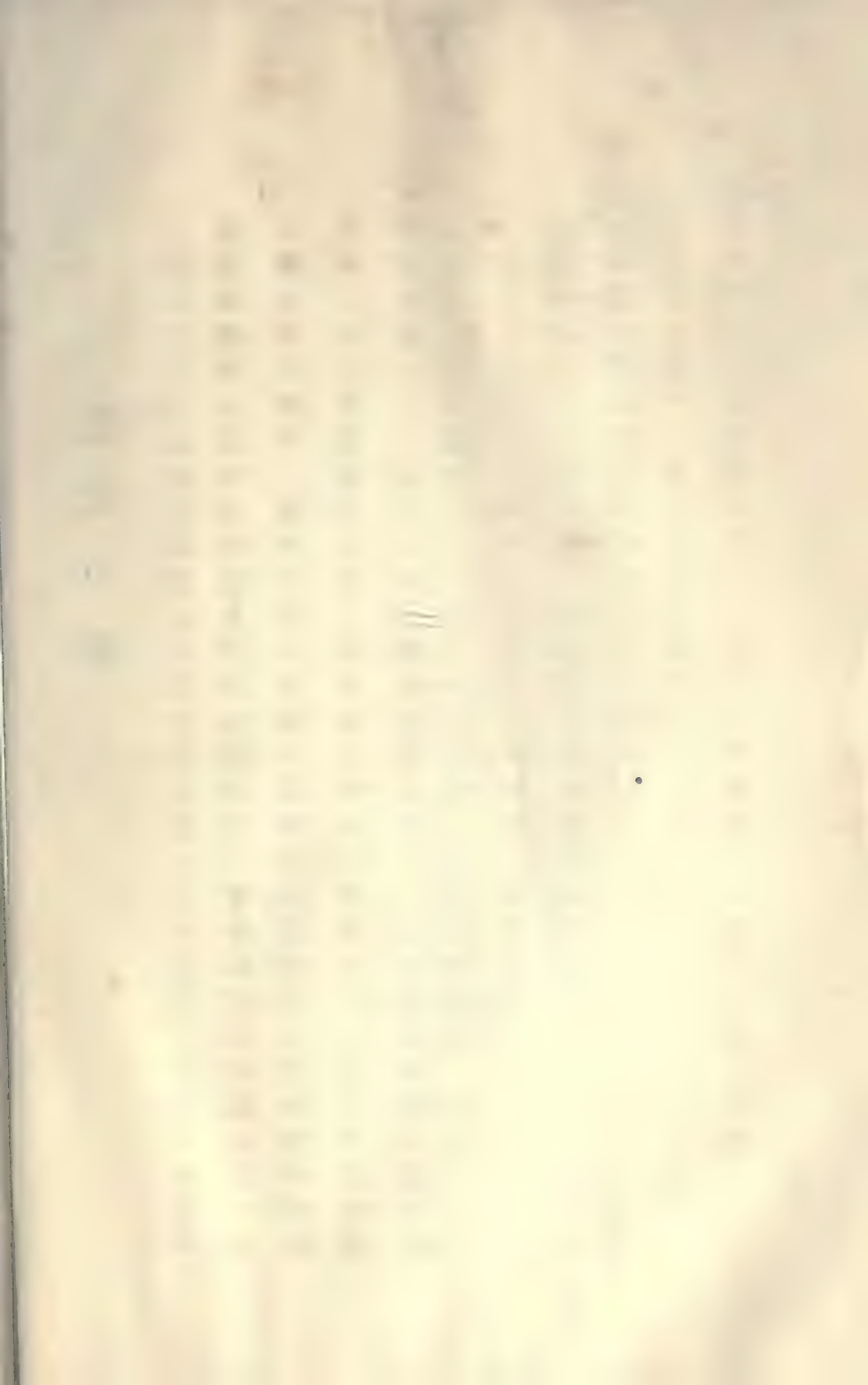
其功を奏すべきなり。從來の道德主義は時勢一變せるが爲に、最早其儘にては何等の活氣もなし。必ず舶來の道德主義と調和合一して始めて用をなすべきなり。之を要するに、東西兩洋の道德主義を打ちて一塊となし、以て今後の道德主義の根柢をなすべきこと、決して復た疑を容る可らざるなり。然るに今日にありては、西洋の、倫理書類を購求すること必ずしも困難ならずと雖も日本の倫理書類を購求すること、反つて容易なりとせず。世の德育に志あるもの竊に以て遺憾となす。是を以て余頃ろ蟹江義丸氏と日本の倫理書類を各學派に從ひて之を分類し、以て陸續發行し、聊か教育界の缺陷を充たすの一端となさんと欲す、乃ち事由を卷端に書し、以て世の德育に志あるものに諗ぐと云ふ。

井上哲次郎識

の道德は一朝にして滅ぶるものにあらず、又滅ぼすべきものにあらず、我邦從來の道德主義いかに衰微せるも、是れ唯敎として學として衰微せるのみ、其隱々として我精神界に潜伏せる勢力に至りては、未だ決して侮るべからざるものあり。餘事に於ては如何に奇に走り、新に赴くと雖も、道德に關しては最も愼重の態度を取らざるべからず。我邦從來の道德主義とカント、ヘーゲル諸氏に本いて起れる道德主義と對照して之を考察するに、此れにあるもの、亦彼れにあり、彼れにあるもの、亦此れにあり、此れを捨てんか、彼をも捨てざるべからず、彼を取らんか、此れをも取らざるべからず。兩者根柢に於て左右逢原、全く共通の點を有すればなり。假令ひ我に適切なりとするも、舶來の道德主義は直に此に扶植すること難し。必ず從來の道德主義と調和合一して始めて

現出するに至れり。是れ豈に恐るべき道徳上の危機ならずとせんや。此時に當りて吾人は髣髴として我國將來の道德如何を隱約の間に揣摩して疑はざるものあり何ぞや。種々なる舶來の道德主義は之を研究すること一日も怠るべからずと雖も、身親ら之を實行せんには必ず選ぶ所なかるべからず。是れ一人にして一切の道德主義を實行すると能はざればなり。若し選ぶ所なかるべからずとせば、如何なる主義を選ぶべきか、第一に是正なるもの第二に適切なるもの、是れ其選ぶべき所ならざる可らず。吾人の見る所によれば、カント、ヘーゲル諸氏に本いて起れる道德主義は、其大體に於て是正なるものにして、又適切なるものなり。其何故に是正なるかは姑く之を置き、之を以て適切なりとするは、我國從來の道德主義と調和合一すべきものなればなり、國民

叙

今や佛教廢れ、儒教衰え、武士道亦振はず、我國從來の道德主義漸く末期に瀕し、其狀啻に一髮千鈞のみならざるなり。 之に反して西洋の道德主義は日に月に輸入せられ、殆んど我精神界を席卷せんとするの勢あるが如し。 然れども西洋の道德主義は、唯一あるにあらず、實に種々雜多なり、即ち功利主義と云ひ、直覺主義と云ひ、利己主義と云ひ、利他主義と云ひ、快樂主義と云ひ、克己主義と云ひ、樂天主義と云ひ、厭世主義と云ふが如く、各其見る所によりて一家の主張あり、是を以て後進の徒、多岐亡羊、其適從する所を知らず、愈〻學んで愈〻惑ふの感なしとせず。 是に於てか我道德界は殆んど混沌の二字を以て形容すべき過渡時代を

發行の辭

今や外來新思想の諸潮流は決河の勢を以て我を浸し、何物をも其の瀾底に捲き込まずんば止まざるの概あり。世を擧げて適從に惑へる又故なしとせず。此秋にあたり我が精神界の根幹たる致良知の學を究め、以て此過渡期に處するは眞に喫緊の要事たり。今日西洋の倫理書を購ふこと必ずしも困難ならずと雖も、日本の倫理書を求むること日と倶に難からんとす。本書は元『日本倫理彙編』の第一、二、三卷として刊行せられしもの、今陽明學に關する部分のみを分ちて刊行することとなせり。幸にして世の德育に志ある士の渇を癒するを得ば吾人の榮何ものか之れに過ぎん。

大正十一年六月

發行元　大鐙閣　謹識

文學博士井上哲次郎
文學博士蟹江義丸 共編

日本陽明學 上巻

株式會社大鐙閣發行